

# 偉人文学集

## 名言思想学会

1

名言思想学会  
無断転載・複製を禁止します

- 1.『福沢心訓』(ふくざわしんくん) 5 ページ～
- 2.『日常の五心』(にちじょうのごしん) 6 ページ～
- 3.『心戒十訓』(しんかいじっくん) 7 ページ～
- 4.『健康十訓』(けんこうじっくん) 8 ページ～
- 5.『七つのシン』(ななつのしん) 9 ページ～
- 6.『ならぬもの十訓』(ならぬものじっくん) 10 ページ～
- 7.『つもりちがい十ヶ条』(つもりちがいじっかじょう) 11 ページ～
- 8.〔雨ニモマケズ〕 12 ページ～
- 9.吾輩は猫である 15 ページ～
- 10.走れメロス 438 ページ～
- 11.蜘蛛の糸 450 ページ～
- 12.羅生門 455 ページ～
- 13.杜子春 463 ページ～
- 14.注文の多い料理店 478 ページ～
- 15.オツベルと象 487 ページ～
- 16.銀河鉄道の夜 496 ページ～
- 17.かちかち山 546 ページ～
- 18.花咲かじじい 556 ページ～
- 19.浦島太郎 561 ページ～
- 20.赤ずきんちゃん 570 ページ～
- 21.桃太郎 575 ページ～
- 22.桃太郎 588 ページ～
- 23.一寸法師 597 ページ～
- 24.アインシュタイン 610 ページ～
- 25.アインシュタインの教育観 623 ページ～
- 26.ソクラテス 632 ページ～
- 27.ゴッホについて 639 ページ～
- 28.ニイチェに就いての雑感 646 ページ～
- 29.学生と教養 653 ページ～
- 30.学生と生活 669 ページ～
- 31.学生と読書 686 ページ～
- 32.一問一答 695 ページ～
- 33.わが文学修業 698 ページ～
- 34.愛読書の印象 702 ページ～
- 35.生きること作ること 704 ページ～
- 36.生きる為の恋愛 713 ページ～

- 37.生存理由としての哲学 716 ページ～
- 38.善くならうとする祈り 719 ページ～
- 39.如何に読書すべきか 726 ページ～
- 40.読んだ本 737 ページ～
- 41.異性の何処に魅せられるか 739 ページ～
- 42.芸術上の心得 741 ページ～
- 43.経験派 744 ページ～
- 44.個性 746 ページ～
- 45.愛妻家の一例 750 ページ～
- 46.悪妻論 755 ページ～
- 47.愛の問題（夫婦愛） 759 ページ～
- 48.愛は神秘的な修道場 764 ページ～
- 49.愛人と厭人 767 ページ～
- 50.愛 772 ページ～
- 51.愛よ愛 774 ページ～
- 52.新しい一夫一婦 777 ページ～
- 53.新しい卒業生の皆さんへ 783 ページ～
- 54.新しい躰 789 ページ～
- 55.新しい文学の誕生 794 ページ～
- 56.新しき文学 801 ページ～
- 57.新しき夫の愛 806 ページ～
- 58.新しき世界の為の新しき芸術 815 ページ～
- 59.新らしき性格感情 827 ページ～
- 60.新しい神話を追い求めつつ 830 ページ～
- 61.新しい船出 832 ページ～
- 62.私の書きたい女性 840 ページ～
- 63.新しいアジアのために 842 ページ～
- 64.新しい婦人の職場と任務 845 ページ～
- 65.婦人と職業 853 ページ～
- 66.明日をつくる力 856 ページ～
- 67.明日の知性 864 ページ～
- 68.明日の実力の為に 871 ページ～
- 69.明日の劇壇へ 873 ページ～
- 70.明日咲く花 875 ページ～
- 71.明日 877 ページ～
- 72.明日 882 ページ～

73.あのことろ 884 ページ～

74.あとがき (『幸福について』) 891 ページ～

75.あとがき (『作家と作品』) 894 ページ～

76.あとがき (『宮本百合子選集』 第五巻) 896 ページ～

77.あとがき (『明日への精神』) 900 ページ～

# 1. 『福沢心訓』 (ふくざわしんくん)

## 心訓

- 一、世の中で一番楽しく立派な事は、一生涯を貫く仕事を持つという事です。
- 一、世の中で一番みじめな事は、人間として教養のない事です。
- 一、世の中で一番さびしい事は、する仕事のない事です。
- 一、世の中で一番みにくい事は、他人の生活をうらやむ事です。
- 一、世の中で一番尊い事は、人の為に奉仕して決して恩にきせない事です。
- 一、世の中で一番美しい事は、全ての物に愛情を持つ事です。
- 一、世の中で一番悲しい事は、うそをつく事です。

## 2.『日常の五心』（にちじょうのごしん）

日常の五心

- 一、「はい」という素直な心
- 一、「すみません」という反省の心
- 一、「おかげさま」という謙虚な心
- 一、「私がします」という奉仕の心
- 一、「ありがとう」という感謝の心

### 3. 『心戒十訓』（しんかいじっくん）

#### 心戒十訓

- 一、人を大切にする人は人から大切にされる
- 二、人間関係は相手の長所と付き合うものだ
- 三、人は何をしてもらうかより何が人に出来るかが大切である
- 四、仕事では頭を使い、人間関係では心を使え
- 五、挨拶はされるものではなくするものである
- 六、仕事は言われてするものではなく、探してするものである
- 七、わかるだけが勉強ではない、出来る事が勉強だ
- 八、美人より美心
- 九、言葉で語るな、心で語れ
- 十、良い人生は、良い準備から始まる

## 4. 『健康十訓』（けんこうじっくん）

### 健康十訓

- 一、少肉多菜（肉を少なく、野菜を多く）
- 二、少塩多酢（塩を少なく、酢を多く）
- 三、少糖多果（砂糖を少なく、果物を多く）
- 四、少食多嚙（小食で、よく嚙（か）む）
- 五、少衣多浴（薄着にして、陽にあたる）
- 六、少言多行（口先よりも、行動本位で）
- 七、少欲多施（欲は少なく、他につくす）
- 八、少憂多眠（思い悩まず、よく眠る）
- 九、少車多歩（車に乗るより、よく歩く）
- 十、少憤多笑（怒らず、よく笑う）



## 5. 『七つのシン』（ななつのしん）

七つのシン

第一は、新鮮な感覚をいつも持ち続ける「新」です。

第二は、ウソやゴマカシのない真実一路の「真」です。

第三は、自分を伸ばすために努力をする「伸」です。

第四は、親しみを持たれる人、親切な人、そして親の恩に感謝する人間、その「親」です。

第五は、人間で一番大事な信用の「信」です。

第六は、世の中は日進月歩です。前進する「進」です。

第七は、真心がこもる人、それを願う「心」です。

## 6.『ならぬもの十訓』(ならぬものじっくん)

ならぬもの十訓

- 1.忘れてはならぬもの 「感謝」
- 2.言ってはならぬもの 「愚痴」
- 3.曲げてはならぬもの 「つむじ」
- 4.起こしてはならぬもの 「短気」
- 5.叩(たた)いてはならぬもの 「人の頭」
- 6.失ってはならぬもの 「信用」
- 7.笑ってはならぬもの 「人の落ち度」
- 8.持ってはならぬもの 「ねたみ」
- 9.捨ててはならぬもの 「義理人情」
- 10.乗ってはならぬもの 「口車」

## 7. 『つもりちがい十ヶ条』 (つもりちがいじっかじょう)

つもりちがい十ヶ条

高いつもりで	低いのが	教養
低いつもりで	高いのが	気位
深いつもりで	浅いのが	知識
浅いつもりで	深いのが	欲望
厚いつもりで	薄いのが	人情
薄いつもりで	厚いのが	面皮
強いつもりで	弱いのが	根性
弱いつもりで	強いのが	自我
多いつもりで	少いのが	分別
少いつもりで	多いのが	無駄

## 8. 〔雨ニモマケズ〕

宮澤賢治

雨ニモマケズ  
風ニモマケズ  
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ  
丈夫ナカラダヲモチ  
慾ハナク  
決シテ瞞ラズ  
イツモシヅカニワラッテキル  
一日ニ玄米四合ト  
味噌ト少シノ野菜ヲタベ  
アラユルコトヲ  
ジブンヲカンジョウニ入レズニ  
ヨクミキキシワカリ  
ソシテワスレズ  
野原ノ松ノ林ノノ  
小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ  
東ニ病氣ノコドモアレバ  
行ッテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ  
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ  
南ニ死ニサウナ人アレバ  
行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ  
北ニケンクウヤソショウガアレバ  
ツマラナイカラヤメロトイヒ  
ヒドリノトキハナミダヲナガシ  
サムサノナツハオロオロアルキ  
ミンナニデクノボートヨバレ  
ホメラレモセズ  
クニモサレズ  
サウイフモノニ  
ワタシハナリタイ

南無無辺行菩薩  
南無上行菩薩  
南無多宝如来  
南無妙法蓮華經  
南無釈迦牟尼仏  
南無浄行菩薩  
南無安立行菩薩

---

底本：「【新】校本宮澤賢治全集 第十三卷（上）覚書・手帳 本文篇」筑摩書房

1997（平成9）年7月30日初版第1刷発行

※本文については写真版を含む本書によった。また、改行等の全体の体裁については、「【新】校本宮澤賢治全集 第六巻」筑摩書房1996（平成8）年5月30日初版第1刷発行を参照した。

入力：田中敬三

校正：土屋隆

2006年7月26日作成

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

- ・このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。
- ・「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

## 9.吾輩は猫である

夏目漱石

+目次

一

わがはい

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

けんとう

どこで生れたかほとんど見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあ

どうあく

とで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生とい

つかまに

うのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もな

てのひら

かったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の

みはじめ

顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで

やかん

ご

あ

かたわ

でく

薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。

のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと

けむり

む

たばこ

煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知った。

うち

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速

むやみ

力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸

とうてい

が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一疋も見えぬ。肝心  
の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明  
いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非  
常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどう  
したらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら  
書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来  
ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。

泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと

決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢し

て無理やりに這って行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、

どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議な

もので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れ

んのである。一樹の蔭とはよく云ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が

となり隣家の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれか

ら先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って

来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて  
暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入ってお

ったのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。  
第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やい



くびすじ ほう  
きなり 頸筋をつかんで表へ 抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は

すき は あが  
再びおさんの 隙を見て台所へ這い上った。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したの

を記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの さんま 三馬

ぬす つかえ  
を 偷んでこの返報をしてやってから、やっと胸の 瘡が下りた。吾輩が最後につまみ

うち  
出されようとしたときに、この 家の主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は

やど  
吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの 宿なしの小猫がいくら出しても出しても

おだいどころ あが ひね  
御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を 撚りながら吾

なが  
輩の顔をしばらく 眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ

はい くや  
這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人に見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所

ほう うち すみか き  
へ 抛り出した。かくして吾輩はついにこの 家を自分の 住家と極める事にしたのである。

めった  
吾輩の主人は 滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思

のぞ ひるね  
な勉強家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を 覗いて見るが、彼はよく 昼寝をし

よだれ  
ている事がある。時々読みかけてある本の上に 涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の

たんこうしょく ふかっぱつ  
色が 淡黄色を帯びて弾力のない 不活潑な徴候をあらわしている。その癖に

あと  
大飯を食う。大飯を食った 後でタカジヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。

吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に<sup>らく</sup>楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達<sup>たび</sup>が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行っても<sup>は</sup>跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、<sup>こんにち</sup>今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得

る限り吾輩を入れてくれた主人の<sup>そば</sup>傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の<sup>ひざ</sup>膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその<sup>せなか</sup>背の中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろ

いろ経験の上、朝は<sup>めしびつ</sup>飯櫃の上、夜は<sup>こたつ</sup>炬燵の上、天気の良い日は<sup>えんがわ</sup>椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入ってここのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ<sup>はい</sup>入

って一<sup>ひとま</sup>間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に<sup>おの</sup>己れを容るべき余地を<sup>みいだ</sup>見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を<sup>さ</sup>醒ますが最後大変な事に

なる。小供は——ことに小さい方が<sup>たち</sup>質がわるい——猫が来た猫が来たといって夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は<sup>かなら</sup>必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは<sup>ものさし</sup>物指で尻<sup>たた</sup>ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は<sup>わがまま</sup>我儘なものだと断言せざ

るを得ないようになった。ことに吾輩が時々 <sup>どうきん</sup> 同 衾 する小供のごときに至っては  
ごんごどうだん <sup>ほう</sup>  
言 語 同 断 である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛  
り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしよ  
かない <sup>と</sup>  
うものなら 家 内 総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちょっと畳で爪を磨いだ  
ら細君が非常に <sup>おこ</sup> 怒 <sup>い</sup> ってそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で <sup>ひと</sup> 他 <sup>ふる</sup> が 顫 え  
ていても <sup>いっこう</sup> 一 向 平気なものである。吾輩の尊敬する <sup>すじむこう</sup> 筋 <sup>あ</sup> 向 の白君などは逢う  
たびごと  
度 毎 に人間ほど不人情なものはないと言っておらるる。白君は先日玉のような子猫を  
<sup>う</sup> 四疋産まれたのである。ところがその <sup>うち</sup> 家 の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行  
って四疋ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうして  
<sup>ねこぞく</sup> 我等 猫 族 <sup>まった</sup> が親子の愛を 完 くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこ  
<sup>そうめつ</sup> れを 剿 滅 せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思う。また隣の <sup>みけ</sup> 三毛君な  
どは人間が所有権という事を解していないと <sup>おおい</sup> 大 に憤慨している。元来我々同族  
<sup>めざし</sup> 間では 目 刺 の頭でも <sup>ぼら</sup> 鰯 の <sup>へそ</sup> 臍 でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるも  
のとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて <sup>よ</sup> 善いくらいのものだ。  
<sup>ごう</sup>  
しかるに彼等人間は 毫 もこの観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のた  
<sup>りやくだつ</sup>  
めに 掠 奪 せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきもの  
<sup>うば</sup>  
を 奪 ってすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩  
は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関する両君よりもむしろ楽天である。ただそ  
の日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄え  
る事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

わがまま

我 儘 で思い出したからちょっと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。

すぐ

元来この主人は何とって人に 勝 れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやってほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文

こ うたい

をかいたり、時によると弓に凝ったり、 謡 を習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になっておらん。そ

こうか

の癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。 後 架 の中で謡をうたって、近所で

こうかせんせい あだな

いっこう

後 架 先 生 と 渾 名 を つけ ら れ て い る に も 関 せ ず 一 向 平 気 な も の で 、 や は り

たいら むねもり そうろう

これは 平 の 宗 盛 に て 候 を 繰 返 し て い る 。 み ん な が そ ら 宗 盛 だ と 吹 き 出 す くらいである。この主人がどういう考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり

のち

さ

後 のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。何を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつか

うま

かない。当人もあまり 甘 くないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている

しも

人が来た時に 下 のような話をしているのを聞いた。

うま

みずか

「どうも 甘 くないものだね。人を見ると何でも無いようだが 自 ら筆をとって

いまさら

じゅっかい

見ると 今 更 のようにむずかしく感ずる」これは主人の 述 懐 である。なるほど

いつわ

めがねごし

詐 りのない処だ。彼の友は金縁の 眼 鏡 越 に主人の顔を見ながら、「そう初めか

え

むか

ら上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔 し

イタリー

以 太 利 の 大 家 ア ン ド レ ア ・ デ ル ・ サ ル ト が 言 っ た 事 が あ る 。 画 を か く な ら 何 で も 自 然 そ

せいしん

ろか

とり

けもの

の物を写せ。天に 星 辰 あり。地に露華あり。飛ぶに 禽 あり。走るに 獣 あり。

こぼく かんあ だいかつが  
池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も  
画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいった事があるかい。ちっとも知らなかつ  
た。なるほどこりゃもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁

あざ わらい  
の裏には嘲けるような笑が見えた。

えんがわ ひるね  
その翌日吾輩は例のごとく椽側に出て心持善く昼寝をしていたら、主人が例に  
なく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をして

いちぶ  
いるかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サル

き  
トを極め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えぬ失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼

やゆ  
の友に揶揄せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はす

じゅうぶん あくび と  
でに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執

しんぼう  
っているのを動いては気の毒だと思って、じっと辛棒しておった。彼は今吾輩の輪廓

いろど  
をかき上げて顔のあたりを色彩っている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘

まさ  
の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決して思

えが  
っておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるよう

ペルシャさん  
な妙な姿とは、どうしても思われぬ。第一色が違う。吾輩は波斯産の猫のごとく

うるし ふい  
黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑  
うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、

とびいろ  
灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の  
色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつと

もこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから

めくら

盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおってやりたいと思ったが、さっきから小便が催うしている。

みうち

身内の筋肉はむずむずする。もはや ゆうよ しぎ  
最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となったから、やむを

えず失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと だい なる欠伸をした。

さてこうなって見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は ぶ こ  
打ち壊

わたしたのだから、ついでに裏へ行って用を足そうと思ってのそのそ這い出した。すると主

人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」と かな どな  
怒鳴った。

この主人は人を かのし  
罵るときは必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いよう

を知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、 むやみ 無暗に馬鹿野

郎 呼ばわりは失敬だと思う。それも平生吾輩が彼の せなか  
背中へ乗る時に少しは好い顔でもす

るならこの まんば  
漫罵も甘んじて受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事

もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは ひど  
酷い。元来人間というものは自己の力量に

慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て いじ  
窘めてやらなくてはこの  
先どこまで増長するか分らない。

わがまま

我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲し  
むべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの ちゃえん さっぱり  
茶園がある。広くはないが 瀟洒とした心持ち好

く日の あた  
当る所だ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹

加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て 浩 然 の気を養うのが例である。

ある小春の穏かな日の二時頃であったが、吾輩は 昼 飯 後 快よく一睡した 後、運

動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の

近づくの 一 向 心付かざるごとく、また心付くも無頓着なるごとく、大きな 鼻 を

して長々と体を 横 えて眠っている。他 の庭内に忍び入りたるものがかくまで平気に

ねむ 睡 られるものかと、吾輩は 窃 ひそ かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかった。彼は純

粋の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に 抛 げ かけ

て、きらきらする 柔 毛 の間より眼に見えぬ炎でも燃え出ずるように思われた。彼は猫中  
の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は

嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に 佇 立 して余念もなく 眺 めていると、

静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる 梧 桐 の枝を 軽 く誘ってばらばらと二三枚の

葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかっとその 真 まんまる 丸 の眼を開いた。今でも記憶している。

その眼は人間の珍重する 琥 珀 というものよりも 遥 かに美しく輝いていた。彼は身動き

もしない。双 眸 の奥から射るとき光を吾輩の 矮 小 なる 額 の上にあつめ

て、御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が 卑 しいと思ったが何しろその

声の底に犬をも挫しぐべき力が 籠 っているので吾輩は少なからず恐れを 抱 いた。しか

し 挨 拶 をしないと 険 呑 だと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない」と

なるべく平気を 装 って冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも

烈しく鼓動しておった。彼は <sup>おおい</sup> 大 に <sup>けいべつ</sup> 軽 蔑 せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあ

きれらあ。 <sup>ぜん</sup> 全 て <sup>ぼうじゃくぶじん</sup> えどこに住んでるんだ」随分 傍 若 無 人 である。「吾輩はここ

の教師の <sup>うち</sup> 家 にいるのだ」「どうせそんな事だろうと思った。 <sup>や</sup> いやに瘠せてるじゃねえか」

と大王だけに <sup>きえん</sup> 気 焔 を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われぬ。

しかしその <sup>あぶらぎ</sup> 膏 切 って肥満しているところを見ると御馳走を食ってるらしい、豊かに暮

しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。 <sup>お</sup> 「己れあ

車屋の <sup>くろ</sup> 黒 よ」 <sup>こうぜん</sup> 昂 然 たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠

主義の <sup>まと</sup> 的 になっている奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時

に、一方では少々 <sup>けいぶ</sup> 軽 侮 の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるか

を <sup>ため</sup> 試 してみようと思って左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに <sup>きま</sup> 極 っ ていらあな。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに <sup>だいぶ</sup> 大 分 強そうだ。車屋にいると <sup>ごちそう</sup> 御 馳 走 が食えると見えるね」

「 <sup>なあ</sup> 何 におれなんざ、どこの国へ行っただって食べ物に不自由はしねえつもりだ。御めえな

んかも <sup>ちゃばたけ</sup> 茶 臼 ばかりぐるぐる廻って <sup>おれ</sup> いねえで、ちっと <sup>あと</sup> 己 の 後 へくっ付いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追ってそう願う事にしよう。しかし <sup>うち</sup> 家 は教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」



べらぼう た  
「 籠 棒 め、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」

おおい かんしゃく さわ かんちく  
彼は 大 に 肝 癩 に 障 った様子で、 寒 竹 をそいだような耳をしきりと

ちき  
びく付かせてあららかに立ち去った。吾輩が車屋の黒と知己になったのはこれからである。

ご たびたび かいこう ごと きえん  
その後吾輩は 度々 黒と 邂逅 する。邂逅する 毎 に彼は車屋相当の 気 焰 を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

ちゃばたけ ねころ  
或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい 茶 壺 の中で 寝 転 びながらいろいろ雑談を

じまんばな  
していると、彼はいつもの 自 慢 話 しをさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向っ

しも  
て 下のごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹とった事がある」智識は黒よりも

とうてい  
余程発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至っては 到 底 黒の比較にはならないと

きま よ  
覚悟はしていたものの、この間に接したる時は、さすがに 極 りが善くはなかった。けれ

いつわ  
ども事実は事実で 詐 る訳には行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思ってまだ

と つっぱ ひげ  
捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと 突 張 っている長い 髭 をびりびりと

ふる だけ  
震 わせて非常に笑った。元来黒は自慢をする 丈 にどこか足りないところがあって、彼

きえん のど ぎよ  
の 気 焰 を感心したように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればはなはだ 御 しやす

すぐ  
い猫である。吾輩は彼と近付になってから 直 にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にも

おの ぐ  
なまじい 己 れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いっその事彼に自分

し さだ  
の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を 定 めた。そこでおとなしく「君

だいぶん しょうへき  
などは年が年であるから 大 分 とったろう」とそそのかして見た。果然彼は 墻 壁

けっしょ とっかん  
の欠所に唸喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとったろう」とは得意気なる彼の答であった。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたちってえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向って <sup>ひど</sup> <sup>あ</sup> 酷い目に逢った」「へえなるほど」と <sup>あいづち</sup> 相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が <sup>いしばい</sup> <sup>えん</sup> <sup>は</sup> 石灰の袋を持って椽の下へ這い込んだら御めえ大きないたちの野郎がめんくら <sup>面</sup> 喰って飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちってけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん <sup>ちきしょう</sup> <sup>どぶ</sup> 畜生って気で追っかけてとうとう泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ」「うまくやったね」と <sup>かつさい</sup> 喝采してやる。「ところが御めえいざってえ段になると奴め <sup>さいご</sup> <sup>くせ</sup> 最後っ屁をこきやがった。臭えの臭くねえのってそれからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至ってあたかも去年の臭気を <sup>いま</sup> 今なお感ずるごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちっと景気を付けてやろうと思つて「しかし鼠なら君に <sup>にら</sup> 睨まれては百年目だらう。君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥って色つやが善いのだらう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を <sup>ていしゆつ</sup> 呈出した。彼は <sup>きぜん</sup> <sup>たいそく</sup> <sup>かん</sup> 喟然として大息していう。「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとったって——てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ持って行きやあがる。交番じゃ誰が捕ったか分らねえからそのたんびに五錢 <sup>と</sup> ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか <sup>おれ</sup> <sup>もう</sup> 己の御蔭でもう老円五十錢くらい儲けてい <sup>ろく</sup> <sup>てい</sup> <sup>い</sup> やがる癖に、碌なものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てものあ <sup>い</sup> <sup>い</sup> 体の善い泥棒

りくつ おこ ようす  
だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟はわかると見えてすこぶる怒った容子

さかだ  
で背中を逆立てている。吾輩は少々気味が悪くなったから善い加減にその場を

ごまか うち  
胡魔化して家へ帰った。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の

あさ  
子分になって鼠以外の御馳走を獺ってあるく事もしなかった。御馳走を食うよりも寝て

うち  
いた方が気楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

とうてい のぞみ  
教師といえは吾輩の主人も近頃に至っては到底水彩画において望のない事を悟ったものと見えて十二月一日の日記にこんな事かきつけた。

であ だいぶほうとう  
〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢った。あの人は大分放蕩をした人だと云う

つうじん ふうさい たち  
がなるほど通人らしい風采をしている。こう云う質の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云うよりも放蕩をするべく余儀なくせられたと云うのが適当で

うらや  
あろう。あの人の妻君は芸者だそうだ、羨ましい事である。元来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもって自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので到底卒業する気づかいはない。し

すま  
かるにも関せず、自分だけは通人だと思って済んでいる。料理屋の酒を飲んだり待合へ

はい ひとかど  
這入るから通人となり得るとい論が立つなら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る

りくつ ぐまい  
理窟だ。吾輩の水彩画のごときはかかない方がましであると同じように、愚昧なる通

おおやぼ はる  
人よりも山出しの大野暮の方が遥かに上等だ。

つうじんろん しゅこう  
通人論はちょっと首肯しかねる。また芸者の妻君を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけ

はたしかなものだ。主人はかくのごとく自知の明あるにも関せずその自惚心は

なかなか抜けぬ。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いている。

ゆうべ ほう  
昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと置いて、そこらに抛って置いたのを誰か

らんまか  
が立派な額にして欄間に懸けてくれた夢を見た。さて額になったところを見ると我なが

ら急に上手になった。非常に嬉しい。これなら立派なものだと独りで眺め暮らしている

と、夜が明けて眼が覚めてやはり元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になってしまっ  
た。

うち しよ  
主人は夢の裡まで水彩画の未練を背負ってあるいと見える。これでは水彩画家

ふうし いわゆる たち  
は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

めがね  
主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼

へきとう え  
は座につくと劈頭第一に「画はどうかね」と口を切った。主人は平気な顔をして「君

つと  
の忠告に従って写生を力めているが、なるほど写生をすると今まで気のつかなかった物

の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。西洋では昔しから写生を主張した結果

こんにち  
今日のように発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記

の事はおくびにも出さないで、またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者は笑い

でたらめ か  
ながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を搔く。「何が」と主人はまだわられた事に  
気がつかない。「何がって君のしきりに感服しているアンドレア・デル・サルトさ。あれ

ねつぞう まじめ  
は僕のちょっと捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じようとは思わなかったハ

てい  
ハハハ」と大喜悦の体である。吾輩は椽側でこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいか

なる事が <sup>しる</sup>記さるるであろうかと <sup>あらかじ</sup>予め想像せざるを得なかった。この美学者はこん

な <sup>いい</sup>好加減な事を吹き散らして人を <sup>かつ</sup>担ぐのを唯一の <sup>たのしみ</sup>楽にしている男である。彼

はアンドレア・デル・サルト事件が主人の <sup>じょうせん</sup>情線にいかなる響を伝えたかを <sup>ごう</sup>毫も

顧慮せざるもののごとく得意になって <sup>しも</sup>下のような事を <sup>しゃべ</sup>饒舌った。「いや時々

<sup>じょうだん</sup>冗談を言うと人が真に受けるので <sup>ま</sup>大に <sup>おおい</sup>滑稽的 <sup>こっけいてき</sup>美感を <sup>ちょうはつ</sup>挑撥す

るのは面白い。せんだってある学生にニコラス・ニッケルバーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聴しておった。それからまだ面白い話がある。せんだって或る文学者のいる席

でハリソンの歴史小説セオファーノの <sup>はな</sup>話 <sup>うち</sup>しが出たから僕はあれは歴史小説の <sup>中</sup>で

<sup>はくび</sup>白眉である。ことに女主人公が死ぬところは <sup>きき</sup>鬼気人を襲うようだと評したら、僕の向うに坐っている知らんと云った事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないという事を知った」神経胃弱性

の主人は眼を丸くして問いかけた。「そんな <sup>でたらめ</sup>出鱈目をいってもし相手が読んでいたらど

うするつもりだ」あたかも人を <sup>あざむ</sup>欺くのは <sup>さしつかえ</sup>差支ない、ただ <sup>ばけ</sup>化の <sup>かわ</sup>皮があらわれた時は困るじゃないかと感じたもののごとくである。美学者は少しも動じない。「なに

<sup>とき</sup>その <sup>時</sup>や別の本と間違えたとか何とか云うばかりさ」と云ってけらけら笑っている。この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学

者はそれだから画をかいても駄目だという目付で「しかし <sup>え</sup>冗談 <sup>じょうだん</sup>は冗談だが画というものは実際むずかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを

写せと教えた事があるそうだ。なるほど <sup>せついん</sup>雪隠 <sup>はい</sup>などに這入って雨の漏る壁を余念なく眺めていると、なかなかうまい模様画が自然に出来ているぜ。君注意して写生して見給えき

だま  
っと面白いものが出来るから」「また 欺 すのだろう」「いえこれだけはたしかだよ。実  
際奇警な語じゃないか、ダ・ヴィンチでもいいそうな事だあね」「なるほど奇警には相違  
ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

ごびっこ だんだん さ  
車屋の黒はその後 跛 になった。彼の光沢ある毛は 漸々 色が褪めて抜けて来る。

こはく めやに  
吾輩が 琥珀 よりも美しいと評した彼の眼には 眼 脂 が一杯たまっている。ことに著るし

ひ  
く吾輩の注意を惹いたのは彼の元気の消沈とその体格の悪くなった事である。吾輩が例の

ちゃえん さいごっぺ  
茶 園 で彼に逢った最後の日、どうだと云って尋ねたら「いたちの 最 後 尻 と

さかなや てんびんぼう こりごり  
肴 屋 の 天 秤 棒 には 懲 々 だ」といった。

こう こうよう むか  
赤松の間に二三段の 紅 を綴った 紅 葉 は 昔 しの夢のごとく散ってつくばいに近

はなびら こうはく さざんか  
く代る代る 花 弁 をこぼした 紅 白 の 山 茶 花 も残りなく落ち尽した。三間半の南

こがらし まれ  
向の椽側に冬の日脚が早く傾いて 木 枯 の吹かない日はほとんど 稀 になってから吾

せば  
輩の昼寝の時間も 狭 められたような気がする。

こも いや  
主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て 籠 る。人が来ると、教師が 厭 だ厭だとい  
う。水彩画も滅多にかかない。タカジヤスターゼも機能がないうってやめてしまった。

まり  
小供は感心に休まないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌って、 毬 をついて、時々吾輩

しっぽ  
を尻尾でぶら下げる。

ごちそう ふと びっこ  
吾輩は御馳走も食わないから別段 肥 りもしないが、まずまず健康で 跛 にもな

いま きら  
らずにその日その日を暮している。鼠は決して取らない。おさんは 未 だに 嫌 いである。

しょうがい うち  
名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから 生 涯 この教師の 家  
で無名の猫で終るつもりだ。

## 二

吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながらちょっと鼻が高く感ぜらるるのありがたい。

もと えはがき  
元朝早々主人の 許 へ一枚の 絵 端 書 が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を 深 緑 色で塗って、その真中に一の動物が 蹲 踞 っている

ところをパステルで書いてある。主人は例の書齋でこの絵を、横から見たり、 堅 から眺めたりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと

思うとやはり横から見たり、堅から見たりしている。からだを ね 拗じ向けたり、手を延ばし

さんぜそう  
て年寄が 三 世 相 を見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持って来たり

して見ている。早くやめてくれないと 膝 が揺れて 陰 呑 でたまらない。ようやくの事

はげ  
で動揺があまり 劇 しくなくなったと思ったら、小さな声で一体何をかいたのだろうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さっきから

苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思いながら、寝ていた眼を上品に 半 ば

まぎ  
開いて、落ちつき払って見ると 紛 れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア・

き  
デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちゃんと整って

出来ている。誰が見たって猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の 中 でも 他 の

か  
猫じゃない吾輩である事が判然とわかるように立派に描いてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにしても、

とうてい  
せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは 到 底 吾輩

ねこそく  
猫 属 の言語を解し得るくらいに天の 恵 に浴しておらん動物であるから、残念な

がらそのままにしておいた。

ちょっと読者に断っておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の

口調をもって吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の <sup>かす</sup>糟 から牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもあろうが、はたから見てあまり見っともい者じゃない。いくら猫だって、そう粗末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一体、平等無差別、ど

の猫も自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会に <sup>はい</sup>這入って見るとなかなか複雑

なもので十人 <sup>と</sup>十 <sup>ことば</sup>色 という人間界の <sup>ことば</sup>語 はそのままここにも応用が出来るのである。目

付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違う。 <sup>ひげ</sup>髯 の張り具合から耳の立ち <sup>あんばい</sup>按 排、

<sup>しっぽ</sup>尻 の垂れ加減に至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌い、 <sup>すいぶすい</sup>粹 無 粹

<sup>かず</sup>つ の <sup>かず</sup>数 を悉くして千差万別と云っても差支えないくらいである。そのように判然たる区別が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいって、空ばかり見ている

ものだから、吾輩の性質は無論 <sup>そうぼう</sup>相 貌 の末を識別する事すら到底出来ぬのは気の毒だ。

同類相求むとは <sup>むか</sup>昔 <sup>ことば</sup>しからある <sup>もちや</sup>語 だそうだがその通り、 <sup>もちや</sup>餅 屋 は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間が発達したってこればかりは駄目であ

る。いわんや實際をいうと彼等が <sup>みずか</sup>自 ら信じているごとくえらくも何ともないのだからなおさら <sup>みずか</sup>むずかしい。またいわんや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残りなく解するというが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない。彼は

性の悪い牡蠣のごとく書齋に吸い付いて、かつて外界に向って口を <sup>ひら</sup>開 いた事がない。そ

れで自分だけはすこぶる達観したような <sup>つらがまえ</sup>面 構 をしているのはちょっとおかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟った様子もなく今年は征露

の第二年目だから大方熊の画だろうなどと気の知れぬことをいってすましているのでもわかる。



ひざ  
吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら考えていると、やがて下女が第二の  
えはがき  
絵端書を持って来た。見ると活版で舶来の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握った  
ひき  
り書物を開いたり勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じゃ猫じ  
おど  
やを躍っている。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側  
わき  
に  
おど はるひとひ したた  
書を読むや躍るや猫の春一日という俳句さえ認められてある。これは主人の  
うかつ  
旧門下生より来たので誰が見たって一見して意味がわかるはずであるのに、迂濶な主人  
ひね  
はまだ悟らないと見えて不思議そうに首を捻って、はてな今年は猫の年かなと  
ひとりごと  
独言を言った。吾輩がこれほど有名になったのをまだ気が着かずにいると見える。  
ま  
ところへ下女がまた第三の端書を持って来る。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかい  
かたわ きょうしゅくながら よろ ごでんせい  
て、傍らに乍恐縮かの猫へも宜しく御伝声  
ねがいあげたてまつりそろ うえん  
奉願上候とある。いかに迂遠な主人でもこう明らさまに書いてあ  
れば分るものと見えてようやく気が付いたようにフンと言いながら吾輩の顔を見た。その  
眼付が今までとは違って多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今まで世間から存在  
しんめんぼく  
を認められなかった主人が急に一個の新面目を施こしたのも、全く吾輩の御蔭だと  
思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。  
こうし  
おりから門の格子がチリン、チリン、チリリリンと鳴る。大方来客であろう、来客  
さかなや き  
なら下女が取次に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時のほかは出ない事に極めているの  
だから、平気で、もとのごとく主人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも飛び  
込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をす  
へんくつ  
るのが厭らしい。人間もこのくらい偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外  
こんじょう  
出でもすればよいのにそれほどの勇氣も無い。いよいよ牡蠣の根性をあらわしてい

る。しばらくすると下女が来て かんげつ 寒 月 さんがおいでになりましたという。この寒月とい  
う男はやはり主人の旧門下生であったそうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より

立派になっているという はな 話 である。この男がどういう訳か、よく主人の所へ遊びに来

る。来ると自分を おも 恋 っている女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白そうな、つま

らなそうな、 すご っや 凄 みたいな 艶 っぽいような文句ばかり並べては帰る。主人のようなしな

びかけた人間を求めて、わざわざこんな話しをしに来るのからして がつん 合 点 が行かぬが、あ

かきてき あいづち  
の 牡蠣 的 主人がそんな談話を聞いて時々 相 槌 を打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から おおい 大 に活動しているものですから、

で ひも  
出よう出ようと思っても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織の 紐 をひねくりな

なぞ  
がら 謎 見たような事をいう。「どっちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をし

くろもめん そでぐち  
て、黒 木 綿 の紋付羽織の 袖 口 を引張る。この羽織は木綿でゆきが短い、下か  
らべんべらが左右へ五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違った方角で」と  
寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けている。「君歯をどうかしたかね」と主人は

しいたけ  
問題を転じた。「ええ実はある所で 椎 茸 を食いましてね」「何を食ったって?」「そ

かさ  
の、少し椎茸を食ったんで。椎茸の 傘 を前歯で噛み切ろうとしたらぼろりと歯が欠けま

じじいくさ  
したよ」「椎茸で前歯がかけるなんぞ、何だか 爺 々 臭 いね。俳句にはなるかも知れな

かろ  
いが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭を 軽 く叩く。「ああその猫が例のです  
か、なかなか肥ってるじゃありませんか、それなら車屋の黒にだって負けそうもありません

おおい ほ だいぶ  
んね、立派なものだ」と寒月君は 大 に吾輩を賞める。「近頃 大 分 大きくなったの  
さ」と自慢そうに頭をぼかぼかなぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一  
昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻す。「どこで」「ど

こでもそりや御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三<sup>ちょう</sup>挺とピアノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものですね。二人は女で<sup>わたし</sup>私<sup>ひ</sup>がその中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思いました」

「ふん、そしてその女というのは何者かね」と主人は<sup>うらや</sup>羨ましそうに問いかける。元来主人は平常<sup>こぼくかんがん</sup>枯木寒巖のような顔付はしているものの実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ず<sup>ほ</sup>ちょっと惚れる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱には<sup>れんちやく</sup>れんちやく<sup>ふうしてき</sup>恋着するという事が諷刺的に書いてあったのを見て、これは真理だと感心し

たくらいな男である。そんな浮気な男が何故牡蠣的生涯を送っているかと云うのは吾輩猫<sup>どうてい</sup>などには到底分らない。或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云

うし、また或人は金がなくて臆病な性質だからだとも云う。どっちにしたって明治の歴史<sup>たち</sup>に関係するほどな人物でもないのだから構わない。しかし寒月君の女<sup>おんなづ</sup>連れを羨まし<sup>げ</sup>に尋ねた事だけは事実である。寒月君は面白そうに口<sup>くちとり</sup>取の蒲<sup>かまぼこ</sup>鉾を箸で挟んで半分前歯で食い切った。吾輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であった。「な

<sup>さ</sup>に二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方<sup>かた</sup>じゃありません」と余所余所しい返事をする。「ナール」と主人は引張ったが「ほど」を略して考えている。寒月君はもう善い加

減な時分だと思ったものか「どうも好い天気ですな、御<sup>おひま</sup>閑ならごいっしょに散歩でもしまし  
うな  
しょうか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と促<sup>うな</sup>がして見る。主人は旅順

の陥落より<sup>おんなづれ</sup>女連の身元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいたがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出るとしよう」と思い切って立つ。やはり黒木綿の紋

かたみ きふ ゆうきつむぎ  
付羽織に、兄の紀念とかいう二十年来着古るした結城紬の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だって、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなって日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。主人の服装には師走も正月もない。

よそ ふとこ  
ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、有っても面倒だから着換ええないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われぬ。

ふたり かまぼこ  
兩人が出て行ったあとで、吾輩はちょっと失敬して寒月君の食い切った蒲鉾の

ちょうだい  
残りを頂戴した。吾輩もこの頃では普通一般の猫ではない。まず

ももかわじょえん ぬす  
桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偷んだ猫くらいの資格は充分あると思

もと ひときれ  
う。車屋の黒などは固より眼中にない。蒲鉾の一切くらい頂戴したって人からかれ

かんしょく  
これ云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間食をするという癖は、何も

おさん  
吾等猫族に限った事ではない。うちの御三などはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬

しつけ  
しては頂戴し、頂戴しては失敬している。御三ばかりじゃない現に上品な仕付を受けつ

ふいちょう こども  
つあると細君から吹聴せられている小児ですらこの傾向がある。四五日前のことであったが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間に

むか パン  
対い合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食う麵麩の幾分に、砂糖をつけて食うのが

さとうつぼ たく さじ  
例であるが、この日はちょうど砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあった。

いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から

ひとさじ  
一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同

しば りょうにん なら  
分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。少らく兩人は睨み合っていたが、大きいのがまた匙をとって一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとってわ

が分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくった。妹も負けずに一杯を附加した。

姉がまた壺へ手を懸ける、妹がまた匙をとる。見ている間に一杯一杯一杯と重なって、つ

ふたり  
いには 両 人の皿には山盛の砂糖が 堆 くなって、壺の中には一匙の砂糖も余って

まなこ こす  
おらんようになったとき、主人が寝ぼけ 眼 を 擦 りながら寝室を出て来てせっかくし  
やくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見ると、人間は

まさ ちえ  
利己主義から割り出した公平という念は猫より 優 っているかも知れぬが、智慧はかえっ

な  
て猫より劣っているようだ。そんなに山盛にしないうちに早く 嘗めてしまえばいいと思

おはち  
ったが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、気の毒ながら 御 櫃 の上か  
ら黙って見物していた。

ある  
寒月君と出掛けた主人はどこをどう 歩行いたものか、その晩遅く帰って来て、翌日食卓

つ ぞうに  
に就いたのは九時頃であった。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまって 雑 煮

むきれ  
を食っている。代えては食い、代えては食う。餅の切れは小さいが、何でも 六 切 か

はし  
ななきれ  
七 切 食って、最後の一切れを碗の中へ残して、もうよそうと 箸 を置いた。他人がそ

わがまま  
んな 我 儘 をすると、なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振り廻わして得意

こ ただ  
なる彼は、濁った汁の中に焦げ 爛 れた餅の死骸を見て平気ですましている。妻君が

き  
ふくろど  
袋 戸 の奥からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないか

でんぷんしつ  
ら飲まん」という。「でもあなた 澱 粉 質 のものには大変機能があるそうですから、

がんこ  
召し上ったらいいでしょう」と飲ませたがる。「澱粉だろうが何だろうが駄目だよ」と 頑 固

あ ひとりごと  
に出る。「あなたはほんとに厭きっぽい」と細君が 独 言 のようにいう。「厭きっぽ  
いのじゃない薬が利かんのだ」「それだってせんだってじゅうは大変によく利くよく利く

とおっしゃって毎日毎日上ったじゃありませんか」「こないだうちは利いたのだよ、この

頃は利かないのだよ」と対句のような返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちゃ、

いくら機能のある薬でも利く気遣いはありません、もう少し辛防がよくなくっち

やあ胃弱なんぞはほかの病気と違って直らないわねえ」とお盆を持って控えた御三を顧みる。「それは本当のところでございます。もう少し召し上ってご覧にならないと、と

よても善い薬か悪い薬かわかりますまい」と御三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいい、飲まんのだから飲まんのだ、女なんかに何がわかるものか、黙っている」「どうせ

女ですわ」と細君がタカジャスターゼを主人の前へ突き付けて是非詰腹を切らせよう

とする。主人は何にも云わず立って書齋へ這入る。細君と御三は顔を見合せてにやにやと

笑う。こんなときに後からくっついて行って膝の上へ乗ると、大変な目に逢わされる

から、そっと庭から廻って書齋の椽側へ上って障子の隙から覗いて見ると、主人は

エピクテタスとか云う人の本を披いて見ておった。もしそれが平常の通りわかるなら

ちょっとえらいところがある。五六分するとその本を叩き付けるように机の上へ抛り

出す。大方そんな事だろうと思ひながらなお注意していると、今度は日記帳を出して下の  
ような事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が裾模様

はるぎ春着をきて羽根をついていた。衣装は美しいが顔はすこぶるまづい。何となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまづい例に特に吾輩を出さなくっても、よさそうなものだ。吾輩だつて

きたどこ喜多床へ行って顔さえ剃って貰やあ、そんなに人間と異ったところはあるやいな

い。人間はこう自惚れているから困る。

ほうたん かど せい なでがた  
宝 丹 の 角 を曲るとまた一人芸者が来た。これは 背 のすらしとした 撫 肩 の

かつこう きもの  
恰 好 よく出来上った女で、着ている薄紫の衣 服 も素直に着こなされて上品に見え

ゆうべ  
た。白い歯を出して笑いながら「源ちゃん 昨 夕 は——つい忙がしかつたもんだから」と

たびがらす しゃが  
云った。ただしその声は 旅 鴉 のごとく 皺 枯 れておったので、せっかくの

ふうさい おおい  
風 采 も 大 に下落したように感ぜられたから、いわゆる源ちゃんなるもののいか

ふとこゝろで おなりみち  
なる人なるかを振り向いて見るも面倒になって、 懐 手 のまま 御 成 道 へ出た。  
寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

げ おこ  
人間の心理ほど解し難いものはない。この主人の今の心は 怒 っているのだか、浮かれ

いちどう  
ているのだか、または哲人の遺書に 一 道 の慰安を求めつつあるのか、ちっとも分らな

まじ かんしゃく  
い。世の中を冷笑しているのか、世の中へ 交 りたいのだか、くだらぬ事に 肝 癪 を

ぶつがい ちょうぜん けんとう  
起しているのか、物 外 に 超 然 としているのだかさっぱり 見 当 が付かぬ。

おこ  
猫などはそこへ行くと単純なものだ。食いたければ食い、寝たければ寝る、怒 るときは  
一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一日記などという無用のものは決してつ  
けない。つける必要がないからである。主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世

ねこそく  
間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する必要があるかも知れないが、我等 猫 属

ぎょうじゅうざが こうしそうによ  
に至ると 行 住 坐 臥 、 行 尿 送 尿 ことごとく真正の日記であるから、別

てかず おの しんめんもく  
段そんな面倒な手 数 をして、己 れの 真 面 目 を保存するには及ばぬと思う。日  
記をつけるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事さ。

ばんさん  
神田の某亭で 晩 餐 を食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変  
いい。胃弱には晩酌が一番だと思う。タカジヤスターゼは無論いかん。誰が何と云っても

駄目だ。どうしたって利<sup>き</sup>かないものは利かないのだ。

むやみ

無暗にタカジャスターゼを攻撃する。独りで喧嘩をしているようだ。今朝の肝癩がち

よっところへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う<sup>へん</sup>辺に存するのも知れない。

せんだって〇〇は朝<sup>あさめし</sup>飯を廃すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて

見たが腹がぐうぐう鳴るばかりで機能はない。△△は是非<sup>こうものた</sup>香の物を断てと忠告した。

彼の説によるとすべて胃病の原因は漬物にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸らす訳だか

ら本復は疑なしという論法であった。それから一週間ばかり香の物に<sup>はし</sup>箸を触れなかった

が別段の<sup>げん</sup>験も見えなかったから近頃はまた食い出した。××に聞くとそれは<sup>あんぷく</sup>按腹

もみりょうじ揉療治に限る。ただし普通のではゆかぬ。皆<sup>みながわりゆう</sup>川流という古流な揉み方

で一二度やらせれば大抵の胃病は根治出来る。安<sup>やすいそっけん</sup>井息軒も大変この<sup>あんまじゅつ</sup>按摩術

を愛していた。坂<sup>さかもとりょうま</sup>本竜馬のような豪傑でも時々は治療をうけたと云うから、早

速<sup>かみねぎし</sup>上根岸まで出掛けて揉まして見た。ところが骨を揉まなければ<sup>も</sup>癒らぬとか、臓

腑の位置を一度<sup>てんとう</sup>顛倒しなければ根治がしにくいとかいって、それはそれは残酷な揉み

方をやる。後で身体が綿のようになって<sup>こんすいびょう</sup>昏睡病にかかったような心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりどぼりと音がして大水でも出たよ

うに思われて終夜眠れなかった。B氏は<sup>おうかくまく</sup>横膈膜で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやって御覧という。これも多少やったが何となく

ふくちゅう腹中が不安で困る。それに時々思い出したように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横膈膜が気になって本を読む事も文章をかく



事も出来ぬ。美学者の迷亭がこの体を見て、産氣のついた男じゃあるまいし止す

がよいと冷かしたからこの頃は廢してしまった。C先生は蕎麦を食ったらよかろうと云う

から、早速かけともりをかわるがわる食ったが、これは腹が下るばかりで何等の功能も  
なかつた。余は年来の胃弱を直すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべて駄目で

ある。ただ昨夜寒月と傾けた三杯の正宗はたしかに利目がある。これからは毎晩二三  
杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球のように間断なく変化し

ている。何をやっても永持のしない男である。その上日記の上で胃病をこんなに心配

している癖に、表面は大に瘦我慢をするからおかしい。せんだってその友人で

なにがし某という学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡と自己の

罪惡の結果にはほかならないと云う議論をした。大分研究したものと見えて、条理が

めいせき明晰で秩序が整然として立派な説であつた。氣の毒ながらうちの主人などは到底これ

を反駁するほどの頭腦も學問もないのである。しかし自分が胃病で苦しんでいる際

だから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思つた者と見えて、「君の説は  
面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃  
弱も名譽であると云つたような、見当違ひの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃

弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けたので主人は

もくねん黙然としていた。かくのごとく虚榮心に富んでいるもののはやはり胃弱でない方

がよいと見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよつと滑稽だ。考へて見ると今

朝雜煮をあんなにたくさん食つたのも昨夜寒月君と正宗をひっくり返した影響かも  
知れない。吾輩もちよつと雜煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒のように横丁の肴屋まで遠征をする気力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛のように贅沢は無論云える身分でない。従って存外嫌は少ない方だ。小供の食いこぼした麵麩も食うし、餅菓子のもなめる。香の物はすこぶるまずいが経験のため沢庵を二切ばかりやった事がある。食って見ると妙なもので、大抵のものは食える。あれは嫌だ、これは嫌だと云うのは贅沢な我儘で到底教師の家にいる猫などの口にすべきところでない。

フランス  
主人の話しによると仏蘭西にバルザックという小説家があったそうだ。この男が大の贅沢屋で——もつともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いている小説中の人間の名をつけようと思っ

ていろいろつけて見たが、どうしても気に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼ねて自分の苦心している名を目付ようという考えだから往来へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て歩いている。ところがやはり気に入った名がない。友

人を連れて無暗にあるく。友人は訳がわからずにくっ付いて行く。彼等はついに朝から晩まで巴黎を探検した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた。

見るとその看板にマーカスという名がかいてある。バルザックは手を拍って「これだこれだこれに限る。マーカスは好い名じゃないか。マーカスの上へZという頭文字をつける、すると申し分のない名が出来る。Zでなくてはいかん。Z. Marcus は実にうまい。どう

も自分で作った名はうまくつけたつもりでも何となく故意とらしいところがあって面白くない。ようやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しが

いちんちパリ  
ったというが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理を探険しなくてはならぬよう

てすう  
では随分手数のかかる話だ。贅沢もこのくらい出来れば結構なものだが吾輩のように  
かきてき  
牡蠣的主人を持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何でもいい、食べさえすれば、

ぞうに  
という気になるのも境遇のしからしむるところであろう。だから今雑煮が食いたくなっ  
たのも決して贅沢の結果ではない、何でも食える時に食っておこうという考から、主人の  
あま  
食い剩した雑煮がもしや台所に残ってはいはすまいかと思出したからである。……台所  
へ廻って見る。

こうちやく  
今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着している。白状するが餅

ぺん  
というものは今まで一辺も口に入れた事がない。見るとうまそうにもあるし、また少し

きび か  
は気味がわるくもある。前足で上にかかっている菜っ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の

うわかわ か おはち  
上皮が引き掛ってねばねばする。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時のよう

におい  
な香がする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。

おさん  
御三は暮も春も同じような顔をして羽根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしゃ  
る兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年までは餅という

せつな  
ものの味を知らずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那に猫ながら一の真理を感  
得した。「得難き機会はずべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云

わんてい  
うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。否椀底の様子を熟視すればするほど

きび  
気味が悪くなって、食うのが厭になったのである。この時もし御三でも勝手口を開けたな

おしげ  
ら、奥の小供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、吾輩は惜気もなく椀を見棄て  
たろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮ばなかったろう。ところが誰も来ない、いく  
らしていても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は

のぞ  
椀の中を覗き込みながら、早く誰か来てくれればいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底へ落す

いっすん  
ようにして、あぐりと餅の角を一 寸ばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付

か  
いたのだから、大抵なものなら噛み切れる訳だが、驚いた！ もうよかろうと思って歯を

ぺん  
引こうとすると引けない。もう一 辺噛み直そうとすると動きがとれない。餅は魔物だな

かん あせ  
と 疝 づいた時はすでに遅かった。沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦慮するたびにぶくぶく深く沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動かなくなる。歯答えはあるが、歯答えがあるだけでどうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、なるほどどうまい事をいったものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を

じんみらいざいかた ごはんもん  
割るごとく 尽 未 来 際 方 のつく期はあるまいと思われた。この 煩 悶 の際吾

ほうちやく  
輩は覚えぬ第二の真理に 逢 着 した。「すべての動物は直覚的に事物の適不適を予知

ごう  
す」真理はすでに二つまで発明したが、餅がくっ付いているので 毫 も愉快を感じない。

おさん  
歯が餅の肉に吸収されて、抜けるように痛い。早く食い切って逃げないと 御 三 が来る。

か きよく  
小供の唱歌もやんだようだ、きっと台所へ馳け出して来るに相違ない。煩悶の 極

しっぽ  
尻 尾 をぐるぐる振って見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝かしたりしたが駄目で

しっぽ  
ある。考えて見ると耳と尻 尾 は餅と何等の関係もない。要するに振り損の、立て損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。ようやくの事これは前足の助けを借りて餅

な な  
を払い落すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周囲を撫で廻す。撫でたくらい

ひだ のば  
で割り切れる訳のものではない。今度は 左 りの方を 伸 して口を中心として急劇に円を

かく まじな しんぼう かんじん  
割 して見る。そんな 呪 いで魔は落ちない。 辛 防 が 肝 心 だと思って左右

かわ がわ

交る 交るに動かしたがやはり依然として齒は餅の中にぶら下っている。ええ面倒だと

両足を一度に使う。すると不思議な事にこの時だけは <sup>あとあし</sup>後足 二本で立つ事が出来た。何だか猫でないような感じがする。猫であろうが、あるまいがこうなった日にゃあ構うもの

<sup>か</sup>か、何でも餅の魔が落ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中引っ掻き廻す。前足の運動が猛烈なのでややともすると中心を失って倒れかかる。倒れかかるたびに後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる訳にも行かぬので、台所中あちら、こちら

<sup>た</sup>と飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起っていられたものだと思う。第三の真理

<sup>ばくち げんぜん のぞ あた な</sup>が 驀 地に 現 前 する。「危きに 臨 めば平常なし 能 わざるところのものを為し能

<sup>これ てんゆう さいわい う</sup>う。之を天祐 という」 幸 に天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戦って

<sup>けわい</sup>いと、何だか足音がして奥より人が来るような気合である。ここで人に来られては大

<sup>やつき</sup>変だと思って、いよいよ躍 起 となって台所をかけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている」と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽

<sup>や ちりめん</sup>根も羽子板も打ち遣って勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は 縮 緬 の紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書齋から出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがや

みそうになったら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といったので <sup>きょうらん</sup>狂 瀾

<sup>きとう だいぶ</sup>を 既 倒 に何とかするという勢でまた大変笑われた。人間の同情に乏しい実行も 大 分

<sup>けんもん うら</sup>けんもん 見 聞 したが、この時ほど 恨 めしく感じた事はなかった。ついに天祐もどっかへ消え

<sup>う よ ばい</sup>う 失せて、在来の通り四つ 這 になって、眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとってやれ」と主人が御三に命ずる。御三はもっと踊らせようじゃありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、

殺してまで見る気はないのでだまっている。「取ってやらんと死んでしまう、早くとって

やれ」と主人は再び下女を <sup>かえり</sup> 顧 <sup>おさん</sup> みる。御三は御馳走を半分食べかけて夢から起された

時のように、気のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。 <sup>かんげつ</sup> 寒月君じゃないが前歯がみんな折れるかと思った。どうも痛い痛くないのって、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を <sup>なさ</sup>

情け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が「すべての安楽は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はす

で <sup>はい</sup> に奥座敷へ這入ってしまった。

こんな失敗をした時には内にて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。

<sup>か</sup> いっその事気を易えて新道の <sup>にげんきん</sup> 二絃琴の御師匠さんの <sup>とこ</sup> 所の <sup>みけこ</sup> 三毛子でも訪問しよう

と台所から裏へ出た。三毛子はこの近辺で有名な <sup>びぼうか</sup> 美貌家である。吾輩は猫には相違ない

が物の <sup>なさ</sup> 情けは一通り心得ている。うちで主人の <sup>にが</sup> 苦い顔を見たり、御三の <sup>けんつく</sup> 険突を

<sup>すぐ</sup> 食って気分が <sup>ほうゆう</sup> 勝れん時は必ずこの異性の <sup>もと</sup> 朋友の <sup>もと</sup> 許を訪問していろいろな話をす

る。すると、いつの間にか心が <sup>ま</sup> 晴 <sup>せいせい</sup> 々して今までの心配も苦労も何もかも忘れて、生れ

変ったような心持になる。女性の影響というものは実に <sup>ばくだい</sup> 莫大なものだ。杉垣の隙から、

<sup>えんがわ</sup> いるかなと思って見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく <sup>えんがわ</sup> 椽側に坐っている。その背中丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線之美を尽している。

<sup>しっぽ</sup> 尻尾の曲がり加減、足の折り具合、 <sup>ものう</sup> 物憂げに耳をちょいちょい振る <sup>けしき</sup> 景色なども

<sup>どうてい</sup> 到底形容が出来ん。ことによく日の当る所に暖かそうに、 <sup>ひん</sup> 品よく <sup>ひか</sup> 控えているも

のだから、身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、 <sup>びろうど</sup> 天鷲毛を <sup>あざむ</sup> 欺くほどの <sup>なめ</sup> 滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。吾輩

<sup>こうこつ</sup> はしばらく <sup>なが</sup> 恍惚として眺めていたが、やがて我に帰ると同時に、低い声で「三毛子

さん三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちゃらちゃらと鳴る。おや正月になったら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心している間に、吾輩の傍に來て「あら先生、おめでとう」と尾を左りへ振る。

ねこぞく  
吾等猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は

前回断わった通りまだ名はないのであるが、教師の家にいるものだから三毛子だけは尊

敬して先生先生と喋ってくれる。吾輩も先生と云われて満更悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしている。「やあおめでとう、大層立派に御化粧が出来ましたね」「え

え去年の暮御師匠さんに買って頂いたの、宜いでしょう」とちゃらちゃら鳴らして見

せる。「なるほど善い音ですな、吾輩などは生れてから、そんな立派なものを見た事がない

ですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちゃらちゃら鳴らす。「いい音でしょう、あたし嬉しいわ」とちゃらちゃらちゃらちゃら続け様に鳴らす。「あなたのうち

の御師匠さんは大変あなたを可愛がっていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗に

きんせんも  
欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪気なものである「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だって笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑える

ものが無いように思っているのは間違いである。吾輩が笑うのは鼻の孔を三角にしてのどぼとけ咽喉を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所

の御主人は何ですか」「あら御主人だって、妙なね。御師匠さんだわ。二絃琴

の御師匠さんよ」「それは吾輩も知っていますがね。その御身分は何なんです。いずれ昔しは立派な方なんでしょうな」「ええ

ま  
君を待つ間の姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾き出す。「<sup>ひ</sup>宜い声でしょう」と三毛子は自慢する。

「<sup>い</sup>宜いようだが、吾輩にはよくわからん。全体何というものですか」「あれ？ あれは何とかってものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きているくらいだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ」

と返事をした。<sup>ま</sup>少し間が抜けたようだが別に名答も出て来なかったから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かったんだって。いつでもそうおっしゃるの」「へえ元は何

だったんです」「何でも <sup>てんしょういん</sup>天 璋 院 様 の <sup>ごゆうひつ</sup>御 祐 筆 の妹の御嫁に行った先きの御っ

<sup>おい</sup>かさんの 甥 の娘なんだって」「何ですって？」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいった……」「なるほど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……」「あらそうじゃないの、天璋院様の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました天璋院様のでしょうか」「ええ」「御祐筆のでしょうか」「そうよ」「御嫁に行った」「妹の御嫁に行ったですよ」「そ

<sup>い</sup>うそう間違った。妹の御嫁に入った先きの」「御っかさんの甥の娘なんですとさ」「御っかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分ったでしょう」「いいえ。何だか混雑して要領を

<sup>つま</sup>得ないですよ。詰 るところ天璋院様の何になるんですか」「あなたもよっぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御っかさんの甥の娘なんだって、

<sup>さ</sup>先っきっから言ってるんじゃないありませんか」「それはすっかり分っているんですがね」「それが分りさえすればいいんでしょう」「ええ」と仕方がないから降参をした。吾々は時と

<sup>うそ つ</sup>すると理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある。

<sup>うち</sup>障子の 中 <sup>ね</sup>で二絃琴の音がぱったりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」

と呼ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっしゃるから、私 <sup>あた</sup>し帰るわ、よくって？」わるいと云ったって仕方がない。「それじゃまた遊びにいらっしやい」と鈴をちゃらちゃら鳴らして庭先までかけて行ったが急に戻って来て「あなた大変色が悪くっ

<sup>ぞうに</sup>てよ。どうかしやしなくって」と心配そうに問いかける。まさか 雑 煮 を食って踊りを踊ったとも云われないから「何別段の事もありますが、少し考え事をしたら頭痛がしてね。



あなたと話しでもしたら直るだろうと思って実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事

になさいまし。さようなら」少しは名残り惜し気に見えた。これで雑煮の元気もさっぱり

と回復した。いい心持になった。帰りに例の茶園を通り抜けようと思ってしもばしら

と融けかかったのを踏みつけながら建仁寺の崩れから顔を出すとまた車屋の黒が

枯菊の上に背を山にして欠伸をしている。近頃は黒を見て恐怖するような吾輩ではない

が、話しをされると面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。黒の性質として他

己れを軽侮したと認むるや否や決して黙っていない。「おい、名なしの権兵衛、

近頃じゃ乙う高く留ってるじゃあねえか。いくら教師の飯を食ったって、そんな高慢ち

きな面らあするねえ。人つけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名になったのを、まだ知らん

と見える。説明してやりたいが到底分る奴ではないから、まず一応の挨拶をして出来

得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。「いや黒君おめでとう。

あいかわらず不相変元気がいいね」と尻尾を立てて左へくると廻す。黒は尻尾を立てた

おめでてえ方だろう。気をつけろい、この吹い子の向う面め」吹い子の向うづらとい

う句は罵詈の言語であるようだが、吾輩には了解が出来なかった。「ちょっと何がうが

吹い子の向うづらと云うのはどう云う意味かね」「へん、手めえが悪体をつかれてる

癖に、その訳を聞きゃ世話あねえ、だから正月野郎だって事よ」正月野郎は詩的である

と聞いておきたいが、聞いたって明瞭な答弁は得られぬに極まっているから、面と対

ったまま無言で立っておった。いささか手持無沙汰の <sup>てい</sup>体 である。すると突然黒のうちの

<sup>かみ</sup>神 さんが大きな声を張り揚げて「おや棚へ上げて置いた <sup>しゃけ</sup>鮭 がない。大変だ。またあ

の黒の <sup>ちきしょう</sup>畜 生 が取ったんだよ。ほんとに憎らしい猫だっちゃありゃあしない。今に帰

って来たら、どうするか見ていやがれ」と怒鳴る。 <sup>どな</sup>初 <sup>はつはる</sup>春 の <sup>のどか</sup>長 閑 な空気を無遠慮に

震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を <sup>みよ</sup>大 <sup>おおい</sup>に <sup>ぞくりょう</sup>俗 了 してしまう。黒は怒鳴るなら、

怒鳴りただけ怒鳴っていると云わぬばかりに横着な顔をして、四角な <sup>あご</sup>顎 を前へ出しなが  
ら、あれを聞いたかと合図をする。今までは黒との応対で気がつかなかったが、見ると  
彼の足の下には一切れ二銭三厘に相当する鮭の骨が泥だらけになって転がっている。「君

<sup>あいかわらず</sup>不 相 変 やってるな」と今までの行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黒はそ  
のくらいな事ではなかなか機嫌を直さない。「何がやってるでえ、この野郎。しゃけの一

切や二切で相変らずたあ何だ。人を見縊びた事をいうねえ。 <sup>みく</sup>は <sup>はばか</sup>ばか りながら車屋の黒だ

あ」と腕まくりの代りに右の前足を逆かに肩の <sup>さ</sup>辺 <sup>へん</sup>まで搔き上げた。「君が黒君だと云う  
事は、始めから知ってるさ」「知ってるのに、相変らずやってるたあ何だ。何だてえ事よ」

と熱いのを <sup>しき</sup>頻 りに吹き懸ける。人間なら <sup>むなぐら</sup>胸 倉 をとられて小突き廻されるところであ

る。少々 <sup>へきえき</sup>辟 易 して内心困った事になったなと思っていると、再び例の神さんの大声が

聞える。「ちょいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよこの人あ。牛肉を一 <sup>きん</sup>斤  
すぐ持って来るんだよ。いいかい、分ったかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛

肉注文の音が <sup>しりん</sup>四 隣 の <sup>せきばく</sup>寂 寞 を破る。「へん年に一遍牛肉を <sup>あつら</sup>詠 えると思って、い  
やに大きな声を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終えねえ

<sup>あま</sup>阿 魔 だ」と黒は <sup>あざけ</sup>嘲 りながら四つ足を <sup>ふんば</sup>踏 張 る。吾輩は挨拶のしようもないから黙っ  
て見ている。「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取っと

あつら  
きゃ、今に食ってやらあ」と自分のために 誂 えたもののごとくいう。「今度は本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を帰そうとする。「御めっちの知った事じゃね

え。黙っている。うるせえや」と云いながら突然 後 足 で 霜 柱 の 崩 れた奴を

あ ま  
吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚ろいて、からだの泥を払っている間に黒は垣

くぐ ぎゅう ねらい  
根を 潜 って、どこかへ姿を隠した。大方西川の 牛 を 覘 に行ったものであろう。

うち  
家へ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人の笑い声さえ陽気に聞える。はてな

あが そば  
と明け放した椽側から 上 って主人の 傍 へ寄って見ると見馴れぬ客が来ている。頭を奇

もめん こくら はかま しごく  
麗に分けて、木綿の紋付の羽織に小倉の袴を着けて至極真面目そうな

しよせいてい しゅんけいぬ まきたばこ  
書生体の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗りの巻煙草

おちとうふうくん そろ  
入れと並んで越智東風君を紹介致候水島寒月という名刺があるので、この客の

しゅかく  
名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。主客の対話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事に関してらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いっしょに来いとおっしゃるので」と客は落ちついて

ひるめし  
云う。「何ですか、その西洋料理へ行って 午 飯 を食うのについて趣向があるというの

つ  
ですか」と主人は茶を続き足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その

かた  
時は私にも分らなかったんですが、いずれあの方の事ですから、何か面白い種があるの  
だろうと思ひまして……」「いっしょに行きましたか、なるほど」「ところが驚いたので

ひざ たた  
す」主人はそれ見たかと云わぬばかりに、膝の上に乗った吾輩の頭をぼかと叩く。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事なんでしょう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サルト事件を思い出す。「へへー。君何か変わったものを食おうじゃない

こんだて  
かとおっしゃるので」「何を食いました」「まず 献 立 を見ながらいろいろ料理につい

あつ  
での御話しがありました」「詭 ちえない前にですか」「ええ」「それから」「それから

ひね  
首を捻 ねってボーイの方を御覧になって、どうも変わったものもないようだなおっしゃると

かも いかか  
ボーイは負けぬ気で 鴨 のロースか小牛のチャップなどは如何 ですかと云うと、先生は、そ

つきなみ  
んな月 並 を食いにわざわざここまで来やしないとおっしゃるんで、ボーイは月並という  
意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていましたよ」「そうですね」「それから

フランス イギリス てんめいちょう  
私の方を御向きになって、君 仏 蘭 西 や 英 吉 利 へ行くと随分 天 明 調 や

まんようちょう お  
万 葉 調 が食えるのだが、日本じゃどこへ行ったって版で圧したようで、どうも

はい だいきえん かた  
西洋料理へ這入る気がしないと云うような 大 気 で——全体あの方 は洋行なすつ  
た事があるのですかな」「何迷亭が洋行なんかするものですか、そりゃ金もあり、時もあり、  
行こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、

しやれ  
過去に見立てた 酒 落 なんでしょう」と主人は自分ながらうまい事を言ったつもりで誘い

ま  
出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですね、私はまたいつの間に洋行  
なされたかと思って、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たようになめくじの

かえる  
ソップの御話や 蛙 のシチュの形容をなさるものですから」「そりゃ誰かに聞いたんで

かびん  
しょう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花 瓶 の水

けしき  
仙を眺める。少しく残念の 気 色 にも取られる。「じゃ趣向というのは、それなんですわ」  
と主人が念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」

はさ  
と主人は好奇的な感投詞を 挟 む。「それから、とてもなめくじや蛙は食おうっても食え  
やしないから、まあトチメンボーくらいなところで負けとく事にしようじゃないか君と御  
相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、と行ってしまっ  
たので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」「ええ全く妙なのですが、先生があまり真面

そこつ わ  
目だものですから、つい気がつきませんでした」とあたかも主人に向って 麁 忽 を詫びて

いるように見える。「それからどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向

同情を表しておらん。「それからボイにおいトチメンバーを二人前持って来いという

と、ボイがメンチボーですかと聞き直しましたが、先生はますます真面目な<sup>まじめ かお</sup>貌でメンチボーじゃないトチメンバーだと訂正されました。「なあ。そのトチメンバーという料理は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしいとは思いましたがいかにも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらっしゃるし、ことにその時は洋行なすったものと信じ切っていたものですから、私も口を添えてトチメンバーだトチメンバーだとボイに教え

てやりました」「ボイはどうしました」「ボイがね、今考えると実に<sup>こっけい</sup>滑稽なんですがね、しばらく思案してはなはだ御気の毒様ですが今日はトチメンバーは

おあいにくさま<sup>おふたりまえ</sup>御生憎様でメンチボーなら御二人前すぐに出来ますと云うと、先生は非常に

残念な様子で、それじゃせつかくここまで来た<sup>かい</sup>甲斐がない。どうかトチメンバーを都合

して食わせてもらう<sup>わけ</sup>訳には行くまいかと、ボイに二十銭銀貨をやられると、ボイはそれではともかくも料理番と相談して参りましょうと奥へ行きましたよ」「大変トチメンバー

が食いたかったと見えますね」「しばらくしてボイが出て来て<sup>まこと</sup>真に御生憎で、

おあつらえ<sup>おあつらえ</sup>御誂ならこしらえますが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待って食って行こうじゃないかと云いな

がらポケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹かし始められたので、<sup>わたく</sup>私しも仕方が

ないから、<sup>ふところ</sup>懐から日本新聞を出して読み出しました、するとボイはまた奥へ相談に

行きましたよ」「いやに<sup>てすう</sup>手数がかかりますな」と主人は戦争の通信を読むくらいの意気込

で席を<sup>すす</sup>前める。「するとボイがまた出て来て、近頃はトチメンバーの材料が払底で亀屋へ行っても横浜の十五番へ行っても買われませんから当分の間は御生憎様でと気の毒そうに云うと、先生はそりゃ困ったな、せつかく来たのになあと私の方を御覧になってしきり

に繰り返さるので、私も黙っている訳にも参りませんから、<sup>いかん</sup>どうも遺憾ですな、遺憾

きわま

極 るですなと調子を合せたのです」「ごもつともで」と主人が賛成する。何がごもつともだか吾輩にはわからん。「するとボイも気の毒だと見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますってんでしょ。先生が材料は何を使うかねと問われるとボイはへへへと笑って返事をしないんです。材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボイはへえさようで、それだものだから近頃は横浜へ行っても買われませんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」「アハハハそれが落ちなんですか、こりゃ面白い」と主人

ひざ

はいつになく大きな声で笑う。膝 が揺れて吾輩は落ちかかる。主人はそれにも

とんじゃく

かか

頓 着 なく笑う。アンドレア・デル・サルトに 罹 ったのは自分一人でないと言う事を知ったので急に愉快になったものと見える。「それから二人で表へ出ると、どうだ君

とちめんぼう

うまく行ったろう、椽 面 坊 を種に使ったところが面白かろうと大得意なんです。敬

ひるめし

服の至りですと云って御別れしたようなもののは実は 午 飯 の時刻が延びたので大変空腹になって弱りましたよ」「それは御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表す。こ

のど

しゅかく

れには吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉を鳴らす音が 主 客 の耳に入る。

東風君は冷めなくなった茶をぐっと飲み干して「実は今日参りましたのは、少々先生に

す

御願があつて参ったので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに済ます。「御

さ

承知の通り、文学美術が好きなものですから……」「結構で」と油を注す。「同志だけがよりましてせんだつてから朗読会というのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります」

ふし

しいか

るい

「ちょっと伺っておきますが、朗読会と云うと何か節奏でも附けて、詩 歌 文章の 類 を読むように聞えますが、一体どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、

おいおい

はくらくてん

追 々 は同人の創作なんかもやるつもりです」「古人の作というと 白 楽 天 の

びわこう

ぶそん

琵琶行 のようなものででもあるんですか」「いいえ」「蕪 村 の

しゅんぷうばていきよく

春 風 馬 堤 曲 の種類ですか」「いいえ」「それじゃ、どんなものをやったん

「せんだつては近松の心 中 物 をやりました」「近松？ あの浄 瑠 璃

の近松ですか」近松に二人はない。近松といえば戯曲家の近松に 極 っている。それを聞

き直す主人はよほど愚だと思つてゐると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を 叮 嚙 に撫

でている。藪 睨 みから惚れられたと自認している人間もある世の中だからこのくらい

の誤 謬 は決して驚くに足らんと撫でらるるがままにすましていた。「ええ」と答えて

とうふうし うかが 東 風 子 は主人の顔色を 窺 う。「それじゃ一人で朗読するのですか、または役割

を極めてやるんですか」「役を極めて 懸 合 でやつて見ました。その主意はなるべく作中の人物に同情を持ってその性格を發揮するのを第一として、それに手真似や身振りを添

えます。白 はなるべくその時代の人を写し出すのが主で、御嬢さんでも丁 稚 でも、その人物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居見たようなものじゃありません

か」「ええ衣 装 と書 割 がないくらいなものですな」「失礼ながらうまく行きますか」「まあ第一回としては成功した方だと思います」「それでこの前やつたとおっしゃ

る心中物という」と「その、船頭が御客を乗せて 芳 原 へ行く 所 なんて」「大変な幕

をやりましたな」と教師だけにちょっと首を 傾 ける。鼻から吹き出した日の出の煙り

が耳を 掠 めて顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大変な事もないんです。登場の人物

は御客と、船頭と、花 魁 と仲 居 と遣 手 と見 番 だけですから」と東風子は

平気なものである。主人は花魁という名をきいてちょっと 苦 い顔をしたが、仲居、遣手、見番という術語について明瞭の智識がなかったと見えてまず質問を呈出した。「仲居とい

うのは 娼 家 の下婢にあたるものですか」「まだよく研究はして見ませんが仲居は茶

屋の下女で、遣手というのが 女 部 屋 の 助 役 見たようなものだろうと思います」

東風子はさっき、その人物が出て来るように 仮色<sup>こわいろ</sup>を使うと云った癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらしい。「なるほど仲居は茶屋に 隷属<sup>れいぞく</sup>するもので、遣手は娼家<sup>さ</sup>きが起臥する者ですね。次に見番と云うのは人間ですかまたは一定の場所を指すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を 司<sup>つかさ</sup>どっているんですかな」「さあそこまではまだ調べが届いておりません。その内調べて見ましょう」これで懸合をやった日には 頓珍漢<sup>とんちんかん</sup>なものが出来るだろうと吾輩は主人の顔をちょっと見上げた。主人は存外真面目である。「それで朗読家は君のほかかにどんな人が加わったんですか」「いろいろおりました。花魁が法学士のK君でしたが、口髯<sup>くちひげ</sup>を生やして、女の甘ったるいせりふを使かうのですからちょっと妙でした。それにその花魁<sup>つ</sup>が 癩<sup>しやく</sup>を起すところがあるので……」「朗読でも癩を起さなくっちゃ、いけないんですか」と主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですから」と東風子はどこまでも文芸家の気である。「うまく癩が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癩だけは第一回には、ちと無理でした」と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞く。「私<sup>わたく</sup>しは船頭<sup>つと</sup>」「へー、君が船頭」君にして船頭が 務まるものなら僕にも見番くらいはやれると云ったような語気を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癩に障った様子もない。やはり沈着な口調で「その船頭でせつかくの催しも 竜頭蛇尾<sup>りゅうとうだび</sup>に終わりました。実は会場の隣りに女学生が四五人下宿してしましてね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があるという事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴していたものと見えます。私<sup>わたく</sup>しが船頭の 仮色<sup>こわいろ</sup>を使って、ようやく調子づいてこれなら大丈夫と思ひて得意にやっていると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでしょう、今まで耐らえていた女学生が一度に



わっと笑いだしたものですから、驚ろいた事も驚ろいたし、極<sup>きま</sup>りが悪るい事も悪るいし、

それで腰を折られてから、どうしても後<sup>あと</sup>がつつけられないので、とうとうそれ限りで散会しました」第一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろう

のどぼとけ  
と想像すると笑わずにはいられない。覚えず咽<sup>のど</sup>喉<sup>ぼとけ</sup>仏<sup>のど</sup>がごろごろ鳴る。主人はいよいよ

な  
柔かに頭を撫<sup>な</sup>でてくれる。人を笑って可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味な

ところもある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々<sup>ちょうじ</sup>弔<sup>ちょうじ</sup>詞<sup>じ</sup>を述べている。「第二回からは、もっと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癩<sup>か</sup>なんか起せませんよ」と消極的の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癩<sup>か</sup>などは起していただくんでもよしい

ので、ここに賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事そうに小<sup>こぎくばん</sup>菊<sup>くばん</sup>版<sup>ばん</sup>の帳面

を出す。「これへどうか御署名の上御<sup>ごなついでん</sup>捺<sup>な</sup>印<sup>いん</sup>を願いたいので」と帳面を主人の膝<sup>ひざ</sup>の

前へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文学士連中の名が行儀よく勢<sup>せいぞろい</sup>揃<sup>ぞろい</sup>をしている。「はあ賛成員にならん事ありませんが、どんな義務があるのですか」と

かきせんせい けねん てい  
牡蠣<sup>かき</sup>先生<sup>せんせい</sup>は掛<sup>け</sup>念<sup>ねん</sup>の体<sup>てい</sup>に見える。「義務と申して別段是非願う事もないくらいで、

ただ御名前だけを御記入下さって賛成の意さえ御<sup>おひょう</sup>表<sup>ひょう</sup>し被<sup>くださ</sup>下<sup>くださ</sup>ればそれで結構です」

はい  
「そんなら這入ります」と義務のかからぬ事を知るや否や主人は急に気軽になる。責任さ

むほん  
えないと云う事が分っておれば謀<sup>むほん</sup>叛<sup>ほん</sup>の連判状へでも名を書き入れますと云う顔付をする。

のみならず  
加<sup>つら</sup>之<sup>つら</sup>こう知名の学者が名前を列<sup>つら</sup>ねている中に姓名だけでも入籍させるのは、今までこんな事に出合った事のない主人にとっては無上の光栄であるから返事の勢のあるのも無理はない。「ちょっと失敬」と主人は書齋へ印をとりに入る。吾輩はぼたりと畳の

ほおば  
上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬<sup>ほおば</sup>張<sup>ば</sup>る。モゴモゴしばら

ぞうに  
くは苦しそうである。吾輩は今朝の雑煮事件をちょっと思い出す。主人が書斎から

いんぎょう  
印形を持って出て来た時は、東風子の胃の中にカステラが落ちついた時であった。

ひときれ  
主人は菓子皿のカステラが一切足りなくなった事には気が着かぬらしい。もし気がつく  
とすれば第一に疑われるものは吾輩であろう。

ま  
東風子が帰ってから、主人が書斎に入って机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手  
紙が来ている。

ぎょけいめでたくもうしおさめそろ  
「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生の手紙に真面目なのはほとんどないの

そのご れんちやく これなく かた えんしょ  
で、この間などは「其後別に恋着せる婦人も無之、いづ方より艶書

ま ま まか そろ はばかりながら  
も参らず、先ず先ず無事に消光罷り在り候間、乍憚御休心

くださるべくそろ くら  
「可被下候」と云うのが来たくらいである。それに較べるとこの年始状は例外  
にも世間的である。

たく もっ  
「一寸参堂仕り度候えども、大兄の消極主義に反して、出来得る限り積極的方針を以

みぞう そろ  
て、此千古未曾有の新年を迎える計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、御推察願上候……」

なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙がしいに違いないと、主人は腹の中で  
迷亭君に同意する。

ぬす ごちそう  
「昨日は一刻のひまを偷み、東風子にトチメンボアの御馳走を致さんと存じ

そろところ あいにく た いかん ぞんじそろ  
候処、生憎材料払底の為め其意を果さず、遺憾千万に存候。……」

そろそろ例の通りになって来たと主人は無言で微笑する。

かるたかい  
「明日は某男爵の歌留多会、明後日は審美学協会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、  
其又明日は……」

うるさいなど、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、会の連発にて当分の間は、のべつ幕無

しに出勤致し候<sup>そろ</sup> 為め、不<sup>やむをえず</sup>得<sup>はいすう</sup>已<sup>か</sup>賀状を以て拜<sup>そろだん</sup>趨<sup>段</sup>の礼に易え候

あしからずごゆうじょくだされたく<sup>そろ</sup>  
不<sup>悪</sup>悪<sup>御宥恕被下度候</sup>。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し<sup>たき</sup>度<sup>そろ</sup>心得に御座<sup>かんちゅう</sup>候。寒<sup>厨</sup>厨<sup>何の珍</sup>

これなく<sup>そうら</sup>そうら<sup>おりそろ</sup>  
味も無<sup>之</sup>之<sup>候</sup>えども、せめてはトチメンボーでもと只今より心掛<sup>居</sup>候。……」

まだトチメンボーを振り廻している。失敬など主人はちょっとむっとする。

しか<sup>かねそろ</sup>  
「然<sup>し</sup>トチメンボーは近頃材料払底の為め、ことに依ると間に合い<sup>兼</sup>候も計りがた

きにつき、其節は<sup>くじゃく</sup>くじゃく<sup>した</sup>した<sup>もうすべくそろ</sup>  
孔<sup>雀</sup>雀<sup>の</sup>の<sup>舌</sup>舌<sup>でも御風味に入れ可申候</sup>。……」

りょうてんびん<sup>両</sup>  
両<sup>天</sup>天<sup>秤</sup>秤<sup>をかけたなど主人は、あとが読みたくなる。</sup>

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の<sup>なか</sup>半<sup>けんたん</sup>ばにも足らぬ程故<sup>健</sup>健<sup>啖</sup>なる

いぶくろ<sup>み</sup>  
大兄の胃<sup>囊</sup>囊<sup>を充たす為には……」</sup>

うそをつけと主人は打ち遣ったようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる<sup>べか</sup>可<sup>ぞんじそろ</sup>らずと<sup>存</sup>候。然る所孔雀は動物園、

浅草花屋敷等には、ちらほら見受け候えども、普通の鳥屋<sup>など</sup>杯<sup>いっこう</sup>には一向見当り

もうさず<sup>くしん</sup>くしん<sup>このこと</sup>このこと<sup>そろ</sup>  
不<sup>申</sup>申<sup>、苦心此事に御座候</sup>。……」

独りで勝手に苦心しているのじゃないかと主人は<sup>ごう</sup>毫<sup>も</sup>も感謝の意を表さない。

「此孔雀の舌の料理は<sup>おうせきローマ</sup>往<sup>みぎ</sup>昔<sup>そろ</sup>羅馬全盛の<sup>砌</sup>砌<sup>り</sup>、一時非常に流行致し候ものにて、

ごうしゃ<sup>しよくし</sup>  
豪<sup>奢</sup>奢<sup>風流の極度と平生よりひそかに</sup>食<sup>指</sup>指<sup>を動かし</sup>居<sup>おりそろ</sup>候次第

ごりょうさつくださるべく<sup>そろ</sup>  
御<sup>諒</sup>諒<sup>察可被下候</sup>。……」

何が御諒察だ、馬鹿など主人はすこぶる冷淡である。

くだ  
「降って十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と

あいなりおりそろ じょこう  
相成居候。レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し

そろせつ たし そろよう いたしそろ  
候節も慥か孔雀を使用致し候様記憶致候。有名なるレンブラントが

えが そろ まま よこた そろ  
画き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる儘卓上に横わり居り候……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如

あいな ひつじょう  
く胃弱と相成るは必定……」

大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

ローマじん そろよし  
「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度も三

ほうじょう しょくせん  
度も方丈の食饌に就き候えば如何なる健胃の人にてても消化機能に不調を

かも  
醸すべく、従って自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

しか ぜいたく  
「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼等は不相当に多量の滋

むさぼ  
味を食ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し

そろ  
候……」

はてねと主人は急に熱心になる。

いたしそろ よくぜん えんか  
「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嚙下せるも

ことごと おうと そろ いないかくせい のち  
のを悉く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後

つ あ ふうこう おわ これ としゅつ  
又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出

いたしそろ むさ そうろう ごう  
致候。かくの如くすれば好物は食ばり次第食り候も毫も内臓の諸機関

に障害を生ぜず、一挙兩得とは此等の事を <sup>もうすべき</sup> 可 <sup>いたしそ</sup> 申 <sup>か</sup> と愚考 <sup>致</sup> 候 ……」

なるほど一挙兩得に相違ない。主人は <sup>うらや</sup> 羨 <sup>まし</sup> ますような顔をする。

「廿世紀の <sup>こんにち</sup> 今 <sup>ひんぱん</sup> 日 交通の 頻 繁、宴会の増加は申す迄もなく、軍国多事征露の第二

年とも相成 <sup>そろ</sup> 候 <sup>折</sup> 柄、吾人戦勝国の国民は、是非共 <sup>ローマ</sup> 羅 馬 <sup>なら</sup> 人に 倣 <sup>って</sup> 此入浴嘔吐

の術を研究せざるべからざる機会に到着致し <sup>そろ</sup> 候 <sup>事</sup> と自信 <sup>致</sup> 候。左もなくば

せつかく <sup>ことごと</sup> 切 <sup>角</sup> の大国民も近き将来に於て <sup>ひそ</sup> 悉 <sup>く</sup> 大兄の如く胃病患者と相成る事と <sup>ひそ</sup> 窃 <sup>か</sup>

に心痛 <sup>まか</sup> 罷 <sup>り</sup> あり <sup>そろ</sup> 候 ……」

また大兄のごとくか、<sup>しゃく</sup> 癩 <sup>さわ</sup> に 障 <sup>る</sup> 男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を

明治の社会に応用致し候わば <sup>いわばわざわい</sup> 所謂 <sup>みほう</sup> 禍 <sup>くどく</sup> を未 <sup>萌</sup> に防ぐの功 <sup>徳</sup> にも相成り平素

いつらく <sup>ほしいまま</sup> 逸 <sup>そ</sup> 樂 <sup>を</sup> 擅 <sup>に</sup> 致し <sup>候</sup> 御恩返も相立ち <sup>もうすべく</sup> 可 <sup>ぞんじそ</sup> 申 <sup>と</sup> 存 <sup>候</sup> ……」

何だか妙だなと首を <sup>ひね</sup> 捻 <sup>る</sup>。

「依 <sup>よっ</sup> て此間 <sup>じゅう</sup> 中 <sup>しょうりょう</sup> よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を <sup>渉</sup> 獵 <sup>致し</sup>

おりそうら <sup>いま</sup> 居 <sup>たんしょ</sup> 候 <sup>みいだ</sup> えども未 <sup>だ</sup> に発見の <sup>端</sup> 緒 <sup>をも</sup> 見 <sup>出し</sup> 得ざるは残念の至に

<sup>ぞんじそ</sup> 存 <sup>候</sup>。然し御存じの如く小生は一度思い立ち <sup>そろ</sup> 候 <sup>こと</sup> 事 <sup>は</sup> 成功するまでは決して中

絶 <sup>つかまつ</sup> 仕 <sup>ら</sup> ざる性質に候えば嘔 <sup>おうとほう</sup> 吐 <sup>そ</sup> 方 <sup>を</sup> 再興致し <sup>候</sup> も遠からぬうちと信じ居り

<sup>そろ</sup> 候 <sup>次第</sup>。右は発見次第御報道 <sup>つかまつるべく</sup> 可 <sup>そ</sup> 仕 <sup>候</sup> につき、左様御承知

くださるべく <sup>そ</sup> 候 <sup>ついで</sup>。就 <sup>そ</sup> てはさきに申上 <sup>候</sup> トチメンバー及び孔雀の舌の御馳走も

あいなるべく たく さ もちろん  
可 相 成 は右発見後に致し 度、左すれば小生の都合は 勿 論、既に胃弱に悩み

居らるる大兄の為にも 御 便 宜 かと 存 候 草々不備」

かつ しまい  
何だとうとう 担 がれたのか、あまり書き方が真面目なものだからつい 仕 舞 まで本気

にして読んでいた。新年 勿 々 こんな 悪 戯 をやる迷亭はよっぽどひま人だなあと  
主人は笑いながら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。 白 磁 の水仙がだんだん しまい 凋 んで、

あおじく びん  
青 軸 の梅が 瓶 ながらだんだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつまらん

と思っ、一 両 度 三毛子を訪問して見たが逢われない。最初は留守だと思ったが、

へんめ  
二 返 目 には病気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話し

をしているのを 手 水 鉢 の葉蘭の影に隠れて聞いているところであった。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ 何 なん にも食べません、あったかにして

おこた  
御火燵に寝かしておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て 羨 うらや ますくもあるが、一方では 己 おの が愛している猫  
がかくまで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身 体 からだ が疲れるばかりだからね」「そうでございま

すとも、私共でさえ一日 御 ごぜん をいただかないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。実際この 家 うち では下女より  
猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行ったのかい」「ええ、あの御医者はよっぽど妙でございますよ。私

が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪でも引いたのかって私の 脈 みやく をとろうとするんで

しょう。いえ病人は私ではございません。これですって三毛を膝の上へ直したら、にやに

や笑いながら、猫の病気はわしにも分らん、<sup>ほう</sup> 抛 <sup>なお</sup> っておいたら今に 癒 <sup>る</sup> だろうってんで

すもの、あんまり <sup>ひど</sup> 苛 <sup>い</sup> じゃございませんか。腹が立ったから、それじゃ見ていただかな

くってもようございますこれでも大事の猫なんですって、三毛を <sup>ふ</sup> 懐 <sup>ころ</sup> へ入れてさっさと帰って参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は <sup>とう</sup> 底 <sup>てい</sup> 吾輩のうちなどで聞かれる言葉ではない。やはり

てんしょういん <sup>が</sup> 天 <sup>が</sup> 璋 <sup>が</sup> 院 <sup>が</sup> 様の何とかの何とかでなくては使えない、はなはだ雅であると感じた。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつと風邪を引いて咽喉が痛むんでございま

すよ。風邪を引くと、どなたでも <sup>お</sup> 咳 <sup>せき</sup> が出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿 <sup>てい</sup> 町 <sup>ねい</sup> 噂 <sup>な</sup> 言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」「ほんとにこの頃のように肺病だのペス

トだのって新しい病気ばかり <sup>ふ</sup> 殖 <sup>え</sup> た日にゃ油断も隙もなりやしませんのでございますよ」

「旧幕時代に無い者に <sup>ろ</sup> 碌 <sup>く</sup> な者はないから御前も気をつけないといかんよ」「そうでござい  
いましょうかねえ」

下女は <sup>お</sup> 大 <sup>おい</sup> に感動している。

「風邪を引くといってもあまり出あるきもしないようだったに……」「いえね、あなた、  
それが近頃は悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達?」「ええあの表通りの教師の <sup>と</sup> 所 <sup>こ</sup> にいる薄ぎたない <sup>お</sup> 雄 <sup>ね</sup> 猫 <sup>こ</sup> でございますよ」

「教師と云うのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「ええ顔を洗うたんびに <sup>が</sup> 鵝 <sup>ちょう</sup> 鳥

<sup>し</sup> が絞め殺されるような声を出す人でござんす」

うがい  
鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽を

ようじ のど  
やる時、楊枝で咽喉をつつ突いて妙な声は無遠慮に出す癖がある。機嫌の悪い時はやけにがあがあやる、機嫌の好い時は元気づいてなおがあがあやる。つまり機嫌のいい時も悪い時も休みなく勢よくがあがあやる。細君の話しではここへ引越す前まではこんな癖はな

きょう  
かったそうだが、ある時ふとやり出してから今日まで一日もやめた事がないという。ちょっと厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫などにはとうてい到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとなお耳を立ててあとを聞く。

まじな ごいっしんまえ ちゅうげん  
「あんな声を出して何の呪いになるか知らん。御維新前は中間でもぞうり草履取りでも相応の作法は心得たもので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなかったよ」「そうでございましょうともねえ」

むやみ  
下女は無暗に感服しては、無暗にねえを使用する。

のらねこ たた  
「あんな主人を持っている猫だから、どうせ野良猫さ、今度来たら少し叩いておやり」「叩いてやりますとも、三毛の病気になったのも全くあいつの御蔭に相違ございませんも

かたき  
の、きっと讐をとってやります」

えんざい こうむ めった ちよ  
飛んだ冤罪を蒙ったものだ。こいつは滅多に近か寄れないと三毛子にはとうとう逢わずに帰った。

うち ちんぎん てい と  
帰って見ると主人は書斎の中で何か沈吟の体で筆を執っている。

にげんきん ところ おこ  
二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云って、わざわざ年始状をよこした迷亭君がひょうぜん飄然とやって来る。「何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちょっとうまい文章だと思ったから今翻訳して見ようと思って



ね」と主人は重たそうに口を開く。「文章？ 誰れの文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも随分善いのあるからなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあったのか」と問う。「第二読本」と主人は落ちつきはらって答える。「第二読本？ 第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している名文と云うのは第二読本の 中<sup>うち</sup>にあると云う事さ」

「<sup>じょうだん</sup>冗談<sup>かたき きわ</sup>じゃない。孔雀の舌の 讐<sup>を</sup> 際<sup>どい</sup>どころで討とうと云う寸法なんだろう」「僕は君のような法螺吹きとは違うさ」と <sup>くちひげ ひね</sup>口髯<sup>を</sup> 捻<sup>る</sup>。泰然たるものだ。

<sup>むか</sup>「昔<sup>まご</sup> しある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかといったら、山陽が馬子の書いた借金の催促状を示して近来の名文はまずこれでしょうと云ったという話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷亭先生は <sup>ほんけ</sup>審美眼の本家の<sup>だいとうこくし ゆいかい</sup>ような事を云う。主人は禅坊主が大燈国師の遺誠<sup>を</sup>を読む

ような声を出して読み始める。「<sup>きよじん いんりよく</sup>巨人、引力」「何だいその巨人引力と云うのは」「巨人引力と云う題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云う名を持っている巨人というつもりさ」「少し無理なつもりだが表題だからまず負けておくと

<sup>そうそう</sup>しよう。それから <sup>ま</sup>早々<sup>を</sup> 本文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」「<sup>ま</sup>雑ぜかえしてはいかんよ」と <sup>あらか</sup>予<sup>じめ</sup>念を押してまた読み始める。

<sup>そと なが</sup>ケートは窓から外面を眺める。<sup>しょうに たま</sup>小児<sup>が</sup> 球<sup>を</sup>を投げて遊んでいる。彼等は高く球を

<sup>なげう</sup>空中に擲つ。球は上へ上へと**のぼる**。しばらくすると落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へと**のみのぼらぬか**とケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力であ

<sup>おの</sup>る。彼は強い。彼は万物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事があろう。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

うま  
「それぎりかい」「むむ、甘いいじゃないか」「いやこれは恐れ入った。飛んだところで

あずか  
トチメンバーの御返礼に預った」「御返礼でもなんでもないさ、実際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。君に

ぎりょう　　こんど　　こんど　　かつ  
してこの伎倆あらんとは、全く此度という今度は担がれたよ、降参降参」と

しやべ　　いっこう  
一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降参させる考えはないさ。ただ面白い文章だと思ったから訳して見たばかりさ」「いや実に面白い。そ

すご  
う来なくっちゃ本ものでない。凄いいものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をやめたから、その代りに文章でもやろうと思ってね」「どうしてえんきんむさべつこくびやくびょうどう  
遠近無差別黒白平等の水彩画の比じゃない。感服の至りだよ」「そ

かんちが  
うほめてくれると僕も乗り気になる」と主人はあくまでも疝違いをしている。

かんげつ　　はい  
ところへ寒月君が先日は失礼しましたと這入って来る。「いや失敬。今大変な名文

たいじ  
を拝聴してトチメンバーの亡魂を退治されたところで」と迷亭先生は訳のわからぬ事を

さ  
ほのめかす。「はあ、そうですか」とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左のみ浮

けしき　　おちとうふう　　あが  
かれた気色もない。「先日は君の紹介で越智東風と云う人が来たよ」「ああ上

おちこち  
りましたか、あの越智東風と云う男は至って正直な男ですが少し変っているところがあるので、あるいは御迷惑かと思いましたが、是非紹介してくれというものですから……」「別

あが  
に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上っても自分の姓名のことについて何か弁じて行きやしませんか」「いいえ、そんな話もなかったようだ」「そうですか、どこへ行って

こうしゃく  
も初対面の人には自分の名前の講釈をするのが癖でしてね」「どんな講釈をするん

こち　　おん  
だい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君は口を入れる。「あの東風と云うのを音で読ま

れると大変気にするので「はてね」と迷亭先生は金唐皮の煙草入から煙草

をつまみ出す。「私わたたくの名は越智東風おちとうふうではありません、越智おちこちですと必ず断

りますよ」「妙だね」と雲井くもいを腹の底まで呑み込む。「それが全く文学熱から来たので、

こちと読むと遠近せいごと云う成語いんになる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うの

が得意なんです。それだから東風こち おんを音で読むと僕がせっかくの苦心を人が買ってくれない  
といって不平を云うのです」「こりゃなるほど変ってる」と迷亭先生は図に乗って腹の

底から雲井あなを鼻の孔とまどまで吐き返す。途中で煙が戸のど迷いをして咽喉の出口へ引きかか

る。先生は煙管きせるを握ってごほんごほんむせと咽び返る。「先日来た時は朗読会で船頭にな  
って女学生に笑われたといていたよ」と主人は笑いながら云う。「うむそれぞれ」と迷

亭先生が煙管きせるで膝頭ひざがしらを叩く。吾輩は陰呑けんのんになったから少しそば傍を離れる。  
「その朗読会さ。せんだってトチメンボーを御馳走した時にね。その話しが出たよ。  
何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、先生にも是非御臨席を  
願いたいって。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこの次

はずっと新しい者を撰えらんで金色夜叉こんじきやしやにしましたと云うから、君にや何の役が当

ってるかと聞いたら私は御宮おみやですと云ったのさ。東風とうふうの御宮は面白かろう。僕は

是非出席して喝采かつさいしようと思ってるよ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方を  
する。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがないから好い。迷亭などととは大

違いだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀くじゃくの舌とトチメンボーの復讐かたきを

一度にとる。迷亭君は気にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳ぎょうとくの俎まないたと  
云う格だからなあ」と笑う。「まずそんなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎と

云う語を主人は解かいさないのであるが、さすが永年教師をして胡魔化ごまかしつけているものだ  
から、こんな時には教場の経験を社交上にも応用するのである。「行徳の俎というのは何

の事ですか」と寒月が真<sup>しんそつ</sup>率に聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の  
帰りがけに買って来て挿<sup>さ</sup>したのだが、よく持つじゃないか」と行徳の俎を無理にねじ伏せ  
る。「暮といえ、去年の暮に僕は実に不思議な経験をしたよ」と迷亭が煙<sup>きせる</sup>管を  
だいかぐら<sup>さき</sup>大神楽のごとく指の尖<sup>たま</sup>で廻わす。「どんな経験か、聞かし玉<sup>たま</sup>え」と主人は行徳  
の俎を遠<sup>うしろ</sup>後に見捨てた気で、ほっと息をつく。迷亭先生の不思議な経験というのを  
聞くと左のごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東<sup>とうふう</sup>風から参堂の上是非文芸上の御高  
話を伺いたいから御在宿を願うと云う先<sup>さぶ</sup>き触れがあつたので、朝から心待ちに待っている  
と先生なかなか来ないやね。昼飯を食ってストーブの前でバリー・ペーンの滑<sup>こっけいもの</sup>稽物  
を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから見ると、年寄だけにいつまでも僕を小  
供のように思っ<sup>た</sup>てね。寒中は夜間外出をするとか、冷水浴もいいがストーブを焚いて室<sup>へや</sup>  
あたた<sup>かぜ</sup>を煖かにしてやらないと風邪を引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど親はあ  
りがたいものだ、他人ではとてもこうはいかないと、呑<sup>のんき</sup>気な僕もその時だけは<sup>おおい</sup>大に  
感動した。それにつけても、こんなにのらくらしては<sup>もったい</sup>勿体ない。何か大著述でも  
して家名を揚げなくてはならん。母の生きているうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生  
あるを知らしめたいと云う気になった。それからなお読んで行くと御前なんぞは実に仕合  
せ者だ。露<sup>ロシア</sup>西亜と戦争が始まって若い人達は大変な辛<sup>しんく</sup>苦<sup>みくに</sup>をして御国のために働らい  
ているのに節<sup>せつきしわす</sup>季師走でもお正月のように気楽に遊んでいると書いてある。——僕はこ  
れでも母の思っ<sup>もつ</sup>てるように遊んじゃいないやね——そのあとへ以て来て、僕の小学校時

ほうゆう  
代の 朋 友 で今度の戦争に出て死んだり負傷したものの名前が列举してあるのさ。その

あじき  
名前を一々読んだ時には何だか世の中が 味 気 なくなって人間もつまらないと云う気が起

しまい わた はつはる おぞうに  
ったよ。一番 仕 舞 にね。私 しも取る年に候えば 初 春 の御 雑 煮 を祝い候も今度  
限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさくさしてしまって早

とうふう  
く 東 風 が来れば好いと思ったが、先生どうしても来ない。そのうちとうとう晩飯にな  
ったから、母へ返事でも書こうと思ってちよいと十二三行かいた。母の手紙は六尺以上も

こうむ き  
あるのだが僕にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内外で御免 蒙 る事に極  
めてあるのさ。すると一日動かずにおったものだから、胃の具合が妙で苦しい。東風が来  
たら待たせておけと云う気になって、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつ

どてさんばんちょう  
になく富士見町の方へは足が向かないで土手 三 番 町 の方へ我れ知らず出てしま

おほり むこ  
った。ちょうどその晩は少し曇って、から風が御 濠 の 向 うから吹き付ける、非常に寒

かぐらざか さみ  
い。神 楽 坂 の方から汽車がヒューと鳴って土手下を通り過ぎる。大変 淋 しい感じ

か めぐ  
がする。暮、戦死、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる馳け 廻 る。よく人

くく  
が首を 縊 ると云うがこんな時にふと誘われて死ぬ気になるのじゃないかと思ひ出す。ち

ま ました  
よいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間にか例の松の 真 下 に来ているのさ」

だんく  
「例の松た、何だい」と主人が 断 句 を投げ入れる。

くびかけ えり  
「首 懸 の松さ」と迷亭は 領 を縮める。

こう だい はもん  
「首懸の松は 鴻 の 台 でしょう」寒月が 波 紋 をひろげる。

こう だい かねかけ くびかけ  
「鴻 の 台 のは 鐘 懸 の松で、土手三番町のは 首 懸 の松さ。なぜこう云う名が

むか くく  
付いたかと云うと、昔 しからの言い伝えで誰でもこの松の下へ来ると首が 縊 りたくな

る。土手の上に松は何十本となくあるが、そら <sup>くびくく</sup> 首 縊 りだと来て見ると必ずこの松へぶ

ら下がっている。年に二三 <sup>べん</sup> 返 はきつとぶら下がっている。どうしても <sup>ほか</sup> 他 の松では死ぬ  
気にならん。見ると、うまい具合に枝が往来の方へ横に出ている。ああ好い枝振りだ。あ  
のままにしておくのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か

来ないかしらと、<sup>あたり</sup> 四 辺 を見渡すと <sup>あいにく</sup> 生 憎 誰も来ない。仕方がない、自分で下ろう

か知らん。いやいや自分が下がっては命がない、<sup>あぶ</sup> 危 ないからよそう。しかし昔の

ギリシャじん <sup>くびくく</sup> 希 臘 人 は宴会の席で <sup>くびくく</sup> 首 縊 りの真似をして余興を添えたと言う話がある。一

人が台の上へ登って縄の結び目へ首を入れる途端に <sup>ほか</sup> 他 のものが台を蹴返す。首を入れた

当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下りるといふ <sup>しゅこう</sup> 趣 向 である。果してそれ  
が事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思つて枝へ手を懸けて見ると好い具合に

しわ <sup>あんばい</sup> 撓 る。撓 り 按 排 が実に美的である。首がかかってふわふわするところを想像して見

ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしようと思つたが、もし <sup>とうふう</sup> 東 風 が来て待っている

と気の毒だと考え出した。それではまず <sup>とうふう</sup> 東 風 に逢つて約束通り話しをして、それから  
出直そうと云う気になつてついうちへ帰つたのさ」

<sup>いち</sup> 「それで 市 が栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ帰つて見ると東風は来ていない。しかし <sup>こんにち</sup> 今日 は <sup>よんどころなきさしつか</sup> 無 抛 処 差 支

<sup>えいじつごめんご</sup> えがあつて出られぬ、いづれ <sup>はがき</sup> 永 日 御 面 晤 を期すといふ <sup>はがき</sup> 端 書 があつたので、やっ

<sup>くく</sup> と安心して、これなら心置きなく首が <sup>くく</sup> 縊 れる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、  
急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

<sup>じ</sup> 「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐<sup>ひも</sup>をひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たった一足違いでねえ君、残念な事をし

たよ。考えると何でもその時は死神<sup>しにがみ</sup>に取り着かれたんだね。ゼームスなどに云わせる

と副意識下の幽冥界<sup>ゆうめいかい</sup>と僕が存在している現実界が一種の因果法によって互に

感<sup>かんのう</sup>応したんだろう。実に不思議な事があるものじゃないか」迷亭はすまし返っている。

主人はまたやられたと思いながら何も云わずに空也餅<sup>くうやもち ほおぼ</sup>を頬張って口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧<sup>かな うつむ</sup>に搔き馴らして、俯向いてにやにや笑っていたが、やがて口を開く。極めて静かな調子である。

「なるほど伺って見ると不思議な事でちょっと有りそうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも疑がう気になりません」

「おや君も首を縊<sup>くく</sup>りたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちょうど明ければ去年の暮の事でしかも先生と同日同刻くらいに起った出来事ですだからなおさら不思議に思われます」

「こりゃ面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家<sup>うち けん</sup>で忘年会兼合奏会がありまして、私もそれへヴァイオリン

を携<sup>たずさ</sup>えて行きました。十五六人令嬢やら令夫人が集ってなかなか盛会で、近来の快事

と思うくらいに万事が整っていました。晩餐<sup>ばんさん</sup>もすみ合奏もすんで四方の話しが出て時

刻も大分遅くなったから、もう暇乞<sup>いとまご</sup>いをして帰ろうかと思っていますと、某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは〇〇子さんの御病気を御承知ですかと小声で聞きますの

で、実はその両三日<sup>りょうさんにちまえ</sup>前に逢った時は平常の通りどこも悪いようには見受けま

せんでしたから、私も驚ろいて精<sup>くわ</sup>しく様子を聞いて見ますと、私<sup>わたく</sup>しの逢ったその晩

うわごと くちばし い  
から急に発熱して、いろいろな 譚 語 を絶間なく 口 走 るそうで、それだけなら宜い  
ですがその譚語のうちに私の名が時々出て来るというのです」

おやす つきなみ  
主人は無論、迷亭先生も「御 安くないね」などという 月 並 は云わず、静肅に謹  
聴している。

はげ  
「医者を呼んで見てもらおうと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が 劇 しいので脳を犯  
すいみんざい  
しているから、もし 睡 眠 剤 が思うように功を奏しないと危険であると云う診断だそ  
うで私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起ったのです。ちょうど夢でうなされる時の  
ような重くるしい感じで周囲の空気が急に固形体になって四方から吾が身を締めつけるご  
とく思われました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあって苦しくてたまらない。あの  
綺麗な、あの快活なあの健康な〇〇子さんが……」

「ちょっと失敬だが待ってくれ給え。さっきから伺っていると〇〇子さんと云うのが二  
へん さしつか うけたま  
返 ばかり聞えるようだが、もし 差 支 えがなければ 承 わりたいね、君」と主  
かえり なまへんじ  
人を 顧みると、主人も「うむ」と 生 返 事 をする。

よ  
「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れませんから 廃 しましょう」

あいあいぜん まいまいぜん  
「すべて 暖 々 然 として 昧 々 然 たるかたで行くつもりかね」

ごくまじめ  
「冷笑なさってはいけません、極 真 面 目 な話しなんですから……とにかくあの婦人が急

ひからくよう  
にそんな病気になった事を考えると、実に 飛 花 落 葉 の感慨で胸が一杯になって、  
そうしん めい  
総 身 の活気が一度にストライキを起したように元気がにわかには減入ってしまいました

そうそう ろうろう かた あずまばし  
て、ただ 踏 々 として 踉 々 という 形 ちで 吾 妻 橋 へきかかったのです。欄

よ まんちょう かんちょう  
干に倚って下を見ると 満 潮 か 干 潮 か分りませんが、黒い水がかたまっていた

はなかわど か  
だ動いているように見えます。花 川 戸 の方から人力車が一台馳けて来て橋の上を通り



ました。その ちょうちん 提 灯 の火を見送っていると、だんだん小さくなって さっぽろ 札 幌 ビールの

処で消えました。私はまた水を見る。すると はる 遙 かの川上の方で私の名を呼ぶ声が聞える

のです。はてな今時分人に呼ばれる訳はないが誰だろうと水の おもて 面 をすかして見ました

が暗くて なん 何 にも分かりません。気のせいに違いない そうそう 早 々 帰ろうと思って一足二足ある

き出すと、また かす 微 かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はまた立ち留って耳を立て

て聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干に つか 捕 まっていながら ひざがしら 膝 頭 ががくが

く ふる 悸 え出したのです。その声は遠くの方か、川の底から出るようですが まぎ 紛 れもない  
〇〇子の声なんでしょう。私は覚えず「はい」と返事をしたのです。その返事が大きか  
ったものですから静かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、はっと周囲を見渡し

ました。人も犬も月も なん 何 にも見えません。その時に私はこの「夜」の中に巻き込まれ  
て、あの声の出る所へ行きたいと云う気がむらむらと起ったのです。〇〇子の声がまた苦

しように、訴えるように、救を求めるように私の耳を刺し通したので、今度は「今 すぐ 直 に

行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が なみ 浪 の

も 下から無理に洩れて来るように思われましてね。この水の下だなど思いながら私はとうと  
う欄干の上に乗りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめているとまた

憐れな声が糸のように浮いて来る。ここだと思って力を込めて いったん 一 反 飛び上がっておい  
て、そして小石か何ぞのように未練なく落ちてしまいました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかった」と迷亭が自分の鼻の頭をちょいとつまむ。

あと 「飛び込んだ 後 は気が遠くなって、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒

ぬ ところは あるが、どこも濡れた 所 も何もない、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛  
び込んだはずだが実に不思議だ。こりゃ変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きました

ね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違っ  
て橋の真中へ飛び下りたので、  
その時は実に残念でした。前と後ろの間違<sup>うし</sup>だけであの声の出る所へ行く事が出来なかつ

たのです」寒月はにやにや笑いながら例のごとく羽織の紐<sup>ひも</sup>を荷<sup>にやっかい</sup>厄<sup>介</sup>にして  
「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の  
材料になるね。人間の感応と云う題で写生文にしたらきっと文壇を驚かすよ。……そして  
その〇〇子さんの病気はどうなったかね」と迷亭先生が追窮する。

にさんちまえ  
「二三日<sup>にさんちまえ</sup>前年始に行きましたら、門の内<sup>にさんちまえ</sup>で下女と羽根を突いていましたから病気は全  
快したものと見えます」

てい  
主人は最前から沈思の体<sup>てい</sup>であったが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と  
負けぬ気を出す。

「あるって、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

あんごう くうやもち  
「みんな去年の暮は暗<sup>あんごう</sup>合<sup>くうやもち</sup>で妙ですな」と寒月が笑う。欠けた前歯のうちに空<sup>くうやもち</sup>也<sup>餅</sup>  
餅<sup>餅</sup>が着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

はつか せつつだいじょう  
「いや日は違うようだ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに撰<sup>はつか</sup>津<sup>せつつだいじょう</sup>大<sup>撰</sup>  
掾<sup>掾</sup>を聞かしてくれろと云うから、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物は何だと聞い

うなぎだに  
たら、細君が新聞を参考して鰻<sup>うなぎだに</sup>谷<sup>だ</sup>だと云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうと

ほりかわ  
その日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持って来て今日は堀<sup>ほりかわ</sup>川<sup>川</sup>だからい

み  
いでしよう<sup>み</sup>と云う。堀川は三味線もので賑やかなばかりで実がないからよそうと云うと、  
細君は不平な顔をして引き下がった。その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂

せつつ  
です、私は是非撰<sup>せつつ</sup>津<sup>撰</sup>の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌いかわらない

い てづめ  
が、私に聞かせるのだからいっしょに行つて下すつても宜いでしょうと手<sup>い</sup>詰<sup>てづめ</sup>の談判をす

よ  
る。御前がそんなに行きたいなら行つても宜<sup>よ</sup>ろしい、しかし一世一代と云うので大変な大

とうていつつか はい きづか  
入だから 到 底 突 懸 けに行つたって這入れる 氣 遣 いはない。元来ああ云う場所へ

あ  
行くには茶屋と云うものが在つてそれと交渉して相当の席を予約するのが正当の手続きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、残念だが今日はやめようと

すご  
云うと、細君は 凄 い眼付をして、私は女ですからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、大原のお母あさんも、鈴木の子代さんも正当の手続きを踏まないで立派に聞いて

てすう  
来たんですから、いくらあなたが教師だからって、そう 手 数 のかかる見物をしないで済みましよう、あなたはあんまりだと泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくって電車で行こうと降参をすると、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくっちゃいけません、そんなぐずぐずしてはいられませんと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行って場所をとらなくちゃ這入れないからですと鈴木の子代さんから教えられた通りを述べる。それじゃ四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不

おかん  
思議な事にはその時から急に 悪 寒 がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はびんぴんしていらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に

いしゆく

萎 縮 する感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなった」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

かな いつも  
「ああ困つた事になった。細君が年に一度の願だから是非 叶 えてやりたい。平 生 叱り

しんしょう  
つけたり、口を聞かなかつたり、身 上 の苦勞をさせたり、小供の世話をさせたりす

さいそうしんすい むく  
るばかりで何一つ 洒 掃 薪 水 の勞に 酬 いた事はない。今日は幸い時間もある、

のうちゅう

とぶつ  
囊 中 には四五枚の 堵 物 もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだろう、僕も連れて行ってやりたい。是非連れて行ってやりたいがこう悪寒がして眼がくらんでは

くつぬぎ  
電車へ乗るどころか、靴 脱 へ降りる事も出来ない。ああ気の毒だ気の毒だと思つとなお悪寒がしてなお眼がくらんでくる。早く医者に見てもらつて服薬でもしたら四時前には

全快するだろうと、それから細君と相談をして甘木<sup>あまき</sup>医学士を迎いにやると生憎<sup>あいにく</sup>

ゆうべ  
昨夜<sup>ゆうべ</sup>が当番でまだ大学から帰らない。二時頃には御帰りになりますから、帰り次第すぐ

上げますと云う返事である。困ったなあ、今<sup>きょうにんすい</sup>杏仁水<sup>きょうにんすい</sup>でも飲めば四時前にはきつ

なお<sup>なほ</sup>きま  
と癒<sup>なほ</sup>るに極<sup>きま</sup>っているのだが、運の悪い時には何事も思うように行かんもので、たまさ

か妻君の喜ぶ笑顔を見て楽もうと云う予算も、がらりと外<sup>はず</sup>れそうになって来る。細君は

うら<sup>うら</sup>とうてい  
恨<sup>うら</sup>めしい顔付をして、到底<sup>とうてい</sup>いらっしゃれませんかと聞く。行くよ必ず行くよ。四時  
までにはきつと直って見せるから安心しているがいい。早く顔でも洗って着物でも着換えて  
待っているがいい、と口では云ったようなものの胸中は無限の感慨である。悪寒はます

はげ<sup>はげ</sup>りこう  
ます劇<sup>はげ</sup>しくなる、眼はいよいよぐらぐらする。もしや四時までに全快して約束を履<sup>りこう</sup>行

する事が出来なかったら、気の狭い女の事だから何をするかも知れない。情<sup>なさ</sup>けない仕儀

になって来た。どうしたら善かろう。万一の事を考えると今の内に<sup>ういてんぺん</sup>有為<sup>ういてんぺん</sup>転変<sup>ういてんぺん</sup>の理、

しょうじゃひつめつ  
生<sup>しょう</sup>者<sup>じゃ</sup>必<sup>ひつ</sup>滅<sup>めつ</sup>の道を説き聞かして、もしもの変が起った時取り乱さないくらいの

おっと<sup>おっと</sup>つま<sup>つま</sup>すみや  
覚悟をさせるのも、夫<sup>おっと</sup>の妻<sup>つま</sup>に対する義務ではあるまいかと考え出した。僕は速<sup>すみや</sup>

かに細君を書斎へ呼んだよ。呼んで御前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and

the lip と云う西洋の<sup>ことわざ</sup>諺<sup>ことわざ</sup> くらいは心得ているだろうと聞くと、そんな横文字なんか

誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使って

よる<sup>よる</sup>  
人にかからうのだから、宜<sup>よる</sup>しゅうございます、どうせ英語なんかは出来ないんですから、

ヤソがっこう  
そんなに英語が御好きなら、なぜ耶蘇<sup>ヤソ</sup>学校<sup>がっこう</sup>の卒業生かなんかをお貰いなさらなかった

けんまく  
んです。あなたくらい冷酷な人はありはしないと非常な<sup>けんまく</sup>権<sup>けんまく</sup>幕<sup>けんまく</sup>なんで、僕もせつかくの  
計画の腰を折られてしまった。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意で使った訳じゃ

さい  
ない。全く 妻 を愛する至情から出たので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬が

おかん めまい  
ない。それにさっきからの 悪寒 と 眩暈 で少し脳が乱れていたところへもって来て、早

せ  
く有為転変、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急ぎ込んだものだから、つい細君の英語を知らないと言う事を忘れて、何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えるとこれは

わ  
僕が悪るい、全く手落ちであった。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐ

もろはだ  
らぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行って 両 肌 を脱いで御化粧をして、

たんす ふぜい  
箆 笥 から着物を出して着換える。もういつでも出掛けられますと言う 風情 で待ち構えている。僕は気が気でない。早く甘木君が来てくれれば善いかと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しかない。「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書斎の開

さい ほ  
き戸を明けて顔を出す。自分の 妻 を褒めるのはおかしいようであるが、僕はこの時ほど

みが  
細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脱いで石鹸で 磨 き上げた皮膚がぴかつい

くろちりめん せつつだいじょう  
て 黒 縮 緬 の羽織と反映している。その顔が石鹸と 摂 津 大 掾 を聞こうと云う希望との二つで、有形無形の両方面から輝やいて見える。どうしてもその希望を満足させて出掛けてやろうと云う気になる。それじゃ奮発して行こうかな、と一ぷくふかしているとうまく甘木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が容体をはなすと、甘木先生

なが たた な まぶち  
は僕の舌を 眺 めて、手を握つて、胸を 敲 いて背を撫でて、目 縁 を引つ繰り返して、

ずがいこつ けんのん  
頭 蓋 骨 をさすつて、しばらく考え込んでいる。「どうも少し 陰 呑 のような気がしまして」と僕が云うと、先生は落ちついて、「いえ格別の事もございますまい」と云う。

さしつか  
「あのちょっとくらい外出致しても 差 支 えはございますまいね」と細君が聞く。「さよう」と先生はまた考え込む。「御気分さえ御悪くなければ……」「気分は悪いですよ」

とんぷく すいやく  
と僕がいう。「じゃともかくも 頓 服 と 水 薬 を上げますから」「へえどうか、何

あぶ  
だかちと、 危 ないようになりそうですね」「いや決して御心配になるほどの事じゃござ

いません、神経を御起しになるといけませんよ」と先生が帰る。三時は三十分過ぎた。下

女を薬取りにやる。細君の<sup>か</sup>厳命で馳け出して行って、<sup>か</sup>馳け出して返ってくる。四時十五分  
前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無かった

のに、急に<sup>はきけ</sup>嘔<sup>もよ</sup>気を<sup>すいやく</sup>催<sup>つ</sup>おして来た。細君は水薬を茶碗へ注いで僕の前へ置いてく

れたから、茶碗を取り上げて飲もうとすると、胃の中からげーと云う者が<sup>とっかん</sup>唸<sup>喊</sup>して出

てくる。やむをえず茶碗を下へ置く。細君は「早く御飲みになったら宜いでしょう」と<sup>おの</sup>逼<sup>い</sup>  
<sup>せま</sup>る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思い切って飲んでしまおうとまた茶碗を

唇へつけるとまたゲーが<sup>しゅうねんぶか</sup>執<sup>念</sup>深く妨害をする。飲もうとしては茶碗を置き、飲  
もうとしては茶碗を置いていると茶の間の柱時計がチンチンチンチンと四時を打った。さ  
あ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議

議とはこの事だろう、四時の音と共に吐き気がすっかり留まって水薬が何の苦なしに飲め  
たよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来  
たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当分立つ  
事も出来まいと思った病気がたちまち全快したのは嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行ったのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞  
く。

「行きたかったが四時を過ぎちゃ、<sup>はい</sup>這入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、

やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の義理も立つし、<sup>さい</sup>妻も  
満足したろうに、わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところ  
だったと今でも思うのさ」

<sup>おわ</sup>語り<sup>了</sup>った主人はようやく自分の義務をすましたような風をする。これで兩人に対し  
て顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた歯を出して笑いながら「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な<sup>おっと</sup>夫<sup>夫</sup>を持った妻君は実に仕合せだな」と

ひと<sup>ごと</sup>ごと<sup>せきばら</sup>独り言<sup>咳</sup>のようにいう。障子の蔭でエヘンと云う細君の<sup>咳</sup>払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていたがおかしくも悲しくもなかった。人間  
というものは時間を <sup>つぶ</sup> <sup>し</sup> 潰すために強いて口を運動させて、おかしくもない事を笑ったり、  
面白くもない事を嬉しがったりするほかに能もない者だと思った。吾輩の主人の <sup>わがまま</sup> 我儘  
<sup>へんきょう</sup> 偏狭な事は前から承知していたが、<sup>ふだん</sup> 平常は言葉数を使わないので何だか了解  
しかねる点があるように思われていた。その了解しかねる点に少しは恐しいと云う感じも  
あったが、今の話を聞いてから急に <sup>けいべつ</sup> 軽蔑したくなった。かれはなぜ二人の話しを沈黙  
して聞いていられないのだろう。負けぬ気になって愚にもつかぬ駄弁を <sup>ぐ</sup> <sup>ろう</sup> 弄すれば何の所  
得があるだろう。エピクテタスにそんな事をしろと書いてあるのか知らん。要するに主人  
も寒月も迷亭も <sup>たいへい</sup> <sup>いつみん</sup> 太平の逸民で、彼等は <sup>へちま</sup> <sup>すま</sup> 糸瓜のごとく風に吹かれて超然と澄  
し切っているようなものの、その実はやはり <sup>しゃばけ</sup> <sup>よくけ</sup> 娑婆気もあり慾気もある。競争の念、  
勝とう勝とうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一歩進めば彼等が平  
<sup>ばとう</sup> <sup>ぞっこつども</sup> 常罵倒している俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りであ  
る。ただその言語動作が普通の <sup>はんかつう</sup> <sup>もんき</sup> 半可通のごとく、<sup>がた</sup> 文切り形の厭味を帯びてない  
のはいささかの <sup>とえ</sup> 取り得でもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなくなったので、三毛子の様子でも見て来ようか  
<sup>にげんきん</sup> <sup>かどまつしめかざ</sup> と二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りはすでに取り払われて正  
<sup>は</sup> <sup>はるび</sup> 月も早や十日となったが、うららかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を  
一度に照らして、十坪に足らぬ庭の <sup>おも</sup> <sup>しょうこう</sup> 面も元日の曙光を受けた時より <sup>あざや</sup> 鮮かな活  
<sup>ざぶとん</sup> 気を呈している。椽側に座蒲団が一つあって人影も見えず、障子も立て切っているのは  
御師匠さんは湯にでも行ったのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少し

い けわい  
は宜い方か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合もしないから、泥足のまま

えんがわ あが ねこ  
椽側へ上って座蒲団の真中へ寝転ろんで見るといい心持ちだ。ついうとうとして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。  
「御苦労だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかったのだ。

ぶっしや  
「はい遅くなりまして、仏師屋へ参りましたらちょうど出来上ったところだと申しまして」  
「どれお見せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かばれましょう。金は剥げ

いはい  
る事はあるまいね」「ええ念を押しましたら上等を使ったからこれなら人間の位牌よりも持つと申しておりました。……それから猫誉信女の誉の字は崩した方が

かっこう かく か  
恰好がいいから少し劃を易えたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子を変だと蒲団の上へ立ち上る。チーン  
なむみょうよしんによ なむあみだぶつ  
南無猫誉信女、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

えこう  
「御前も回向をしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と今度は下女の声がする。吾輩は急に  
どうき きぼり  
動悸がして来た。座蒲団の上に立ったまま、木彫の猫のように眼も動かさない。

かぜ  
「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪を引いたんでございましょうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかったかも知れないよ」「一体あの甘木さんが悪  
ひとさま  
うございますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎませあね」「そう人様の事を悪く云う

じゅみょう  
ものではない。これも寿命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

のらねこ むやみ  
「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫が無暗に誘い出したからだ、わたし



ちきしょう  
は思うよ」「ええあの畜生が三毛のかたきでございますよ」

つば  
少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころと唾を呑んで聞いている。話しはしば  
とき  
し途切れる。

はやじに  
「世の中は自由にならん者でう。三毛のような器量よしは早死をするし。不器量な  
野良猫は達者でいたずらをしているし……」「その通りでございますよ。三毛のような可  
ふたり  
愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたって、二人とはおりませんからね」

ふ  
二匹と云う代りに二たりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思ってい  
ねこぞく  
るらしい。そう云えばこの下女の顔は吾等猫属とはなはだ類似している。

のら おあつら  
「出来るものなら三毛の代りに……」「あの教師の所の野良が死ぬと御誂え通りに参  
ったんでございますがねえ」

御誂え通りになっては、ちと困る。死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がな  
ひけしつぼ  
いから好きとも嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺の中へもぐり込んで

ふた  
いたら、下女が吾輩がいるのも知らんで上から蓋をした事があった。その時の苦しさは  
考えても恐しくなるほどであった。白君の説明によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬの

みがわ  
であるそうだ。三毛子の身代りになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては  
死ぬ事が出来ないのなら、誰のためでも死にたくはない。

かいみょう  
「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらったり、戒名をこしらえてもらったのだ

かほうもの  
から心残りはあるまい」「そうでございますとも、全く果報者でございますよ。ただ  
慾を云うとあの坊さんの御経があまり軽少だったようでございますね」「少し短か過ぎた

げっけいじ  
ようだったから、大変御早うございますねと御尋ねをしたら、月桂寺さんは、ええ  
ききめ  
利目のあるところをちよいとやっておきました、なに猫だからあのくらいで充分浄土へ

行かれますとおっしゃったよ」「あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だって浮かばれる事はございませんよ」

吾輩はその後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を途中で

聞き棄てて、布 団 をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を

一度にたてて身 震いをした。その後 二 絃 琴 の御師匠さんの近所へは寄りついた事

がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な 御 回 向 を受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が 慵 うく感ぜらるる。主人に劣らぬほどの

ぶしょうねこ 無 性 猫 となった。主人が書齋にのみ閉じ 籠 っているのを人が失恋だ失恋だと評するの無理はないと思うようになった。

ねずみ 鼠 はまだ取った事がないので、一時は 御 三 から 放 逐 論 さえ 呈 出 された事もあったが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云う事を知っているものだから

吾輩はやはりのらくらしてこの家に起臥している。この点については深く主人の恩を感謝

すると同時にその 活 眼 に対して敬服の意を表するに 躊 躇 しないつもりである。

御三が吾輩を知らずして虐待をするのは別に腹も立たない。今に 左 甚 五 郎 が出

て来て、吾輩の肖像を 楼 門 の柱に 刻 み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顔をカ

ンヴァスの上に 描 くようになったら、彼等 鈍 瞎 漢 は始めて自己の不明を恥ずるであろう。

三

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか 寂 寞 の感はあるが、幸い人間に知己が

出来たのでさほど退屈とも思わぬ。せんだっては主人の <sup>もと</sup>許へ吾輩の写真を送ってくれと  
手紙で依頼した男がある。この間は岡山の名産 <sup>きびだんご</sup>吉備団子をわざわざ吾輩の名宛で届けて  
くれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるるに従って、<sup>おのれ</sup>己が猫である事はよ  
うやく忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来たような心持になって、  
同族を <sup>きゅうごう</sup>糾合して二本足の先生と <sup>しゅう</sup>雌雄を決しようなどと云う量見は昨今のところ  
もうとう毛頭ない。そのみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思ふ折さえあるくらいに  
進化したのはたのもしい。あえて同族を <sup>けいべつ</sup>軽蔑する次第ではない。ただ性情の近きとこ  
ろに向って一身の安きを置くは <sup>いきおい</sup>勢のしからしむるところで、これを変心とか、軽薄  
とか、裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言語を <sup>ろう</sup>弄して人を罵詈するもの  
に限って融通の利かぬ貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や  
黒の事ばかり荷厄介にしている訳には行かん。やはり人間同等の <sup>きぐらい</sup>気位で彼等の思想、  
言行を <sup>ひょうしつ</sup>評隲したくなる。これも無理はあるまい。ただそのくらいな見識を有してい  
る吾輩をやはり一般 <sup>びょうじ</sup>猫児の毛の生えたものくらいに思つて、主人が吾輩に <sup>いちごん</sup>一言  
の挨拶もなく、<sup>きびだんご</sup>吉備団子をわが物顔に喰い尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮  
って送らぬ <sup>ようす</sup>容子だ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の  
見解が自然 <sup>こと</sup>異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすましているの  
だから、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に <sup>のぼ</sup>上りにくい。迷亭、寒月諸先  
生の評判だけで御免 <sup>こうむ</sup>蒙る事に致そう。

今日は上天気の日曜なので、主人はのそのそ書齋から出て来て、吾輩の <sup>そば</sup>傍へ  
 ふですずり <sup>はらばい</sup> はらばい <sup>うな</sup> うな  
 筆 硯 と原稿用紙を並べて 腹 這 になって、しきりに何か 唸 っている。大方草  
 おろ <sup>じよびら</sup> じよびら  
 稿を書き 卸 す 序 開 きとして妙な声を発するのだろうと注目していると、ややしぼら  
 ふでぶと <sup>こういっしゆ</sup> こういっしゆ  
 くして 筆 太 に「香 一」とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一 <sup>炷</sup> 炷  
 とは、主人にしては少し <sup>しゃれ</sup>洒 落 過ぎているがと思う間もなく、彼は香一 <sup>炷</sup> 炷を書き放しにし  
 て、新たに <sup>ぎょう</sup>行 を改めて「さっきから <sup>てんねんこじ</sup>天 然 居 士 の事をかこうと考えている」と筆  
 を走らせた。筆はそれだけではたと留ったぎり動かない。主人は筆を持って首を <sup>ひね</sup>捻 った  
 が別段名案もないものと見えて筆の穂を <sup>な</sup>菅 めだした。唇が真黒になったと見ていると、今  
 度はその下へちよいと丸をかいた。丸の中へ点を二つうって眼をつける。真中へ小鼻の開  
 いた鼻をかいて、真一文字に口を横へ引張った、これでは文章でも俳句でもない。主人も  
 あいそ <sup>ぎょう</sup> 自分で <sup>あいそ</sup>愛 想 が尽きたと見えて、そこそこに顔を塗り消してしまった。主人はまた <sup>ぎょう</sup>行  
 を改める。彼の考によると行さえ改めれば詩か賛か語か録か <sup>なん</sup>何 かななるだろうとただ  
 あて <sup>やきいも</sup> 宛 もなく考えているらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を読み、<sup>やきいも</sup>焼 芋  
 はな <sup>いっきかせい</sup> を食べ、鼻汁を垂らす人である」と言文一致体で <sup>いっきかせい</sup>一 気 呵 成 に書き流した、何となく  
 ごたごたした文章である。それから主人はこれを遠慮なく朗読して、いつになく「ハハハ  
 はな <sup>こく</sup> ハ面白い」と笑ったが「鼻汁を垂らすのは、ちと <sup>こく</sup>酷 だから消そう」とその句だけへ棒を  
 引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な <sup>へいこうせん</sup>併 行 線 を描く、線がほかの  
<sup>ぎょう</sup>ぎょう <sup>は</sup>は  
 行 まで食み出しても構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出来ないと見え  
 て、今度は筆を捨てて <sup>ひげ</sup>髭 <sup>ひね</sup>を 捻 って見る。文章を髭から捻り出して御覧に入れますと云

けんまく さいくん  
う 見 幕 で猛烈に捻ってはねじ上げ、ねじ下ろしているところへ、茶の間から 妻 君

す  
が出て来てぴたりと主人の鼻の先へ坐わる。「あなたちょっと」と呼ぶ。「なんだ」と主

どら たた  
人は水中で銅鑼を叩くような声を出す。返事が気に入らないと見えて妻君はまた「あなた  
ちょっと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐ  
っと抜く。「今月はちっと足りませんが……」「足りんはずはない、医者へも薬礼はすま  
したし、本屋へも先月払ったじゃないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取

なが  
った鼻毛を天下の奇観のごとく眺めている。「それでもあなたが御飯を召し上らんで

パン おた おな いくかん  
麵麩を御食べになったり、ジャムを御舐めになるものですから」「元来ジャムは 幾 缶

い  
舐めたのかい」「今月は八つ入りましたよ」「八つ？ そんなに舐めた覚えはない」「あ  
なたばかりじゃありません、子供も舐めます」「いくら舐めたって五六円くらいなものだ」  
と主人は平気な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が付いているのでぴ

てい  
んと針を立てたごとくに立つ。主人は思わぬ発見をして感じ入った 体 で、ふっと吹いて

ねんちゃくりよく がんこ  
見る。粘 着 力 が強いので決して飛ばない。「いやに頑 固 だな」と主人は一  
生懸命に吹く。「ジャムばかりじゃないんです、ほかに買わなけりゃ、ならない物もあり

おおい けしき みなぎ  
ます」と妻君は 大 に不平な 気 色 を両頬に 漲 らす。「あるかも知れないさ」と

まじ  
主人はまた指を突っ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いのや、黒いのや、種々の色が 交 る中

あ  
に一本真白なのがある。大に驚いた様子で穴の開くほど眺めていた主人は指の股へ挟んだ  
まま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の

しらが  
手を突き戻す。「ちょっと見ろ、鼻毛の 白 髪 だ」と主人は大に感動した様子である。さ

はい  
すがの妻君も笑いながら茶の間へ這入る。経済問題は断念したらしい。主人はまた

てんねんこじ かか  
天 然 居 士 に取り 懸 る。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心と云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿を

あせ てい だそく かつあい  
かこうと 焦る 体 であるがなかなか筆は動かない。「焼芋を食うも 蛇 足 だ、割 愛

しよう」とついにこの句も 抹 殺 する。「香一 炷 もあまり 唐 突 だから已めろ」と

ひっちゅう  
惜気もなく 筆 誅 する。余す所は「天然居士は空間を研究し論語を読む人である」と  
云う一句になってしまった。主人はこれでは何だか簡単過ぎるようだと考えていたが、

おはい ふる  
ええ面倒臭い、文章は 御 廃 しにして、銘だけにしろと、筆を十文字に 揮 って原稿紙の  
上へ下手な文人画の蘭を勢よくかく。せっかくの苦心も一字残らず落第となった。それか

きわ てんねんこじああ  
ら裏を返して「空間に生れ、空間を 究 め、空間に死す。空たり間たり 天 然 居 士 噫」

つら はい うち  
と意味不明な語を 連 ねているところへ例のごとく迷亭が這入って来る。迷亭は人の 家  
も自分の家も同じものと心得ているのか案内も乞わず、ずかずか上ってくる、のみならず

ひょうぜん きがね  
時には勝手口から 飄 然 と舞い込む事もある、心配、遠慮、 気 兼 、苦勞、を生れ  
る時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立ったまま主人に聞く。「そう、いつでも巨人引力ばかり書いて

せん おおげさ  
はおらんさ。天然居士の墓銘を 撰 しているところなんだ」と大 袈 裟 な事を云う。「天

あいかわらずでたらめ  
然居士と云うなあやはり偶然童子のような戒名かね」と迷亭は 不 相 変 出 鱈 目を

けんとう  
云う。「偶然童子と云うのもあるのかい」「なに有りゃしないがまずその 見 当 だろう  
と置いていらあね」「偶然童子と云うのは僕の知ったものじゃないようだが天然居士と云  
うのは、君の知ってる男だぜ」「一体だれが天然居士なんて名を付けてすましているんだ

そろさき  
い」「例の 曾 呂 崎 の事だ。卒業して大学院へ這入って空間論と云う題目で研究していた  
が、あまり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだから  
な」「親友でもいいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を天然居士に変化さ

しよさ  
せたのは一体誰の 所 作 だい」「僕さ、僕がつけてやったんだ。元来坊主のつける戒名ほ

が  
ど俗なものは無いからな」と天然居士はよほど雅な名のように自慢する。迷亭は笑いなが

ぼひめい  
ら「まあその墓 碑 銘と云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、

空間を 究 め、空間に死す。空たり間たり天然居士 噫」と大きな声で読み 上 る。「な

い  
るほどこりゃあ善い、天然居士相当のところだ」主人は嬉しそうに「善いだろう」と云う。

ぼめい たくあんいし ほ ちからいし ほう  
「この墓 銘を 沢 庵 石へ彫り付けて本堂の裏手へ 力 石のように 抛 り出

が  
して置くだね。雅でいいや、天然居士も浮かばれる訳だ」「僕もそうしようと思ってい

しごく  
るのさ」と主人は至 極 真面目に答えたが「僕あちょっと失敬するよ、じき帰るから猫に

でもからかっていてくれ給え」と迷亭の返事も待たず 風 然 と出て行く。

ぶあいそ  
計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無 愛 想な顔もしてられないから、ニャー

あいきょう ま ひざ は あが  
ニャーと 愛 嬌 を振り蒔いて 膝 の上へ這い 上 って見た。すると迷亭は「イヨー

だいぶふと ぶさほう えりがみ つか  
大 分 肥 ったな、どれ」と無 作 法にも吾輩の 襟 髪 を 攫 んで宙へ釣るす。「あ

ねずみ  
と足をこうぶら下げでは、 鼠 は取れそうもない、……どうです奥さんこの猫は鼠を捕

へや  
りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣りの 室 の妻君に話しかける。「鼠ど

おぞうに  
ころじゃございません。御 雑 煮を食べて踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだとこ

あば ちゅうの  
ろで旧悪を 暴 く。吾輩は 宙 乗 りをしながらも少々極りが悪かった。迷亭はまだ吾輩

おろ  
を 卸 してくれない。「なるほど踊りでもおどりそうな顔だ。奥さんこの猫は油断のなら

そうごう むか くさぞうし ねこまた  
ない 相 好 ですね。昔 しの 草 双 紙にある 猫 又 に似ていますよ」と勝手な

さいくん  
事を言いながら、しきりに 細 君 に話しかける。細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて  
座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注ぎ易えて迷亭の前へ出す。「どこへ行ったんですかね」「どこへ参るにも断わって行った事の無い男ですから分りかねますが、大方御医者へでも行ったんでしょう」「甘木さんですか、甘木さんもあんな病人に捕まっちゃ災難ですな」「へえ」と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭

「いっこう一向頓着しない。「近頃はどうぞ、少しは胃の加減が能いんですか」「能いか悪いか頓と分りません、いくら甘木さんにかかったって、あんなにジャムばかり嘗めては胃病の直る訳がないと思います」と細君は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。「そんなにジャムを嘗めるんですかまるで小供のようですね」「ジャムばかりじゃないんで、この頃は胃病の薬だとか云って大根卸しを無暗に嘗めますので……」「驚ろいたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸の中にはジヤスターゼが有るとか云う話を新聞で読んでからです」「なるほどそれでジャムの損害を償おうと云う趣向ですな。なかなか考えていらあハハハハ」と迷亭は細君の訴を聞いて大に愉快なけしき気色である。「この間などは赤ん坊にまで嘗めさせまして……」「ジャムをですか」「い

「いえ大根卸を……あなた。坊や御父様がうまいものをやるからおいでてって、——たまに小供を可愛がってくれるかと思うとそんな馬鹿な事ばかりするんです。にさんちまえたんす二三日前には中の娘を抱いて箆笥の上へあげましてね……」「どう云う趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向なくめに解釈する。「なに趣向も何も有りゃしません、ただその上から飛び下りて見ると云うんですわ、三つや四つの女の子ですもの、そんなおてんばな御転婆な事が出来るはずがないです」「なるほどこりゃ趣向が無さ過ぎましたね。し

かしあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があっちゃ、辛防は出来ませんわ」と細君は大に気焔を揚げる。「まあそんなに不平を云わんでも善いで



さあ。こうやって不足なくその日その日が暮らして行かれれば <sup>じょう ぶん</sup> 上 の 分 ですよ。

くしゃみくん <sup>しよたいむ</sup> 苦 沙 弥 君 などは道楽はせず、服装にも構わず、地味に 世 帯 向 きに出来上った人

がら  
でさあ」と迷亭は 柄 にない説教を陽気な調子でやっている。「ところがあなた大違いで

……」<sup>ひょうぜん</sup> 「何か内々でやりますかね。油断のならない世の中だからね」と 飄 然 とふわ

ふわした返事をする。「ほかの道楽はないですが、<sup>むやみ</sup> 無 暗 に読みもしない本ばかり買いま

してね。それも善い加減に見 <sup>みはか</sup> 計 らって買ってくれると善いんですけど、勝手に丸善へ  
行っちゃ何冊でも取って来て、月末になると知らん顔をしているんですもの、去年の暮な

んか、月々のが <sup>たま</sup> 溜 って大変困りました」「なあに書物なんか取って来るだけ取って来て  
構わんですよ。払いをとりに来たら今にやる今にやると云っていりゃ帰ってしまいまさあ」

「それでも、そういつまでも引張る訳にも参りませんから」と妻君は <sup>ぶぜん</sup> 慥 然 としている。

「それじゃ、訳を話して <sup>しよじゃくひ</sup> 書 籍 費 を削減させるさ」「どうして、そんな <sup>こと</sup> 言 を云っ

たって、なかなか聞くものですか、この間などは貴様は学者の <sup>さい</sup> 妻 にも似合わん、<sup>ごう</sup> 毫 も

<sup>しよじゃく</sup> 書 籍 の価値を解しておらん、<sup>むか</sup> 昔 し <sup>ローマ</sup> 羅 馬 にこう云う話しがある。後学のため聞  
いておくと云うんです」「そりゃ面白い、どんな話しですか」迷亭は乗気になる。細君に

同情を表しているというよりむしろ好奇心に駆られている。「何んでも昔し <sup>ローマ</sup> 羅 馬 に

<sup>たるきん</sup> 樽 金 とか云う王様があつて……」「<sup>たるきん</sup> 樽 金 ？ 樽金はちと妙ですぜ」「私は

<sup>とうじん</sup> 唐 人 の名なんかむずかしくて覚えられませんわ。何でも七代目なんだそうです」「な  
るほど七代目樽金は妙ですな。ふんその七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あな  
たまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知っていらっしゃるなら教えて下さればいいじ  
ゃありませんか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食って掛る。「何冷かすなんて、そんな人

の悪い事をする僕じゃない。ただ七代目樽金は <sup>ふる</sup> 振 ってると思つてね……ええお待ちなさ

ローマ

いよ 羅馬 の七代目の王様ですね、こうっとたしかには覚えていないがタークイン・ゼ・プラウドの事でしょう。まあ誰でもいい、その王様がどうしました」「その王様の所へ一人の女が本を九冊持って来て買ってこれないかと云ったんだそうです」「なるほど」「王様がいくらなら売るといって聞いたら大変な高い事を云うんですって、あまり高いもんだ

から少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて焚いてしまったそうです」「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かほかで見られない事

が書いてあるんですって」「へえー」「王様は九冊が六冊になったから少しは価も減ったろうと思って六冊でいくらだと聞くと、やはり元の通り一文も引かないそうです、それは乱暴だと云うと、その女はまた三冊をとって火にくべたそうです。王様はまだ未練があったと見えて、余った三冊をいくらで売ると聞くと、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になっても代価は、元の通り一厘も引かない、それを引かせようとする、残ってる三冊も火にくべるかも知れないので、王様はどうとう

高い御金を出して焚け 余りの三冊を買ったんですって……どうだこの話で少しは書物

のありがた味が分ったろう、どうだと力味むのですけれど、私にゃ何がありがたいんだか、

まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を 促 がす。さすがの迷亭も

少々窮したと見えて、 袂 からハンケチを出して吾輩をじゃらしていたが「しかし奥さ

ん」と急に何か考えついたように大きな声を出す。「あんなに本を買って 矢 鱈 に詰め込むものだから人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ。この間ある文学雑誌を見

たら 苦 沙 弥 君 の評が出ていましたよ」「ほんとに？」と細君は向き直る。主人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える。「何とかいてあったんです」「なあに二三行ば

かりですがね。苦沙弥君の文は 行 雲 流 水 のごとしとありましたよ」細君は少

しにこにこして「それぎりですか」「その次にね——出ずるかと思えば 忽 ち消え、逝

いては 長 えに帰るを忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞めたんでしょうか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でしょうな」と迷亭は済ましてハンケチを吾

輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方もございますが、よっぽど <sup>へんくつ</sup> 偏屈  
でしてねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなと思って「偏屈は少々偏屈ですね、学問を  
するものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙  
答をする。「せんだってなどは学校から帰ってすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面

<sup>がいとう</sup>  
倒だものですから、あなた <sup>がいとう</sup> 外套も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。

おぜん <sup>こたつやぐら</sup> 御膳を火 <sup>おはち</sup> 燧 <sup>かか</sup> 櫓の上へ乗せまして——私は <sup>かか</sup> 御櫃を抱えて坐っておりました  
がおかしくって……」「何だかハイカラの首実検のようすな。しかしそんなところが苦

<sup>つきなみ</sup> 沙弥君の苦沙弥君たるところで——とにかく <sup>せつ</sup> 月並 <sup>ほ</sup> でない」と切ない褒め方をする。

「月並か月並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、あまり乱暴ですわ」「しかし  
月並より好いですよ」と無暗に加勢すると細君は不満な様子で「一体、月並月並と皆さん  
が、よくおっしゃいますが、どんなのが月並なんです」と開き直って月並の定義を質問す  
る、「月並ですか、月並と云うと——さようちと説明しにくいのですが……」「そんな

<sup>あいまい</sup> 曖昧なものなら月並だって好さそうなものじゃありませんか」と細君は <sup>によにん</sup> 女人一  
流の論理法で詰め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分っています、ただ説明し

にくいだけの事ですあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしょう」と細君は <sup>われ</sup> 我知

<sup>うが</sup>  
らず穿った事を云う。迷亭もこうなると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀と  
なる。「奥さん、月並と云うのはね、まず年は二八か二九からぬと言わず語らず物思いの

<sup>あいだ</sup>  
間に寝転んでいて、この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ

<sup>れんじゅう</sup>  
連中を云うんです」「そんな連中があるでしょうか」と細君は分らんものだから

<sup>いい</sup> 好 <sup>が</sup> 加減な挨拶をする。「何だかごたごたして私には分りませんわ」とついに我を折る。

<sup>ばきん</sup>  
「それじゃ馬琴の胴へメジョオ・ペンデニス <sup>の首をつけて一二年</sup> 欧州の空気で包んでお  
くんですね」「そうすると月並が出来るでしょうか」迷亭は返事をしないで笑っている。

<sup>てすう</sup>  
「何そんな <sup>手数</sup> 数のかかる事をしないで出来ます。中学校の生徒に白木屋の番頭を加え

で二で割ると立派な月並が出来上ります」「そうでしょうか」と細君は首を<sup>ひね</sup>捻ったまま  
なっとく  
納得し兼ねたと云う風情に見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの間にやら帰って来て迷亭の<sup>ま</sup>傍へ坐わる。「まだいる

のかはちと<sup>こく</sup>酷だな、すぐ帰るから待ってい給えと言ったじゃないか」「万事あれなんで

すもの」と細君は迷亭を<sup>かえり</sup>顧みる。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまった  
ぜ」「女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫くらい沈黙を守るといいがな」と主人は吾

輩の頭を撫でてくれる。「君は赤ん坊に<sup>な</sup>大根<sup>だいこおろ</sup>卸しを<sup>な</sup>管めさしたそうだな」「ふむ」

と主人は笑ったが「赤ん坊でも近頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や<sup>から</sup>辛い  
のはどこと聞くときつと舌を出すから妙だ」「まるで犬に芸を仕込む気であるから残酷だ。

<sup>かんげつ</sup>時に寒月はもう来そうなものだな」「寒月が来るのかい」と主人は不審な顔をする。

「来るんだ。午後一時までに<sup>くしゃみ</sup>苦沙弥の家へ来いと<sup>うち</sup>端書を出しておいたから」「人の  
都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」「なあに今日のは  
こっちの趣向じゃない寒月先生自身の要求さ。先生何でも理学協会で演説をするとか云う  
のでね。その稽古をやるから僕に聴いてくれと云うから、そりゃちょうどいい苦沙弥にも

聞かしてやろうと云うのでね。そこで君の<sup>うち</sup>家へ呼ぶ事にしておいたのさ——なあに君は

ひま人だからちょうどいいやね——<sup>さしつか</sup>差支えなんぞある男じゃない、聞かすがいいさ」と

<sup>ひと</sup>迷亭は独りで呑み込んでいる。「物理学の演説なんか僕にゃ分らん」と主人は少々迷亭

<sup>せんだん</sup>の専断を<sup>いきどお</sup>憤ったものごとくに云う。「ところがその問題がマグネ付けられ  
たノズルについてなどと云う乾燥無味なものじゃないんだ。首縊りの力学と云う

だつぞく<sup>ちょうぼん</sup>超凡人演題なのだから傾聴する価値があるさ」「君は首を<sup>くく</sup>縊り<sup>そ</sup>損くな

った男だから傾聴するが好いが僕なんざあ……」「歌舞伎座で<sup>おかん</sup>悪寒がするくらいの人間

だから聞かれないと云う結論は出そうもないぜ」と例のごとく軽口を叩く。妻君はホホと笑って主人を <sup>かえり</sup> 顧 <sup>な</sup> みながら次の間へ退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫でる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であった。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に <sup>えんぜつ</sup> 演 <sup>な</sup> 舌 をするというので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立ての <sup>カラー そび</sup> 白 襟 を <sup>な</sup> 聳 やかして、男振りを二割方上げて、「少し <sup>おく</sup> 後 れまして」と落ちつき払って、挨拶をする。「さっきから二人で大待ちに待ったところなんだ。早速願おう、なあ君」と主人を見る。主人もやむを得ず「う <sup>なまへんじ</sup> む」と生 返 事 をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しましょう」と云う。「いよ一本式にやるのか次には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は独りで騒ぎ立てる。寒月君は <sup>うちがく</sup> 内 隠 <sup>おもむ</sup> しから草稿を取り出して <sup>おさら</sup> 徐 ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願います」と前置をして、いよいよ演舌の御 浚 いを始める。

「罪人を <sup>こうざい</sup> 絞 罪 の刑に処すると云う事は <sup>おも</sup> 重 にアングロサクソン民族間に行われた方法でありまして、それより古代に <sup>さかのぼ</sup> 溯 っ て考えますと <sup>くびくく</sup> 首 縊 りは重に自殺の方法として行われた者であります。猶 <sup>ユダヤじんちゅう</sup> 太 人 中 に在っては罪人を <sup>な</sup> 石 を 抛 げ っ け て 殺 す 習慣であったそうでございます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハンギングなる語は罪人の死体を釣るして野獣または肉食鳥の <sup>えじき</sup> 餌 食 とする意義と認められます。ヘロドタスの説に従って見ますと <sup>ユダヤじん</sup> 猶 太 人 はエジプトを去る以前から <sup>やちゅう</sup> 夜 中 <sup>さら</sup> 死骸を 曝 されることを痛く忌み嫌ったように思われます。エジプト人は罪人の首を斬って胴だけを十 <sup>くぎづ</sup> 字 架 に 釘 付 け にして夜中曝し物にしたそうで御座います。波 <sup>ペルシャじん</sup> 斯 人 は……」「寒月君首縊りと縁がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「これか <sup>はい</sup> ら本論に這入るところですから、少々 <sup>ごしんぼう</sup> 御 辛 防 を願います。……さて波斯人はどうか

はりつけ  
と申しますとこれもやはり処刑には磔を用いたようでございます。但し生きている

はりつ へん  
うちに張付けに致したのか、死んでから釘を打ったものかその辺はちと分りかねま

す……」 「そんな事は分らんでもいいさ」と主人は退屈そうに欠伸をする。「まだいろ  
あくび  
いろ御話し致したい事もございますが、御迷惑であらっしゃいましょうから……」 「あら

くしゃみくん  
っしゃいましょうより、いらっしゃいましょうの方が聞きいいよ、ねえ苦沙弥君」と

とが だて  
また迷亭が答め立をすると主人は「どっちでも同じ事だ」と気のない返事をする。「さ  
ていよいよ本題に入りまして弁じます」 「弁じますなんか講釈師の云い草だ。演舌家はも

ことば ま  
っと上品な詞を使って貰いたいね」と迷亭先生また交ぜ返す。「弁じますが下品なら  
何と云ったらいいでしょう」と寒月君は少々むっとした調子で問いかける。「迷亭のは聴

ま やじうま  
いているのか、交ぜ返しているのか判然しない。寒月君そんな弥次馬に構わず、さっさ  
とやるが好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むっとして弁じまし

ひょうぜん  
たる柳かな、かね」と迷亭はあいかわらず飄然たる事を云う。寒月は思わず吹き出  
す。「真に処刑として絞殺を用いましたのは、私の調べました結果によりますると、オデ

すなわ か  
ィセーの二十二巻目に出ております。即ち彼のテレマカスがペネロピーの十二人の侍

くだ ギリシャご よろ  
女を絞殺するという条りでございます。希臘語で本文を朗読しても宜しゅうご

てら  
ざいますが、ちと銜うような気味にもなりますからやめに致します。四百六十五行から、

うんぬん  
四百七十三行を御覧になると分ります」 「希臘語云々はよした方がいい、さも希臘語  
が出来ますと云わんばかりだ、ねえ苦沙弥君」 「それは僕も賛成だ、そんな物欲しそうな

おくゆか  
事は言わん方が奥床しくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。

りょうにん ごう  
両人は毫も希臘語が読めないのである。「それではこの両三句は今晚抜く事に  
致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、

か たすけ か く  
彼のテレマカスがユーミアス及びフヒリーシャスの 援 を藉りて縄の一端を柱へ 括  
りつけます。そしてその縄の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れて

はじ  
おいて、片方の 端 をぐいと引張って釣し上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋  
のシャツのように女がぶら下ったと見れば好いんだろう」「その通りで、それから第二は

くく  
縄の一端を前のごとく柱へ 括 り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そし

くび  
てその高い縄から何本か別の縄を下げて、それに結び目の輪になったのを付けて女の 頸  
を入れておいて、いざと云う時に女の足台を取りはずすと云う趣向なのです」「たとえて

なわのれん ちょうちんだま けしき  
云うと 縄 暖 簾 の先へ 提 灯 玉 を釣したような 景 色 と思えば間違はあるま  
い」「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすればその

へん  
辺 のところかと思えます。——それでこれから力学的に第一の場合は到底成立すべきも  
のでないと云う事を証拠立てて御覧に入れます」「面白いな」と迷亭が云うと「うん面白  
い」と主人も一致する。

つな  
「まず女が同距離に釣られると仮定します。また一番地面に近い二人の女の首と首を 繫  
いでいる縄は水平と仮定します。そこで  $\alpha_1 \alpha_2 \dots \alpha_6$  を縄が地平線と形づくる

みな  
角度とし、 $T_1 T_2 \dots T_6$  を縄の各部が受ける力と見做し、 $T_7 = X$  は縄のもっとも低い部

もちろん  
分の受ける力とします。Wは 勿 論 女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりま  
したか」

りょうにん  
迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。但しこの大抵と云う度合は 両 人  
が勝手に作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。「さて多角形に関

しも  
する御存じの平均性理論によりますと、 下 のごとく十二の方程式が立ちます。

$T_1 \cos \alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2 \dots (1) T_2 \cos \alpha_2 = T_3 \cos \alpha_3 \dots (2) \dots$ 」 「方程式はそのくらいで沢  
山だろう」と主人は乱暴な事を云う。「実はこの式が演説の首脳なんです」と寒月君は

お  
はなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは逐って何う事にしようじゃないか」

てい  
と迷亭も少々恐縮の体に見受けられる。「この式を略してしまうとせっかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」  
と主人は平気で云う。「それでは仰せに従って、無理ですが略しましょう」「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

こうしゅかすなわ  
「それから英国へ移って論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑はこの時代から行われたものに違いないと思われま

ふたたび  
再度同様の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマ

たとい し  
ンの中には仮令兇漢でも二度絞める法はないと云う句があるのです。まあどっちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。またやり直すと今度は縄が長過ぎて足が地面へ着いたのでやはり死ねなかったのです。とうとう三返目に見物人が手伝

おうじょう  
って往生さしたと云う話しです」「やれやれ」と迷亭はこんなところへくると急に

ぞこな  
元気が出る。「本当に死に損いだな」と主人まで浮かれ出す。「まだ面白い事があり

くく せい いっすん  
ます首を縊ると背が一寸ばかり延びるそうです。これはたしかに医者が計って

くしゃみ  
見たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、どうだい苦沙弥などはちと釣つて貰っちゃあ、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、

せい  
主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背が延びて生き返る事があるだろうか」と聞

きま せきずい  
く。「それは駄目に極っています。釣られて脊髄が延びるからなんで、早く云うと

こわ や  
背が延びると云うより壊れるんですからね」「それじゃ、まあ止めよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはず

ふうらいぼう はさ  
でいたが、迷亭が無暗に風来坊のような珍語を挟むのと、主人が時々遠慮なく



あくび

欠伸をするので、ついに途中でやめて帰ってしまった。その晩は寒月君がいかなる態度

ふる

で、いかなる雄弁を振ったか遠方で起った出来事の事だから吾輩には知れよう訳がない。

にさんち

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃また迷亭先生は例のごとく

くうくう

空々として偶然童子のごとく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、

おちとうふう たかなわじけん

越智東風の高輪事件を聞いたかい」と旅順陥落の号外を知らせに来たほどの

あ

いつも

勢を示す。「知らん、近頃は合わんから」と主人は平生の通り陰気である。「きょうは

とうふうし

その東風子の失策物語を御報道に及ぼうと思って忙しいところをわざわざ来たんだ

ぎょうさん

ふらち

よ」「またそんな仰山な事を云う、君は全体不埒な男だ」「ハハハハハ不埒と

むらち

云わんよりむしろ無埒の方だろう。それだけはちょっと区別しておいて貰わんと名誉に

うそぶ

関係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯いている。純然たる天然居士の再来だ。

とうふうし たかなわせんがくじ

「この前の日曜に東風子が高輪泉岳寺に行ったんだそうだ。この寒いので

いまどき

によせばいいのに——第一今時泉岳寺などへ参るのはさも東京を知らない、

いなかもの

田舎者のようじゃないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める権利はない」「な

まさ

るほど権利は正にない。権利はどうでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見世物があるだろう。君知ってるか」「うんにゃ」「知らない？ だって泉岳寺へ行った事はあるだろう」「いいや」「ない？ こりゃ驚ろいた。道理で大変東風を弁護すると思った。

なさ

つと

江戸っ子が泉岳寺を知らないのは情けない」「知らなくても教師は務まるからな」と

はい

主人はいよいよ天然居士になる。「そりゃ好いが、その展覧場へ東風が這入って見物して

ドイツじん

づれ

いると、そこへ独逸人が夫婦連で来たんだって。それが最初は日本語で東風に何

か質問したそう。ところが先生例の通り独逸語が使って見たくてたまらん男だろう。そ  
ら二口三口べらべらやって見たとき。すると存外うまく出来たんだ——あとで考えるとそ

わざわい もと  
れが 災 の 本 さね」 「それからどうした」と主人はついに釣り込まれる。「独逸人

おおたかげんご まきえ いんろう  
が大 鷹 源 吾 の 蒔 絵 の 印 籠 を見て、これを買いたい売ってくれるだろう

かと聞くんだそう。その時東風の返事が面白いじゃないか、日本人は清廉の 君 子 ばか  
くんし

とうてい だいぶ  
りだから 到 底 駄目だと云ったんだとき。その辺は大 分 景気がよかったが、それか

かつこう  
ら独逸人の方では 恰 好 な通弁を得たつもりでしきりに聞くそう。「何を？」 「それ

がさ、何だか分るくらいなら心配はないんだが、早口で 無 暗 に問い掛けるものだから少  
むやみ

しも要領を得ないのさ。たまに分るかと思うと 鳶 口 や掛矢の事を聞かれる。西洋の鳶  
とびぐち

口や掛矢は先生何と翻訳して善いのか習った事が無いんだから弱わらあね」「もつともだ」  
よ

と主人は教師の身の上に引き 較 べて同情を表す。「ところへ 閑 人 が物珍しそうに  
くら ひまじん

ぼつぼつ集ってくる。仕 舞 には東風と独逸人を四方から取り巻いて見物する。東風は顔  
しまい

を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易えて先生大弱りの 体 さ」 「結局どうなった  
か てい  
んだい」 「仕舞に東風が我慢出来なくなったと見えてさいならと日本語で云ってぐんぐん  
帰って来たそう、さいならは少し変だ君の国ではさよならをさいならと云うかって聞いて  
見たら何やっぱりさよならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにし  
たんだって、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」 「さいならはいいが

ぼうぜん  
西洋人はどうした」 「西洋人はあっけに取られて 茫 然 と見ていたそうだハハハハ面白

いじゃないか」 「別段面白い事もないようだ。それをわざわざ 報 知 に来る君の方がよっ  
しらせ

まきたばこ ひおけ おりから  
ほど面白いぜ」と主人は 巻 煙 草 の灰を 火 桶 の中へはたき落す。折 柄 格子戸の  
ベルが飛び上るほど鳴って「御免なさい」と鋭どい女の音がする。迷亭と主人は思わず顔  
を見合わせて沈黙する。

主人のうちへ女客は稀有だなど見ていると、かの鋭どい声の所有主は 縮 緬 の二枚重  
す はい こ  
ねを畳へ擦り付けながら這入って来る。年は四十の上を少し超したくらいだろう。抜け上  
は ぎわ そび  
った生え 際 から前髪が堤防工事のように高く 聳 えて、少なくとも顔の長さの二分の一  
こうばい  
だけ天に向ってせり出している。眼が切り通しの坂くらいな 勾 配 で、直線に釣るし上  
くじら  
げられて左右に対立する。直線とは 鯨 より細いという形容である。鼻だけは無暗に大  
す  
きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ据え付けたように見える。三坪ほどの小庭へ  
しょうこんしゃ いしどうろう ひと  
招 魂 社 の 石 灯 籠 を移した時のごとく、 独 りで幅を利かしているが、  
かぎばな たび  
何となく落ちつかない。その鼻はいわゆる 鍵 鼻 で、ひと 度 は精一杯高くなって見た  
けんそん  
が、これではあんまりだと中途から 謙 遜 して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れ  
のぞ いちじ  
かかって、下にある唇を 覗 き込んでいる。かく 著 るしい鼻だから、この女が物を言  
うときは口が物を言うと言わんより、鼻が口をきいているとしか思われぬ。吾輩はこの  
はなこ  
偉大なる鼻に敬意を表するため、以来はこの女を称して 鼻 子 鼻子と呼ぶつもりである。  
おすまい ね  
鼻子は先ず初対面の挨拶を終って「どうも結構な御 住 居 ですこと」と座敷中を睨め廻わ  
たばこ  
す。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言ったまま、ぷかぷか 煙 草 をふかす。迷亭は天井を  
あまも もくめ  
見ながら「君、ありゃ雨 洩 りか、板の 木 目 か、妙な模様が出ているぜ」と暗に主人を  
うな  
促 がす。「無論雨の洩りさ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷亭がすまして云う。  
いきどお ていざ  
鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中で 憤 る。しばらくは三人 鼎 坐 のまま無言で  
ある。  
「ちと伺いたい事があって、参ったんですが」と鼻子は再び話の口を切る。「はあ」と主  
人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私はつい御近所で——あの向

かどやしき  
う横丁の角屋敷なんですが」「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理であす

かねだ ひょうさつ  
こには金田と云う標札が出ていますな」と主人はようやく金田の西洋館と、金

田の倉を認識したようだが金田夫人に対する尊敬の度合は前と同様である。「実は宿

が生まして、御話を伺うんですが会社の方が大変忙がしいものですから」と今度は少し利い

たろうという眼付をする。主人は一向動じない。鼻子の先刻からの言葉遣いが初

ぞんざい  
対面の女としてはあまり存在過ぎるのですでに不平なのである。「会社でも一つじゃ  
無いんです、二つも三つも兼ねているんです。それにどの会社でも重役なんで——多分御  
存知でしょうが」これでも恐れ入らぬかと云う顔付をする。元来この主人は博士とか大  
学教授とかいうと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家に対する尊敬の度は極め  
て低い。実業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じておらんでも、

こうむ おぼつか あき  
融通の利かぬ性質として、到底実業家、金満家の恩顧を蒙る事は覚束ないと諦  
らめている。いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込のないと思ひ  
切った人の利害には極めて無頓着である。それだから学者社会を除いて他の方面の事には

うかつ  
極めて迂濶で、ことに実業界などでは、どこに、だれが何をしているか一向知らん。知

ごう あめした  
っても尊敬畏服の念は毫も起らるのである。鼻子の方では天が下の隅にこんな変  
人がやはり日光に照らされて生活していようとは夢にも知らない。今まで世の中の人間に

だいぶ さい  
も大分接して見たが、金田の妻ですと名乗って、急に取扱いの変らない場合はない、  
どこの会へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に金田夫人で通して行かれる、いわ

くすぶ わたしうち  
んやこんな燻り返った老書生においてをやで、私の家は向う横丁の

かどやしき  
角屋敷ですとさえ云えば職業などは聞かぬ先から驚くだろうと予期していたのであ  
る。

むぞうさ  
「金田って人を知ってるか」と主人は無雑作に迷亭に聞く。「知ってるとも、金田さん  
は僕の伯父の友達だ。この間なんざ園遊会へおいでになった」と迷亭は真面目な返事をす

まきやまだんしゃく  
る。「へえ、君の伯父さんてえな誰だい」「牧山男爵さ」と迷亭はいよいよ真面目である。主人が何か云おうとして云わぬ先に、鼻子は急に向き直って迷亭の方を見

おおしまつむぎ こわたりさらさ  
る。迷亭は大島紬に古渡更紗か何か重ねてすましている。「おや、あなたが牧山様の——何でいらっしゃいますか、ちっとも存じませんで、はなはだ失礼を致

やど おうわさ  
しました。牧山様には始終御世話になると、宿で毎々御噂を致しております」と急

ていねい  
に叮嚀な言葉使をして、おまけに御辞儀までする、迷亭は「へええ何、ハハハハ」と

け えんぺん  
笑っている。主人はあっ気にと取られて無言で二人を見ている。「たしか娘の縁辺の事につきましてもいろいろ牧山さまへ御心配を願いましたそうで……」「へえー、そうです

とうとつ たまげ  
か」とこればかりは迷亭にもちと唐突過ぎたと見えてちょっと魂消たような声を出す。「実は方々からくれくれと申し込はございますが、こちらの身分もあるものでござ

めった ところ  
いますから、滅多な所へも片付けられませんので……」「ごもっともで」と迷亭はようやく安心する。「それについて、あなたに伺おうと思って上がったんですがね」と鼻子

ぞんざい みずしまかんげつ  
は主人の方を見て急に存在な言葉に返る。「あなたの所へ水島寒月という

たびたび  
男が度々上がるそうですが、あの人は全体どんな風な人でしょう」「寒月の事を聞いて

なん になが  
て、何にするんです」と主人は苦々しく云う。「やはり御令嬢の御婚儀上の関係で、

せいこう いっぱん き  
寒月君の性行の一斑を御承知になりたいという訳でしょう」と迷亭が気転を利

よろ  
かす。「それが何えれば大変都合が宜しいのでございますが……」「それじゃ、御令嬢を寒月におやりになりたいとおっしゃるんで」「やりたいなんてえんじゃ無いんです」と鼻子は急に主人を参らせる。「ほかにもだんだん口が有るんですから、無理に貰っていたかかないだって困りゃしません」「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好いでしょう」と

やつき  
主人も躍起となる。「しかし御隠しなさる訳もないでしょう」と鼻子も少々喧嘩腰にな

ぎんぎせる ぐんばいうちわ うち  
る。迷亭は双方の間に坐って、銀煙管を軍配団扇のように持って、心の裡

はっけ  
で八 卦 よいやよいやと怒鳴っている。「じゃあ寒月の方で是非貰いたいとでも云ったの  
ですか」と主人が正面から鉄砲を 喰 くら わせる。「貰いたいと云ったんじゃないんですけれ  
ども……」「貰いたいだろうと思っていらっしゃるんですか」と主人はこの婦人鉄砲に限  
さと  
ると 覚 ったらしい。「話しはそんなに運んでるんじゃないありませんが——寒月さんだって  
まんざら  
満 更 嬉しくない事もないでしょう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御令嬢に  
れんちやく けんまく  
恋 着 したというような事でもありますか」あるなら云って見ろと云う 権 幕 で  
そ けんとう  
主人は振り返る。「まあ、そんな 見 当 でしょうね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏  
おもしろげ ぎょうじ いちごん  
しない。今まで 面 白 氣 に 行 司 気取りで見物していた迷亭も鼻子の 一 言 に好  
ちょうはつ きせる  
奇心を 挑 撥 されたものと見えて、煙 管 を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さ  
つ ぶみ ふ  
んに付け 文 でもしたんですか、こりゃ愉快だ、新年になって逸話がまた一つ殖えて話し  
の好材料になる」と一人で喜んでいる。「付け文じゃないんです、もっと烈しいんでさあ、  
おつ  
御二人とも御承知じゃありませんか」と鼻子は 乙 にからまって来る。「君知ってるか」  
ばかげ  
と主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿気た調子で「僕は知らん、知っ  
けんそん おふたりとも  
ていりゃ君だ」とつまらんと 謙 遜 する。「いえ御 両 人 共 御存じの事です  
よ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」と御両人は一度に感じ入る。「御忘れになった  
わた  
ら 私 してから御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏会があつて寒月  
あずまばし  
さんも出掛けたじゃありませんか、その晩帰りに 吾 妻 橋 で何かあったでしょう——詳  
しい事は言いますまい、当人の御迷惑になるかも知れませんから——あれだけの証拠があ  
ダイヤ はま  
りゃ充分だと思いますが、どんなものでしょう」と金剛石入りの指環の 嵌 った指を、膝  
なら  
の上へ 併 べて、つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます異彩を放って、迷亭も主

人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃には胆を抜かれたものと見えて、しばらく

ぼうぜん おこり きょうがく たが  
は呆然として瘡の落ちた病人のように坐っていたが、驚愕の籬がゆ

るんでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云う感じが一度に唸喊して来る。

ふたり  
両人は申し合せたごとく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少し当てがはずれ

にら  
て、この際笑うのははなはだ失礼だと兩人を睨みつける。「あれが御嬢さんですか、な

くしゃみ おも  
るほどこりゃいい、おっしゃる通りだ、ねえ苦沙弥君、全く寒月はお嬢さんを恋って  
るに相違ないね……もう隠したってしょうがないから白状しようじゃないか」「ウフン」  
と主人は云ったままである。「本当に御隠しなさってもいけませんよ、ちゃんと種は上っ  
てるんですからね」と鼻子はまた得意になる。「こうなりや仕方がない。何でも寒月君に  
関する事実は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、そう、にやに

らち  
や笑っていては埒があかんじゃないか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。い

ろけん  
くら隠しても、どこからか露見するからな。——しかし不思議と云えば不思議ですねえ、  
金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になったんです、実に驚ろきますな」と迷亭は

しゃべ わた  
一人で喋舌る。「私しの方だって、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顔をし  
る。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎるようですぜ。一体誰に御聞きになったんです」「じ

かみ  
きこの裏にいる車屋の神さんからです」「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸  
くする。「ええ、寒月さんの事じゃ、よっぽど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度  
に、どんな話しをするかと思って車屋の神さんを頼んで一々知らせて貰うんです」「そり

ひど  
や苛い」と主人は大きな声を出す。「なあに、あなたが何をなさろうとおっしゃろうと、  
それに構ってるんじゃないんです。寒月さんの事だけですよ」「寒月の事だって、誰の事

おこ  
だって——全体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と主人は一人怒り出す。「しかし  
あなたの垣根のそとへ来て立っているのは向うの勝手じゃありませんか、話しが聞えてわ

おはい  
るけりやもっと小さい声でなさるか、もっと大きなうちへ御這入んなさるがいいでしょう」

しんみち  
と鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかりじゃありません。新道の

にげんきん だいぶ  
二 絃 琴 の師匠からも大分いろいろな事を聞いています」「寒月の事をですか」「寒

すご  
月さんばかりの事じゃありません」と少し 凄 い事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あ

はばかり  
の師匠はいやに上品ぶって自分だけ人間らしい顔をしている、馬鹿野郎です」「 憚 り

さま おかどちが おさと  
様、女ですよ。野郎は御門 違いです」と鼻子の言葉使いはますます御里をあら  
わして来る。これではまるで喧嘩をしに来たようなものであるが、そこへ行くと迷亭はや

てっかいせんになん しゃも けあ  
はり迷亭でこの談判を面白そうに聞いている。鉄 柎 仙人が軍鶏の蹴合いを見  
るような顔をして平気で聞いている。

あっこう  
悪 口 の交換では到底鼻子の敵でないと自覚した主人は、しばらく沈黙を守るのやむ  
を得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さ

わたし  
んに恋着したようにばかりおっしゃるが、私 の聞いたんじゃ、少し違いますぜ、ねえ  
迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじゃ御嬢さんの方が、始め病気に

うわごと  
なって——何だか 謔 語 をいったように聞いたね」「なにそんな事はありません」と金  
田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。「それでも寒月はたしかに〇〇博士の夫人か  
ら聞いたと云っていましたが」「それがこっちの手なんでさあ、〇〇博士の奥さんを頼ん  
で寒月さんの気を引いて見たんでさあね」「〇〇の奥さんは、それを承知で引き受けたん  
ですか」「ええ。引き受けて貰うたって、ただじゃ出来ませんやね、それやこれやでいろ  
いろ物を使っているんですから」「是非寒月君の事を根堀り葉堀り御聞きにならなくっ  
ちゃ御帰りにならないと云う決心ですかね」と迷亭も少し気持を悪くしたと見えて、いつに

てざわ  
なく手 障りのあらい言葉を使う。「いいや君、話したって損の行く事じゃなし、話そう

わたし さしつか  
じゃないか苦沙弥君——奥さん、私 でも苦沙弥でも寒月君に関する事実で 差 支  
えのない事は、みんな話しますからね、——そう、順を立ててだんだん聞いて下さると都  
合がいいですね」



なっとく  
鼻子はようやく納得してそろそろ質問を呈出する。一時荒立てた言葉使いも迷亭に  
対してはまたものごとく叮嚀になる。「寒月さんも理学士だそうです、全体どんな事  
を専門にしているのをごさいます」「大学院では地球の磁気の研究をやっています」と主  
人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだから「へえー」とは云

げげん  
ったが怪訝な顔をしている。「それを勉強すると博士になれましようか」と聞く。「博  
士にならなければやれないとおっしゃるんですか」と主人は不愉快そうに尋ねる。「ええ。  
ただの学士じゃね、いくらでもありますからね」と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見  
ていよいよやな顔をする。「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来んから、  
ほかの事を聞いていただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でもそ

にさんちまえ  
の地球の——何かを勉強しているんでございましょうか」「二三日前は首縊りの力学  
と云う研究の結果を理学協会で演説しました」と主人は何の気も付かずに云う。「おやい  
やだ、首縊りだなんて、よっぽど変人ですねえ。そんな首縊りや何かやってたんじゃ、と

くく  
ても博士にはなれますまいね」「本人が首を縊っちゃあむずかしいですが、首縊りの力  
学なら成れないとも限らんです」「そうでしょうか」と今度は主人の方を見て顔色を窺  
う。悲しい事に力学と云う意味がわからんので落ちつきかねている。しかしこれしきの事

はっけ  
を尋ねては金田夫人の面目に関すると思つてか、ただ相手の顔色で八卦を立てて見る。

やす  
主人の顔は渋い。「そのほかになにか、分り易いものを勉強しておりますまいか」「そ  
うですな、せんだって団栗のスタビリチーを論じて併せて天体の運行に及ぶと云う論文を

どんぐり  
書いた事があります」「団栗なんぞでも大学校で勉強するものでしょうか」「さあ僕

しろうと  
も素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する価値  
があると見えますな」と迷亭はすまして冷かす。鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念

しいたけ  
したものを見て、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが——この御正月に椎茸  
を食べて前歯を二枚折ったそうじゃございせんか」「ええその欠けたところに

くうやもち  
空也餅がくっ付いていましてね」と迷亭はこの質問こそ吾縄張内だと急に浮

かれ出す。「色気のない人じゃございませんか、何だって楊子ようじを使わないんでしょう」

「あ今度逢ったら注意しておきましょう」と主人がくすくす笑う。「椎茸で歯がかけるくら

いじゃ、よほど歯の性しょうが悪く思われますが、如何いかがなものでしょう」「善いとは言

われますまいな——ねえ迷亭あいきょう」「善い事はないがちょっと愛嬌あいきょうがあるよ。あれぎり、

つまだ埋めないところが妙だ。今だに空也餅引掛ひっかけどころ所ところになってるなあ奇観だぜ」「歯

を埋める小遣こづかいがないので欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにし

ておくんでしょうか」「何も永く前歯欠成まえばかけなりを名乗る訳でもないでしょうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございますならちょっと拝見したいもんでござい

ますが」「端書はがきなら沢山あります、御覧なさい」と主人は書齋から三四十枚持って来る。

「そんなに沢山拝見しないでも——その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを撰よつてやろう」と迷亭先生は「これなぞ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あ

らいやだ、狸たぬきだよ。何だって撰りに撰って狸なんぞかくんでしょうね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句を読んで御覧なさい」と主人が笑

いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。「旧暦の歳としの夜、山の狸が園

遊会をやって盛さかんに舞踏します。その歌に曰いわく、来いさ、としの夜で、御山婦美よ おやまふみ

くも来まいぞ。スッポコポンノポン」「何ですこりゃ、人を馬鹿にしているじゃございませ

んか」と鼻子は不平の体ていである。「この天女てんによは御気に入りませんか」と迷亭がまた

一枚出す。見ると天女がはごろも羽衣びわひを着て琵琶を弾いている。「この天女の鼻が少し小さ過ぎるようですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を読んで御覧なさい」文句には

こうある。<sup>むか</sup>「昔 <sup>よ</sup>しある所に一人の天文学者がありました。ある夜いつものように高い台に登って、一心に星を見ていると、空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出したので、天文学者は身にし<sup>し</sup>む寒さも忘れて聞き惚れてしまいました。朝見るとその天文学者の死骸に霜<sup>ほ</sup>が真白に降っていました。これは本当の <sup>はなし</sup>噺

だと、あのうそつきの <sup>じい</sup>爺やが申しました」「何の事ですこりゃ、意味も何もないじゃありませんか、これでも理学士で通るんですかね。ちっと文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですがねえ」と寒月君さんさんにやられる。迷亭は面白半分に「こりゃどうです」

と三枚目を出す。今度は活版で <sup>ほかけぶね</sup>帆懸舟が印刷してあって、例のごとくその下に何か書き散らしてある。「よべの <sup>とま</sup>泊りの <sup>じゅうろくこじよろ</sup>十六小女郎、親がないとて、荒磯の千

鳥、さよの <sup>ねざめ</sup>寝覚の千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるじゃありませんか」「話せますかな」「ええこれなら三味線に乗りますよ」「三味線に

乗りゃ本物だ。こりゃ <sup>いかが</sup>如何です」と迷亭は <sup>むやみ</sup>無暗に出す。「いえ、もうこれだけ拝見す

れば、ほかのは沢山で、 <sup>やぼ</sup>そんなに野暮でないんだと云う事は分りましたから」と一人で合

点している。鼻子はこれで寒月に関する大抵の質問を卒えたものと見えて、「これははなはだ失礼を致しました。どうか私の参った事は寒月さんへは内々に願います」と

<sup>えてかって</sup>得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と気のない返事をする。「いずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出

<sup>ふたり</sup>た <sup>ふたり</sup>両人が席へ返るや否や迷亭が「ありゃ何だい」と云うと主人も「ありゃ何だい」と双

方から同じ問をかける。奥の部屋で細君が <sup>こら</sup>怵え切れなかったと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来ましたぜ。月並もあの

<sup>ふる</sup>くらいになるとなかなか <sup>ふる</sup>振っていますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口<sup>こうき</sup>氣<sup>き</sup>で「第一氣に喰わん顔だ」と悪<sup>にく</sup>らしそうに云うと、迷亭はすぐ引

きうけて「鼻が顔の中央に陣取って乙<sup>おつ</sup>に構えているなあ」とあとを付ける。「しかも曲

っていらあ」少し猫背<sup>ねこぜ</sup>だね。猫背の鼻は、ちと奇抜<sup>きばつ</sup>過ぎる」と面白そうに笑う。

「おっと<sup>おつと</sup>こく<sup>こく</sup>を剋<sup>く</sup>する顔だ」と主人はなお口惜<sup>くや</sup>しそうである。「十九世紀で売れ残って、

二十世紀で店<sup>たなざら</sup>曝<sup>そう</sup>しに逢うと云う相<sup>そう</sup>だ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところへ妻君が

奥<sup>ま</sup>の間から出て来て、女だけに「あんまり悪口をおっしゃると、また車屋の神<sup>かみ</sup>さんにい

つけられますよ」と注意する。「少しいつける方が薬ですよ、奥さん」「しかし顔の讒<sup>ざんそ</sup>訴<sup>そ</sup>  
などをなさるのは、あまり下等ですわ、誰だって好んであんな鼻を持つてる訳でもありま

せんから——それに相手が婦人ですからね、あんまり苛<sup>ひど</sup>いわ」と鼻子の鼻を弁護すると、

同時に自分の容<sup>ようぼう</sup>貌<sup>ぼう</sup>も間接に弁護しておく。「何ひどいものか、あんなのは婦人じゃな

い、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかえら者だ、大分引き搔かれた  
じゃないか」「全体教師を何と心得ているんだろう」「裏の車屋くらいに心得ているのさ。  
ああ云う人物に尊敬されるには博士になるに限るよ、一体博士になっておかんのが君の

ふりょうけん<sup>ふりょうけん</sup>不<sup>かえり</sup>了<sup>り</sup>見<sup>み</sup>さ、ねえ奥さん、そうでしょう」と迷亭は笑いながら細君を顧<sup>かえり</sup>みる。

「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君にまで見離される。「これでも今になるかも

知れん、軽<sup>けいべつ</sup>蔑<sup>べつ</sup>するな。貴様なぞは知るまいが昔<sup>むか</sup>シアイソクラチスと云う人は九十四  
歳で大著述をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、ほとんど百歳の高  
齢だった。シモニジスは八十で妙詩を作った。おれだって……」「馬鹿馬鹿しいわ、あな  
たのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予

算している。「失敬な、——甘木さんへ行って聞いて見ろ——元来御前がこんな皺<sup>しわくちや</sup>苦<sup>ちや</sup>茶<sup>茶</sup>

くろもめん<sup>くろもめん</sup>な黒<sup>くろ</sup>木<sup>もめん</sup>綿<sup>めん</sup>の羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるん  
だ。あしたから迷亭の着ているような奴を着るから出しておけ」「出しておけて、あんな

おめし  
な立派な御召はござんせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに叮嚀になったのは、伯父さん

とが  
の名前を聞いてからですよ。着物の咎じゃございません」と細君うまく責任を逃がれる。

主人は伯父さんと云う言葉を聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、

うわさ  
今日始めて聞いた。今までついに噂をした事がないじゃないか、本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待ってたと云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬鹿に

がんばつ  
頑物でねえ——やはりその十九世紀から連綿とこんにち  
今日まで生き延びているんだが  
ね」と主人夫婦を半々に見る。「オホホホホ面白い事ばかりおっしゃって、どこに生きていらっしゃるんです」「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじゃ無いです。

まげ  
頭にちょん髷を頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ。帽子をかぶ  
被れってえと、おれは  
この年になるが、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと威張ってるんです——寒い

ね  
から、もっと寝ていらっしゃいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時間以上寝るの

ぜいたく  
は贅沢の沙汰だって朝暗いうちから起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を

四時間に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちはどうしてもねむ  
眠たくていかなん

しよきょうい  
だが、近頃に至って始めて随处任意の庶境に入ってはなはだ嬉しいと自慢するんで

へちまい  
す。六十七になって寝られなくなるなあ当り前でさあ。修業も糸瓜も入ったものじゃな

こっき  
いのに当人は全く克己の力で成功したと思ってるんですからね。それで外出する時には、

てっせん  
きつと鉄扇をもって出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、ただ持って出るんだね。まあステッキの代りくらいに考えてるかも知れんよ。ところがせんだって妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君

さあい  
が差し合のない返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコート  
を至急送れと云うんです。ちょっと驚ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身

しゆくしょうかい  
が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で祝捷会があるからそれまで

ま  
に間に合うように、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおかしいのは命令中にこ  
うあるんです。帽子は好い加減な大きさのを買ってくれ、洋服も寸法を見計らって  
だいまる

大丸へ注文してくれ……」「近頃は丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、

しろきや

白木屋と間違えたんだあね」「寸法を見計ってくれたって無理じゃないか」「そこが伯  
父の伯父たるどころさ」「どうした?」「仕方がないから見計らって送ってやった」「君  
も乱暴だな。それで間に合ったのかい」「まあ、どうにか、こうにかおっついたんだろう。

てっせん

国の新聞を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートにて、例の鉄扇を持ち……」  
「鉄扇だけは離さなかったと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは入れてやろう  
と思っているよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かった」「ところが  
大間違さ。僕も無事に行っておりがたいと思つてると、しばらくして国から小包が届いた  
から、何か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、手紙が添えてあつてね、

くだされそうら そろあいだ おつか  
せっかく御求め被下候 えども少々大きく候 間、帽子屋へ御遣わしの

くだされたくそろ こがわせ こなた おんおくり  
上、御縮め被下度候。縮め賃は小為替にて此方より御送

もうしあぐべきそろ うかつ おの  
可申上候とあるのさ」「なるほど迂濶だな」と主人は己れより迂濶な

もの天下にある事を発見して おおい てい  
大に満足の体に見える。やがて「それから、どうし

た」と聞く。「どうするったって仕方がないから僕が頂戴して 被 かっていらあ」「あの帽

子かあ」と主人がにやにや笑う。「その方 が男爵でいらっしゃるんですか」と細君が不  
思議そうに尋ねる。「誰がです」「その鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者でさあ、若い

せいどう しゅしがく うやうや  
時聖堂で朱子学か、何かにこり固まったものだから、電気灯の下で 恭し

まげ あごな  
くちよん髷を頂いているんです。仕方がありません」とやたらに 顛を撫で廻す。「そ  
れでも君は、さっきの女に牧山男爵と云ったようだぜ」「そうおっしゃいましたよ、私も  
茶の間で聞いておりました」と細君もこれだけは主人の意見に同意する。「そうでしたか

わけ うそ  
なアハハハハ」と迷亭は 訳もなく笑う。「そりゃ嘘ですよ。僕に男爵の伯父があり

や、今頃は局長くらいになっていまさあ」と平気なものである。「何だか変だと思った」と主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あらまあ、よく真面目であんな嘘が付け

ますねえ。あなたもよっぽど法螺が御上手でいらっしゃる事」と細君は非常に感心する。

「僕より、あの女の方が上わ手でさあ」「あなただって御負けなざる

ん」「しかし奥さん、僕の法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、

く付きの嘘ですぜ。たちが悪いです。猿 智慧 から割り出した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちゃ、コメディの神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳に立ち至りますか

らな」主人は俯 目 になって「どうだか」と云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ」と云う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角 屋 敷 の金田とは、どんな構え

か見た事は無論ない。聞いた事さえ今が始めてである。主人の 家 で実業家が話頭に 上

った事は一返もないので、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻 凶 らずも鼻子の訪問を受けて、余所ながら

その談話を拝聴し、その令嬢の 艶 美 を想像し、またその 富 貴、権勢を思い浮べて見る

と、猫ながら安閑として 椽 側 に寝転んでいられなくなった。しかのみならず吾輩は寒

月君に対してはなはだ同情の至りに堪えん。先方では博士の奥さんやら、車屋の 神 さん

やら、二 絃 琴 の 天 璋 院 まで買収して知らぬ間に、前歯の欠けたのさえ探偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言って、ああ云う偉大な鼻を顔

の 中 に安置している女の事だから、滅 多 な者では寄り付ける訳の者ではない。こう云

う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに 錢 がなさ過ぎる。迷亭は錢に不自

由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に 援 けを与える 便 宜は 尠 かるう。

かわいそう  
して見ると 可 哀 相 なのは首縊りの力学を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫

だけれど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の 家 に 寄 寓 する猫

で、世間一般の 痴 猫、 愚 猫 とは少しく 撰 を 殊 にしている。この冒険をあえ

とするくらいの義侠心は 固 より 尻 尾 の先に畳み込んである。何も寒月君に恩になった

と云う訳もないが、これはただに個人のためにする 血 氣 躁 狂 の沙汰ではない。

大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意を現実にする 天 晴 な美挙だ。人の許諾を経

ずして 吾 妻 橋 事件などを至る処に振り廻す以上は、人の軒下に犬を忍ばして、その

報道を得々として逢う人に 吹 聴 する以上は、車夫、馬 丁、 無 頼 漢、ごろつ

き書生、 日 雇 婆、産婆、妖 婆、 按 摩、 頓 馬 に至るまでを使用して国家

有用の材に 煩 を及ぼして 顧 みざる以上は——猫にも覚悟がある。幸い天気も好い、

しもどけ  
霜 解 は少々閉口するが道のためには一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、 椽 側 へ

梅の花の印を押すくらいな事は、ただ 御 三 の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは

申されない。翌日とも云わずこれから出掛けようと 勇 猛 精 進 の大決心を起して台所まで飛んで出たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達しているのみならず、脳力の発達においてはあえて中学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しい

かな咽喉の構造だけはどこまでも猫なので人間の言語が 饒 舌 れない。よし首尾よく金田

邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見届けたところで、 肝 心 の寒月君に教えてやる訳に



行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある <sup>ダイヤモンド</sup> 金剛石の  
日を受けて光らぬと同じ事で、せつかくの智識も無用の長物となる。これは愚だ、やめよ  
うかしらんと上り口で <sup>たたず</sup> 佇んで見た。

しかし一度思い立った事を途中でやめるのは、<sup>ゆうだち</sup> 白雨が来るかと待っている時黒雲  
とも  
共 隣国へ通り過ぎたように、何となく残り惜しい。それも非がこっちにあれば格別だが、

いわゆる正義のため、人道のためなら、たとい無駄死をやるまでも進むのが、義務を知  
る男児の本懐であろう。無駄骨を折り、無駄足を <sup>よご</sup> 汚すくらいは猫として適當のところ

ある。猫と生れた <sup>いんが</sup> 因果で寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の <sup>ぜつとう</sup> 舌頭に相互の思想を

交換する <sup>ぎりょう</sup> 技倆はないが、猫だけに忍びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事

を <sup>じょうじゅ</sup> 成就するのはそれ自身において愉快である。 <sup>われ</sup> 吾一箇でも、金田の内幕を知る  
のは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られているなど云う自覚を  
彼等に与うだけが愉快である。こんなに愉快が続々出て来ては行かずにはいられない。  
やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が <sup>かどじめん</sup> 角地面を <sup>わがものがお</sup> 吾物顔に占領して

いる。この主人もこの西洋館のごとく <sup>ごうまん</sup> 傲慢に構えているんだらうと、門を這入ってそ

の建築を <sup>なが</sup> 眺めて見たがただ人を威圧しようと、二階作りが無意味に突っ立っているほか

に何等の能もない構造であった。迷亭のいわゆる <sup>つきなみ</sup> 月並とはこれであろうか。玄関を右  
に見て、植込の中を通り抜けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生の台所

の十倍はたしかにある。せんだって日本新聞に詳しく書いてあった <sup>おおくまはく</sup> 大隈伯の勝手に

も劣るまいと思うくらい整然とぴかぴかしている。「模範勝手だな」と這入り込む。見る

しっくい かみ ごはんた  
と 漆 喰 で叩き上げた二坪ほどの土間に、例の車屋の 神 さんが立ちながら、御 飯 焚

けんのん みずおけ  
きと車夫を相手にしきりに何か弁じている。こいつは 剣 呑 だと 水 桶 の裏へかく

めしたき  
れる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と 飯 焚 が云う。「知らねえ

かいわい かたわ  
事があるもんか、この 界 隈 で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片 輪  
だあな」これは抱え車夫の声である。「なんとも云えないよ。あの教師と来たら、本より  
ほかに何にも知らない変人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知ってりや恐れるかも知

とし  
れないが、駄目だよ、自分の小供の 歳 さえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金田

とうへんぼく かま こた おど  
さんでも恐れねえかな、厄介な 唐 変 木 だ。構 あ 事 あねえ、みんなで威嚇かし  
てやろうじゃねえか」「それが好いよ。奥様の鼻が大き過ぎるの、顔が気に喰わないのっ

ひど つら いまどやき たぬき  
て——そりゃあ 酷 い事を云うんだよ。自分の 面 あ 今 戸 焼 の 狸 見たような癖

いちにんまえ  
に——あれで 一 人 前 だと思っているんだからやれ切れないじゃないか」「顔ばかり

てぬぐい さ  
じゃない、手 拭 を提げて湯に行くところからして、いやに高慢ちきじゃないか。自分

おおい  
くらいえらい者は無いつもりであるんだよ」と苦沙弥先生は飯焚にも 大 に不人望であ

そば  
る。「何でも大勢であいつの垣根の 傍 へ行つて悪口をさんざんいってやるんだね」「そ  
うしたらきつと恐れ入るよ」「しかしこっちの姿を見せちゃあ面白くねえから、声だけ聞  
かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれって、さっき奥様が言い付けて  
おいでなすったぜ」「そりゃ分っているよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受けると云  
う意味を示す。なるほどこの手合が苦沙弥先生を冷やかしに来るなど三人の横を、そつと  
通り抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いてても不器用な音のした試しが無い。空を踏

けい とうり しつ こ  
むがごとく、雲を行くがごとく、水中に 磬 を打つがごとく、洞 裏 に 瑟 を鼓するが

だいご な ごんせん れいだん じち  
ごとく、醍 醐 の妙味を嘗めて 言 詮 のほかに 冷 暖 を自知するがごとし。月並

な西洋館もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、<sup>ごんすけ</sup>権助も、飯焚も、御嬢さまも、

なかばたら  
仲働きも、鼻子夫人も、夫人の旦那様もない。行きたいところへ行って聞きたい話

を聞いて、舌を出し尻尾を掉って、<sup>しっぽ ふ ひげ</sup>髭をぴんと立てて<sup>ゆうゆう</sup>悠々と帰るのみである。

ことに吾輩はこの道に掛けては日本一の<sup>かんのう</sup>堪能である。草<sup>くさぞうし</sup>双紙にある<sup>ねこまた</sup>猫又の

血脈を受けておりはせぬかと<sup>みずか</sup>自ら疑うくらいである。<sup>がま ひたい やこう</sup>墓の額には夜光の

めいしゆ  
明珠があると云うが、吾輩の尻尾には<sup>しんぎしやつきょうこいむじょう</sup>神祇釈教恋無常は無論の

事、満天下の人間を馬鹿にする<sup>いっかそうでん</sup>一家相伝の妙薬が詰め込んである。金田家の廊下

を人の知らぬ間に横行するくらいは、仁王様が<sup>ま</sup>心<sup>ところてん</sup>太<sup>つぶ</sup>を踏み潰すよりも容易である。この時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、これも普段大事にする尻尾の御蔭だな

と気が付いて見るとただ置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を<sup>らいはい</sup>礼拝してニャン運

長久を祈らばやと、ちょっと低頭して見たが、どうも少し<sup>けんとう</sup>見当が違ふようである。なるべく尻尾の方を見て三拝しなければならぬ。尻尾の方を見ようと身体を廻すと尻尾も自

然と廻る。追付こうと思って首をねじると、尻尾も同じ間隔をとって、先へ<sup>か</sup>馳け出す。な

るほど<sup>てんちげんこう</sup>天地玄黄を三寸裏に収めるほどの霊物だけあって、到底吾輩の手に合わな

い、尻尾を<sup>めぐ</sup>環<sup>ななた</sup>る事七<sup>くたび</sup>度び半にして草臥れたからやめにした。少々眼がくらむ。どこに居るのだからちょっと方角が分らなくなる。構うものかと滅茶苦茶にあるき廻る。障子

の<sup>うち</sup>裏で鼻子の声がする。ここだと立ち留まって、左右の耳をはずに切って、息を<sup>こ</sup>凝らす。

「貧乏教師の癖に生意気じゃありませんか」と例の<sup>かなき ごえ</sup>金切り声を振り立てる。「うん、

生意気な奴だ、ちと懲らしめのためにいじめてやろう。あの学校にや国のものもいるから

な」 「誰がいるの？」 「津木ピン 助 や 福 地 キシャゴがいるから、頼んでからかわし

てやろう」 吾輩は金田君の 生 国 は分らんが、妙な名前の人間ばかり 揃 った所だ  
と少々驚いた。金田君はなお語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、

車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に教えるんだって云います」「どうせ 碌

な教師じゃあるめえ」あるめえにも 尠 なからず感心した。「この間ピン助に遇ったら、

わたし  
私 の学校にや妙な奴がおります。生徒から先生番茶は英語で何と云いますと聞かれて、  
番茶は Savage tea であると真面目に答えたんで、教員間の物笑いとなっています、どう

もあんな教員があるから、ほかのものの、迷惑になって困りますと云ったが、 大 方 あ

いつの事だぜ」 「あいつに 極 っ ていまさあ、そんな事を云いそうな 面 構 えですよ、

いやに 髭 なんかに生やして」 「怪しからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫などは  
一疋だって怪しかりようがない。「それにあの迷亭とか、へべれけとか云う奴は、まあ何

てえ、頓狂な 跳 返 りなんでしょう、伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯  
父なんぞ、有るはずがないと思ったんですもの」 「御前がどこの馬の骨だか分らんもの

言う事を真に受けるのも悪い」 「悪いって、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじゃありません

か」と大変残念そうである。不思議な事には寒月君の事は 一 言 半 句 も出ない。吾

輩の忍んで来る前に評判記はすんだものか、またはすでに落第と事が 極 っ て念頭にない

ものか、その 辺 は 懸 念 もあるが仕方がない。しばらく 佇 んでいると廊下を隔て

て向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。 後 れぬ先に、とその方  
角へ歩を向ける。

来て見ると女が 独 りで何か大声で話している。その声が鼻子とよく似ているところを

お　　　　　みすいじゆすい  
もって推すと、これが即ち当家の令嬢寒月君をして未　　遂　　入　　水　　をあえてせしめたる

しろもの　　おいしいかな　　おんすがた  
代　物　だ　ろ　う。　惜　哉　障子越しで玉の御　　姿　　を拝する事が出来ない。従っ  
て顔の真中に大きな鼻を祭り込んでいるか、どうだか受合えない。しかし談話の模様から

鼻息の荒いところなどを　　そうごう　　まんざら　　ひ  
綜　合　して考えて見ると、満　更　人の注意を惹かぬ

ししばな　　　しゃべ  
獅　鼻　とも思われない。女はしきりに喋　舌　っているが相手の声が少しも聞えないの

うわさ　　　やまと　　あした  
は、噂　にきく電話というものであろう。「御前は　大　和　かい。明　日　ね、行くんだ

うづら  
からね、鶉　の三を取っておいておくれ、いいかえ——分ったかい——なに分らない？  
おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。——なんだって、——取れない？　取れないはずはな

　　　　　ごじょうだん  
い、とるんだよ——へへへへ　御　冗　談　をだって——何が御冗談なんだよ——いやに

　　　　　ちょうきち  
人をおひやらかすよ。全体御前は誰だい。長　吉　だ？　長吉なんぞじゃ訳が分からない。

　　　　　わたく  
お神さんに電話口へ出ろって御云いな——なに？　私　して何でも弁じます？——お前

　　　　　あた  
は失敬だよ。妾　しを誰だか知ってるのかい。金田だよ。——へへへへ　善く存じており  
ますだって。ほんとに馬鹿だよこの人あ。——金田だってえばさ。——なに？——毎度

ごひいき  
御　鼻　眞　にあずかりましてありがとうございます？——何がありがたいんだね。御礼なん

　　　　　ぐぶつ  
か聞きたかあないやね——おやまた笑ってるよ。お前はよっぽど愚　物　だね。——仰せの  
通りだって？——あんまり人を馬鹿にすると電話を切ってしまうよ。いいのかい。困らな  
いのかよ——黙ってちゃ分らないじゃないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方か

　　　　　かんしゃく  
ら切ったものか何の返事もないらしい。令嬢は　癩　癩　を起してやけにベルをジャラジ

　　　　　ちん　　　　　うかつ  
ャラと廻す。足元で　狎　が驚ろいて急に吠え出す。これは　迂　濶　に出来ない、急に飛び

　　　　　えん  
下りて　椽　の下へもぐり込む。

おりから ちかづ  
折柄廊下を近く足音がして障子を開ける音とする。誰か来たなど一生懸命に  
聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらっしゃいます」と小間使らしい声がす  
る。「知らないよ」と令嬢は けんつく 剣突 を食わせる。「ちょっと用があるから じょう 嬢 を呼  
んで来いとおっしゃいました」「うるさいね、知らないてば」と令嬢は第二の剣突を食わ  
せる。「……水島寒月さんの事で御用があるんだそうでございます」と小間使は ぎ 気を利か  
して機嫌を直そうとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ——大嫌いだわ、糸瓜が  
とまど  
戸迷いをしたような顔をして」第三の剣突は、憐れなる寒月君が、留守中に頂戴する。

そくはつ い こんにち  
「おや御前いつ 束髪 に結ったの」小間使はほっと一息ついて「今日」となるべ  
たんかん  
く 単簡 な挨拶をする。「生意気だねえ、小間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食

はんえり  
わす。「そうして新しい 半襟 を掛けたじゃないか」「へえ、せんだって御嬢様からい  
ただきましたので、結構過ぎて もったい 体 ないと思って 行李 の中へしまっておきました

よご か  
が、今までのがあまり 汚れ ましたからかけ易えました」「いつ、そんなものを上げた事  
があるの」「この御正月、白木屋へいらっしゃいまして、御求め遊ばしたので——  
うぐいすちゃ すもう ばんづけ あた  
鶯 茶 へ相撲の 番附 を染め出したのでございます。妾 には地味過ぎ  
ていやだから御前に上げようとおっしゃった、あれでございます」「あらいやだ。善く似

ほ  
合うのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒めたんじゃない。にくらしいんだよ」「へ  
え」「そんなによく似合うものをなぜだまって貰ったんだい」「へえ」「御前にさえ、そ

あた  
のくらい似合うなら、妾 さんにだっておかしい事はないだろうじゃないか」「きっとよく  
御似合い遊ばします」「似あうのが分ってる癖になぜ黙っているんだい。そうしてすまし

けんつく  
て掛けているんだよ、人の悪い」 剣突 は留めどもなく連発される。このさき、事局は  
どう発展するかと謹聴している時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君

が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな <sup>ちん</sup> 狎 が

顔の中心に眼と口を引き集めたような <sup>かお</sup> 面 をして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝

手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の <sup>せいせき</sup> 成 績 である。

帰って見ると、奇麗な <sup>うち</sup> 家 から急に汚ない所へ移ったので、何だか日当りの善い山の上

から薄黒い <sup>どうくつ</sup> 洞 窟 の中へ <sup>はい</sup> 入 り込んだような心持ちがする。探険中は、ほかの事に気を

奪われて部屋の装飾、<sup>ふすま</sup> 襖、<sup>しょうじ</sup> 障 子 の具合などには眼も留らなかったが、わが住居 <sup>すまい</sup>

の <sup>か</sup> 下等なるを感ずると同時に彼の <sup>つきなみ</sup> いわゆる 月 並 が恋しくなる。教師よりもやはり実業

家がえらいように思われる。吾輩も少し変だと思って、例の <sup>しっぽ</sup> 尻 尾 に伺いを立てて見たら、

その通りその通りと尻尾の先から <sup>ごたくせん</sup> 御 託 宣 があつた。座敷へ這入って見ると驚いたの <sup>はい</sup>

は迷亭先生まだ帰らない、<sup>まきたばこ</sup> 巻 煙 草 の吸い殻を蜂の巣のごとく火鉢の中へ突き立てて、

<sup>おおあぐら</sup> おおあぐら <sup>ま</sup> 大 胡 坐 で何か話し立てている。いつの間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をして

<sup>あまもり</sup> 天井の 雨 洩 を余念もなく眺めている。あいかわらず太平の逸民の会合である。

<sup>うわごと</sup> 「寒月君、君の事を 譚 話 にまで言った婦人の名は、当時秘密であつたようだが、もう  
話ししても善かろう」と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけに関する事なら

<sup>さしつか</sup> さしつか  
<sup>さしつか</sup> 差 支 えないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに〇〇  
博士夫人に約束をしてしまったもんですから」「他言をしないと云う約束かね」「ええ」

<sup>ひも</sup> と寒月君は例のごとく羽織の 紐 をひねくる。その紐は売品にあるまじき紫色である。「そ

<sup>てんぼうちょう</sup> の紐の色は、ちと 天 保 調 だな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などに

<sup>どうてい</sup> は無頓着である。「そうさ、<sup>じんがさ</sup> 到 底 日露戦争時代のものではないな。陣 笠 に

たちあおい さ  
立 葵 の紋の付いたぶつ割き羽織でも着なくっちゃ納まりの付かない紐だ。織田信長

むこいり ちゃせん い  
が 賀 入 をするとき頭の髪を 茶 釜 に結ったと云うがその節用いたのは、たしかそ

んな紐だよ」と迷亭の文句はあいかわらず長い。「実際これは じじい 爺 が長州征伐の時に用いたのです」と寒月君は真面目である。「もういい加減に博物館へでも献納してはどうだ。

首縊りの力学の演者、理学士水島寒月君ともあろうものが、売れ残りの旗本のような出で

たち  
立 をするのはちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云ってくれる人もありますので——」「誰だい、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なん

じゃないんで——」「御存じでなくてもいいや、一体誰だい」「去る によしょう 女性 なんです」「ハハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ

女なんだろう、その羽織を着てもう一返 御 駄 仏 を極め込んじゃどうだい」と迷亭が横合

から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んではおりません。ここから いぬい 乾 の方角に

しょうじょう  
あたる 清 浄 な世界で……」「あんまり清浄でもなさそうだ、毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさっき押しかけて来たんだよ、ここへ、実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻って

くおん によしょう さい  
誰の事です」「君の親愛なる 久 遠 の 女 性 の御母堂様だ」「へえー」「金田の 妻 という女が君の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、

うかが  
恥ずかしがるかと寒月君の様子を 窺 っていると別段の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、あの娘を貰ってくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひねく

る。「ところが大違さ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有 ぬし 主 でね……」迷亭が 半

ば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさっきから、あの鼻について はいたいし 俳 体 詩 を考えて

つ へや  
いるんだがね」と木に竹を接いだような事を云う。隣の 室 で妻君がくすくす笑い出す。



のんき  
「随分君も呑気だなあ出来たのかい」「少し出来た。第一句がこの顔に鼻祭りと言うのだ」「それから?」「次がこの鼻に神酒供えというのさ」「次の句は?」「まだそれぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑う。「次へ穴二つ幽かなりと付けちゃどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒月が「奥深く毛も見えずはいけますまい

おのおのでたらめ  
か」と各々出鱈目を並べていると、垣根に近く、往来で「今戸焼の狸今戸焼の狸」と四五人わいわい云う声がある。主人も迷亭もちよっと驚ろいて表の方を、垣

すき  
の隙からすかして見ると「ワハハハハハ」と笑う声が出て遠くへ散る足の音がある。「今戸焼の狸というな何だい」と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が

ふる  
答える。「なかなか振っていますな」と寒月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上って「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございます

いっばん ひれき  
から、その一斑を披瀝して、御両君の清聴を煩わしたいと思います」と演舌の真似をやる。主人はあまりの突然にぼんやりして無言のまま迷亭を見ている。寒月は「是

うけたまわ  
非承りたいものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻の起源はど

しか  
うも確と分りません。第一の不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つで

おうふう  
たくさんである。何もこんなに横風に真中から突き出して見る必用がないのである。

かよう つま  
ところがどうしてだんだん御覧のごとく斯様にせり出して参ったか」と自分の鼻を掴んで見せる。「あんまりせり出してもおらんじゃないか」と主人は御世辞のないところを

あななら  
云う。「とにかく引っ込んではおられませんから。ただ二個の孔が併んでいる状体と

あらかじ  
混同なすっては、誤解を生ずるに至るかも計られませんから、予め御注意をしてお

はな  
きます。——で愚見によりますと鼻の発達に吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行為の

いつわ  
結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したものでございます」「伴りのない

そうにゆう はな  
愚見だ」とまた主人が寸評を挿入する。「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻

を掴みます、鼻を掴んで、ことにこの局部だけに刺激を与えますと、進化論の大原則によって、この局部はこの刺激に応ずるがため他に比例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に <sup>かた</sup>硬 くなります。ついに <sup>こ</sup>凝 って骨となります。「それは少し——そう自由に肉が骨に一足飛に変化は出来ますまい」と理学士だけあって寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳べ続ける。「いや御不審はごもっともですが論より証 <sup>の</sup> 拠この通り骨があるから仕方ありません。すでに骨が出来る。骨は出来ても鼻汁は出ますな。出ればかまずにはいられません。この作用で骨の左右が <sup>けず</sup>削 り取られて細い高い隆起と変化して参ります——実に恐ろしい作用です。 <sup>てんてき</sup>点 <sup>うが</sup>滴 の石を <sup>うが</sup>穿 つがごとく、 <sup>びんずる</sup>賓 <sup>おのず</sup>頭 顱の頭が <sup>ふしぎくんふしぎしゅう</sup>自 己から光明を放つがごとく、不思議薰 不思議臭 の 喩 <sup>かよう</sup>のごとく、斯 様に鼻筋が通って堅くなります」[#「なります」]は底本では「なります。」「]「それでも君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部は <sup>かいご</sup>回 護の恐れがありますから、わざと論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、もっとも発達せるもっとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思います」寒月君は思わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達しますと偉観には相違ございませんが <sup>おそろ</sup>何となく 怖 しくて近づき難いものであります。あの <sup>びりょう</sup>鼻 梁などは素晴らしいには違 <sup>しゅんけん</sup>いございませんが、少々 峻 嶮 過ぎるかと思われま。古人のうちにてソクラチス、ゴールドスミスもしくはサッカーの鼻などは構造の上から云うと随分申し分はございませうがその申し分のあるところに <sup>あいきょう</sup>愛 嬌 がございます。鼻高きが故に <sup>たつと</sup>貴 から <sup>き</sup>ず、奇なるがために貴しとはこの故でもございませうか。下世話にも鼻より団子と申しますれば美的価値から申しますとまず迷亭くらいのところが適当かと存じます」寒月と主人は「フフフ」と笑い出す。迷亭自身も愉快そうに笑う。「さてただ <sup>いま</sup>今 まで弁じましたのは——」「先生弁じましたは少し講釈師のようで下品ですから、よしていただきまし

よう」と寒月君は先日の復讐<sup>ふくしゅう</sup>をやる。「さようしからは顔を洗って出直しましょう

かな。——ええ——これから鼻と顔の権衡<sup>けんこう いちごん</sup>に一言論及したいと思います。他に  
関係なく単独に鼻論をやりますと、かの御母堂などはどこへ出しても恥ずかしからぬ鼻

——<sup>くらまやま</sup>鞍馬山で展覧会があっても恐らく一等賞だろうと思われるくらいな鼻を所有し  
ていらせられますが、悲しいかなあれは眼、口、その他の諸先生と何等の相談もなく出来  
上った鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したものに相違ございません。しか

しシーザーの鼻を<sup>はさみ</sup>鋏でちょん切って、当家の猫の顔へ安置したらどんな者でございま

しょうか。<sup>たと</sup>喩えにも猫の<sup>ひたい</sup>額と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が<sup>とっこつ</sup>突兀として

<sup>そび</sup>そび<sup>す</sup>す  
聳えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据え付けたようなもので、少しく比例を失するの極、

その美的価値を落す事だろうと思います。御母堂の鼻はシーザーのそれのごとく、<sup>まさ</sup>正し

く<sup>えいしさっそう</sup>英姿颯爽たる隆起に相違ございません。しかしその周囲を<sup>いによろ</sup>囲繞する顔面的

<sup>いかが</sup>条件は如何な者でありましょう。無論当家の猫のごとく劣等ではない。しかし

<sup>てんかんや</sup>癩癩病みの御かめのごとく<sup>まゆ</sup>眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるの  
は事実であります。諸君、この顔にしてこの鼻ありと嘆ぜざるを得んではありませんか」

迷亭の言葉が少し途切れる<sup>とたん</sup>途端、裏の方で「まだ鼻の話しをしているんだよ。何てえ

<sup>ごうつ ばり</sup>ごうつ ばり  
剛突く張だろう」と云う声が聞える。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。

迷亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたって、新たに異性の傍聴者のある事を発見

したのは演者の深く名誉と思うところであります。ことに<sup>えんてん きょうおん</sup>宛転たる嬌音をも

って、<sup>こうえん えんみ</sup>乾燥なる講筵に一点の艶味を添えられたのは実に望外の幸福であります。

なるべく通俗的に引き直して<sup>かじんしゆくじょ けんこ そむ</sup>佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する訳

いきおい  
御婦人方には

ごしんぼう  
御分りにくいかも知れませんが、どうか御辛防を願います」寒月君は力学と云う語を聞いてまたにやにやすする。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツァイジングの黄金律を失っていると云う事なんで、それを厳格に力学上の公式から

えんえき  
演繹して御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻の高さとします。 $\alpha$ は鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」

くしゃみ  
「私にもちと分りかねますな」「そりゃ困ったな。苦沙弥はとにかく、君は理学士だから分るだろうと思ったのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやったかい  
甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のよ

よ  
うなものだ、——いいか両君能く聞き給え、これからが結論だぜ。——さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は無論

ついでい  
の事許さねばなりません。またこの形体に追陪して起る心意的状況は、たとい後天性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなりません。従ってかくのごとく身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事と察せられます。寒月君などは、まだ年が御若いから金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝は潜伏期の長い

なんどき  
ものでありますから、いつ何時気候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそれのごと

とっさ かん ぼうちよう  
く、咄嗟の間に膨脹するかも知れませんが、それ故にこの御婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になった方が安全かと思われ、これには当家の

ねこまたどの  
御主人は無論の事、そこに寝ておられる猫又殿にも御異存は無からうと存じます」主人はようよう起き返って「そりゃ無論さ。あんなものの娘を誰が貰うものか。寒月君もらっちゃいかんよ」と大変熱心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を表するためににやーにやーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ様子もなく「先生方の御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、もし当人がそれを気にして病気にでもなったら

罪ですから——」 「ハハハハハ 艶 罪 と云う 訳 だ」 主人だけは 大 におおいにむきになっ

て「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら 碌 なる者でないに 極 まで。初めて人

のうちへ来ておれをやり込めに掛った奴だ。 傲 慢 な奴だ」と 独 りでぷんぷんする。

するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハハ」と云う声がする。一人が「高慢ちきな

とうへんぼく 唐 変 木 だ」と云うと一人が「もっと大きな 家 へ這入りてえだろう」と云う。ま

た一人が「御気の毒だが、いくら威張ったって 蔭 弁 慶 だ」と大きな声をする。主人

は 椽 側 へ出て負けないような声で「やかましい、何だわざわざそんな 堀 の下へ来て」

どな と怒鳴る。「ワハハハハハサヴェジ・チーだ、サヴェジ・チーだ」と口々に 罵 する。主

人は 大 におおいに 逆 鱗 の 体 で突然起ってステッキを持って、往来へ飛び出す。迷亭は

手 手を拍って「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐を 撚 ってにやにやする。吾輩

は主人のあとを付けて垣の崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙汰にステッ

キを突いて立っている。人通りは一人もない、ちょっと 狐 に 抓 まれた 体 である。

四 例によって金田邸へ忍び込む。

例によってとは 今 更 じじょう 解釈する必要もない。しばしばを 自 乗 したほどの度合を

示す ことば 語 である。一度やった事は二度やりたいもので、二度試みた事は三度試みたいの

は人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界に

生れ出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以上繰返す時始めて習慣なる語を冠

せられて、この行為が生活上の必要と進化するのもまた人間と相違はない。何のために、

かくまで 足 繁 かく金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちょっと人間に反問し

たい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻から吐き出すのであるか、腹の足しに

はず げ とどん はば  
も血の道の薬にもならないものを、恥 かし気もなく吐 吞して 憚 からざる以上は、

しゅつにゆう とが だ  
吾輩が金田に 出 入 するのを、あまり大きな声で 答 め立てをして貰いたくない。

たばこ  
金田邸は吾輩の煙 草 である。

まおとこ  
忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か 間 男 のようで聞き苦しい。吾輩が金田

かつお きりみ  
邸へ行くのは、招待こそ受けないが、決して 鱈 の切 身 をちょろまかしたり、眼鼻が

けいれんてき ちん  
顔の中心に 瘰 癧 的 に密着している 狎 君などと密談するためではない。——何探

いや かぎょう  
偵?——もつてのほかの事である。およそ世の中に何が 賤 しい家 業 だと云って探偵  
と高利貸ほど下等な職はないと思っている。なるほど寒月君のために猫にあるまじきほど

ぎきょうしん ひとたび よそ うかが  
の義 侠 心 を起して、一 度 は金田家の動静を余所ながら 窺 った事はある

ろうれつ  
が、それはただの一遍で、その後は決して猫の良心に恥ずるような 陋 劣 な振舞を致し

い うろん  
た事はない。——そんなら、なぜ忍び込むと云うような 胡 乱 な文字を使用した?——さ

たいくう おお  
あ、それがすこぶる意味のある事だて。元来吾輩の考によると 大 空 は万物を 覆 うた

の しつよう  
め大地は万物を載せるために出来ている——いかに 執 拗 な議論を好む人間でもこの

たいくうだいち  
事実を否定する訳には行くまい。さてこの 大 空 大 地 を製造するために彼等人類は

つい せきすん  
どのくらいの労力を 費 やしているかと云うと 尺 寸 の手伝もしておらぬではないか。

き さ  
自分が製造しておらぬものを自分の所有と極める法はなかり。自分の所有と極めても差

つか しゅつにゆう ぼうぼう  
し支 えないが他の 出 入 を禁ずる理由はあるまい。この 茫 々 たる大地を、

こざか めぐ ぼうぐい かく  
小 賢 しくも垣を 囲 らし 棒 杭 を立てて某々所有地などと 劃 し限るのはあたか

そうてん なわばり われ かれ  
もかの 蒼 天 に 縄 張 して、この部分は 我 の天、あの部分は 彼 の天と届け出る  
ような者だ。もし土地を切り刻んで一坪いくらの所有権を売買するなら我等が呼吸する空  
気を一尺立方に割って切売をしても善い訳である。空気の切売が出来ず、空の縄張が不当  
なら地面の私有も不合理ではないか。如 是 観 によりて、如 是 法 を信じている吾

はい  
輩はそれだからどこへでも這入って行く。もっとも行きたくない処へは行かぬが、志す方  
角へは東西南北の差別は入らぬ、平気な顔をして、のそのそと参る。金田ごときものに遠

慮をする訳がない。——しかし猫の悲しさは力づくでは 到 底 人間には 叶 わない。強  
勢は権利なりとの格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いかにこっちに道理があつて

も猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の黒のごとく不意に 肴 屋 の  
てんびんぼう くら  
天 秤 棒 を 喰 う恐れがある。理はこっちにあるが権力は向うにあると云う場合に、

理を曲げて一も二もなく屈従するか、または権力の目を 掠 めて我理を貫くかと云えば、

吾輩は無論後者を 扱 ぶのである。天秤棒は避けざるべからざるが故に、忍ばざるべから

ず。人の邸内へは這入り込んで 差 支 えなき故込まざるを得ず。この故に吾輩は金田邸  
へ忍び込むのである。

ど  
忍び込む度が重なるにつけ、探偵をする気はないが自然金田君一家の事情が見たくもな

い吾輩の眼に映じて覚えたくもない吾輩の 脳 裏 に印象を 留 むるに至るのはやむを得

ない。鼻子夫人が顔を洗うたんに念を入れて鼻だけ拭く事や、富子令嬢が 阿 倍 川 餅

むやみ  
を 無 暗 に召し上がるる事や、それから金田君自身が——金田君は妻君に似合わず鼻の  
低い男である。単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分喧嘩をして、

がきだいしょう くびすじ つら どべい お  
餓 鬼 大 将 のために 頸 筋 を 捉 まえられて、うんと精一杯に 土 堀 へ押し付

こんにち いんが あやし  
けられた時の顔が四十年後の 今 日 まで、因 果 をなしておりはせぬかと 怪 まる

るくらい平坦な顔である。至<sup>しごく</sup>極<sup>しごく</sup>穏かで危険のない顔には相違ないが、何となく変化に乏

しい。いくら怒<sup>おこ</sup>っても平<sup>たいら</sup>かな顔である。——その金田君が鮪<sup>まぐろ</sup>の刺身<sup>さしみ</sup>を食っ

て自分で自分の禿<sup>はげ</sup>頭<sup>あたま</sup>をぴちゃぴちゃ叩<sup>たた</sup>く事や、それから顔が低いばかりでなく

背が低いので、無暗に高い帽子と高い下駄を穿く事や、それを車夫がおかしがって書生に話<sup>は</sup>す事や、書生がなるほど君の観察は機敏だと感心する事や、——一々数え切れない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、築<sup>つき</sup>山<sup>やま</sup>の陰から向うを見渡して障子が立て切っ

て物静かであるなど見極めがつくと、徐<sup>そろ</sup>々<sup>そろ</sup>上り込む。もし人声が賑<sup>にぎ</sup>かであるか、

座敷から見透かされる恐れがあると思えば池を東へ廻って雪<sup>せつ</sup>隠<sup>いん</sup>の横から知らぬ間に

椽<sup>えん</sup>の下へ出る。悪い事をした覚<sup>おぼ</sup>えはないから何も隠れる事も、恐れる事もないのだが、

そこが人間と云う無法者に逢っては不運と諦<sup>あきら</sup>めるより仕方がないので、もし世間が

くまさかちょうはん熊<sup>く</sup>坂<sup>ま</sup>長<sup>さ</sup>範<sup>はん</sup>ばかりになったらいかなる盛徳の君子もやはり吾輩のような態度に

出ずるであろう。金田君は堂々たる実業家であるから固<sup>もと</sup>より熊坂長範のように五尺三寸

を振り廻す氣<sup>き</sup>遣<sup>づかい</sup>はあるまいが、承<sup>う</sup>けたまわ<sup>けたまわ</sup>る処によれば人を人と思わぬ病気がある  
そうである。人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。して見れば猫たるものは

いかなる盛徳の猫でも彼の邸内で決して油断は出来ぬ訳<sup>わけ</sup>である。しかしその油断の出来

ぬところが吾輩にはちょっと面白いので、吾輩がかくまでに金田家の門を<sup>しゅつにゆう</sup>出<sup>しゅつ</sup>入<sup>にゆう</sup>す

るのも、ただこの危険が冒<sup>おか</sup>して見たいばかりかも知れぬ。それは追って篤<sup>とく</sup>と考えた上、

猫の脳<sup>のう</sup>裏<sup>り</sup>を残りなく解剖し得た時改めて御<sup>ご</sup>吹<sup>ふ</sup>聴<sup>い</sup>仕<sup>つかまつ</sup>ろう。

今日はどんな模様だなど、例の築山の芝<sup>しば</sup>生<sup>ふ</sup>の上に顎<sup>あご</sup>を押しつけて前面を見渡すと十



やよい おはなし  
五畳の客間を 弥生 の春に明け放って、中には金田夫婦と一人の来客との 御話

さいちゅう あいにく  
最中 である。生憎 鼻子夫人の鼻がこっちを向いて池越しに吾輩の額の上を正

にら  
面から 睨め付けている。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである。金田君は幸い横顔を向けて客と相対しているから例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り鼻の

ありか ごましお くちひげ もせい  
在 所 が判然しない。ただ 胡麻塩色の 口髯 が好い加減な所から乱雑に 茂生し

あな はるかぜ  
ているので、あの上に 孔 が二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。春風 もあ

なめら らく  
あ云う 滑かな顔ばかり吹いていたら定めて 楽だろうと、ついでながら想像を

たくま うち ようぼう  
逞しゅうして見た。御客さんは三人の 中 で一番普通な 容貌 を有している。た

ぞうさく  
だし普通なだけに、これぞと取り立てて紹介するに足るような 雑作 は一つもない。普

きょく のぼ い  
通と云うと結構なようだが、普通の 極 平凡の堂に 上り、庸俗の室に入ったのはむし

びんぜん つらがまえ  
ろ 憫然 の至りだ。かかる無意味な 面構 を有すべき宿命を帯びて明治の

しょうだい  
昭代 に生れて来たのは誰だろう。例のごとく椽の下まで行ってその談話を承わらなく  
くでは分らぬ。

さい ようす  
「……それで 妻 がわざわざあの男の所まで出掛けて行って 容子を聞いたんだがね

おうふう ごう  
……」と金田君は例のごとく 横風 な言葉使である。横風ではあるが 毫も

しゅんけん へいばんぼうだい  
峻嶮 なところがない。言語も彼の顔面のごとく 平板 尨大 である。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がございますので——なるほど、よい御思い付き  
で——なるほど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得ないので」

くしゃみ わけ  
「ええ 苦沙弥 じゃ要領を得ない 訳 で——あの男は私がいっしょに下宿をしている時

に  
分から実に煮え切らない——そりゃ御困りでございましたらう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

わた  
「困るの、困らないのってあなた、私 しゃこの年になるまで人のうちへ行って、あんな  
ふとりあつかい  
不 取 扱 を受けた事はありゃしません」と鼻子は例によって鼻嵐を吹く。

むか がんこ  
「何か無礼な事でも申しましたか、昔 時から頑 固 な性分で——何しろ十年一日のごと  
くリードル専門の教師をしているのでも大体御分りになりましょう」と御客さんは 体 よ  
く調子を合せている。

さい  
「いや御話しにもならんくらいで、妻 が何か聞くとまるで剣もほろろの挨拶だそうで  
……」

け きざ  
「それは怪しからん訳で——一体少し学問をしているととかく慢心が 萌 すもので、その  
上貧乏をすると負け惜しみが出ますから——いえ世の中には随分無法な奴がおりますよ。

むやみ  
自分の働きのないのにや気が付かないで、無 暗 に財産のあるものに喰って掛るなんてえ  
のが——まるで彼等の財産でも捲き上げたような気分ですから驚きますよ、あははは」と

てい  
御客さんは大恐悦の 体 である。

ごんごどうだん ひっきょう わがまま  
「いや、まことに 言 語 同 断 で、ああ云うのは 必 竟 世間見ずの 我 儘 か  
ら起るのだから、ちっと懲らしめのためにいじめてやるが好かろうと思って、少し当って  
やったよ」

だいぶ  
「なるほどそれでは大 分 答えましたらう、全く本人のためにもなる事ですから」と御客  
さんはいかなる当り方か うけたまわ 承 らぬ先からすでに金田君に同意している。

ふくち つき  
「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでしょう。学校へ出ても福 地 さんや、津木

き  
さんには口も利かないんだそうです。恐れ入って黙っているのかと思ったらこの間は罪も

たく  
ない、宅の書生をステッキを持って追っ懸けたってんです——三十面<sup>づら</sup>さげて、よく、  
まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじゃありませんか、全くやけで少し気が変になって  
るんですよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやったんで……」とこれには、さすがの御客さんも  
少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云って通ったんだそうです、すると、いきなり、ステ  
ッキを持って跣<sup>はだし</sup>足で飛び出して来たんだそうです。よしんば、ちっとやそっと、何か云

ひげづら おおぞう  
ったって小供じゃありませんか、髯<sup>ひげづら</sup>面の大僧<sup>おおぞう</sup>の癖にしかも教師じゃありません  
か」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云うと、金田君も「教師だからな」と云う。教師  
たる以上はいかなる侮辱を受けても木像のようにおとなしくしておらねばならぬとはこの  
三人の期せずして一致した論点と見える。

すいきょうじん うそ  
「それに、あの迷亭って男はよっぽどな酔<sup>すいきょうじん</sup>興<sup>うそ</sup>人<sup>うそ</sup>ですね。役にも立たない嘘<sup>うそ</sup>八

わた へんてこ  
百を並べ立てて。私<sup>わたし</sup>しゃあんな変<sup>へんてこ</sup>梃<sup>へんてこ</sup>な人<sup>へんてこ</sup>にゃ初めて逢いましたよ」

ほら  
「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺を吹くと見えますね。やはり苦沙弥の所で御逢いに

なつたんですか。あれに掛っちゃたまりません。あれも昔<sup>むか</sup>し自炊の仲間でしたがあんま

よ  
り人を馬鹿にするものですから能く喧嘩をしましたよ」

よ  
「誰だって怒りまさあね、あんなじゃ。そりゃ嘘をつくのも宜うござんしょうさ、ね、義  
理が悪るとか、ばつを合せなくっちゃあならないとか——そんな時には誰しも心でない

つ やたら  
事を云うもんでさあ。しかしあの男のは吐かなくてすむのに矢<sup>つ</sup>鱈<sup>やたら</sup>に吐くんだから始末

お であらめ  
に了えないじゃありませんか。何が欲しくって、あんな出<sup>お</sup>鱈<sup>であらめ</sup>目を——よくまあ、しらじ  
らしく云えると思いますよ」

「ごもつともで、全く道楽からくる嘘だから困ります」

めちやめちや  
「せっかくあなた真面目に聞きに行った水島の事も滅茶滅茶になってしまいました。

わたし ごうはら いまいま  
私 ゃ 剛 腹 で 忌 々 しくって——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を

あと  
聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりですから、後 で車夫にビールを一ダース持たせてやったんです。ところがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理由がない、持って帰れって云うんだそうで。いえ御礼だから、どうか御取り下さいって車夫が云つたら——

に な にか  
悪くいじゃありませんか、俺はジャムは毎日舐めるがビールのような 苦 い者は飲んだ

はい  
事がないって、ふいと奥へ這入ってしまったって——言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じゃありませんか」

ひど  
「そりゃ、ひどい」と御客さんも今度は本気に 苛 いと感じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者は陰から、からかってさえいればすむようなものの、少々それでも困る事がある

まぐろ はげあたま たた  
るじゃて……」と 鮪 の刺身を食う時のごとく 禿 頭 をぴちゃぴちゃ 叩 く。も

えん  
つとも吾輩は 椽 の下にいるから実際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿

だいぶ びくに  
頭の音は近来 大 分 聞馴れている。比丘尼が木魚の音を聞き分けるごとく、椽の下からで

しゅっしょ  
も音さえたしかであればすぐ禿頭だなど 出 所 を鑑定する事が出来る。「そこでちよ

わずら  
つと君を 煩 わしたいと思ってな……」

「私に出来ます事なら何でも御遠慮なくどうか——今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますから」と御客さんは快よく

くちょう  
金田君の依頼を承諾する。この 口 調 で見るとこの御客さんはやはり金田君の世話にな

いと見える。いやだんだん事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天気が宜いので、

え が  
来る気もなしに来たのであるが、こう云う好材料を得ようとは全く思い掛けなんだ。

おひが<sup>ん</sup> てら<sup>まい</sup> ほう<sup>じょう</sup> ぼた<sup>もち</sup>  
御 彼 岸 にお 寺 詣 りをして偶然 方 丈 で 牡 丹 餅 の御馳走になるような者だ。  
金田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下から耳を澄して聞いている。

「あの苦沙弥と云う 変<sup>へんぶつ</sup> 物 が、どう云う訳か水島に入れ<sup>い</sup> 智<sup>ちえ</sup> 慧をするので、あの金田の

娘<sup>い</sup>を貰っては行かんなどとほのめかすそうだ——なあ鼻子そうだな」

「ほのめかすどころじゃないんです。あんな奴の娘を貰う馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決して貰っちゃいかんよって云うんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云ったのか」

「云ったどころじゃありません、ちゃんと車屋の神さんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞の通りの次第さ、随分厄介だろうが？」

「困りますね、ほかの事と違って、こう云う事には他人が 妄<sup>みだ</sup> りに 容<sup>ようかい</sup> 喙 するべきはずの者ではありませんからな。そのくらいな事はいかな苦沙弥でも心得ているはずですが、一体どうした訳なんでしょう」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をしていて、今はとにかく、昔は親密な間柄

であったそうだから御依頼するのだが、君当人に逢ってな、よく利害を 論<sup>さと</sup> して見てくれ

んか。何か 怒<sup>おこ</sup> っているかも知れんが、怒るのは 向<sup>むこう</sup> が 悪<sup>わ</sup> るいからで、先方がおとなし

くしてさえいれば一身上の便宜も充分計ってやるし、気に障わるような事もやめてやる。

しかし向が向ならこっちもこっちと云う気になるからな——つまりそんな我を張るのは当人の損だからな」

「ええ全くおっしゃる通り 愚<sup>ぐ</sup> かな抵抗をするのは本人の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く申し聞けましょう」

「それから娘はいろいろと申し込もある事だから、必ず水島にやると極める訳にも行かんが、だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあるいはもらう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほのめかしても構わん」

「そう云ってやったら当人も 励<sup>はげ</sup> みになって勉強する事でしょう。 宜<sup>よろ</sup> しゅうございます」

「それから、あの妙な事だが——水島にも似合わん事だと思うが、あの <sup>へんぶつ</sup> 変物の苦沙弥を先生先生と云って苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だから困る。なにそりゃ何も水島に限る訳では無論ないのだから苦沙弥が何と云って邪魔をしようと、わしの方は別に <sup>さしつか</sup> 差支えもせんが……」

「水島さんが可哀そうですからね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢った事もございませぬが、とにかくこちらと御縁組が出来ればしょうがい <sup>生</sup> 涯の幸福で、本人は無論異存はないのでしょう」

「ええ水島さんは貰いたがっているんですが、苦沙弥だの迷亭だのって変り者が何だとか、かんだとか云うものですから」

「そりゃ、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合わん <sup>しよさ</sup> 所作ですな。よく私が苦沙弥の所へ参って談じましょう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番 <sup>くわ</sup> 詳しい

いのだがせんだって <sup>さい</sup> 妻が行った時は今の始末で <sup>ろくろく</sup> 碌々聞く事も出来なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから廻ったら、もう帰っております。近頃はどこに住んでおりますか知らん」

「この前を右へ突き当って、左へ一丁ばかり行くと崩れかかった黒塀のあるうちです」と鼻子が教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。帰りにちょっと寄って見ましょう。なあ

に、大体分りましょう <sup>ひょうさつ</sup> 標札を見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺を <sup>ごぜんつぶ</sup> 御饅粒で門へ貼り付けるのでし

は <sup>は</sup> よう。雨がふると剥がれてしまひましょう。すると御天気の日にまた貼り付けるのです。

だから標札は <sup>あて</sup> 当にやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて <sup>きふだ</sup> 木札でも懸けたらよさそうなものですがねえ。ほんとうにどこまでも気の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしょう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれ

は  
で分らなければ、<sup>は</sup> 好い事がある。何でも屋根に草が生えたうちを探して行けば間違っこありませんよ」

いえ  
「よほど特色のある<sup>いえ</sup> 家<sup>いえ</sup> ですなアハハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫  
えん せついん つきやま  
沢山である。椽<sup>えん</sup>の下を伝わって雪<sup>せついん</sup> 隠<sup>つきやま</sup>を西へ廻って築<sup>つきやま</sup> 山<sup>つきやま</sup>の陰から往来へ出て、  
急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ帰って来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

しろげつと はらばい うらら はるび こうら  
主人は椽側へ白<sup>しろげつと</sup> 毛<sup>しろげつと</sup> 布<sup>しろげつと</sup>を敷いて、腹<sup>はらばい</sup> 這<sup>はらばい</sup> になって麗<sup>うらら</sup> かな春日に甲<sup>はるび</sup> 羅<sup>こうら</sup>を

ろうおく  
干している。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペンペン草の目標のある陋<sup>ろうおく</sup> 屋<sup>ろうおく</sup>でも、

けつと  
金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、<sup>けつと</sup> 毛<sup>けつと</sup> 布<sup>けつと</sup>だけが春らしくな

とうぶつや さば  
い。製造元では白のつもりで織り出して、唐<sup>とうぶつや</sup> 物<sup>とうぶつや</sup> 屋<sup>とうぶつや</sup>でも白の気で売り<sup>さば</sup> 捌<sup>さば</sup> いたのみならず、主人も白と云う注文で買って来たのであるが——何しろ十二三年以前の事だから白

のうかいしよく そうぐう  
の時代はとくに通り越してただ今は濃<sup>のうかいしよく</sup> 灰<sup>のうかいしよく</sup> 色<sup>のうかいしよく</sup>なる変色の時期に遭<sup>そうぐう</sup> 遇<sup>そうぐう</sup> しつつある。この時期を経過して他の暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかは、疑問で

す たてよこ  
ある。今でもすでに万遍なく擦り切れて、堅<sup>す</sup> 横<sup>たてよこ</sup>の筋は明かに読まれるくらいだから、

せんじょう はぶ  
毛布と称するのはもはや僭<sup>せんじょう</sup> 上<sup>せんじょう</sup>の沙汰であって、毛の字は省<sup>はぶ</sup> いて単にツトとでも申すのが適当である。しかし主人の考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持った以

しょうがい のんき  
上は生<sup>しょうがい</sup> 涯<sup>しょうがい</sup> 持たねばならぬと<sup>しょうがい</sup> 思っているらしい。随分呑<sup>のんき</sup> 気<sup>のんき</sup>な事である。さてその

いんねん けつと ぜん  
因<sup>いんねん</sup> 縁<sup>いんねん</sup>のある毛<sup>けつと</sup> 布<sup>けつと</sup>の上へ前<sup>ぜん</sup> 申す通り腹<sup>ぜん</sup> 這<sup>ぜん</sup> になって何をしているかと思うと両手で

あご まきたばこ  
出張った顎<sup>あご</sup> を支えて、右手の指の股に巻<sup>まきたばこ</sup> 煙<sup>まきたばこ</sup> 草<sup>まきたばこ</sup>を挟んでいる。ただそれだけである。

うち  
もっとも彼がフケだらけの頭の裏<sup>うち</sup> には宇宙の大真理が火の車のごとく廻転しつつあるかも知れないが、外部から拝見したところでは、そんな事とは夢にも思えない。

せま　　いっすん  
煙草の火はだんだん吸口の方へ 逼 っ て、一 寸 ばかり燃え尽した灰の棒がぱたりと  
のぼ  
毛布の上に落つるのも構わず主人は一生懸命に煙草から立ち 上 る煙の行末を見詰めてい  
いくえ  
る。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を 幾 重 にも描いて、紫深き細君の  
あらいがみ  
洗 髪 の根本へ吹き寄せつつある。——おや、細君の事を話しておくはずだった。忘  
れていた。

しり  
細君は主人に 尻 を向けて——なに失礼な細君だ？ 別に失礼な事はないさ。礼も非礼  
ほおづえ  
も相互の解釈次第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のところへ 頬 杖 を突き、  
そうごん　　す　　へちま  
細君は平気で主人の顔の先へ 荘 厳 なる尻を据えたまでの事で無礼も 糸 瓜 もないの  
ま  
である。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間に礼儀作法などと窮屈な境遇を脱却せられた超  
りょうけん  
然的夫婦である。——さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう云う 了 見 か、  
ふのり  
今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒髪を、麩海苔と生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見  
えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけて、無言のまま小供の袖なしを熱心に  
とうちりめん　ふとん　　えんがわ  
縫っている。実はその洗髪を乾かすために 唐 縮 緬 の布 団 と針箱を 椽 側 へ出  
うやうや　　けんとう  
して、 恭 しく主人に尻を向けたのである。あるいは主人の方で尻のある 見 当 へ  
たばこ　　なび  
顔を持って来たのかも知れない。そこで先刻御話しをした 煙 草 の煙りが、豊かに 靡 く  
かげろう  
黒髪の中に流れ流れて、時ならぬ 陽 炎 の燃えるところを主人は余念もなく眺めている。

もと　　いっしょ　とど  
しかしながら煙は 固 より 一 所 に 停 まるものではない、その性質として上へ上へ  
かみげ　もつ  
と立ち登るのだから主人の眼もこの煙りの 髪 毛 と 纏 れ合う奇観を落ちなく見ようと  
すれば、是非共眼を動かさなければならない。主人はまず腰の辺から観察を始めて



じょじょ つた くびすじ  
徐々と背中を伝って、肩から頸筋に掛ったが、それを通り過ぎてようよう脳

天に達した時、覺えずあつと驚いた。——主人が偕老同穴を契った夫人の脳

まんまる はげ  
天の真中には真丸な大きな禿がある。しかもその禿が暖かい日光を反射して、今や

時を得顔に輝いている。思わざるへん にこの不思議な大発見をなした時の主人の眼はまば

ゆい中に充分の驚きを示して、烈しい光線で瞳孔の開くのも構わず一心不乱に見つめ

ている。主人がこの禿を見た時、第一彼の脳裏に浮んだのはかの家伝来の仏壇に幾世

おとうみょうざら いっけ  
となく飾り付けられたる御灯明皿である。彼の一家は真宗で、真宗では仏壇  
に身分不相応な金を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家の倉の中に、薄暗く飾

きんぱく ずし しんちゅう  
り付けられたる金箔厚き厨子があつて、その厨子の中にはいつでも真鍮の灯

明皿がぶら下つて、その灯明皿には昼でもぼんやりした灯がついていた事を記憶している。  
周囲が暗い中にこの灯明皿が比較的明瞭に輝やっていたので小供心にこの灯を何遍となく

よ  
見た時の印象が細君の禿に喚び起されて突然飛び出したものであろう。灯明皿は一分立た

ま たび かのんさま  
ぬ間に消えた。この度は観音様の鳩の事を思い出す。観音様の鳩と細君の禿と  
は何等の関係もないようであるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく小

ぶんきゅう  
供の時分に浅草へ行くと必ず鳩に豆を買ってやった。豆は一皿が文久二つで、赤い

かわらけ はい かわらけ おおき  
土器へ這入っていた。その土器が、色と云い大さと云いこの禿によく似て  
いる。

「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だって、御前の頭にや大きな禿があるぜ。知ってるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。

超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前

だま うち  
から禿げているなら 欺 されたのであると口へは出さないが心の 中 で思う。

い  
「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだって宜いじゃありませんか」と  
おおい  
大 に悟ったものである。

「どうだって宜って、自分の頭じゃないか」と主人は少々怒気を帯びている。

い  
「自分の頭だから、どうだって宜いんだわ」と云ったが、さすが少しは気になると見えて、  
な だいぶ  
右の手を頭に乘せて、くるくる禿を撫でて見る。「おや 大 分 大きくなった事、こんなじ  
ゃ無いと思っていた」と言ったところをもって見ると、年に合わせて禿があまり大き過ぎ  
ると云う事をようやく自覚したらしい。

まげ ゆ  
「女は 鬘 に結うと、ここが釣れますから誰でも禿げるんですわ」と少しく弁護しだす。

やかん  
「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいになれば、から 薬 缶 ばかり出来なければ  
ならん。そりゃ病気に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」

な  
と主人はしきりに自分の頭を撫で廻して見る。

あな しらが は  
「そんなに人の事をおっしゃるが、あなただって鼻の 孔 へ 白 髪 が生えてるじゃありま  
せんか。禿が伝染するなら白髪だって伝染しますわ」と細君少々ぶりぶりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が——ことに若い女の脳天がそんなに禿げ

かたわ  
ちや見苦しい。不 具 だ」

かたわ  
「不 具 なら、なぜ御貰いになったのです。御自分が好きで貰っておいて不具だなんて……」

きょう  
「知らなかったからさ。全く 今 日 まで知らなかったんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁  
に来る時頭を見せなかったんだ」

「馬鹿な事を！ どの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもん  
ですか」

せ はず  
「禿はまあ我慢もするが、御前は背いが人並 外 れて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじゃありませんか、<sup>せい</sup>背の低いのは最初から承知で御貰いになつたんじゃありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思ったから貰ったのさ」

「<sup>はたち</sup>廿にもなって背いが延びるなんて——あなたもよっぽど人を馬鹿になさるのね」と

細君は<sup>そで</sup>袖なしを<sup>ほう</sup>抛り出して主人の方に<sup>ね</sup>振り向く。返答次第ではその分にはすまさんと

<sup>けんまく</sup>云う<sup>権</sup>幕である。

「<sup>はたち</sup>廿になつたって背いが延びてならんと云う法はあるまい。嫁に来てから滋養分でも

食わしたら、少しは延びる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔をして<sup>りくつ</sup>妙な<sup>理窟</sup>を

述べていると<sup>かどぐち</sup>門口のベルが<sup>いきおい</sup>勢よく鳴り立てて頼むと云う大きな声がする。い

よいよ鈴木君がペンペン草を<sup>めあて</sup>目的に<sup>くしゃみ</sup>苦沙弥先生の<sup>がりょうくつ</sup>臥竜窟を尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲って、<sup>そうこう</sup>倉皇<sup>かか</sup>針箱と袖なしを抱えて茶の間へ逃げ込む。主人

は<sup>けつと</sup>鼠色の毛布を丸めて書斎へ投げ込む。やがて下女が持って来た名刺を見て、主人はちよつと驚ろいたような顔付であったが、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握つ

<sup>こうか</sup>たまま<sup>はい</sup>後架へ這入った。何のために後架へ急に這入ったか一向要領を得ん、何のために

<sup>すずきとうじゅうろう</sup>鈴木藤十郎君の名刺を後架まで持って行ったのかなおさら説明に苦しむ。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜられた名刺君である。

下女が<sup>さらさ</sup>更紗の座布団を<sup>とこ</sup>床の前へ直して、どうぞこれへと引き下がった、<sup>あと</sup>跡で、

鈴木君は一応室内を見廻わす。床に掛けた<sup>はなひらくばんこくのはる</sup>花開万国春とある<sup>もくあん</sup>木菴

に<sup>にせもの</sup>贗物や、京製の<sup>やすせいじ</sup>安青磁に活けた<sup>い</sup>彼岸<sup>ひがんざくら</sup>桜などを一々順番に点検したあ

とで、ふと下女の勧めた布団の上を見るといつの間にか一疋の猫がすまして坐っている。申すまでもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君の胸のうちにちょっとした間顔色にも出ぬほどの風波が起った。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然と  
蹲 踞 している。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。もしこの布団が勧

められたまま、主 なくして春風の吹くに任せてあったなら、鈴木君はわざと 謙 遜 の

意を 表 して、主人がさあどうぞと云うまでは堅い畳の上で我慢していたかも知れない。しかし早晚自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく乗ったものは誰であろう。人間なら譲

る事もあるが猫とは怪しからん。乗り手が猫であると云うのが一段と不愉快を感じしめる。これが鈴木君の心の平均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度がもっとも しゃく 癩 に障る。少しは気の毒そうにでもしている事か、乗る権利もない布団の上に、

傲 然 と構えて、丸い 無 愛 嬌 な眼をぱちつかせて、御前は誰だいと云わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。これが平均を破壊する第三の条件である。これほど不平

があるなら、吾輩の 頸 根 っこを 捉 えて引きずり卸したら宜さそうなものだが、鈴木君はだまって見ている。堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云う事は有ろうはずがな

いの、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を洩らさないかと云うと、これは全く鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自重心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであろうが、体面を重んずる点より考える

といかに金田君の 股 肱 たる鈴木藤十郎その人もこの二尺四方の真中に鎮座まします猫大

明神を 如 何 ともする事が出来ぬのである。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争い

をしたとあってはいささか人間の威厳に関する。真面目に猫を相手にして 曲 直 を

争うのはいかにも大 人 気 ない。滑稽である。この不名誉を避けるためには多少の不便は

ぞうお  
忍ばねばならぬ。しかし忍ばねばならぬだけそれだけ猫に対する憎悪の念は増す訳であ

にが  
るから、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見

おさ  
するのが面白いから滑稽の念を抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。

えもん  
吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に主人は衣紋をつくる

こうか  
って後架から出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬと  
ころをもって見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。

やくうん ま  
名刺こそ飛んだ厄運に際会したものだと思う間もなく、主人はこの野郎と吾輩の

えり つか えんがわ たた  
襟がみを攫んでえいとばかりに椽側へ擲きつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来た」と主人は旧友に向って布団を勧め  
る。鈴木君はちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかったが、実はこの間から東京の本社の方へ帰  
るようになってね……」

だいぶ いなか  
「それは結構だ、大分長く逢わなかったな。君が田舎へ行ってから、始めてじゃない  
か」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東京へは出て来る事もあるのだが、つい

わ  
用事が多いもんだから、いつでも失敬するような訳さ。悪く思ってくれたもうな。会社  
の方は君の職業とは違って随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違うもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしてい

きれい えりかざ  
る。鈴木君は頭を美麗に分けて、英国仕立のトウィードを着て、派手な襟飾りを

くしゃみ  
して、胸に金鎖りさえピカつかせている体裁、どうしても苦沙弥君の旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならんようになってね」と鈴木君はしきりに金  
鎖りを気にして見せる。

ぶさほう  
「そりゃ本ものかい」と主人は無作法な質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが「君も大分年を取ったね。たしか小供があ

るはずだったが一人かい」

「いや」

「二人？」

「いや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先 <sup>いくにん</sup> 幾人 出来るか分らん」

「相変らず気楽な事を云ってるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよっぽどだろう」

「うん、いくつか <sup>よ</sup> 能く知らんが <sup>おおかた</sup> 大方 六つか、七つかだろう」

「ハハハ教師は <sup>のんき</sup> 呑気 でいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なって見ろ、三日で <sup>いや</sup> 嫌 になるから」

「そうかな、何だか上品で、気楽で、閑暇があつて、すきな勉強が出来て、よさそうじゃないか。実業家も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家になるならずと上にならなくっちゃいかん。下の方になるとやはりつまらん御世辞を振り撒いたり、好かん <sup>ま</sup> 猪 <sup>ちよこ</sup> 口 を

いただきに出たり随分 <sup>ぐ</sup> 愚なもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れば何でもする、昔で云えば <sup>すちょうにん</sup> 素町人 だからな」と実業家を前に <sup>ひか</sup> 控 えて太平楽を並べる。

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下品なところもあるのさ、とにかく <sup>かね</sup> 金 と

<sup>しんじゅう</sup> 情死 をする覚悟でなければやり通せないから——ところがその金と云う奴が

<sup>くせもの</sup> 曲者 で、——今もある実業家の所へ行つて聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなくちゃいけないと云うのさ——義理をかく、人情をかく、恥をかくこれで三角になるそう面白いじゃないかアハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちょっと有名だがね、君知らんかしら、ついこの先の横丁にいるんだが」

な  
「金田か？ 何んだあんな奴」

じょうだん  
「大変怒ってるね。なあに、そりゃ、ほんの冗談だろうがね、そのくらいにせんと

たとえ  
金は溜らんと云う喩さ。君のようにそう真面目に解釈しちゃ困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はなんだ。君行ったんなら見て来たらう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

はいたいし  
「鼻だよ、大きな鼻の事を云ってるんだ。せんだって僕はあの鼻について俳体詩を作ったがね」

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

とうてい すき  
「ああ僕のように忙がしいと文学などは到底駄目さ。それに以前からあまり数奇でない方だから」

かつこう  
「君シャーレマンの鼻の恰好を知ってるか」

「アハハハハ随分気楽だな。知らんよ」

いみょう  
「エルリントンは部下のものから鼻々と異名をつけられていた。君知ってるか」

と  
「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじゃないか鼻なんか丸くても尖んがってても」

「決してそうでない。君パスカルの事を知ってるか」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たようなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

きた  
「もしクレオパトラの鼻が少し短かったならば世界の表面に大変化を来したろうと」  
「なるほど」

むぞうさ  
「それだから君のようにそう無雑作に鼻を馬鹿にしてはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりゃそうとして、今日来たのは、少し君に用

事があつて来たんだがね——あの <sup>もと</sup>元君の教えたとか云う、水島——ええ水島ええちよつと思ひ出せない。——そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

かんげつ  
「寒月か」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちょっと聞きたい事があつて来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行ったら……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだって、細君もそう云っていたよ。苦沙弥さんに、よく伺おうと思つて上

あいにく  
つたら、<sup>生</sup>憎迷亭が来ていて茶々を入れて何が何だか分からなくしてしまつたつて」

「あんな鼻をつけて来るから悪るいや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がおつたもんだから、そう立ち入つた事を聞く訳にも行かなかつたので残念だつたから、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれな  
いかつて頼まれたものだからね。僕も今までこんな世話はした事はないが、もし当人同士

い <sup>まと</sup>  
が嫌やでないなら中へ立つて <sup>纏</sup>めるのも、決して悪い事はないからね——それでやつて  
来たのさ」

ことば  
「御苦労様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では当人同士と云う <sup>語</sup>を聞いて、どう

云う訳か分らんが、ちょっと心を動かしたのである。<sup>む</sup>蒸し熱い夏の夜に一 <sup>いちる</sup>縷の <sup>れいふう</sup>冷風

そでぐち <sup>くぐ</sup>  
が袖口を潜つたような気分になる。元来この主人はぶつ切ら棒の、頑固 <sup>がんこつや</sup>光沢消

むね  
しを <sup>旨</sup>として製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情な文明の産物とは

おのず <sup>せん</sup> <sup>こと</sup>  
自 <sup>なん</sup>からその撰を異にしている。彼が何ぞと云うと、むかつ腹をたててぶんぷ

しやり <sup>えとく</sup>  
んするのも <sup>えとく</sup>這裏の消息は <sup>えとく</sup>会得できる。先日鼻と喧嘩をしたのは鼻が気に食わぬから  
で鼻の娘には何の罪もない話しである。実業家は嫌いだから、実業家の片割れなる金田某

きらい  
も嫌に相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も

うら  
恨みもなく、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生である。もし鈴木君の云う



ごとく、当人同志が好いた仲なら、間接にもこれを妨害するのは君子のなすべき所<sup>しよさ</sup>作でない。——苦沙弥先生はこれでも自分を君子と思っている。——もし当人同志が好いているなら——しかしそれが問題である。この事件に対して自己の態度を改めるには、まずその真相から確めなければならん。

「君その娘は寒月の所へ来たがってるのか。金田や鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりゃ、その——何だね——何でも——え、来たがってるんだろうじゃないか」鈴木君

の挨拶は少々<sup>あいまい</sup>曖昧である。実は寒月君の事だけ聞いて復命さえすればいいつもりで、

御嬢さんの意向までは確かめて来なかったのである。従って円転<sup>かつだつ</sup>滑脱の鈴木君もちよ

ろ<sup>ろうばい</sup>うばいと狼<sup>ろうばい</sup> 狼<sup>ろうばい</sup>の気味に見える。

「だろうた判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちょっと僕の云いようがわるかった。令嬢の方でもたしかに意<sup>い</sup>があるんだよ。いえ全くだよ——え？——細君が僕にそう云ったよ。何でも時々は寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪<sup>け</sup>しからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじゃ寒月に意<sup>い</sup>がないんじゃないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いている人の悪口などは殊<sup>ことさら</sup>更<sup>ことさら</sup>云って見る事もあるからね」

「そんな愚<sup>ぐ</sup>な奴がどこの国にいるものか」と主人は斯<sup>かよう</sup>様な人情の機微に立ち入った事を

云われても頓<sup>とん</sup>と感じが無い。

「その愚<sup>ぐ</sup>な奴が随分世の中にあるから仕方がない。現に金田の妻君もそう解釈している

のさ。戸<sup>とまど</sup>惑<sup>へちま</sup>いをした糸瓜<sup>へちま</sup>のようだなんて、時々寒月さんの悪口を云いますから、よっ

ぽど心の<sup>うち</sup>中<sup>うち</sup>では思ってるに相違ありませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだから、眼を丸くして、

だいでうえきしゃ じつ  
返答もせず、鈴木君の顔を、大 道 易 者 のように 睨 と見つめている。鈴木君は

こいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなど 疝 づいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。

「君考えても分るじゃないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつ

うち  
て相応の 家 へやれるだろうじゃないか。寒月だつてえらいかも知れんが身分から云や——いや身分と云っちゃ失礼かも知れない。——財産と云う点から云や、まあ、だれが見

たつて釣り合はんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が氣を揉んでるのは本人が寒月君に意があるからの事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなと

とつかん  
ころにまごまごしているとまた 啗 喊 を喰う危険があるから、早く話しの歩を進めて、

まっと  
一刻も早く使命を 完 うする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で云うには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に附属した資格が欲しい——資格と云うと、まあ肩書だね、——博士になったらやってもいいなんて威張ってる次第じゃない——誤解しちゃいかん。せんだつて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云うものだから——いえ君が悪いのじゃない。細君も

かた ほ  
君の事を御世辞のない正直ないい 方 だと賞めていたよ。全く迷亭君がわるかったんだろう。——それでさ本人が博士にでもなってくれば先方でも世間へ対して肩身が広い、

めんぼく きんきん  
面 目 があると云うんだがね、どうだろう、近 々 の内水島君は博士論文でも呈出して、博士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあに——金田だけなら博士も学士もいらんのさ、ただ世間と云う者があるとね、そう手軽にも行かんからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りにしてやりたくなる。主

い  
人を活かすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人

ただ  
が金田の娘を貰うつもりかどうだか、それからまず問い 正 して見なくちゃいかんからな」

かどば まと  
「問い正すなんて、君そんな角張った事をして物が纏まるものじゃない。やっぱり普通の談話の際にそれとなく気を引いて見るのが一番近道だよ」

「気を引いて見る？」

「うん、気を引くと云うと語弊があるかも知れん。——なに気を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりゃ、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊わすの

たとい  
は善くないと思う。仮令勧めないまでも、こんな事は本人の随意にすべきはずのものだからね。今度寒月君が来たらなるべくどうか邪魔をしないようにしてくれ給え。——いえ君の事じゃない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかかると到底助かりっこないんだから」

うわさ たとえも  
と主人の代理に迷亭の悪口をきいていると、噂をすれば陰の喩に洩れず迷亭先

ひょうぜん しゅんぷう  
生例のごとく勝手口から飄然と春風に乗じて舞い込んで来る。

こうかく くしゃみ  
「いや—珍客だね。僕のような狎客になると苦沙弥はとかく粗略にしたがっていかん。何でも苦沙弥のうちへは十年に一遍くらいくるに限る。この菓子はいつもより上等

ふじむら ようかん むぞうさ ほおば  
じゃないか」と藤村の羊羹を無雑作に頬張る。鈴木君はもじもじしている。主人はにやにやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾輩はこの瞬時の光景を

えんがわ ぜんけ  
椽側から拝見して無言劇と云うものは優に成立し得ると思った。禅家で無言の問答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれどもすこぶる鋭い幕である。

たびがらす ま ながいき  
「君は一生旅鳥かと思ってたら、いつの間にか舞い戻ったね。長生はしたい

ぎょうこう めぐ  
もんだな。どんな僥倖に廻り合わんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に対し

ごう  
ても主人に対するごとく毫も遠慮と云う事を知らぬ。いかに自炊の仲間でも十年も逢わ

そぶり  
なければ、何となく気のおけるものだが迷亭君に限って、そんな素振も見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちょっと見当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は当らず <sup>さわ</sup>障らずの返事はしたが、何となく落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を発する。

「今日は諸君からひやかされに来たようなものだ。なんぼ田舎者だって——これでも  
がいてつ  
街 鉄 を六十株持ってるよ」

「そりゃ馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持っていたが、惜しい事に <sup>おおかた</sup>大方虫が喰ってしまって、今じゃ半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところを十株ばかりやるところだったが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、ああ云う株は持ってて損はないよ、  
ねんねん  
年々 高くなるばかりだから」

「<sup>たとい</sup>そうだ 仮令半株だって千年も持ってるうちにや倉が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかりはない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などは憐れなものだ。株と云

えば大根の兄弟分くらいに考えているんだから」とまた <sup>ようかん</sup>羊糞をつまんで主人の方を見

ると、主人も迷亭の食いが伝染して <sup>く け おの</sup>自ずから菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のものが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は <sup>そろさき</sup>曾呂崎に一度でいいから電車へ乗らしてやりたかつ

た」と主人は喰い欠けた羊糞の <sup>はあと ぶぜん</sup>齒痕を撫然として眺める。

「曾呂崎が電車へ乗ったら、乗るたんびに品川まで行ってしまふは、それよりやっぱり  
てんねんこじ たくあんいし ほ  
天然居士で 沢庵石へ彫り付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ、いい頭の男だったが惜しい事をした」

<sup>ただ</sup>と鈴木君が云うと、迷亭は直ちに引き受けて

「<sup>た</sup>頭は善かったが、飯を焚く事は一番下手だったぜ。曾呂崎の当番の時には、僕あいつで

も外出をして蕎麦で <sup>そば しの</sup>凌いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦げくさくって 心 があって僕も弱った。御負けに 御 菜  
に必ず豆腐をなまで食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴木君も十年前の不平  
を記憶の底から 喚び起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で每晚いっしょに 汁 粉 を食いに出了が、その 崇  
りで今じゃ慢性胃弱になって苦しんでいるんだ。実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計  
食ってるから曾呂崎 [ # 「曾呂崎」は底本では「曾兄崎」 ] より先へ死んで 宜い 訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と号して、毎晩 竹 刀 を持  
って裏の 卵 塔 婆 へ出て、石塔を 叩 いてるところを坊主に見つかって 剣 突 を食  
ったじゃないか」と主人も負けぬ気になって迷亭の旧悪を 曝 く。

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれって言っ  
たっけ。しかし僕のは竹刀だが、この鈴木将軍のは 手 暴 だぜ。石塔と相撲をとって大小  
三個ばかり転がしてしまったんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非元のように起せと云うから人足を 備 う  
まで待ってくれと云ったら人足じゃいかな 懺 悔 の意を表するためにあなたが自身で起さ  
なくては仏の意に 背 くと云うんだからね」

「その時の君の 風 采 はなかったぜ、 金 巾 のしゃつに 越 中 禪 で雨  
上りの水溜りの中でうんうん 唸 って……」

「それを君がすました顔で写生するんだから 苛 い。僕はあまり腹を立てた事のない男だ  
が、あの時ばかりは失敬だと 心 から思ったよ。あの時の君の言草をまだ覚えているが君  
は知ってるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えているものか、しかしあの石塔に 帰 泉 院 殿

こうかくだいこじ たつ ほ  
黄 鶴 大 居 士 安永五年 辰 正月と彫ってあったのだけはいまだに記憶している。あ  
の石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す時に盗んで行きたかったくらいだ。実に美学上の

かな  
原理に 叶 って、ゴシック趣味な石塔だった」と迷亭はまた好い加減な美学を振り廻す。

「そりゃいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾輩は美学を専攻するつもりだから

てんちかん  
天 地 間 の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなければならん、

かわいそう  
気の毒だの、可 哀 相 だのと云う私情は学問に忠実なる吾輩ごときものの口にすべきと  
ころでないで平気で云うのだろう。僕もあんまりな不人情な男だと思ったから泥だらけの  
手で君の写生帖を引き裂いてしまった」

とんざ いっこう  
「僕の有望な画才が 頓 挫 して 一 向 振わなくなったのも全くあの時からだ。君に

きほう うらみ  
機 鋒 を折られたのだね。僕は君に 恨 がある」

「馬鹿にしちゃいけない。こっちが恨めしいくらいだ」

ほらふき ようかん おわ  
「迷亭はあの時分から法 螺 吹 だったな」と主人は 羊 糞 を食い 了 って再び二人の  
話の中に割り込んで来る。

りこう わ か  
「約束なんか 履 行 した事がない。それで詰問を受けると決して詫びた事がない何とか蚊

さるすべり  
とか云う。あの寺の境内に 百 日 紅 が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原

論と云う著述をすると云うから、駄目だ、到底出来る 氣 遣 はないと云ったのさ。する  
と迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である、そんなに疑うなら

かけ おご  
賭 をしようと云うから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を 奢 りっこかなに

き  
かに極めた。きつと書物なんか書く気遣はないと思ったから賭をしたようなものの内心は

少々恐ろしかった。僕に西洋料理なんか奢る金はないんだからな。ところが先生 一 向

けしき なぬか はつか  
稿を起す景色がない。七日立っても二十日立っても一枚も書かない。いよいよ百日紅が散って一輪の花もなくなっても当人平気であるから、いよいよ西洋料理に有りついた

せま  
など思つて契約履行を逼ると迷亭すまして取り合わない」

りくつ  
「また何とか理窟をつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。  
「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能はないが意志だけは決して君方に負けはせんと剛情を張るのさ」

「一枚も書かぬのか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

なんびと  
「無論さ、その時君はこう云つたぜ。吾輩は意志の一点においてはあえて何人にも一歩も譲らん。しかし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日紅の散るまでに著書が出来なかつたのは記憶の罪で意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を発揮して面白い」と鈴木君はなぜだか面白がっている。迷亭のおらぬ時の語気とはよほど違っている。これが利口な人の特色かも知れない。

おこ  
「何が面白いものか」と主人は今でも怒っている様子である。

うめあわ くじゃく  
「それは御気の毒様、それだからその埋合せをするために孔雀の舌なんかを金

と太鼓で探しているじゃないか。まあそう怒らずに待っているさ。しかし著書と云えば

もた  
君、今日は一大珍報を齎らして来たんだよ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が出来ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起したのを知っているか。寒月はあんな妙に見識張った男だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思つたら、あれでやっぱり色気があるからおかしいじゃないか。

どんぐりはかせ  
君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃は団栗博士の夢でも見ているかも知れない」

あご  
鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話してはいけぬと顔と眼で主人に合図す

る。主人には一 向 意味が通じない。さっき鈴木君に逢って説法を受けた時は金田の娘の事ばかりが気の毒になったが、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々は悪 らしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけたのは何よりの御見やげで、こればかりは迷亭先生自賛のごとくまずまず近來の珍報である。 昔 に珍報のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分のように出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで白 木のまま 燻 っけていてもいかに うま 旨 く仕上がったと思う彫刻には一日も早く 箔 を塗ってやりたい。

の  
「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図はそっち除けにして、熱心に聞く。

どんぐり くびくく  
「よく人の云う事を疑ぐる男だ。——もっとも問題は 団 栗 だか 首 縊 りの力学だ

しか  
か 確 と分らんがね。とにかく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違いない」

さっきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞いたんに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気が付かないから平気なものである。

はなろん  
「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリストラム・シャンデーの中に 鼻 論 があるのを発見した。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料になったろうに残念な

びめい せんざい く  
事だ。鼻 名 を 千 載 に垂れる資格は充分ありながら、あのままで朽ち果つるとは

ふびんせんばん  
不 憫 千 万 だ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写生してやろう」と相変ら

でまか しゃべ  
ず口から 出 任 せに 喋 舌 り立てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」と主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君はこれは迷惑だと云う顔付をしてしきりに主人に目くばせをするが、主人は

いっこう  
不導体のごとく一 向 電気に感染しない。



おつ  
「ちょっと乙 だな、あんな者の子でも恋をするところが、しかし大した恋じゃなからう、

はなごい  
大方鼻 恋 くらいなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」  
「貰えばいいがって、君は先日大反対だったじゃないか。今日はいやに軟化しているぜ」  
「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

ばっせき けが  
「しかしどうかしたんだらう。ねえ鈴木、君も実業家の末 席 を汚 す一人だから参考  
のために言って聞かせるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるものの息女などを天下の

あが ちょうちん  
秀才水島寒月の令夫人と 崇 め奉るのは、少々 提 灯 と釣鐘と云う次第で、我々  
ほうゆう れいれい  
朋 友 たる者が 冷 々 黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、たとい実業家の君で  
もこれには異存はあるまい」

ようす  
「相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と 容 子 が少しも変っていないからえらい」

ごまか  
と鈴木君は柳に受けて、胡麻化そうとする。

ほ むか  
「えらいと褒めるなら、もう少し博学なところを御目にかけるがね。昔 しの  
ギリシャじん  
希 臘 人 は非常に体育を重んじたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方  
奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事には学者の智識に対してのみは何等の

ほうび こんにち おおい  
褒 美 も与えたと云う記録がなかったので、今 日 まで実は 大 に怪しんでいたと  
ころさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるについ両三日前に至って、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の

ぎだん しっつう かんてんきち  
疑 団 は一度に氷解。漆 桶 を抜くがごとく痛快なる悟りを得て 歡 天 喜 地 の至境  
に達したのさ」

ぎょうさん おじょうずもの  
あまり迷亭の言葉が 仰 山 なので、さすが 御 上 手 者 の鈴木君も、こりゃ手

ぞうげ はし  
に合わないと言う顔付をする。主人はまた始まったなと云わぬばかりに、象 牙 の 箸 で

菓子皿の縁<sup>ふち</sup>をかかん叩いて俯<sup>うむ</sup>つ向いている。迷亭だけは大得意で弁じつづける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒の淵<sup>ふち</sup>から吾人の疑を千載<sup>せんざい</sup>のもと  
下<sup>か</sup>に救い出してくれた者は誰だと思ふ。学問あって以来の学者と称せらるる彼の  
ギリシャ<sup>ギリシャ</sup>の哲人、逍遙<sup>しょうよう</sup>派の元祖アリストートルその人である。彼の説明に曰<sup>いわ</sup>く  
さ——おい菓子皿などを叩かんで謹聴していなくちやいかん。——彼等希臘人が競技にお

いて得るところの賞与は彼等が演ずる技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美<sup>ほうび</sup>  
にもなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至ってはどうかである。もし智識に対す  
る報酬として何物をか与えんとするならば智識以上の価値あるものを与えざるべからず。  
しかし智識以上の珍宝が世の中にあろうか。無論あるはずがない。下手なものをやれば智  
識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等は智識に対して千両箱をオリムパスの山ほど積

み、クリーサスの富を傾<sup>かたむ</sup>け尽<sup>つく</sup>しても相当の報酬を与えんとしたのであるが、いかに

考<sup>こう</sup>えても到底<sup>とうてい</sup>釣り合うはずがないと云う事を観破<sup>かんぱ</sup>して、それより以来と云うもの

は奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしまった。黄白青<sup>こうはくせいせん</sup>銭が智識の匹敵<sup>ひつてき</sup>

でない事はこれで十分理解出来るだろう。さてこの原理を服膺<sup>ふくよう</sup>した上で時事問題に

のぞ<sup>のぞ</sup>臨<sup>さつ</sup>んで見るがいい。金田某は何だの紙幣に眼鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警な

る語をもって形容するならば彼は一個の活動紙幣<sup>かつどうしへい</sup>に過ぎないのである。活動紙幣の

娘なら活動切手くらいなところだろう。翻<sup>ひるがえ</sup>って寒月君は如何<sup>いかん</sup>と見ればどうだ。

かたじ<sup>かたじ</sup>辱<sup>ごう</sup>けなくも学問最高の府を第一位に卒業して毫<sup>ごう</sup>も倦<sup>けん</sup>怠<sup>たい</sup>の念なく長州征伐時代

の羽織の紐をぶら下げて、日夜<sup>どんぐり</sup>団<sup>どんぐり</sup>栗<sup>どんぐり</sup>のスタビリチーを研究し、それでもなお満足する

様子もなく、近<sup>きんきん</sup>々<sup>きんきん</sup>の中ロード・ケルヴィンを圧倒するほどの大論文を発表しようとし

あずまばし  
つつあるではないか。たまたま 吾 妻 橋 を通り掛って身投げの芸を仕損じた事はあるが、

ほっさてきしよい ごう とんや  
これも熱誠なる青年に有りがちの 発 作 的 所 為 で 毫 も彼が智識の間 屋 たるに

わずら たとえ  
煩 いを及ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流の 喩 をもって寒月君を評すれば彼

こ サンチ  
は活動図書館である。智識をもって捏ね上げた二十八 珊 の弾丸である。この弾丸が  
一たび時機を得て学界に爆発するなら、——もし爆発して見給え——爆発するだろう——」  
迷亭はここに至って迷亭一流と自称する形容詞が思うように出て来ないので俗に云う

りゅうとうだび  
竜 頭 蛇 尾 の感に多少ひるんで見えたがたちまち「活動切手などは何千万枚あった

こ みじん によしょう  
って粉な 微 塵 になってしまうさ。それだから寒月には、あんな釣り合わない 女 性

うち たんらん  
は駄目だ。僕が不承知だ、百獣の 中 でもっとも聡明なる大象と、もっとも 食 婪 なる

の  
小豚と結婚するようなものだ。そうだろう苦沙弥君」と云って退けると、主人はまた黙っ

へこ  
て菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し 凹 んだ気味で

じゅつ  
「そんな事も無かろう」と 術 なげに答える。さっきまで迷亭の悪口を随分ついた揚句

むやみ す ばぬ  
ここで 無 暗 な事を云うと、主人のような無法者はどんな事を素っ破抜くか知れない。な

いい  
るべくここは 好 加減に迷亭の鋭鋒をあしらって無事に切り抜けるのが上分別なのである。  
鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けらるるだけ避けるのが当世で、無要の口論は

こうぜつ  
封建時代の遺物と心得ている。人生の目的は 口 舌 ではない実行にある。自己の思い通

しんちよく  
りに着々事件が 進 捗 すれば、それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心配

ごくらくりゅう  
と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は 極 楽 流 に達せられるのである。  
鈴木君は卒業後この極楽主義によって成功し、この極楽主義によって金時計をぶら下げ、  
この極楽主義で金田夫婦の依頼をうけ、同じくこの極楽主義でまんまと首尾よく苦沙弥君

とうがい じょうじゆ  
を説き落して 当該 事件が十中八九まで 成就 したところへ、迷亭なる常規をも

って律すべからざる、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる ふうらいぼう  
風 来 坊 が飛

び込んで来たので少々その突然なるに めんくら  
面 喰 っているところである。極楽主義を發明し  
たものは明治の紳士で、極楽主義を実行するものは鈴木藤十郎君で、今この極楽主義で困  
却しつつあるものもまた鈴木藤十郎君である。

ことばづく  
「君は何にも知らんからそうでもなかろうなどと澄し返って、例になく 言葉 寡 々に上

ひか ようす  
品に 控 え込むが、せんだってあの鼻の主が来た時の 容 子 を見たらいかに実業家

びいき へきえき きま おおい  
最 負 の尊公でも 辟 易 するに 極 ってるよ、ねえ苦沙弥君、君 大 に奮闘したじ  
ゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師に  
からかわれてすまして学校へ出ちやいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだ  
が、そんなに凶太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚図言ったって何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の

パリ  
評論家であるが巴里大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は学生の攻撃に応ずるため

あいくち そで ぼうぎよ  
外出の際必ず 七 首 を 袖 の下に持って 防 禦 の具となした事がある。ブルヌチェ  
ルがやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は……」

「だって君や大学の教師でも何でもないじゃないか。高がリードルの先生でそんな大家を

ざこ くじら みずか たと  
例に引くのは雑魚が 鯨 をもって 自 ら 喩 えるようなもんだ、そんな事を云うと  
なおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブーヴだって俺だって同じくらいな学者だ」

ある まね  
「大変な見識だな。しかし懐剣をもって歩行くだけはあぶないから真似ない方がいいよ。

こがたな  
大学の教師が懐剣ならリードルの教師はまあ 小 刀 くらいなところだな。しかしそれに

けんのん なかみせ しょ  
しても刃物は 剣 呑 だから 仲 見 世 へ行っておもちゃの空気銃を買って来て背負って

あるくがよかろう。 <sup>あいきょう</sup>愛嬌があつていい。ねえ鈴木君」と云うと鈴木君はようやく話が金田事件を離れたのでほっと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振りで始めて君等に逢ったんで何だか窮屈な路次から広い野原へ出たような気持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がならなくてね。何を云うにも気をおかなくちゃならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがい

いね。そして昔しの書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくていい。ああ今日は <sup>はか</sup>図らず

<sup>あ</sup>迷亭君に遇って愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸

けると、迷亭も「僕もいこう、僕はこれから日本橋の <sup>えんげいきょうふうかい</sup>演芸矯風会に行かなくっちゃならんから、そこまでいっしょに行こう」「そりゃちょうどいい久し振りでいっ

しょに散歩しよう」と両君は手 <sup>たずさ</sup>を携えて帰る。

## 五

<sup>も</sup>二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだ

ろう、いくら写生文を <sup>こすい</sup>鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の <sup>くわだ</sup>企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。従っていかに吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇言奇

行を <sup>ろう</sup>弄するにも <sup>かかわ</sup>関らず逐一これを読者に報知するの能力と根気のないのははなは

<sup>いかん</sup>だ遺憾である。遺憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必要である。鈴木君

と迷亭君の帰ったあとは <sup>こがら</sup>木枯 <sup>や</sup>しのはたと吹き息んで、しんしんと降る雪の夜のごとく静

かになった。主人は例のごとく書齋へ引き <sup>こも</sup>籠 <sup>ま</sup>る。小供は六畳の間へ枕をならべて寝る。

一間半の <sup>ふすま</sup>襖 <sup>へや</sup>を隔てて南向の <sup>そえぢ</sup>室には細君が数え年三つになる、めん子さんと添乳

して横になる。花曇りに暮れを急いだ日は疾く落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取る

となりちょう　　みんてき  
ように茶の間へ響く。隣　町　の下宿で明　笛　を吹くのが絶えたり続いたりして

じてい　　そと　　おぼろ　　はん  
眠い耳　底　に折々鈍い刺激を与える。外面は大方　朧　であろう。晚餐に半　ぺんの

だし　あわびがい  
煮汁で　鮑　貝　をからにした腹ではどうしても休養が必要である。

うけたま　　はいかい  
ほのかに　承　われば世間には猫の恋とか称する　俳　諧　趣味の現象があつて、春

　　あ  
さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮かれ歩く夜もあるとか云うが、吾輩はまだかか

　　そうほう　　かみ  
る心的変化に　遭　逢　した事はない。そもそも恋は宇宙的の活力である。上　は在天の神

　　しも　　みみず　　やつ  
ジュピターより　下　は土中に鳴く　蚯　蚓　、おけらに至るまでこの道にかけて浮身を　窶

　　おぼろ  
すのが万物の習いであるから、吾輩どもが　朧　うれしと、物騒な風流気を出すのも無理

　　い　　みけこ　　こ  
のない話しである。回顧すればかく云う吾輩も三毛子に思い焦がれた事もある。三角主義

　　うわさ  
の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う　噂　である。それだから

　　しゅんしょう　　めねこおねこ　　ぼんのう  
千金の　春　宵　を心も空に満天下の雌　猫　雄　猫　が狂い廻るのを　煩　悩　の

　　まよい　　けいべつ  
迷　のと　軽　蔑　する念は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそんな心が出  
ないから仕方がない。吾輩目下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠くては恋も

　　ふとん　　すそ　　ここちよ  
出来ぬ。のそのそと小供の布　団　の　裾　へ廻って心地　快　く眠る。……

　　あ　　ま  
ふと眼を開いて見ると主人はいつの間にか書齋から寢室へ来て細君の隣に延べてある

　　ふとん　　もぐ  
布　団　の中にいつの間にか　潜　り込んでいる。主人の癖として寝る時は必ず横文字の

　　こほん　　たずさ　　ページ  
小　本　を書齋から　携　えて来る。しかし横になってこの本を二　頁　と続けて読んだ  
事はない。ある時は持って来て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ事さえある。一行も

　　さ  
読まぬくらいならわざわざ提げてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人の主人たる

ところでいくら細君が笑っても、止せと云っても、決して承知しない。毎夜読まない本をご苦労千万にも寝室まで運んでくる。ある時は慾張って三四冊も抱えて来る。せんだってじゅうは毎晩ウェブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。思うにこれは主人の病

ぜいたく りゅうぶんどう  
気で贅沢な人が竜文堂に鳴る松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、して見ると主人にとって書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

のぞ くちひげ  
今夜も何か有るだろうと覗いて見ると、赤い薄い本が主人の口髯の先につかえる

おやゆび はさ  
くらいな地位に半分開かれて転がっている。主人の左の手の拇指が本の間に挟まっ

お  
たままであるところから推すと奇特にも今夜は五六行読んだものらしい。赤い本と並んで

たもとどけい  
例のごとくニッケルの袂時計が春に似合わぬ寒き色を放っている。

ちのみご あはず  
細君は乳呑児を一尺ばかり先へ放り出して口を開いていびきをかいて枕を外して  
いる。およそ人間において何が見苦しいと云って口を開けて寝るほどの不体裁はあるまい

しょうがい  
と思う。猫などは生涯こんな恥をかいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気

とどん  
を吐呑するための道具である。もっとも北の方へ行くと人間が無精になってなるべく口

へいそく  
をあくまいと儉約をする結果鼻で言語を使うようなズーザーもあるが、鼻を閉塞して  
口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーザーよりも見ともないと思う。第一天井から

ねずみ ふん  
鼠の糞でも落ちた時危険である。

てい  
小供の方とは見るとこれも親に劣らぬ体たらくで寝そべっている。姉のとん子は、姉  
の権利はこんなものだと云わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。

ふくしゅう ふんぞ  
妹のすん子はその復讐に姉の腹の上に片足をあげて踏反り返っている。双方共  
寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。しかもこの不自然なる姿勢を維持しつ  
つ兩人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

ともしび らんまん  
さすがに春の灯火は格別である。天真爛漫ながら無風流極まるこの光景の

うち ゆか なんじ へや  
裏に良夜を惜しめとばかり 床しげに輝やいて見える。もう何時だろうと室の中  
を見廻すと四隣はしんとしたただ聞えるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の  
はぎし  
歯軋りをする音のみである。この下女は人から歯軋りをするると云われるといつでもこれ

を否定する女である。私は生れてから 今日に至るまで歯軋りをした 覚はござい  
ませんと強情を張って決して直しましようとも御気の毒でございませとも云わず、ただそ  
んな覚はございませんと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚はないに違ない。し  
かし事実は覚がなくても存在する事があるから困る。世の中には悪い事をしておりながら、  
自分はどこまでも善人だと考えているものがある。これは自分が罪がないと自信している  
のだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事実はいかに無邪気でも滅却する訳には行か  
ぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。——夜は大分更けたよう  
だ。

あた  
台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く 中 った者がある。はてな今頃人の来るはずが  
ない。大方例の鼠だろう、鼠なら捕らん事に極めているから勝手にあばれるが 宜しい。

あた  
——またトントンと 中 る。どうも鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。主

人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく 日 中 でも 夜 中 でも乱暴

ろうぜき びんぜん きょうは  
狼藉の練修に余念なく、憫然なる主人の夢を 驚破 するのを天職のごとく心  
得ている連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今のはたしかに鼠ではない。せん

ちんにゆう か がいか  
だってなどは主人の寝室にまで 闖入 して高からぬ主人の鼻の頭を嚙んで 凱歌を  
奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギー

ゆる  
と雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出来るだけ 緩やかに、溝に添

すべ とじまり  
うて 滑らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わず 戸締

は きま  
を外ずして御光来になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに 極まっている。御高名だけ



うけたま どころぼういんし  
はかねて 承 わっている 泥 棒 陰 士 ではないか知らん。いよいよ陰士とすれば

そんがん ふたあし  
早く 尊 顔 を拝したいものだ。陰士は今や勝手の上に大なる泥足を上げて 二 足

あげいた つまず よる  
ばかり進んだ模様である。三足目と思う頃 揚 板 に 蹶 いてか、ガタリと 夜 に響

せなか くつばけ こ  
くような音を立てた。吾輩の 背 中 の毛が靴 刷 毛 で逆に擦すられたような心持がする。

ま とどん  
しばらくは足音もしない。細君を見ると未だ口をあいて太平の空気を夢中に 吐 吞 してい

おやゆび はさ  
る。主人は赤い本に 拇 指 を 挟 まれた夢でも見ているのだろう。やがて台所でマチを

す き  
擦る音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼は利かぬと見える。勝手がわるくて定めし不  
都合だろう。

うづく  
この時吾輩は 蹲 踞 まりながら考えた。陰士は勝手から茶の間の方面へ向けて出現する  
のであろうか、または左へ折れ玄関を通過して書斎へと抜けるのであろうか。——足音は  
ふすま えんがわ はい  
襖 の音と共に 椽 側 へ出た。陰士はいよいよ書斎へ這入った。それぎり音も沙汰  
もない。

ま  
吾輩はこの間に早く主人夫婦を起してやりたいものだとようやく気が付いたが、さてど

いっこう みずぐるま  
うしたら起きるやら、一 向 要領を得ん考のみが頭の中に 水 車 の勢で廻転する

ふとん すそ くわ  
のみで、何等の分別も出ない。布 団 の 裾 を 啣 えて振って見たらと思って、二 三 度

す  
やって見たが少しも効用がない。冷たい鼻を頬に擦り付けたらと思って、主人の顔の先へ

い  
持って行ったら、主人は眠ったまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを否やと云うほ

こんど  
ど突き飛ばした。鼻は猫にとっても急所である。痛む事おびたしい。此 度 は仕方がな  
いからにゃーにゃーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかり

のど つか  
は咽喉に物が 痞 えて思うような声が出ない。やっとの思いで渋りながら低い奴を少々出

かんじん さ けしき  
すと驚いた。肝心の主人は覚める気色もないのに突然陰士の足音がし出した。ミ

つた  
チリミチリと椽側を伝って近づいて来る。いよいよ来たな、こうなってはもう駄目だと

あき ふすま やなぎごうり うか  
諦らめて、襖と柳行李の間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺がう。

や こ  
陰士の足音は寢室の障子の前へ来てぴたりと已む。吾輩は息を凝らして、この次は何を

と  
するだろうと一生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕る時は、こんな気分になれば訳はな

たましい いきおい  
いのだ、魂が両方の眼から飛び出しそうな勢である。陰士の御蔭で二度と

さとり さん  
ない悟を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧の三つ目が雨に濡れたよう

すか うすくれない  
に真中だけ色が変わる。それを透して薄紅なものがだんだん濃く写ったと思う

ま  
と、紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌はしばしの間、暗い中に消える。入

あな  
れ代って何だか恐しく光るものが一つ、破れた孔の向側にあらわれる。疑いもなく陰士

うしろ  
の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の後に  
に隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあったが、

にら  
こう睨まれては寿命が縮まると思ったくらいである。もう我慢出来んから行李の影から  
飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわ  
れた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介するの  
わけ  
栄誉を有する訳であるが、その前ちょっと卑見を開陳してご高慮を煩わした

あが ヤソきょう  
い事がある。古代の神は全智全能と崇められている。ことに耶蘇教の神は二十世

こんにち めん かぶ  
紀の今日までもこの全智全能の面を被っている。しかし俗人の考うる全智全能  
は、時によると無智無能とも解釈が出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。し

かるにこのパラドックスを <sup>どうは</sup>道破した者は <sup>てんちかいびやく</sup>天地開闢以来吾輩のみであろうと

考えると、自分ながら <sup>まんざら</sup>満更な猫でもないと言う虚栄心も出るから、是非共ここにその

理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと言う事を、高慢なる人間諸君の <sup>のうり</sup>脳裏に叩き込みたいと考える。天地万有は神が作ったそうな、して見れば人間も神の御製作であろう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそう。さてこの人間について、人間

自身が数千年来の観察を積んで、<sup>おおい</sup>大に玄妙不思議がると同時に、ますます神の全智全

能を承認するように傾いた事実がある。それは <sup>ほか</sup>外でもない、人間もかようにうじゃうじ

ゃいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もいない。顔の道具は <sup>きま</sup>無論極っている、

<sup>おおき</sup>大さも大概是似たり寄ったりである。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられている、同じ材料で出来ているにも関わらず一人も同じ結果に出来上っておらん。よくまあ

あれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つくと、製造家の <sup>ぎりよう</sup>伎倆に感服せざるを得ない。よほど独創的な想像力がないとこんな変化は出来ないのである。一

代の画工が精力を <sup>しょうこう</sup>消耗して変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んの

をもって推せば、人間の製造を <sup>お</sup>一 <sup>いって</sup>手で <sup>うけお</sup>受 <sup>てぎわ</sup>負った神の手際は格別な者だと驚嘆せざ

るを得ない。到底人間社会において目撃し得ざる <sup>てい</sup>底の伎倆であるから、これを全能的伎

倆と云っても差し <sup>さ</sup>支 <sup>つか</sup>えないだろう。人間はこの点において <sup>おおい</sup>大に神に恐れ入っているようである、なるほど人間の観察点から云えばもっともな恐れ入り方である。しかし猫の立場から云うと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだろうと思う。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に成算があつてか

ほどの変化を示したのか、または猫も <sup>しゃくし</sup>杓子も同じ顔に造ろうと思つてやりかけて見

たが、とうてい <sup>うま</sup>旨く行かなくて出来るのも出来るのも作り <sup>そこ</sup>損ねてこの乱雑な状態に

おちい

陥ったものか、分らんではないか。彼等顔面の構造は神の成功の紀念と見らると同

こんせき

時に失敗の痕跡とも判ぜらるるではないか。全能とも云えようが、無能と評したって

いちじ

差し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいるので左右を一時に見る事が

はい

か

出来んから事物の半面だけしか視線内に這入らんのは気の毒な次第である。立場を換えて

のぼ

見ればこのくらい単純な事実は彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、本人逆

の

せ上がって、神に吞まれているから悟りようがない。製作の上に変化をあらわすのが困難

もこう

であるならば、その上に徹頭徹尾の模倣を示すのも同様に困難である。ラファエルに寸

そうふく

分違わぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅見せると

せま

逼ると同じく、ラファエルにとっては迷惑であろう、否同じ物を二枚かく方がかえって

きのう

困難かも知れぬ。弘法大師に向って昨日書いた通りの筆法で空海と願いますと云う方が

か

まるで書体を換えてと注文されるよりも苦しいかも知らん。人間の用うる国語は全然

もこうしゅぎ

うば

模倣主義で伝習するものである。彼等人間が母から、乳母から、他人から実用上の

言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないのである。出

来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する国語が十年二十年

もこう

と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣の能力がないと

もこう

云う事を証明している。純粹の模倣はかくのごとく至難なものである。従って神が彼等

しっかい

人間を区別の出来ぬよう、悉皆焼印の御かめのごとく作り得たならばますます神の全

こんにち

てんぴさ

能を表明し得るもので、同時に今日のごとく勝手次第な顔を天日に曝らさして、

目まぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえってその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があってこんな議論をしたか忘れてしまった。本<sup>もと</sup>を忘却するのは人間にさえありがちの事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬっと現われた泥棒陰士を瞥<sup>べっけん</sup>見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならぬ。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に悠<sup>ゆうぜん</sup>然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——平常<sup>ふだん</sup>神の製作にできばえについてその出来栄<sup>できばえ</sup>をあるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどな特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の眉<sup>びもく</sup>目が

わが親愛なる好男子水島寒月君に瓜<sup>うり</sup>二つであると云う事実である。吾輩は無論泥棒に多くの知己は持たぬが、その行為の乱暴なところから平常<sup>ふだん</sup>想像して私<sup>ひそ</sup>かに胸中にえが描<sup>えが</sup>いていた顔はないでもない。小鼻の左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、

いがぐりあたま<sup>き</sup>毬栗<sup>き</sup>頭にきまっていると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考えると天地の相違、想像は決して<sup>たくまし</sup>遅<sup>せい</sup>くするものではない。この陰士は背<sup>せい</sup>のすらりとした、色の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳でもあろう、それすら

寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手<sup>てぎわ</sup>際があるとすれば、決して無能をもって目する訳には行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変になって深夜に飛び出して来たのではあるまいかと、はっと思ったくらいよく似ている。ただ鼻の下

に薄黒く髯<sup>ひげ</sup>の芽生えが植え付けてないのでさては別人だと気が付いた。寒月君はにがみ<sup>にがみ</sup>苦味<sup>にがみ</sup>ばしった好男子で、活動小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどな念入れの製作物である。しかしこの陰士も人相から観察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の

ほ  
眼付や口先に迷ったのなら、同等の熱度をもってこの泥棒君にも惚れ込まなくては義理が  
悪い。義理はとにかく、論理に合わない。ああ云う才気のある、何でも早分りのする性質だ  
たち  
からこのくらいの事は人から聞かんでもきっと分るであろう。して見ると寒月君の代りに  
きんしつ  
この泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて 琴 瑟 調和の実を挙げらるるに相違な  
い。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この  
陰士が健在であるうちは大丈夫である。吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富  
子嬢のために、やっと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸  
福ならしむる一大要件である。

さつき ふるげつと  
陰士は小脇になにか抱えている。見ると先 刻 主人が書齋へ放り込んだ 古 毛 布 で  
とうざん はんてん おなんど はかた なまじろ  
ある。唐 棧 の 半 纏 に、御 納 戸 の 博 多 の 帯 を 尻 の 上 に む す ン で、 生 白

すね ひざ さつき  
い 脛 は 膝 から 下 む き 出 し の ま ま 今 や 片 足 を 挙 げ て 畳 の 上 へ 入 れ る。 先 刻 から 赤 い

か どう  
本に指を噛まれた夢を見ていた、主人はこの時寝返りを 堂 と打ちながら「寒月だ」と大

けつと  
きな声を出す。陰士は 毛 布 を 落 して、出 した 足 を 急 に 引 き 込 ん だ。障子の影に細長い

むこうずね かす  
向 脛 が 二 本 立 っ た ま ま 微 かに 動 く の が 見 え る。主 人 は う ー ん、む に や む に や と

ひぜんや か  
云いながら例の赤本を突き飛ばして、黒い腕を皮 癬 病 みのようにぼりぼり搔く。そのあ  
とは静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまう。寒月だと云ったのは全く我知らずの寝

えんがわ  
言と見える。陰士はしばらく 椽 側 に 立 っ た ま ま 室 内 の 動 静 を う か が っ て いた が、主 人

みすま  
夫婦の熟睡しているのを見 済 して 又 片 足 を 畳 の 上 に 入 れ る。今 度 は 寒 月 だ と 云 う 声 も

いっすい しゅんとう  
聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一 穂 の 春 灯 で 豊 かに 照 ら さ れ て いた 六

ま やなぎごうり へん  
畳の間は、陰士の影に鋭どく二分せられて 柳 行 李 の 辺 から 吾 輩 の 頭 の 上 を 越 え

なか  
て 壁 の 半 ば が 真 黒 に なる。振 り 向 い て 見 る と 陰 士 の 顔 の 影 が ち ょ う ど 壁 の 高 さ の 三 分 の

ばくぜん やがしらばもの  
二の所に漠然と動いている。好男子も影だけ見ると、八つ頭の化け物のごと

かつこう のぞ  
くまことに妙な恰好である。陰士は細君の寝顔を上から覗き込んで見たが何のため  
かにやにやと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるには吾輩も驚いた。

くぎづ  
細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付けにした箱が大事そうに置いてある。

からつ たたらさんぺいくん おみやげ  
これは肥前の国は唐津の住人多々良三平君が先日帰省した時御土産に持つ

いも  
て来た山の芋である。山の芋を枕元へ飾って寝るのはあまり例のない話ではあるがこ

さんぼん ようだんす  
の細君は煮物に使う三盆を用筆筒へ入れるくらい場所の適不適と云う觀念に乏

おろ たくあん あ  
しい女であるから、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寝室に在っても平気か

ていちょう  
も知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうはずがない。かくまで鄭重に肌  
身に近く置いてある以上は大切な品物であろうと鑑定するのも無理はない。陰士はちよっ

だいぶ かか  
と山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそうな

てい  
のですこぶる満足の体である。いよいよ山の芋を盗むなと思ったら、しかもこの好男子

めった  
にして山の芋を盗むなと思ったら急におかしくなった。しかし滅多に声を立てると危険

こら  
であるからじっと忪えている。

うやうや ふるげっと  
やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげる

と ちりめん へこおび  
ものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬の兵古帯

くく  
がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしっかり括って、苦もなく背中へしょう。あまり

す やす ももひき  
女が好く体裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、主人のめり安の股引

ふく あおだいしょう かえる  
の中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨れて青大将が蛙を飲んだような

——あるいは青大将の臨<sup>りんげつ</sup>月と云う方がよく形容し得るかも知れん。とにかく変な  
かつこう  
恰好<sup>かっこう</sup>になった。嘘だと思ふなら試しにやってみるがよろしい。陰士はめり安をぐるぐ

くび<sup>くび</sup>たま<sup>たま</sup>ま  
る首<sup>くび</sup>環<sup>たま</sup>へ捲きつけた。その次はどうするかと思ふと主人のつむぎ<sup>つむぎ</sup>紬<sup>つむぎ</sup>の上着を大風呂

敷のようにひろ<sup>ひろ</sup>拡<sup>ひろ</sup>げてこれに細君の帯と主人の羽織とじゅばん<sup>じゅばん</sup>と繻<sup>じゅばん</sup>絆<sup>じゅばん</sup>とその他あらゆる雑物<sup>ぞうもつ</sup>  
を綺麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちょっと感心した。それから細

君の帯上げとしごきとをつ<sup>つ</sup>を結び合わせてこの包みをくく<sup>くく</sup>括<sup>くく</sup>って片手にさげる。まだ

ちょうだい<sup>ちょうだい</sup>  
頂<sup>ちょうだい</sup>戴<sup>ちょうだい</sup>するものは無いかなと、あたりを見廻していたが、主人の頭の先に「朝日」の

袋があるのを見付けて、ちよつとたもと<sup>たもと</sup>袂<sup>たもと</sup>へ投げ込む。またその袋の中から一本出してラン

ぷにかざ<sup>かざ</sup>つ<sup>つ</sup>う<sup>う</sup>  
に翳<sup>かざ</sup>して火を点ける。旨まそうに深く吸って吐き出した煙りが、乳色のホヤをめぐ<sup>めぐ</sup>つ

てまだ消えぬ間に、ま<sup>ま</sup>えんがわ<sup>えんがわ</sup>陰士の足音は椽<sup>えんがわ</sup>側<sup>えんがわ</sup>を次第に遠のいて聞えなくなった。主人夫婦は

依然として熟睡している。人間も存外うかつ<sup>うかつ</sup>迂<sup>うかつ</sup>濶<sup>うかつ</sup>なものである。

ざんじ<sup>ざんじ</sup>しゃべ<sup>しゃべ</sup>  
吾輩はまた暫<sup>ざんじ</sup>時<sup>しゃべ</sup>の休養を要する。のべつに喋<sup>しゃべ</sup>舌<sup>しゃべ</sup>つていては身体が続かない。ぐっと

寝込んで眼が覚めた時はさ<sup>さ</sup>やよい<sup>やよい</sup>弥<sup>さ</sup>生<sup>やよい</sup>の空が朗らかに晴れ渡って勝手口に主人夫婦が巡査と対  
談をしている時であった。

「それでは、ここから這入って寝室の方へ廻ったんですね。あなた方は睡眠中で一<sup>いっこう</sup>向<sup>いっこう</sup>  
気がつかなかったんですね」

「ええ」と主人は少しきま<sup>きま</sup>極<sup>きま</sup>りがわるそうである。

「それで盗難に罹<sup>かか</sup>ったのは何<sup>なんじ</sup>時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分るくら

いな何<sup>な</sup>にも盗まれる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質  
問に対して相談をしている。



「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思っっているらしい。

ゆう  
「あなたは夕べ何時に御休みになったんですか」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

わたく  
「ええ私しの伏せったのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だったかな」

「七時半でしたらう」

はい  
「すると盗賊の這入ったのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

よなか  
「夜中は分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。

いっこうつうよう  
巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところが一向痛痒を感

よ  
じないのである。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜いと思っっているのに主

じ  
人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々焦れなくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと、主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですな」と答える。巡査は笑いもせずに

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこそこの雨戸を

はず  
みぎこくそにおよび  
外してどこそこに忍び込んで品物を何点盗んで行ったから右告訴及

そうろうなり  
なあて  
候也という書面をお出しなさい。届ではない告訴です。名宛はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

はい  
「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出すんです。——いや這入って見たって仕

と  
方がない。盗られたあとなんだから」と平気な事を云って帰って行く。

ふですずり  
主人は筆硯を座敷の真中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「これから盗難告  
訴をかくから、盗られたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調

で云う。

「あら <sup>いや</sup> 厭だ、さあ云えだなんて、そんな <sup>けんぺい</sup> 権柄 ずくで誰が云うもんですか」と細帯を

巻き付けたままどっかと腰を <sup>す</sup> 据える。

「その風はなんだ、宿場女郎の <sup>できそこな</sup> 出来損い見たようだ。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何でも盗られりゃ仕方がないじゃありませんか」

「帯までとって行ったのか、<sup>ひど</sup> 苛い奴だ。それじゃ帯から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯って、そんなに何本もあるもんですか、<sup>くろじゅす ちりめん</sup> 黒 縺子 と 縮 緬 の腹合せの帯です」

「黒縺子と縮緬の腹合せの帯一筋—— <sup>あたい</sup> 価 はいくらくらいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意気に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと云うんです。女房などは、

どんな汚ない風をしていても、自分さい <sup>よ</sup> 宜けりゃ、構わないんでしょう」

「まあいいや、それから何だ」

いとおり <sup>こうの</sup> 糸 織 の羽織です、あれは <sup>かたみ</sup> 河野の叔母さんの形身にもらったんで、同じ糸織でも今の糸織とは、たちが違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじゃありませんか、あなたに買っていただきやあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行ったのか。煮て食うつもりか、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行って聞いていらっしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

からつ

「馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いくら唐津から掘って来たって山の芋が十二円五十銭してたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。それだから貴様はおタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスって云うのは」

いっこう

「何でもいい。それからあとは——俺の着物は一向出て来んじゃないか」

よ

ちようだい

「あとは何でも宜うござんす。オタンチン・パレオロガスの意味を聞かして頂戴」

な

「意味も何にもあるもんか」

「教えて下すってもいいじゃありませんか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていっしやるのね。きっと人が英語を知らないと思って悪口をおっしやったんだよ」

ぐ

「愚な事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたって間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあとはありません」

がんで

「頑愚だな。それでは勝手にするがいい。俺はもう盗難告訴を書いてやらんから」

しなかず

「私も品数を教えて上げません。告訴はあなたが御自分でなさるんですから、私は書いていただかないでも困りません」

よ

はい

「それじゃ廃そう」と主人は例のごとくふいと立って書斎へ這入る。細君は茶の間へ引き

ふたり なら  
下がって針箱の前へ坐る。両人共十分間ばかりは何にもせずに黙って障子を睨め付けている。

たたらさんぺい あが  
ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者多々良三平君が上ってくる。

や  
多々良三平君はもてこの家の書生であったが今では法科大学を卒業してある会社の鉦山部

めばえ  
に雇われている。これも実業家の芽生で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前

そうろ  
の関係から時々旧先生の草廬を訪問して日曜などには一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない間柄である。

からつなま  
「奥さん。よか天気でござります」と唐津訛りか何かで細君の前にズボンのまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすったか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい。たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言っても駄目だから、あなたが先生にそうおっしゃい」

「そればってんが……」と言い掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見

ま  
えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間からとん子とすん子が馳け出して来る。

おすし  
「多々良さん、今日は御寿司を持って来て？」と姉のとん子は先日の約束を覚えていて、

か  
三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を掻きながら

「よう覚えているのう、この次はきっと持って来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直って少々笑顔になる。

「寿司は持って来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさったか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋ねる。

おか からつ  
「まだ食いなさらんか、早く御母あさんに煮て御貰い。唐津の山の芋は東京のとは違ってうまかあ」と三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだっては御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすったか、折れんように箱を<sup>あつ</sup> 誂らえて堅くつめて来たから、長いままでありましたろう」

「ところがせっかく下すった山の芋を<sup>ゆう</sup> 夕べ泥棒に取られてしまって」

「ぬす盗が？<sup>と</sup> 馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君

おおい  
大に感心している。

おか はい  
「御母あさま、夕べ泥棒が這入ったの？」と姉が尋ねる。

かろ  
「ええ」と細君は軽く答える。

「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんので

こわ  
「怖い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「怖い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉が気の毒そうにもなく、押し返して聞く。  
「何ですね。そんな失礼な事を」

わたし か  
「ハハハハ 私 の顔はそんなに恐いですか。困ったな」と頭を搔く。多々良君の頭の後

部には直径一寸ばかりの<sup>はげ</sup> 禿がある。一カ月前から出来だして医者に見て貰ったが、まだ

なお  
容易に癒りそうもない。この禿を第一に見付けたのは姉のとん子である。

おかあ ひ  
「あら多々良さんの頭は御母さまのように光かってよ」

「だまっていらっしやいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かってて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君と

はずら  
は思わず吹き出したが、あまり煩わしくて話も何も出来ぬので「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

まげ  
「やだわ、虫が食うなんて、そりゃ 鬻 で釣るところは女だから少しは禿げますさ」  
「禿はみんなバクテリアですばい」  
「わたしのはバクテリアじゃありません」  
「そりゃ奥さん意地張りたい」  
「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」  
「禿はボールドとか云います」  
「いいえ、それじゃないの、もっと長い名があるでしょう」  
「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」  
「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

わたし  
「私 はボールドより知りませんが。長かって、どげんですか」  
「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭なんでしょう」  
「そうかも知れませんか。今に先生の書齋へ行ってウェブスターを引いて調べて上げましょう。しかし先生もよほど変っていなさいますな。この天気の好いのに、うちにじっとして——奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさるごと勧めなさい」  
「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

な  
「この頃でもジャムを舐めなさるか」  
「ええ相変らずです」

さい  
「せんだって、先生こぼしていなさいました。どうも 妻 が俺のジャムの舐め方が烈しいと云って困るが、俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだろうと云いなさるから、そりゃ御嬢さんや奥さんがいっしょに舐めなさるに違ない——」  
「いやな多々良さんだ、何だってそんな事を云うんです」  
「しかし奥さんだって舐めそうな顔をしていなさるばい」  
「顔でそんな事がどうして分ります」  
「分らんばってんが——それじゃ奥さん少しも舐めなさらんか」  
「そりゃ少しは舐めますさ。舐めたって好いじゃありませんか。うちのものだもの」

ほん こと  
「ハハハハそうだろうと思った——しかし 本 の 事 、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の

い  
芋ばかり持って行たのですか」

「山の芋ばかりなら困りゃしませんが、不断着をみんな取って行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかったに——

惜しい事をしたなあ。奥さん犬の <sup>ふと やつ</sup> 大か奴を是非一丁飼いなさい。——猫は駄目ですば

い、飯を食うばかりで——ちっとは鼠でも <sup>と</sup> 捕りますか」

「一匹もとった事はありません。本当に横着な <sup>ずうずう</sup> 凶々凶々しい猫ですよ」

「いやそりゃ、どうもこうもならん。早々棄てなさい。 <sup>わたし</sup> 私 が貰って行って煮て食おう  
か知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は <sup>うも</sup> 旨うござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人がある <sup>よし</sup> 由はかねて伝聞したが、吾輩が平

<sup>けんこ</sup> 生眷 <sup>かたじけの</sup> 顧を <sup>辱</sup> うする多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今まで夢に

も知らなかった。いわんや同君はすでに書生ではない、卒業の日は浅きにも <sup>かか</sup> 係わらず堂々

たる一個の法学士で、六つ井物産会社の役員であるのだから吾輩の <sup>きょうがく</sup> 驚愕もまた一  
と通りではない。人を見たら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によってすでに証  
拠立てられたが、人を見たら猫食いと思えとは吾輩も多々良君の御蔭によって始めて感得  
した真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉しいが日に日に危険が多くて、日に

日に油断がならなくなる。 <sup>こうかつ</sup> 狡獪になるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着

けるのも皆事を知るの結果であって、事を知るのは年を取るの罪である。老人に <sup>ろく</sup> 碌なも

のがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは今のうちに多々良君の <sup>なべ</sup> 鍋の中で

たまねぎ <sup>じょうぶつ</sup> 葱と共に <sup>すみ</sup> 成仏する方が得策かも知れんと考えて隅の方に小さくなって

いと、 <sup>さいぜん</sup> 最前 <sup>いったん</sup> 細君と喧嘩をして一反書齋へ引き上げた主人は、多々良君の声を  
聞きつけて、のそのそ茶の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさったそうですね。なんちゅ<sup>ぐ</sup>愚な事です」と劈<sup>へきとう</sup>頭一番にやり込める。

はい<sup>ぐ</sup>  
「這入る奴が愚なんだ」と主人はどこまでも賢人をもって自任している。

かし  
「這入る方も愚だばってんが、取られた方もあまり賢<sup>かし</sup>こくはなかごたる」  
「何にも取られるものの無い多々良さんのようなのが一番賢いんでしょう」と細君が  
こんど おっと  
此度は良人の肩を持つ。

と  
「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云う了見じゃろう。鼠は捕らず  
わたし  
泥棒が来ても知らん顔をしている。——先生この猫を私<sup>わたし</sup>にくんなさらんか。こうして  
おいたっちゃ何の役にも立ちませんばい」  
「やっても好い。何にするんだ」  
「煮て喰べます」

いちごん も  
主人は猛烈なるこの一言<sup>いちごん</sup>を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性の笑を洩らしたが、別  
段の返事もしないので、多々良君も是非食いたいとも云わなかったのは吾輩にとって望外  
の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

おおい しょうちん てい  
「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大に銷沈<sup>おおい しょうちん てい</sup>の体

きのう あわせ  
である。なるほど寒いはずである。昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は袷<sup>あわせ</sup>

はんそで こざ  
に半袖<sup>はんそで</sup>のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐したぎりであるから、不十分な血液は  
ことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておったちゃとうていあかんですばい。ちょっと泥棒に逢っても、す

ぐ困る——<sup>いっちょう</sup> 一丁<sup>か</sup> 今から考を換えて実業家にでもなんなさらんか」

きらい  
「先生は実業家は嫌<sup>きらい</sup>だから、そんな事を言ったって駄目よ」

そば  
と細君が傍<sup>そば</sup>から多々良君に返事をする。細君は無論実業家になって貰いたいのである。  
「先生学校を卒業して何年になんなさるか」



「今年で九年目でしょう」と細君は主人を <sup>かえり</sup> 顧みる。主人はそうだと、そうで無いとも云わない。

「九年立っても月給は上がらず。いくら勉強しても人は褒めちゃくれず、<sup>ほ</sup> <sup>ろうくん</sup> 郎君ひとりせきばく  
独 寂 寞 ですたい」と中学時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細君はちょっと分りかねたものだから返事をしない。

「教師は無論 <sup>きらい</sup> 嫌 だが、実業家はな <sup>うち</sup> お嫌いだ」と主人は何が好きだか心の 裏 で考えているらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけですか」と多々良君 <sup>がら</sup> 柄 に似合わぬ <sup>じょうだん</sup> 冗談 を云う。

「一番嫌だ」主人の返事をもっとも簡明である。細君は横を向いてちょっと <sup>すま</sup> 澄したが再び主人の方を見て、

「生きていらっしゃるのも <sup>おきらい</sup> 御 嫌 なんでしょう」と充分主人を <sup>へこ</sup> 凹 ましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外 <sup>のんき</sup> 呑気 な返事をする。これでは手のつけようがない。

「先生ちっと <sup>かつぱつ</sup> 活 潑 に散歩でもしなさんと、からだを <sup>こわ</sup> 壊 してしまいますばい。――

そうして実業家に <sup>もう</sup> なんなさい。金なんか <sup>ぞうさ</sup> 儲 けるのは、ほんに <sup>ぞうさ</sup> 造 作 もない事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やっと会社へ <sup>はい</sup> 這 入ったばかりですもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの」これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円 <sup>ずつ</sup> 宛 会社の方で預って積んでおいて、いざと云う時

そとぼりせん  
にやります。——奥さん小遣錢で 外 濠 線 の株を少し買いなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」  
「そんな御金があれば泥棒に逢ったって困りゃしないわ」  
「それだから実業家に限ると云うんです。先生も法科でもやって会社か銀行へでも出なされば、今頃は月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でござんしたな。——先生あの鈴木藤十郎と云う工学士を知ってなさるか」

きのう  
「うん 昨 日 来た」

「そうでござんすか、せんだってある宴会で逢いました時先生の御話をしたら、そうか君

くしゃみ むか  
は 苦 沙 弥 君のところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは 昔 し小石川の寺でいっ

よろ  
しよに自炊をしておった事がある、今度行ったら 宜 しく云うてくれ、僕もその内尋ねるからと云っていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

づめ うま  
「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだ東京 詰 になりました。なかなか 旨

わたし  
いです。 私 なぞにでも朋友のように話します。——先生あの男がいくら貰ってると思いなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつかますから、何でも平均四五百円になりますばい。

いちこきゅう  
あげな男が、よかしこ取っておるのに、先生はリーダー専門で十年 一 狐 裘 じゃ馬鹿気ておりますなあ」

こと  
「實際馬鹿気ているな」と主人のような超然主義の人でも金錢の觀念は普通の人間と 異なるところはな。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分

ふいちょう  
実業家の利益を 吹 聴 してもう云う事が無くなったものだから

じん  
「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う 人 が来ますか」

「ええ、善くいらっしゃいます」

「どげんな人物ですか」

「大変学問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、<sup>わたし</sup>私 くらいなものでか」と多々良君真面目である。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が聞く。

「せんだって或る人から頼まれました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」  
多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、<sup>わたし</sup>私 よりえらいですか」と笑いもせず<sup>おこ</sup>怒りもせぬ。これが多々良君の特色である。

<sup>きんきん</sup>  
「近々博士になりますか」

「今論文を書いてるそうだ」

「やっぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思ったら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていましたから、そんな馬鹿があるのか、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどましだと云ってやりました」

「だれに」

<sup>わたし</sup>  
「私 に水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にゃ、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

<sup>かげべんけい</sup>  
「多々良さんは 蔭 弁 慶 ね。うちへなんぞ来ちゃ大変威張っても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなってるんでしょう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。<sup>さっき</sup>先刻から<sup>あわせ</sup>袷一枚であまり寒いので少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出した

のである。行き当りばつたりの多々良君は無論<sup>しゅんじゅん</sup>逡巡する訳がない。

<sup>いもごか</sup>  
「行きましょう。上野にしますか。芋坂へ行って団子を食いましょうか。先生あすこの団子を食った事がありますか。奥さん一返行って食って御覧。柔らかくて安いです。酒

も飲ませます」と例によって秩序のない駄弁を 揮<sup>ふる</sup> ってるうちに主人はもう帽子を被って  
くつぬぎ  
沓 脱 へ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で  
団子を幾皿食ったかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また 尾<sup>びこ</sup> 行 する勇氣もないからず

っと略してその 間<sup>あいだ</sup> 休養せんければならん。休養は万物の 旻<sup>びんてん</sup> 天 から要求してしか

るべき権利である。この世に生息すべき義務を有して 蠢<sup>しゅんどう</sup> 動 する者は、生息の義務を

果たすために休養を得ねばならぬ。もし神ありて 汝<sup>なんじ</sup> は働くために生れたり寝るために生  
れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答えて云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生れた  
り故に働くために休養を乞うと。主人のごとく器械に不平を吹き込んだまでの

ぼくきょうかん  
木 強 漢 ですら、時々は日曜以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして

日夜心神を勞する吾輩ごとき者は 仮<sup>たとい</sup> 令 猫といえども主人以上に休養を要するは勿論の事

である。ただ 先<sup>さつき</sup> 刻 多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もない 贅<sup>ぜいぶつ</sup> 物 のごと

くのし 罵<sup>ぶつしょう</sup> ったのは少々気掛りである。とかく 物 象 にのみ使役せらるる俗人は、

五感の刺激以外に何等の活動もないので、他を評価するのも形骸以外に 涉<sup>わた</sup> らんのは厄

介である。何でも尻でも 端<sup>はしよ</sup> 折 って、汗でも出さないと働らいていないように考えている。

だるま 達<sup>たとい すき</sup> 磨 と云う坊さんは足の腐るまで座禅をして澄ましていたと云うが、 仮<sup>たとい</sup> 令 壁の 隙

つた 蔦<sup>ふさ</sup> が這い込んで大師の眼口を 塞 ぐまで動かないにしろ、寝ているんでも死んでい

るんでもない。頭の中は常に活動して、廓<sup>かくねんむしょう</sup> 然 無 聖 などと乙な理窟を考え込んで

いる。儒家にも静坐の工夫と云うのがあるそうだ。これだって一室の 中<sup>うち</sup> に閉居して安閑

いざり  
と 璧 の修行をするのではない。脳中の活力は人一倍 熾 かに燃えている。ただ外見上

てい  
は至極沈静端肅の 態 であるから、天下の凡眼はこれらの知識巨匠をもって

こんすいかし ようじん みな  
昏 睡 仮 死 の 庸 人 と見做して無用の長物とか 穀 潰 しかとか入らざる 誹 謗  
ひぼう  
の声を立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れ

か  
ついた者で、——しかも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物で

かんしけつ  
あるから、この三平君が吾輩を目して 乾 屎 同等に心得るのももつともだが、恨むら  
くは少しく古今の書籍を読んで、やや事物の真相を解し得たる主人までが、浅薄なる三平

ねこなべ さしはさ けしき  
君に一も二もなく同意して、猫 鍋 に故障を 挟 む 景色 のない事である。しか

けいべつ  
し一步退いて考えて見ると、かくまでに彼等が吾輩を 軽 蔑 するのも、あながち無理で

りじ たとえ  
はない。大声は俚耳に入らず、陽春白雪の詩には和するもの少なしの 喩 も古い昔から

あた これい し  
ある事だ。形体以外の活動を見る 能 わざる者に向って己 霊 の光輝を見よと強ゆるは、

い せま まぐろ  
坊主に髪を結えと 逼 るがごとく、鮪 に演説をして見ろと云うがごとく、電鉄に脱線  
を要求するがごとく、主人に辞職を勧告するがごとく、三平に金の事を考えるなど云うがご

ひつきょう  
ときものである。必 竟 無理な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会的動物

みずか  
である。社会的動物である以上はいかに高く 自 ら標置するとも、或る程度までは社会

ないしお づれ  
と調和して行かねばならん。主人や細君や乃 至 御さん、三平 連 が吾輩を吾輩相当に評

は  
価してくれんのは残念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剥いで三味線屋に売り

のぼ ゆゆ  
飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に 上 すような無分別をやられては由々しき大事である。

しゃば ここんらい  
吾輩は頭をもって活動すべき天命を受けてこの 娑 婆 に出現したほどの 古 今 来 の猫

であれば、非常に大事な身体である。千金の子は堂 陞 に坐せずとの 諺 もある

事なれば、好んで 超 邁 を 宗 として、 徒 らに吾身の危険を求むるのは単に自

己の 災 なるのみならず、また大いに天意に 背 く訳である。猛虎も動物園に入れば

糞 豚 の隣りに居を占め、 鴻 雁 も鳥屋に生 擒 らるれば 雛 鶏 と 俎 を

同 じゅうす。庸 人と相 互する以上は 下 って 庸 猫 と化せざるべからず。

庸猫たらんとすれば鼠を捕らざるべからず。——吾輩はとうとう鼠をとる事に極めた。

ロシア  
せんだってじゅうから日本は露西亜と大戦争をしているそうだ。吾輩は日本の猫だから

無論日本 最 負 である。出来得べくんば 混 成 猫 旅 団 を組織して露西亜兵を引

つ 掻いてやりたいと思うくらいである。かくまでに元気 旺 盛 な吾輩の事であるから鼠

の一疋や二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕れる。昔 しある人当

時有名な禅師に向って、どうしたら悟れましようか聞いたら、猫が鼠を 覘 うようにさし

やれと答えたそうだ。猫が鼠をとるようには、かくさえすれば外ずれっこはござらぬと

云う意味である。女 賢 しゅうしてと云う諺はあるが猫 賢 しゅうして鼠捕り 損 う

と云う格言はまだ無いはずだ。して見ればいかに 賢 かい吾輩のごときものでも鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるまいどころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんのは、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのごとく暮れて、折々の風に誘われる

はなふぶき でおけ  
花 吹 雪 が台所の腰障子の破れから飛び込んで 手 桶 の中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜こそ大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻って地形を飲み込んでおく必要がある。戦闘線は

もちろん  
勿 論 あまり広かろうはずがない。晝数にしたら四疊敷もあろうか、その一疊を仕切っ

て半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へっついには貧乏勝手に似合わ

ぬ立派な者で赤の銅壺がびかびかして、後ろは羽目板の間を二尺遺して吾輩の

あわびがいぜんわんさらこぼち  
鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は膳椀皿小鉢を入れる戸棚と

せま  
なつて狭き台所をいとど狭く仕切つて、横に差し出すむき出しの棚とすれすれの高さに

すりばちあおむ  
なつている。その下に摺鉢が仰向けに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が吾輩の

すりこぎか  
方を向いている。大根卸し、摺小木が並んで懸〔#ルビの「か」は底本では「け」〕け

かたわしょうぜんひかたるき  
である傍らに火消壺だけが悄然と控えている。真黒になった樽木の交叉

じざいかご  
した真中から一本の自在を下ろして、先へは平たい大きな籠をかける。その籠が時々

おうよううち  
風に揺れて鷹揚に動いている。この籠は何のために釣るすのか、この家へ来たてに

いっこう  
は一向要領を得なかつたが、猫の手の届かぬためわざと食物をここへ入れると云う事を知つてから、人間の意地の悪い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云えば無論鼠の出る所でなければならぬ。

べんぎ  
いかにこつちに便宜な地形だからと云つて一人で待ち構えてはてんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと台所の真中に立つて四方を見廻わす。何だか東郷大将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻

こいもざか  
つて来ん。小供はとくに寝ている。主人は芋坂の団子を喰つて帰つて来て相変らず書

こも  
斎に引き籠っている。細君は——細君は何をしているか知らない。大方居眠りをして山

じんりきあと  
芋の夢でも見ているのだろう。時々門前を人力が通るが、通り過ぎた後は一段と淋

しへんせきばく  
しい。わが決心と云い、わが意気と云い台所の光景と云い、四辺の寂寞と云い、

ことごとねこちゅう  
全体の感じが悉く悲壮である。どうしても猫中の東郷大将としか思われな

い。こう云う 境界 に入ると 物 凄 い内に一種の愉快を覚えるのは誰しも同じ事

であるが、吾輩はこの愉快の底に一大心配が 横 わっているのを発見した。鼠と戦争を

するのは覚悟の前だから何足来ても 恐 くはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都

合である。周密なる観察から得た材料を 綜 合 して見ると 鼠 賊 の 逸 出 するの  
には三つの行路がある。彼れらがもしどぶ鼠であるならば土管を沿うて流しから、へっつ  
いの裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道を絶ってやる。あるい

は 溝 へ湯を抜く 漆 喰 の穴より風呂場を 迂 回 して勝手へ不意に飛び出すかも知れ

ない。そうしたら釜の 蓋 の上に陣取って眼の下に来た時上から飛び下りて 一 攫 みに

する。それからとまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅が 半 月 形 に喰い破られ

て、彼等の 出 入 に便なるかの疑がある。鼻を付けて臭いで見ると少々鼠 臭 い。

もしここから 唖 喊 して出たら、柱を 楯 にやり過ぎしておいて、横合からあつと爪を

かける。もし天井から来たらと上を仰ぐと真黒な 煤 がランプの光で輝やいて、地獄を裏

返しに釣るしたごとくちょっと吾輩の手 際 では 上 る事も、 下 る事も出来ん。まさ

かあんな高い処から落ちてくる事もなからうからとこの方面だけは警戒を 解 く事にする。

それにしても三方から攻撃される 懸 念 がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口  
ならどうにか、こうにかやっつてのける自信がある。しかし三口となるといかに本能的に鼠

を捕るべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。さればと云って車屋の黒ごときもの  
を助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好からう。どうしたら好からう

と 考 えて 好 い 智 慧 が 出 ない 時 は、 所 な な 事 は 起 る 気 遣 は ない と 決 め る の が 一 番 安 心 を  
得る近道である。また法のつかない者は起らないと考えたくなるものである。まず世間を



見渡して見給え。きのう貰った花嫁も今日死なんとも限らぬではないか、しかし 賀 殿  
は玉椿千代も八千代もなど、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせぬではないか。心配  
せんのは、心配する価値がないからではない。いくら心配したって法が付かんからである。  
吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬ  
とする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾輩も安心を欲する。よ  
き  
って三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分つ  
た。三個の計略のうちいずれを選んだのがもっとも得策であるかの問題に対して、 自 ら  
みずか

はんもん  
明瞭なる答弁を得るに苦しむからの 煩 悶 である。戸棚から出るときには吾輩これに  
はかりごと  
ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに対する 計 がある、また流しから這

き  
い上るときはこれを迎える成算もあるが、そのうちどれか一つに極めねばならぬとなると  
おおい  
大 に当惑する。東郷大将はバルチック艦隊が 対 馬 海 峽 を通るか、  
つしまかいきょう

つがるかいきょう  
津 軽 海 峽 へ出るか、あるいは遠く 宗 谷 海 峽 を廻るかについて 大  
そうやかかいきょう  
に心配されたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像して見て、ご困却の段実に御察  
し申す。吾輩は全体の状況において東郷閣下に似ているのみならず、この格段なる地位に  
おおい  
おいてもまた東郷閣下とよく苦心を同じゅうする者である。

あ おさん  
吾輩がかく夢中になって智謀をめぐらしていると、突然破れた腰障子が開いて 御 三 の  
よめ  
顔がぬうと出る。顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳ではない。ほかの部分は夜目

ぼうてい  
でよく見えんのに、顔だけが著るしく強い色をして判然 眸 底 に落つるからである。御

ゆうべ こ  
三はその平常より赤き頬をますます赤くして洗湯から帰ったついでに、昨 夜 に懲りてか、

とじまり  
早くから勝手の 戸 締 をする。書齋で主人が俺のステッキを枕元へ出しておけと云う声

えきすい  
が聞える。何のために枕頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかった。まさか 易 水

の壮士を気取って、<sup>りゅうめい</sup>竜 鳴 を聞こうと云う酔狂でもあるまい。きのうは山の芋、

<sup>きょう</sup>今日はステッキ、<sup>あす</sup>明日は何になるだろう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら<sup>らんま</sup>欄 間 と云うような所が幅一尺ほど切り抜かれて

夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めている。惜し気もなく散る<sup>ひがんざくら</sup>彼 岸 桜 を誘うて、<sup>さつ</sup>颯

と吹き込む風に驚ろいて眼を覚ますと、<sup>さ</sup>臙 月 <sup>おぼろづき</sup>さえいつの間に差してか、<sup>ま</sup>へつつい <sup>かま</sup>竈

の影は斜めに<sup>あげいた</sup>揚 板 の上にかかる。寝過ぎしはせぬかと二三度耳を振って家内の

<sup>ようす</sup>ようす <sup>うかが</sup>うかが 容 子を <sup>窺</sup>うと、しんとして昨夜のごとく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだろう。

戸棚の中でことごとと音がしだす。小皿の<sup>ふち</sup>縁 を足で抑えて、中をあらしているらしい。

ここから出るわいと穴の横へすくんで待っている。なかなか出て来る<sup>けしき</sup>景 色 はない。皿の音はやがてやんだが今度はどんぶりか何かに掛ったらしい、重い音が時々ごとごととする。しかも戸を隔ててすぐ向う側でやっている、吾輩の鼻づらと距離にしたら三寸も離れておらん。時々はちよろちよろと穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて一匹も顔を出すも

はない。戸一枚向うに現在敵が暴行を<sup>たくま</sup>逞 しくしているのに、吾輩はじっと穴の出口

で待っておらねばならん随分気の長い話だ。鼠は<sup>りよじゅんわん</sup>旅 順 椀 の中で盛に舞踏会を催

<sup>はい</sup>うしている。せめて吾輩の這入れるだけ御三がこの戸を開けておけば善いのに、気の利かぬ山出した。

今度はへつついの影で吾輩の<sup>あわびがい</sup>鮑 貝 がことりと鳴る。敵はこの方面へも来たなど、

そーっと忍び足で近寄ると<sup>ておけ</sup>手 桶 の間から<sup>しっぽ</sup>尻 尾 がちらと見えたぎり流しの下へ隠れて

しまった。しばらくすると風呂場でうがい茶碗が<sup>かなだら</sup>金 盥 にかちりと当る。今度は

うしろ おおき えん  
後 方だと振りむく途端に、五寸近くある 大 な奴がひらりと齒磨の袋を落して 椽

か と  
の下へ馳け込む。逃がすものかと続いて飛び下りたらもう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは  
思ったよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、戸棚を警戒すると流しから飛び上り、

がんばん こしゃく  
台所の真中に 頑 張 っていると三方面共少々ずつ騒ぎ立てる。 小 癩 と云おうか、

ひきょう  
卑 怯 と云おうかとうてい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと

しん つか  
気を疲らし 心 を 労 らして奔走努力して見たがついに一度も成功しない。残念ではある

しょうじん ほど  
がかかる 小 人 を敵にしてはいかなる東郷大将も 施 こすべき策がない。始めは勇

てきがいしん  
気もあり 敵 愾 心 もあり悲壯と云う崇高な美感さえあったがついには面倒と馬鹿気  
ているのと眠いのと疲れたので台所の真中へ坐ったなり動かない事になった。しかし動か

はっぼうにら き  
んでも 八 方 睨 みを極め込んでいれば敵は小人だから大した事は出来ないのである。

に  
目ざす敵と思った奴が、存外けちな野郎だと、戦争が名誉だと云う感じが消えて悪くいと

に  
云う念だけ残る。悪くいと云う念を通り過すと張り合が抜けてぼーとする。ぼーとしたあ

き けいべつ きよくねむ  
とは勝手にしろ、どうせ気の利いた事は出来ないのだからと 軽 蔑 の 極 眠 たく

なる。吾輩は以上の径路をたどって、ついに眠くなった。吾輩は眠る。休養は敵中に在っ  
ても必要である。

ひさし はなふぶき ひとかたま  
横向に 庇 を向いて開いた引窓から、また 花 吹 雪 を 一 塊 りなげ込んで、

めぐ ま  
烈しき風の吾を 遶 ると思えば、戸棚の口から弾丸のごとく飛び出した者が、避くる間も

うし  
あらばこそ、風を切って吾輩の左の耳へ喰いつく。これに続く黒い影は 後 ろに廻るか

しっぽ またた  
思う間もなく吾輩の尻 尾 へぶら下がる。 瞬 く間の出来事である。吾輩は何の目的も

はねあが  
なく器械的に跳上る。満身の力を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする。耳に

グムかん  
喰い下がったのは中心を失ってだらりと吾が横顔に懸る。護謨管のごとき柔かき尻尾の

くつきょう てがか くだ  
先が思い掛なく吾輩の口に這入る。屈 竟 の手懸りに、砕 けよとばかり尾を

くわ  
脚 えながら左右にふると、尾のみは前歯の間に残って胴体は古新聞で張った壁に当って、

は すきま の かか まり け  
揚板の上に跳ね返る。起き上がるころを隙 間 なく乗し掛れば、毬 を蹴たると

かす ふち  
く、吾輩の鼻づらを 掠 めて釣り段の縁 に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見お

ろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離は五尺。その中に月の光りが、 おおはば 大 幅 の帯

くう  
を 空 に張るとく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、やっ とばかり棚の上に飛び

ふち あとあし  
上がろうとした。前足だけは首尾よく棚の縁 にかかったが 後 足 は宙にもがいている。

あや  
尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰い下っている。吾輩は 危 うい。

か か あしがか  
前足を懸け易えて 足 懸 りを深くしようとする。懸け易える度に尻尾の重みで浅くなる。

にさんぶ か  
二 三 分滑れば落ちねばならぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で搔きむしる音ががり  
がりと聞える。これではならぬと左の前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたの  
で吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。自分と尻尾に喰いつくものの重みで吾輩のから

ねら  
だがぎりぎり廻る。この時まで身動きもせずに 覘 いをつけていた棚の上の怪物は、  
ここぞと吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投ぐるがごとく飛び下りる。吾輩の爪は

いちる かた たて  
一 縷 のかかりを失う。三つの 塊 まりが一つとなって月の光を 豎 に切って下へ落ち

すりばち こおけ あきかん  
る。次の段に乗せてあった 摺 鉢 と、摺鉢の中の小 桶 とジャムの 空 缶 が同じく

ひとかたまり みずがめ  
一 塊 となって、下にある火消壺を誘って、半分は 水 甕 の中、半分は板の間  
の上へ転がり出す。すべてが深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の魂をさえ寒

からしめた。

「泥棒！」と主人は 胴 間 声 を張り上げて寢室から飛び出して来る。見ると片手にはラ

ンプを提げ、片手にはステッキを持って、寝ぼけ 眼 よりは身分相応の 炯々たる

光を放っている。吾輩は 鮑 貝 の 傍 におとなしくして 蹲 踞 する。二疋の怪物は 戸棚の中へ姿をかくす。主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさせたのは」と怒気

を帯びて相手もないのに聞いている。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は 半 切 ほどに細くなった。

## 六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいも

のだと 英 吉 利 のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う話があるが、たとい骨

だけにならなくとも好いから、せめてこの淡灰色の 斑 入 の 毛 衣 だけはちょっと洗

い張りでもするか、もしくは当分の 中 質にでも入れたいような気がする。人間から見た

ら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至って単純な無事な 銭

のかからない 生 涯 を送っているように思われるかも知れないが、いくら猫だって相

応に暑さ寒さの感じはある。たまには 行 水 の一度くらいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢

してこの年になるまで洗湯の 暖 簾 を 潜 った事はない。折々は 団 扇 でも使って見ようと云う気も起らんでもないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。それを

思うと人間は 贅 沢 なものだ。なまで食ってしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼

いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで余計な 手 数 を懸けて御互に恐悦している。着物だってそうだ。猫のように一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼等にとって、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚

の かいこ  
の上へ載せて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介になったり、 蚕 の御世話になったり、

おなさ ぜいたく  
綿島の御情けさえ受けるに至っては贅沢は無能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず大目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接の利害もないところまで

ごう がてん  
この調子で押して行くのは毫も合点が行かぬ。第一頭の毛などと云うものは自然に生

ほう  
えるものだから、放っておく方がもっとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、

かつこう  
彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好をこしらえて得意である。坊主とか自称する

ずきん  
ものはいつ見ても頭を青くしている。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。これでは何のために青い物を出しているのか主意が立たんではないか。そうかと思うと

くし のこぎりよう  
櫛とか称する無意味な鋸様の道具を用いて頭の毛を左右に等分して嬉しがっ

ずがいこつ くかく  
てるのもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人為的の区劃を立

うし は  
てる。中にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろまで食み出しているのがある。まる

がんぞう ばしょうは  
で贗造の芭蕉葉のようだ。その次には脳天を平らに刈って左右は真直に切り落

わく  
す。丸い頭へ四角な枠をはめているから、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。

うきみ やつ  
とにかくそんなに憂身を憂してどうするつもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれだけはおも行く訳なのに、いつ

ぼうだら  
でも二本ですまして、残る二本は到来の棒鱈のように手持無沙汰にぶら下げているの

ひま  
は馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよほど猫より閑なもので退屈のあまりかようない

ひまじん  
たずらを考案して楽んでいるものと察せられる。ただおかしいのはこの閑人がよると

さ  
障わると多忙だ多忙だと触れ廻るのみならず、その顔色がいかにも多忙らしい、わるく  
すると多忙に食い殺されはしまいかと思われるほどこせついている。彼等のあるものは吾  
輩を見て時々あんなになったら気楽でよかろうなどと云うが、気楽でよければなるが好い。  
そんなにこせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなからう。自分で勝手な用事を手に負えぬ  
ほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかかん起して暑い暑いと云うようなも  
のだ。猫だって頭の刈り方を二十通りも考え出す日には、こう気楽にしてはおられんさ。

けごろも  
気楽になりたければ吾輩のように夏でも毛衣を着て通されるだけの修業をするがよ  
ろしい。——とは云うものの少々熱い。毛衣では全く熱つ過ぎる。

おこた  
これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないかな、永らく人間社会の観察を怠っ

あくせく  
たから、今日は久し振りで彼等が酔興に醒醒する様子を拝見しようかと考えて見たが、

あいにく しょうぶん  
生憎主人はこの点に関してすこぶる猫に近い性分である。昼寝は吾輩に劣ら  
ぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になってからは何一つ人間らしい仕事をせんので、い

いっこう  
くら観察をしても一向観察する張合がない。こんな時に迷亭でも来ると胃弱性の皮膚  
も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫に遠ざかるだろうに、先生もう来ても好い時だと思  
っていると、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかり  
ではない、折々大きな声で相の手を入れている。「いや結構」「どうも良い心持ちだ」

うちじゅう  
「もう一杯」などと家中に響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな大き

ぶさほう きま  
な声と、こんな無作法な真似をやるものはほかにはない。迷亭に極まっている。

つぶ ふ  
いよいよ来たな、これで今日半日は潰せると思っていると、先生汗を拭いて肩を入れ

くしゃみ  
て例のごとく座敷までずかずか上って来て「奥さん、苦沙弥君はどうしました」と呼ば

ほう そば  
わりながら帽子を畳の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突っ伏して好い心持  
ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答えるほどの響がしたのではと驚ろいて、

さ さつまじょうふ  
醒めぬ眼をわざとって座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布を着て勝手な所へ陣取っ

てしきりに扇使いをしている。

「おやいらしゃいまし」と云ったが少々<sup>ろうばい</sup> 狼 狽 の気味で「ちっとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をかいたまま御辞儀をする。「いえ、今来たばかりなんですよ。今風呂場で

おさん  
御 三 に水を掛けて貰ってね。ようやく生き帰ったところで——どうも暑いじゃありません

りょうさんち  
んか」「この 両 三 日は、ただじっとしておりましても汗が出るくらいで、大変御暑うございます。——でも御変りもございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがとうございます。なに暑いくらいでそんなに変わりやしませんや。しかしこの暑さは別物

です。どうも体がだるくってね」「私<sup>わたく</sup> しなども、ついに昼寝などを致した事がないんですが、こう暑いとつい——」「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜

寝られりゃ、こんな結構な事はないでさあ」とあいかわらず呑<sup>のんき</sup> 気 な事を並べて見たがそ

れだけでは不足と見えて「私<sup>わたし</sup> なんざ、寝たくない、質<sup>たち</sup> でね。苦沙弥君などのように

来るたんびに寝ている人を見ると 羨<sup>うらやま</sup> しいですよ。もっとも胃弱にこの暑さは答える

の  
からね。丈夫な人でも今日なんかは首を肩の上に載せてるのが退儀でさあ。さればと云つて載ってる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭君いつになく首の処置に窮している。

「奥さんなんざ首の上へまだ載っけておくものがあるんだから、坐っちゃいられないはず

まげ  
だ。髻<sup>まげ</sup> の重みだけでも横になりたくなくなりますよ」と云うと細君は今まで寝ていたのが髻

かっこう  
の 恰 好 から露見したと思って「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじって見る。

きのう  
迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日 はね、屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙な事を云う。「フライをどうなさったんでございます」「屋根の瓦があまり見事に焼けていましたから、ただ置くのも勿体ないと思ってね。バタを溶かして玉子を

てんぴ  
落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやっぱり 天 日は思うように行きませんや。なかなか半熟にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客が来たもんだからつい忘れてしまって、今朝になって急に思い出して、もう大丈夫だろうと上って見たらね」「どうなっておりました」「半熟どころか、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君



は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくて、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでござ

いますよ。せんだってじゅうは <sup>ひとえ</sup> 単衣 では寒いくらいでございましたのに、一昨日か

ら急に暑くなりましてね」「<sup>かに</sup>蟹 <sup>は</sup>なら横に這うところだが今年の気候はあとびさりをする

んですよ。 <sup>とうこう</sup> 倒行して <sup>げきし</sup> 逆施すまた可ならずやと云うような事を言っているかも知れない」「なんでござんす、それは」「いえ、何でもないので。どうもこの気候の逆戻りを

言うと、果せるかな細君は分らない。しかし最前の倒行して逆施すで少々 <sup>こ</sup> 懲りているから、今度はただ「へえー」と云ったのみで問い返さなかった。これを問い返されないと迷亭は

せっかく持ち出した <sup>かい</sup> 甲斐がない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御存じですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存じないですか、ちょっと講釈をしましょうか」と云うと細君も

それには及びませんとも言い兼ねたものだから「ええ」と云った。「<sup>むか</sup>昔しハーキュリスが牛を引っ張って来たんです」「そのハーキュリスと云うのは牛飼でもござんすか」「牛

飼じゃありませんよ。牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節は <sup>ギリシャ</sup> 希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」「あら希臘のお話しなの？ そんなら、そうおっしゃればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思いました。それでその男がどうしたんで——」「その男

がね奥さん見たように眠くなってぐうぐう寝ている——」「あらいやだ」「寝ている間に、<sup>ま</sup>

ヴァルカンの子が来ましてね」「ヴァルカンて何です」「ヴァルカンは鍛冶屋ですよ。こ

の鍛冶屋のせがれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛の <sup>しっぽ</sup> 尻尾を持ってぐいぐい

引いて行ったもんだからハーキュリスが眼を覚まして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。分らないはずでさあ。牛の足跡をつけたって前の方へあるかして連れ

て行ったんじゃないもの、<sup>うし</sup> 後ろへ <sup>うし</sup> 後ろへと引きずって行ったんですからね。鍛

治屋のせがれにしては大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天気の話は忘れている。

ひるね

「時に御主人はどうしました。相変らず午 睡 ですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありますね。何の事もない毎

おてすう

日少しずつ死んで見るようなものですぜ、奥さん御 手 数 だがちょっと起していらっしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですがね」と平気な

ふいちよう

顔をして聞きもせぬ事を 吹 聴 する。「おやまあ、時分どきだのにちっとも気が付きませんで——それじゃ何もございせんが御茶漬でも」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくっても好いですよ」「それでも、あなた、どうせ御口に合うようなものはございせんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭は悟ったもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんで

あつ

す。今途中で御馳走を 誂 らえて来ましたから、そいつを一つここでいただきますよ」と

しろうと

ひとこと

とうてい 素 人 には出来そうもない事を述べる。細君はたった 一 言 「まあ！」と

うち

てすう

云ったがそのまあの 中 には驚ろいたまあと、気を悪くしたまあと、手 数 が省けてありがたいと云うまあが合併している。

こ

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいので、寝つき掛った眠をさかに扱かれたような心持で、ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかましい男だ。せっかく好い

あくびまじ ぶっちょうづら

心持に寝ようとしたところを」と欠 伸 交りに 仏 頂 面 をする。「いや

おめざめ ほうみん

御 目 覚 かね。鳳 眠 を驚かし奉ってはなはだ相済まん。しかしたまには好かろう。

さあ坐りたまえ」とどっちが客だか分らぬ挨拶をする。主人は無言のまま座に着いて

よせぎざいく まきたばこ

寄 木 細 工 の 巻 煙 草 入 から「朝日」を一本出してすばすば吸い始めたが、ふと

むこう すみ

向 の 隅 に転がっている迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買ったね」と云った。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。大変目が細かくって柔らかいんですね」と細君はしきりに撫で廻わす。「奥さんこの帽子は

ちょうほう げんこつ  
重宝 ですよ、どうでも言う事を聞きますからね」と 拳骨 をかためてパナマの

横ッ腹をばかりと張り付けると、なるほど意のごとく 拳 ほどな穴があいた。細君が「へ

え」と驚く間もなく、この 度 は拳骨を裏側へ入れてうんと突ッ張ると 釜 の頭がばかり

と 尖がる。次には帽子を取って 鏢 と鏢とを両側から押し 潰 して見せる。潰れた帽子

めんぼう の そば むしろ  
は 麵 棒 で延した蕎麦のように平たくなる。それを片端から 蓆 でも巻くごとくぐるぐる畳む。「どうですこの通り」と丸めた帽子を懐中へ入れて見せる。「不思議です事

きてんさいしょういち  
ねえ」と細君は 帰 天 齋 正 一 の手品でも見物しているように感嘆すると、迷亭

もその気になったものと見えて、右から懐中に収めた帽子をわざと左の 袖 口 から引っ

張り出して「どこにも傷はありません」と元のごとくに直して、人さし指の先へ釜の底を載

せてくるくと廻す。もう休めるかと思ったら最後にぽんと 後 ろへ放げてその上へ堂っ

けねん  
さりとし餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ 懸 念 らしい顔をする。細君は無論の

こ  
事心配そうに「せっかく見事な帽子をもし壊わしでもしちゃあ大変ですから、もう好い加

よ  
減になすったら宜うござんしょう」と注意をする。得意なのは持主だけで「ところが壊われないから妙でしょう」と、くちやくちやになったのを尻の下から取り出してそのまま頭

かつこう  
へ載せると、不思議な事には、頭の 恰 好 にたちまち回復する。「実に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしょう」と細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじゃありません、元からこう云う帽子なんです」と迷亭は帽子を被ったまま細君に返事をしている。

「あなたも、あんな帽子を御買になったら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に

むぎわら  
勧めかけた。「だって苦沙弥君は立派な 麦 藁 の奴を持つてるじゃありませんか」「と

つぶ  
ころがあなた、せんだって小供があれを踏み 潰 してしまいました」「おやおやそりゃ惜しい【#「惜しい」は底本では「措しい】事をしましたね」「だから今度はあなたのよ

うな丈夫で奇麗なのを買ったら善かろうと思いますんで」と細君はパナマの 価 段 <sup>ねだん</sup> を知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。

迷亭君は今度は右の 袂 <sup>たもと</sup> の中から赤いケース入りの 鋏 <sup>はさみ</sup> を取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそのくらいにしてこの鋏を御覧なさい。これがまたすこぶる ちょうほう

重 宝 <sup>じゆうほう</sup> な奴で、これで十四通りに使えるんです」この鋏が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになるところであったが、幸に細君が女として持って生れた好奇心のために、

この 厄 運 <sup>やくうん</sup> を 免 <sup>まぬ</sup> かれたのは迷亭の機転と云わんよりむしろ 僥 倖 <sup>ぎょうこう</sup> の仕合せだと吾輩は看破した。「その鋏がどうして十四通りに使えます」と聞くや否や迷亭君は大得

意な調子で「今一々説明しますから聞いていらっしゃい。いいですか。ここに 三 日 月 形 <sup>みかづきがた</sup> の欠け目がありましよう、ここへ葉巻を入れてぷつりと口を切るんです。それからこの根にちよと細工がありましよう、これで針金をぼつぼつやりますね。次には平たくして紙の

上へ横に置くと 定 規 <sup>じょうぎ</sup> の用をする。また刃の裏には 度 盛 <sup>どもり</sup> がしてあるから 物 指 <sup>ものさし</sup> の代用も出来る。こちらの表にはヤスリが付いているこれで爪を磨りまさあ。ようがすか。

この先きを 螺 旋 鋸 <sup>らせんびょう</sup> の頭へ刺し込んでぎりぎり廻すと 金 槌 <sup>かなづち</sup> にも使える。うんと

突き込んでこじ開けると大抵の 釘 付 <sup>くぎづけ</sup> の箱なんざあ苦もなく 蓋 <sup>ふた</sup> がとれる。まった、こ

ちらの刃の先は 錐 <sup>きり</sup> に来てい。ここん 所 <sup>ところ</sup> は書き損いの字を 削 <sup>けず</sup> る場所で、ばらばらに離すと、ナイフとなる。一番しまいに——さあ奥さん、この一番しまいが大変面白いん

です、ここに 蠅 <sup>はえ</sup> の眼玉くらいな大きさの 球 <sup>たま</sup> がありましよう、ちょっと、 覗 <sup>のぞ</sup> いて御覧なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさるんだから」「そう信用がなくなっちゃ困った

ね。だが 欺 <sup>だま</sup> されたと思って、ちょっと覗いて御覧なさいな。え？ 厭 <sup>いや</sup> ですか、ちよっ

とでいいから」と 鋏 <sup>はさみ</sup> を細君に渡す。細君は 覚 束 <sup>おぼつか</sup> なげに鋏を取りあげて、例の蠅

の眼玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりに 覘 <sup>ねらい</sup> をつけている。「どうです」「何だか真

黒ですわ」「真黒じゃいけませんね。も少し障子の方へ向いて、そう鉢を寝かさずに——  
そうそうそれなら見えるでしょう」「おやまあ写真ですねえ。どうしてこんな小さな写真  
を張り付けたんでしょう」「そこが面白いところでさあ」と細君と迷亭はしきりに問答を  
している。最前から黙っていた主人はこの時急に写真が見たくなったものと見えて「おい

<sup>み</sup>  
俺にもちょっと覧せろ」と云うと細君は鉢を顔へ押し付けたまま「実に奇麗です事、裸体  
の美人ですね」と云ってなかなか離さない。「おいちょっと御見せと云うのに」「まあ待

っていらっしゃいよ。美しい髪ですね。腰までありますよ。少し仰 <sup>あおむ</sup> 向 <sup>せい</sup> いて恐ろしい 背  
の高い女だ事、しかし美人ですね」「おい御見せと云ったら、大抵にして見せるがいい」

<sup>おおい</sup> <sup>せ</sup>  
と主人は 大 に急き込んで細君に食って掛る。「へえ御待遠さま、たんと御覧遊ばせ」

と細君が鉢を主人に渡す時に、勝手から <sup>おさん</sup> 御 <sup>おあつらえ</sup> 三 が御客さまの 御 誂 が参りましたと、

<sup>ざるそば</sup>  
二個の 箸 蕎 麦 を座敷へ持って来る。

<sup>じべん</sup>  
「奥さんこれが僕の 自 弁 の御馳走ですよ。ちょっと御免蒙って、ここでぱくつく事に致

<sup>ていねい</sup> <sup>ふざけ</sup>  
しますから」と 叮 嚀 に御辞儀をする。真面目なような巫山戯たような動作だから細  
君も応対に窮したと見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたぎり拝見している。主人はよ

<sup>そば</sup>  
うやく写真から眼を放して「君この暑いのに蕎麦は毒だぜ」と云った。「なあに大丈夫、

<sup>めった</sup> <sup>あた</sup> <sup>せいろ</sup> <sup>ふた</sup>  
好きなものは 滅 多 に 中 るもんじゃない」と蒸 籠 の 蓋 をとる。「打ち立てはあり

<sup>そば</sup> <sup>ま</sup>  
がたいな。蕎麦の延びたのと、人間の間が抜けたのは由来たのもしくないもんだよ」と

<sup>やくみ</sup> <sup>か</sup> <sup>わさび</sup> <sup>か</sup>  
薬 味 をツユの中へ入れて無茶苦茶に搔き廻わす。「君そんなに 山 葵 を入れると辛ら  
いぜ」と主人は心配そうに注意した。「蕎麦はツユと山葵で食うもんだあね。君は蕎麦が

<sup>うどん</sup> <sup>まご</sup>  
嫌いなんだろう」「僕は 饅 飩 が好きだ」「饅飩は馬子が食うもんだ。蕎麦の味を解しな

<sup>すぎばし</sup>  
い人ほど気の毒な事はない」と云いながら 杉 箸 をむざと突き込んで出来るだけ多くの  
分量を二寸ばかりの高さにしゃくい上げた。「奥さん蕎麦を食うにもいろいろ流儀があり

しょうしん むやみ  
ますがね。初心の者に限って、無暗にツユを着けて、そうして口の内できちやく

ひ  
ちゃやっていますね。あれじゃ蕎麦の味はないですよ。何でも、こう、一としゃくいに引

せいぞろ  
っ掛けてね」と云いつつ箸を上げると、長い奴が勢揃いをして一尺ばかり空中に釣る  
し上げられる。迷亭先生もう善かろうと思って下を見ると、まだ十二三本の尾が蒸籠の底

すだ てんめん  
を離れないで簀垂れの上に纏綿している。「こいつは長いな、どうです奥さん、この  
長さ加減は」とまた奥さんに相の手を要求する。奥さんは「長いものでございますね」と

さんぶいち  
さも感心したらしい返事をする。「この長い奴へツユを三分一つけて、一口に飲んで

か のど すべ  
しまうんだね。噛んじゃいけない。噛んじゃ蕎麦の味がなくなる。つるつると咽喉を滑

はし  
り込むところがねうちだよ」と思い切って箸を高く上げると蕎麦はようやくの事で地を

ゆんで ひた  
離れた。左手に受ける茶碗の中へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先からだんだんに浸

つか かさ  
すと、アーキミジスの理論によって、蕎麦の浸った分量だけツユの嵩が増してくる。

はい  
ところが茶碗の中には元からツユが八分目這入っているから、迷亭の箸にかかった蕎麦の

しはんぶん つか さ  
四半分も浸らない先に茶碗はツユで一杯になってしまった。迷亭の箸は茶碗を去  
る五寸の上に至ってびたりと留まったきりしばらく動かない。動かないのも無理はない。

おろ こぼ てい  
少しでも卸せばツユが溢れるばかりである。迷亭もここに至って少しの体であった

だっと ま  
が、たちまち脱兎の勢を以て、口を箸の方へ持って行ったなと思う間もなく、つるつる

のどぶえ じょうげ  
ちゅうと音がして咽喉笛が一二度上下へ無理に動いたら箸の先の蕎麦は消えてな

めじり  
くなっておった。見ると迷亭君の両眼から涙のようなものが一二滴眼尻から頬へ流れ出

わさび き  
した。山葵が利いたものか、飲み込むのに骨が折れたものかこれはいまだに判然しない。

「感心だなあ。よくそんなに一どきに飲み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見事で

てぎわ  
す事ねえ」と細君も迷亭の手際を激賞した。迷亭は何にも云わないで箸を置いて胸を二

たた ざる てすう  
三度 敲いたが「奥さん 箸は大抵三口半か四口で食うんですね。それより手数を掛

うま  
けちゃ 旨く食えませんよ」とハンケチで口を拭いてちょっと一息入れている。

りょうけん かぶ  
ところへ寒月君が、どう云う了見かこの暑いのに御苦労にも冬帽を被って両

ほこり ごにゅうらい  
足を 埃だらけにしてやってくる。「いや好男子の御入来だが、喰い掛けたも

しゅうじんかんざ うち  
のだからちょっと失敬しますよ」と迷亭君は衆人環座の裏にあって

おくめん たいら さつき めざま  
臆面もなく残った蒸籠を平げる。今度は先刻のように目覚しい食方もしな

せいり  
かった代りに、ハンケチを使って、途中で息を入れると云う不体裁もなく、蒸籠二つを  
安々とやってのけたのは結構だった。

あと  
「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人が聞くと迷亭もその後から「金田令嬢

そうそうていしゅつ  
がお待ちかねだから早々呈出したまえ」と云う。寒月君は例のごとく薄気味

も  
の悪い笑を洩らして「罪ですからなるべく早く出して安心させてやりたいのですが、何し

い  
る問題が問題で、よほど労力の入る研究を要するのですから」と本気の沙汰とも思われな  
い事を本気の沙汰らしく云う。「そうさ問題が問題だから、そう鼻の言う通りにもならな  
いね。もっともあの鼻なら充分鼻息をうかがうだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な  
挨拶をする。比較的に真面目なのは主人である。「君の論文の問題は何とか云ったっけな」

めだま しがいこうせん  
「蛙の眼球の電動作用に対する紫外光線の影響と云うのです」「そりゃ奇だね。

ふる  
さすがは寒月先生だ、蛙の眼球は振ってるよ。どうだろう苦沙弥君、論文脱稿前にその  
問題だけでも金田家へ報知しておいては」主人は迷亭の云う事には取り合わずに「君そ  
んな事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「ええ、なかなか複雑な問題です、第一

たんかん  
蛙の眼球のレンズの構造がそんな単純なものでありませんからね。それでいろいろ実

ガラス たま  
験もしなくちゃなりません。まず丸い硝子の球をこしらえてそれからやろうと思っ  
ています」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば訳ないじゃないか」「どうして——どうし

そりみ えん  
て」と寒月先生少々反身になる。「元来円とか直線とか云うのは幾何学的のもので、  
あの定義に合ったような理想的な円や直線は現実世界にはないもんです」「ないもんなら、

よ さ つか  
磨いたらよかろう」と迷亭が口を出す。「それでまず実験上差し支えないくらいな球を  
作って見ようと思ひましてね。せんだってからやり始めたのです」「出来たかい」と主人  
が訳のないようにきく。「出来るものですか」と寒月君が云ったが、これでは少々矛盾だ

す  
と気が付いたと見えて「どうもむずかしいです。だんだん磨って少しこっち側の半径が長

むこうがわ  
過ぎるからと思つてそっちを心持落すと、さあ大変今度は向側が長くなる。そいつ

す つぶ  
を骨を折ってようやく磨り潰したかと思うと全体の形がいびつになるんです。やっとの

りんご  
思いでこのいびつを取るとまた直径に狂いが出来ます。始めは林檎ほどな大きさのもの

いちご だいず  
がだんだん小さくなって苺ほどになります。それでも根気よくやっていると大豆ほ  
どになります。大豆ほどになってもまだ完全な円は出来ませんよ。私も随分熱心に磨りま  
したが——この正月からガラス玉を大小六個磨り潰しましたよ」と嘘だか本当だか見当の

ちょうちょう  
つかぬところを喋々と述べる。「どこでそんなに磨っているんだい」「やっぱり  
学校の実験室です、朝磨り始めて、昼飯のときちょっと休んでそれから暗くなるまで磨る  
んですが、なかなか楽じゃありません」「それじゃ君が近頃忙がしい忙がしいと云つて毎  
日日曜でも学校へ行くのはその珠を磨りに行くんだね」「全く目下のところは朝から晩ま  
で珠ばかり磨っています」「珠作りの博士となつて入り込みしは——と云うところだね。  
しかしその熱心を聞かせたら、いかな鼻でも少しはありがたがるだろう。実は先日僕があ

ろうばい  
る用事があつて図書館へ行って帰りに門を出ようとしたら偶然老梅君に出逢つたの  
さ。あの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと思つて感心に勉強するね  
と云つたら先生妙な顔をして、なに本を読みに来たんじゃない、今門前を通り掛つたらち

こよう  
よつと小用がしたくなつたから拝借に立ち寄つたんだと云つたんで大笑をしたが、老梅



君と君とは反対の好例として新撰蒙求に是非入りたいよ」と迷亭君例のごとく長たらしい註釈をつける。主人は少し真面目になって「君そう毎日毎日珠ばかり磨って

るのもよかろうが、元来いつ頃出来上るつもりかね」と聞く。「まあこの容子じゃ十年

のんき  
くらいかかりそうです」と寒月君は主人より呑気に見受けられる。「十年じゃ——もう少し早く磨り上げたらよかろう」「十年じゃ早い方です、事によると廿年くらいかかります」「そいつは大変だ、それじゃ容易に博士にやなれないじゃないか」「ええ一日も早くなって安心させてやりたいのですがとにかく珠を磨り上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちょっと句を切って「何、そんなにご心配には及びませんよ。金田でも私の珠

にさんち  
ばかり磨ってる事はよく承知しています。実は二三日前行った時にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行っていらっしゃるじゃあ

へきえき てい  
りませんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少し辟易の体であったが「そりゃ妙ですな、どうしたんだろう」ととぼけている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、

とき きま  
話の途切れた時、極りの悪い時、眠くなった時、困った時、どんな時でも必ず横合から

りょうさんち  
飛び出して来る。「先月大磯へ行ったものに両三日前東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交換だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象が起るものだ。ちょっと聞くと夢のようだが、夢にしても現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思いも

しょうがい  
思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯恋の何物たるを御解しにならん方に

けいべつ  
は、御不審ももつともだが……」「あら何を証拠にそんな事をおっしゃるの。随分軽蔑

こいわずら  
なさるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。「君だって恋煩いなんかした事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に助太刀をする。「そりゃ僕の

えんぶん きみがた  
艶聞などは、いくら有ってもみんな七十五日以上経過しているから、君方の記憶には残っていないかも知れないが——実はこれでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らしているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻す。「ホホホホ面白い事」と云っ

たのは細君で、「馬鹿にしていなあ」と庭の方を向いたのは主人である。ただ寒月君だけ

こうがく  
は「どうかその懐旧談を後学のために伺いたいもので」と相変らずにやにやすする。

だいぶ  
「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合もないのだが、せっかくだから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴しなくっちゃいけないよ」と念を押していよいよ本文に取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——何年前だったかな——面倒だからほぼ十五六年前

じょうだん  
としておこう」「冗談じゃない」と主人は鼻からフンと息をした。「大変物覚えが

いちごん  
御悪いのね」と細君がひやかした。寒月君だけは約束を守って一言も云わずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何でもある年の冬の事だが、僕が越後の国はかんばらごおりたけのこだに たこつぼとうげ  
蒲原郡 筧谷 を通って、蛸壺峠 へかかって、これからいよいよ

あいづりょう  
よ会津領 [#ルビの「あいづりょう」は底本では「あいずりょう」] へ出ようとするところだ「妙なところだな」と主人がまた邪魔をする。「だまって聴いていらっしやいよ。面白いから」と細君が制する。「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕

たた  
方がないから峠の真中にある一軒屋を 敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれと云うと、御安い御用です、さあ御上がんなさいとはだかるうそく  
裸 蝟 燭 を僕の顔に差しつけた娘の顔を見て僕はぶるぶると 悸 えたがね。僕は

くせもの  
その時から恋と云う 曲 者の魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山の中にも美しい人があるんでしょうか」「山だって海だって、奥さん、その娘を一目あなたに見せたいと思うくらいですよ、文 金 の 高 島 田 に髪を結いましてね」「へえー」と

はい いろり  
細君はあっけに取られている。「這入って見ると八畳の真中に大きな囲炉裏が切ってあつ

まわ じい ばあ おなか  
て、その 周りに娘と娘の 爺さんと 婆さんと僕と四人坐ったんですがね。さぞ御腹

おへ  
が御減りでしょうと云いますから、何でも善いから早く食わせ給えと請求したんです。す

へびめし た  
ると爺さんがせつかくの御客さまだから 蛇飯 でも炊いて上げようと云うんです。さあ  
これからがいよいよ失恋に取り掛るところだからしっかりして聴きたまえ」「先生しっか  
りして聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だって冬、蛇がいやしますまい」「うん、そ  
りくつ  
りゃ一応もつともな質問だよ。しかしこんな詩的な話しになるとそう 理窟 にばかり  
こうでい  
拘泥 してはいられないからね。鏡花の小説にゃ雪の中から 蟹 が出てくるじゃないか」  
と云ったら寒月君は「なるほど」と云ったきりまた謹聴の態度に復した。

あく いなご あ  
「その時分の僕は随分 悪もの食いの隊長で、 蝗、なめくじ、赤蛙などは食い厭きて  
おつ  
いたくらいなところだから、蛇飯は 乙 だ。早速御馳走になろうと爺さんに返事をした。

なべ  
そこで爺さん囲炉裏の上へ 鍋 をかけて、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。

なべ ふた  
不思議な事にはその 鍋 の 蓋 を見ると大小十個ばかりの穴があいている。その穴から湯

うま いなか  
気がふうふう吹くから、 旨い工夫をしたものだ、田舎 にはは感心だと見ていると、

ざる か  
爺さんふと立って、どこかへ出て行ったがしばらくすると、大きな 箆 を小脇に抱い込ん

そば のぞ  
で帰って来た。何気なくこれを囲炉裏の 傍 へ置いたから、その中を 覗いて見ると――

ま かた  
いたね。長い奴が、寒いもんだから御互にとぐろの捲きくらをやって 塊 まっていました

よ  
ね」「もうそんな御話しは廃しになさいよ。厭らしい」と細君は眉に八の字を寄せる。「ど  
うしてこれが失恋の大原因になるんだからなかなか廃せませんや。爺さんはやがて左手に

むぞうさ  
鍋の蓋をとって、右手に例の塊まった長い奴を 無雑作 につかまえて、いきなり鍋の中へ

ほう  
放り込んで、すぐ上から蓋をしたが、さすがの僕もその時ばかりははっと息の穴が

ふさが きび こわ  
塞 ったかと思ったよ」「もう御やめになさいよ。気味の悪るい」と細君しきりに 怖

しんぼう  
がっている。「もう少しで失恋になるからしばらく 辛抱 していらっしゃい。すると一

かまくび  
分立つか立たないうちに蓋の穴から鎌首がひょいと一つ出ましたのには驚ろきましたよ。やあ出たなと思うと、隣の穴からもまたひょいと顔を出した。また出たよと云うう

なべじゅう つら  
ち、あちらからも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中蛇の面だらけになってしまった」「なんで、そんなに首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよかろう、引っ張らっしとか何とか云うと、

めいめい  
婆さんははあ一と答える、娘はあいと挨拶をして、名々に蛇の頭を持ってぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出してくる」「蛇の骨抜きですね」と寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜き、器用

しゃくし やたら かま  
な事をやるじゃないか。それから蓋を取って、杓子でもって飯と肉を矢鱈に掻き交ぜて、さあ召し上がれと来た」「食ったのかい」と主人が冷淡に尋ねると、細君は苦い

よ  
顔をして「もう廃しになさいよ、胸が悪くって御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事をおっしゃるが、まあ一遍たべて

しょうがい  
ご覧なさい、あの味ばかりは生涯忘れられませんぜ」「おお、いやだ、誰が食べる

ごぜん  
もんですか」「そこで充分御饌も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、

つか  
もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさいましと云うので、旅の労れもある

おおせ  
事だから、仰に従って、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしま

あくるあさ  
った」「それからどうなさいました」と今度は細君の方から催促する。「それから明朝

さま  
になって眼を覚してからが失恋でさあ」「どうかなさったんですか」「いえ別にどうも

まきたばこ  
しやしませんかね。朝起きて巻煙草をふかしながら裏の窓から見ていると、向うの

かけひ そば やかんあたま  
笥の傍で、薬缶頭が顔を洗っているんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。「それがさ、僕にも識別しにくかったから、しばらく拝見していて、その薬缶

がこちらを向く段になって驚ろいたね。それが僕の初恋をした 昨 夜 の娘なんだもの」「だ

って娘は島田に結っているとさっき云ったじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿にしていなあ」と主人は例によって天井の方

へ視線をそらす。「僕も不思議の 極 内心少々 怖 くなったから、なお余所ながら

ようす うかが 容子を 窺 っていると、薬缶はようやく顔を洗い 了 った、傍 への石の上に置き

てあった高島田の 鬘 を無雑作に 被 って、すましてうちへ這入ったんでなるほどと

思った。なるほどとは思ったようなもののその時から、とうとう失恋の果敢なき運命をかこつ身となってしまう」「くだらない失恋もあったもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋でも、こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が寒月君に向って迷亭君の失恋を評すると、寒月君は「しかしその娘が丸薬缶でなくてめでたく東京へでも連れて御帰りに

なったら、先生はなお元気かも知れませんよ、とにかくせつかくの娘が 禿 であつたのは

せんしゅう こんじ 千 秋 の恨事 ですねえ。それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜けてしまったんでしょ」「僕もそれについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯を食い過ぎたせいで相違ないと思う。蛇飯てえ奴のはのぼせるからね」「しかしあなたは、どこも何ともなくて結構でございましたね」「僕は禿にはならずすんだが、その代りにこの通りその時

から 近 眼 になりました」と金縁の眼鏡をとってハンケチで 町 嚙 に拭いている。

しばらくして主人は思い出したように「全体どこが神秘的なんだい」と念のために聞いて

見る。「あの鬘はどこで買ったのか、拾ったのかどう考えても 未 だに分らないからそこ

が神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。「まるで 嘸 し家の話を聞くようでござんすね」とは細君の批評であつた。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうやめるかと思いのほか、先生は

さるぐつわ は 猿 轡 でも嵌められないうちはとうてい黙っている事が出来ぬ 性 と見えて、また

次のような事をしゃべり出した。

「僕の失恋も <sup>にが</sup> 苦い経験だが、あの時あの <sup>やかん</sup> 薬缶を知らずに貰ったが最後生涯の <sup>めざわ</sup> 目障

りになるんだから、よく考えないと <sup>けんのん</sup> 険呑だよ。結婚なんかは、いざと云う間際になっ

て、飛んだところに傷口が隠れているのを見 <sup>みいだ</sup> 出す事がある者だから。寒月君などもそん

なに <sup>しょうけい</sup> 憧 <sup>ひと</sup> 憬したりしたり <sup>とく</sup> 独りでむずかしがらないで、<sup>たま</sup> 篤と気を落ちつけて <sup>たま</sup> 珠

<sup>す</sup> を磨るがいいよ」といやに異見めいた事を述べると、寒月君は「ええなるべく珠ばかり磨

っていたいんですが、向うでそうさせないんだから弱り切ります」とわざと <sup>へきえき</sup> 辟易した  
ような顔付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立てるんだが、中には滑稽なのがある

よ。あの図書館へ小便をしに来た <sup>ろうばい</sup> 老梅君などになるとすこぶる奇だからね」「どんな

事をしたんだい」と主人が調子づいて <sup>うけたま</sup> 承 <sup>わ</sup> わる。「なあに、こう云う訳さ。先生その  
昔静岡の東西館へ泊った事があるのさ。——たった一と晩だけ——それでその晩すぐにそ

この下女に結婚を申し込んだのさ。僕も随分 <sup>のんき</sup> 呑気だが、まだあれほどには進化しない。

もっともその時分には、あの宿屋に <sup>おなつ</sup> 御夏さんと云う有名な <sup>べっぴん</sup> 別嬪がいて老梅君の座  
敷へ出たのがちょうどその御夏さんなのだから無理はないがね」「無理がないどころか君  
の何とか峠とまるで同じじゃないか」「少し似ているね、実を云うと僕と老梅とはそんなに  
に差異はないからな。とにかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かない

<sup>すいか</sup> うちに水瓜が食いたくなっただがね」「何だって？」と主人が不思議な顔をする。主  
人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねってちょっと考えて見る。迷  
亭は構わずどんどん話を進行させる。「御夏さんと呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、  
御夏さんが、なんぼ静岡だって水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにし  
て持ってくる。そこで老梅君食ったそうさ。山盛りの水瓜をことごとく平らげて、御夏さ

んの返事を待っていると、返事の来ないうちに腹が痛み出してね、うーんうーんと <sup>うな</sup> 唸っ

たが少しも <sup>ききめ</sup> 利目がないからまた御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと聞い  
たら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だって医者くらいはありますよと云って、

てんちげんこう            せんじもん  
天 地 玄 黄 とかいう 千 字 文 を盗んだような名前のドクトルを連れて来た。

あくるあさ  
翌 朝 になって、腹の痛みも御蔭でとれてありがたいと、出立する十五分前に御夏さ

きのう  
んを呼んで、昨 日 申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑いながら静岡には水瓜もあります、御医者もありますが一夜作りの御嫁はありませんよと出て行ったきり顔を見せなかったそうだ。それから老梅君も僕同様失恋になって、図書館へは小便をするほか来なくなったんだって、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受

けて「本当にそうだ。せんだってミュッセの脚本を読んだらそのうちの人物が 羅 馬 の詩

人を引用してこんな事を云っていた。——羽より軽い者は ちり 塵 である。塵より軽いものは

風である。風より軽い者は女である。女より軽いものは 無 である。——よく 穿 てるだ

ろう。女なんか仕方がない」と妙なところで力味んで見せる。これを 承 った細君は承知しない。「女の軽いのがいけなとおっしゃるけれども、男の重いんだって好い事はないでしょう」「重いた、どんな事だ」「重いと云うな重い事ですわ、あなたのようなのです」「俺がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やがて口を開いて「そう赤くなって互に弁難攻撃をするところが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだったに違

いない」とひやかすのだから賞めるのだから 曖 昧 な事を言ったが、それでやめておいても

ふえん            しも  
好い事をまた例の調子で 布 衍 して、 下 のごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかったんだって云うが、それなら 唾 を女

房にしていると同じ事で僕などは 一 向 ありがたくない。やっぱり奥さんのようにあなたは重いじゃありませんかとか何とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、たまには喧嘩の一つ二つしなくっちゃ退屈でしょうがないからな。僕の母などと来たら、おやじの前へ出てはいとへいで持ち切っていたものだ。そうして二十年もいっしょになっているうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじゃないか。もっ

かいみょう  
とも御蔭で先祖代々の 戒 名 はことごとく暗記している。男女間の交際だってそうさ、

僕の小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏をしたり、霊の交換をやって

もうろうたい

朦朧体で出合っ見てたりする事はとうてい出来なかった」「御気の毒様で」と寒月

君が頭を下げる。「実に御気の毒さ。しかもその時分の女が<sup>かなら</sup>必ずしも今の女より品行  
がいいと限らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何だのとやかましく云いますが

ね。なに昔はこれより<sup>はげ</sup>烈しかったんですよ」「そうでしょうか」と細君は真面目である。

でたらめ

「そうですとも、出鱈目じゃない、ちゃんと証拠があるから仕方ありませんや。苦沙

弥君、君も覚えているかも知れんが僕等の五六歳の時までは女の子を<sup>とうなす</sup>唐茄子のように

かご<sup>てんびんぼう</sup> へ入れて天秤棒で担いで売ってあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそんな事  
は覚えておらん」「君の国じゃどうだか知らないが、静岡じゃたしかにそうだった」「ま  
さか」と細君が小さい声を出すと、「本当ですか」と寒月君が本当らしからぬ様子で聞く。

「本当さ。現に僕のおやじが<sup>ね</sup> 働を付けた事がある。その時僕は何でも六つくらいだったろ

う。おやじと<sup>あぶらまち</sup> といっしょに<sup>とおりちょう</sup> 油町から通町へ散歩に出ると、向うから大きな

声をして女の子はよしかな、女の子はよしかなと怒鳴ってくる。僕等がちょうど二丁目の

角へ来ると、<sup>いせげん</sup> 伊勢源と云う呉服屋の前でその男に出っ食わした。伊勢源と云うのは間口

が十間で<sup>くら い とまえ</sup> 蔵が五つ戸前あって静岡第一の呉服屋だ。今度行ったら見て来給え。今でも

歴然と残っている。立派なうちだ。その番頭が甚兵衛と云ってね。いつでも<sup>おふくろ</sup> 御袋が三

日前に亡くなりましたと云うような顔をして帳場の所へ<sup>な</sup> 控えている。甚兵衛君の隣りに

は<sup>はつ</sup> 初さんという二十四五の若い<sup>しゅ</sup> 衆が坐っているが、この初さんがまた

うんしょうりっし<sup>きえ</sup> 雲照律師に帰依して三七二十一日の間蕎麦湯だけで通したと云うような青い

顔をしている。初さんの隣りが<sup>ちょう</sup> 長<sup>きのう</sup> どんでこれは昨日火事で焚き出されたかのごと



しゅうぜん そろばん もた なら  
く 愁 然 と 算 盤 に 身 を 凭 して いる。長 どん と 併 ん で ……」 「君 は 呉 服 屋 の  
話 を す る の か、人 売 り の 話 を す る の か」 「そ う そ う 人 売 り の 話 し を や っ て い た ん だ っ け。

きだん かつあい  
実 は こ の 伊 勢 源 に つ い て も す こ ぶ る 奇 譚 が あ る ん だ が、そ れ は 割 愛 し て 今 日 は 人  
売 り だ け に し て お こ う」 「人 売 り も つ い で に や め る が い い」 「ど う し て こ れ が 二 十 世 紀 の

こんにち だい  
今 日 と 明 治 初 年 頃 の 女 子 の 品 性 の 比 較 に つ い て 大 なる 参 考 に な る 材 料 だ か ら、そ ん

た や す  
な に 容 易 く や め ら れ る も の か——そ れ で 僕 が お や じ と 伊 勢 源 の 前 ま で く る と、例 の 人 売

しまいもの  
り が お や じ を 見 て 旦那 女 の 子 の 仕 舞 物 は ど う だ、安 く 負 け て お く か ら 買 っ て お く ん

てんびんぼう ふ  
な さ い と 云 い な が ら 天 秤 棒 を お ろ し て 汗 を 拭 い て いる の さ。見 る と 籠 の 中 に は 前

うし  
に 一 人 後 ろ に 一 人 両 方 と も 二 歳 ば か り の 女 の 子 が 入 れ て あ る。お や じ は こ の 男 に 向 っ て

あいにく  
安 け れ ば 買 っ て も い い が、も う こ れ ぎ り か い と 聞 く と、へ え 生 憎 今 日 は み ん な 売 り

つく  
尽 し て た っ た 二 つ に な っ ち ま い ま し た。ど っ ち で も 好 い か ら 取 っ と く ん な さ い な と 女 の

とうなす  
子 を 両 手 で 持 っ て 唐 茄 子 か 何 ぞ の よ う に お や じ の 鼻 の 先 へ 出 す と、お や じ は ぽ ん ぽ ん と

たた  
頭 を 叩 い て 見 て、は は あ か な り な 音 だ と 云 っ た。そ れ か ら い よ い よ 談 判 が 始 ま っ て

さんざねぎ  
散 々 価 切 っ た 末 お や じ が、買 っ て も 好 い が 品 は た し か だ ろ う な と 聞 く と、え え 前 の 奴 は

うし かつ  
始 終 見 て いる か ら 間 違 は あ り ま せ ん が ね 後 ろ に 担 い で る 方 は、何 し ろ 眼 が な い ん で す  
か ら、こ と に よ る と ひ び が 入 っ て る か も 知 れ ま せ ん。こ い つ の 方 な ら 受 け 合 え ない 代 り に

ねだん いま  
価 段 を 引 い て お き ま す と 云 っ た。僕 は こ の 問 答 を 未 だ に 記 憶 し て いる ん だ が そ の 時 小  
供 心 に 女 と 云 う も の は な る ほ ど 油 断 の な ら ない も の だ と 思 っ た よ。——し か し 明 治 三 十 八

こんにち うし  
年 の 今 日 こ ん な 馬 鹿 な 真 似 を し て 女 の 子 を 売 っ て あ る く も の も な し、眼 を 放 っ て 後

かつ けんのん  
ろ へ 担 い だ 方 は 陰 呑 だ な ど と 云 う 事 も 聞 か ない よ う だ。だ か ら、僕 の 考 で は や は り

たいせい

泰西文明の御蔭で女の品行もよほど進歩したものだろうと断定するのだが、どうだろ  
う寒月君」

おうよう せきばらい

寒月君は返事をする前にまず鷹揚な咳払を一つして見せたが、それからわざと落ちついた低い声で、こんな観察を述べられた。「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよいと買って頂戴な、あらおいや？ などと自分で自

やおや

分を売りにあるいていますから、そんな八百屋のお余りを雇って、女の子はよしか、なん

いたくはんばい

て下品な依託販売をやる必要はないですよ。人間に独立心が発達してくると自然こんな風になるものです。老人なんぞはいらぬ取越苦勞をして何とかかとか云いますが、

すうせい

おおい

實際を云うとこれが文明の趨勢ですから、私などは大に喜ばしい現象だと、ひ

たた

そかに慶賀の意を表しているのです。買う方だって頭を敲いて品物は確かかなんて聞く

やぼ

ような野暮は一人もないんですからその辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中

てすう

に、そんな手数をする日にゃあ、際限がありませんからね。五十になったって六十になったって亭主を持つ事も嫁に行く事も出来やしません」寒月君は二十世紀の青年だけあつ

おおい

かいちん

しきしま

て、大に当世流の考を開陳しておいて、敷島の煙をふうーと迷亭先生の顔

へきえき

の方へ吹き付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易する男ではない。「仰せの通り

ほうこん

方今の女生徒、令嬢などは自尊自信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男子に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学校の生徒などと来たらえらいものだけ。

つつそで は かなぼう

筒袖を穿いて鉄棒へぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から彼等の体操を目

ギリシャ

撃するたんびに古代希臘の婦人を追懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発しているから仕方がない。美学者と希臘とはどうてい離れられないやね。——ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。「またむずかしい名前が出て来ましたね」と寒月君は依然

アテン  
としてにやにやす。 「Agnodice はえらい女だよ、僕は実に感心したね。 当時 亜典の法律で女が産婆を営業する事を禁じてあった。 不便な事さ。 Agnodice だってその不便を感じて  
るだろうじゃないか」 「何だい、その——何とか云うのは」 「女さ、女の名前だよ。 この  
女がつらつら考えるには、 どうも女が産婆になれないのは情けない、 不便極まる。 どうか

こまぬ  
して産婆になりたいもんだ、 産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を 拱いて考え

あけがた  
込んだね。 ちょうど三日目の 暁方に、 隣の家で赤ん坊がおぎゃあと泣いた声を聞いて、

かつぜんたいご  
うんそうだと 豁然大悟して、 それから早速長い髪を切って男の着物をきて

おお  
Hierophilus の講義をききに行った。 首尾よく講義をきき 終せて、 もう大丈夫と云うと

はや  
ころでもって、 いよいよ産婆を開業した。 ところが、 奥さん流行りましたね。 あちらでも  
おぎゃあと生れるこちらでもおぎゃあと生れる。 それがみんな Agnodice の世話なんだか

もう さいおう ななころ やお たたら  
ら大変 儲かった。 ところが人間万事 塞翁の馬、 七転び八起き、 弱り目に祟

おかみ ごはつと  
り目で、 ついこの秘密が露見に及んでついに 御上の御法度を破ったと云うところで、

しおき  
重き御仕置に仰せつけられそうになりました」 「まるで講釈見たようです事」 「なかなか

うま アテン  
か 旨いでしょう。 ところが 亜典の女連が一同連署して嘆願に及んだから、 時の御奉行

くく  
もそう木で鼻を 括ったような挨拶も出来ず、 ついに当人は無罪放免、 これからはたとい

おふれ  
女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う御布令さえ出でめでたく落着を告げました」 「よく  
いろいろな事を知っていらっしゃるのね、 感心ねえ」 「ええ大概の事は知っていますよ。  
知らないのは自分の馬鹿な事くらいなものです。 しかしそれも薄々は知ってます」 「ホホ

そうごう こうしど  
ホホ面白い事ばかり……」 と細君 相形を崩して笑っていると、 格子戸のベルが相  
変らず着けた時と同じような音を出して鳴る。 「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引

はい  
き下がる。 細君と入れ違いに座敷へ這入って来たものは誰かと思ったらご存じの

おちとうふう  
越智東風君であった。

うち でいり つく  
ここへ東風君さえくれば、主人の家へ出入する変人はことごとく網羅し尽した  
ぶりょう あたまかず  
とまで行かずとも、少なくとも吾輩の無聊を慰むるに足るほどの頭数は

おそろい もったい  
御揃になつたと云わねばならぬ。これで不足を云っては勿体ない。運悪くほ  
かの家へ飼われたが最後、生涯人間中にかかる先生方が一人でもあろうとさえ気が付かず

さいわい びょうじ  
に死んでしまうかも知れない。幸にして苦沙弥先生門下の猫兎となって

ちょうせきこひ はん ないし  
朝夕虎皮の前に侍べるので先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風などと云う広  
い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連の挙止動作を寝ながら拝見するのは吾輩に  
とって千載一遇の光栄である。御蔭様でこの暑いのに毛袋でつまれていると云う難儀も  
忘れて、面白く半日を消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせこれだけ集まれ

ただごと ふすま つつし  
ば只事ではすまない。何か持ち上がるだろうと襖の陰から謹んで拝見する。  
「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御辞儀をする東風君の顔を見ると、先日の

どんちょうやくしゃ  
ごとくやはり奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者のようにも

こくら はかま しかつめ は  
見えるが、白い小倉の袴のゴワゴワするのを御苦労にも鹿爪らしく穿いてい

さかきばらけんきち  
るところは榊原健吉の内弟子としか思えない。従って東風君の身体で普通の  
人間らしいところは肩から腰までの間だけである。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さ

うち  
あずっと、こっちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の家らしい挨拶をする。「先生には

だいぶ  
大分久しく御目にかかりません」「そうさ、たしかこの春の朗読会ぎりだったね。朗読

おさかん ごおみや うま  
会と云えば近頃はやはり御盛かね。その後御宮にやありませんか。あれは旨か

おおい  
ったよ。僕は大きに拍手したぜ、君気が付いてたかい」「ええ御蔭で大きに勇気が出ま

こ  
して、とうとうしまいまで漕ぎつけました」「今度はいつ御催しがありますか」と主人が

口を出す。「七八 両 月 は休んで九月には何か 賑 やかにやりたいと思っております。何か面白い趣向はございますまいか」「さよう」と主人が気のない返事をする。「東風君僕の創作を一つやらないか」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら面白いものだろうが、一体何かね」「脚本さ」と寒月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちょっと毒気をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進めると、寒月先生なお澄し返って「なに喜劇でも悲劇で

はないさ。近頃は旧劇とか新劇とか 大 部 やかましいから、僕も一つ新機軸を出してはいげき 俳 劇 と云うのを作って見たのさ」「俳劇たどんなものだい」「俳句趣味の劇と云うの

を詰めて俳劇の二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少 煙 に捲かれて 控 えている。「それでその趣向と云うのは？」と聞き出したのはやはり東風君である。「根が俳句趣味からくるのだから、あまり長たらしくって、毒悪なのはよくないと思って一幕物にしてお

いた」「なるほど」「まず道具立てから話すが、これも 極 簡単なのがいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の方へヌツと出さ せて、その枝へ 烏 を一羽とまらせる」「烏がじっとしていればいいが」と主人が 独

り 言 のように心配した。「何わけは有りません、烏の足を糸で枝へ 縛 り付けておくん

ぎょうずいだらい ずです。でその下へ 行 水 盥 を出しましてね。美人が横向きになって手拭を使っているんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ます。美術学校のモデルを雇ってくるんです」「そりゃ警視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心配している。「だって興行さえしなければ構わんじゃありませんか。そんな事をとやかく云った日にゃ学校で裸体画の写生なんぞ出来っこありません」「しかしあれは稽古のためだから、ただ見ているのとは少し違うよ」「先生方がそんな事を云った日には日本もまだ駄目です。絵画だって、演劇だって、おんなじ

きえん 芸術です」と寒月君大いに 気 焰 を吹く。「まあ議論はいいが、それからどうするのだい」

りょうけん と東風君、ことによると、やる 了 見 と見えて筋を聞きたがる。「ところへ花道から

たかはまきよし とうしん かぶ すきや 俳人 高 浜 虚 子 がステッキを持って、白い 灯 心 入りの帽子を 被 って、透 綾

さつまがすり しりっぱしよ  
の羽織に、薩摩飛白の尻端折りの半靴と云うこしらえで出てくる。着付けは

ごようたし ゆうゆう  
陸軍の御用達見たようだけれども俳人だからなるべく悠々として腹の中では句

てい  
案に余念のない体であるかなくっちゃいけない。それで虚子が花道を行き切っていよいよ本舞台に懸った時、ふと句案の眼をあげて前面を見ると、大きな柳があって、柳の影で白い女が湯を浴びている、はっと思って上を見ると長い柳の枝に鳥が一羽とまって女が行

おおい  
水を見下ろしている。そこで虚子先生大に俳味に感動したと云う思い入れが五十秒ば

ひょうしぎ  
かりあって、行水の女に惚れる鳥かなと大きな声で一句朗吟するのを合図に、拍子木

おみや  
を入れて幕を引く。——どうだろう、こう云う趣向は。御気に入りませんか。君御宮になるより虚子になる方がよほどいいぜ」東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あんまり、あっけないようだ。もう少し人情を加味した事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今まで比較のおとなしくしていた迷亭はそういつまでもだまっているような男ではない。「た

うえだびん  
ったそれだけで俳劇はすさまじいね。上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云うも

いん  
のは消極的で亡国の音だそうだが、敏君だけあってうまい事を云ったよ。そんなつまらない物をやって見給え。それこそ上田君から笑われるばかりだ。第一劇だか茶番だか何だ

たま  
かあまり消極的で分らないじゃないか。失礼だが寒月君はやはり実験室で珠を磨いてる

いん  
方がいい。俳劇なんぞ百作って二百作って、亡国の音じゃ駄目だ」寒月君は少々

むっ  
憤として、「そんなに消極的でしょうか。私はなかなか積極的なつもりなんです」どっちでも構わん事を弁解しかける。「虚子がですね。虚子先生が女に惚れる鳥かなと鳥を

とら おおい  
捕えて女に惚れさせたところが大に積極的だろうと思います」「こりゃ新説だね。是非御講釈を伺いましょう」「理学士として考えて見ると鳥が女に惚れるなどと云うの

むぞうさ  
は不合理でしょう」「ごもっとも」「その不合理な事を無雑作に言い放って少しも無理に聞えません」「そうかしら」と主人が疑った調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります。実を云うと

惚れるとか惚れないとか云うのは俳人その人に存する感情で鳥とは没交渉の沙汰であります。しかるところあの鳥は惚れてるなど感じるのは、つまり鳥がどうのこうのと云う訳じ

ひっきょう ぎょうずい  
やない、必 竟 自分が惚れているんでさあ。虚子自身が美しい女の 行 水 して  
いるところを見てはっと思う途端にずっと惚れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた  
眼で鳥が枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見たものだから、ははあ、あいつ

かんちが  
も俺と同じく参ってるなど 癩 違 いをしたのです。癩違いには相違ないですがそこが文  
学的でかつ積極的のところなんです。自分だけ感じた事を、断りもなく鳥の上に拡張して  
知らん顔をしてすましているところなんぞは、よほど積極主義じゃありませんか。どうで  
す先生」「なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違いない。説明だけは積極だが、  
実際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどう  
も消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃  
は傑作もありませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云って御目にかけるほどの

こうほん  
ものも出来ませんが、近日詩集を出して見ようと思ひまして—— 稿 本 を幸い持って参

ふくさづつみ  
りましたから御批評を願ひましょう」と懐から紫の 袱 紗 包 を出して、その中から五  
六十枚ほどの原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人はもっともらしい顔をし  
て拝見と云って見ると第一頁に  
世の人に似ずあえかに見え給う

富子嬢に捧ぐ

なが  
と二行にかいてある。主人はちょっと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま 眺 め

のぞ  
ているので、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら 覗 き込んで「やあ、捧

ほ  
げたね。東風君、思い切つて富子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞める。主人はなお  
不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人なのですか」と聞  
く。「へえ、この前迷亭先生とごいっしょに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの  
御近所に住んでおります。実はただ今詩集を見せようと思つてちょっと寄つて参りました

あいにく  
が、生 憎 先月から大磯へ避暑に行つて留守でした」と真面目くさつて述べる。「苦沙  
弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしないで、早く傑作でも朗読するさ。しかし

東風君この捧げ方は少しまづかったね。このあえかにと云う <sup>がげん</sup> 雅言は全体何と言う意味だ

と思ってるかね」 <sup>かよわ</sup> 「蚊弱いとかたよわくと云う字だと思ひます」「なるほどそれも取れん事はないが本来の字義を云うと危う気にと云う事だぜ。だから僕ならこうは書かないね」「どう書いたらもっと詩的になりましょう」「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え給う富子嬢の鼻の下に捧ぐとするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとな

い <sup>げ</sup> のとでは大変感じに相違があるよ」「なるほど」と東風君は解しかねたところを無理になつとく <sup>てい</sup> 納得した体にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていよいよ巻頭第一章を読み出す。

う <sup>くん</sup> <sup>こうり</sup>  
倦んじて 薫 ずる 香 裏に君の  
霊か相思の煙のたなびき

<sup>から</sup>  
おお我、ああ我、辛 きこの世に  
あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならんのはごもつともで、十年前の詩界と <sup>こんにち</sup> 今日 の詩界とは見違えるほど発達しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではどうてい分りようがないので、作った本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。註釈や

<sup>くんぎ</sup> <sup>とん</sup>  
訓 義 は学究のやる事で私共の方では 頓 と構いません。せんだつても私の友人で

そうせき <sup>もうろう</sup>  
送 籍 と云う男が一夜という短篇をかきましたが、誰が読んでも 朦 朧 として取り

と <sup>とく</sup> <sup>ただ</sup>  
留めがつかないので、当人に逢つて 篤 と主意のあるところを 糺 して見たのですが、当人もそんな事は知らないよと云つて取り合わないのです。全くその辺が詩人の特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な男ですね」と主人が云うと、迷亭が「馬鹿だよ」

<sup>たんかん</sup>  
と 単 簡 に送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけではまだ弁じ足りない。「送籍は吾々



とりの  
仲間のうちでも 取 除 けですが、私の詩もどうか心持ちその気で読んでいただきたいので。

ことに御注意を願いたいのはからきこの世と、あまき口づけと 対 をついをとったところが私の

苦心です」 「よほど苦心をなすった 痕 迹 が見えます」 「あまいとからいと反照すると

じゅうしちみちょうとうがらしちょう  
ころなんか 十 七 味 調 唐 辛 子 調 で面白い。全く東風君独特の伎倆で  
敬々服々の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでいる。

主人は何と思ったか、ふいと立って書斎の方へ行ったがやがて一枚の半紙を持って出てくる。「東風君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」

てんねんこじ ぼひめい  
といささか本気の沙汰である。「天 然 居 士 の 墓 碑 銘 ならもう二三遍拝聴したよ」  
「まあ、だまっていなさい。東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

やまとだましい せき  
「大 和 魂 ！ と叫んで日本人が肺病やみのような 咳 をした」

とっこつ  
「起し得て 突 兀 ですね」と寒月君がほめる。

すり  
「大和魂！ と新聞屋が云う。大和魂！ と掏摸が云う。大和魂が一躍して海を渡った。

ドイツ  
英国で大和魂の演説をする。独 逸 で大和魂の芝居をする」

てんねんこじ  
「なるほどこりゃ天 然 居 士 以上の作だ」と今度は迷亭先生がそり返って見せる。

も さかなや さぎし  
「東郷大将が大和魂を有っている。肴 屋 の銀さんも大和魂を有っている。詐偽師、

やまし  
山 師、人殺しも大和魂を有っている」

「先生そこへ寒月も有っているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五六間行ってからエヘンと云う声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示すごとく魂である。

魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいぶ面白うございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云ったのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇った者が  
ない。大和魂はそれ <sup>てんぐ たぐい</sup> 天 狗 の 類 か」

<sup>いっけつようぜん</sup>  
主人は 一 結 杳 然 と云うつもりで読み終ったが、さすがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事と思って待っている。いくら待っていても、うんとも、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それ

<sup>かる</sup>  
ぎりですか」と聞くと主人は 軽 く「うん」と答えた。うんは少し気楽過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつものようにあまり駄弁を振わなかったが、やがて向き直って、「君も短篇を集めて一卷として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と

聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は <sup>まっぴら</sup> 「真 平 だ」と答え

<sup>さつき</sup> <sup>はさみ</sup>  
たぎり、先 刻 細君に見せびらかした 鋏 をちょきちょき云わして爪をとっている。寒月君は東風君に向って「君はあの金田の令嬢を知ってるのかい」と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意になってそれからは始終交際をしている。僕はあの令嬢の前へ出

ると、何となく一種の感に打たれて、当分のうちは詩を作っても歌を詠んでも愉快に興が

<sup>ほうゆう</sup>  
乗って出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の 朋 友 からインスピレーションを受けるからだろうと思う。それで僕はあの令嬢に対しては切実に感謝の意

を表しなければならんからこの機を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。 <sup>むか</sup> 昔 時から婦人に親友のないもので立派な詩をかいたものはないそうだ」「そうかなあ」と寒月君は顔の奥で笑いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談

<sup>だいぶ</sup>  
話の火の手は大 分 下火になった。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねばならぬ義務

もないから、失敬して庭へ <sup>かまきり</sup> <sup>あおぎり</sup> <sup>つづ</sup> 蟻 螂 を探しに出た。 梧 桐 の緑を 綴 る間から西に傾

<sup>まだ も</sup> <sup>ぼうし</sup>  
く日が 斑 らに洩れて、幹にはつくつく 法 師 が懸命にないている。晩はことによると一

雨かかるかも知れない。

## 七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る  
てあい 手合にちょっと申し聞けるが、そう云う人間だってつい近年までは運動の何者たるを解  
せず、食って寝るのを天職のように心得ていたではないか。無事是貴人とか称え  
ふところで ざぶとん  
て、懐手をして座布団から腐れかかった尻を離さざるをもって旦那の名誉と  
やにさが  
脂下って暮したのは覚えているはずだ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、  
海の中へ飛び込めの、夏になったら山の中へ籠って当分霞を食えのとくだらぬ注文を  
連発するようになったのは、西洋から神国へ伝染した ばんきん 鞭近の病気で、やはりペスト、  
肺病、神経衰弱の一族と心得ていいくらいだ。もっとも吾輩は去年生れたばかりで、当年  
とって一歳だから人間がこんな病気に罹り出した当時の有様は記憶に存しておらん、の  
みならずその 砌りは浮世の 風 中 にふわついておらなかったに相違ないが、猫の一年  
は人間の十年に懸け合うと云ってもよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短いに  
かかわ 係らず、その短日月の間に猫一疋の発達は十分 つかまつ 仕るところをもって推論する  
と、人間の年月と猫の せいそう 星霜を同じ割合に打算するのははなはだしき 誤謬 である。  
第一、一歳何ヵ月に足らぬ吾輩がこのくらいの見識を有しているのでも分るだろう。主人  
の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云うと、いやはや鈍いものだ。  
泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時  
いきどお くら  
を 憤る吾輩などに 較べると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海  
水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって 毫も驚くに足りない。これし

のろま きま  
きの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない野呂間に 極 っ  
ようよう  
ている。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至って 漸々 運動の機能を  
ふいちよう ちょうちょう  
吹 聴 したり、海水浴の利益を 喋 々 して大発明のように考えるのである。  
吾輩などは生れない前からそのくらいな事はちゃんと心得ている。第一海水がなぜ薬にな  
びき  
るかと言えばちょっと海岸へ行けばすぐ分る事じゃないか。あんな広い所に魚が何 疋 お  
ため  
るか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして医者にかかった 試 しが無い。みんな健全に  
き  
泳いでいる。病氣をすれば、からだは利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往  
こうきよ とな じゃくめつ  
生をあがると云って、鳥の 薨 去 を、落ちると 唱 え、人間の 寂 滅 をごねると  
号している。洋行をして印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事がありますか  
と聞いて見るがいい、誰でもいいえと答えるに極っている。それはそう答える訳だ。いく  
いき いき  
ら往復したって一匹も波の上に今呼吸を引き取った——呼吸ではいかん、魚の事だから  
しお  
潮 を引き取ったと云わなければならん——潮を引き取って浮いているのを見た者はない  
びょうびょう まんまん たいかい  
からだ。あの 渺々 たる、あの 漫々 たる、大 海 を日となく夜となく続  
た さ こんらい  
けざまに石炭を焚いて探がしてあるいても古往 今 来 一匹も魚が上がっておらんとこ  
ろをもって推論すれば、魚はよほど丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出来  
のち  
る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云えばこれまた人間を待ってしかる 後 知  
わけ しおみず  
らざるなりで、訳 はない。すぐ分る。全く 潮 水 を呑んで始終海水浴をやっているか  
けんちよ  
らだ。海水浴の機能はしかく魚に取って 顕 著 である。魚に取って顕著である以上は人  
間にとっても顕著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブ  
そくせき おおげさ  
ライトンの海水に飛込めば四百四病 即 席 全快と大 袈 裟 な広告を出したのは遅い遅  
いと笑ってもよろしい。猫といえども相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛

ただ ぐいっしんまえ  
けるつもりでいる。但し今はいけない。物には時機がある。御維新前の日本人

こんにち  
が海水浴の機能を味わう事が出来ずに死んだごとく、今日の猫はいまだ裸体で海の中

そうぐう しそ  
へ飛び込むべき機会に遭遇しておらん。せいては事を仕損ずる、今日のように

つきじ むやみ  
築地へ打っちゃられに行った猫が無事に帰宅せん間は無暗に飛び込む訳には行かん。

きょうらんどとう  
進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ずるに至る  
までは——換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がったと云う語が一般に使用せらる  
るまでは——容易に海水浴は出来ん。

き  
海水浴は追って実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極めた。どうも

こんにち  
二十世紀の今日運動せんのはいかにも貧民のようで人聞きがわるい。運動をせんと、  
運動せんのではない。運動が出来ないのである、運動をする時間がないのである、余裕がな

おりすけ  
いのだと鑑定される。昔は運動したものが折助と笑われたごとく、今では運動をせぬ

みな  
者が下等と見做されている。吾人の評価は時と場合に応じ吾輩の眼玉のごとく変化する。

ひんしつ  
吾輩の眼玉はただ小さくなったり大きくなったりするばかりだが、人間の品騭とくる

まっさ さつか  
と真逆かさまにひっくり返る。ひっくり返っても差し支えはない。物には両面がある、

りょうたん たた こくびやく  
両端がある。両端を叩いて黒白の変化を同一物の上に起こすところが人

さ  
間の融通のきくところである。方寸を逆かさまにして見ると寸方となるところに

あいきょう あま はしだて またぐら のぞ  
愛嬌がある。天の橋立を股倉から覗いて見るとまた格別な

おもむき たま  
趣が出る。セクスピヤも千古万古セクスピヤではつまらない。偶には股倉からハ

ムレットを見て、君こりゃ駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。  
だから運動をわるく云った連中が急に運動がしたくなって、女までがラケットを持って往

来をあるき廻ったって 一 向 不思議はない。ただ猫が運動するのを利いた風などと笑

いさえしなければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を 抱 く者がある  
かも知れんから一応説明しようと思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ん。

だからボールもバットも取り扱い方に困窮する。次には金がないから買う 訳 に行かない。

この二つの源因からして吾輩の選んだ運動は 一 文 いらす器械なしと名づくべき種類

に属する者と思う。そんなら、のそのそ歩くか、あるいは 鮪 の切身を 啣 えて馳け出

す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力学的に運動させて、地球の引力に 順 っ

て、大地を横行するのは、あまり 単 簡 で興味がない。いくら運動と名がついても、主

人の時々実行するような、読んで字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚がす者だろうと

思う。 勿 論 ただの運動でもある刺激の 下 にはやらんとは限らん。

かつぶしきょうそう しゃけさが かんじん  
鯉 節 競争、鮭 探 しなどは結構だがこれは 肝 心 の対象物があって

の上の事で、この刺激を取り去ると 索 然 として没趣味なものになってしまう。懸賞的  
興奮剤がないとすれば何か芸のある運動がして見たい。吾輩はいろいろ考えた。台所の

ひさし やね てっぺん ばいかがた かわら  
廂 から家根に飛び上がる方、家根の 天 辺 にある 梅 花 形 の 瓦 の上に四

本足で立つ術、物 干 竿 を渡る事——これはとうてい成功しない、竹がつるつる滑べ

って爪が立たない。 後 ろから不意に小供に飛びつく事、——これはすこぶる興味のある

ひとつ めった たかだか  
運動の 一 だが滅 多 にやるとひどい目に逢うから、 高 々 月に三度くらいしか試

みない。 紙 袋 を頭へかぶせらるる事——これは苦しいばかりではなはだ興味の

とぼ 乏 しい方法である。ことに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次には書物の表

紙を爪で引き搔く事、——これは主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる

者である。新式のうちにはなかなか興味の深いのある。第一に 蠶 螂 狩り。——蠶 螂 狩り。——  
とうろうが

ねずみが なかば  
狩りは 鼠 狩りほどの大運動でない代りにそれほどの危険がない。夏の 半 から秋の始めへかけてやる遊戯としてはもっとも上乘のものだ。その方法を云うとまず庭へ出て、

かまきり ぞうさ  
一匹の 蠶 螂 をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは 雑 作 もない。

そば か  
さて見付け出した蠶螂君の 傍 へはっと風を切って馳けて行く。するとすわこそと云う

みがまえ けなげ  
身 構 をして鎌首をふり上げる。蠶螂でもなかなか 健 気 なもので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつもりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちょっと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲る。この時の蠶螂君の表情がすこぶる興味を添

える。おやと云う思い入れが充分ある。ところを 一 足 飛びに 君 の 後 ろへ廻って

かる か たた  
今度は背面から君の羽根を 軽 く引き搔く。あの羽根は平生大事に 畳 んであるが、引き

はげ  
搔き方が 烈 しいと、ぱっと乱れて中から吉野紙のような薄色の下着があらわれる。君は

おつ き  
夏でも御苦労千万に二枚重ねで 乙 に極まっている。この時君の長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向ってくるが、大概の場合には首だけぬっと立てて立っている。こっちから手出しをするのを待ち構えて見える。先方がいつまでもこの態度でいては運動にならんから、あまり長くなるとまたちょいと一本参る。これだけ参ると眼識のある蠶螂なら必ず

がむしやら  
逃げ出す。それを我 無 洒 落 に向ってくるのはよほど無教育な野蛮的蠶螂である。もし相

ねら  
手がこの野蛮な振舞をやると、向って来たところを 覘 いすまして、いやと云うほど張り付けてやる。大概是二三尺飛ばされる者である。しかし敵がおとなしく背面に前進すると、

かまきりくん  
こっちは気の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻ってくる。蠶 螂 君 はまだ五六寸しか逃げ延びておらん。もう吾輩の力量を知ったから手向いをする勇氣はない。ただ

まど  
右往左往へ逃げ 惑 うのみである。しかし吾輩も右往左往へ追っかけるから、君はしまい

ふる  
には苦しがつて羽根を 振 って一大活躍を試みる事がある。元来蠓螂の羽根は彼の首と調和して、すこぶる細長く出来上がったものだが、聞いて見ると全く装飾用だそうで、人間

ドイツご 　　ごう  
の英語、仏語、独 逸 語のごとく 毫 も実用にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり機能のありよう訳がない。名前は活躍だが事実は地面の上を引きずってあるくと云うに過ぎん。こうなると少々気の毒な感はあるが運

ごめんこうむ 　　か  
動のためだから仕方がない。御 免 蒙 ってたちまち前面へ馳け抜ける。君は惰性で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進してくる。その鼻をなぐりつける。この時蠓

たお 　　おさ  
螂君は必ず羽根を広げたまま 仆 れる。その上をうんと前足で 抑 えて少しく休息する。

しちきんしちしょうこうめい  
それからまた放す。放しておいてまた抑える。七 擒 七 縦 孔 明 の軍略で攻めつける。約三十分この順序を繰り返して、身動きも出来なくなったところを見すまして

くわ  
ちょっと口へ 啣 えて振って見る。それからまた吐き出す。今度は地面の上へ寝たぎり動かないから、こっちの手で突っ付いて、その勢で飛び上がるのをまた抑えつける。これもいやになってから、最後の手段としてむしゃむしゃ食ってしまう。ついでだから蠓螂

うま  
を食った事のない人に話しておくが、蠓螂はあまり 旨 い物ではない。そうして滋養分も

とうろうが 　　せみと  
存外少ないようである。蠓 螂 狩りに次いで 蝉 取りと云う運動をやる。単に蝉と云

あぶらやろう  
ったところが同じ物ばかりではない。人間にも 油 野 郎 、みんな野郎、おしいつくつく野郎があるごとく、蝉にも油蝉、みんな、おしいつくつくがある。油蝉はしつこく

い 　　おうふう  
て行かん。みんなは 横 風 で困る。ただ取って面白いのはおしいつくつくである。こ

やくちほころ 　　あきかぜ  
れは夏の末にならないと出て来ない。八つ 口 の 縦 びから 秋 風 が断わりなしに

はだ な 　　かぜ 　　さかん 　　ふ 　　よ  
膚 を撫でてはっくしょ風邪を引いたと云う頃 熾 に尾を掉り立ててなく。善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天職がないと思われるくらいだ。秋の初はこいつを取る。これを称して蝉取り運動と云う。ちょっと諸君に話しておくがい



ころ  
やしくも蟬と名のつく以上は、地面の上に 転 がってはおらん。地面の上に落ちているも

あり  
のには必ず 蟻 がついている。吾輩の取るのはこの蟻の領分に寝転んでいる奴ではない。

とら  
高い木の枝にとまって、おしいつくつくと鳴いている連中を 捕 えるのである。これもついでだから博学なる人間に聞きたいがあればおしいつくつくと鳴くのか、つくつくおしいと鳴くのか、その解釈次第によっては蟬の研究上少なからざる関係があると思う。人間の

まさ みずか  
猫に 優 るところはこんなところに存するので、人間の 自 ら誇る点もまたかような点にあるのだから、今即答が出来ないならよく考えておいたらよかろう。もっとも蟬取り運

さ つか のぼ  
動上はどっちにしても差し 支 えはない。ただ声をするべに木を 上 って行って、先方が夢中になって鳴いているところをうんと捕えるばかりだ。これはもっとも簡略な運動に見えてなかなか骨の折れる運動である。吾輩は四本の足を有しているから大地を行く事においてはあえて他の動物には劣るとは思わない。少なくとも二本と四本の数学的智識から判

だいぶ  
断して見て人間には負けないつもりである。しかし木登りに至っては 大 分 吾輩より巧者

ばっそん あなど  
な奴がいる。本職の猿は別物として、猿の 末 孫 たる人間にもなかなか 侮 るべか

てあい  
らざる 手 合 がある。元来が引力に逆らっての無理な事業だから出来なくても別段の

ちじょく  
恥 辱 とは思わんけれども、蟬取り運動上には少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があるので、どうかこうか登りはするものの、はたで見るほど楽ではござらん。の

かまきりくん  
みならず蟬は飛ぶものである。 蟻 螂 君 と違って一たび飛んでしまったが最後、せつ

えら  
かくの木登りも、木登らずと何の 扱 むところなしと云う悲運に際会する事がないとも限

ねら  
らん。最後に時々蟬から小便をかけられる危険がある。あの小便がややともすると眼を 覗 けてしよぐってくるようだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ばかりは垂れんよう

まぎわ いば つかまつ  
に致したい。飛ぶ 間 際に 溺 りを 仕 るのは一体どう云う心理的狀態の生理的器械に及ぼす影響だろう。やはりせつなさのあまりかしらん。あるいは敵の不意に出でて、

ちょっと逃げ出す余裕を作るための方便か知らん。そうすると鳥賊の墨を吐き、バランメ

ほりもの ラテンゴ たぐい こうもく  
一の刺物を見せ、主人が羅匈語を弄する類と同じ綱目に入るべき事項

ゆる  
となる。これも蟬学上 忽かせにすべからざる問題である。充分研究すればこれだけでた  
しかに博士論文の価値はある。それは余事だから、そのくらいにしてまた本題に帰る。蟬

ちんぷ  
のもっとも集注するのは——集注がおかしければ集合だが、集合は陳腐だからやはり集

注にする。——蟬のもっとも集注するのは 青桐 である。漢名を 梧桐 と号するそう

うちわ おおき  
だ。ところがこの青桐は葉が非常に多い、しかもその葉は皆 団扇 くらいな 大 さであ

お  
るから、彼等が生い重なると枝がまるで見えないうらい茂っている。これがはなはだ蟬取

ぞくよう  
り運動の妨害になる。声はすれども姿は見えずと云う 俗 謡 はとくに吾輩のために作っ  
た者ではなかろうかと怪しまれるくらいである。吾輩は仕方がないからただ声を知るべに

ふたまた  
行く。下から一間ばかりのところでは梧桐は注文通り 二 又 になっているから、ここで

ひとやすみ

一 休 息 して葉裏から蟬の所在地を探偵する。もっともここまで来るうちに、がさがさ  
と音を立てて、飛び出す気早な連中がいる。一羽飛ぶともういけない。真似をする点にお

ようようふたまた  
いて蟬は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとから続々飛び出す。 漸 々 二 又 に

せき へんせい  
到着する時分には満樹 寂 として 片 声 をとどめざる事がある。かつてここまで登って

せみけ  
来て、どこをどう見廻わしても、耳をどう振っても 蟬 気 がないので、出直すのも面倒だ

また ま  
からしばらく休息しようと、又 の上に陣取って第二の機会を待ち合せていたら、いつの間

こくてんきょうり さ  
にか眠くなって、つい 黒 甜 郷 裡 に遊んだ。おやと思って眼が醒めたら、二又の

こくてんきょうり  
黒 甜 郷 裡 から庭の敷石の上へどたりと落ちていた。しかし大概は登る度に一つ

は取って来る。ただ興味の薄い事には樹の上で口に <sup>くわ</sup> 啣えてしまわなくてはならん。だから

ら下へ持って来て吐き出す時は <sup>おおかた</sup> 大方 <sup>か</sup> 死んでいる。いくらじゃらしても引っ搔いても確

然たる手筈がない。蟬取りの妙味はじっと忍んで行っておいしい <sup>くん</sup> 君 <sup>しっぽ</sup> が一生懸命に尻尾を

延ばしたり <sup>ちぢ</sup> 縮ましたりしているところを、わっと前足で <sup>おさ</sup> 抑える時にある。この時つく

つく <sup>くん</sup> 君は悲鳴を揚げて、薄い透明な羽根を縦横無尽に振う。その早い事、美事なる事は

言語道断、実に蟬世界の一偉観である。余はつくつく君を抑える <sup>たび</sup> 度にいつでも、つくつ

く君に請求してこの美術的演芸を見せてもらう。それがいやになるとご免を <sup>こうむ</sup> 蒙って口

の内へ <sup>ほおば</sup> 頬張ってしまう。蟬によると口の内へ <sup>はい</sup> 這入ってまで演芸をつづけているのがある。

蟬取りの次にやる運動は <sup>まつすべ</sup> 松滑りである。これは長くかく必要もないから、ちょっと述べ  
ておく。松滑りと云うと松を滑るように思うかも知れんが、そうではないやはり木登り  
の一種である。ただ蟬取りは蟬を取るために登り、松滑りは、登る事を目的として登る。

これが両者の差である。元来松は <sup>ときわ</sup> 常磐 <sup>さいみょうじ</sup> にて <sup>ごちそう</sup> 最明寺の御馳走をしてから以来

<sup>こんにち</sup> 今日に至るまで、いやにごつごつしている。従って松の幹ほど滑らないものはない。

手懸りのいいものはない。足懸りのいいものはない。——換言すれば <sup>つまがか</sup> 爪懸りのいいも

の <sup>いっきかせい</sup> はない。その爪懸りのいい幹へ <sup>か</sup> 一 <sup>あが</sup> 気呵成に馳け上る。馳け上っておいて馳け下  
がる。馳け下がるには二法ある。一はさかさになって頭を地面へ向けて下りてくる。一は

<sup>のぼ</sup> 上ったままの姿勢をくずさずに尾を下にして降りる。人間に問うがどっちがむずかしい

か知ってるか。人間のあさはかな <sup>りょうけん</sup> 了見 <sup>したむき</sup> では、どうせ降りるのだから <sup>下</sup> 向に馳

け下りの方が楽だと思うだろう。それが間違ってる。君等は義経が <sup>ひよどり</sup> 鶺鴒 <sup>ごえ</sup> 越 <sup>お</sup> を落と

したことを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下た向きで

たくさんだと思ふのだろう。そう 軽 蔑 するものではない。猫の爪はどっちへ向いて生

えていると思う。みんな 後 ろへ折れている。それだから 驚 口 のように物をかけて引  
き寄せる事は出来るが、逆に押し出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登ったとす  
ると吾輩は元来地上の者であるから、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の

いただき とど  
巔 に 留 まるを許さんに相違ない、ただおけば必ず落ちる。しかし手放しで落ちて  
は、あまり早過ぎる。だから何等かの手段をもってこの自然の傾向を幾分かゆるめなけれ

ばならん。これ 即 ち降りるのである。落ちると降りるのは大変な違のようだが、そ  
の実思ったほどの事ではない。落ちるのを遅くすると降りるので、降りるのを早くすると  
落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちる

のはいやだから、落ちるのを 緩 めて降りなければならない。即 ちあるものをもって

落ちる速度に抵抗しなければならん。吾輩の爪は 前 申す通り皆 後 ろ向きであるから、

もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は 悉 く、落ちる勢に 逆 って利用出

来る訳である。従って落ちるが変じて降りるになる。実に 見 易 き道理である。しかるに

また身を 逆 にして義経流に松の木 越 をやって見給え。爪はあっても役には立たん。ず  
るずる滑って、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来なくなる。ここにおいてかせつ

かく降りようと 企 てた者が変化して落ちる事になる。この通り 鴨 越 はむず  
かしい。猫のうちでこの芸が出来る者は恐らく吾輩のみであろう。それだから吾輩はこの

運動を称して松滑りと云うのである。最後に 垣 巡 りについて 一 言 する。主人の

庭は竹垣をもって四角にしきられている。椽 側 と平行している 一 片 は八九間も  
あろう。左右は双方共四間に過ぎん。今吾輩の云った垣巡りと云う運動はこの垣の上を落

ちないように一周するのである。これはやり 損 う事もまあるが、首尾よく行くとお

なぐさみ 慰 になる。ことに所々に根を焼いた丸太が立っているから、ちょっと休息に 便 宜 <sup>べんぎ</sup>

がある。今日は出来がよかったので朝から昼までに三 返 <sup>べん</sup> やって見たが、やるたびにうまくなる。うまくなる <sup>たび</sup> 度 に面白くなる。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分ほど <sup>まわ</sup> 巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向うに列を正してとまった。

これは推参な奴だ。人の運動の <sup>さまたげ</sup> 妨 をする、ことにどこの鳥だか <sup>せき</sup> 籍 もない <sup>ぶんざい</sup> 分 在

で、人の堀へとまるという法があるもんかと思ったから、通るんだおい除きたまえと声

かけた。真先の鳥はこっちを見てにやにや笑っている。次のは主人の庭を <sup>なが</sup> 眺 めている。

三羽目は <sup>くちばし</sup> 嘴 <sup>ふ</sup> を垣根の竹で拭いている。何か食って来たに違ない。吾輩は返答を待つ

ために、彼等に三分間の <sup>ゆうよ</sup> 猶 予 を与えて、垣の上に立っていた。鳥は通称を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待ってても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やっとならぬ威光に恐れて逃げるなどと思ったら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！ 地面の上ならその分に捨ておくのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。とってまた立留

の まって三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一そう待っていては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従って気に入ればいつま

でも <sup>とうりゅう</sup> 逗留 するだろう。こっちはこれで四返目だたださえ大 分 <sup>だいぶつか</sup> 労 れている。いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちんとは

保証が出来んのに、こんな <sup>くろしょうぞく</sup> 黒 装 束 が、三個も前途を <sup>さえぎ</sup> 遮 っては容易ならざる

不都合だ。いよいよとなれば <sup>みずか</sup> 自 ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いっそさよう仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見

にんてい <sup>くちばし</sup> 馴れぬ 人 体 である。口 <sup>おつ</sup> 嘴 が 乙 に <sup>とん</sup> 尖 がって何だか天 狗 の <sup>てんぐ</sup> 啓 <sup>もう</sup> し子 <sup>ご</sup> のよう

だ。どうせ 質 のいい奴でないには 極 っている。退却が安全だろう、あまり深入りをし

て万一落ちでもしたらなおさら恥辱だ。とっていると 左 向 をした鳥が 阿 呆 と

云った。次のも真似をして阿呆と云った。最後の奴は 御 鄭 寧 にも阿呆阿呆と二声叫ん

だ。いかに温厚なる吾輩でもこれは 看 過 出来ない。第一自己の邸内で 鳥 輩 に侮辱されたとあっては、吾輩の名前にかかわる。名前はまだないから係わりようがなかろう

と云うなら体面に係わる。決して退却は出来ない。 ことわざ うごう 諺 にも鳥合の衆と云うから

三羽だって存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据えて、のそのそ歩き出す。

鳥は知らん顔をして何か御互に話をしている様子だ。いよいよ 肝 癩 に 障 る。垣

根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合せてやるんだが、残念な事にはいくら 怒 っ

ても、のそのそとしかあるかれない。ようやくの事 先 鋒 を去る事約五六寸の距離まで

来てもう一息だと思うと、勘左衛門は申し合せたように、いきなり 羽 搏 をして一二尺

飛び上がった。その風が突然余の顔を吹いた時、はっと思ったら、つい踏み外ずして、す  
とんと落ちた。これはしくじったと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にとまって上

から 口 を 揃 えて吾輩の顔を見下している。凶太い奴だ。 睨 めつけてやったが

いっこうき 一 向 利かない。背を丸くして、少々 唸 ったが、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる  
象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に向って示す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。  
考えて見ると無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱っていた。それが

悪るい。猫ならこのくらいやればたしかに 応 えるのだが 生 憎 相手は鳥だ。鳥の勘公

とあって見れば致し方がない。実業家が主人 苦 沙 弥 先生を圧倒しようとおせるとごとく、

さいぎょう 西 行 に銀製の吾輩を進呈するがごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が 糞 をひるよ

うなものである。機を見るに敏なる吾輩はどうてい駄目と見て取ったから、奇麗さっぱり  
と椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動も<sup>い</sup>いいが度を過ぎると行かぬ者で、からだ  
全体が何となく<sup>しま</sup>緊りがない、ぐたぐたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動  
中に照り付けられた毛ごろもは、西日を思う存分吸収したと見えて、ほてってたまらない。  
毛穴から<sup>し</sup>染み出す汗が、流れればと思うのに毛の根に<sup>あぶら</sup>膏のようにねばり付く。背<sup>せなか</sup>中  
がむずむずする。汗でむずむずするのと<sup>のみ</sup>蚤が這ってむずむずするのは判然と区別が出来  
る。口の届く所なら<sup>か</sup>噛む事も出来る、足の達する領分は引き搔く事も心得にあるが、  
せきずい<sup>かぎり</sup>脊髄の縦に通う真中と来たら自分の及ぶ限でない。こう云う時には人間を見懸  
けて<sup>やたら</sup>矢鱈にこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行うか、二者その一を<sup>えら</sup>択ばん  
と不愉快で安眠も出来兼ねる。人間は<sup>ぐ</sup>愚なものであるから、猫なで声で——猫なで声は人  
間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を<sup>めやす</sup>目安にして考えれば猫なで声ではない、なでられ声  
である——よろしい、とにかく人間は愚なものであるから<sup>な</sup>撫でられ声で膝の<sup>そば</sup>傍へ寄って  
行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、わが為すままに任  
せるのみか折々は頭さえ<sup>な</sup>撫でてくれるものだ。しかるに近来吾輩の<sup>もうちゅう</sup>毛中にのみと号  
する一種の寄生虫が繁殖したので<sup>めった</sup>滅多に寄り添うと、必ず<sup>くびすじ</sup>頸筋を持って向うへ  
ほう<sup>い</sup>抛り出される。わずかに眼に入るか入らぬか、取るにも足らぬ虫のために<sup>あいそ</sup>愛想をつ  
かしたと見える。手を<sup>ひるがえ</sup>翻せば雨、手を<sup>くつがえ</sup>覆せば雲とはこの事だ。高がのみの  
<sup>びき</sup>千疋や二千疋でよくまあこんなに現金な真似が出来たものだ。人間世界を通じて行われ  
る愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。——自己の利益になる間は、すべからく人を愛

がぜんひょうへん か  
すべし。——人間の取り扱が 俄 然 豹 変 したので、いくら痒ゆくても人力を利用

しょうひまさつほう  
する事は出来ん。だから第二の方法によって 松 皮 摩 擦 法 をやるよりほかに分別

えんがわ  
はない。しからばちょっとこすって参ろうかとまた 椽 側 から降りかけたが、いやこれ

やに やに  
も利害相償わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。松には 脂 がある。この 脂  
たるすこぶる執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくっ付けようものなら、雷が鳴つ  
てもバルチック艦隊が全滅しても決して離れない。しかのみならず五本の毛へこびりつく

まんえん  
が早い、十本に 蔓 延 する。十本やられたなと気が付くと、もう三十本引っ懸っ

たんぱく ちゃじんてきねこ  
る。吾輩は 淡 泊 を愛する 茶 人 的 猫 である。こんな、しつこい、毒悪な、ね

しゅうねんぶか びみょう  
ちねちした、執 念 深 い奴は大嫌だ。たとい天下の 美 猫 といえどもご免蒙る。

まつやに えら  
いわんや 松 脂 においてをやだ。車屋の黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞と 扱 ぶ

たんかいしよく けごろも だい け  
ところなき身分をもって、この 淡 灰 色 の 毛 衣 を 大 なしにするとは怪し

きづかい  
からん。少しは考えて見るがいい。といったところできやつなかなか考える 気 遣 はな

きま  
い。あの皮のあたりへ行って背中をつけるが早いかな必ずべたりとおいでになるに 極 っ

とんちき  
いる。こんな無分別な 頓 痴 奇 を相手にしては吾輩の顔に係わるのみならず、引いて吾輩  
の毛並に関する訳だ。いくら、むずむずしたって我慢するよりほかに致し方はあるまい。

ひとくふう  
しかしこの二方法共実行出来んとなるとはなはだ心細い。今において 一 工 夫 しておか

かか  
んとしまいにはむずむず、ねちねちの結果病気に 罹 るかも知れない。何か分別はあるま

あ あし  
いかなと、後と 足 を折って思案したが、ふと思出した事がある。うちの主人は時々手

シャボン ひょうぜん  
拭と 石 鹼 をもって 飄 然 といずれへか出て行く事がある、三四十分して帰った



もうろう がんしょく  
ところを見ると彼の 朦朧たる 顔色 が少しは活気を帯びて、晴れやかに見える。

むさくる ききめ  
主人のような 汚苦しい男にこのくらいな影響を与えるなら吾輩にはもう少し 利目  
があるに相違ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、これより色男になる必要

かか なん げつ ようせつ  
はないようなものの、万一病気に 罹って一歳 何が 月で 夭折 するような事があ

そうせい つぶ  
っては天下の 蒼生 に対して申し訳がない。聞いて見るとこれも人間のひま 潰しに案

せんとう ろく  
出した 洗湯 なるものだそうだ。どうせ人間の作ったものだから 碌なものでないには

きま はい  
極まっているがこの際の事だから試しに這入って見るのもよかろう。やって見て功験がな  
ければよすまでの事だ。しかし人間が自己のために設備した浴場へ異類の猫を入れるだけ

こうりょう はい  
の 洪量 があるだろうか。これが疑問である。主人がすまして這入るくらいのとこ  
ろだから、よもや吾輩を断わる事もなかるうけれども万一お気の毒様を食うような事があ

ひとま ようす  
っては外聞がわるい。これは一 先ず 容子 を見に行くに越した事はない。見た上でこれ

くわ  
ならよいと当りが付いたら、手拭を 啣 えて飛び込んで見よう。とここまで思案を定めた  
上でのそのそと洗湯へ出掛けた。

きつりつ  
横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなものが 屹立 して先から薄い煙を吐

すなわ  
いている。これ 即ち洗湯である。吾輩はそっと裏口から忍び込んだ。裏口から忍び込

ひきょう  
むのを 卑怯 とか未練とか云うが、あれは表からでなくては訪問する事が出来ぬものが

しつと はや く ごと  
嫉妬 半分に 囁 して立てる 繰り言 である。昔から利口な人は裏口から不意を襲う事に

ほう  
きまっている。紳士養成 方 の第二巻第一章の五ページにそう出ているそうだ。その次の  
ページには裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世

けいべつ  
紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり 軽蔑 してはいけない。さて忍び込ん  
で見ると、左の方に松を割って八寸くらいにしたのが山のように積んであって、その隣り

には石炭が岡のように盛ってある。なぜ 松 薪 が山のように、石炭が岡のようかと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、ただちょっと山と岡を使い分けただけで

ある。人間も米を食ったり、鳥を食ったり、 さかな けもの 肴 を食ったり、 獣 を食ったりいろいろ

あく 悪 のもの食いをしつくしたあげくついに石炭まで食うように墮落したのは 不 憫 憫 で

ある。行き当りを見ると一間ほどの入口が明け放しになって、中を 覗 のぞ くとかんがらがん

のがあんと物静かである。その むこうがわ 向 側 で何かしきりに人間の声がする。いわゆる洗湯

はこの声の発する へん 辺 に相違ないと断定したから、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通

り抜けて左へ廻って、前進すると右手に ガラスまど 硝 子 窓 があって、そのそとに丸い小 桶 おけ が

すなわ 三角形 即 ちピラミッドのごとく積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるのは不

本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を りょう 諒 とした。小桶の南側は四五尺の あいだ 間 板が余って、あたかも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メー

トルだから飛び上がるには おあつら 御 誂 えの上等である。よろしいと云いながらひらりと身をおど

躍 らすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついている。天下に何が面白い

と云って、 いま 未 だ食わざるものを食い、未だ見ざるものを見るほどの愉快はない。諸君も

うちの主人のごとく一週三度くらい、この洗湯界に三十分 ないし 乃 至 四十分を暮すならいいが、

もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事がないなら、早く見るがいい。親の 死 しにめ 目に逢

わなくてもいいから、これだけは是非見物するがいい。世界広しといえどもこんな 奇 観 きかん はまたとあるまい。

何が奇観だ？ 何が奇観だって吾輩はこれを口にすることを ばば はば 憚 かるほどの奇観だ。この

ガラスまで

硝子窓の中にうじゃうじゃ、があが騒いでいる人間はことごとく裸体である。台湾

せいばん いしょう ひもと  
の生蕃である。二十世紀のアダムである。そもそも衣装の歴史を繙けば  
——長い事だからこれはトイフェルスドレック君に譲って、繙くだけはやめてやるが、——  
人間は全く服装で持ってるのだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてポー・ナッシ  
が厳重な規則を制定した時などは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくしたくらいであ

ぜん  
る。今を去る事六十年前これも英国の去る都で図案学校を設立した事がある。図案学校  
の事であるから、裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、ここ、かしこに陳列したの  
はよかったが、いざ開校式を挙げる一段になって当局者を初め学校の職員が大困却をし  
た事がある。開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の  
貴婦人方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思っていた。  
人間として着物をつけないのは象の鼻なきがごとく、学校の生徒なきがごとく、兵隊の勇

しっ  
気なきがごとく全くその本体を失している。いやしくも本体を失している以上は人間と

たとい  
しては通用しない、獣類である。仮令模写模型にせよ獣類の人間と伍するのは貴女の品

しょうら  
位を害する訳である。でありますから妾等は出席御断わり申すと云われた。そこで職  
員共は話せない連中だとは思ったが、何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾品である。

こめつき けしょうどうぐ  
米春にもなれん志願兵にもなれないが、開校式には欠くべからざる化粧道具

くろぬの  
である。と云うところから仕方がない、呉服屋へ行って黒布を三十五反

はちぶんのしち  
八分七買って来て例の獣類の人間にことごとく着物をきせた。失礼があつては

とどこお  
ならんと念に念を入れて顔まで着物をきせた。かようにしてようやくの事滞りなく  
式をすましたと云う話がある。そのくらい衣服は人間にとって大切なものである。近頃は  
裸体画裸体画と云ってしきりに裸体を主張する先生もあるがあれはあやまっている。生れ

こんにち  
てから今日に至るまで一日も裸体になった事がない吾輩から見ると、どうしても間違

ギリシャ ローマ いんぴ ふう  
っている。裸体は希臘、羅馬の遺風が文芸復興時代の淫靡の風に誘われてか

はや  
ら流行りだしたもので、希臘人や、羅馬人は 平 常 から裸体を見做っていたのだから、

これをもって風教上の利害の関係があるなどは 毫 ぐう も思い及ばなかったのだろうが北欧

は寒い所だ。日本でさえ裸で道中がなるものかと云うくらいだから 独 逸 や 英 吉 利 で  
裸になっておれば死んでしまう。死んでしまつてはつまらないから着物をきる。みんなが

着物をすれば人間は服装の動物になる。一たび服装の動物となつた 後 のち に、突然裸体動物

に出逢えば人間とは認めない、 けだもの 獣 と思う。それだから歐洲人ことに北方の歐洲人は  
裸体画、裸体像をもって獣として取り扱つていいのである。猫に劣る獣と認定していいの

である。美しい？ 美しくても構わんから、美しい獣と見做せばいいのである。こう云う  
と西洋婦人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼  
服を拝見した事はない。聞くところによると彼等は胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあ

らわしてこれを礼服と称しているそうだ。怪しからん事だ。十四世紀頃までは彼等の出で立  
ちはしかく滑稽ではなかつた、やはり普通の人間の着るものを着ておつた。それがなぜこ

かるわざし  
んな下等な 軽 術 師 流に転化してきたかは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬ  
ものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史はとにかく彼等はかかる異様な風態をし

とくとく  
て夜間だけは 得 々 たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもあると見えて、日  
が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくし  
てしまうのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考

えても彼等の礼服なるものは一種の 頓 珍 漢 的 作用 によって、馬鹿と馬鹿の相

談から成立したものだ云う事が分る。それが口惜しければ 日 中 にも肩と胸と腕  
を出して見るといい。裸体信者だつてその通りだ。それほど裸体がいいものなら娘を  
裸体にして、ついでに自分も裸になって上野公園を散歩でもするがいい、できない？ 出  
来ないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのだろう。現にこの不合理極

まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ出懸けるではないか。その 因 縁 を尋ねると  
何にもない。ただ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だろう。西洋人は強いから無理

でも馬鹿気ていても真似なければやり切れないのだろう。長いものには捲かれろ、強いものには折れろ、重いものには圧されろと、そうれろ尽しでは気が利かんではないか。気が利かんでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり日本人をえらい者と思っははいけない。学問といえどもその通りだがこれは服装に関係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人間を見ると

人間らしい感じがしない。まるで化物に邂逅したようだ。化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構わんが、それでは人間自

身が<sup>おお</sup>大に困却する事になるばかりだ。その昔<sup>むか</sup>し自然は人間を平等なるものに製造し

て世の中に<sup>ほう</sup>抛り出した。だからどんな人間でも生れるときは必ず<sup>あかはだか</sup>赤裸である。

もし人間の<sup>ほんせい</sup>本性が平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のままで生長してし

かるべきだろう。しかるに赤裸の一人が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐がない。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれはおれだ誰が見てもおれだと云うところ

が目につくようにしたい。それについては何か人が見てあつと<sup>たまげ</sup>魂消る物をからだにつけ

て見たい。何か工夫はあるまいかと十年間考えてようやく<sup>ざるまた</sup>猿股を發明してすぐさまこ

れを穿いて、どうだ恐れ入ったろうと威張ってそこいらを歩いた。これが<sup>こんにち</sup>今日の車夫

の先祖である。<sup>たんかん</sup>単簡なる猿股を發明するのに十年の長日月を<sup>つい</sup>費やしたのはいささか

い<sup>さかのぼ</sup>異なる感もあるが、それは今日から古代に<sup>もうまい</sup>溯って身を蒙昧の世界に置いて断定した結論と云うもので、その当時にこれくらいの大發明はなかつたのである。デカルトは

「余は思考す、故に余は存在す」という<sup>みご</sup>三つ子にでも分るような真理を考え出すのに十何年か懸ったそうさ。すべて考え出す時には骨の折れるものであるから猿股の發明に十年を

ちえ  
費やしたって車夫の智慧には出来過ぎると云わねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のきくのは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけて天下の大道を我物顔に横行  
かつぼ  
濶歩するのを憎らしいと思って負けん気の化物が六年間工夫して羽織と云う無用の長物

とみ  
を發明した。すると猿股の勢力は頓に衰えて、羽織全盛の時代となった。八百屋、  
きぐすりや ばつりゅう あと  
生薬屋、呉服屋は皆この大發明家の末流である。猿股期、羽織期の後に來

はかまき かんしゃく  
るのが袴期である。これは、何だ羽織の癖にと癩癩を起した化物の考案にな  
ったもので、昔の武士今の官員などは皆この種属である。かように化物共がわれもわれも

い てら しん きそ つばめ きけい  
と異を銜い新を競って、ついには燕の尾にかたどった畸形まで出現したが、

でたらめ  
退いてその由来を案ずると、何も無理矢理に、出鱈目に、偶然に、漫然に持ち上がった

こ しんがた  
事実では決してない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝ってさまざまの新形となった  
もので、おれは手前じゃないぞと振れてあるく代りに被っているのである。して見ると

い  
この心理からして一大発見が出来る。それはほかでもない。自然は真空を忌むごとく、人間は平等を嫌うと云う事だ。すでに平等を嫌ってやむを得ず衣服を骨肉のごとくかように

まと もくあみ  
つけ纏う今日において、この本質の一部分たる、これ等を打ちやっつて、元の奎阿弥の  
公平時代に帰るのは狂人の沙汰である。よし狂人の名称を甘んじても帰る事は到底出来な

かいめいじん たとい あ  
い。帰った連中を開明人の目から見れば化物である。仮令世界何億万の人口を挙  
げて化物の域に引ずりおろしてこれなら平等だろう、みんなが化物だから恥ずかしい事は  
ないと安心してもやっぱり駄目である。世界が化物になった翌日からまた化物の競争が始

あかはだか  
まる。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争をやる。赤裸は赤裸でどこ  
までも差別を立ててくる。この点から見ても衣服はどうてい脱ぐ事は出来ないものになっ  
ている。

がんか みおろ  
しかるに今吾輩が眼下に見下した人間の一団体は、この脱ぐべからざる猿股も羽織

ないしはかま  
も乃至袴もことごとく棚の上に上げて、無遠慮にも本来の狂態を

しゅうもくかんし うち へいへいぜん ほしいま  
衆目環視の裡に露出して平々然と談笑を縦まにしている。吾

さつき  
輩が先刻一大奇観と云ったのはこの事である。吾輩は文明の諸君子のためにここに  
つつし  
謹んでその一般を紹介するの榮を有する。

な  
何だかごちゃごちゃしていて何にから記述していいかわからない。化物のやる事には規律

ゆぶね  
がないから秩序立った証明をするのに骨が折れる。まず湯槽から述べよう。湯槽だか何

おおかた  
だかわからないが、大方湯槽というものだろうと思うばかりである。幅が三尺くらい、

ながさ はい  
長は一間半もあるか、それを二つに仕切って一つには白い湯が這入っている。何でも

くすりゆ いしばい  
薬湯とか号するのだそうで、石灰を溶かし込んだような色に濁っている。もっ

あぶら げ  
ともただ濁っているのではない。膏ぎって、重た気に濁っている。よく聞くと腐って

か  
見えるのも不思議はない、一週間に一度しか水を易えないのだそうだ。その隣りは普通一

よし えいてつ  
般の湯の由だがこれまたもって透明、瑩徹などとは誓って申されない。

てんすいおけ かま  
天水桶を攪き混ぜたくらいの価値はその色の上において充分あらわれている。こ

だいぶ わかぞう  
れからが化物の記述だ。大分骨が折れる。天水桶の方に、突っ立っている若造が

なぐさ  
二人いる。立ったまま、向い合って湯をざぶざぶ腹の上へかけている。いい慰みだ。

かんぜん  
双方共色の黒い点において間然するところなきまでに発達している。この化物は

だいぶ な  
大分逞ましいなど見ていると、やがて一人が手拭で胸のあたりを撫で廻しながら「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろう」と聞くと金さんは「そりゃ胃さ、胃て云う奴は命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心に忠告を加える。「だってこの

さはい  
左の方だぜ」た左 肺の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺だよ」「そうか

な、おらあまた胃はここいらかと思った」と今度は腰の辺を 叩いて見せると、金さんは

せんき ひげ は  
「そりゃ 疔 気 だあね」と云った。ところへ二十五六の薄い 髯 を生やした男がどぶんと

飛び込んだ。すると、からだに付いていた シャボン あか かなげ  
石 鹼 が 垢 と共に浮きあがる。鉄 氣 の

す は  
ある水を透かして見た時のようにきらきらと光る。その隣りに頭の禿げた爺さんが五分刈

とら  
を 捕 えて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているのみだ。「いやこう年をとっては

かな  
駄目さね。人間もやきが廻っちゃ若い者には 叶 わないよ。しかし湯だけは今でも熱いの  
でないと心持が悪くてね」「旦那なんか丈夫なものですぜ。そのくらい元気がありゃ結構  
だ」「元気もないのさ。ただ病気をしないでだけさ。人間は悪い事さえしなけりゃあ百二十  
までは生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんですか」「生きるとも百二十ま

ごいっしんまえ まがりぶち はたもと  
では受け合う。御 維 新 前 牛込に 曲 淵 と云う 旗 本 があって、そこにい  
た下男は百三十だったよ」「そいつは、よく生きたもんですね」「ああ、あんまり生き過  
ぎてつい自分の年を忘れてね。百までは覚えていましたがそれから忘れてしまいましたと  
云ってたよ。それでわしの知っていたのが百三十の時だったが、それで死んだんじゃない。

それからどうなったか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら 槽

あが ひげ は きらら ま  
から 上 る。髯 を生やしている男は 雲 母 のようなものを自分の廻りに蒔き散らした

ひと  
がら 独 りでにやにや笑っていた。入れ代って飛び込んで来たのは普通一般の化物とは違

せなか いわみじゅうたろう だいとう かざ  
って背 中に模様画をほり付けている。岩 見 重 太 郎 が 大 刀 を振り 翳 し

うわばみ たいじ ま しゅんこう  
て 鱗 を退 治 るところのようだが、惜しい事に未だ 竣 功 の期に達せんので、  
鱗はどこにも見えない。従って重太郎先生いささか拍子抜けの気味に見える。飛び込みな

べらぼう ぬ  
がら「 籠 棒 に温るいや」と云った。するとまた一人続いて乗り込んだのが「こりゃど



うも……もう少し熱くなくっちゃあ」と顔をしかめながら熱いのを我慢する 気色<sup>けしき</sup>とも見

えたが、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶<sup>あいさつ</sup>をする。重太郎は「やあ」と云ったが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃんじゃんが好きだからね」「じゃんじゃんばかりじゃねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。——どう云うもんか人に好かれねえ、——どう云うものだか、——どうも人が信用しねえ。職人てえものは、あんなもんじゃねえが」「そうよ。民さんなんざあ腰が低いん

じゃねえ、頭<sup>ずた</sup>が高けえんだ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当によ。あれで一

っぱし腕があるつもりだから、——つまり自分の損だあな」「白銀町<sup>しろかねちょう</sup>にも古い

人が亡くなってね、今じゃ桶屋<sup>な</sup>の元さんと煉瓦屋<sup>おけや</sup>の大将と親方ぐれえな者だあな。こちとらあこうしてここで生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだか分りやしねえ」「そうよ。しかしよくあれだけになったよ」「うん。どう云うもんか人に好かれ

ねえ。人が交際<sup>つきあ</sup>わねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見るとこれはまた非常な大入<sup>おおいり</sup>で、湯の中

に人が這入っていると云わんより人の中に湯が這入っていると云う方が適當である。しかも彼

等はすこぶる悠々<sup>ゆうゆう</sup>閑々<sup>かんかん</sup>たる物で、先刻<sup>さつき</sup>から這入るものはあるが出る物は一人もない。こう這入った上に、一週間もとめておいたら湯もよごれるはずだと感心してなお

よく槽<sup>おけ</sup>の中を見渡すと、左の隅に押しつけられて苦沙弥先生が真赤<sup>まっか</sup>になってすくんで

いる。可哀<sup>かわい</sup>そうに誰か路をあけて出してやればいいのにと思うのに誰も動きそうにもし

なければ、主人も出ようとする気色<sup>けしき</sup>も見せない。ただじっとして赤くなっているばかりである。これはご苦労な事だ。なるべく二銭五厘の湯銭を活用しようと云う精神からして、

かように赤くなるのだろうが、早く上がらんと湯気にあがるがと主<sup>ゆけ</sup>思<sup>しゅうおも</sup>いの吾輩は

窓の棚<sup>たな</sup>から少なからず心配した。すると主人の一軒置いて隣りに浮いてる男が八の字を

寄せながら「これはちと利き過ぎるようだ、どうも背 中の方から熱い奴がじりじり湧いてくる」と暗に列席の化物に同情を求めた。「なあにこれがちょうどいい加減です。薬湯

はこのくらいでないと利きません。わたしの国なぞではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利くんでしょう」と手拭を 畳ん

でこぼこあたまで 凸 凹 頭 をかくした男が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きますよ。

何でもいいえんだからね。豪 気 だあね」と云ったのは瘠せた 黄 瓜 のような色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少しは丈夫そうになれそ

うなものだ。「薬を入れ立てより、三日目か四日目がちょうどいいようです。今 日 等

は這入り頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見ると、 膨 れ返った男である。これは多分

あかぶと 垢 肥 りだろう。「飲んでも利きましようか」とどこからか知らないが黄色い声を出す

者がある。ひ あと などは一杯飲んで寝ると、き たい 奇 体 に小便に起きないから、まあやっ

て御覧なさい」と答えたのは、どの顔から出た声か分らない。ゆぶね いたま 湯 槽 の方はこれぐらいにして板 間 を見渡すと、いるわいるわ絵にもならないアダ

みのおのおの 各 勝手次第な姿勢で、勝手次第なところを洗っている。その中に

もっとも驚ろくべきのはあおむ あ とり なが はらば 仰 向けに寝て、高い明かり 取 を眺 めているのと、腹 這

いになって、みぞ のぞ ひま 溝 の中を 覗 き込んでいる両アダムである。これはよほど 閑 なアダムと

見える。坊主が石壁を向いてしゃがんでいると うし たた 後 ろから、小坊主がしきりに肩を 叩 い

ている。これは師弟の関係上 さんすけ つと 三 介 の代理を 務 めるのであろう。本当の三介もいる。

かぜ こぼんなり おけ 風邪を引いたと見えて、このあついのにちゃんちゃんを着て、小 判 形 の 桶 からざ

あと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を見ると親指の股に呉縞の垢 擦りを 挟んでい

る。こちらの方では小 桶を慾張って三つ抱え込んだ男が、隣りの人に石 鹼を使えと云いながらしきりに長談議をしている。何だろうと聞いて見るとこんな事を言っていた。「鉄砲は外国から渡ったもんだね。昔は斬り合いばかりさ。外国は卑怯だからね、それであんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえようだ、やっぱり外国のようだ。

わとうない  
和 唐 内 の時にゃ無かったね。和唐内はやはり清和源氏さ。なんでも義経が蝦夷から

満洲へ渡った時に、蝦夷の男で大変 学 のできる人がくっ付いて行つたてえ話したね。そ

れでその義経のむすこが 大 明 を攻めたんだが大明じゃ困るから、三代將軍へ使をよこ

して三千人の兵隊を借してくれろと云うと、三 代 様 がそいつを留めておいて帰さねえ。——何とか云ったっけ。——何でも何とか云う使だ。——それでその使を二年とめ

ておいてしまいに長崎で 女 郎 を見せたんだがね。その女郎に出来た子が和唐内さ。それから国へ帰って見ると大明は国賊に亡ぼされていた。……」何を云うのかさっぱり分ら

ない。その 後 ろに二十五六の陰気な顔をした男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしき

りにたでている。腫 物 か何かで苦しんでいると見える。その横に年の頃は十七八で君

とか僕とか生意気な事をべらべら 喋 舌 ってるのはこの近所の書生だろう。そのまた次に

妙な背 中 が見える。尻の中から寒 竹 を押し込んだように背 骨 の節が 歴 々と出ている。そうしてその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行儀よく並んでいる。

その十六むさしが赤く 爛 れて周 囲に膿 をもっているのもある。こう順々に書いて

くると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手 際 にはその 一 斑 さえ形容する事が出来ん。

これは厄介な事をやり始めた者だと少々 辟 易 していると入口の方に浅 黄 木 綿 の

着物をきた七十ばかりの坊主がぬっと 見 われた。坊主は 恭 しくこれらの裸体の化

物に一礼して「へい、どなた様も、毎日相変わらずありがとうございます。今日は少々御寒う

ございますから、どうぞ御<sup>ごゆっ</sup>緩<sup>はい</sup>くり——どうぞ白い湯へ出たり這入ったりして、ゆるりと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どうか湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく

述べ立てた。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「愛<sup>あいきょう</sup>嬌<sup>い</sup>ものだね。あれでな

くては商<sup>しょうばい</sup>買<sup>おおい</sup>は出来ないよ」と大<sup>い</sup>に爺さんを激賞した。吾輩は突然この異なる爺さんに逢ってちょっと驚ろいたからこっちの記述はそのままにして、しばらく爺さんを専

門に観察する事にした。爺さんはやがて今<sup>あが</sup>上<sup>た</sup>り立ての四つばかりの男の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見て大変だ

と思ったか、わーっと悲鳴<sup>あ</sup>を揚げてなき出す。爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御

泣きか、なに？ 爺さんが<sup>こわ</sup>恐<sup>い</sup>い？ いや、これはこれは」と感嘆した。仕方がないもの

だからたちまち機<sup>きほう</sup>鋒<sup>い</sup>を転じて、小供の親に向った。「や、これは源さん。今日は少し寒

いな。ゆうべ、近<sup>おうみや</sup>江<sup>くぐ</sup>屋へ這入った泥棒は何と云う馬鹿な奴じゃの。あの戸の潜<sup>り</sup>の所

を四角に切り破つての。そうしてお前の。何も取らずに行んだげな。御<sup>い</sup>巡<sup>おまわ</sup>りさんか夜番

でも見えたものであろう」と大<sup>おおい</sup>に泥棒の無謀を憫<sup>びんしょう</sup>笑<sup>つ</sup>したがまた一人を捉らまえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若いから、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一人寒がっている。

しばらくは爺さんの方へ気を取られて他の化物の事は全く忘れていたのみならず、苦し

そうにすくんでいた主人さえ記憶の<sup>うち</sup>中<sup>い</sup>から消え去った時突然流しと板の間の中間で大き

な声を出すものがある。見ると紛<sup>まぎ</sup>れもなき苦沙弥先生である。主人の声の図抜けて大いなるのと、その濁って聴き苦しいのは今日に始まった事ではないが場所が場所だけに吾輩

は少からず驚ろいた。これは正<sup>まさ</sup>しく熱湯の<sup>うち</sup>中<sup>い</sup>に長時間のあいだ我慢をして浸<sup>つか</sup>ってお

ったため<sup>ぎゃくじょう</sup>逆<sup>とっさ</sup>上<sup>い</sup>したに相違ないと咄<sup>い</sup>嗟<sup>い</sup>の際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に

せい とが  
病気の所為なら 答 むる事もないが、彼は逆上しながらも充分本心を有しているに相違な

どうまごえ  
い事は、何のためにこの法外の 胴 間 声 を出したかを話せばすぐわかる。彼は取るにも

なまいき おとなげ  
足らぬ 生 意 気 書生を相手に 大 人 気 もない喧嘩を始めたのである。「もっと下がれ、

はい  
おれの小桶に湯が這入っていかん」と怒鳴るのは無論主人である。物は見ようでどうでもなるものだから、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。万人のうちに

たかやまひこくろう しつ  
一人くらいは 高 山 彦 九 郎 が山賊を 叱 したようだからに解釈してくれるか

みずか  
も知れん。当人自身もそのつもりでやった芝居かも分らんが、相手が山賊をもって 自 ら

きま うし  
おらん以上は予期する結果は出て来ないに 極 っている。書生は 後 ろを振り返って「僕  
はもとからここにいたのです」とおとなしく答えた。これは尋常の答で、ただその地を去  
らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならるので、その態度と云い言語と云い、山賊と

ののし  
して 罵 り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分っているは

さつき  
ずだ。しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先 刻 からこの二人は

き なら  
少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利いた風の事ばかり 併 べていたので、始終それを  
聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える。だから先方でおとなしい挨拶を

おけ  
しても黙って板の間へ上がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の 桶 へ汚ない水をびち

は かつ  
やびちゃ跳ねかす奴があるか」と 喝 し去った。吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていた

かいさい  
から、この時心中にはちょっと 快 哉 を呼んだが、学校教員たる主人の言動としては

おだや たら  
穩 かならぬ事と思うた。元来主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき 殻 見たよう

こ  
にかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハンニバルがアルプス山を超える時に、路の真  
中に当って大きな岩があって、どうしても軍隊が通行上の不便邪魔をする。そこでハンニ

す た のこぎり  
バルはこの大きな岩へ醋をかけて火を焚いて、柔かにしておいて、それから 鋸 でこ

かまぼこ とどこお  
の大岩を 蒲 鉾 のように切って 滞 りなく通行をしたそうだ。主人のごとくこん

ききめ う はい  
な 利 目 のある薬湯へ煮だるほど這入っても少しも機能のない男はやはり醋をかけて

ひあぶ  
火 炙 りにするに限ると思う。しからずんば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かか

がんこ なお ゆぶね  
ったって主人の 頑 固 は 癒 りっこない。この 湯 槽 に浮いているもの、この流しにご  
ろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体であるから、無論  
常規常道をもって律する訳にはいかん。何をしたって構わない。肺の所に胃が陣取って、  
和唐内が清和源氏になって、民さんが不信用でもよかろう。しかし一たび流しを出て板の

せいそく しゃば  
間に上がれば、もう化物ではない。普通の人類の 生 息 する 娑 婆 へ出たのだ、文明  
に必要な着物をきるのだ。従って人間らしい行動をとらなければならんはずである。今  
主人が踏んでいるところは敷居である。流しと板の間の境にある敷居の上であって、当人

かんげんゆしょく えんてんかつだつ  
はこれから 歡 言 愉 色 、 円 転 滑 脱 の世界に逆戻りをしようと云う

まぎわ がんこ  
間 際 である。その間際ですらかくのごとく 頑 固 であるなら、この頑固は本人にとって

ろう きょうせい  
牢 として抜くべからざる病気に相違ない。病気なら容易に 矯 正 する事は出来ま

なお  
い。この病気を 癒 す方法は愚考によるとただ一つある。校長に依頼して免職して貰う事

すなわ き きま  
即 ちこれなり。免職になれば融通の利かぬ主人の事だからきつと路頭に迷うに 極 っ  
てる。路頭に迷う結果はのたれ死にをしなければならぬ。換言すると免職は主人にとつ  
て死の遠因になるのである。主人は好んで病気をして喜こんでいるけれど、死ぬのは

だいきらい ぜいたく  
大 嫌 である。死なない程度において病気と云う一種の 贅 沢 がしてたいので

おど  
ある。それだからそんなに病気をしていると殺すぞと 嚇 かせば臆病なる主人の事だから

ふる  
びりびりと 悸 え上がるに相違ない。この悸え上がる時に病気は奇麗に落ちるだろうと思  
う。それでも落ちなければそれまでの事さ。

いっばん  
いかに馬鹿でも病気でも主人に変わりはない。一 飯 君恩を重んずと云う詩人もある事  
だから猫だって主人の身の上を思わない事はあるまい。気の毒だと云う念が胸一杯になっ

おこ ゆぶね  
たため、ついそちらに気が取られて、流しの方の観察を 怠 たっていると、突然白い湯 槽

ののし  
の方面に向って口々に 罵 る声が聞える。ここにも喧嘩が起ったのかと振り向くと、狭

ざくろぐち いっすん  
い 柘 榴 口 に 一 寸 の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のある脛と、毛の

はつあき  
ない股と入り乱れて動いている。折から 初 秋 の日は暮るるになんなんとして流しの上

こ ひしめ さま もうろう  
は天井まで一面の湯気が立て籠める。かの化物の 犇 く 様 がその間から 朦 朧 と

つら  
見える。熱い熱いと云う声が吾輩の耳を 貫 んでいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ合う。

かさ  
その声には黄なもの、青いもの、赤いもの、黒いものもあるが互に 畳 なりかかって一種名

みなぎ  
状すべからざる音響を浴場内に 漲 らす。ただ混雑と迷乱とを形容するに適した声と云

ぼうぜん みい  
うのみで、ほかには何の役にも立たない声である。吾輩は 茫 然 としてこの光景に魅入  
られたばかり立ちすくんでいた。やがてわーわーと云う声が混乱の極度に達して、これよ  
りはもう一步も進めぬと云う点まで張り詰められた時、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返し

むれ み たけ ほか  
ている 群 の中から一大長漢がぬっと立ち上がった。彼の身の 丈 を見ると 他 の先生

ひげ は  
方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみならず顔から 髯 が生えているのか髯の中に顔

そ わ がね  
が同居しているのか分らない赤つらを反り返して、日盛りに破れ 鐘 をつくような声を出

ふんぶん もつ  
して「うめろうめろ、熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かの 紛 々と 纏  
れ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間には浴場全体がこの男一人になったと思わるる

とうりょう  
ほどである。超人だ。ニーチェのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化物の 頭 梁 だ。

ゆぶね うし  
と見て見ていると湯 槽 の 後 ろでおーいと答えたものがある。おやとまたもそちらに

ひとみ あんたん さんすけ  
眸をそらすと、暗懨として物色も出来ぬ中に、例のちゃんちゃん姿の三介

ひとかたま かまど ふた  
が砕けよと一塊りの石炭を竈の中に投げ入れるのが見えた。竈の蓋をくぐ  
って、この塊りがばちばちと鳴るときに、三介の半面がぱっと明るくなる。同時に三介の  
うし れんが やみ ものすご  
後ろにある煉瓦の壁が暗を通して燃えるごとく光った。吾輩は少々物凄くな

そうそう いえ  
ったから早々窓から飛び下りて家に帰る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ、猿股

はかま つと  
を脱ぎ、袴を脱いで平等になろうと力める赤裸々の中には、また赤裸々の豪傑が出  
て来て他の群小を圧倒してしまう。平等はいくらはだかになったって得られるものではな  
い。

ぼんさん  
帰って見ると天下は太平なもので、主人は湯上がりの顔をテラテラ光らして晚餐を

えんがわ  
食っている。吾輩が椽側から上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今頃どこをあるい

ぜに おかず  
ているんだらうと云った。膳の上を見ると、銭のない癖に二三品御菜をならべている。

さかな ぴき  
そのうちに肴の焼いたのが一疋ある。これは何と称する肴か知らんが、何でも

きのう おだいば  
昨日あたり御台場近辺でやられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明しておいた

ざんぜん  
が、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られたりしてはたまらん。多病にして残喘を

たも そば すき  
保つ方がよほど結構だ。こう考えて膳の傍に坐って、隙があつたら何か頂戴しよう

よそお  
と、見るごとく見ざるごとく装っていた。こんな装い方を知らないものはとうてい

あきら  
まい肴は食えないと諦めなければいけない。主人は肴をちょっと突つしたが、うま

はし ひか  
くないと云う顔付をして箸を置いた。正面に控えたる妻君はこれまた無言のまま箸の

じょうげ りょうがく りごうかいこう  
上下に運動する様子、主人の両顎の離合開闔の具合を熱心に研究し  
ている。



「おい、その猫の頭をちょっと<sup>ぶ</sup>撲って見ろ」と主人は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちょっと撲って見ろ」

こうですかと細君は平<sup>ひら</sup>手<sup>て</sup>で吾輩の頭をちょっと<sup>たた</sup>敲く。痛くも何ともない。

「鳴かんじゃないか」

「ええ」

「もう一<sup>ぺん</sup>返<sup>へん</sup>やってみろ」

「何返やったって同じ事じゃありませんか」と細君また平手で<sup>まい</sup>ぼかと参る。やはり何と

もないから、じっとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深き吾輩には<sup>とん</sup>頓と了解し難い。これが了解出来れば、どうかこうか方法もあろうがただ撲って見ろだから、撲つ

細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は二度まで思い通りにならるので、少々焦れ気味で「おい、ちょっと鳴くようにぶって見ろ」と云った。

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんですか」と問いながら、またびしゃりとおいでになった。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえやれば主人を満足させる

事は出来るのだ。主人はかくのごとく<sup>ぐぶつ</sup>愚物<sup>い</sup>だから<sup>いや</sup>厭になる。鳴かせるためなら、ため

と早く云えば二返も三返も余計な<sup>てすう</sup>手数<sup>てすう</sup>はしなくてもすむし、吾輩も一度で放免になる事

を二度も三度も繰り返えされる必要はないのだ。ただ<sup>ぶ</sup>打って見ろと云う命令は、打つ事それ自身を目的とする場合のほかには用うべきものでない。打つのは向うの事、鳴くのはこちらの事だ。鳴く事を始めから予期して懸って、ただ打つと云う命令のうちに、こちらの随意たるべき鳴く事さえ含まてるように考えるのは失敬千万だ。他人の人格を重んぜんと

云うものだ。猫を馬鹿にしている。主人の<sup>だかつ</sup>蛇蝎<sup>だかつ</sup>のごとく嫌う金田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもって誇る主人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のところ主人はこれ

ほどけちな男ではないのである。だから主人のこの命令は<sup>こうかつ</sup>狡猾<sup>きよく</sup>の<sup>い</sup>極に出でたの

ではない。つまり<sup>ちえ</sup>智慧<sup>ちえ</sup>の足りないところから湧いた<sup>わ</sup>子<sup>ぼう</sup>子<sup>ふら</sup>のようなものと思惟する。<sup>しい</sup>

飯を食べば腹が張るに極<sup>き</sup>まっている。切れれば血が出るに極<sup>き</sup>まっている。殺せば死ぬに極<sup>き</sup>まっ

ている。それだから打てば鳴くに極<sup>ぶ</sup>っていると速断をやったんだろう。しかしそれはお気

の毒だが少し論理に合わない。その格で行くと川へ落ちれば必ず死ぬ事になる。天<sup>てん</sup>麩<sup>ぷら</sup>羅

げり  
を食べば必ず下痢する事になる。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書物を読めば必  
ずえらくなる事になる。必ずそうなっては少し困る人が出来てくる。打てば必ずなかな

ればならんとなると吾輩は迷惑である。目白の時の鐘と同一に見倣<sup>みな</sup>されては猫と生れた

かい  
甲斐がない。まず腹の中でこれだけ主人を 凹<sup>へこ</sup>ましておいて、しかる後にゃーと注文通り  
鳴いてやった。

すると主人は細君に向って「今鳴いた、にゃあと云う声は感投詞か、副詞か何だか知っ  
てるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない。実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上が

まださめないためだろうと思っただけだ。元来この主人は 近<sup>きん</sup>所<sup>じょ</sup>合<sup>が</sup>壁<sup>つ</sup>有名<sup>ぺき</sup>な変  
人で現にある人はたしかに神経病だとまで断言したくらいである。ところが主人の自信は

えらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の奴が神経病だと 頑<sup>がん</sup>張<sup>ば</sup>っている。近辺の

ものが主人を犬々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だとか号して彼等を 豚<sup>ぶた</sup>々<sup>ぶた</sup>  
と呼ぶ。実際主人はどこまでも公平を維持するつもりらしい。困ったものだ。こう云う男

だからこんな奇問を細君に 対<sup>むか</sup>って呈出するのも、主人に取っては 朝<sup>あ</sup>食<sup>さめ</sup>前<sup>しまえ</sup>の小事  
件かも知れないが、聞く方から云わせるとちょっと神経病に近い人の云いそうな事だ。だ

けむ ま  
から細君は 煙<sup>けむ</sup>に捲かれた気味で何とも云わない。吾輩は無論何とも答えようがない。す  
ると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

びっくり  
細君は 吃<sup>び</sup>驚<sup>っ</sup>して「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿気た事はどうでもいいじゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配している大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありませんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分ったんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の <sup>さかな</sup>肴 をむしゃむしゃ食う。ついでにそ

の隣にある豚と <sup>いも</sup>芋 のにころばしを食う。「これは豚だな」「ええ豚でござんす」「ふん」

と <sup>だいけいべつ</sup>大 軽 蔑 の調子をもって飲み込んだ。「酒をもう一杯飲もう」と <sup>さかずき</sup>杯 を出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう <sup>だいぶ</sup>大 分 赤くなっていらっしゃいますよ」

「飲むとも——御前世界で一番長い字を知ってるか」

「ええ、<sup>さき</sup>前 の関白太政大臣でしょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字って横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういいでしょう、これで御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「Archaiomelesidonophrunicherata と云う字だ」

でたらめ  
「出鱈目でしょう」

<sup>ギリシャゴ</sup>  
「出鱈目なものか、希臘語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ <sup>つづ</sup>綴 りだけ知ってるんだ。長く書くと六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云っているところがすこぶる奇観である。もっ

とも今夜に限って酒を <sup>むやみ</sup>無 暗 にのむ。平生なら <sup>ちよこ</sup>猪 口に二杯ときめているのを、もう四杯

飲んだ。二杯でも随分赤くなるのを倍飲んだのだから顔が <sup>やけひばし</sup>焼 火 箸 のようにほてっ

て、さも苦しそうだ。それでもまだやめない。「もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになったら、いいでしょう。苦しいばかりですわ」と苦<sup>にがにが</sup>々しい顔をする。

「なに苦しくってもこれから少し稽古するんだ。大<sup>おお</sup>町<sup>まち</sup>桂<sup>けい</sup>月<sup>げつ</sup>が飲めと云った」

「桂月って何です」さすがの桂月も細君に逢っては一<sup>いち</sup>文<sup>もん</sup>の価値もない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだからいいに極<sup>きま</sup>っているさ」

「馬鹿をおっしやい。桂月だって、梅月だって、苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしろといった」

「なおわるいじゃありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくっても金さえあればやるかも知れない」

「なくって仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちゃあ大変ですよ」

「大変だと云うならよしてやるから、その代りもう少し<sup>おっと</sup>夫<sup>おと</sup>を大事にして、そうして晩に、もっと御馳走を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道楽は追って金が這入り次第やる事にして、今夜はこれでやめ

よう」と飯茶碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。吾輩はその夜豚肉<sup>よ</sup>三<sup>み</sup>片<sup>きれ</sup>と塩焼の頭を頂戴した。

八

かきめぐ<sup>い</sup> 垣<sup>い</sup>巡りと云う運動を説明した時に、主人の庭を結い<sup>ゆ</sup>めぐ<sup>めぐ</sup> 繞らしてある竹垣の事をち

よっと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち<sup>みなみどなり</sup>南<sup>じろ</sup>隣<sup>の</sup>の次郎ちゃ

んとこと思っは誤解である。家賃は安いがそこは<sup>くしゃみ</sup>苦<sup>よ</sup>沙<sup>の</sup>弥<sup>先生</sup>先生である。与<sup>よ</sup>っちゃんや次

郎<sup>ぺら</sup>ちゃんなどと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄<sup>ぺら</sup>っ片<sup>な</sup>な垣一重を隔てて御隣り

同志の親密なる交際は結んでおらぬ。この垣の外は五六間の空地であって、その尽くる

あきち  
ひのき こんもり なら えんがわ  
ところに 檜 が 蔭 然 と五六本 併 んでいる。椽 側 から拝見すると、向うは茂

じつげつ こうこ  
った森で、ここに往む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして 日 月 を送る 江 湖

しよし ただ ふいちょう  
の 処 士 であるかのごとき感がある。但 し檜の枝は 吹 聴 するごとく密生してお

あいだ ぐんかくかん  
らなので、その 間 から 群 鶴 館 という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮  
なく見えるから、しかく先生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論である。しかし

きよ がりょうくつ  
この下宿が群鶴館なら先生の 居 はたしかに 臥 竜 窟 くらいな価値はある。名前に  
税はかからんから御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地

かぎ  
が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち 鉤 の手に屈曲して、臥竜窟の  
北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を歩き尽してまたあき

ふたがわ がりょうくつ  
地、とか何とか威張ってもいいくらいに家の 二 側 を包んでいるのだが、臥 竜 窟

れいびょう  
の主人は無論窟内の 霊 猫 たる吾輩すらこのあき地には手こずっている。南側に

ひのき き きり  
檜 が幅を利かしているごとく、北側には 桐 の木が七八本行列している。もう周囲一

ね しゃくや  
尺くらいにのびているから下駄屋さえ連れてくればいい価になるのだが、借 家 の悲し  
さには、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても気の毒である。せんだって学

まないたげた  
校の小使が来て枝を一本切って行ったが、そのつぎに来た時は新しい桐の 俎 下 駄

は ふいちょう  
を穿いて、この間の枝でこしらえましたと、聞きもせんのに 吹 聴 していた。ずるい

いだ  
奴だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとっては一文にもならない桐である。玉を 抱 いて

は ぜに  
罪ありと云う古語があるそうだが、これは桐を生やして 銭 なしと云ってもしかるべきも

ぐさ ぐ やぬし  
ので、いわゆる宝の持ち 腐 れである。愚なるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家 主

の伝兵衛である。いないかな、いないかな、下駄屋はいないかなと桐の方で催促している

の知らん<sup>かお</sup>面<sup>やちん</sup>をして屋賃ばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に<sup>うらみ</sup>恨もない

から彼の<sup>あっこう</sup>悪口<sup>あきち</sup>をこのくらいにして、本題に戻ってこの空地が騒動の種であると云

ちんだん<sup>つかまつ</sup>う<sup>珍</sup>譚<sup>譚</sup>を紹介<sup>仕</sup>るが、決して主人にいつてはいけない。これぎりの話しである。そもそもこの空地に関して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云うと嘘をつくようによろし

くない。実を云うとあったのである。しかし話しは過去へ<sup>さかのぼ</sup>溯<sup>らん</sup>らんと原因が分からな

い。原因が分からないと、医者でも<sup>しょほう</sup>処<sup>方</sup>に迷惑する。だからここへ引き越して来た当時からゆっくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用心

だって金のないところに盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あらゆる<sup>へい</sup>塀<sup>、</sup>垣、

ないし<sup>らんぐい</sup>らんぐい<sup>さかもぎ</sup>乃<sup>至</sup>は乱<sup>杭</sup>、逆<sup>茂</sup>木<sup>の</sup>類は全く不要である。しかしながらこれは空地の向うに

すまい<sup>いかん</sup>住<sup>居</sup>する人間もしくは動物の種類<sup>如何</sup>によって決せらるる問題であろうと思う。従ってこの問題を決するためには勢い向う側に陣取っている君子の性質を明かにせんければならん。人間だか動物だか分らない先に君子と称するのははなはだ早計のようではあるが大

抵君子で間違はない。<sup>りょうじょう</sup>梁<sup>上</sup>の君子などと云って泥棒さえ君子と云う世の中である。

ただ<sup>但</sup>しこの場合における君子は決して警察の厄介になるような君子ではない。警察の厄介

にならない代りに、数でこなした者と見えて沢山いる。うじゃうじゃいる。<sup>らくうんかん</sup>落<sup>雲</sup>館<sup>と</sup>称する私立の中学校——八百の君子をいやが上に君子に養成するために毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思うと、それがそもそ

もの間違になる。その信用すべからざる事は<sup>ぐんかくかん</sup>群<sup>鶴</sup>館<sup>に</sup>鶴の下りざるとく、臥<sup>竜</sup>窟<sup>に</sup>猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のごとき気違

のある事を知った以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでない<sup>わけ</sup>と云う事がわかる<sup>訳</sup>だ。そ

れがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ <sup>とま</sup>宿りに来て見るがいい。

<sup>ぜん</sup>前申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例の <sup>あきち</sup>空地に垣がないので、落雲館の君子

は車屋の黒のごとく、のそのそと <sup>きりばたけ はい</sup>桐 畠 に這入り込んで来て、話をする、弁当を食

う、<sup>ささ</sup>笹の上に <sup>ねころ</sup>寝転ぶ——いろいろの事をやったものだ。それからは弁当の死骸 <sup>すなわ</sup>即

ち竹の皮、古新聞、あるいは <sup>ふるぞうり</sup>古草履、古下駄、ふると云う名のつくものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人は存外平気に構えて、別段抗議も申し込まずに打ち過ぎた

のは、知らなかったのか、知っても <sup>とが</sup>咎めんつもりであったのか分らない。ところが彼等諸君子は学校で教育を受くるに従って、だんだん君子らしくなったものと見えて、次第に

北側から南側の方面へ向けて <sup>さんしよく</sup>蚕食を企だてて来た。蚕食と云う語が君子に不似合な

らやめてもよろしい。但 <sup>ただ</sup>しほかに言葉がないのである。彼等は <sup>すいそう</sup>水草を追うて居を変

ずる <sup>さばく</sup>沙漠の住民のごとく、<sup>きり</sup>桐の木を去って <sup>ひのき</sup>檜の方に進んで来た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる君子でなければこれほどの行動は取れんはずである。

一両日の <sup>のち</sup>後彼等の大胆はさらに一層の大を加えて <sup>だいだいたん</sup>大々胆となった。教育の結果

ほど恐しいものはない。彼等は単に座敷の正面に <sup>せま</sup>逼るのみならず、この正面において歌

をうたいだした。何と云う歌か忘れてしまったが、決して三十一文字の <sup>みそひともじ たぐい</sup>類ではな

い、もっと <sup>かっぱつ</sup>活潑で、もっと <sup>ぞくじ</sup>俗耳に入り <sup>やす</sup>易い歌であった。驚ろいたのは主人ばかり

りではない、吾輩までも彼等君子の才芸に <sup>たんぷく</sup>嘆服して覚えず耳を傾けたくらいである。しかし読者もご案内であろうが、嘆服と云う事と邪魔と云う事は時として両立する場合が

ある。この両者がこの際 <sup>はか</sup>図らずも合して一となったのは、今から考えて見ても返す返す残念である。主人も残念であったろうが、やむを得ず書齋から飛び出して行って、ここは

はい  
君等の這入る所ではない、出給えと云って、二三度追い出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞く訳がない。追い出されればすぐ這入る。這

こうせい 入れば活潑なる歌をうたう。高 声 に談話をする。しかも君子の談話だから 一 風 違

ごいっしんまえ おりすけ  
って、おめえだの知らねえのと云う。そんな言葉は 御 維 新 前 は 折 助 と

くもすけ さんすけ  
雲 助 と 三 助 の専門的知識に属していたそうだが、二十世紀になってから教育あ

けいべつ  
る君子の学ぶ唯一の言語であるそうだ。一般から 軽 蔑 せられたる運動が、かくのごと

こんにち  
く 今 日 歓迎せらるるようになったのと同じの現象だと説明した人がある。主人はまた

かんのう つら  
書齋から飛び出してこの君子流の言葉にもっとも 堪 能 なる一人を 捉 まえて、なぜこ  
こへ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品な言葉を忘れて  
「ここは学校の植物園かと思いました」とすこぶる下品な言葉で答えた。主人は将来を

いまし  
戒 めて放してやった。放してやるのは亀の子のようでおかしいが、実際彼は君子の

そで とら  
袖 を 捉 えて談判したのである。このくらいやかましく云ったらもうよかろうと主人は

じよかし  
思っていたそうだ。ところが実際は 女 の時代から予期と違うもので、主人はまた失  
敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるから御客  
かと思うと桐島の方で笑う声がする。形勢はますます不穩である。教育の功果はいよいよ

こも  
顕著になってくる。気の毒な主人はこいつは手に合わんと、それから書齋へ立て 籠 って、

うやうや ていちよう  
恭 しく一書を落雲館校長に奉って、少々御取締をと哀願した。校長も 鄭 重 な  
る返書を主人に送って、垣をするから待ってくれと云った。しばらくすると二三人の職人  
が来て半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高さ三尺ばかりの四つ目垣が出来  
上がった。これでようよう安心だと主人は喜こんだ。主人は愚物である。このくらいの事  
で君子の挙動の変化する訳がない。

全体人にかからかうのは面白いものである。吾輩のような猫ですら、時々は当家の令嬢に

き  
からかって遊ぶくらいだから、落雲館の君子が、気の利かない苦沙弥先生にかからかうのは



しごく

至 極 もっともなところで、これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけであろう。

からかうと云う心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかわれる当人が平気ですましてはならん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強くなってはいかん。この間主人が動物園から帰って来てしきりに感心して話した事がある。聞いて

らくだ

見ると 駱 駝 と小犬の喧嘩を見たのだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻転して

ほ

せなか こぶ

吠え立てると、駱駝は何の気もつかずに、依然として背 中 へ 瘤 をこしらえて突っ立っ

あいそ

たままであるそうだ。いくら吠えても狂っても相手にせんので、しまいには犬も 愛 想 をつかしてやめる、実に駱駝は無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例である。い

しし とら

くらからかうものが上手でも相手が駱駝と来ては成立しない。さればと云って獅子や 虎 のように先方が強過ぎても者にならん。からかいかけるや否や八つ裂きにされてしまう。

おこ

からかうと歯をむき出して 怒 る、怒る事は怒るが、こっちをどうする事も出来ないと言う安心のある時に愉快は非常に多いものである。なぜこんな事が面白いと云うとその理由

ひげ

はいろいろある。まずひまつぶしに適している。退屈な時には 髯 の数さえ勘定して見た

むか

ぶりょう

へや

くなる者だ。昔 し獄に投ぜられた囚人の一人は 無 聊 のあまり、 房 の壁に三角形

か

を重ねて画いてその日をくらしたと云う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ。からかうと云

ただ

うのもつまりこの刺激を作って遊ぶ一種の娯楽である。但 し多少先方を怒らせるか、じ

ふけ

らせるか、弱らせるかしなくては刺激にならんから、昔しからからかうと云う娯楽に 耽 るものは人の気を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は

いとま

考うるに 暇 なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活気の使い道に窮する少年かに限っている。次には自己の優勢な事を実地に証明するものにはもっとも簡便な方法である。人を

きずつ

おとしい

殺したり、人を 傷 けたり、または人を 陥 れたりしても自己の優勢な事は証明出来る訳であるが、これらはむしろ殺したり、傷けたり、陥れたりするのが目的のときに

よるべき手段で、自己の優勢なる事はこの手段を 遂行 した 後 に必然の結果として起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示したくって、しかもそんなに人に害を与

えたくないと言う場合には、からかうのが一番 御 恰 好 である。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事実の上に証拠だてられない。事実になって出て来ないと、頭のうちに

安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己を 恃 むものである。否 恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だ

と云う事を、人に対して実地に応用して見ないと気がすまない。しかも 理 窟 のわからない俗物や、あまり自己が恃みになりそうもなくて落ちつきのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする。柔術使が時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。

柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一 返 でいいから出逢って見たい、

しろようと 素 人 でも構わないから 抛 げて見たいと至極危険な見を 抱 いて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はいろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致

す。聞きたければ 鯉 節 の 一 折 も持って習いにくるがいい、いつでも教えてやる。

以上に説くところを参考して推論して見ると、吾輩の 考 では 奥 山 の 猿 と、学校の教師がからかうには一番手頃である。学校の教師をもって、奥山の猿に比較しては 勿 体 ない。——猿に対して勿体ないのではない、教師に対して勿体ないのである。し

かしよく似ているから仕方がない、御承知の通り奥山の猿は 鎖 で 繫 がれている。い

くら歯をむき出しても、きゃっきゃつ騒いでも引き搔かれる 気 遣 はない。教師は鎖で繫がれておらない代りに月給で縛られている。いくらからかったって大丈夫、辞職して生徒をぶんなぐる事はない。辞職をする勇気のあるようなものなら最初から教師などをして

生徒の御守りは勤めないはずである。主人は教師である。落雲館の教師ではないが、やは

り教師に相違ない。からかうには至 極 適 当で、至極 安 直 で、至極無事な男であ

る。落雲館の生徒は少年である。からかう事は自己の鼻を高くする所以で、教育の功果として至当に要求してしかるべき権利とまで心得ている。のみならずからかいでもしなければ、活気に充ちた五体と頭脳を、いかに使用してしかるべきか十分の休暇中持てあ

まして困っている連中である。これらの条件が備われば主人は自からからかわれ、生徒は自からからかう、誰から云わしても毫も無理のないところである。それを怒る主

人は野暮の極、間抜の骨頂でしょう。これから落雲館の生徒がいかに主人にからかったか、これに対して主人がいかに野暮を極めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承知であろう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたって、こしらえなくたって同じ事だ。然し落雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が

養成する君子が潜られんために、わざわざ職人を入れて結い繞らせたのである。なる

ほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には潜れそうにない。この竹をもって組み

合せたる四寸角の穴をぬける事は、清国の奇術師張世尊その人といえどもむずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能をつくしているに相違ない。主人がその出来上ったのを見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない。しかし主人の論理には

おおい大なる穴がある。この垣よりも大いなる穴がある。呑舟の魚をも洩らすべき

大穴がある。彼は垣は踰ゆべきものにあらずとの仮定から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上はいかに粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界線の区域さえ判然すれば決して乱入される気遣はないと仮定したのである。次に彼はその仮定をしばらく打ち

くず崩して、よし乱入する者があっても大丈夫と論断したのである。四つ目垣の穴を潜り

得る事は、いかなる小僧といえどもとうてい出来る気遣はないから乱入の虞は決して

ないと速定してしまったのである。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の目をぬ

けてくる事はしまい、したくても出来まいが、乗り<sup>こ</sup>踰える事、飛び越える事は何の事もない。かえって運動になって面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等は北側の空地へばかりばかりと飛び込

ただむ。但し座敷の正面までは深入りをしない。もし追い懸けられたら逃げるのに、少々ひ

まがいるから、<sup>あらかじ</sup>予<sup>い</sup>め逃げる時間を勘定に入れて、<sup>とら</sup>捕えらるる危険のない所で

ゆうよく遊<sup>い</sup>弋<sup>い</sup>をしている。彼等が何をしているか東の離れにいる主人には無論目に入らない。

北側の<sup>あきち</sup>空地に彼等が遊弋している状態は、木戸をあけて反対の方角から<sup>かぎ</sup>鉤の手に曲っ

て見るか、または<sup>こうか</sup>後架の窓から垣根越しに<sup>なが</sup>眺めるよりほかに仕方がない。窓から眺め

る時はどこに何がいるか、<sup>いちもく</sup>一目<sup>いくたり</sup>明瞭に見渡す事が出来るが、よしや敵を<sup>い</sup>幾人見

出したからと云って捕える訳には行かぬ。ただ窓の<sup>こうし</sup>格子の中から叱りつけるばかりであ

る。もし木戸から<sup>うかい</sup>迂回して敵地を突こうとすれば、足音を聞きつけて、ばかりばかりと

<sup>つら</sup>捉まる前に向う側へ下りてしまう。<sup>おっとせい</sup>膂膂臍がひなたぼっこをしているところへ密

猟船が向ったような者だ。主人は無論後架で張り番をしている訳ではない。と云って木戸を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。もしそんな事をやる日には教師を辞職して、その方専門にならなければ追っつかない。主人方の不利を云うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見えないのと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない事である。この不利

を看破したる敵はこんな軍略を講じた。主人が書斎に立て<sup>こも</sup>籠っていると探偵した時には、なるべく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主人をひやかすような事を聞こえよがしに述べる。しかもその声の出所を極めて不分明にする。ちょっと聞くと垣の内です騒いでいるのか、あるいは向う側であばれているのか判定しにくいようにする。もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が後架へ——吾輩は最前からしきりに後架後架ときたない字を使用するのを別段の光栄とも思っておらん、実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上において必要であるからやむ

すなわ<sup>すなわ</sup>を得ない。——即ち主人が後架へまかり越したと見て取るときは、必ず桐の木の附近

はいかい しりん  
を徘徊してわざと主人の眼につくようにする。主人がもし後架から四隣に響く大

あわ けしき ゆうぜん  
音を揚げて怒鳴りつけば敵は周章てる気色もなく悠然と根拠地へ引きあげる。

はい  
この軍略を用いられると主人ははなはだ困却する。たしかに這入っているなど思ってステ

せきぜん  
ッキを持って出懸けると寂然として誰もいない。いないかと思って窓からのぞくと必

のぞ  
ず一二人這入っている。主人は裏へ廻って見たり、後架から覗いて見たり、後架から覗  
いて見たり、裏へ廻って見たり、何度言っても同じ事だが、何度云っても同じ事を繰り返

ほんめい  
している。奔命に疲れるとはこの事である。教師が職業であるか、戦争が本務である

ぎやくじょう しも  
かちょっと分らないくらい逆上して来た。この逆上の頂点に達した時に下の  
事件が起ったのである。

さ のぼ  
事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは読んで字のごとく逆かさに上るのである、こ

へんじやく とな  
の点に関してはゲーレンもパラセルサスも旧弊なる扁鵲も異議を唱うる者は一

さ のぼ  
人もない。ただどこへ逆かさに上るかが問題である。また何が逆かさに上るかが議論の  
あるところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の体内には四種の液が循環しておっ

どえき やつ おこ  
たそうだ。第一に怒液と云う奴がある。これが逆かさに上ると怒り出す。第二に

どんえき にぶ ゆうえき  
鈍液と名づくるのがある。これが逆かさに上ると神経が鈍くなる。次には憂液、

けつえき しし さか ご  
これは人間を陰気にする。最後が血液、これは四肢を壮んにする。その後人文が

ま  
進むに従って鈍液、怒液、憂液はいつの間になくなって、現今に至っては血液だけが昔  
のように循環していると云う話しだ。だからもし逆上する者があれば血液よりほかにはあ

き  
るまいと思われる。しかるにこの血液の分量は個人によってちゃんと極まっている。性分  
によって多少の増減はあるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合である。だによって、

この五升五合が逆かさに上ると、上ったところだけは <sup>さか</sup> 熾んに活動するが、その他の局部は欠乏を感じて冷たくなる。ちょうど交番焼打の当時巡査がことごとく警察署へ集って、町内には一人もなくなったようなものだ。あれも医学上から診断をすると警察の逆上と云

う者である。でこの逆上を癒やすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に分配しなけ

ればならん。そうするには逆かさに上った奴を下へ <sup>おろ</sup> 降さなくてはならん。その方にはい

ろいろある。今は故人となられたが主人の先君などは濡れ手 <sup>ぬ てぬぐい</sup> 拭 <sup>こたつ</sup> を頭にあてて炬燵

にあたっておられたそうだ。頭 <sup>ずかんそくねつ</sup> 寒 <sup>しょうかんろん</sup> 足 <sup>しょうかんろん</sup> 熱は延命息災の徴と傷寒論にも出ている通り、濡れ手拭は長寿法において一日も欠くべからざる者である。それでなければ

坊主の慣用する手段を試みるがよい。一 <sup>いっしょふじゅう</sup> 所 <sup>しゃもんうんすいあんぎや</sup> 不 <sup>い</sup> 住 <sup>い</sup> の <sup>い</sup> 沙 <sup>い</sup> 門 <sup>い</sup> 雲 <sup>い</sup> 水 <sup>い</sup> 行 <sup>い</sup> 脚

の <sup>のうそう</sup> 衲 <sup>やど</sup> 僧は必ず樹下石上を宿とすとある。樹下石上とは難行苦行のためではない。全

くのぼせを下げるために <sup>さ</sup> 六 <sup>ろくそ</sup> 祖 <sup>つ</sup> が米を舂きながら考え出した秘法である。試みに石の上に坐ってご覧、尻が冷えるのは当たり前だろう。尻が冷える、のぼせが下がる、これまた自然

の順序にして <sup>ごう</sup> 毫 <sup>さしはさ</sup> も疑を <sup>挟</sup> むべき余地はない。かようにいろいろな方法を用いての

ぼせを下げる工夫は <sup>だいぶ</sup> 大 <sup>だいぶ</sup> 分 <sup>だいぶ</sup> 發明されたが、まだのぼせを引き起す良方が案出されないのは残念である。一概に考えるとのぼせは損あって益なき現象であるが、そうばかり速断してならん場合がある。職業によると逆上はよほど大切な者で、逆上せんと何にも出来ない事

がある。その <sup>うち</sup> 中 <sup>うち</sup> でもっとも逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上が必要なる事は汽船に石炭が欠くべからざるような者で、この供給が一日でも途切れると彼れ等は手を

こまぬ <sup>こまぬ</sup> 拱 <sup>こまぬ</sup> いて飯を食うよりほかに何等の能もない凡人になってしまう。もっとも逆上は気違

い <sup>いみょう</sup> 名 <sup>いみょう</sup> で、気違にならないと <sup>かぎょう</sup> 家 <sup>かぎょう</sup> 業 <sup>かぎょう</sup> が立ち行かんとあつては <sup>せけんてい</sup> 世 <sup>せけんてい</sup> 間 <sup>せけんてい</sup> 体 <sup>せけんてい</sup> が悪いから、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をもってしない。申し合せてインスピレーショ

ン、インスピレーションとさも <sup>もったい</sup> 勿 <sup>とな</sup> 体 <sup>とな</sup> そうに <sup>とな</sup> 称 <sup>とな</sup> えている。これは彼等が世間を

まんちやく

瞞 着 するために製造した名でその実は正に逆上である。プレートーは彼等の肩を持ってこの種の逆上を神聖なる狂気と号したが、いくら神聖でも狂気では人が相手にしない。やはりインスピレーションと云う新発明の売薬のような名を付けておく方が彼等のために

かまぼこ やまいも かのん  
よかろうと思う。しかし 蒲 鉾 の種が 山 芋 であるごとく、 観 音 の像が一寸八

くちき かもなんばん ぎゅうなべ  
分の 朽 木 であるごとく、 鴨 南 蛮 の材料が鳥であるごとく、下宿屋の 牛 鍋  
が馬肉であるごとくインスピレーションも実は逆上である。逆上であって見れば臨時の気  
違である。巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時気違であるからだ。ところがこの臨時の気

いっしょうがい と  
違を製造する事が困難なのである。一 生 涯 の狂人はかえって出来安いが、筆を執

あいだ こうしゃ  
って紙に向う 間 だけ気違にするのは、いかに 巧 者 な神様でもよほど骨が折れる

こしら  
と見えて、なかなか 拵 えて見せない。神が作ってくれん以上は自力で拵えなければな

こんにち おおい  
らん。そこで昔から 今 日 まで逆上術もまた逆上とりのけ術と同じく 大 に学者の  
頭脳を悩ました。ある人はインスピレーションを得るために毎日渋柿を十二個ずつ食った。  
これは渋柿を食べば便秘する、便秘すれば逆上は必ず起るといふ理論から来たものだ。ま

てっぽうぶろ  
たある人はかん徳利を持って 鉄 砲 風 呂 へ飛び込んだ。湯の中で酒を飲んだら逆上する

きま  
に 極 っていると考えたのである。その人の説によるとこれで成功しなければ

ぶどうしゅ はい ぺん  
葡 萄 酒 の湯をわかして這入れれば一 返 で功能があると信じ切っている。しかし金が  
ないのでついには実行する事が出来なくて死んでしまったのは気の毒である。最後に古人の  
真似をしたらインスピレーションが起るだろうと思いついた者がある。これはある人の態  
度動作を真似ると心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔っぱら

くだ ま ま  
いのように 管 を捲いていると、いつの間にか酒飲みのような心持になる、坐禅をして線  
香一本の間我慢しているとどことなく坊主らしい気分になれる。だから昔からインスピレ

しよさ  
ーションを受けた有名の大家の 所 作 を真似れば必ず逆上するに相違ない。聞くとおろに

ヨット ねころ  
よればユーゴーは快走船の上へ 寝 転 んで文章の趣向を考えたそうだから、船へ乗って青

空を見つめていれば必ず逆上 <sup>うけあい</sup> 受合 <sup>はらばい</sup> である。スチーヴンソンは腹這に寝て小説を

書いたそうだから、打つ伏しになって筆を持てばきつと血が逆かさに <sup>うぶ</sup> 上 <sup>さ</sup> ってくる。かよ

うにいろいろな人がいろいろの事を考え出したが、まだ誰も成功しない。まず <sup>こんにち</sup> 今日 <sup>の</sup> ところでは人為的逆上は不可能の事となっている。残念だが致し方がない。早晚随意にイ

ンスピレーションを起し得る時機の到来するは <sup>うたがい</sup> 疑 <sup>もない</sup> 事 <sup>で</sup>、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を

逸するのは古来から歴史家の常に <sup>おちい</sup> 陥 <sup>へいとう</sup> る弊竇 <sup>である</sup>。主人の逆上も小事件に逢う

度に一層の <sup>げきじん</sup> 劇甚 <sup>を加えて</sup>、ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかにか逆上しているか分りにくい。分りにくい主人の逆上は空名に帰して、世間からはよもやそれほどでもなかろうと見くびられるかも知れ

ない。せつかく逆上しても人から <sup>あっぱれ</sup> 天晴 <sup>うた</sup> な逆上と <sup>謡</sup> われなくては張り合がないだろう。

これから述べる事件は大小に <sup>かかわ</sup> 係 <sup>らず</sup> 主人に取って名誉な者ではない。事件その物が不

名誉であるならば、責めて逆上なりとも、<sup>せ</sup> 正 <sup>しょうめい</sup> 銘 <sup>の</sup> 逆上であって、決して人に劣るものでないと云う事を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこれと云って誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折って書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至って一種のダムダム弾を發明して、<sup>じっぶん</sup> 十 <sup>分の</sup> 休暇、も

しくは放課後に至って <sup>さかん</sup> 熾 <sup>あきち</sup> に北側の空地 <sup>に向って</sup> 砲火を浴びせかける。このダムダム

弾は通称をボールと <sup>とな</sup> 称 <sup>すりこぎ</sup> えて、播粉木の大きな奴をもって任意これを敵中に発射する仕

掛である。いくらダムダムだって落雲館の運動場から発射するのだから、書齋に立て <sup>こも</sup> 籠 <sup>っ</sup>

てる主人に <sup>あた</sup> 中 <sup>きづかい</sup> る気遣 <sup>はない</sup>。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるのを自覚せん事は



ないのだけれど、そこが軍略である。旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行って偉大な功を奏したと云う話であれば、空地へころがり落つるボールといえども相当の効果を収め得

ぬ事はない。いわんや一発を送る <sup>たび</sup> 度に総軍力を合せてわーと <sup>いかくせい</sup> 威嚇性

だいおんじょう <sup>いだ</sup> 大音聲を出すにおいてをやである。主人は恐縮の結果として手足に通う血管

が収縮せざるを得ない。煩悶の <sup>はんもん きょく</sup> 極 <sup>まごつ</sup> そこいらを迷 <sup>さか</sup> 付いている血が逆さに

のぼ <sup>はかりごと</sup> 上るはずである。敵の計 <sup>むか</sup> はなかなか巧妙と云うてよろしい。昔し <sup>ギリシャ</sup> 希臘

にイスキラスと云う作家があったそうだ。この男は学者作家に共通なる頭を有していたと

云う。吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは <sup>はげ</sup> 禿と云う意味である。なぜ頭が禿げると云えば頭の栄養不足で毛が生長するほど活気がないからに相違ない。学者作家はもつ

とも多く頭を使うものであって大概是貧乏に <sup>きま</sup> 極っている。だから学者作家の頭はみんな

栄養不足でみんな禿げている。さてイスキラスも作家であるから自然の <sup>いきおい</sup> 勢 <sup>はげ</sup> 禿げなく

てはならん。彼はつるつる然たる <sup>きんかんあたま</sup> 金柑頭を有しておった。ところがある日の事、

先生例の頭——頭に <sup>よそゆき</sup> 外行も <sup>ふだんぎ</sup> 普段着もないから例の頭に極ってるが——その例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいていた。これが間違いのもとである。禿げ頭を日にあてて遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、

光かる頭にも何かあたらなくてはならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の <sup>わし</sup> 鷲が舞っ

ていたが、見るとどこかで生 <sup>いけど</sup> 捕った <sup>びき</sup> 一疋の <sup>つか</sup> 亀を爪の先に攫んだままである。亀、

スポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅い <sup>こうら</sup> 甲羅をつけている。いくら美味で

も甲羅つきではどうする事も出来ん。海老の <sup>えび</sup> 鬼殻 <sup>おにがら</sup> 焼 <sup>やき</sup> はあるが亀の子の甲羅煮は今

でさえないくらいだから、当時は無論なかったに極っている。さすがの <sup>わし</sup> 鷲も少々持て余

おりから <sup>はる</sup> 折柄、遙かの下界にぴかと光った者がある。その時鷲はしめたと思った。あの

光ったものの上へ亀の子を落したなら、甲羅は <sup>まさ</sup>正しく <sup>き</sup>砕けるに極わまった。砕けたあと

から舞い下りて中味を <sup>なかみ</sup>頂戴 <sup>ちょうだい</sup>すれば訳はない。そうだと <sup>ねらい</sup>覗き <sup>ねらい</sup>を定めて、

かの亀の子を高い所から挨拶も無く頭の上へ落した。 <sup>あいにく</sup>生憎 <sup>あいにく</sup>作家の頭の方が亀の甲より  
軟らかであったものだから、禿はめっちゃめっちゃに砕けて有名なるイスキラスはここに

<sup>むざん</sup>無惨 <sup>むざん</sup>の最後を遂げた。それはそうと、 <sup>げ</sup>解しかねるのは驚の了見である。例の頭を、作家  
の頭と知って落したのか、または禿岩と間違えて落したのか、解決しよう次第で、落雲  
館の敵とこの驚とを比較する事も出来るし、また出来なくもなる。主人の頭はイスキラス

<sup>おれきれき</sup>おれきれき  
のそれのごとく、また <sup>おれきれき</sup>御歴々の学者のごとく <sup>おれきれき</sup>ぴかぴか光ってはおらん。しかし六畳敷

にせよ <sup>ひか</sup>いやすくも書齋と号する一室を <sup>ひか</sup>控えて、居眠りをしながらも、 <sup>ひか</sup>むずかしい書物の

上へ顔を <sup>かざ</sup>翳す以上は、学者作家の同類と見倣さなければならん。そうすると主人の頭の  
禿げておらんのは、まだ禿げるべき資格がないからで、その内に禿げるだろうとは

<sup>きんきん</sup>きんきん  
近々この頭の上に落ちかかるべき運命であろう。して見れば落雲館の生徒がこの頭を

目懸けて例の <sup>がん</sup>ダムダム丸 <sup>じぎ</sup>を集注するのは策のもっとも <sup>じぎ</sup>時宜に適したものと云わねばな

らん。もし敵がこの行動を二週間継続するならば、主人の頭は <sup>いふ</sup>畏怖と <sup>はんもん</sup>煩悶 <sup>いふ</sup>のため必ず

栄養の不足を訴えて、 <sup>きんかん</sup>金柑 <sup>やかん</sup>とも <sup>どうこ</sup>薬缶 <sup>どうこ</sup>とも <sup>どうこ</sup>銅壺 <sup>どうこ</sup>とも変化するだろう。なお二週間

の砲撃を <sup>くら</sup>食えば <sup>つぶ</sup>金柑は <sup>も</sup>潰れるに相違ない。薬缶は洩るに相違ない。銅壺なら <sup>も</sup>ひびが入

るに <sup>みやす</sup>きまっている。この <sup>みやす</sup>賭易き結果を予想せんで、あくまでも敵と戦闘を継続しようと  
苦心するのは、ただ本人たる苦沙弥先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく <sup>えんがわ</sup>椽側 <sup>ひるね</sup>へ出て <sup>ひるね</sup>午睡 <sup>ひるね</sup>をして虎になった夢を見てい

た。主人に <sup>けいにく</sup>鶏肉 <sup>けいにく</sup>を持って来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持って出る。迷

亭が来たから、迷亭に 雁 が食いたい、雁 鍋 へ行って 詔 らえて来いと云うと、蕪

こう もの しおせんべい  
の 香 の 物 と、塩 煎 餅 といっしょに召し上がりますと雁の味が致しますと例の

ちゃら ぼこ うな おどか  
ごとく茶 羅 ッ 鉢 を云うから、大きな口をあいて、うーと 唸 って 嚇 してやった

あお やました はから  
ら、迷亭は 蒼 くなって 山 下 の雁鍋は廃業致しましたがいかが取り 計 しましよ  
うかと云った。それなら牛肉で勘弁するから早く西川へ行ってロースを一斤取って来い、

はしよ か  
早くせんと貴様から食い殺すぞと云ったら、迷亭は尻を 端 折って馳け出した。吾輩は急  
にからだが大きくなったので、椽側一杯に寝そべて、迷亭の帰るのを待ち受けていると、

うちじゅう ぎゅう ま  
たちまち 家 中 に響く大きな声がしてせっかくの 牛 も食わぬ間に夢がさめて吾  
に帰った。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏していたと思いのほかの主人が、いきな

こうか け  
り 後 架 から飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴たから、おやと思ううち、  
たちまち庭下駄をつっかけて木戸から廻って、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急

きま  
に猫と収縮したのだから何となく 極 りが悪くもあり、おかしくもあつたが、主人のこの  
権幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまった。同時に主人がいよいよ出

あと  
馬して敵と交戦するな面白いわいと、痛いのを我慢して、 後 を慕って裏口へ出た。同時

くつきょう  
に主人がぬすつとうと怒鳴る声が聞える、見ると制帽をつけた十八九になる 倔 強 な

か  
奴が一人、四ツ目垣を向うへ乗り越えつつある。やあ遅かったと思ううち、彼の制帽は馳

いだてん  
け足の姿勢をとって根拠地の方へ 韋 駄 天のごとく逃げて行く。主人はぬすつとうが

おおい  
大 に成功したので、またもぬすつとうと高く叫びながら追いかけて行く。しかしかの

みづか  
敵に追いつくためには主人の方で垣を越さなければならん。深入りをすれば主人 自 ら

ぜん いきおい  
が泥棒になるはずである。前 申す通り主人は立派なる逆上家である。こう 勢 に乗

じてぬすつとうを追い懸ける以上は、夫<sup>ふうし</sup>子自身がぬすつとうに成っても追い懸けるつも

りと見えて、引き返す気<sup>けしき</sup>色もなく垣の根元まで進んだ。今一步で彼はぬすつとうの領分

はい 入らなければならんと云う間<sup>まぎわ</sup>際に、敵軍の中から、薄い髻<sup>ひげ</sup>を勢なく生やした将

官がのこのこと出馬して来た。両<sup>ふたり</sup>人は垣を境に何か談判している。聞いて見るとこんなつまらない議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他<sup>ひと</sup>の邸内へ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ断って、取りに来ないのですか」

よ  
「これから善く注意します」

「そんなら、よろしい」

りゅうとうことう

竜騰虎鬪の壮観があるだろうと予期した交渉はかくのごとく散文的なる談判

をもつて無事に迅速に結了した。主人の壮<sup>さか</sup>んなるはただ意気込みだけである。いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あたかも吾輩が虎の夢から急に猫に返ったような観が

ある。吾輩の小事件と云うのは即<sup>すなわ</sup>ちこれである。小事件を記述したあとには、順序として是非大事件を話さなければならん。

主人は座敷の障子を開いて腹<sup>はらばい</sup>這になって、何か思案している。恐らく敵に対して

ぼうぎょさく

防禦策を講じているのだろう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外静かである。ただ校舎の一室で、倫理の講義をしているのが手に取るように聞える。朗々たる音声でな

かなかうまく述べ立てているのを聴くと、全く昨<sup>きのう</sup>日敵中から出馬して談判の衝<sup>しょう</sup>に当った將軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ行って見ると、仏<sup>フランス</sup>蘭<sup>ドイツ</sup>西でも独逸で

イギリス  
も英吉利でも、どこへ行っても、この公德の行われておらん国はない。またどんな下等

な者でもこの公德を重んぜぬ者はない。悲しいかな、我が日本に在っては、未だこの点に

おいて外国と拮抗する事が出来ないのである。で公德と申すと何か新しく外国から輸入

して来たように考える諸君もあるかも知れんが、そう思うのは大なる誤りで、昔人

ふうし みちいつもっ これ つらぬ ちゅうじょ い  
も夫子の道一以て之を貫く、忠恕のみ矣と云われた事がある。

じょ しゅつしよ  
この恕と申すのが取りも直さず公德の出所である。私も人間であるから時には  
大きな声をして歌などうたって見たくなる事がある。しかし私が勉強している時に隣室の  
ものなどが放歌するのを聴くと、どうしても書物の読めぬのが私の性分である。であるか

どうしせん こうせい せいせい  
らして自分が唐詩選でも高声に吟じたら気分が晴々してよかろうと思う  
時ですら、もし自分のように迷惑がる人が隣家に住んでおって、知らず知らずその人の邪

魔をするような事があつてはすまんと思つて、そう云う時はいつでも控えるのである。  
こう云う訳だから諸君もなるべく公德を守つて、いやしくも人の妨害になると思つ事は決  
してやつてはならぬのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが、ここに至つてにやりと笑つた。ちよつ

とこのにやりの意味を説明する必要がある。皮肉家がこれをよんだらこのにやりの裏には  
冷評的分子が交つていると思うだろう。しかし主人は決して、そんな人の悪い男ではな

ちえ  
い。悪いと云うよりそんなに智慧の発達した男ではない。主人はなぜ笑つたかと云うと全  
く嬉しくつて笑つたのである。倫理の教師たる者がかように痛切なる訓戒を与えるからは

のち まぬ  
この後は永久ダムダム弾の乱射を免がれるに相違ない。当分のうち頭も禿げずにすむ、

ぜんじ ぬ てぬぐい  
逆上は一時に直らんでも時機さえくれば漸次回復するだろう、濡れ手拭を頂いて、

こたつ やど  
炬燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大丈夫だろうと鑑定したから、に

やにやと笑つたのである。借金は必ず返す者と二十世紀の今日にもやはり正直に考え

るほどの主人がこの講話を真面目に聞くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとやんだ。他の教室の課業も皆一度に終わった。

すると今まで室内に密封された八百の同勢は <sup>とき</sup> 鬨 の声をあげて、建物を飛び出した。その

いきおい <sup>はち たた</sup> 勢 と云うものは、一尺ほどもな 蜂 の巣を 敲 き落したごとくである。ぶんぶん、

わんわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやしくも穴の <sup>あ</sup> 開いている所なら何の容赦もなく我勝ちに飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立ても何もあるものかと云うのは間違っ

ている。普通の人は戦争とさえ云えば <sup>しゃか ほうてん りよじゅん</sup> 沙河とか 奉天とかまた 旅順とかそのほかに戦争はないものごとくに考えている。少し詩がかつた野蛮人になると、アキリス

がヘクトーの死骸を引きずって、トロイの城壁を <sup>さんそう えん</sup> 三 匝 したとか、燕 びと張飛が

ちょうはんきょう <sup>じょうはち だぼう よこた そうそう なら</sup> 長 坂 橋 に 丈 八 の蛇 矛 を 横 えて、曹 操 の軍百万人を 睨

<sup>おおげさ</sup> め返したとか大 袈 裟 な事ばかり連想する。連想は当人の随意だがそれ以外の戦争はない

ものと心得るのは不都合だ。 <sup>たいこもうまい あ</sup> 太 古 蒙 昧 の時代に在ってこそ、そんな馬鹿気た戦争

も行われたかも知れん、しかし太平の <sup>こんにち</sup> 今 日 、大日本国帝都の中心においてかくのごとき野蛮的行動はあり得べからざる奇蹟に属している。いかに騒動が持ち上がっても交番の

焼打以上に出る <sup>きづかい がりょうくつ り</sup> 気 遣 はない。して見ると 臥 竜 窟 主人の苦沙弥先生と落雲館裏八百の健児との戦争は、まず東京市あって以来の大戦争の一として数えてもしかるべきも

<sup>さし たたかい</sup> のだ。左氏が の 戦 を記するに当ってもまず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則になっている。だによって吾輩が蜂の陣立

<sup>しさい</sup> てを話すのも 仔 細 なかろう。それでまず蜂の陣立ていかんと見てみると、四つ目垣の外

<sup>かた</sup> 側に縦列を 形 ちづくった一隊がある。これは主人を戦闘線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな」「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわん」「わんわん」「わんわんわ

んわん」これから先は縦隊総がかりとなつて 唸 喊 の声を揚げる。縦隊を少し右へ離れ

て運動場の方面には砲隊が形勝の地を占めて陣地を布いている。 臥 竜 窟 に面して

一人の将官が 播 粉 木 の大きな奴を持って 控 える。これと相對して五六間の間隔をとつてまた一人立つ、播粉木のあとにまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突っ立っている。かくのごとく一直線にならんで向合っているのが砲手である。ある人の説によるとこれはベースボールの練習であつて、決して戦闘準備ではないそうだ。吾輩はベースボールの

何物たるを解せぬ もんもうかん 文 盲 漢 である。しかし聞くところによればこれは米国から輸入さ

れた遊戯で、 今 日 中学程度以上の学校に行わるる運動のうちでもっとも流行するもの

だそう。米国は 突 飛 な事ばかり考え出す国柄であるから、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戯を日本人に教うべくだけそれだけ親切であつたかも知れない。また米国人はこれをもって真に一種の運動遊戯と心得ているのだらう。しかし純粹の遊戯でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼をもって觀察したところでは、彼等はこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企

てつつあるとしか思われぬ。物は云いようでどうでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽を働らき、インスピレーションと号して逆上をうれしがる者がある以上はベースボールな

る遊戯の 下 に戦争をなさんとも限らない。或る人の説明は世間一般のベースボールの事であらう。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合に限らるるベースボール

すなわ 即 ち攻城的砲術である。これからダムダム弾を發射する方法を紹介する。直線に布か

れたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の手に握つて播粉木の所有者に 抛 りつける。ダムダム弾は何で製造したか局外者には分らない。堅い丸い石の団子のようなものを

ごていねい 御 鄭 寧 に皮でくるんで縫い合せたものである。 前 申す通りこの弾丸が砲手の一人の手中を離れて、風を切って飛んで行くと、向うに立つた一人が例の播粉木をやつと振り

上げて、これを たた 敲 き返す。たまには敲き 損 なつた弾丸が流れてしまう事もあるが、大

概はポカンと大きな音を立てて弾ね返る。その勢は非常に猛烈なものである。神経性胃弱

なる主人の頭を潰すくらいは容易に出来る。砲手はこれだけで事足りるのだが、その周囲

附近には弥次馬兼援兵が雲霞のごとく付き添うている。ポカーンと播粉木が団子に

あた中るや否やわー、ぱちぱちぱちと、わめく、手を拍つ、やれやれと云う。あた中 ったろう

と云う。これでも利かねえかと云う。恐れ入らねえかと云う。降参かと云う。これだけな

らまだしもであるが、敵き返された弾丸は三度に一度必ず臥竜窟邸内へころがり込む。これがころがり込まなければ攻撃の目的は達せられぬのである。ダムダム弾は近来諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である。ポンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費す

る訳には行かん。そこで彼等はたま拾と称する一部隊を設けて落ちだま落弾を拾ってくる。落ち場所がよければ拾うのに骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそう

たやす容易くは戻って来ない。だから平生ならなるべく労力を避けるため、拾い易い所へ打ち落すはずであるが、この際は反対に出る。目的が遊戯にあるのではない、戦争に存する

のだから、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這入って拾わなければならぬ。邸内に這入るもっとも簡便な方法は四つ目垣を越えるにある。

四つ目垣のうちで騒動すれば主人が怒り出さなければならぬ。しからずんば兜を脱いで降参しなければならぬ。苦心のあまり頭がだんだん禿げて来なければならぬ。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、しょうじゅんあやま照準誤たず、四つ目垣を通り越して

きり桐の下葉を振り落して、第二の城壁即ち竹垣に命中した。随分大きな音である。ニ

ュートンの運動律第一に曰くもし他の力を加うるにあらざれば、一度び動き出したる物体は均一の速度をもって直線に動くものとす。もしこの律のみによって物体の運動が支

配せらるるならば主人の頭はこの時にイスキラスと運命を同じくしたであろう。さいわい幸



にしてニュートンは第一則を定むると同時に第二則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の変化は、加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く直線の方において起るものとす。これは何の事だか少しくわかり

兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣を突き通して、<sup>しょうじ</sup>障子を裂き破って主人の頭を破壊し

なかつたところをもって見ると、ニュートンの<sup>おかげ</sup>御蔭に相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に乗り込んで来たものと覚しく、「ここか」「もっと左の方か」などと棒で

<sup>ささ</sup>もって笹の葉を敲き廻る音がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダム弾を

拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こっそり這入って、こっそり拾っては<sup>かんじん</sup>肝心の目的が達せられん。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人にからかうのはダムダム弾

以上に大事である。この時のごときは遠くから弾の所在地は判然している。竹垣に<sup>あた</sup>中つた音も知っている。中つた場所も分っている、しかしてその落ちた地面も心得ている。だからおとなしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾える。ライプニッツの定義によると空間は出来得べき同在現象の秩序である。いろはにはほへとはいつでも同じ順にあらわれて

くる。柳の下には必ず<sup>どじょう</sup>鱈が<sup>こうもり</sup>いる。蝙蝠に夕月はつきものである。垣根にボー

ルは不似合かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内に<sup>ほう</sup>抛り込む者の眼に映ずる空

間はたしかにこの排列に慣れている。一<sup>な</sup>眼<sup>ひとめ</sup>見ればすぐ分る訳だ。それをかくのごとく騒

ぎ立てるのは<sup>ひっきょう</sup>必<sup>いど</sup>竟<sup>いど</sup>ずるに主人に戦争を挑む策略である。

こうなつてはいかに消極的な主人といえども応戦しなければならん。さつき座敷のうちから倫理の講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として

か<sup>ばくぜん</sup>馳<sup>いけど</sup>け出した。驀然として敵の一人を生捕った。主人にしては大出来である。大出

来には相違ないが、見ると十四五の小供である。<sup>ひげ</sup>髯の生えている主人の敵として少し不

似合だ。けれども主人はこれで沢山だと思ったのだろう。<sup>わ</sup>詫び入るのを無理に引っ張って

<sup>えんがわ</sup>椽側の前まで連れて来た。ここにちょっと敵の策略について<sup>いちげん</sup>一言する必要があ

きのう けんまく  
る、敵は主人が昨日の権幕を見てこの様子では今日も必ず自身で出馬するに相違

とおおぞう  
ないと察した。その時万一逃げ損じて大僧がつらまっては事面倒になる。ここは一年  
生か二年生くらいな小供を玉拾いにやって危険を避けるに越した事はない。よし主人が小

ぐずぐずりくつ こ  
供をつらまえて愚図愚図理窟を捏ね廻したって、落雲館の名誉には関係しない、こん

おとなげ ちじょく  
なものを大人気もなく相手にする主人の恥辱になるばかりだ。敵の考はこうであ

しごく  
った。これが普通の人間の考で至極もつともなところである。ただ敵は相手が普通の人  
間でないと云う事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかりである。主人にこれくらいの常  
識があれば昨日だって飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に  
釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を与える者である。女だの、小供だの、車引き

みさか  
だの、馬子だのと、そんな見境いのあるうちは、まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主

いけど  
人のごとく相手にならぬ中学一年生を生捕って戦争の人質とするほどの了見でなくては

かわい  
逆上家の仲間入りは出来ないのである。可哀 そうなのは捕虜である。単に上級生の命令

ぞうひょう  
によって玉拾いなる雑兵の役を勤めたるどころ、運わるく非常識の敵将、逆上の天

ま す  
才に追い詰められて、垣越える間もあらばこそ、庭前に引き据えられた。こうなると敵軍  
は安閑と味方の恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗り越して木戸口か

うわぎ  
ら庭中に乱れ入る。その数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣

き めん  
もちょっ着もつけておらん。白シャツの腕をまくって、腕組をしたのがある。綿ネルの

ほもめん  
洗いざらしを申し訳に背中だけへ乗せているのがある。そうかと思うと白の帆木綿に黒

ふち しゃれもの  
い縁をとって胸の真中に花文字を、同じ色に縫いつけた洒落者もある。いずれも

たんば  
一騎当千の猛将と見えて、丹波の国は笹山から昨夜着し立てでござると云わぬばかりに、

たくま  
黒く 逞 しく筋肉が発達している。中学などへ入れて学問をさせるのは惜しいものだ。

りょうし  
漁 師 か船頭にしたら定めし国家のためになるだろうと思われるくらいである。彼等は

ももひき  
申し合せたごとく、素足に 股 引 を高くまくって、近火の手伝にでも行きそうな

ふうてい もくねん いちごん  
風 体 に見える。彼等は主人の前にならんだぎり 黙 然 として 一 言 も発しない。

ひら にら  
主人も口を 開 かない。しばらくの間双方共 睨 めくらをしているなかにちょっと殺気が  
ある。

だいきえん か つぶ  
「貴様等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大 気 である。奥歯で嚙み 潰 した

かんしゃくだま いか  
癩 癩 玉 が炎となって鼻の穴から抜けるので、小鼻が、いちじるしく 怒 って見

えちごじし おこ かつこう かた  
える。越 後 獅 子の鼻は人間が 怒 った時の 恰 好 を 形 どって作ったものであろう。

それではなくてはあんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」

きしょう かぶ  
「しかしこの通りちゃんと学校の 徽 章 のついている帽子を 被 っています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

け  
「怪しからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

ちんにゅう たやす  
「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に 闖 入 するのを、そう 容 易 く許さ  
れると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きっとそうか」

「ええ」

かえり  
主人は奥の方を顧みながら、おいこらこらと云う。

おさん ふすま  
埼玉生れの御三が襖をあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行って誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

おもむき  
下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さっきからの事件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りもせずになにや笑っ

おおい ふる  
ている。主人はこれでも大戦争をしているつもりである。逆上の敏腕を大に振っているつもりである。しかるところ自分の召し使たる当然こっちの肩を持つべきものが、真面目な態度をもって事に臨まんのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至って下女もやむを得んと心得たものか、「へえ」と云って出て行った。使の意はやはり飲み込めないのである。小使でも引張って来はせんかと心配していると、あに計

つ  
らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣蔵のような古風な言葉を使ったが「本

おんこう  
当に御校の生徒でしょうか」と少々皮肉に語尾を切った。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前にならんでいる勇士を一通り見廻わし

ひとみ しも  
た上、ものごとく瞳を主人の方にかえして、下のごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事のないように始終訓戒を加えておきますが……どうも困ったもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか」

いちごん  
さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向っては一言もないと見えて何とも云う

ものはない。おとなしく庭の隅にかたまって羊の群むれが雪に逢ったように控ひかえている。

たま はい  
「丸たまが這入るのも仕方がないでしょう。こうして学校の隣りに住んでいる以上は、時々

はボールも飛んで来ましょう。しかし……あまり乱暴ですからな。仮令垣たといを乗り越えるにしても知れないないように、そっと拾って行くなら、まだ勘弁のしようもありますが……」

たにんず  
「ごもつともで、よく注意は致しますが何分多人数たにんずの事で……よくこれから注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻って、御断りをして取らなければいかん。い  
いか。——広い学校の事ですからどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運動は教育  
上必要なものでありますから、どうもこれを禁ずる訳には参りかねるので。これを許すと  
つい御迷惑になるような事が出来ませんが、これは是非御容赦を願いたいと思います。その

こうご  
代り向後こうごはきっと表門から廻って御断りを致した上で取らせますから」

たま さしつか  
「いや、そう事が分かればよろしいです。球たまはいくら御投げになっても差支さしつかえはな  
いです。表からきてちょっと断わって下されば構いません。ではこの生徒はあなたに御引  
き渡し申しますからお連れ帰りを願います。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です」と

りゅうとうだび  
主人は例によって例のごとく竜頭蛇尾りゅうとうだびの挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を  
連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれで一とまず落着を告げ  
た。何のそれが大事件かと笑うなら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまでだ。吾

しる  
輩は主人の大事件を写したので、そんな人の大事件を記しるしたのではない。尻が切れて

きょうど ばっせい  
強弩きょうどの末勢ばっせいだなどと悪口するものがあるなら、これが主人の特色である事を記  
憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰い  
たい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。

いま ちき  
だから大町桂月は主人をつらまえて未だ稚氣いまを免がれずと云うている。

おわ  
吾輩はすでに小事件を叙し了おわり、今また大事件を述べ了ったから、これより大事件の

あと よらん えが  
後に起る余瀾あとを描よらんき出だして、全篇の結びを付けるつもりである。すべて吾輩の

でまか  
かく事は、口から出 任 せのいい加減と思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率

うち  
な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、その一字一句が

そうそう さだんせんわ  
層々連続すると首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうっかりと読ん

こつぜんひょうへん  
でいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだから、決して寝ころ  
んだり、足を出して五行ごとに一度に読むのだなどと云う無礼を演じてはいけない。

りゅうそうげん かんたいし しょうび みず  
柳宗元は韓退之の文を読むごとに薔薇の水で手を清めたと云う

じばら  
くらいだから、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買つて来て、友人の御余りを借

みずか  
りて間に合わすと云う不始末だけではない事に致したい。これから述べるのは、吾輩自ら

きま  
余瀾と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに極っている、読まんでもよかろう  
などと思うと飛んだ後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、吾輩はちょっと散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向う横

とう  
町へ曲がろうと云う角で金田の旦那と鈴木藤さんがしきりに立ちながら話をしている。

うち ふたり  
金田君は車で自宅へ帰るところ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途中で両人

めった  
がばったりと出逢つたのである。近来は金田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多に

おなつ  
あちらの方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて見ると、何となく御懐かしい。

ひさびさ よそ  
鈴木にも久々だから余所ながら拝顔の榮を得ておこ。こう決心してのそのそ御両君

ちよりつ そば い  
の佇立しておらるる傍近く歩み寄つて見ると、自然両君の談話が耳に入る。これ  
は吾輩の罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金田君は探偵さえ付けて主人の

うか  
動静を窺がうくらいの程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の談話を拝聴し

おこ きづかい  
たつて怒らるる氣遣はあるまい。もし怒られたら君は公平と云う意味を御承知ない

のである。とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちょうどよい所で御目にかかりました」と藤<sup>とう</sup>さんは  
ていねい  
鄭<sup>ていねい</sup> 寧<sup>ていねい</sup> に頭をびよこつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちょっと逢いたいと思っていたがね。それはよかった」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。いつが<sup>よろ</sup>宜<sup>よろ</sup> しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。——それじゃせつかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来<sup>むなくそ</sup>胸<sup>むなくそ</sup> 糞<sup>むなくそ</sup> がわるくってね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少しは自分の社会上の地位を考えている  
といいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云う

から、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思ってね。こないだから大<sup>だいぶ</sup> 分<sup>だいぶ</sup> 弱<sup>だいぶ</sup> らして

いるんだが、やっぱり頑<sup>がんば</sup> 張<sup>がんば</sup> っているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う観念の<sup>とぼ</sup> 乏<sup>とぼ</sup> しい奴ですから無<sup>むやみ</sup> 暗<sup>むやみ</sup> に瘦我慢を張るんでしょう。昔から

ああ云う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんですから度<sup>ど</sup> 難<sup>がた</sup> いで  
す」

「あはははほんとに度<sup>ど</sup> 難<sup>がた</sup> い。いろいろ手を易え品を易えてやって見るんだがね。とう  
とうしまいに学校の生徒にやらした」

ききめ  
「そいつは妙案ですな。利 目 がございましたか」

だいぶ きま  
「これにゃあ、奴も大 分 困ったようだ。もう遠からず落城するに 極 っている」

たぜい ぶぜい  
「そりゃ結構です。いくら威張っても多 勢 に 無 勢 ですからな」

だいぶ  
「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大 分 弱ったようだが、まあどんな様子か君に行って見て来てもらおうと云うのさ」

ようす  
「はあ、そうですか。なに訳はありません。すぐ行って見ましょう。容 子 は帰りがけに

がんこ いきしょうちん  
御報知を致す事にして。面白いでしょう、あの頑 固 なのが意 気 銷 沈 していると

みもの  
ころは、きっと見 物 ですよ」

「ああ、それじゃ帰りに御寄り、待っているから」

ごめんこうむ  
「それでは 御 免 蒙 ります」

こんたん もえがら  
おや今度もまた 魂 胆 だ、なるほど実業家の勢力はえらいものだ、石炭の 燃 殻 の

くもん はえすべ  
ような主人を逆上させるのも、苦 悶 の結果主人の頭が 蠅 滑 りの難所となるのも、

おちい  
その頭がイスキラスと同様の運命に 陥 るのも皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻

くりき  
功 力 を心得て、この金の威光を自由に発揮するものは実業家諸君をおいてほかに一人も

きゅうそだい ごりやく  
わからずやの 窮 措 大 の家に養なわれて実業家の 御 利 益 を知らなかったのは、我

めいがんふれい  
ながら不覚である。それにしても 冥 頑 不 霊 の主人も今度は少し悟らばなるまい。

あぶ  
これでも冥頑不霊で押し通す見だと 危 ない。主人のもっとも貴重する命があぶない。

おのず  
彼は鈴木君に逢ってどんな挨拶をするのか知らん。その模様で彼の悟り具合も 自 から



ぶんみょう  
分 明 になる。愚図愚図してはおられん、猫だって主人の事だから 大 おおい に心配になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、

さわ  
しきりに当り 障 りのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

あお  
「でも 蒼 いぜ、用心せんといかんよ。時侯がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありゃしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ」

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事があるぜ」

じょうだん かど きた  
「 冗 談 云っちゃいけない。笑う 門 には福 来 るさ」

むか ギリシャ  
「昔し 希 臘 にクリシッパスと云う哲学者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりゃ昔の事だから……」

ろば どんぶり いちじゆく  
「昔しだって今だって変りがあるものか。驢馬が銀の 井 から無 花 果 を食うの

むやみ  
を見て、おかしくってたまらなくて無 暗 に笑ったんだ。ところがどうしても笑いがとまらない。とうとう笑い死にに死んだんだあね」

と ど てきぎ  
「はははしかしそんなに留め度もなく笑わなくてもいいさ。少し笑う—— 適 宜 に、  
——そうするといい心持ちだ」

きやくらい  
鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると、表の門ががらがらとあく、 客 来  
かと思うとそうでない。

はい  
「ちょっとボールが這入りましたから、取らして下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？ 裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のって。碌々<sup>ろくろく</sup> 勉強も出来やしない。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分<sup>だいぶ</sup> 怒ったね。何か癩<sup>しゃく</sup> に障る事でも有るのかい」

「あるの無いのって、朝から晩まで癩に障り続けだ」

「そんなに癩に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね、<sup>うっ</sup> 打ちちゃっておけばいいさ」

「君はよかろうが僕はよくない。昨日<sup>きのう</sup> は教師を呼びつけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また<sup>かどぐち</sup> 門口<sup>はい</sup> をあけて「ちょっとボールが這入りましたから取らして下さい」と云う声がある。

「いや大分<sup>だいぶ</sup> 来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そう一か、分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる源因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするったって、来るから仕方がないさ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固<sup>がんこ</sup> にしていないでもよかろう。人間は角<sup>かど</sup>

ころ<sup>ころ</sup> があると世の中を転がって行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはごろごろどこへでも

く  
苦なしに行けるが四角なものはこちらが骨が折れるばかりじゃない、転がるたびに角が  
すれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じゃなし、そう自分の思うように人はならな  
いさ。まあ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突きちゃ損だね。ただ神経ばかり

ほ  
痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向うは平気なものさ。坐って人を使いさ

たぜい ぶぜい かな  
えすればすむんだから。多勢に無勢 どうせ、叶わないのは知っているさ。頑固も

はん  
いいが、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障ったり、毎日の業務に 煩 を及ぼ

くたびれもう  
したり、とどのつまりが骨折り損の 草 臥 儲 けだからね」

「ご免なさい。今ちょっとボールが飛びましたから、裏口へ廻って、取ってもいいですか」  
「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

まっか  
「失敬な」と主人は 真 赤 になっている。

き  
鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思ったから、それじゃ失敬ちと来たまえと帰って  
行く。

あまき  
入れ代ってやって来たのが 甘 木 先生である。逆上家が自分で逆上家だと名乗る者は

むか さと とうげ  
昔 しかから例が少ない、これは少々変だなと 覚 った時は逆上の 峠 はもう越してい

きのう  
る。主人の逆上は 昨 日 の大事件の際に最高度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たる

かかわ  
に 係 らず、どうかこうか始末がついたのでその晩書齋でつくづく考えて見ると少し変

うたがい  
だと気が付いた。もっとも落雲館が変なのか、自分が変なのか 疑 を存する余地は充  
分あるが、何しろ変に違ない。いくら中学校の隣に居を構えたって、かくのごとく年が年

かんしゃく  
中 肝 癩 を起しつづけはちと変だと気が付いた。変であって見ればどうかしなければ

かんしゃく みなもと  
ならん。どうするったって仕方がない、やはり医者薬でも飲んで 肝 癩 の 源

わいろ いぶ さと  
に 賄 賂 でも使って慰撫するよりほかに道はない。こう 覚 ったから平生かかりつけの

甘木先生を迎えて診察を受けて見ようと云う量見を起したのである。賢か愚か、その辺は

別問題として、とにかく自分の逆上に気が付いただけは <sup>しゅしょう</sup> 殊 <sup>きどく</sup> 勝 の志、奇 特 の心得と云わなければならん。甘木先生は例のごとくにこにこと落ちつき払って、「どうです」

と云う。医者は大抵どうですと云うに極まってる。吾輩は「どうです」と云わない医者はどうも信用をおく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者きの薬は利くものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の <sup>ちょうじゃ</sup> 長 者 だから、別段激した様子もなく、

「利かん事もないです」と <sup>おだや</sup> 穏 かに答えた。

わたし  
「私 の胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事ですぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急には、<sup>なお</sup> 癒 りません、だんだん利きます。今でももとより <sup>だいぶ</sup> 大 分 よくなっています」

「そうですかな」

<sup>かんしゃく</sup>  
「やはり 肝 癩 が起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝癩を起します」

「運動でも、少しなさったらいいでしょう」

「運動すると、なお肝癩が起ります」

甘木先生もあきれ返ったものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだって催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来ると書いてあったのですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、<sup>わたし</sup>私などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやって見ましょうか。誰でも <sup>かか</sup>懸らなければならん <sup>りくつ</sup>理窟のものです。あな

たさえ <sup>よ</sup>善ければ懸けて見ましょう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。<sup>わたし</sup>私もとうから懸かって見たいと思ったんです。

しかし懸かりきりで眼が覚めないと困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましょう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術を懸けらるる事となった。吾輩は今までこんな事を見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。先生

はまず、主人の眼からかけ始めた。その方法を見ていると、<sup>りょうがん</sup>両眼の上 <sup>うわまぶた</sup>瞼を

上から下へと <sup>な</sup>撫でて、主人がすでに眼を <sup>ねむ</sup>眠っているにも <sup>かかわ</sup>係らず、しきりに同じ方向

へくせを付けたがっている。しばらくすると先生は主人に向って「こうやって、<sup>まぶた</sup>瞼を撫でていると、だんだん眼が重たくなるでしょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなりますな」と答える。先生はなお同じように撫でおろし、撫でおろし「だんだん重くなりますよ、ようござんすか」と云う。主人もその気になったものか、何とも云わずに黙ってい

る。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きませんぜ」

と云われた。<sup>かわいそう</sup>可哀想に主人の眼はとうとう <sup>つぶ</sup>潰れてしまった。「もう開かんのです

か」「ええもうあきません」主人は <sup>もくねん</sup>黙然として目を眠っている。吾輩は主人がもう

<sup>めくら</sup>盲目になったものと思い込んでしまった。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覧なさい。とうていあけないから」と云われる。「そうですか」と云うが早いか主人は普通

の通り <sup>りょうがん</sup>両眼を開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸かりませんな」と云うと

甘木先生も同じく笑いながら「ええ、懸りません」と云う。催眠術はついに不成功に <sup>おわ</sup> 了る。  
甘木先生も帰る。

その次に来たのが——主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の  
家にしてはまるで <sup>うそ</sup> 嘘 のようである。しかし来たに相違ない。しかも珍客が来た。吾輩が

この珍客の事を <sup>いちごん</sup> 一言 でも記述するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先刻申

す通り大事件の <sup>よらん えが</sup> 余瀾 を <sup>あた</sup> 描きつつある。しかしてこの珍客はこの余瀾を描くに <sup>方</sup> っ

て逸すべからざる材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い上に、<sup>やぎ</sup> 山羊のような

<sup>ひげ</sup> 髭 は  
髯 を生やしている四十前後の男と云えばよかろう。迷亭の美学者たるに対して、吾輩は  
この男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り  
散らすからではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らし

く思われるからである。これも <sup>むか</sup> 昔 <sup>ふたりとも</sup> しの同窓と見えて <sup>しごくう</sup> 両 人 共 応対振りには至 極 打ち  
と  
解けた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる <sup>きんぎよふ</sup> 金 魚 麩 のようにふわふわしているね。せんだって  
友人を連れて一面識もない華族の門前を通行した時、ちょっと寄って茶でも飲んで行こう

と云って引っ張り込んだそうだが随分 <sup>のんき</sup> 呑 気 だね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかったが、——そうさ、まあ <sup>てんぴん</sup> 天 稟 の奇人だろう、その代り

考も何もない全く金魚麩だ。鈴木か、——あれがくるのかい、へえー、あれは <sup>りくつ</sup> 理 窟 はわ  
からんが世間的には利口な男だ。金時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがないから落

ちつきがなくて駄目だ。 <sup>えんかつ</sup> 円 滑 円滑と云うが、円滑の意味も何もわかりはせんよ。迷

亭が金魚麩ならあれは <sup>わら くく</sup> 藁 で <sup>こんにやく</sup> 括 った <sup>なめら</sup> 蒟 蒻 だね。ただわるく <sup>なめら</sup> 滑 かでぶるぶる

ふる

振 えているばかりだ」

主人はこの 奇 警 な比喻を聞いて、 大 おおい に感心したものらしく、久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは——まあ 自 然 薯 くらいなところだろう。長くなって泥の

うま  
中に 埋 ってるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、 うらや 羨 ましいな」

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ。別に羨まれるに足るほどの事もない。ただありがたい事に人を羨む気も起らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うているから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、 かんしゃく 肝 癩 が起ってたまらん。どっちを向いても不平ばかりだ」

「不平もいさ。不平が起ったら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろ

いろだから、そう自分のように人にもなれと勧めたって、なれるものではない。 箸 は人

と同じように持たんと飯が食いにくい、自分の麵麩は自分の勝手に切るのが一番都合が

じょうず  
いいようだ。 上 手 な仕立屋で着物をこしらえれば、着たてから、からだに合ったのを

へた したてや あつら 持ってくるが、下手の裁 縫 屋に 誂 えたら当分は我慢しないと駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着ているうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わせてくれるか

ら。今の世に合うように上等な両親が 手 際 よく生んでくれれば、それが幸福なのさ。し

できそ  
かし出来損こなったら世の中に合わないで我慢するか、または世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はなかるう」

「しかし僕なんか、いつまで立っても合いそうにないぜ、心細いね」

「あまり合わない せびろ 背 広 を無理にきると ほころ 綻 びる。 けんか 喧 嘩 をしたり、自殺をしたり騒

動が起るんだね。しかし君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論しやせず、喧嘩だつてやった事はあるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくっても怒っておれば喧嘩だろう」

ひとりげんか

「なるほど一人 喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになった」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

いまだやき たぬき

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今戸焼の狸から、ぴん助、き

とうとう

しゃごそのほかあらゆる不平を挙げて 滔々 と哲学者の前に述べ立てた。哲学者先生は

ひら

だまって聞いていたが、ようやく口を開いて、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしゃごが何を云ったって知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だつて談判して

むか

も、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると西洋人より昔の日本人の方がよほどえらいと思う。西洋人のやり方は積極的積極的と云つて近頃

だいぶはや

だい

大分流行るが、あれは大なる欠点を持っているよ。第一積極的と云つたって際限が

さかい

ない話した。いつまで積極的にやり通したって、満足と云う域とか完全と云う境に

むこう ひのき

めざわ

けるものじゃない。向に檜があるだろう。あれが目障りになるから取り払う。

しゃく

とその向うの下宿屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、その次の家が癩に

や ぐち

る。どこまで行っても際限のない話しさ。西洋人の遣り口はみんなこれさ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝つて満足したものは一人もないんだよ。人が気に喰わん、喧

ほうてい

嘩をする、先方が閉口しない、法 庭 へ訴える、法 庭 で勝つ、それで落着と思うのは間

あせ

かじんせいじ

違さ。心の落着は死ぬまで焦つたつて片付く事があるものか。寡人政治がいかに



だいぎせいたい  
から、代議政体にする。代議政体がいかなから、また何かにしたくなる。川が生

トンネル  
意気だって橋をかける、山が気に喰わんと云って隧道を堀る。交通が面倒だと云って

し  
鉄道を布く。それで永久満足が出来るものじゃない。さればと云って人間だものどこまで  
積極的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつま  
り不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満

おおい  
足を求めるのじゃない。西洋と大に違うところは、根本的に周囲の境遇は動かすべか

もと  
らざるものと云う一大仮定の下に発達しているのだ。親子の関係が面白くないと云って  
歐洲人のようにこの関係を改良して落ちつきをとろうとするのではない。親子の関係は在

もと  
来のままでどうてい動かす事が出来んものとして、その関係の下に安心を求むる手段を

み  
講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り、武士町人の区別もその通り、自然その物を観る  
のもその通り。——山があつて隣国へ行かれなければ、山を崩すと云う考を起す代りに隣  
国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなくとも満足だと云う心持ちを養成

ぜんけ じゅか  
するのだ。それだから君見給え。禅家でも儒家でもきつと根本的にこの問題をつらま

らくじつ  
える。いくら自分がえらくても世の中はどうてい意のごとくなるものではない、落日

めぐ さか  
を回らす事も、加茂川を逆に流す事も出来ない。ただ出来るものは自分の心だけだか  
らね。心さえ自由にする修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気なものではな

ぐ  
いか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうなものだ。ぴん助なんか愚な事を云ったらこの

しさい き  
馬鹿野郎とすましておれば仔細なかるう。何でも昔しの坊主は人に斬り付けられた時

でんこうえいり しゅんぷう しゃ  
電光影裏に春風を斬るとか、何とか洒落れた事を云ったと云う話だぜ。

心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのじゃないかしらん。僕  
なんか、そんなむずかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義ばかりがいいと  
思うのは少々誤まっているようだ。現に君がいくら積極主義に働いたって、生徒が君をひ  
やかしくするのをどうする事も出来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、

または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に出たって勝てっこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢に

ぶぜい  
無勢の問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。衆

たの  
を侍む小供に恐れ入らなければならんと云う事になる。君のような貧乏人でしかもたった一人で積極的に喧嘩をしようとするのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分ったかい

はい  
主人は分ったとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が帰ったあとで書斎へ這入って書物も読まずに何か考えていた。

とう  
鈴木藤さんは金と衆とに従えと主人に教えたのである。甘木先生は催眠術で神経を

じょごん  
沈めると助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ると説法したので

えら  
ある。主人がいずれを択ぶかは主人の随意である。ただこのままでは通されないに極まっている。

## 九

あばたづら      ごいっしんまえ      だいぶはや  
主人は痘痕面である。御維新前はあばたも大分流行ったものだそうだと

こんにち      おく  
が日英同盟の今日から見ると、こんな顔はいささか時候後の感がある。あばたの

あと  
衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くその迹を絶つに至るだろうとは医学上

ごう  
の統計から精密に割り出されたる結論であって、吾輩のごとき猫といえども毫も疑を

さしはさ      つら  
挟む余地のないほどの名論である。現今地球上にあばたつ面を有して生息している人間は何人くらいあるか知らんが、吾輩が交際の区域内において打算して見ると、猫に

すなわ  
は一匹もない。人間にはたった一人ある。しかしてその一人が即ち主人である。はなはだ気の毒である。

おくめん  
吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二

十世紀の空気を呼吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあ  
の ばん  
ばたが二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取って 頑 と  
して動かないのは自慢にならんのみか、かえってあばたの体面に関する訳だ。出来る事な  
ら今のうち取り払ったらよさそうなものだ。あばた自身だって心細いに違いない。それと  
ちゅうてん ばんかい  
も党勢不振の際、誓って落日を 中 天 に 挽 回 せずんばやまずと云う意気込みで、  
おうふう  
あんなに 横 風 に顔一面を占領しているのか知らん。そうするとこのあばたは決して  
けいべつ み とうとう ばんこふま  
軽 蔑 の意をもって視るべきものでない。滔 々 たる流俗に抗する 万 古 不 磨 の  
穴の集合体であって、 おおい でこぼこ よろ  
大 に吾人の尊敬に値する 凸 凹 と云って 宜 しい。ただき  
たならしいのが欠点である。

あさだそうはく  
主人の小供のときに牛込の山伏町に 浅 田 宗 伯 と云う漢法の名医があつたが、こ  
の老人が病家を見舞うときには必ずかごに乗ってそろりそろりと参られたそうだ。ところ  
が宗伯老が亡くなられてその養子の代になったら、かごがたちまち人力車に変わった。だか  
ら養子が死んでそのまた養子が跡を続いたら 葛 根 湯 がアンチピリンに化けるかも  
知れない。かごに乗って東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですらあまり見つともい  
すま もうじゃ  
いものでは無かつた。こんな真似をして 澄 していたものは旧弊な 亡 者 と、汽車へ積  
み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたもその振わざる事においては宗伯老のかごと一般で、はたから見ると気の  
毒なくらいだが、漢法医にも劣らざる 頑 固 な主人は依然として孤城落日のあばたを天下  
ばくろ  
に 曝 露 しつつ毎日登校してリードルを教えている。

こく  
かくのごとき前世紀の記念を満面に 刻 して教壇に立つ彼は、その生徒に対して授業以  
だい  
外に 大 なる訓戒を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あ  
ばたの顔面に及ぼす影響」と云う大問題を 造 作 もなく解釈して、 不 言 の 間 にその

答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間が教師として存在しなくなった

あかつき

暁には彼等生徒はこの問題を研究するために図書館もしくは博物館へ駆けつけて、

エジプトじん ほうふつ

つい

吾人がミイラによって埃及人を髣髴すると同程度の労力を費やさねばな

てん

あばた めいめい うち くだく

らぬ。この点から見ると主人の痘痕も冥々の裡に妙な功德を施こしている。

ほうそう う

もっとも主人はこの功德を施こすために顔一面に疱瘡を種え付けたのではない。こ

れでも実は種え疱瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思ったのが、いつの間にか

いろけ

顔へ伝染していたのである。その頃は小供の事で今のように色気もなにもなかったもの

かゆ

むやみ

か

だから、痒い痒いと云いながら無暗に顔中引き搔いたのだそうだ。ちょうど噴火山が破裂してラヴァが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向って疱瘡をせぬうちは玉のような男子であったと云っている。

かんのんさま

かえ

浅草の観音様で西洋人が振り反って見たくらい奇麗だったなどと自慢する事さえある。なるほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないのが残念である。

いくら功德になっても訓戒になっても、きたない者はやっぱりきたないものだから、

ものごころ

おおい

物心がついて以来と云うもの主人は大にあばたについて心配し出して、あら

も つぶ

ゆる手段を尽してこの醜態を揉み潰そうとした。ところが宗伯老のかごと違って、いやになったからと云うてそう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残っている。こ

づら

の歴然が多少気にかかると見えて、主人は往来をあるく度毎にあばた面を勘定してある

ぬし

くそうだ。今日何人あばたに出逢って、その主は男か女か、その場所は小川町の

かんこうば

勸工場であるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記につけ込んである。彼はあばたに関する智識においては決して誰にも譲るまいと確信している。せんだってある洋行帰りの友人が来た折なぞは、「君西洋人にはあばたがあるかな」と聞いたくらいだ。す

るとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考えたあとで「まあ滅多にないね」と云ったら、主人は「滅多になくっても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返した。

友人は気のない顔で「あっても乞食か立ん坊だよ。教育のある人にはないようだ」と答えたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違うね」と云った。

哲学者の意見によって落雲館との喧嘩を思い留った主人はその後書齋に立て籠ってしきりに何か考えている。彼の忠告を容れて静坐の裡に靈活なる精神を消極的に修養する

つもりかも知れないが、元来が気の小さな人間の癖に、ああ陰気な懐ふところでは

いては碌な結果の出ようはずがない。それより英書でも質に入れて芸者かららっぱぶしはるへんくつ喇叭節でも習った方が遙かにましだとまでは気が付いたが、あんな偏屈な男

はどうてい猫の忠告などを聴く気遣はないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせずに暮した。

今日はあれからちょうど七日目である。禪家などではいちしちにちなぬかめ一七日を限って大悟し

て見せるなどとすさまいきおいけっか凄じい勢で結脚する連中もある事だから、うちの主人もど

うかなったろう、死ぬか生きるか何とか片付いたろうと、のそのそえんがわ椽側から書齋の入

口まで来て室内の動静をていさつ偵察に及んだ。

書齋は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな机が据えてある。ただ大きな机ではわかるまい。長さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大きな机である。無論出来合の

ものではない。近所の建具屋に談判して寝台兼机として製造せしめたるけんきたいの品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、また何の故にその上に寝て見ようなどという

りょうけん了見を起したのか、本人に聞いて見ない事だからとんとんとわからない。ほんの一

時の出来心で、かかる難物を <sup>かつ</sup>担ぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一種の精

神病者において吾人がしばしば <sup>みいだ</sup>見出すごとく、縁もゆかりもない二個の観念を連想して、机と寝台を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく奇抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないのが欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼寝をして寝返りを

<sup>ひょうし</sup>する拍子に椽側へ転げ落ちたのを見た事がある。それ以来この机は決して寝台に転用されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの <sup>ざぶとん</sup>座布団があつて、<sup>たばこ</sup>煙草の火で焼けた穴が三つほ

どかたまつてゐる。中から見える綿は薄黒い。この座布団の上に <sup>うし</sup>後ろ向きにかしこまつて

いるのが主人である。鼠色によごれた <sup>へこおび</sup>兵児帯をこま結びにむすんだ左右がだらりと足の裏へ垂れかかっている。この帯へじゃれ付いて、いきなり頭を張られたのはこないだの事

である。 <sup>めった</sup>滅多に寄り付くべき帯ではない。

まだ考えているのか下手の考と云う <sup>へた</sup>たとえ <sup>うし</sup>のぞ <sup>のぞ</sup>後ろから覗き込んで見る

と、机の上でいやにぴかぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に二三季度 <sup>まばたき</sup>瞬をしたが、こいつは変だとまぶしいのを我慢してじっと光るものを見つめてやった。するとこの光りは机の上で動いている鏡から出るものだと云う事が分つた。しかし主人は何の

ために書齋で鏡などを振り舞わしているのであろう。鏡と云えば風呂場にあるに <sup>き</sup>極まっている。現に吾輩は今朝風呂場でこの鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡を用いる。——主人のような男が髪を分けると聞く人もあるかも知れぬが、実

際彼は <sup>ほか</sup>他の事に <sup>ぶしょう</sup>無精なるだけそれだけ頭を <sup>ていねい</sup>丁寧にする。吾輩が当家に参つてから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日といえども五分刈に刈り込んだ事はない。

かなら <sup>ごたい</sup>ごたい <sup>はじ</sup>はじ <sup>はじ</sup>はじ  
必ず二寸くらいの長さにして、それを <sup>ごたい</sup>御大 <sup>はじ</sup>そうに左の方で分けるのみか、右の <sup>はじ</sup>端

を <sup>は</sup>は <sup>すま</sup>すま  
をちょっと跳ね返して <sup>は</sup>澄している。これも精神病の徴候かも知れない。こんな気取つた

分け方はこの机と <sup>いっこう</sup>一向 調和しないと思うが、あえて他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも云わない。本人も得意である。分け方のハイカラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くするのかと思ったら実はこう云う <sup>わけ</sup>訳 である。彼のあばたは単に彼の <sup>しんしょく</sup>顔を 侵 蝕 せるのみならず、<sup>むか</sup>とくの 昔 しに脳天まで食い込んでいるのだそうだ。だからもし普通の人のように五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根本から何十となくあ <sup>な</sup>ばたがあらわれてくる。いくら撫 <sup>な</sup>でてでも、さすってもぽつぽつがとれない。枯野に <sup>ほたる</sup>螢 を放ったようなもので風流かも知れないが、細君の <sup>ぎょい</sup>御 意 に入らんのは <sup>もちろん</sup>勿 論 の事である。髪さえ長くしておけば露見しないですむところを、好んで自己の非を <sup>あば</sup>曝 くにも当 <sup>ないさい</sup>らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を生やして、こっちのあばたも <sup>ないさい</sup>内 済 にしたいくらい <sup>は</sup>なところだから、ただで生える毛を <sup>ぜに</sup>錢 を出して刈り込ませて、私は <sup>ずがいこつ</sup>頭 蓋 骨 の上ま <sup>てんねんとう</sup>で 天 然 痘 にやられましたよと <sup>ふいちょう</sup>吹 聴 する必要はあるまい。——これが主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわける原因で、その原因が鏡を見る訳 <sup>ゆえん</sup>で、その鏡が風呂場にある <sup>ゆえん</sup>所 以 で、しこうしてその鏡が一つしかないと云う事実である。風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に来ている以上は鏡が <sup>りこんびょう</sup>り こんびょう <sup>かか</sup>かか 離 魂 病 に 罹 ったのかまたは主人が風呂場から持って来たに相違ない。持って来たとすれば何のために持って来たのだろう。あるいは例の消極的修養に必要な道具かも知 <sup>むか</sup>れない。昔 し或る学者が何とかいう智識を訪うたら、<sup>と</sup>和 尚 両肌を抜いで <sup>おしょう</sup>お しょう <sup>かわら</sup>かわら <sup>ま</sup>ま 磨 しておられた。何をこしらえなさると質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思うて一生懸命にやっておるところじゃと答えた。そこで学者は驚ろいて、なんぼ名僧でも鬚を磨して鏡とする事は出来まいと云うたら、和尚からからと笑いながらそうか、それじゃやめよ、 <sup>ののし</sup>いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものじゃろと <sup>ののし</sup>罵 ったと云うから、主人

かじ  
もそんな事を聞き 嘯 って風呂場から鏡でも持って来て、したり顔に振り廻しているのか

だいぶ うかが  
も知れない。大分物騒になって来たなど、そっと 窺 っている。

ようす いっちょうらい  
かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる容子をもって一 張 来 の鏡を見つめ  
ている。元来鏡というものは気味の悪いものである。深夜 蝋 燭 を立てて、広い部屋の

のぞ  
なかで一人鏡を 覗 き込むにはよほどの勇気がいるそうだ。吾輩などは始めて当家の令嬢

ぎょうてん か  
から鏡を顔の前へ押し付けられた時に、はっと 仰 天 して屋敷のまわりを三度駆け回  
ったくらいである。いかに白昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つめている以

こわ  
上は自分で自分の顔が 怖 くなるに相違ない。ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。

ひと ごと  
ややあって主人は「なるほどきたない顔だ」と 独 り 言 を云った。自己の醜を自白する

しよさ  
のはなかなか見上げたものだ。様子から云うとたしかに気違の 所 作 だが言うことは真理

おの こわ  
である。これがもう一步進むと、己れの醜悪な事が 怖 くなる。人間は吾身が怖ろしい  
悪党であると言う事実を徹骨徹髄に感じた者でないと苦勞人とは云えない。苦勞人でない

げだつ こわ  
とどうてい 解 脱 は出来ない。主人もここまで来たらついでに「おお 怖 い」とでも云い  
そうなものであるがなかなか云わない。「なるほどきたない顔だ」と云ったあとで、何を

ほ ふく ひらて  
考え出したか、ぷうっと頬っぺたを 膨 らました。そうしてふくれた頬っぺたを 平 手で

たた  
二三度 叩 いて見る。何のまじないだか分らない。この時吾輩は何だかこの顔に似たもの

おさん  
があるらしいと云う感じがした。よくよく考えて見るとそれは 御 三 の顔である。ついで  
だから御三の顔をちょっと紹介するが、それはそれはふくれたものである。この間さる人

あなもりいなり ふぐ ちょうちん  
が 穴 守 稲 荷 から河豚の 提 灯 をみやげに持って来てくれたが、ちょうどあ

ふぐちょうちん  
の 河 豚 提 灯 のようにふくれている。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失



している。もっとも河豚のふくれるのは万遍なく真丸にふくれるのだが、お三とくる  
と、元来の骨格が多角性であって、その骨格通りにふくれ上がるのだから、まるで水<sup>すいき</sup>気  
なやんでいる六角時計のようなものだ。御三が聞いたらさぞ怒<sup>おこ</sup>るだろうから、御三はこ  
のくらいにしてまた主人の方に帰るが、かくのごとくあらん限りの空気をもって頬<sup>ほ</sup>っぺた  
をふくらませたる彼は前<sup>ぜん</sup>申す通り手のひらで頬<sup>ほっ</sup>ぺたを叩きながら「このくらい皮膚が  
緊張するとあばたも眼につかん」とまた独<sup>ひと</sup>り語<sup>ごと</sup>をいった。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると  
大変目立つ。やっぱりまともに日の向いてる方が平<sup>たいら</sup>に見える。奇体な物だなあ」と  
だいぶ<sup>だいぶ</sup>のば<sup>のば</sup>  
大分感心した様子であった。それから右の手をうんと伸して、出来るだけ鏡を遠距離  
に持って行って静かに熟視している。「このくらい離れるとそんなでもない。やはり近過  
ぎるといかん。——顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟ったようなことを云う。

次に鏡を急に横にした。そうして鼻の根を中心にして眼や額や眉<sup>まゆ</sup>を一度にこの中心に向  
ってくしゃくしゃとあつめた。見るからに不愉快な容<sup>ようぼう</sup>貌<sup>ぼう</sup>が出来上ったと思ったら「い  
やこれは駄目だ」と当人も気がついたと見えて早<sup>そうそう</sup>々<sup>そう</sup>やめてしまった。「なぜこんなに

毒々しい顔だろう」と少々不審の体<sup>てい</sup>で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せる。右の  
人指しゆびで小鼻を撫<sup>な</sup>でて、撫でた指の頭を机の上にあった吸<sup>すいと</sup>取り紙<sup>がみ</sup>の上へ、うんと  
押しつける。吸い取られた鼻の<sup>あぶら</sup>膏<sup>ま</sup>が丸く紙の上へ浮き出した。いろいろな芸をやる  
ものだ。それから主人は鼻の膏を塗<sup>とまつ</sup>抹<sup>しとう</sup>した指<sup>うがん</sup>頭<sup>の</sup>を転じてぐいと右眼の  
したまぶた<sup>の</sup>  
下<sup>の</sup>瞼<sup>の</sup>を裏返して、俗に云うべっかんこうを見事にやって退けた。あばたを研究して

にら くら  
いるのか、鏡と 睨め 競 をしているのかその辺は少々不明である。気の多い主人の事だ  
から見ているうちにいろいろになると見える。それどころではない。もし善意をもって  
こんにやくもんどうてき けんしょうじかく ほうべん  
蒟 蒻 問 答 的 に解釈してやれば主人は 見 性 自 覚 の 方 便 とし

しぐさ  
てかように鏡を相手にいろいろな 仕 草 を演じているのかも知れない。すべて人間の研究

さんせん じつげつ  
と云うものは自己を研究するのである。天地と云い 山 川 と云い 日 月 と云い

せいしん いみょう お  
星 辰 と云うも皆自己の 異 名 に過ぎぬ。自己を 措いて他に研究すべき事項は

たればと みいだ  
誰 人 にも 見 出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出  
す途端に自己はなくなってしまう。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はな  
い。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだから古来の豪  
傑はみんな自力で豪傑になった。人のお蔭で自己が分るくらいなら、自分の代理に牛肉を

あした ゆうべ  
喰わして、堅いか柔らかいか判断の出来る訳だ。 朝 に法を聴き、 夕 に道を聴き、

ごぜんとうか じしょう ちょうはつ ほうべん  
梧 前 灯 下 に書巻を手にするのは皆この 自 証 を 挑 撥 するの 方 便 の

ぐ ないし ごしゃ  
具に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の弁ずる道のうち、乃至は 五 車 にあまる

としたいり ゆえん  
蠹 紙 堆 裏 に自己が存在する 所 以 がない。あれば自己の幽霊である。もつともある場

むれい ほうちやく  
合において幽霊は 無 霊 より優るかも知れない。影を追えば本体に 逢 着 する時が  
ないとも限らぬ。多くの影は大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人が鏡をひねくって

だいぶ うのみ はる  
いるなら 大 分 話せる男だ。エピクテタスなどを 鵜 呑 にして学者ぶるよりも 遥 かに  
ましたと思う。

うぬぼれ  
鏡は 己 惚 の醸造器であるごとく、同時に自慢の消毒器である。もし浮華虚栄の念を

せんだう  
もってこれに対する時はこれほど愚物を 煽 動 する道具はない。昔から

ぞうじょうまん おのれ じせき  
増 上 慢 をもって 己 を害し他をうた 事 蹟 の三分の二はたしかに鏡の

しよさ

所作である。仏国革命の当時物好きな御医者さんが改良首きり器械を発明して飛んだ罪

ねざめ

をつくったように、始めて鏡をこしらえた人も定めし寢覚のわるい事だろう。しかし自

あいそ

分に愛想の尽きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど薬になる事はない。

けんしゅうりょうぜん

そうろう そ

こんにち

妍醜瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で候と反りかえって今日

まで暮らされたものだと気がつくにきまっている。そこへ気がついた時が人間の

しょうがい

生涯中もっともありがたい期節である。自分で自分の馬鹿を承知しているほど

たっ

じかくせいばか

尊とく見える事はない。この自觉性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋がことごと

こうぜん

けいぶちょうしょう

く頭を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂然として吾を軽侮嘲笑して

いるつもりでも、こちらから見るとその昂然たるところが恐れ入って頭を下げている事に

おの

なる。主人は鏡を見て己れの愚を悟るほどの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せら

とうこん めい

れる痘痕の銘くらは公平に読み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の

いや えとく かいいてい

賤しきを会得する楷梯にもなろう。たのもしい男だ。これも哲学者からやり込

められた結果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をうかがっていると、それとも知らぬ主人は思う存分あか

だいぶ

んべえをしたあとで「大分充血しているようだ。やっぱり慢性結膜炎だ」と言いながら、

まぶた

おおかたかゆ

人さし指の横つらでぐいぐい充血した瞼をこすり始めた。大方痒いのだろう

こす

けれども、たださえあんなに赤くなっているものを、こう擦ってはたまるまい。遠から

しおだい

ふらん

ひら

ぬうちに塩鯛の眼玉のごとく腐爛するにきまつてる。やがて眼を開いて鏡に向

ったところを見ると、果せるかなどんよりとして北国の冬空のように曇っていた。もっと

ふだん

こんとん

も平常からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容詞を用いると混沌として

ほうはん ばくぜん もうろう  
黒眼と白眼が 剖 判 しないくらい 漠 然 としている。彼の精神が 朦 朧 として不

てい あいあいぜんまいまいぜん とこし  
得要領 底 に一貫しているごとく、彼の眼も 曖 々 然 昧 々 然 として 長

がんか ただよ たいどく  
えに 眼 窩 の奥に 漂 うている。これは 胎 毒 のためだとも云うし、あるいは

ほうそう  
疱 瘡 の余波だとも解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になった事も

かい こんにち  
あるそうだが、せつかく母親の丹精も、あるにその甲斐あらばこそ、 今 日 まで生れた  
当時のままでぼんやりしている。吾輩ひそかに思うにこの状態は決して胎毒や疱瘡のため

かいじゅうこんだく ほうこう  
ではない。彼の眼玉がかように 晦 渋 溷 濁 の悲境に 彷徨 しているのは、と

ふとうふめい  
りも直さず彼の頭脳が 不 透 不 明 の実質から構成されていて、その作用が

あんたんめいもう  
暗 愴 溟 濛 の極に達しているから、自然とこれが形体の上にあられて、知らぬ

ぐ  
母親にいらぬ心配を掛けたんだろう。煙たつて火あるを知り、まなこ濁って愚なるを証す。

てんぼうせん  
して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は 天 保 銭 のごとく穴があいているから、  
彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。

ひげ  
今度は 髯 をねじり始めた。元来から行儀のよくない髯でみんな思い思いの姿勢をとつ

は はや まちまち わがまま  
て生えている。いくら個人主義が流行る世の中だって、こう 町 々 に 我 儘 を尽く

かんが  
されては持主の迷惑はさこそと思いやられる、主人もここに 鑑 みるところあつて近頃

おおい あんばい  
は 大 に訓練を与えて、出来る限り系統的に 按 排 するように尽力している。その

こうか むな  
熱心の 功 果 は 空 しからずして昨今ようやく歩調が少しととのうようになって来た。今

は  
までは髯が生えておったのであるが、この頃は髯を生やしているのだと自慢するくらいに

こぶ  
なった。熱心は成効の度に応じて鼓舞せられるものであるから、吾が髯の前途有望なりと

見てとって主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず 髯<sup>ひげ</sup> に向って 鞭撻<sup>べんたつ</sup> を加える。彼の

アムビションは 独逸<sup>ドイツ</sup> 皇帝陛下のように、向上の念の 熾<sup>さかん</sup> な髯を 蓄<sup>たくわ</sup> えるにある。

それだから 毛孔<sup>けあな</sup> が横向であろうとも、下向であろうとも 聊<sup>いささ</sup> か頓着なく 十把一<sup>じっぱひ</sup> と

からげに 握<sup>にぎ</sup> っては、上の方へ引っ張り上げる。髯もさぞかし難儀であろう、所有主たる

主人すら時々痛い事もある。がそこが訓練である。 否<sup>いや</sup> でも応でもさかに扱き上げる。門外漢から見ると気の知れない道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心得ている。

教育者がいたずらに生徒の 本性<sup>ほんせい</sup> を撓めて、僕の手柄を見給えと誇るようなもので  
ごう  
毫<sup>ごう</sup> も非難すべき理由はない。

主人が 満腔<sup>まんこう</sup> の熱誠をもって髯を訓練していると、台所から多角性の 御三<sup>おさん</sup> が郵便

が参りましたと、例のごとく赤い手をぬっと書斎の 中<sup>うち</sup> へ出した。右手に髯をつかみ、

ひだり  
左<sup>ひだり</sup> 手に鏡を持った主人は、そのまま入口の方を振りかえる。八の字の尾に逆か立ちを命

じたような髯を見るや否や 御多角<sup>おたかく</sup> はいきなり台所へ引き戻して、ハハハハと 御釜<sup>おかま</sup> の

ふた  
蓋<sup>ふた</sup> へ身をもたして笑った。主人は平気なものである。 悠々<sup>ゆうゆう</sup> と鏡をおろして郵便を取  
り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめしい文字が並べてある。読んで見ると

いよいよ がつたてまつりそろ  
拝啓<sup>いよいよ</sup> 愈<sup>が</sup> 御多祥<sup>つたてまつり</sup> 奉<sup>そろ</sup> 賀<sup>いよいよ</sup> 候<sup>いよいよ</sup> 回顧すれば日露の戦役は連戦連勝の 勢

に 乗<sup>り</sup> じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半万歳声裡に凱歌を奏し国民の歓喜

何ものか 之<sup>これ</sup> に若かん 曩<sup>し</sup> に宣戦の 大<sup>さき</sup> 詔<sup>たいしょう</sup> 煥<sup>かんぱつ</sup> 発<sup>たいしょう</sup> せらるるや義勇公に奉じたる

将士は久しく万里の異境に在りて 克<sup>あ</sup> く寒暑の苦難を忍び一意戦闘に従事し 命<sup>めい</sup> を国家に

捧げたるの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり 而<sup>しこう</sup> して軍隊の凱旋は本月を以て

ほと

殆んど終了を告げんとす依って本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出征将校下

士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰<sup>いしや</sup>藉<sup>せんが</sup>

為め熱誠<sup>これ</sup>之<sup>いささか</sup>を迎え聊<sup>びちゅう</sup>感謝の微<sup>たくつい</sup>衷<sup>を</sup>を表し度<sup>を</sup>就<sup>は</sup>ては各位の御協賛を仰ぎ

此盛典を挙るの幸<sup>さいわい</sup>を得ば本会の面目不<sup>これにすぎず</sup>過<sup>そろ</sup>之<sup>なにとぞ</sup>と存候間何卒御賛

成<sup>ふる</sup>奮<sup>ぎえん</sup>って義<sup>ひたすら</sup>捐<sup>た</sup>あらんことを只<sup>そ</sup>管<sup>を</sup>希望の至に堪えず候敬具

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一過の<sup>のち</sup>後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔をしている。義捐などは恐らくしそうにない。せんだって東北凶作の義捐金を二円

とか三円とか出してから、逢う人<sup>ごと</sup>毎<sup>ふいちよう</sup>に義捐をとられた、とられたと吹<sup>を</sup>聴<sup>して</sup>してい

るくらいである。義捐とある以上は差し出すもので、とられるものでないには<sup>きま</sup>極<sup>を</sup>っている。泥棒にあったのではあるまいし、とられたとは不穩当である。しかるにも関せず、盗

難<sup>かか</sup>にでも罹<sup>を</sup>ったかのごとくに思つてらしい主人がいかにも軍隊の歓迎だと云つて、いか

に華族様の勧誘だと云つて、強<sup>ごうだん</sup>談<sup>を</sup>で持ちかけたらいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出すような人間とは思われない。主人から云えば軍隊を歓迎する前にまず自分を歓迎

したいのである。自分を歓迎した<sup>あと</sup>後なら大抵のものは歓迎しそうであるが、自分が

ちょうせき<sup>さ</sup>さ<sup>つか</sup>つかに差し支<sup>まか</sup>える間は、歓迎は華族様に任<sup>を</sup>せておく了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「ヤ、これも活版だ」と云つた。

時下秋冷の候<sup>こう</sup>に候<sup>そろ</sup>処貴家益々御隆盛の段<sup>がしあげたてまつり</sup>奉<sup>そろ</sup>賀<sup>のぶ</sup>上<sup>を</sup>候<sup>を</sup>陳<sup>れば</sup>れば本校儀

も御承知の通り一昨々年以来二三野心家の為めに妨げられ一時其極に達し候<sup>そうらえども</sup>得<sup>を</sup>共

是れ皆不<sup>ふしょう</sup>肖<sup>しん</sup>針<sup>さく</sup>作<sup>を</sup>が足らざる所に起因すと存じ深く<sup>みずか</sup>自<sup>いまし</sup>ら<sup>を</sup>警<sup>むる</sup>むる所あり

がしんしょうたん<sup>くしん</sup>くしん<sup>ようや</sup>の苦辛の結果漸<sup>ここ</sup>く茲に独力以て我が理想に適するだけの

校舎新築費を得るの途を講じ 候 其は別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる書冊

出版の義に御座 候 本書は不肖 針 作 が多年苦心研究せる工芸上の原理原則に 法 と

り真に肉を裂き血を絞るの思を為して著述せるものに御座 候 因って本書を 普 く一

般の家庭へ製本実費に 些 少 の利潤を附して 御 購 求 を願ひ一面 斯 道 発達の

一助となすと同時に又一面には 僅 少 の利潤を蓄積して校舎建築費に当つる 心 算

に御座 候 依っては近頃 何 共 恐縮の至りに存じ候えども本校建築費中へ御寄附

なしくださる おぼしめ こそ 被 成 下 と御 思 召し 茲 に呈供仕 候 秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へ

なりとも御分与 被 成 下 候 て御賛同の意を御表章 被 成 下 度 伏して懇願

仕 候 敬具

大日本女子裁縫最高等大学院

校長 ぬいだしんさく 縫 田 針 作 九 拜

とある。主人はこの 鄭 重 なる書面を、冷淡に丸めてぼんと 屑 籠 の中へ 抛 り 込んだ。せつかくの針作君の九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかつたのは気の毒である。第三信にかかる。第三信はすこぶる風変りの光彩を放っている。状袋が紅白のだんだらで、

あめ ぼう ちんのくしゃみ こひか 飴 ん 棒 の看板のごとくはなやかなる真中に 珍 野 苦 沙 弥 先生虎皮下と

はっぶんたい したた た 八 分 体 で肉太に 認 めてある。中からお太さんが出るかどうか受け合わない

おもて が 表 だけはすこぶる立派なものだ。

も ひとくち せいこう も 若し我を以て天地を律すれば 一 口 にして 西 江 の水を吸いつくすべく、若し天地

を以て我を律すれば我は 則 ち 陌 上 の塵のみ。すべからく道え、天地と我と

いんも なまこ いだ  
什 麼 の交渉かある。……始めて海 鼠 を食 い 出 せる人は其胆力に於て敬すべく、始

めて河豚を 喫 せる ふぐ きつ おとこ おい くら  
漢 は其勇氣に 於 て重んずべし。海鼠を 食 えるものは

しんらん ふぐ にちれん  
親 鸞 の再来にして、河豚を喫せるものは 日 蓮 の分身なり。苦沙弥先生の如きに

ただかんぴょう すみそ くら  
至っては 只 干 瓢 の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢味噌を 食 って天下の士たるも

いま これ  
のは、われ 未 だ 之 を見ず。……

なんじ ふぼ わたくし ふつき  
親友も 汝 を売るべし。父母も汝に 私 あるべし。愛人も汝を棄つべし。富 貴

もと しゃくろく いっちょう  
は 固 より頼みがたかるべし。 爵 禄 は 一 朝 にして失うべし。汝の頭中に秘

かび は たの うち  
蔵する学問には 黴 が生えるべし。汝何を 侍 まんとするか。天地の 裡 に何をたのま

んとするか。神？ 神は人間の苦しまぎれに 捏 造 せる 土 偶 のみ。人間のせつな 糞

たの とつとつ みだ うろん  
の凝結せる臭骸のみ。侍 むまじきを侍んで安しと云う。咄 々、酔漢 漫 りに胡 乱

まんさん どうおのずか  
の言辞を弄して、 躡 躡 として墓に向う。油尽きて 灯 自 ら滅す。業尽きて何

のこ  
物をか 遺 す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ。……

おそ  
人を人と思わざれば 畏 るる所なし。人を人と思わざるものが、吾を吾と思わざる世を

いきどお いかん ただひと  
憤 るは如 何。権貴栄達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。 只 他

ふつぜん な  
の吾を吾と思わぬ時に於て 怫 然 として色を作す。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

ひと ほっさてき あまくだ  
吾の人を人と思うとき、 他 の吾を吾と思わぬ時、不平家は 発 作 的に 天 降 る。  
此発作的活動を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達の士が好ん

にんじん  
で産する所なり。朝鮮に 人 参 多し先生何が故に服せざる。



てんどうこうへい  
在巢鴨 天道公平 再拝

針作君は九拝であったが、この男は単に再拝だけである。寄附金の依頼でないだけに七  
おうふう  
拝ほど横風ふうに構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこぶる分りにくいもの  
だ。どこの雑誌へ出しても没書になる価値は充分あるのだから、頭脳の不透明をもって鳴

ずたずた おもい  
る主人は必ず寸断寸断に引き裂いてしまうだろうと思しのほか、打ち返し打ち返し読  
み直している。こんな手紙に意味があると考えて、あくまでその意味を究きわめようという

かん  
決心かも知れない。およそ天地の間かんにわからんものは沢山あるが意味をつけてつかない  
ものは一つもない。どんなむずかしい文章でも解釈しようとすれば容易に解釈の出来るも  
のだ。人間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる事だ。  
それどころではない。人間は犬であると云っても豚であると云っても別に苦しむほどの命

さつか  
題ではない。山は低いと云っても構わん、宇宙は狭いと云っても差し支さえはない。鳥が  
白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙で

かりくつ  
も何とか蚊とかカ理窟かりくつさえつけばどうとも意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英  
語を無理矢理にこじ付けて説明し通して来た男はなおさら意味をつけたがるのである。天

なぬかかん  
気の悪るいになぜグード・モーニングですかと生徒に問われて七日間なぬかかん考えたり、コ  
ロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三日三晩かかって答を工夫するく

かんぴょう すみそ にんじん  
らいな男には、干瓢かんぴょうの酢味噌すみそが天下の士であろうと、朝鮮の仁参にんじんを食って革

わ  
命を起そうと随意的な意味は随処に湧き出る訳である。主人はしばらくしてグード・モーニ

ごんく  
ング流にこの難解な言句ごんくを呑み込んだと見えて「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲

あっぱれ いちごん  
理を研究した人に違ない。天晴あっぱれな見識だ」と大変賞賛した。この一言いちごんでも主人

ぐ ひるがえ  
の愚なところはよく分るが、翻ぐって考えて見るといささかもっともな点もある。主  
人は何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人に限っ  
た事でもなからう。分らぬところには馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべからざる辺

けだか  
には何だか 氣 高い心持が起るものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかったように

ふいちよう かかわ  
吹 聴 するにも 係 らず、学者はわかった事をわからぬように講釈する。大学の

しゃべ  
講義でもわからん事を 喋 舌 する人は評判がよくってわかる事を説明する者は人望がないの  
でもよく知れる。主人がこの手紙に敬服したのも意義が明瞭であるからではない。その主

なへん とら なまこ  
旨が 那 辺 に存するかほとんど 捕 え難いからである。急に 海 鼠 が出て来たり、せつ

ぐそ どうけ  
な 糞 が出てくるからである。だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、 道 家 で

じゅか えききょう ぜんけ りんざいろく  
道德経を尊敬し、 儒 家で 易 経 を尊敬し、 禅 家で 臨 濟 録 を尊敬すると

ただ  
一般で全く分らんからである。 但 し全然分らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけて  
わかった顔だけはする。わからんものをわかったつもりで尊敬するのは昔から愉快的なもの

うやうや はっふんたい  
である。——主人は 恭 しく 八 分 体 の名筆を巻き納めて、これを机上に置い

ふところ めいそう  
たまま 懐 手 をして 冥 想 に沈んでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、  
迷亭に似合わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書斎のうちでその声を聞いてい

ごう  
るのだが懐手のまま 毫 も動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でないという主義

さっきせんたくシャボン  
か、この主人は決して書斎から挨拶をした事がない。下女は 先 刻 洗 濯 石 鹼 を

はばか  
買いに出た。細君は 憚 りである。すると取次に出べきものは吾輩だけになる。吾輩だ

くつぬぎ  
って出るのはいやだ。すると客人は 沓 脱 から敷台へ飛び上がって障子を開け放ってつ

ふすま  
かつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。座敷の方へ行ったなと思うと 襖 を

た  
二三度あけたり閉てたりして、今度は書斎の方へやってくる。

じょうだん  
「おい 冗 談 じゃない。何をしているんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこにいるなら何とか云えばいいのに、まるで空<sup>あきや</sup>家のようじやないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れくらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を<sup>つと</sup>力<sup>つと</sup>めているんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなった日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじやないよ。大変な御客さんを連れて来たんだよ。ちょっと出て逢ってくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちょっと出て逢ってくれたまえ。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

ふと<sup>ふと</sup>ころで 主人は 懐<sup>懐</sup> 手<sup>手</sup> のままぬっと立ちながら「また人を<sup>かつ</sup>担<sup>かつ</sup>ぐつもりだろう」と

えんがわ<sup>えんがわ</sup> 椽<sup>椽</sup> 側<sup>側</sup> へ出て何の気もつかずに客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老

しゆくぜん<sup>しゆくぜん</sup> たんざ<sup>たんざ</sup> ひか<sup>ひか</sup> 人が 肅<sup>肅</sup> 然<sup>然</sup> と端<sup>端</sup> 坐<sup>坐</sup> して控<sup>控</sup> えている。主人は思わず懐<sup>懐</sup>から両手を出してぺたりと

からかみ<sup>からかみ</sup> そば<sup>そば</sup> 唐<sup>唐</sup> 紙<sup>紙</sup> の傍<sup>傍</sup> へ尻を片づけてしまった。これでは老人と同じく西向きであるから双方共

挨拶のしようがない。むかしかたぎ<sup>むかしかたぎ</sup> 昔<sup>昔</sup> 堅<sup>堅</sup> 気<sup>気</sup> の人は礼義はやかましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を<sup>うな</sup>促<sup>うな</sup> がす。主人は両三年前までは座敷

はどこへ坐っても構わんものと心得ていたのだが、その後ある人から床の間の講釈を聞い

て、あれは上段の間の<sup>ま</sup>変化<sup>ま</sup>したもので、<sup>じょうし</sup>上<sup>じょうし</sup> 使<sup>じょうし</sup> が坐わる所だと悟って以来決して床の間

へは寄りつかない男である。ことに見ず知らずの年長者が<sup>がん</sup>頑<sup>がん</sup> と構えているのだから

じょうざ　　ろく  
上座 どころではない。挨拶さえ 碌 には出来ない。一応頭をさげて

「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい加減に先方の口上を真似ている。

ごけんそん  
「どうもそう、御謙遜では恐れ入る。かえって手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は 真赤 になって口をもごもご云わせて

いる。精神修養もあまり効果がないようである。迷亭君は 襖 の影から笑いながら立見

をしていたが、もういい時分だと思って、 後ろ から主人の尻を押しやりながら

からかみ  
「まあ出たまえ。そう 唐紙 へくつついては僕が坐る所がない。遠慮せずに前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御

高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い 今日 は御近所を通行致したもので、

かたがた　　よろ　　むか  
御礼 旁 伺った訳で、どうぞ御見知りおかれまして今後共 宜しく」と 昔し 風な

よど  
口上を 淀みなく述べたてる。主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な

じい　　ば  
爺さんとはほとんど出会った事がないのだから、最初から多少場うての気味で

へきえき　　とうとう  
辟易 していたところへ、 滔々 と浴びせかけられたのだから、

ちょうせんになじん　あめ  
朝鮮 仁参 も 飴 棒の状袋もすっかり忘れてしまったただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちょっと伺がうはずでありましたところ……何分よろしく」と云い終

いま  
って頭を少々畳から上げて見ると老人は 未だに平伏しているので、はっと恐縮してまた頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計って首をあげながら「私ももとはこちらに屋敷も在<sup>あ</sup>って、永らく御膝元  
でくらしただけですが、瓦<sup>が</sup>解<sup>かい</sup>の折にあちらへ参<sup>ま</sup>ってからとんと出てこんのでな。今来  
て見るとまるで方角も分らんくらいで、——迷亭にでも伴<sup>つ</sup>れてあるいてもらわんと、とて  
ようたし<sup>よう</sup>も用<sup>た</sup>達<sup>し</sup>も出来ません。滄<sup>そう</sup>桑<sup>そう</sup>の<sup>へん</sup>変<sup>へん</sup>とは申しながら、御<sup>ご</sup>入<sup>に</sup>国<sup>ゆう</sup>以<sup>こく</sup>来<sup>こく</sup>三百年  
も、あの通り將軍家の……」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字な  
んてものもなかったでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う

事は明治の御代<sup>みよ</sup>でなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭<sup>ごんにち</sup>でこの通り今日<sup>こんにち</sup>の総  
会にも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の  
総会があるのでわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けたんだが今そ  
の帰りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着  
ているのさ」と注意する。なるほどフロックコートを着ている。フロックコートは着てい

るがすこしもからだに合わない。袖<sup>そで</sup>が長過ぎて、襟<sup>えり</sup>がおっ開<sup>ひら</sup>いて、背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>へ池<sup>いけ</sup>が

出来<sup>わき</sup>て、腋<sup>わき</sup>の下が釣<sup>ぶ</sup>るし上がっている。いくら不<sup>ぶ</sup>恰<sup>か</sup>好<sup>こう</sup>に作<sup>つく</sup>ろうと云<sup>い</sup>ったって、こ

うまで念<sup>くず</sup>を入れて形<sup>かたち</sup>を崩<sup>くず</sup>す訳<sup>わけ</sup>にはゆかないだろう。その上白<sup>しろ</sup>シャツと襟<sup>えり</sup>が離<sup>はな</sup>れ離<sup>はな</sup>

れにな<sup>あ</sup>って、仰<sup>あお</sup>むくと間<sup>ま</sup>から咽<sup>のど</sup>喉<sup>ど</sup>仏<sup>とけ</sup>が見<sup>み</sup>える。第一黒<sup>くろ</sup>い襟<sup>えり</sup>飾<sup>かざり</sup>りが襟<sup>えり</sup>に属<sup>ぞく</sup>している

のか、シャツに属<sup>ぞく</sup>しているのか判<sup>はん</sup>然<sup>ぜん</sup>しない。フロックはまだ我慢<sup>まん</sup>が出来<sup>い</sup>るが白<sup>しろ</sup>髪<sup>かみ</sup>の

チョン髷<sup>まげ</sup>ははなはだ奇<sup>て</sup>観<sup>っせん</sup>である。評判<sup>つ</sup>の鉄<sup>てつ</sup>扇<sup>せん</sup>はどうかと目を注<sup>つ</sup>げると膝<sup>ひざ</sup>の横<sup>よこ</sup>にち  
ゃんと引きつけている。主人はこの時<sup>とき</sup>ようやく本<sup>ほん</sup>心<sup>しん</sup>に立<sup>た</sup>ち返<sup>かえ</sup>って、精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>修<sup>しゆ</sup>養<sup>やう</sup>の結果<sup>けつ</sup>を存<sup>ぞん</sup>分<sup>ぶん</sup>  
に老人<sup>らうじん</sup>の服<sup>ふく</sup>装<sup>さう</sup>に応<sup>おう</sup>用<sup>よう</sup>して少<sup>せう</sup>々<sup>じつ</sup>驚<sup>おどろ</sup>いた。まさか迷<sup>めい</sup>亭<sup>てい</sup>の話<sup>わたり</sup>ほどではな<sup>な</sup>かろうと思<sup>おも</sup>っていたが、  
逢<sup>あ</sup>って見<sup>み</sup>ると話<sup>わたり</sup>以上<sup>いじやう</sup>である。もし自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のあ<sup>あ</sup>ば<sup>あ</sup>た<sup>あ</sup>が歴<sup>れき</sup>史<sup>し</sup>的<sup>てき</sup>研<sup>けん</sup>究<sup>きゆう</sup>の材<sup>ざい</sup>料<sup>りょう</sup>になるならば、この老

まげ  
人のチョン 鬻 や鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思ったが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云って話を途切らすのも礼に欠けると思って

きわ  
「だいぶ人が出ましたろう」と 極 めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので——どうも近来は人間が物

むか  
見高くなったようだがすな。昔 しはあんなではなかったが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかったですな」と老人らしい事を云う。これはあなが

し たかぶ もうろう  
ち主人が知っ 高 振りをした訳ではない。ただ 朦 朧 たる頭脳から好い加減に流れ出

さ つか  
す言語と見れば差し 支 えない。

かぶとわ  
「それにな。皆この 甲 割りへ目を着けるので」

だいぶ  
「その鉄扇は大 分 重いものでございましょう」

「苦沙弥君、ちょっと持って見たまえ。なかなか重いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

くろだに  
老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と主人に渡す。京都の 黒 谷 で  
さんけい にん れんしょうぼう たち いただ  
参 詣 人 が 蓮 生 坊 の太刀を 戴 くようなかたで、苦沙弥先生しばらく  
持っていたが「なるほど」と云ったまま老人に返却した。

かぶとわり とな  
「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは 甲 割 と 称 えて鉄扇とはまるで別物  
で……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

う くすのきまさしげ  
「兜を割るので、——敵の目がくらむ所を撃ちとったものです。 楠 正 成 時  
代から用いたようで……」

「伯父さん、そりゃ正成の甲割ですかね」

けんむじだい  
「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。建 武 時 代 の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱っていましたぜ。苦沙弥君、今日帰りにちょうど  
いい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、物理の実験室を見せて貰ったと

ころがね。この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、<sup>しょう</sup>性のいい鉄だから決してそんな

おそ  
虞れはない」

「いくら性のいい鉄だってそうはいきませんよ。現に寒月がそう云ったから仕方がないです」

<sup>だま</sup>す  
「寒月というのは、あのガラス球を磨っている男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事がありそうなものだ」

<sup>かわい</sup>そう  
「可愛想に、あれだって研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

<sup>す</sup>  
「玉を磨りあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビード

ロヤの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢土では<sup>かんど</sup>玉<sup>きゅうじん</sup>人と称したもので至って身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

<sup>けいじか</sup>  
「すべて今の世の学問は皆形而下の学でちょっと結構なようだが、いざとなるとすこし

も役には立ちませんてな。昔はそれと違って<sup>さむらい</sup>侍<sup>いのちが</sup>は皆命懸けの<sup>しょうばい</sup>商買だから、

<sup>ろうばい</sup>  
ら、いざと云う時に<sup>ろうばい</sup>狼狽せぬように心の修業を致したもので、御承知でもあらっしゃ

ろうがなかなか玉を磨ったり針金を縋ったりするような<sup>よ</sup>容易いものではなかったのがすよ」

「なるほど」とやはりかしこまっている。

<sup>ふと</sup>ころで  
「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに<sup>ふと</sup>懐手をして坐り込んでるんでしよう」

<sup>ぞう</sup>さ  
「それだから困る。決してそんな造作のないものではない。孟子は<sup>もうし</sup>求<sup>きゅう</sup>放<sup>ほう</sup>心

<sup>しょうこうせつ</sup>と云われたくらいだ。邵康節は<sup>しんようほう</sup>心要放と説いた事もある。また<sup>ぶっか</sup>仏家

ちゅうほうおしょう ぐふたいてん  
は 中 峯 和 尚 と云うのが 具 不 退 転 と云う事を教えている。なかなか容易  
には分らん」

「どうてい分りっこありませんね。全体どうすればいいんです」

たくあんぜんじ ふどうちしんみょうろく  
「御前は 沢 菴 禅 師 の 不 動 智 神 妙 録 というものを読んだ事があるか  
い」

「いいえ、聞いた事ありません」

はたらき  
「心をどこに置こうぞ。敵の身の 働 に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。

たち  
敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと思うところに心を置  
けば、敵を切らんと思うところに心を取らるるなり。わが太刀に心を置けば、我太刀に心  
を取らるるなり。われ切られじと思うところに心を置けば、切られじと思うところに心を

かまえ  
取らるるなり。人の 構 に心を置けば、人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きど  
ころはないとある」

あんしょう  
「よく忘れずに 暗 誦 したものですな。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじゃあ  
りませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、  
敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修  
養ばかりしているんですから。客があっても取次に出ないくらい心を置き去りにしている  
んだから大丈夫ですよ」

ごきどく  
「や、それは 御 奇 特 な事で——御前などもちとごいっしょにやったらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊ん  
でると思っていらっしゃるんでしょう」

「実際遊んでるじゃないかの」

かんちゅうおのず ぼう  
「ところが 閑 中 自 から 忙 ありでね」

そこつ おのずか かん  
「そう、粗 忽 だから修業をせんといかないと云うのよ、忙中 自 ら 閑 ありと云



せいく  
う 成 句 はあるが、閑中自ら忙ありと云うのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん」

「ええ、どうも聞きませんようで」

かな うなぎ  
「ハハハハそうなっちゃあ 敵 わない。時に伯父さんどうです。久し振りで東京の 鰻

ちくよう おご  
でも食っちゃあ。竹 葉 でも 奢 りましょう。これから電車で行くとすぐです」

はら  
「鰻も結構だが、今日はこれからすい 原 へ行く約束があるから、わしはこれで御免を  
こうむ  
蒙 ろう」

すぎはら じい  
「ああ 杉 原 ですか、あの 爺 さんも達者ですね」

すぎはら はら  
「杉 原 ではない、すい 原 さ。御前はよく間違ばかり云って困る。他人の姓名を取り  
違えるのは失礼だ。よく気をつけんといけない」

すぎはら  
「だって 杉 原 とかいてあるじゃありませんか」

すぎはら はら  
「杉 原 と書いてすい 原 と読むのさ」

「妙ですね」

みょうもくよ きゅういん  
「なに妙な事があるものか。名 目 読 みと云って昔からある事さ。蚯 蚓 を

わみょう がま  
和 名 でみみずと云う。あれは目見ずの名目よみで。蝦蟆の事をかいると云うのと同じ  
事さ」

「へえ、驚ろいたな」

あおむ すきがき  
「蝦蟆を打ち殺すと 仰 向 きにかえる。それを名目読みにかいると云う。透 垣 をす

がき くきたち すいはら いなか  
い 垣 、 莖 立 をくく立、皆同じ事だ。杉 原 をすぎ原などと云うのは田 舎 もの  
の言葉さ。少し気を付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい原へこれから行くんですか。困ったな」

いや  
「なに 厭 なら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇って頂いて、ここから乗って行こう」

かしこ おさん  
主人は「畏」まって直ちに「御三」を車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチョン

まげあたま  
髷 頭 へ山高帽をいただいて帰って行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

ざぶとん ふところで  
「なるほど」と再び座蒲団の上に坐ったなり「懐」手 をして考え込んでいる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持って仕合せなものさ。どこへ連れて行っ

てもあの通りなんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろかしたつもりで「大」  
喜んでいる。

「なにそんなに驚きやしない」

すわ  
「あれで驚かなけりや、胆力の「据」ったもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあるようだ。精神の修養を主張するとこ

ろなぞは「大」に敬服している」

「敬服しているかね。君も今に六十くらいになるとやっぱりあの伯父見たように、時候お

くれになるかも知れないぜ。しっかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利  
かないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいん  
だぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行ったって際限はあり  
やしない。とうてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に

あじわい  
味 がある。心そのものの修業をするのだから」とせんだって哲学者から承わった通  
りを自説のように述べ立てる。

やぎどくせん  
「えらい事になって来たぜ。何だか八木独仙君のような事を云ってるね」

がりょうくつ  
八木独仙と云う名を聞いて主人ははっと驚ろいた。実はせんだって「臥」竜窟 を訪問

ゆうぜん  
して主人を説服に及んで「悠」然 と立ち帰った哲学者と云うのが取も直さずこの八木独

しかつめ  
仙君であって、今主人が 鹿 爪 らしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売

なのであるから、知らんと思った迷亭がこの先生の名を 間 不 容 髪 の際に持ち出し

かりばな くじ  
たのは暗に主人の一夜作りの 仮 鼻 を 挫 いた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は けん のん お  
「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は 剣 呑 だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのって、あの男の説ときたら、十年前学校にいた時分と こんにち  
少しも変りゃしない」

「真理はそう変るものじゃないから、変らないところがたのもしいかも知れない」

ひいき  
「まあそんな 鼻 負 があるから独仙もあれで立ち行くんだね。第一八木と云う名からして、

よく出来てるよ。あの ひげ やぎ  
よく出来てるよ。あの 髯 が君全く山羊だからね。そうしてあれも寄宿舍時代からあの通

かつこう ふる むか  
りの 恰 好 で生えていたんだ。名前の独仙なども 振 ったものさ。昔し僕のところ  
へ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。いつまで立っても同じ事を

ね  
繰り返してやめないから、僕が君もう寝ようじゃないかと云うと、先生気楽なものさ、い  
や僕は眠くないとすまし切って、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから  
君は眠くなろうけれども、僕の方は大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むよ

ねずみ かじ  
うにして寝かしたまではよかったが——その晩 鼠 が出て独仙君の鼻のあたまを 噛  
ってね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟ったような事を云うけれども命は依然として惜しかつ

そうしん  
たと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が 総 身 にまわると大変だ、君どうかしてく

かみぎれ は  
れと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行って 紙 片 へ飯粒を貼っ  
てごまかしてやったあね」

「どうして」

こうやく ドイツ インドじん  
「これは舶来の 膏 薬 で、近来 独 逸 の名医が発明したので、印 度 人 などの毒蛇

か  
に噛まれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼っておけば大丈夫だと云ってね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思って安心してぐうぐう寝てしま

ったのさ。あくる日起きて見ると膏薬の下から糸屑がぶらさがって例の山羊髯に

こっけい  
引っかかっていたのは滑稽だったよ」

だいぶ  
「しかしあの時分より大分えらくなつたようだよ」

「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行った」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思った」

おおい  
「実はその時大に感心してしまったから、僕も大に奮発して修養をやろうと思つてるところなんだ」

ま  
「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真に受けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言  
う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざ  
となると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知ってるだろう。あの時寄宿の二階か  
ら飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

だいぶ  
「あれには当人大分説があるようじゃないか」

きほう しゅんしょう  
「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいものさ。禅の機鋒は峻峭な

せっか き こわ  
もので、いわゆる石火の機となると怖いくらい早く物に応ずる事が出来る。ほかのも

うろた  
のが地震だと云って狼狽えているところを自分だけは二階の窓から飛び下りたところに

びっこ  
修業の効があらわれて嬉しいと云って、跛を引きながらうれしがっていた。負惜みの

ぜん ぶつ  
強い男だ。一体禅とか仏とか云って騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

ねごと  
「この間来た時禅宗坊主の寝言見たような事を何か云つてつたろう」

でんこうえいり しゅんぷう  
「うん電光影裏に春風をきるとか云う句を教えて行ったよ」

おほこ むかくぜんじ  
「その電光さ。あれが十年前からの御箱なんだからおかしいよ。無覚禅師の電光  
ときたら寄宿舍中誰も知らないものはないくらいだった。それに先生時々せき込むと間違

えて電光影裏をさか 逆さまに春風影裏に電光をきると云うから面白い。今度ためして見たま

むこう  
え。向で落ちつき払って述べたてているところを、こっちでいろいろ反対するんだね。

てんとう  
するとすぐ顛倒して妙な事を云うよ」

かな  
「君のようないたずらものに逢っちゃ叶わない」

「どっちがいたずら者だか分りゃしない。僕は禅坊主だの、悟ったのは大嫌だ。僕の近所

なんぞういん  
に南蔵院と云う寺があるが、あすこに八十ばかりの隠居がいる。それでこの間の

ゆうだち じない らい さ  
白雨の時寺内へ雷が落ちて隠居のいる庭先の松の木を割いてしまった。ところ

おしょう つんぼ  
が和尚泰然として平気だと云うから、よく聞き合わせて見るとから 聾なんだね。  
それじゃ泰然たる訳さ。大概そんなものさ。独仙も一人で悟っていればいいのだが、やや

きちがい  
ともすると人を誘い出すから悪い。現に独仙の御蔭で二人ばかり 氣狂にされているか  
らな」

「誰が」

りのとうぜん おおい こ  
「誰がって。一人は理野陶然さ。独仙の御蔭で 大に禅学に凝り固まって鎌倉へ

えんがくじ  
出掛けて行って、とうとう出先で氣狂になってしまった。円覚寺の前に汽車の踏切り

うち  
があるだろう、あの踏切り内へ飛び込んでレールの上で座禅をするんだね。それで向う

だいきえん  
から来る汽車をとめて見せると云う 大気焰さ。もっとも汽車の方で留ってくれたから

い おぼ  
一命だけはとりとめたが、その代り今度は火に入って焼けず、水に入って 溺れぬ

こんごうふえ じない はすいけ はい  
金剛不壊のからだだと号して寺内の蓮池へ這入ってぶくぶくあるき廻った  
もんだ」

「死んだかい」

「その時も <sup>さいわい</sup> 幸、道場の坊主が通りかかって助けてくれたが、その後 <sup>ご</sup> 東京へ帰ってから、とうとう腹膜炎で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になった原因は僧堂で麦飯や <sup>まんねんづけ</sup> 万年漬 を食べたせいだから、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ」

「むやみに熱中するのも <sup>よ あ</sup> 善し悪しだね」と主人はちょっと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

「<sup>たちまちろうばいくん</sup> 立町老梅君さ。あの男も全く独仙にそそのかされて <sup>うなぎ</sup> 鰻が天上するような事ばかり言っていたが、とうとう君本物になってしまった」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になったのさ」

「何の事だい、それは」

「<sup>ぶたせん</sup> 八木が独仙なら、立町は <sup>へいはつ</sup> 豚仙さ、あのくらい食い意地のきたない男はなかったが、

あの食意地と禅坊主のわる意地が <sup>かまぼこ</sup> 併発したのだから助からない。始めは僕らも気がつかなかったが今から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国では <sup>蒲 鉾</sup> 蒲鉾が板へ乗って泳いでいます

のって、しきりに警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよかったが君表の <sup>きん</sup> どぶへ <sup>金</sup> 金

とんを掘りに行きましょうと <sup>うな</sup> 促がすに至っては僕も降参したね。それから二 <sup>にさんち</sup> 三日するとついに豚仙になって巢鴨へ収容されてしまった。元来豚なんぞが気狂になる資格はないんだが、全く独仙の御蔭ですこまで漕ぎ付けたんだね。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

「<sup>じだいきょう だいきえん</sup> いるだんじゃない。自 <sup>みづか</sup> 大 <sup>てんどうこうへい</sup> 狂で大 <sup>ごんげ</sup> 気 <sup>ごんげ</sup> 焰を吐いている。近頃は立町老梅なんて

名はつまらないと云うので、<sup>自</sup> 自 <sup>ら</sup> 天 <sup>道</sup> 公 <sup>平</sup> 平と号して、天道の <sup>権</sup> 権 <sup>化</sup> 化をも

って任じている。すさまじいものだよ。まあちょっと行って見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。気狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々は <sup>こうへい</sup>孔 平 とも書く事がある。それで何でも世人が迷ってるからぜひ救ってやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四五通貰ったが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりとられたよ」

<sup>とこ</sup>  
「それじゃ僕の 所 へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やっぱり赤い状袋だろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変った状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白な

<sup>あ</sup>  
り、人は中間に在って赤しと云う豚仙の格言を示したんだって……」

<sup>いんねん</sup>  
「なかなか 因 縁 のある状袋だね」

<sup>おおい こ</sup>  
「気狂だけに 大 に凝ったものさ。そうして気狂になつても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云つて来たらう」

<sup>なまこ</sup>  
「うん、海 鼠 の事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。それから？」

<sup>ふぐ ちょうせんになじん</sup>  
「それから河豚と 朝 鮮 仁 参 か何か書いてある」

<sup>うま あた</sup>  
「河豚と朝鮮仁参の取り合せは 旨 いね。おおかた河豚を食つて 中 ったら朝鮮仁参を

<sup>せん</sup>  
煎 じて飲めとでも云うつもりなんだろう」

「そうでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ気狂だもの。それっきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

<sup>おおい</sup>  
「アハハハ御茶でも上がればきびし過ぎる。それで 大 に君をやり込めたつものに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がって、大に笑い出す。主人は少か

どくしょう　しょかん　きんぱく  
らざる尊敬をもって反覆　読　誦　した書　翰　の差出人が金　箔　つきの狂人であ  
ると知ってから、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気がして腹立たしくもあり、

ふうてんびょう　がんみ  
また　瘋　癲　病　者の文章をさほど心労して　翫　味　したかと思うと恥ずかしくもあり、  
最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念

ざんき　ひか  
もあるので、立腹と、慚　愧　と、心配の合併した状態で何だか落ちつかない顔付をして　控  
えている。

くつぬぎ  
折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が二た足ほど　沓　脱　に響いたと思っ  
たら「ちょっと頼みます、ちょっと頼みます」と大きな声がする。主人の尻の重いに反して

おさん  
迷亭はまたすこぶる気軽な男であるから、御　三　の取次に出るのも待たず、通れと云いな

ま　おど  
がら隔ての中の間を二た足ばかりに飛び越えて玄関に　躍　り出した。人のうちへ案内も乞

はい  
わずにつかつか這入り込むところは迷惑のようだが、人のうちへ這入った以上は書生同様

つと  
取次を　務　めるからはなはだ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御  
客さんが玄関へ出張するのに主人たる苦沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普  
通の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずであるが、そこが苦沙弥先生である。平気

ただ  
に座布団の上へ尻を落ちつけている。但　し落ちつけているのと、落ちついているのとは、

だいぶ  
その趣は大　分　似ているが、その実質はよほど違う。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主  
人ちょっと御足労だが出てくれたまえ。君でなくっちゃ、間に合わない」と大きな声を出

ふところ  
す。主人はやむを得ず　懐　手　のままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の  
名刺を握ったまましゃがんで挨拶をしている。すこぶる威厳のない腰つきである。その名

よしだとらぞう  
刺には警視庁刑事巡查　吉　田　虎　蔵　とある。虎蔵君と並んで立っているのは二十五六

せい　とうざん  
の　背　の高い、いなせな　唐　棧　ずくめの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懐手



をつた  
をしたまま、無言で突立っている。何だか見たような顔だと思ってよくよく観察すると、

やま いも  
見たようなどころじゃない。この間深夜御来訪になって山の芋を持って行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄関からおいでになったな。

かた  
「おいこの方は刑事巡查でせんだつての泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざおいでになったんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いていねい

鄭寧に御辞儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こっちが刑事だと

はやがてん わたし  
早合点をしたのだろう。泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私が泥棒ですよと断わる訳にも行かなかつたと見えて、すまして立っている。やはり懐手のままである。

てじょう きづかい  
もっとも手錠をはめているのだから、出そうと云つても出る気遣はない。通例のものならこの様子でたいていはわかるはずだが、この主人は当世の人間に似合わず、む

おかみ  
やみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上の御威光となると非常に恐いものと心得ている。もっとも理論上から云うと、巡查などは自分達が金を出して番人に雇つておくのだからの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にびよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果

むく  
となつてかように子に酬つたのかも知れない。まことに気の毒な至りである。

巡查はおかしかつたと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時まで

にほんづつみ  
日本堤の分署まで来て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生たいがい忘れてる。ただ覚えているの

たたらさんぺい  
は多々良三平の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わんと思つたが、盗難

よたろう ていさい  
品は……と云いかけてあとが出ないのはいかにも与太郎のようで体裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明瞭の答が出来んのは

いちにんまえ  
一人前ではない証拠だと、思い切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の襟<sup>えり</sup>へあごを入れた。迷亭はアハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね」と云った。巡査だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻ったようです。——まあ来て見たら分るでしょう。それでね、下げ渡したら請書<sup>うけしょ</sup>が入るから、印形<sup>いんぎょう</sup>を忘れずに持つ

ておいでなさい。——九時までに来なくってはいかん。日本堤分署<sup>にほんづつみぶんしょ</sup>です。——

浅草警察署の管轄<sup>かんかつない</sup>内の日本堤分署です。——それじゃ、さようなら」とひとり<sup>ひと</sup>で弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出せないので、門をしめる事が出来なから開け放しのまま行ってしまった。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらして、びしゃりと立て切った。

「アハハハ君は刑事を大変尊敬するね。つねにああ云う恭謙<sup>きょうけん</sup>な態度を持つてるとい

ていねい<sup>ていねい</sup>い男だが、君は巡査だけに鄭寧<sup>ていねい</sup>なんだから困る」

「だってせつかく知らせて来てくれたんじゃないか」

「知らせに来るたって、先は商売だよ。当り前にあしらってりゃ沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかない商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口<sup>わるくち</sup>はやめにしよう。しかし刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至っては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「へいしんていとう<sup>へいしんていとう</sup>「たった今平身低頭<sup>へいしんていとう</sup>したじゃないか」

「馬鹿あ云ってら、あれは刑事だね」

「刑事があんななりをするものか」

「刑事だからあんななりをするんじゃないか」

がんこ  
「頑固だな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに <sup>ふところで</sup> 懐 <sup>つた</sup> 手 <sup>つた</sup> なんかして、突立っているものかね」

「刑事だって懐手をしないとは限るまい」

「そう猛烈にやって来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間あいつは始終あのままで立っていたのだぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云っても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云ってるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた訳じゃないんだから。ただそう思っ <sup>ひと</sup> て 独 <sup>ひと</sup> りで強情を張ってるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい <sup>さいど</sup> 濟 <sup>さいど</sup> 度 <sup>さいど</sup> すべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙ってしまった。主人は久し振りで迷亭を <sup>へこ</sup> 凹 <sup>へこ</sup> ましたと思っ <sup>へこ</sup> て大得意である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張っただけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情を張っ

ただけ迷亭よりえらくなったのである。世の中にはこんな <sup>とんちんかん</sup> 頓 <sup>とんちんかん</sup> 珍 <sup>とんちんかん</sup> 漢 <sup>とんちんかん</sup> な事はまもある。

強情さえ張り通せば勝った気であるうちに、当人の人物としての相場は <sup>はる</sup> 遙 <sup>はる</sup> かに下落して

しまう。不思議な事に頑固の本人は死ぬまで自分は <sup>めんぼく</sup> 面 <sup>めんぼく</sup> 目 <sup>めんぼく</sup> を施こしたつもりかなにかで、

その時以後人が <sup>けいべつ</sup> 軽 <sup>けいべつ</sup> 蔑 <sup>けいべつ</sup> して相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうさ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか <sup>たた</sup> と 擲 <sup>たた</sup> きつけるように云ったのは <sup>さかん</sup> 壯 <sup>さかん</sup> なものだった。

いきおい  
「えらい <sup>いきおい</sup> 勢 <sup>いきおい</sup> だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる <sup>きづかい</sup> 気遣はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった。ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とふんぷんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。 <sup>よしわら</sup> 吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京の一つしかないやね。どうだ、行って見る気かい」と迷亭君またからかいかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々 <sup>しゅんじゅん てい</sup> 逡巡の体であったが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行くと云った以上はきっと行く」と入ら

ざるところに <sup>りきん</sup> 力味で見せた。愚人は得てこんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白かろう、見て来たまえ」と云ったのみである。 <sup>ひとはらん</sup> 一波瀾を生じた

刑事事件はこれで <sup>ひとま らくちやく</sup> 一先落着 <sup>ろう</sup> を告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁を弄し

て日暮れ方、あまり遅くなると伯父に <sup>おこ</sup> 怒られると云って帰って行った。

迷亭が帰ってから、そこそこに晩飯をすまして、また書齋へ引き揚げた主人は再び <sup>きょうしゅ しも</sup> 拱手して下のように考え始めた。

「自分が感服して、 <sup>おおい</sup> 大に見習おうとした八木独仙君も迷亭の話しによって見ると、別段見習うにも及ばない人間のようなのである。のみならず彼の唱道するところの説は何だか非

常識で、迷亭の云う通り多少 <sup>ふうてんてき</sup> 瘋癲的系統に属してもおりそうだ。いわんや彼は

<sup>れっき</sup> 歴乎とした二人の <sup>きちがい</sup> 気狂の子分を有している。はなはだ危険である。 <sup>めった</sup> 滅多に近寄

ひ ず よ  
ると同系統内に引き摺り込まれそうである。自分が文章の上において驚嘆の余、これこそ

てんどうこうへいことじつみょう  
大見識を有している偉人に相違ないと思ひ込んだ 天 道 公 平 事 実 名

たちまちろうばい

立 町 老 梅 は純然たる狂人であつて、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記

ふうてんいん ほしい  
述が棒大のざれ言にもせよ、彼が 瘋 癲 院 中 に盛名を 擲 ままにして天道の主宰

みずか  
をもつて 自 ら任ずるは恐らく事実であろう。こう云う自分もことによると少々ござつ  
ているかも知れない。同気相求め、同類相集まると云うから、気狂の説に感服する以上は  
——少なくともその文章言辞に同情を表する以上は——自分もまた気狂に縁の近い者であ

ちゅうか なら きよ  
るだろう。よし同型中に 鑄 化 せられんでも軒を 比 べて狂人と隣り合せに 居 を

ぼく ま  
ト するとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの間にか同室内に膝を突き合せて談笑す  
る事がないとも限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見るとこのほどじゅうから自分

きじょう みょう へんぼう ちん  
の脳の作用は我ながら驚くくらい 奇 上 に 妙 を点じ 変 傍 に 珍 を添えてい

のうしょういっせき  
る。 脳 漿 一 勺 の化学的变化はとにかく意志の動いて行為となるところ、発し

あたり ぜつじょう りゅうせん  
て言辞と化する 辺 には不思議にも中庸を失した点が多い。 舌 上 に 竜 泉

えきか せいふう しょう しこん きょうしゅう きんとう  
なく、腋下に 清 風 を 生 ぜざるも、歯 根 に 狂 臭 あり、筋 頭 に

ふうみ  
瘋 味 あるをいかんせん。いよいよ大変だ。ことによるともうすでに立派な患者になって

さいわい きずつ  
いるのではないかしらん。まだ 幸 に人を 傷 けたり、世間の邪魔になる事をし  
出かさんからやはり町内を追払われずに、東京市民として存在しているのではなからうか。

みやくはく  
こいつは消極の積極のと云う段じゃない。まず 脈 搏 からして検査しなくてはならん。  
しかし脈には変りはないようだ。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の気味でもない。し  
かしどうも心配だ。」

きちがい  
「こう自分と 氣 狂 ばかりを比較して類似の点ばかり勘定しては、どうしても気狂

の領分を脱する事は出来そうにもない。これは方法がわかった。気狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈するからこんな結論が出るのである。もし健康な人を本位にし

そば  
てその 傍へ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手近から始めなくてはいかん。第一に今日来たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩まで弁

たま ぼうぐみ  
当持参で 球ばかり磨いている。これも 棒組だ。第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻るのを天職のように心得ている。全く陽性の気狂に相違ない。第四はと……金田の妻君。

こんじょう きま  
あの毒悪な 根性は全く常識をはずれている。純然たる気じるしに 極ってる。第

うやうや  
五は金田君の番だ。金田君には御目に懸った事はないが、まずあの細君を 恭しくお

きんしつ さしつか  
っ立てて、 琴瑟 調和しているところを見ると非凡の人間と見立てて 差支えある

いみょう  
まい。非凡は気狂の 異名であるから、まずこれも同類にしておいて構わない。それか

そうきょう  
らと、——まだあるある。落雲館の諸君子だ、年齢から云うとまだ芽生えだが、 躁狂

むな あっぱれ ごと  
の点においては一世を 空しゅうするに足る 天晴な 豪のものである。こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫になって来た。ことによると社会

しのぎ けず  
はみんな気狂の寄り合かも知れない。気狂が集合して 鏑を削ってつかみ合い、いが

ののし くず  
み合い、 罵り合い、奪い合って、その全体が団体として細胞のように 崩れたり、持ち上ったり、持ち上ったり、崩れたりして暮して行くのを社会と云うのではないか知らん。

りくつ ふうてんいん  
その中で多少 理窟がわかって、分別のある奴はかえって邪魔になるから、 瘋癲院  
というものを作って、ここへ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあばれているものはかえって気狂である。気狂も孤立している間はどこまでも気狂にされてしまうが、団体となって勢力が出

らんよう  
ると、健全の人間になってしまうのかも知れない。大きな気狂が金力や威力を 濫用し

しょうきちがい しえき  
て多くの 小気狂を使役して乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている

例は少なくない。何が何だか分らなくなった」

けいけい もと  
以上は主人が当夜 檠々たる孤灯の下で沈思熟慮した時の心的作用をありのまま

えが  
に描き出したものである。彼の頭脳の不透明なる事はここにも著るしくあらわれている。

はちじひげ たくわ  
彼はカイゼルに似た八字髯を蓄うるにもかかわらず狂人と常人の差別さえなし

ぼんくら  
得ぬくらいの凡倉である。のみならず彼はせつかくこの問題を提議して自己の思索力  
に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず彼は徹底的

ぼうばく ほうしゅつ  
に考える脳力のない男である。彼の結論の茫漠として、彼の鼻孔から迸出す

ほそく  
る朝日の煙のごとく、捕捉しがたきは、彼の議論における唯一の特色として記憶すべき  
事実である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。

ひざ けごろも  
人間の膝の上へ乗って眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそっと人間の  
腹にこすり付ける。すると一道の電気が起って彼の腹の中のいきさつが手にとるように吾

な  
輩の心眼に映ずる。せんだってなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫で廻しながら、突然こ

は  
の猫の皮を剥いでちゃんちゃんにしたらさぞあたたかによかろうと飛んでもない

りょうけん けど  
了見をむらむらと起したのを即座に気取って覺えずひやとした事さえある。

こわ わけあい さいわい  
怖い事だ。当夜主人の頭のなかに起った以上の思想もそんな訳合で幸にも

おおい  
諸君にご報道する事が出来るように相成ったのは吾輩の大に榮譽とするところである。

ただ  
但し主人は「何が何だか分らなくなった」まで考えてそのあとはぐうぐう寝てしまった

こうご  
のである、あすになれば何をどこまで考えたかまるで忘れてしまうに違ない。向後もし

きちがい ペン  
主人が 氣 狂 について考える事があるとすれば、もう一 返 出直して頭から考え始めな

ければならぬ。そうすると果してこんな 徑 路 を取って、こんな風に「何が何だか分らな  
くなる」かどうか保証出来ない。しかし何返考え直しても、 何 なんじょう 条 の径路をとって  
進もうとも、ついに「何が何だか分らなくなる」だけはたしかである。

十

ふすまご  
「あなた、もう七時ですよ」と 襖 越しに細君が声を掛けた。主人は眼がさめているの  
だか、寝ているのだか、向うむきになったぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の  
癖である。ぜひ何とか口を切らなければならない時はうんと云う。このうんも容易な事で

い  
は出てこない。人間も返事がうるさくなるくらい 無 ぶしょう 精 になると、どこことなく おもむき 趣  
があるが、こんな人に限って女に好かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あまり  
珍重しておらんようだから、その他は推して知るべしと云っても大した間違はなからう。

けいせい  
親兄弟に見離され、あかの他人の 傾 城 に、可愛がらりょうはずがない、とある以上は、  
細君にさえ持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはずがない。何も異性間に不人望

ばくろ  
な主人をこの際ことさらに 暴 露 する必要もないのだが、本人において存外な考え違をし

まよい  
て、全く年廻りのせいで細君に好かれないのだなどと理窟をつけていると、 迷 の種で  
あるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちょっと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、

むこう きよく  
向 をむいてうんさえ発せざる以上は、その 曲 は夫にあつて、妻にあらずと論定し

ほうき かつ  
たる細君は、遅くなっても知りませんよと云う姿勢で 箒 とはたきを 担 いで書斎の方

たた  
へ行ってしまった。やがてぱたぱた書斎中を 叩 き散らす音がするのは例によって例のご  
とき掃除を始めたのである。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目



を運びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差し支えないようなものの、ここの細君の掃除法のごときに至ってはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のために掃除をしているからである。はたきを一通り障子へかけて、箒を一応畳の上へ滑らせる。それで掃除は完成

した者と解釈している。掃除の源因及び結果に至っては微塵の責任だに背負っておらん。かるが故に綺麗な所は毎日綺麗だが、ごみのある所、ほこりの積っている所はいつでもご

みが溜まってほこりが積っている。告朔のと云う故事もある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやっても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦労にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくって頑として結びつけられているにもかかわらず、

掃除の実に至っては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が発明せられざ

る昔のごとく、毫も挙っておらん。思うにこの両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかんにかかわらず結合せられたものであろう。

吾輩は主人と違って、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になって参った。とう

てうちのものさえ膳に向わぬさきから、猫の身分をもって朝めしに有りつける訳のも

のではないが、そこが猫の浅ましきで、もしや煙の立った汁の香が鮑貝の中から、うまそうに立ち上っておりはすまいかと思うと、じっとしていられなくなった。はかない事を、はかないと知りながら頼みにするときは、ただその頼みだけを頭の中に描いて、動かずに落ちついている方が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願と實際が、合うか合わぬか是非とも試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてる

事ですら、最後の失望を自ら事実の上に受取るまでは承知出来んものである。吾輩は

たまらなくなつて台所へ這出した。まずへつついの影にある鮑貝の中を覗い

て見ると案に違わず、夕べ舐め尽したまま、闐然として、怪しき光が引窓を洩る

はつあき おさん た たて おはち  
初 秋 の日影にかがやいている。御 三 はすでに炊き 立 の飯を、御 櫃 に移して、

しちりん なべ かま わ  
今や七 輪 にかけて 鍋 の中をかきまぜつつある。釜 の周囲には沸き上がって流れ

いくすじ は  
だした米の汁が、かさかさに 幾 条 となくこびりついて、あるものは吉野紙を貼りつけ  
たごとくに見える。もう飯も汁も出来ているのだから食わせてもよきそうなものだと思っ  
た。こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よしんば自分の望通りにならなかったって

いそうろう  
元々で損は行かないのだから、思い切って朝飯の催促をしてやろう、いくら 居 候 の  
身分だってひもじいに変りはない。と考え定めた吾輩はにやあにやあと甘えるごとく、訴

えん けしき  
うるがごとく、あるいはまた 怨 ずるがごとく泣いて見た。御三はいっこう顧みる 景 色

たかく うと  
がない。生れついてのお多 角 だから人情に 疎 いのはとうから承知の上だが、そこをう

てぎわ  
まく泣き立てて同情を起させるのが、こっちの 手 際 である。今度はにやごにやごとやっ

おん てんがい ゆうし  
て見た。その泣き声は吾ながら悲壮の 音 を帯びて 天 涯 の遊 子 をして断腸の思あ

てん かえり つんぼ  
らしむるに足ると信ずる。御三は 恬 として 顧 みない。この女は 豊 なのかも知

わけ  
れない。豊では下女が勤まる 訳 がないが、ことによると猫の声だけには豊なのだろう。

しきもう  
世の中には 色 盲 というのがあって、当人は完全な視力を具えているつもりでも、医者

かたわ せいもう  
から云わせると片 輪 だそうだが、この御三は 声 盲 なのだろう。声盲だって片輪に

おうふう  
違いない。片輪のくせにいやに 横 風 なものだ。夜中なぞでも、いくらこっちが用があ  
るから開けてくれると云っても決して開けてくれた事がない。たまに出してくれたと思う

しも  
と今度はどうしても入れてくれない。夏だって夜露は毒だ。いわんや 霜 においてをやで、

つら  
軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、どんなに 辛 いかとうてい想像が出来るもので

こうむ  
はない。この間しめ出しを食った時なぞは野良犬の襲撃を 蒙 って、すでに危うく見え

やね あが ふる  
たところを、ようやくの事で物置の家根へかけ上って、終夜 顫えつづけた事さえある。

はいたい  
これ等は皆御三の不人情から 胚胎した不都合である。こんなものを相手にして鳴いて

かんのう  
見せたって、感応のあるはずはないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいていの事ならやる気になる。にゃごおうにゃごおうと三度目には、注意を喚起するためにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分では

おん  
ベトヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音と確信しているのだが御三には何等の

の  
影響も生じないようだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚はね除けて、中から堅炭の

しちりん  
四寸ばかり長いのを一本つかみ出した。それからその長い奴を七輪の角でぽんぽんと

たた  
敲いたら、長いのが三つほどに碎けて近所は炭の粉で真黒くなった。少々は汁の中へも

はい  
這入ったらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を

なべ  
鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそうにも

しょうぜん  
ない。仕方がないから 悄然と茶の間の方へ引きかえそうとして風呂場の横を通り過

はんじょう  
ぎると、ここは今女の子が三人で顔を洗ってる最中で、なかなか 繁昌している。

顔を洗うと云ったところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないくらい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。

ぬ ぞうきん な  
一番小さいのがバケツの中から濡れ 雑巾を引きずり出してしきりに顔中撫で廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちがわるかるうけれども、地震がゆるたびにおもちろいわと云う子だからこのくらいの事はあっても驚ろくに足らん。ことによると八木独

みずか  
仙君より悟っているかも知れない。さすがに長女は長女だけに、姉をもって 自ら任じ

ほうりだ  
ているから、うがい茶碗をからからかんと 抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかかると。坊やちゃんもなかなか自信家だから容易に姉の云う事なんか聞きそうにしない。「いやーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引っ張り返した。このばぶなる語は

いかなる意義で、いかなる語源を有しているか、誰も知ってるものがない。ただこの坊や

ちゃんが <sup>かんしゃく</sup> 癩 癩 を起した時に折々ご使用になるばかりだ。雑巾はこの時姉の手と、坊

やちゃんの手で左右に引っ張られるから、水を含んだ真中からぼたぼた <sup>しづく た</sup> 雫 が垂れて、  
容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。坊やは

これでも <sup>げんろく</sup> 元 禄 を着ているのである。元禄とは何の事だとだんだん聞いて見ると、

ちゅうがた <sup>中 形</sup> の模様なら何でも元禄だそうだ。一体だれに教わって来たものか分らない。「坊

やちゃん、元禄が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落れた事を云う。その <sup>しゃ</sup> 癖 <sup>くせ</sup> この

姉はついこの間まで元禄と <sup>すごろく</sup> 双 六 とを間違えていた <sup>ものし</sup> 物 識 りである。

元禄で思い出したからついでに <sup>しゃべ</sup> 喋 舌 ってしまうが、この子供の言葉ちがいをやる事は

おびただ <sup>きのこ</sup> 夥 しいもので、折々人を馬鹿にしたような間違を云ってる。火事で <sup>きのこ</sup> 茸 が飛ん

で来たり、<sup>おちゃ みそ</sup> 御 茶 の味噌の女学校へ行ったり、<sup>えびす だいどこ</sup> 恵比寿、台 所 と並べたり、或る時な

どは「わたし <sup>わらだな</sup> 藁 店 の子じゃないわ」と云うから、よくよく聞き <sup>ただ</sup> 糺 して見ると

うらだな <sup>裏 店</sup> と藁店を混同していたりする。主人はこんな間違を聞くたびに笑っているが、自

分が学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽な <sup>ごびゅう</sup> 誤 謬 を真面目になって、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——当人は坊やとは云わない。いつでも坊ばと云う——元禄が濡れたのを見て

<sup>げん</sup> 「元 どころがべたい」と云って泣き出した。元禄が冷たくては大変だから、御三が台所か

ら飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。この騒動中比較的静かであったのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向うむきになって棚の上からころがり落ちた、お

しろい <sup>びん</sup> 白 粉 の瓶 をあけて、しきりに御化粧を <sup>ほどこ</sup> 施 している。第一に突っ込んだ指をもっ

な たて  
で鼻の頭をキューと撫でたから 豎 に一本白い筋が通って、鼻のありかがいささか

ぶんみょう  
分 明 になって来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白いかたまりが出来上った。これだけ装飾がととのったところへ、下女がはいって来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々

てい  
不満の 体 に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寝室まで来てもう起きたかとひそかに様

ともんはん  
子をうかがって見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り 十 文 半 の甲の高い足

すそ は  
が、夜具の 裾 から一本食み出している。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思って、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のような男である。ところへ書斎の掃除をしてしま

ほうき かつ さいぜん ふすま  
った妻君がまた 箒 とはたきを 担 いでやってくる。最 前 のように 襖 の入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立って、首の出ない夜具

ふたあし  
を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から 二 歩 ばかり進んで、箒をとんと

さ  
突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚めていた。覚めているから、細君の襲撃にそなうため、あらかじめ夜具の中に首もろと

こも みのが  
も立て 籠 ったのである。首さえ出さなければ、見 逃 してくれる事もあるうかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があったから、まず安心と腹のうちで思っていると、とんと突いた箒が何でも三尺くらいの距離に追っていたにはちょっと驚ろいた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声でうんと返事をした。

「九時までにはいらっしゃるのでしょうか。早くなさらないと間に合いませんよ」

よぎ そでぐち  
「そんなに言わなくても今起きる」と夜着の 袖 口 から答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食って、起きるかと思って安心していると、また寝込まれつけているから、油断は出来ないと「さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、なお起き

わがままもの  
ろと責めるのは気に食わんものだ。主人のごとき我儘者にはなお気に食わん。ここ

かぶ は  
においてか主人は今まで頭から被っていた夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を  
あ  
二つとも開いている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」  
「起きるとおっしゃってもお起きなさらんじゃありませんか」

うそ  
「誰がいつ、そんな嘘をついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どっちが馬鹿だか分りゃしない」と妻君ふんとして箒を突いて枕元に立っているところは勇ましかった。この時裏の車屋の子供、八っちゃんが急に大きな声をしてワーと泣き出

おこ  
す。八っちゃんは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命

ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたびに八っちゃんを泣かせて小遣になる

おふくろ  
かも知れんが、八っちゃんこそいい迷惑だ。こんな御袋を持ったが最後朝から晩まで泣き通しに泣いていなくてはならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少々怒るのを

ひか  
差し控えてやったら、八っちゃんの寿命が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼

ぐ  
まれたって、こんな愚な事をするのは、天道公平君よりもはげしくおいでになっている方だと鑑定してもよからう。怒るたびに泣かせられるだけなら、まだ余裕もあるけれども、

やと いまどやき  
金田君が近所のゴロツキを備って今戸焼をきめ込むたびに、八っちゃんは泣かねばならぬのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して、早手廻しに八っちゃんは泣いているのである。こうなると主人が八っちゃん

ですう  
だか、八っちゃんが主人だか判然しなくなる。主人にあてつけるに手数は掛らない、ち

けんつく よこ っら  
よっと八っちゃんに剣突を食わせれば何の苦もなく、主人の横っ面を張った訳

むか とら  
になる。昔し西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃亡して、捕えられん

時は、偶像をつくって人間の代りに火あぶりにしたと云うが、彼等のうちにも西洋の故事

つうぎょう  
に通 曉 する軍師があると見えて、うまい計略を授けたものである。落雲館と云い、

にがて  
八っちゃんの御袋と云い、腕のきかぬ主人にとっては定めし苦 手 であろう。そのほか苦  
手はいろいろある。あるいは町内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がない  
から、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

かんしゃく  
八っちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝っぱらからよほど 癩 癩 が起ったと見えて、

ふとん  
たちまちがばと 布 団 の上に起き直った。こうなると精神修養も八木独仙も何もあつたも

か  
のじゃない。起き直りながら両方の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き搔き

くびすじ えり  
廻す。一ヵ月も溜っているフケは遠慮なく、頸 筋 やら、寝巻の襟 へ飛んでくる。非

ひげ  
常な壮観である。髯 はどうだと見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん然とおっ立っている。

おこ  
持主が 怒 っているのに髯だけ落ちついてはすまないとでも心得たものか、一本一本

かんしゃく  
に 癩 癩 を起して、勝手次第の方角へ猛烈なる勢をもって突進している。これとても

みもの きのう ドイツ  
なかなかの見 物 である。昨 日 は鏡の手前もある事だから、おとなしく独 乙 皇帝陸  
下の真似をして整列したのであるが、一晚寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに本

い たち  
来の面目に帰って思い思いの出で 立 に戻るのである。あたかも主人の一夜作りの精神修

ぬぐ やちよてき  
養が、あくる日になると 拭 うがごとく奇麗に消え去って、生れついで野 猪 的 本

きた  
領が直ちに全面を暴露し 来 るのと一般である。こんな乱暴な髯をもっている、こんな乱  
暴な男が、よくまあ今まで免職にもならず教師が勤まったものだと思うと、始めて日本  
の広い事がわかる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのもあ  
らう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信しているらしい。

はがき  
いざとなれば巢鳴へ 端 書 を飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

きのう こんとん  
この時主人は、昨日紹介した混沌たる太古の眼を精一杯に見張って、向うの戸

棚をきつと見た。これは高さ一間を横に仕切って上下共 おのおの 各 二枚の袋戸をはめたもの

である。下の方の戸棚は、ふとん すそ 布団の裾とすれすれの距離にあるから、起き直った主人が  
眼をあきさえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来ている。見ると模様を置いた

紙がところどころ破れて妙な はらわた 腸があからさまに見える。腸にはいろいろなのがある。

かっぱんずり  
あるものは活版摺で、あるものは肉筆である。あるものは裏返して、あるものは逆  
さまである。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなった。今までは

つらま おこ  
車屋のかみさんでも 捕えて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらいにまで 怒

ほごがみ  
っていた主人が、突然この反古紙を読んで見たくなるのは不思議のようであるが、こう

もなか  
云う陽性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くときに最中の一つもあてがえば

むか ふすまひ え  
すぐ笑うと一般である。主人が 昔し去る所の御寺に下宿していた時、襖一と重を  
隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは元来意地のわるい女のうちでもっとも意地の

なべ  
わるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋をたたきな  
がら、今泣いた鳥がもう笑った、今泣いた鳥がもう笑ったと拍子を取って歌ったそうだ、

きらい  
主人が尼が大嫌になったのはこの時からだと云うが、尼は嫌にせよ全くそれに違ない。  
主人は泣いたり、笑ったり、嬉しがったり、悲しがったり人一倍もする代りにいずれも長

しんき  
く続いた事がない。よく云えば執着がなくて、心機がむやみに転ずるのだろうが、これ

うす ぺら はな ぱり  
を俗語に翻訳してやさしく云えば奥行のない、薄っ片の、鼻っ張だけ強いただ

は  
っ子である。すでにだっ子である以上は、喧嘩をする勢で、むっくと匆ね起きた主人が

ふくろど  
急に気をかえて 袋戸の腸を読みにかかるのももっともと云わねばなるまい。第一に眼



にとまったのが伊藤博文の逆か立ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。

かんこくとうかん おふれ しっぽ  
韓 国 統 監 もこの時代から御布令の尻尾を追っ懸けてあるいていたと見える。  
大将この時分は何をしていたんだらうと、読めそうにないところを無理によむと

おおくらきょう  
大 蔵 卿 とある。なるほどえらいものだ、いくら逆か立ちしても大蔵卿である。  
少し左の方を見ると今度は大蔵卿横になって昼寝をしている。もつともだ。逆か立ちでは

きづかい もくばん  
そう長く続く 気 遣 はない。下の方に大きな 木 板 で汝はと二字だけ見える、あと  
が見たいがあいにく露出しておらん。次の行には早くの二字だけ出ている。こいつも読み  
たいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であったら、人のものでも構わ  
ずに引っぺがすかも知れない。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから事

ゆ ねがわ  
実を挙げるためには何でもする。あれは始末に行かないものだ。願 くばもう少し遠慮  
をしてもらいたい。遠慮をしなければ事實は決して挙げさせない事にしたらよかろう。聞

らしききょう おとしい  
くところによると彼等は 羅 織 虚 構 をもって良民を罪に 陥 れる事さえある  
そうだ。良民が金を出して雇っておく者が、雇主を罪にするなどときはこれまた立派な

きちがい おおいたけん  
気 狂 である。次に眼を転じて真中を見ると真中には 大 分 県 が宙返りをしてい  
る。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだから、大分県が宙返りをするのは当然である。

にぎ こぶし  
主人はここまで読んで来て、双方へ 握 り 拳 をこしらえて、これを高く天井に向けて  
突きあげた。あくびの用意である。

くじら とおぼえ きわ  
このあくびがまた 鯨 の 遠 吠 のようにすこぶる変調を 極 めた者であったが、  
それが一段落を告げると、主人はそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて

ふとん よぎ  
行った。待ちかねた細君はいきなり 布 団 をまくって夜着を畳んで、例の通り掃除をはじ  
める。掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方も十年一日のごとく例の通りであ  
る。先日紹介をしたごとく依然としてがーがー、げーげーを持續している。やがて頭を分

てぬぐい しゅつぎよ  
け終って、西洋 手 拭 を肩へかけて、茶の間へ 出 御 になると、超然として長火

けやき じょりんもく あか そうおと  
鉢の横に座を占めた。長火鉢と云うと 櫛 の 如 輪 木 か、銅 の 総 落 して、

あらいがみ ながぎせる くろがき ふち  
洗 髪 の姉御が立膝で、長 煙 管 を 黒 柿 の 縁 へ叩きつける様を想見する

くしゃみ  
諸君もないとも限らないが、わが 苦 沙 弥 先生の長火鉢に至っては決して、そんな意気な

しろうと けんとう  
ものではない、何で造ったものか 素 人 には 見 当 のつかんくらい古雅なものであ

しろもの  
る。長火鉢は拭き込んでてらてら光るところが 身 上 なのだが、この 代 物 は櫛

きり ふきん  
か桜か 桐 か元来不明瞭な上に、ほとんど 布 巾 をかけた事がないのだから陰気で引き立

おびただ  
たざる事 夥 しい。こんなものをどこから買って来たかと云うと、決して買った

おぼえ  
覚 はない。そんなら貰ったかと聞くと、誰もくれた人はないそうだ。しからは盗んだ

ただ あいまい  
のかと 糺 して見ると、何だかその辺が 曖 昧 である。昔し親類に隠居がおって、その  
隠居が死んだ時、当分留守番を頼まれた事がある。ところがその後一戸を構えて、隠居所  
を引き払う際に、そこで自分のもののように使っていた火鉢を何の気もなく、つい持って  
来てしまったのだそうだ。少々たちが悪いようだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事  
は世間に往々ある事だと思う。銀行家などは毎日人の金をあつかいつけているうちに人の  
金が、自分の金のように見えてくるそうだ。役人は人民の召使である。用事を弁じさせる

かさ  
ために、ある権限を委託した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を 笠 に着  
て毎日事務を処理していると、これは自分が所有している権力で、人民などはこれについ

くちばし い  
て何らの 喙 を容る理由がないものなどと狂ってくる。こんな人が世の中に充満  
している以上は長火鉢事件をもって主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ。もし  
主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

そば ひか さっきぞうきん  
長火鉢の 傍 に陣取って、食卓を前に 控 えたる主人の三面には、先 刻 雑 巾 で

おちゃ しろいびん  
顔を洗った坊ばと 御 茶 の味噌の学校へ行くとん子と、お 白 粉 罎 に指を突き込んだ

せいぞろい  
すん子が、すでに 勢 揃 をして朝飯を食っている。主人は一応この三女子の顔を公平

なんばんてつ つば りんかく  
に見渡した。とん子の顔は 南 蛮 鉄 の刀の 鏢 のような 輪 廓 を有している。す

おもかげ りゅうきゅうぬり しゅぼん  
ん子も妹だけに多少姉の面影を存して琉球塗の朱盆くらいな資格

ひと おもなが ただ  
はある。ただ坊ばに至っては独り異彩を放って、面長に出来上っている。但し  
たて

豎に長いのなら世間にその例もすくなくないが、この子のは横に長いのである。いかに

やす  
流行が変化し易くたって、横に長い顔がはやる事はなかろう。主人は自分の子ながらも、つくづく考える事がある。これでも生長しなければならぬ。生長するところではない、

すみや ぜんでら たけのこ  
その生長の速かなる事は禅寺の筍が若竹に変化する勢で大きくなる。主

うし おって  
人はまた大きくなったなと思うたんに、後ろから追手にせまられるような気がして

くうばく  
ひやひやする。いかに空漠なる主人でもこの三令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以上はどうか片付けなくてはならんくらいも承知している。承知しているだけで片付ける手腕のない事も自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て余しているところである。持て余すくらいなら製造しなければいいのだが、そこが人間である。人間

い ねつぞう みずか  
の定義を云うとほかに何にもない。ただ入らざる事を捏造して自ら苦しんでいる者だと云えば、それで充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をたべる。ところが始末におえないのは坊ばである。坊ばは当年にとって三歳であ

き はし  
るから、細君が気を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉の茶碗を奪い、姉の箸を引ったくって、持ちあ

にく  
つかい 悪い奴を無理に持ちあつかっている。世の中を見渡すと無能無才の小人ほど、い

がら  
やにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全くこの坊ば時代

ほうが よ きた  
から萌芽しているのである。その因って来るところはかくのごとく深いことから、決

くんとう なお  
して教育や薫陶で癒せる者ではないと、早くあきらめてしまうのがいい。

ぶんど  
坊ばは隣りから分捕った偉大なる茶碗と、長大なる箸を専有して、しきりに暴威を

ほしいまま 擅 にしている。使いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、いきおい 勢 暴

たくま 威を 逞 しくせざるを得ない。坊ばはまず箸の根元を二本いっしょに握ったまもうんと茶碗の底へ突込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、その上に味噌汁が一面に

みなぎ 漲 っている。箸の力が茶碗へ伝わるやいなや、今までどうか、こうか、平均を保っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり傾いた。同時に味噌汁は容赦なくさらさら

と胸のあたりへこぼれだす。坊ばはそのくらいな事で へきえき 辟 易 する訳がない。坊ばは暴君

である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から へきえき 芻ね上げた。同時に小さな口

ふち 縁 まで持って行って、 へきえき 芻ね上げられた米粒を へきえき 這入るだけ口の中へ受納した。打ち洩ら

された米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと へきえき 頬 っぺたと へきえき 颯 とへ、やっとな掛声をして飛

びついた。飛びつき損じて畳の上へこぼれたものは へきえき 打 算 の限りでない。随分無分別な飯

の食い方である。吾輩は へきえき 謹 んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公 等

の他をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうがごとくんば、公 等 の口へ飛び込む米粒

は極めて へきえき 僅 少 のものである。必然の勢をもって飛び込むにあらず、 へきえき 戸 迷 をし

て飛び込むのである。どうか御再考を へきえき 煩 わしたい。世故にたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。

りやくだつ 姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに へきえき 掠 奪 されて、不相応に小さな奴をもってさつきから我慢していたが、もともと小さ過ぎるのだから、一杯にもった積りでも、あん

とあけると三口ほどで食ってしまう。したがって へきえき 頻 繁 に御はちの方へ手が出る。もう

四膳かえて、今度は五杯目である。とん子は御はちの へきえき 蓋 をあけて大きなしゃもじを取り

上げて、しばらく へきえき 眺 めていた。これは食おうか、よそうかと迷っていたものらしいが、

ついに決心したものと見えて、<sup>こ</sup>焦げのなさそうなところを見計って <sup>ひとしゃく</sup>一 掬 いしゃもじ

の上へ乗せたまでは <sup>ぶなん</sup>無 難 であつたが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶

<sup>はい</sup>碗に <sup>かた</sup>入 りきらん飯は <sup>ころ</sup>塊 まったまま畳の上へ <sup>けしき</sup>転 がり出した。とん子は驚ろく 景 色

<sup>ていねい</sup>もなく、こぼれた飯を <sup>鄭 寧</sup>鄭 寧 に拾い始めた。拾って何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきたくないようだ。

<sup>は</sup>坊ばが一大活躍を試みて箸を刎ね上げた時は、ちょうどとん子が飯をよそい <sup>おわ</sup>了 った時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見かねて「あら坊ばちゃ

<sup>ご</sup>ん、大変よ、顔が御ぜん粒だらけよ」と云いながら、 <sup>さつそく</sup>早 速 坊ばの顔の掃除にとりかか

<sup>きぐう</sup>る。第一に鼻のあたみに <sup>寄 寓</sup>寄 寓 していたのを取払う。取払って捨てると思のほか、すぐ自

分の口のなかへ入れてしまったのには驚ろいた。それから <sup>ほ</sup>頬 っぺたにかかる。ここには

<sup>だいぶぐん</sup>だいぶぐん <sup>かず</sup>かず 大 分 群 をなして <sup>数</sup>数 にしたら、両方を合せて約二十粒もあつたろう。姉は丹念に一

粒ずつ取っては食ひ、取っては食ひ、とうとう妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしま

<sup>たくあん</sup>った。この時ただ今まではおとなしく <sup>沢 庵</sup>沢 庵 をかじっていたすん子が、急に盛り立ての

<sup>さつまいも</sup>味噌汁の中から <sup>薩 摩 芋</sup>薩 摩 芋 のくずれたのをしゃくい出して、勢よく口の内へ <sup>ほう</sup>抛 り込ん

<sup>こうちゅう</sup>だ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱したのほど <sup>口 中</sup>口 中 にこたえる者は

<sup>おとな</sup>ない。大 人 ですら注意しないと <sup>やけど</sup>火 傷 をしたような心持ちがする。ましてすん子のごと

<sup>とぼ</sup>き、薩摩芋に経験の <sup>ろうばい</sup>乏 しい者は無論 <sup>狼 狽</sup>狼 狽 する訳である。すん子はワツと云いながら

<sup>こうちゅう</sup>口 中 の芋を食卓の上へ吐き出した。その二三 <sup>ぺん</sup>片 がどう云う拍子か、坊ばの前ま

ですべって来て、ちょうどいい加減な距離でとまる。坊ばは <sup>もと</sup>固 より薩摩芋が大好きであ

る。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を<sup>ほう</sup>抛<sup>てづか</sup>り出して、手攫<sup>てづか</sup>みにしてむしゃむしゃ食ってしまった。

さつき<sup>さつき</sup> 先<sup>てい</sup>刻<sup>てい</sup>からこの体<sup>いちごん</sup>たらくを目撃していた主人は、一言<sup>いちごん</sup>も云わずに、専心自分の

飯<sup>ようじ</sup>を食い、自分の汁を飲んで、この時はすでに楊枝<sup>ようじ</sup>を使っている最中であつた。主人は

娘の教育に関して絶体的放任主義<sup>と</sup>を執るつもりと見える。今に三人が海老茶式部<sup>えびちゃしきぶ</sup>か

ねずみしきぶ<sup>ねずみしきぶ</sup> 鼠式部<sup>ねずみしきぶ</sup>かになって、三人とも申し合せたように情夫<sup>じょうふ</sup>をこしらえて

しゅっぽん<sup>しゅっぽん</sup> 出奔<sup>しゅっぽん</sup>しても、やはり自分の飯を食って、自分の汁を飲んで澄まして見ているだろう。

働きのない事だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見すると、嘘をついて人を釣る

事と、先へ廻って馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張って人をおどかす事と、<sup>かま</sup>鎌<sup>かま</sup>をかけて人

を<sup>おとしい</sup>陥<sup>おとしい</sup>れる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩までが

みようみまね<sup>みようみまね</sup> 見様見真似<sup>みようみまね</sup>に、こうしなくては幅が利かないと心得違いをして、本来なら赤面してし

かるべきのを<sup>とくとく</sup>得<sup>とくとく</sup>々と履行<sup>りこう</sup>して未来の紳士だと思っている。これは働き手と云うの

ではない。ごろつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こん

な働き手を見るたびに<sup>なぐ</sup>撲<sup>なぐ</sup>ってやりたくなる。こんなものが一人でも殖えれば国家はそれ

だけ衰える訳である。こんな生徒のいる学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる

国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関わらず、ごろごろ世間にごろついているのは心

得<sup>なさけ</sup>がたいと思う。日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情<sup>なさけ</sup>ない事だ。こんなご

ろつき手に比べると主人などは<sup>はる</sup>遙<sup>はる</sup>かに上等な人間と云わなくてはならん。意気地のない

ところが上等なのである。無能なところが上等なのである。<sup>ちょこざい</sup>猪口才<sup>ちょこざい</sup>でないところが上

等なのである。かくのごとく働きのない食い方をもって、無事に<sup>あさめし</sup>朝食<sup>あさめし</sup>を済ましたる主人は、やがて

洋服を着て、車へ乗って、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子<sup>こうし</sup>をあけた時、車夫に日本堤という所を知ってるかと聞いたら、車夫はへへへと笑った。あの遊廓のある吉原の近辺の

日本堤<sup>こっけい</sup>だぜと念を押したのは少々滑稽<sup>こっけい</sup>であった。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、妻君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで。遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なもので「あら、でも今日は

したく<sup>したく</sup> けしき<sup>けしき</sup> しか<sup>しか</sup>  
御休みよ」と支度<sup>したく</sup>をする景色<sup>けしき</sup>がない。「御休みなもんですか、早くなさい」と叱<sup>しか</sup>る

ように<sup>きのう</sup>言って聞かせると「それでも昨日<sup>きのう</sup>、先生が御休だって、おっしゃってよ」と姉は

なかなか動じない。妻君もここに至って多少変に思ったものか、戸棚からこよみ<sup>こよみ</sup> 曆<sup>こよみ</sup>を出して繰り返して見ると、赤い字でちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ

欠勤届<sup>ほう</sup>を出したのだろう。細君も知らずに郵便箱へ抛<sup>ほう</sup>り込んだのだろう。ただし迷亭に至っては実際知らなかったのか、知って知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。こ

の発明<sup>いつも</sup>におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びなさいと平生<sup>いつも</sup>の通り針箱を出して仕事に取りかかる。

ご<sup>ご</sup>  
その後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかったが、突然

妙な人が御客に来た。十七八の女学生である。かかと<sup>かかと</sup> 踵<sup>かかと</sup> のまがった靴<sup>は</sup>を履いて、紫色の

はかま<sup>はかま</sup> 袴<sup>はかま</sup> を引きずって、髪をそろばん<sup>そろばん</sup> だま<sup>だま</sup> のようにふくらまして勝手口から案内も乞<sup>こ</sup>わず

あが<sup>あが</sup> めい<sup>めい</sup>  
に上<sup>あが</sup>って来た。これは主人の姪<sup>めい</sup>である。学校の生徒だそうだが、折々日曜にやって来

て、よく叔父さんと喧嘩をして帰って行く雪江<sup>ゆきえ</sup>とか云う綺麗な名のお嬢さんである。もつとも顔は名前ほどでもない、ちょっと表へ出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

はい<sup>はい</sup>  
「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入って来て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちょっと上がろうと思って、八時半頃<sup>うち</sup>から家<sup>うち</sup>を出

て急いで来たの」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちょっと上がったの」

「ちょっとでなくていいから、<sup>ゆっ</sup>緩く遊んでいらっしやい。今に叔父さんが帰って来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍しいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行ったのよ。……警察へ行ったの、妙でしょう」

「あら、何で？」

「はい  
「この春這入った泥棒がつらまったんだって」

「それで引き合に出されるの？ いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに来いって、<sup>きのう</sup>昨日 巡査がわざわざ来たもんですから」

「おや、そう、それでなくっちゃ、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらっしやるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……<sup>おこ</sup>そうして起こすとぷんぷん 怒るのよ。今朝  
なんかも七時までに是非おこせと云うから、起こしたんでしょ。すると夜具の中へ<sup>もぐ</sup>潜っ

て返事もしないんですもの。こっちは心配だから二度目にまたおこすと、<sup>よぎ</sup>夜着の袖 から  
何か云うのよ。本当にあきれ返ってしまうの」

「なぜそんなに眠いんでしょ。きっと神経衰弱なんでしょう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒る<sup>かた</sup>方 ね。あれでよく学校が勤まるのね」

「なに学校じゃおとなしいんですって」

「<sup>こんにやくえんま</sup>じゃなお悪るいわ。まるで 蒟 蒻 閻 魔 ね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だって蒟蒻閻魔のようじゃありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりゃ強情ですよ」



あまのじゃく  
「天探女」でしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思ったら、

うらを云うと、こっちの思い通りになるのよ。こないだ蝙蝠傘<sup>こうもり</sup>を買ってもらう時にも、  
いない、いないって、わざと云ったら、いない事があるものかって、すぐ買って下  
すったの」

うま  
「ホホホホ 旨いね。わたしもこれからそうしよう」

「そうなさいよ。それでなくっちゃ損だわ」

おはい  
「こないだ保険会社の人に来て、是非御這入んなさいって、勧めているんでしょう、――

わけ  
いろいろ 訳を言っ、こう云う利益があるの、ああ云う利益があるのって、何でも一時  
間も話をしたんですが、どうしても這入らないの。うちだって貯蓄はなし、こうして小供  
は三人もあるし、せめて保険へでも這入ってくるとよっぽど心丈夫なんですけれども、  
そんな事は少しも構わないんですもの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しからん世帯染<sup>しょたいじ</sup>み  
たことを云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないでは

ない。必要なものだから会社も存在しているのだろう。しかし死なない以上は保険に這入る<sup>はい</sup>  
必要はないじゃないかって強情を張っているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無論保険会社はいりません。しかし人間

の命と云うものは丈夫なようで脆<sup>もろ</sup>いもので、知らないうちに、いつ危険が逼<sup>せま</sup>っている  
か分かりませんと云うとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているって、ま  
あ無法な事を云うんですよ」

「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第<sup>きゅうだい</sup>するつもりだったけれども、  
とうとう落第してしまったわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長が生きが出来る  
ものなら、誰も死ぬものはございせんって」<sup>ない</sup>

しとう  
「保険会社の方が至当ですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓って死なないって威張るの」

「妙ね」

おおみょう はる  
「妙ですとも、大妙ですわ。保険の掛金を出すくらいなら銀行へ貯金する方が遙かにましだってすまし切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちっとも構う考なんかありませんよ」

かた  
「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらっしゃる方だって、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

おだ  
「ちっと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰うといいですよ。ああ云う穏やかな人

らく  
だとよっぽど楽ですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじゃ評判がわるいのよ」

さか かた  
「みんな逆なのね。それじゃ、あの方がいいでしょう——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

だいぶ きのう  
「八木さんには大分閉口しているんですがね。昨日迷亭さんが来て悪口をいったもの

き  
だから、思ったほど利かないかも知れない」

おうよう  
「だっていいじゃありませんか。あんな風に鷹揚に落ちついていれば、——こないだ学校で演説をなすったわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

しゅくとくふじんかい  
「いいえ、先生じゃないけども、淑徳婦人会のときに招待して、演説をして頂いたの」

「面白かって？」

「そうね、そんなに面白くもなかったわ。けども、あの先生が、あんな長い顔なんでし

よう。そして天神様のような <sup>ひげ</sup>髯 を生やしているもんだから、みんな感心して聞いていてよ」

「御話して、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると <sup>えんがわ</sup>椽 側 の方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の

<sup>あきち</sup>外の空地へ出て遊んでいたものであろう。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云ったのはとん子で「やっぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と言い出した三女は姉

と姉の間から膝を前の方に出す。ただしこれは御話を <sup>うけたま</sup>承 ねると云うのではない、坊

ばもまた御話を <sup>つかまつ</sup>仕 つかまつると云う意味である。「あら、また坊ばちゃんの話だ」と姉さん

が笑うと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と賺かして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「おお、よしよ

し坊ばちゃんからなさい。何と云うの？」と雪江さんは <sup>けんそん</sup>謙遜 した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのって」

「面白いのね。それから？」

<sup>たんぼ</sup>「わたちは田圃へ稲刈いに」

「そう、よく知ってる事」

<sup>だま</sup>「御前がくうと邪魔になる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」

<sup>いっかつ</sup>と一喝 して直ちに姉を <sup>へきえき</sup>辟易 させる。しかし途中で口を出されたものだから、続きを忘れてしまって、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

ごめん  
「あのね。あとでおならば 御 免 だよ。ふう、ふうふうって」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わったの？」

おたん  
「御 三 に」

おさん  
「わるい 御 三 ね、そんな事を教えて」と妻君は苦笑をしていたが「さあ今度は雪江さん  
の番だ。坊やおとなしく聞いているのですよ」と云うと、さすがの暴君も <sup>なっとく</sup> 納 得 した  
と見えて、それぎり当分の間は沈黙した。

「八木先生の演説はこんなのよ」と雪江さんがとうとう口を切った。「昔ある <sup>つじ</sup> 辻 の真中  
に大きな石地蔵があったんですってね。ところがそこがあいにく馬や車が通る大変 <sup>にぎ</sup> 賑 や  
かな場所だもんだから邪魔になって仕様がないうでね、町内のものが大勢寄って、相談を  
して、どうしてこの石地蔵を隅の方へ片づけたらよかろうって考えたんですって」

「そりゃ本当にあった話なの？」

「どうですか、そんな事は何ともおっしゃらなくってよ。——でみんながいろいろ相談を  
したら、その町内で一番強い男が、そりゃ訳はありません、わたしがきっと片づけて見せ  
ますって、一人でその辻へ行って、<sup>もろはだ</sup> 両 肌 を抜いで汗を流して引っ張ったけれども、ど  
うしても動かないんですって」

「よっぽど重い石地蔵なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまっ、うちへ帰って寝てしまったから、町内のものは  
また相談をしたんですね。すると今度は町内で一番利口な男が、<sup>わたし</sup> 私 に任せて御覧なさ

い、一番やって見ますからって、重箱のなかへ <sup>ぼたもち</sup> 牡丹 餅 を一杯入れて、地蔵の前へ来て、

『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見せびらかしたんだって、地蔵だって <sup>くいいじ</sup> 食 意 地  
が張ってるから牡丹餅で釣れるだろうと思ったら、少しも動かないんだって。利口な男は

これではいけないと思ってね。今度は <sup>ひょうたん</sup> 瓢 箆 へお酒を入れて、その瓢箆を片手へぶら

下げ、片手へ <sup>ちょこ</sup> 猪 口 を持ってまた地蔵さんの前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲み  
たければここまでおいでと三時間ばかり、からかって見たがやはり動かないんですって」

おなかへ  
「雪江さん、地蔵様は御腹が減らないの」ととん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」と  
すん子が云った。

にせさつ  
「利口な人は二度共しくじったから、その次には贖札を沢山こしらえて、さあ欲しい  
だろう、欲しければ取りにおいでと札を出したり引っ込ましたりしたがこれもまるで益

がんこ  
に立たないんですって。よっぽど頑固な地蔵様なのよ」

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ」

あいそ  
「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想をつかしてやめてしまったんですと

ほら わたし  
さ。それでそのあとからね、大きな法螺を吹く人が出て、私ならきつと片づけて見せ

たやす  
ますからご安心なさいとさも容易い事のように受合ったそうです」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

つひげ  
「それが面白いのよ。最初にはね巡查の服をきて、付け髯をして、地蔵様の前へきて、  
こらこら、動かんとその方のためにならんど、警察で棄てておかんぞと威張って見せたん

こわいろ  
ですとさ。今の世に警察の仮声なんか使ったって誰も聞きゃしないわね」

「本当ね、それで地蔵様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入っているのよ」

こわ  
「あらそう、あんな顔をして？ それじゃ、そんなに怖い事はないわね。けれども地蔵

おこ  
様は動かないんですって、平気ですとさ。それで法螺吹は大変怒って、巡查の

かみくずかご ほう なり  
服を脱いで、付け髯を紙屑籠へ抛り込んで、今度は大金持ちの服装をして出て  
来たそうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をするんですとさ。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

まわ  
「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もしないで、また何も云わないで地蔵の周

まきたばこ ある  
りを、大きな 巻 煙 草 をふかしながら歩いているんですとき」

「それが何になるの？」

けむ ま  
「地蔵様を 煙 に捲くんです」

はな か しゃれ けむ ま  
「まるで 嘸 し家の 洒 落 のようね。首尾よく 煙 に捲いたの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしもたいていにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしょう。八木先生はそうおっしゃってよ。たしかに殿下様に化けたんだって、

ほらふ ぶんざい  
恐れ多い事だが化けて来たって——第一不敬じゃありませんか、法螺吹きの分 際で」

「殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬ですわ」

「そうね」

き わたし てぎわ  
「殿下さまでも利かないでしょう。法螺吹きもしようがないから、とても 私 の手 際  
では、あの地蔵はどうする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

ちょうえき も  
「ええ、ついでに 懲 役 にやればいいのに。——でも町内のものは大層気を揉んで、  
また相談を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱ったそうです」

「それでおしまい？」

まわ  
「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを大勢雇って、地蔵様の 周 りをわいわい  
騒いであるいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないようにすればいいと云っ

こうたい  
て、夜昼 交 替 で騒ぐんだって」

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとき。地蔵様の方も随分強情ね」

「それから、どうして？」ととん子が熱心に聞く。

げん だいぶ いや  
「それからね、いくら毎日毎日騒いでも 験 が見えないので、大 分 みんなが 厭 にな

いくんち にっとう  
って来たんですが、車夫やゴロツキは 幾 日 でも 日 当 になる事だから喜んで騒い

でいましたとき」

「雪江さん、日当ってなに？」とすん子が質問をする。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらって何にするの？」

「御金を貰ってね。……ホホホホいやなすん子さんだ。——それで叔母さん、毎日毎晩か

ら騒ぎをしていますとね。その時町内に馬鹿竹と云って、<sup>ばかたけ</sup> <sup>なんに</sup> 何も知らない、誰も相

手にしない馬鹿がいたんですってね。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方は何でそんな

に騒ぐんだ、何年かかっても地藏一つ動かす事が出来ないのか、<sup>かわいそう</sup> 可哀想なものだ、と云ったそうですって——」

「馬鹿の癖にえらいのね」

<sup>ばかたけ</sup>  
「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹の云う事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だろうが、まあ竹にやらして見ようじゃないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロツキを引

<sup>ひょうぜん</sup>  
き込まして飄然と地藏様の前へ出て来ました」

<sup>かんじん</sup>  
「雪江さん飄然て、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心なところで奇問を放ったので、細君と雪江さんはどっと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。——云いようがないわ」

「飄然て、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

<sup>たたらさんぺい</sup>  
「そら多々良三平さんを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

<sup>ふとこ</sup>  
「ええ、まあそうよ。——それで馬鹿竹が地藏様の前へ来て懐手をして、地藏様、町内のものが、あなたに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云ったら、地藏様はた

ちまちそうか、そんなら早くそう云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

こんにち

「ええ、それから八木先生がね、今日は御婦人の会であります、私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものとはかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえって遠方から廻りくど

い手段をとる 弊 がある。もっともこれは御婦人に限った事でない。明治の代は男子とい

えども、文明の弊を受けて多少女性的になっているから、よくいらざる 手数 と労力を

つい 費 やして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解しているものが多いよ

うだが、これ等は開化の業に束縛された 畸形 児 である。別に論ずるに及ばん。ただ御婦

人に在ってはなるべくただいま申した昔話を御記憶になって、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫

婦の間、 嫁 姑 の間に起る 忌 わしき 葛 藤 の 三 分 一 はたしかに減ぜら

れるに相違ない。人間は 魂 胆 があればあるほど、その魂胆が 崇 べて不幸の 源 をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になって下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたくはないわ。金田の富子さんなんぞは失

敬だって大変 怒 ってよ」

「金田の富子さんて、あの 向 横 町 の？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だって云うじゃありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじゃありませんよ。あんなに御化粧をすればたいいの人はよく



見えるわ」

「それじゃ雪江さんなんぞはそのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう」

「あらいやだ。よくってよ。知らないわ。だけど、あの <sup>かた</sup>方 は全くつくり過ぎるのね。なんぼ御金があったって——」

「つくり過ぎても御金のある方がいいじゃありませんか」

「それもそうだけれども——あの <sup>かた</sup>方こそ、少し馬鹿竹になった方がいいでしょう。」

むやみ

無暗に威張るんですもの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げたって、みんな

<sup>ふいちよう</sup>に吹聴しているんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よっぽど物 <sup>ものずき</sup>数奇ね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じゃ、あんな事をするのが <sup>あたりまえ</sup>当前だとまで思ってるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——それからまだ面白い事があるの。此 <sup>こないだ</sup>間

だれか、あの方の <sup>とこ えんしよ</sup>所へ艶書を送ったものがあるんだって」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけど聞いた事もない人だって、そうしてそれが長い

長い一間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんですとさ。 <sup>わたし</sup>私 があ

なたを <sup>おも</sup>恋っているのは、ちょうど宗教家が神にあこがれているようなものなの、あなた

のためならば祭壇に供える小羊となって <sup>ほふ</sup>屠られるのが無上の名誉であるの、心臓の <sup>かた</sup>形  
ちが三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立って、吹き矢なら大当たりであるの……」

「そりゃ真面目なの？」

「真面目なんですとさ。現にわたしの御友達のうちでその手紙を見たものが三人あるんで

すもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんのとこへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るどころですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らしてあげたらいいでしょう。寒月さんはまるで御存じないんでしょう」

たま

「どうですか、あの方は学校へ行って 球ばかり磨いていらっしゃるから、大方知らないでしょう」

おもらい

「寒月さんは本当にあの方を 御 貰 になる気なんではないですかね。御気の毒だわね」

「なぜ？ 御金があって、いざって時に力になって、いいじゃありませんか」

ひん

「叔母さんは、じきに金、金って 品 がわるいのね。金より愛の方が大事じゃありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立しやしないわ」

「そう、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もありませんもの」

たくま

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論を 逞 しくしていると、さっきから、分らないなりに謹聴しているとん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云

おおい

いだした。この無鉄砲な希望には、さすが青春の気に満ちて、 大 に同情を寄すべき雪

てい

江さんもちよっと毒気を抜かれた 体 であったが、細君の方は比較的平気に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞いて見た。

しょうこんしゃ

「わたしねえ、本当はね、 招 魂 社 へ御嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思ってるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に問い返す勇気もなく、どっと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向ってかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？ わたしも大すき。いっしょに招魂社へ御嫁に行きましょう。

い

ね？ いや？ いやなら好いわ。わたし一人で車へ乗ってさっさと行っちゃまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人

そろ

が顔を 揃 えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ楽であろう。

ところへ車の音ががらがらと門前に留ったと思ったら、たちまち威勢のいい御帰りと云

う声がした。主人は日本堤分署から戻ったと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女

に受け取らして、主人は <sup>ゆうぜん</sup>悠 然 <sup>はい</sup>と茶の間へ這入って来る。「やあ、来たね」と雪江さん

に挨拶しながら、例の有名なる長火鉢の <sup>そば</sup>傍 へ、ばかりと手に <sup>たずさ</sup>携 えた <sup>とつくりよう</sup>徳 利 様

のものを <sup>ほう</sup>抛 り出した。徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云って <sup>はない</sup>花 活 けとも思われぬ、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰っていらしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい <sup>かつこう</sup>恰 好 だろう」と自慢する。

「いい恰好なの？ それが？ あんまりよかあないわ？ <sup>あぶらつぼ</sup>油 壺 なんか何で持っていらっしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

<sup>はないけ</sup>  
「花 活 さ」

<sup>ち</sup>  
「花活にしちゃ、口が小さい過ぎて、いやに胴が張ってるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔母さんと <sup>えら</sup>扱 ぶところなした。困った

ものだな」と <sup>ひと</sup>独 りで油壺を取り上げて、<sup>しょうじ</sup>障 子 <sup>なが</sup>の方へ向けて <sup>なが</sup>眺 めている。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってくるような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんはそれどころではない、風呂敷包を解いて <sup>と</sup>皿 <sup>さらまなこ</sup>眼 になって、盗難品を

<sup>しら</sup>検 べている。「おや驚ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗い張をしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待ってるのが退屈だから、あすこいらを散歩しているうちに堀り出して来たんだ。御前なんぞには分るまいがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの」

「どこって日本堤界隈さ。吉原へも這入って見た。なかなか盛な所だ。

あの鉄の門を觀た事があるかい。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦のいる所へ行く因縁がありませんわ。叔父さんは教師の身で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当に驚ろいてしまうわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも品数が足りないようだ事。これでみんな戻ったんでしょうか」  
「戻らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭しろと云いながら十一時まで待たせる法があるものか、これだから日本の警察はいかん」  
「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちやなおいけないわ。そんな事が知れると免職になってよ。ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の片側がないんです。何だか足りないと思ったら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こっちは三時間も待たされて、大切な時間を半日潰してしまった」と日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油壺を眺めている。細君も仕方

がないと諦めて、戻った品をそのまま戸棚へしまい込んで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとさ。きたないじゃありませんか」

「それを吉原で買っていらしたの？ まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくっても、どこにだってあるじゃありませんか」

「ところがないんだよ。滅多に有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地蔵ね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女学生は口が悪くつていかん。ちと女大学でも読むがいい」

「叔父さんは保険が嫌いでしょう。女学生と保険とどっちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の考のあるものは、誰でも這入る。女学生は無用の長物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入ってもいない癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きっと？」

「きっとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸金で何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母さんはにやにや笑っている。主人は真面目になって

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑気な事を云うのだが、もう少し理性

が発達して見ろ、保険の必要を感じずるに至るのは当たり前だ。ぜひ来月から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのように蝙蝠傘を買って下さる御金があるなら、保険に這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません、いりませんと云うのを無理に買って下さるんですもの」

「そんなにいらなかったのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがいい。ちょうどん子が欲しがってるから、あれをこっちへ廻してやろう。今日持って来たか」

「あら、そりゃ、あんまりだわ。だって苛いじゃありませんか、せっかく買って下すっておきながら、還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちっとも苛くはない」

「いらぬ事はいらぬんですけども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらぬと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だって」

「だって、どうしたんだ」

「だって苛いわ」

「ぐ  
「愚だな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだって同じ事ばかり繰り返しているじゃありませんか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらぬと云ったじゃないか」

「そりゃ云いましたわ。いらぬ事はいらぬんですけども、還すのは 厭 ですよの」

「驚ろいたな。没 分 曉 で強情なんだから仕方がない。御前の学校じゃ論理学を教えな  
いのか」

「よくってよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおっしゃい。人のものを還せだなん

て、他人だってそんな不人情な事は云やしない。ちっと馬 鹿 竹 の真似でもなさい」

「何の真似をしろ？」

「ちと正直に 淡 泊 になさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したって叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは 言 げん ここに至って感に堪えざるものごとく、 潜 然 さんぜん として 一 掬 ics くの  
なんだ 涙 はかま を紫の 袴 ぼうこ の上に落した。主人は 茫 乎 として、その涙がいかなる心理作用に

起因するかを研究するものごとく、袴の上と、俯つ向いた雪江さんの顔を見つめていた。

ところへ 御 三 おさん が台所から赤い手を敷居越に 揃 そろ えて「お客さまがいらっしゃいました」  
と云う。「誰が来たんだ」と主人が聞くと「学校の生徒さんでございます」と御三は雪江

さんの泣顔を横目に 睨 なら めながら答えた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り 兼 けん 人間

研究のため、主人に尾して忍びやかに 椽 えん へ廻った。人間を研究するには何か波瀾がある

時を 扱 へら ばないと 一 っこう 向 結果が出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見  
ても聞いても張合のないくらい平凡である。しかしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる

神秘的作用のためにむくむくと持ち上がって奇なもの、変なもの、妙なもの、異なもの、  
一と口に云えば吾輩猫共から見てすこぶる後学になるような事件が至るところに

おうふう 横 風 にあらわれてくる。雪江さんの 紅 こうるい 涙 のごときはまさしくその現象の一つで

ある。かくのごとく不可思議、不 可 測 ふかそく の心を有している雪江さんも、細君と話をしてい

るうちはさほどとも思わなかったが、主人が帰ってきて油壺を 抛り出すやいなや、たち

しりゅう じょうきポンプ ぼつぜん しんおう  
まち 死 竜 に 蒸 汽 唧 筒 を 注 ぎ け け た る ご と く、 勃 然 と し て そ の 深 奥

きち  
にして窺知すべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、惜気もな

おわ によしょう  
く 発 揚 し 了 った。しかしてその麗質は天下の 女 性 に 共 通 な る 麗 質 で あ る。た だ

いや  
惜しい事には容易にあらわれて来ない。 否 あらわれる事は二六時中間断なくあらわれて

しゃくぜんへいこ  
いるが、かくのごとく顕著に 灼 然 炳 乎 と し て 遠 慮 な く は あ ら わ れ て 来 な い。幸

な つむじまが  
にして主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫でたがる 旋 毛 曲 り の

きどくか  
奇 特 家 が お っ た か ら、か か る 狂 言 も 拝 見 が 出 来 た の で あ ろ う。主 人 の あ と さ え つ い て あ

いただ  
る け ば、ど こ へ 行 っ て も 舞 台 の 役 者 は 吾 知 ら ず 動 く に 相 違 な い。面 白 い 男 を 旦 那 様 に 戴

だいぶ  
いて、短かい猫の命のうちにも、大 分 多 くの 経 験 が 出 来 る。あ り が た い 事 だ。今 度 の お  
客 は 何 者 で あ ろ う。

お か じ す  
見ると年頃は十七八、雪江さんと追つつ、返つつの書生である。大きな頭を地の隙いて

だんご ばな ひか  
見えるほど刈り込んで 団 子 っ 鼻 を 顔 の 真 中 に か た め て、座 敷 の 隅 の 方 に 控 え て い

ずがいこつ  
る。別にこれと云う特徴もないが 頭 蓋 骨 だけ は す こ ぶ る 大 き い。青 坊 主 に 刈 っ て さ え、

ひ  
ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばしたら定めし人目を惹く事だろう。こ  
んな顔にかぎって学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事実は  
そうかも知れないがちょっと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。着物は通例

さつまがすり くるめ いよ  
の 書 生 の ご と く、薩 摩 絣 か、久 留 米 が す り か ま た 伊 予 絣 か 分 ら な い が、と も か く

かすり あわせ シャツ じゅばん  
も 絣 と 名 づ け ら れ た る 袷 を 袖 短 か に 着 こ な し て、下 に は 襦 衣 も 襦 袢 も な

すあわせ すあし  
いようだ。素 裕 や素 足 は意気なものだそうだが、この男のはなはだむさ苦しい感  
じを与える。ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つまで 印 しているのは全く素  
足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡の上へちゃんと坐って、さも窮屈そうに畏しこま  
っている。一体かしこまるべきものがおとなしく 控 えるのは別段気にするにも及ばんが、  
いがぐりあたま  
毬 栗 頭 のつんつるてんの乱暴者が恐縮しているところは何となく不調和なもの  
だ。途中で先生に逢ってさえ礼をしないのを自慢にするくらいの連中が、たとい三十分で  
も人並に坐るのは苦しいに違ない。ところを生れ得て 恭 謙 の君子、盛徳の  
ちょうしゃ  
長 者 であるかのごとく構えるのだから、当人の苦しいにかかわらず 傍 から見る  
だいぶ  
と大 分 おかしいのである。教場もしくは運動場であんなに騒々しいものが、どうしてか  
ように自己を かんそく 束 する力を そな えているかと思うと、憐れにもあるが 滑 稽 でも  
ある。こうやって一人ずつ 相 対 になると、いかに ぐがい なる主人といえども生徒に  
対して幾分かの重みがあるように思われる。主人も定めし得意であろう。 ちり 塵 積って山を  
なすと云うから、微々たる一生徒も 多 勢 が 聚 合 すると 侮 るべからざる団体  
はいせき  
となって、排 斥 運動やストライキをしでかすかも知れない。これはちょうど臆病者が  
酒を飲んで大胆になるような現象であろう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の気に酔っ払っ  
た結果、正気を取り落したるものと認めて 差 支 えあるまい。それでなければかように  
しょうぜん みずか ふすま  
恐れ入ると云わんよりむしろ 悄 然 として、自 ら 襖 に押し付けられている  
かりそ  
くらいな薩摩緋が、いかに老朽だと云って、 苟 めにも先生と名のつく主人を けいべつ  
しようがない。馬鹿に出来る訳がない。



ざぶとん

主人は座布団を押しやりながら、「さあお敷き」と云ったが毬栗先生はかたくなった

まま「へえ」と云って動かない。鼻の先に剥げかかった更紗の座布団が「御乗んなさい」

とも何とも云わずに着席している後ろに、生きた大頭がつくねんと着席しているのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰めるために細君が勸工場から仕入れて来たのでは

ない。布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名誉を毀損せられたるもので、こ

れを勧めたる主人もまた幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰してまで、布団と

にら睨めくらをしている毬栗君は決して布団その物が嫌なのではない。実を云うと、正

式に坐った事は祖父さんの法事の時のほかは生れてから滅多にないので、先っきからすでにしびれが切れかかって少々足の先は困難を訴えているのである。それにもかかわらず

敷かない。布団が手持無沙汰に控えているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷き

と云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくらい遠慮するなら多人数集まった時もう少し遠慮すればいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、下宿屋でもう少し遠慮

すればいいのに。すまじきところへ気が兼ねをして、すべき時には謙遜しない、否

おおい ろうぜき  
大に狼藉を働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろの襖をすうと開けて、雪江さんが一碗の茶をうやうやしく坊主に

供した。平生なら、そらサヴェジ・チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に対してすら

痛み入っている上へ、妙齢の女性によしょうがおがさわらりゅうおつが学校で覚え立ての小笠原流で、乙

に気取った手つきをして茶碗を突きつけたのだから、坊主はおおい くもん てい大に苦悶の体に見

える。雪江さんはふすま襖をしめる時に後ろからにやにやと笑った。して見ると女は同年輩

でもなかなかえらいものだ。坊主に比すれば 遥かに度胸が据わっている。ことに先刻

の無念にはらはらと流した一滴の 紅涙 のあとだから、このにやにやがさらに目立って見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま、しばらくの間は 辛防 していたが、

これでは ぎょう業 をするようなものだと気がついた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

ふるい  
「古井……」

「古井？ 古井何とかだね。名は」

ぶえもん  
「古井武右衛門」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々

は夢に見るくらい感銘した頭である。しかし 呑気 な主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかったのである。だからこの夢に見るほど感銘した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそうかと心

うち う の 裏 で手を拍ったのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する

生徒が何のために今頃やって来たのか 頓と推諒 出来ない。元来不人望な主人の事だから、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄り

ついたのは古井武右衛門君をもって こうし 嚙矢 とするくらいな珍客であるが、その来訪の主意

おおい うち  
がわからんには主人も 大 に閉口しているらしい。こんな面白くない人の 家 へただ遊

こうぜん  
びにくる訳もなかりし、また辞職勧告ならもう少し 昂 然 と構え込みそうだし、と云  
って武右衛門君などが一身上の用事相談があるはずがないし、どっちから、どう考えても  
主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここまで参  
ったのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思って……」

なん  
「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと武右衛門君下を向いたぎり 何 にも言  
わない。元来武右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁ずる方で、頭の大きい割に脳力は

しゃべ そうそう  
発達しておらんが、喋 舌 る事においては乙組中 鏘 々 たるものである。現にせんだ

おおい  
ってコロンバスの日本訳を教えろと云って 大 に主人を困らしたはまさにこの武右衛門

さいぜん どもり  
君である。その鏘々たる先生が、最 前 から 吃 の御姫様のようにもじもじしてい

い  
るのは、何か云わくのある事でなくてはならん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られな  
い。主人も少々不審に思った。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云いながら主人は武右衛門君の顔を見たが、先方は依然として

うつむき

俯 向 になってるから、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢を変えて「い

たごん  
いさ。何でも話すがいい。ほかに誰も聞いていやしない。わたしも 他 言 はしないから」

おだ

と 穩 やかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷っている。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

いがぐりあたま  
「では話しますが」といいかけて、毬栗頭をむくりと持ち上げて主人の方をちよっとまぼしそうに見た。その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出しながらちよっと横を向いた。

「実はその……困った事になっちまって……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

はまだ  
「そんな事をする考はなかったんですけれども、浜田が借せ借せと云うもんですから……」

へいすけ  
「浜田と云うのは浜田平助かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじゃないやありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

えんしよ  
「艶書を送ったんです」

「何を送った？」

よ とうかんやく  
「だから、名前は廃して、投函役になると云ったんです」

「何だか要領を得んじゃないか。一体誰が何をしたんだい」

えんしよ  
「艶書を送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じゃないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちっとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だって、何の事だかちっとも分らんじゃないか。もっと条理を立てて話すがいい。元来その艶書を受けた当人はだれか」

むこうよこちょう  
「金田って 向 横 丁 にいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。——浜田が名前がなくちゃいけないって云いますから、君の名前をかけたって云ったら、僕のじゃつまらない。古井武右衛門の方がいいって——それで、とうとう僕の名を借してしまっただんです」

「で、君はあすこの娘を知ってるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありません。顔なんか見た事ありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云うから、からかってやったんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送ったんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行って投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思

にさんち ぼん  
って、非常に心配して二三日は寝られないんで、何だか 茫 やりしてしまいました」

「そりゃまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

つか ままはは  
「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんが 継母 ですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃうです。本当に退校になるでしょうか」

めった  
「だから 滅多な真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしまったんです。退校にならないように出来

ないでしょうか」と武右衛門君は泣き出しそうな声をしてしきりに哀願に及んでいる。

ふすま　　さいぜん　　あ  
襖　の蔭では最　前　から細君と雪江さんがくすくす笑っている。主人は飽くまでも  
もったいぶって「そうさな」を繰り返している。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはも  
　　おのれ　　しょうがい　　おのれ  
　　つともだ。人間にせよ、動物にせよ、己　を知るのは生　涯　の大事である。己  
を知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩  
もこないたずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめてしまうつもりである。しかし自  
　　けんとう　　に  
分で自分の鼻の高さが分らないと同じように、自己の何物かはなかなか見　当　がつき悪

　　けいべつ  
くいと見えて、平生から軽　蔑　している猫に向ってさえかような質問をかけるのであろ  
う。人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けている。万物の霊だなどどこへでも万

　　かつ　　てん  
物の霊を担　いであるくかと思うと、これしきの事実が理解出来ない。しかも恬　として

　　いっきやく　　せなか　　かつ  
平然たるに至ってはちと　一　を催したくなる。彼は万物の霊を背　中　へ担　いで、  
おれの鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立てている。それなら万物の霊を  
辞職するかと思うと、どう致して死んでも放しそうにしない。このくらい公然と矛盾をし

　　あいきょう　　あまん  
て平気でいられれば愛　嬌　になる。愛嬌になる代りには馬鹿をもって甘　じなく  
てはならん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が  
はちあわ　　おつ  
鉢　合　せをして、その鉢合せが波動を乙　なところに伝えるからではない。実はその鉢

　　ねいろ  
合の反響が人間の心に個々別々の音　色　を起すからである。第一主人はこの事件に対して  
むしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがいかにやかましくって、おっかさんがいか

　　ままこ  
に君を継　子　あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武右衛門

　　おおい　　おもむき  
君が退校になるのは、自分が免職になるのは大　に　趣　が違ふ。千人近くの生

　　みち  
徒がみんな退校になったら、教師も衣食の途　に窮するかも知れないが、古井武右衛門君

いちにん ちょうせき  
一 人の運命がどう変化しようと、主人の朝 夕 にはほとんど関係がない。関係

おのず まゆ  
の薄いところには同情も 自 から薄い訳である。見ず知らずの人のために 眉 をひそめ  
たり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに  
なさけぶか

情 深い、思いやりのある動物であるとははなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生

ふぜい  
れて来た 賦 税 として、時々交際のために涙を流して見たり、気の毒な顔を作って見せた

せい だいぶ  
りするばかりである。云わばごまかし 性 表情で、実を云うと 大 分 骨が折れる芸術であ  
る。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云って、これは世間から大変  
珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。

せつ  
この点において主人はむしろ 拙 な部類に属すると云ってよろしい。拙だから珍重されな  
い。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。彼が武右衛門

しやり  
君に対して「そうさな」を繰り返しているのでも 這 裏 の消息はよく分る。諸君は冷淡だ  
からと云って、けっして主人のような善人を嫌ってはいけない。冷淡は人間の本来の性質

つと  
であって、その性質をかくそうと 力 めないのは正直な人である。もし諸君がかかる際に

かぶ  
冷淡以上を望んだら、それこそ人間を買い 被 ったと云わなければならない。正直ですら

ふってい ばきん しの こぶんご  
払 底 な世にそれ以上を予期するのは、馬 琴 の小説から志乃や小 文 吾 が抜けだし

はっけんでん  
て、向う三軒両隣へ 八 犬 伝 が引き越した時でなくては、あてにならない無理な注文

おんなれん  
である。主人はまずこのくらいにして、次には茶の間で笑ってる 女 連 に取りかかる

むこう また こっけい おど  
が、これは主人の冷淡を一步 向 へ 跨 いで、滑 稽 の領分に 躍 り込んで嬉しが

ぶっだ ふくいん  
っている。この女連には武右衛門君が頭痛に病んでいる艶書事件が、仏 陀 の 福 音 の  
ごとくありがたく思われる。理由はないただありがたい。強いて解剖すれば武右衛門君が  
困るのありがたいのである。諸君女に向って聞いて御覧、「あなたは人が困るのを面白  
がって笑いますか」と。聞かれた人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう、馬鹿と云

わなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思  
うのは事実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事実である。であるとすれば、これが

わたし  
ら 私 の品性を侮辱するような事を自分でしてお目にかけますから、何とか云っちゃい  
やよと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。しかしけっして不道德と云ってはならん。  
もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗ったものである。僕を侮辱したものである。と  
主張するようなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立っている。いやしくも人間

け  
に生れる以上は踏んだり、蹴ったり、どやされたりして、しかも人が振りむきもせぬ時、平  
気である覚悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大  
きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。それでなくてはかように利口な女と  
名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちょっとしたはずみから、とんだ間違を

おおい  
して 大 に恐れ入ってはいるようなものの、かように恐れ入ってるものを蔭で笑うのは

ちき  
失敬だとくらは思うかも知れないが、それは年が行かない稚気というもので、人が失礼

おこ  
をした時に 怒 るのを気が小さいと先方では名づけるそうだから、そう云われるのがいや  
ならおとなしくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをちょっと紹介する。君は心

ごんげ  
配の 権 化 である。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもって充満せるがご  
とく、まさに心配をもってはちきれんとしている。時々その団子っ鼻がびくびく動くのは

つたわ  
心配が顔面神経に 伝 って、反射作用のごとく無意識に活動するのである。彼は大きな

てっぼうだま くだ かた いだ  
鉄 砲 丸 を飲み 下 したごとく、腹の中にかんともすべからざる 塊 まりを 抱

りょうさんち でどころ  
いて、この 両 三 日 処置に窮している。その切なさの余り、別に分別の 出 所 も  
ないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思って、

うち  
いやな人の 家 へ大きな頭を下げにまかり越したのである。彼は平生学校で主人にからか

せんどう  
ったり、同級生を 煽 動 して、主人を困らしたりした事はまるで忘れてい。いかにか  
らかおうとも困らせようとも監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ないと信じてい  
るらしい。随分単純なものだ。監督は主人が好んでなった役ではない。校長の命によって  
やむを得ずいただいている、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。ただ名前



ある。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪

江さんは名前だけで見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに我<sup>わがまま</sup>儘なるのみならず、他

人は己<sup>おの</sup>れに向って必ず親切でなくてはならんと云う、人間を買い被<sup>かぶ</sup>った仮定から出立

している。笑われるなどとは思も寄らなかつたろう。武右衛門君は監督の家<sup>うち</sup>へ来て、きつと人間について、一の真理を發明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ますます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡になるだろう、人の困る時には大きな声で笑

うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君をもって充たされるであろう。金田君及び金田令夫人をもって充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時も

早く自覚して真<sup>まにんげん</sup>人間になられん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られんのである。いな社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであろう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思っていると、格<sup>こうし</sup>子<sup>しょうじ</sup>ががらがらとあいて、玄関の障<sup>しょうじ</sup>子の蔭から顔が半分ぬうと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返していたところへ、先生と玄関から呼ばれた

ので、誰だろうとそっちを見ると半分ほど筋<sup>すじかい</sup>違<sup>は</sup>に障子から食み出している顔はまさし

く寒月君である。「おい、御這入り」と云ったぎり坐っている。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

「なに構わん、まあ御上がり」

「実はちょっと先生を誘いに来たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては無<sup>むやみ</sup>闇にあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行って虎の鳴き声を聞こうと思うんです」

「つまらんじゃないか、それよりちょっと御上り」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思ったものか、靴を脱いでそのそ上がって来た。

ねずみいろ 鼠 色 の、尻につぎの 中 ったずぼんを穿いているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからである。未来の細君をもって 矚 目 され

た本人へ 文 をつけた恋の 仇 とは夢にも知らず、「やあ」と云って武右衛門君に軽く 会 釈 をして 椽 側 へ近い所へ座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたって詰らないじゃないか」

「ええ、今じゃいけません、これから方々散歩して夜十一時頃になって、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は 森 々 として 物 凄 いでしょう」

「そうさな、昼間より少しは 淋 しいだろう」

「それで何でもなるべく樹の茂った、昼でも人の通らない所を択ってあるいと、い

つの間にか 紅 塵 万 丈 の都会に住んでる気はなくなって、山の中へ迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになってどうするんだい」

「そんな心持ちになって、しばらく 佇 んでいるとたちまち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「そう 旨 く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくらいなんですから、深夜

闐 寂 として、四 望 人なく、鬼気 肌 に 逼 って、魑魅鼻を衝く 際 に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじゃありませんか、 怖 い時に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

ろうさん  
「それで虎が上野の老杉の葉をことごとく振り落すような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりゃ物凄いだらう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きっと愉快だろうと思うんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれないだらうと思うんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であるごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

もくねん うらや  
この時まで黙然として虎の話を羨ましそうに聞いていた武右衛門君は主人の「そうさな」で再び自分の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんですが、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を見た。

しさい  
吾輩は思う仔細あってちょっと失敬して茶の間へ廻る。

なみなみ つ  
茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々と注いで、アン

ちゃたく  
チモニーの茶托の上へ載せて、

はばか  
「雪江さん、憚りさま、これを出して来て下さい」  
「わたし、いやよ」

てい  
「どうして」と細君は少々驚ろいた体で笑いをはたと留める。

そば  
「どうしても」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、傍にあった読売新

きょうしょう  
聞の上ののしかかるように眼を落した。細君はもう一応協商を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」

「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだろう。

「ちっとも恥かしい事はないじゃありませんか」と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞を茶碗の下から、抜こう

ちゃたく  
とする拍子に茶托に引きかかって、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。

「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳<sup>か</sup>け出して行っ

た。雑<sup>ぞうきん</sup>巾でも持ってくる<sup>りょうけん</sup>了見<sup>りょうけん</sup>だろう。吾輩にはこの狂言がちょっと面白かった。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話している。

「先生障<sup>しょうじ</sup>子<sup>か</sup>を張り易えましたね。誰が張ったんです」

「女が張ったんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになったんですか」

「うんあれも手伝ったのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云って威張<sup>おご</sup>ってるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こっちの方は平<sup>たいら</sup>ですが、右の端<sup>はじ</sup>は紙が余って波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もっとも経験の乏<sup>とぼ</sup>しい時に出来上ったところさ」

「なるほど、少し御手際<sup>おてぎわ</sup>が落ちますね。あの表面は超<sup>ちょう</sup>絶<sup>ぜつ</sup>的<sup>てき</sup>曲<sup>きよく</sup>線<sup>せん</sup>でと  
うてい普通のファンクションではあらわせないです」と、理学者だけにむずかしい事を云  
うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、とうてい見込がないと思切った武右衛門君

は突然かの偉大なる頭<sup>ずがいこつ</sup>蓋<sup>お</sup>骨<sup>うち</sup>を畳の上に押しつけて、無言の裡<sup>けつべつ</sup>に暗に訣<sup>けつ</sup>別の意

を表した。主人は「帰るか」と云った。武右衛門君は悄<sup>しょう</sup>然<sup>ぜん</sup>として薩摩下駄を引き

ずって門を出た。可<sup>かわい</sup>愛<sup>そう</sup>想<sup>がんと</sup>に。打ちやって置くと巖<sup>ぎん</sup>頭<sup>とう</sup>の吟<sup>ぎん</sup>でも書いて

けごんのたき<sup>ただ</sup>  
華<sup>たけ</sup>巖<sup>い</sup>滝<sup>たき</sup>から飛び込むかも知れない。元を糺<sup>ただ</sup>せば金田令嬢のハイカラと生意気か  
ら起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になって令嬢を取り殺してやるがいい。  
あんなものが世界から一人や二人消えてなくなったって、男子はすこしも困らない。寒月  
君はもっと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。こないだコロンバスを訳して下さい

おおい  
って 大 に弱った」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をするんでしょう。先生何とおっしゃいました」

い  
「ええ？ なあに好い加減な事を云って訳してやった」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりゃえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくて、先生を困らせるようには見えないじゃありませんか」

「今日は少し弱ってるんだよ。馬鹿な奴だよ」

かわいそう  
「どうしたんです。何だかちょっと見たばかりで非常に可哀想になりました。全体どうしたんです」

ぐ えんしょ  
「なに愚な事さ。金田の娘に 艶書 を送ったんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちっとも心配じゃありません。かえって面白いです。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいっこう構いません。しかしあの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

じょうだん  
「それがさ。冗談 にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかってやろうって、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやったんですか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

とうかん  
「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が 投函 する、一人が名前を借

ぐ  
す。で今来たのが名前を借した奴なんだがね。これが一番愚だね。しかも金田の娘の顔も見た事がないって云うんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりゃ、近来の大出来ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に <sup>ふみ</sup>文 をやるなんて面白いじゃありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになんたって構やしません、相手が金田ですもの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、金田なんか、構やしません」

「君は構わなくっても……」

「なに金田だって構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになって、急に良心に責められて、恐ろしくな

ったものだから、<sup>おおい</sup>大 に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」

<sup>しおしお</sup>  
「へえ、それであんなに <sup>悄悄</sup>々 としているんですか、気の小さい子と見えますね。先生何とか云っておやんなすったんでしょう」

「本人は退校になるのでしょうかって、それを一番心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云うほどでもありませんやね。構やしません。金田じゃ名誉に思っ

<sup>ふいちよう</sup>  
と <sup>吹聴</sup> していますよ」

「まさか」

<sup>かわいそう</sup>  
「とにかく <sup>可愛想</sup> ですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちゃ、若い男を一人殺してしまいますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかぴくぴくさせて可愛いです」

<sup>だいぶ</sup> <sup>のんき</sup>  
「君も <sup>大分</sup> 迷亭見たように <sup>呑気</sup> な事を云うね」

<sup>むかふう</sup>  
「何、これが時代思潮です、先生はあまり <sup>昔し風</sup> だから、何でもむずかしく解釈なさるんです」

<sup>ぐ</sup> <sup>えんしよ</sup>  
「しかし愚じゃないか、知りもしないところへ、いたずらに <sup>艶書</sup> を送るなんて、まるで常識をかいてるじゃないか」

<sup>くどく</sup>  
「いたずらは、たいがい常識をかいていまさあ。救っておやんなさい。 <sup>功德</sup> になります」

ようす けごん  
よ。あの容子じゃ華厳の滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もっと大きな、もっと分別のある 大僧 共がそれどころじゃない、わる

かお  
いいはずらをして知らん面をしていますよ。あんな子を退校させるくらいなら、そんな

かた ばし  
奴らを片っ端から放逐でもしなくっちゃ不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

にさんちうち  
「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中にちょっと帰国しなければならない事が

おとも  
出来ましたから、当分どこへも御伴は出来ませんから、今日は是非いっしょに散歩をし  
ようと思って来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちょっと用事が出来たんです。——ともかくも出ようじゃありませんか」

「そう。それじゃ出ようか」

ばんさん おご  
「さあ行きましょう。今日は私が晩餐を奢りますから、——それから運動をして上

うな  
野へ行くところど好い刻限です」としきりに促がすものだから、主人もその気になっ  
て、いっしょに出掛けて行った。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけら  
けらからからと笑っていた。

十一

す  
床の間の前に碁盤を中に据えて迷亭君と独仙君が対坐している。

おご  
「ただはやらない。負けた方が何か奢るんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独

やぎひげ い  
仙君は例のごとく山羊髯を引っ張りながら、こう云った。

せいぎ ぞくりょう  
「そんな事をする、せっかくの清戯を俗了してしまう。かけなどで勝負に心

を奪われては面白くない。成 敗 を度外において、白雲の自然に 岫 を出でて

ぜんぜん 再々 たるごとき心持ちで一局を了してこそ、個 中 の 味 はわかるものだよ

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちゃ少々骨が折れ過ぎる。宛 然 たる列仙伝中の人物だね」

むげん そきん  
「無 絃 の 素 琴 を弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあって 鷹 揚 だ。君が白なら自然の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからば 謙 遜 して、 定 石 にここいらから行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくっても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になって始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切って、目が 眩 む

ほどごたごたと 黒 白 の石をならべる。そうして勝ったとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足

か で掻き散らしても滅茶滅茶になる。引き寄せて結べば草の 庵 にて、解くればもとの野

原なりけり。入らざるいたずらだ。 懐 手 をして盤を眺めている方が 遥 かに気楽

である。それも最初の三四十 目 は、石の並べ方では別段 目 障りにもならないが、いざ

天下わけ目と云う 間 際に 覗 いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合って、御互にキューキュー云っている。窮屈だからと云って、



隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じっとして身動きもせず、すくんでいるよりほかに、どうする事も出

来ない。碁を発明したものは人間で、人間の嗜好しこうが局面にあらわれるものとするれば、窮

屈なる碁石の運命はせせこましい人間の性質を代表していると云っても差支さしつかえない。

人間の性質が碁石の運命で推知すいちする事が出来るものとするれば、人間とは

てんくうかいかつおの  
天 空 海 濶 の世界を、我からと縮めて、己れの立つ両足以外には、どうあつて

も踏み出せぬように、小刀細工こがたなざいくで自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断

言せざるを得ない。人間とはしいて苦痛を求めるものであると一言いちごんに評してもよからう。

のんき ぜんき  
呑 気 なる迷亭君と、禅 機 ある独仙君とは、どう云う了見か、今日に限って戸棚から

古碁盤を引きずり出して、この暑苦しいいたずらを始めたのである。さすがに御兩人御揃おそろいの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が自由自在に

飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあつて、横 縦 の目盛りは一手ごとよこたて ひとつて うまに埋  
つて行くのだから、いかに呑気でも、いかに禅機があつても、苦しくなるのは当たり前である。

はい  
「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這入ってくる法はない」

ほんいんぼう  
「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本 因 坊 の流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんやをやと、一つ、こう行くかな」

みんなみ びりょう  
「そうおいでになつたと、よろしい。薫風 南 より来つて、殿閣 微 涼 を生ず。  
こう、ついでおけば大丈夫なものだ」

きづかい  
「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つぐ 氣 遣 はなかりろうと思った。つい

はちまんがね  
で、くりやるな 八 幡 鐘 をと、こうやったら、どうするかね」

「どうするも、こうするもないさ。一劍天に倚<sup>よ</sup>って寒し——ええ、面倒だ。思い切って、切<sup>き</sup>ってしまえ」

「やや、大変大変。そこを切られちゃ死んでしまう。おい 冗<sup>じょうだん</sup> 談 じゃない。ちょっと待<sup>まち</sup>った」

「それだから、さっきから云わん事じゃない。こうなってるところへは這<sup>はい</sup>入れるものじゃないんだ」

つかまつ  
「這入<sup>はい</sup>って失敬 仕<sup>し</sup> り候。ちょっとこの白をとってくれたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ」

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。——なに君と僕の間柄じゃないか。そんな水臭い事を言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合だ。しばらく、しばらくって 花<sup>はなみち</sup> 道

か  
から馳<sup>は</sup>け出してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくってもいいから、ちょっとどけたまえ」

ぺん  
「君さっきから、六 返<sup>へん</sup> 待<sup>まち</sup>ったをしたじゃないか」

「記憶のいい男だな。向<sup>こうご</sup> 後<sup>ご</sup> は旧に倍し待<sup>まち</sup>ったを 仕<sup>つかまつ</sup> り候。だからちょっとどけた

まえと云うのだあね。君もよッぽど強情だね。座禅なんかしたら、もう少し 捌<sup>さば</sup> けそうなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構<sup>かま</sup>わない流<sup>りゅう</sup>じゃないか」

「僕は負けても構<sup>かま</sup>わないが、君には勝<sup>か</sup>たしたくない」

しゅんぷうえいり でんこう  
「飛<sup>と</sup>んだ悟<sup>ご</sup>道<sup>だう</sup>だ。相<sup>あ</sup>変<sup>へん</sup>らず 春<sup>はる</sup> 風<sup>かぜ</sup> 影<sup>かげ</sup> 裏<sup>うら</sup> に 電<sup>でん</sup> 光<sup>こう</sup> をきってるね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは <sup>さかさ</sup> 逆だ」

「ハハハハもうたいてい逆かになっていい時分だと思ったら、やはりたしかなところがあるね。それじゃ仕方がないあきらめるかな」

しょうしじだい むじょうじんそく  
「生死事大、無常迅速、あきらめるさ」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へびしゃりと <sup>いっせき くだ</sup> 一石を下した。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に <sup>しゅえい</sup> 輸贏を争っていると、座敷の入口には、

寒月君と東風君が相ならんでその <sup>そば</sup> 傍に主人が黄色い顔をして坐っている。寒月君の前に

かつぶし  
鰹節が三本、裸のまま畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

この鰹節の <sup>しゅっしょ</sup> 出 <sup>ふところ</sup> 処は寒月君の <sup>あつ</sup> 懐で、取り出した時は暖たかく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬくもっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた。

「実は四日ばかり前に国から帰って来たのですが、いろいろ用事があって、方々馳けあるいていたものですから、つい上がられなかったのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のごとく <sup>ぶあいきょう</sup> 無愛嬌な事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみやげを早く <sup>けんじょう</sup> 献上しないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だって東京にもそんなのは有りそうだぜ」と主人が一番大きな奴を一本取り上げて、

<sup>にお</sup> 鼻の先へ持って行って臭いをかいで見る。

「かいだって、鰹節の <sup>よしあし</sup> 善悪はわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる <sup>ゆえん</sup> 所以かね」

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が欠けてるじゃないか」

「それだから早く持って来ないと心配だと云うのです」

「なぜ？」

ねずみ

「なぜって、そりゃ 鼠 が食ったのです」

めった

「そいつは危険だ。滅 多に食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったって害はありません」

かじ

「全体どこで 嚙 ったんだい」

「船の中です」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっしょに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、

かつぶし

その晩にやられました。 鯉 節 だけなら、いいのですけれども、大切なヴァイオリンの

かじ

胴を鯉節と間違えてやはり少々 嚙 りました」

みさかい

「そそっかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう 見 境 がなくなるものかな」と主人

なが

は誰にも分らん事を云って依然として鯉節を 眺 めている。

「なに鼠だから、どこに住んでもそそっかしいのでしょう。だから下宿へ持って来ても

けんのん よ

またやられそうでね。 剣 呑 だから夜は寝床の中へ入れて寝ました」

「少しきたないようだぜ」

「だから食べる時にはちょっとお洗いなさい」

「ちょっとくらいじゃ綺麗にやなりそうもない」

あく

「それじゃ灰汁でもつけて、ごしごし磨いたらいいでしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると

びわ

「なんだって？ ヴァイオリンを抱いて寝たって？ それは風流だ。行く春や重たき琵琶

のだき心と云う句もあるが、それは遠きその <sup>かみ</sup> 上の事だ。明治の秀才はヴァイオリンを抱

いて寝なくっちゃ古人を <sup>しの</sup> 凌ぐ訳には行かないよ。かい <sup>まき</sup> 巻 <sup>よも</sup> に長き夜守るやヴァイオリンはどうかい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこっちの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違ってそう急には出来ません。しかし出来た暁には

<sup>せいれい</sup> きび  
もう少し <sup>せい</sup> 生 <sup>れい</sup> 靈 の機微に触れた妙音が出ます」

「そうかね、<sup>しょうりょう</sup> 生 <sup>た</sup> 靈 はおがらを焚いて迎え奉るものと思ってたが、やっぱり新体

詩の力でも御来臨になるかい」と迷亭はまだ碁をそっちのけにして <sup>からかつ</sup> 調 <sup>く</sup> 戯 <sup>てい</sup> ている。

<sup>た</sup> た  
「そんな無駄口を <sup>く</sup> 叩くとまた負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が <sup>ふちゆう</sup> 釜 <sup>たこ</sup> 中の章魚同然手も足も出せないのだから、

<sup>ぶりょう</sup> 僕も <sup>つかまつ</sup> 無 <sup>つ</sup> 聊 <sup>ま</sup> でやむを得ずヴァイオリンの御仲間を <sup>つ</sup> 仕 <sup>ま</sup> るのさ」と云うと、相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こっちで待ってるんだ」と云い放った。

「え？ もう打ったのかい」

「打ったとも、とうに打ったさ」

「どこへ」

「この白をはずに延ばした」

「なあるほど。この白をはずに延ばして負けにけりか、そんならこっちはと——こっちは——こっちはこっちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね。君もう一返打たしてや

<sup>いちもく</sup>  
るから勝手なところへ <sup>め</sup> 一 <sup>め</sup> 目 打ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。——それじゃこのかど地面へちよつと曲がつ

て置くかな。——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして <sup>かじ</sup> 噛 <sup>る</sup> ん

だよ、もう少しいいのを奮発して買うさ、僕が以太利亜から三百年前の <sup>い</sup> 古 <sup>こ</sup> 物 <sup>ぶつ</sup> を取り寄せてやるるか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人は <sup>いっかつ</sup> 一 <sup>き</sup> 喝 にして迷亭君を極めつけた。

「君は人間の <sup>こぶつ</sup> 古物 とヴァイオリンの <sup>こぶつ</sup> 古物 と同一視しているんだろう。人間の古物でも金田某のごときものは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのさ。——さあ、独仙君どうか御早く願おう。けいまさのせりふじゃないが秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありません。仕方がないから、ここへ <sup>いちもく</sup> 一 <sup>め</sup> 目 入れて目にしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、いささか駄弁を <sup>ふる</sup> 振 <sup>かんたん</sup> って 肝 胆 を砕いていたが、ヤッぱり駄目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。——おい苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行って万年漬を食っただけあって、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまずいが、

<sup>すわ</sup> 度胸は 据 ってる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人が <sup>うし</sup> 後 <sup>むき</sup> ろ 向 のまま  
で答えるやいなや、迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。独仙君は <sup>ごう</sup> 毫 も関せざるも

ののごとく、「さあ君の番だ」とまた相手を <sup>うなが</sup> 促 した。

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思うのだが、よっぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから <sup>しいか</sup> 詩 歌 の趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひ

<sup>たの</sup> そかに 恃 むところがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきっと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」



ね。すると中心から梅干が一個出て来るそうだ。この梅干が出るのを楽しみに塩気のない

周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと云うが、なるほど元気 <sup>おうせい</sup> 旺盛なものだね。  
独仙君、君の気に入りそうな話だぜ」

「質朴剛健でたのもしい気風だ」

「まだたのもしい事がある。あすこには <sup>はいふ</sup> 灰吹きがないそうだ。僕の友人があすこへ奉職

をしている頃 <sup>とげつほう いん</sup> 吐月峰の印のある灰吹きを買いに出たところが、吐月峰どころか、  
灰吹と名づくべきものが一個もない。不思議に思って、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の  
<sup>やぶ</sup> 藪へ行って切って来れば誰にでも出来るから、売る必要はないと澄まして答えたそうだ。

これも質朴剛健の気風をあらわす <sup>びだん</sup> 美譚だろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりゃそれでいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちゃいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた。——僕はその話を聞いて、実に驚い

たね。そんなところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたものだ。にして不 <sup>ふぐん</sup> 羣な

りと楚辞にあるが寒月君は全く明治の <sup>そじ</sup> <sup>くつげん</sup> 屈原だよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウェルテルさ。——なに石を上げて勘定をしろ？ <sup>ものがた</sup> やに物堅い

<sup>たち</sup> 性質だね。勘定しなくっても僕は負けてるからたしかだ」

<sup>きま</sup> 「しかし極りがつかないから……」

「それじゃ君やってくれたまえ。僕は勘定所じゃない。一代の才人ウェルテル君がヴァイ  
オリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずし

て、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取っては白の穴を埋め、黒石を  
取っては黒の穴を埋めて、しきりに口の内で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑 <sup>がんこ</sup> 固なので、少しでも柔弱  
なものがおっては、他県の生徒に外聞がわるいと云って、むやみに制裁を厳重にしました  
から、ずいぶん厄介でした」



「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来何だって、紺こんの無地の袴はかまなんぞ

はは だいち おつ  
穿くんさい。第一あれからして乙おつだね。そうして塩風に吹かれつけているせいかな、どうも、色が黒いね。男だからあれで済むが女があればじゃさぞかし困るだろう」と迷亭君が

はい かんじん  
一人這入ると肝かんじん心じんの話はどっかへ飛んで行ってしまふ。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

いっこくじゅう  
「だって一いっこく国じゅう中じゅうことごとく黒いだから仕方ありません」

いんが  
「因果いんがだね。ねえ苦沙弥君」

なま おのぼれ  
「黒い方がいいだろう。生なまじ白いと鏡を見るたびに己おのぼれ惚ぼが出ていけない。女と云

きぜん たいそく も  
うものは始末におえない物件だからなあ」と主人は喟然きぜんとして大たい息そくを洩らした。

うぬぼ  
「だって一國中ことごとく黒ければ、黒い方で己うぬぼ惚ぼれはしませんか」と東風君がもっともな質問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云うと、

「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるいぜ」と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さっき出掛けた」

「どうれで静かだと思った。どこへ行ったのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰ってくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと笑う。迷亭君は

さい  
「妻さいを持つとみんなそう云う気になるのさ。ねえ独仙君、君なども妻君難の方だろう」

「ええ？ ちょっと待った。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狭いと思ったら、

もく  
四十六もく目あるか。もう少し勝ったつもりだったが、こしらえて見ると、たった十八目の差か。——何だって？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハハ別段難でもないさ。僕の <sup>さい</sup>妻 は元来僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代ってちょっと弁護の労を取った。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の <sup>いき い</sup>域 に入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸福を <sup>まっと</sup>完 <sup>そむ</sup>うしなければ天意に <sup>そむ</sup>背 く訳だと思ふんだ。——がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の <sup>きょう はい</sup>境 に入らんぞうもない」

<sup>さい</sup>「妻 を貰えばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からないですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おうと思って寒月君にさっき

<sup>けいけん</sup>から <sup>だん</sup>経 験 譚 をきいているのです」

「そうそう、ウェルテル君のヴァイオリン物語を拝聴するはずだったね。さあ話し給え。

もう邪魔はしないから」と迷亭君がようやく <sup>ほうぼう</sup>鋒 鋌 を収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな <sup>ゆうぎざんまい</sup>遊 戯 三 昧 で宇宙の

真理が知れては大変だ。這 <sup>しゃり</sup>裡 の消息を知ろうと思えばやはり <sup>けんがい さっ</sup>懸 崖 に手を <sup>さっ</sup>撒 して、

<sup>ぜつご</sup>絶 後 に再び <sup>よみが</sup>蘇 える <sup>てい きはく</sup>底 の氣 魄 がなければ駄目だ」と独仙君はもったい振って、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかったが、東風君は禅宗のぜの字も知らない男だから

<sup>とん</sup>頓 と感心したようすもなく

「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間の <sup>かつごう</sup>渴 仰 の極致を表わしたものだと思ひますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、

で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめるとまでは大分苦心をしたよ。第一買うのに困りましたよ先生」

あさうらぞうり  
「そうだろう 麻裏草履がない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

さしつか  
「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから 差支えないのですが、  
どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。見つければ、すぐ生意気だと云うので制裁を加えられます」

おおい  
「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と東風君は大に同情を表した。

ごめんこうむ  
「また天才か、どうか天才呼ばわりだけは 御免蒙りたいね。それでね毎日散歩をし

てヴァイオリンのある店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれを手に抱えた心

いちんち  
持ちはどんなだろう、ああ欲しい、ああ欲しいと思わない日は一日もなかったのです」

こげ  
「もっともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝ったものだね」と解しかねたのが主人で、

ひげ  
「やはり君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独仙君ばかりは超然として髯

ねん  
を撚している。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一ご不審かも知れないですが、これは考えて見ると当り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校があつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならないのですから、あるはずです。無論

いいはありません。ただヴァイオリンと云う名が辛うじてつくくらいのものでありま

す。だから店でもあまり重きをおいていないので、二三挺いっしょに店頭へ吊るしておく

のです。それがね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きついたり、小僧の手が障つ

たりして、そら音を出す事があります。その音を聞くと急に心臓が破裂しそうな心持で、

いても立ってもいられなくなるんです」

みずてんかん ひとでんかん  
「危険だね。水 癲 癩、人 癲 癩 と癲癩にもいろいろ種類があるが君のはウェルテルだけあって、ヴァイオリン癲癩だ」と迷亭君が冷やかすと、  
「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

てんかん ねいろ ご  
「ええ実際 癲 癩 かも知れませんが、しかしあの 音 色 だけは奇体ですよ。その後  
こんにち ね  
今日 まで随分ひきましたがあのからい美しい音が出た事はありません。そうさ何と形容していいでしょう。とうてい言いあわせないです」

りんろうきゅうそう  
「琳 琅 として鳴るじゃないか」とむずかしい事を持ち出したのは独仙君であったが、誰も取り合わなかったのは気の毒である。

ね  
「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとうこの霊異な音を三度ききました。三度  
たとい  
目にどうあってもこれは買わなければならないと決心しました。仮 令 国のものから  
けんせき けいべつ てっけん  
譴 責 されても、他県のものから 軽 蔑 されても——よし 鉄 拳 制裁のために  
ぜっそく  
絶 息 しても——まかり間違って退校の処分を受けても——、こればかりは買わずにいられないと思いました」

うらやま  
「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思い込める訳のものじゃない。羨 し  
い。僕もどうかして、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けていたが、どうもいけないね。音楽会などへ行って出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに感興  
うら  
が乗らない」と東風君はしきりに 羨 やましがっている。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話すようなものその時の苦しみはとうてい想像が出来るような種類のものではなかった。——それから先生とうとう奮発して買いました」  
「ふむ、どうして」

そろ  
「ちょうど十一月の天長節の前の晩でした。国のは 揃 って泊りがけに温泉に行きましたから、一人もいません。私は病気だと云って、その日は学校も休んで寝ていました。

かね  
今晚こそ一つ出て行って兼て望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でその事ばかり考えていました」

けびょう  
「偽病をつかって学校まで休んだのかい」

「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりゃ」と迷亭君も少々恐れ入った様子である。

まちどお  
「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠でたまりません。仕方がないから頭

ねむ  
からもぐり込んで、眼を眠って待って見ましたが、やはり駄目です。首を出すと烈しい

しょうじ かんしゃく  
秋の日は、六尺の障子へ一面にあたって、かんかんするには癩癩が起りました。上の方に細長い影がかたまって、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

む つ  
「渋柿の皮を剥いて、軒へ吊るしておいたのです」

「ふん、それから」

とこ えんがわ あまぼ  
「仕方がないから、床を出て障子をあけて椽側へ出て、渋柿の甘干しを一つ取って食いました」

「うまかったかい」と主人は小供みたような事を聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が暮ればいいかと、ひそかに神仏に念じて見た。約三四時間も立ったと思う頃、もうよかろうと、首を出すとあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまって、ふわふわする」

「そりゃ、聞いたよ」

なんべん  
「何返もあるんだよ。それから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食って、

はい  
また寢床へ這入って、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やっぱりもとのところじゃないか」

せ しんぼう  
「まあ先生そう焦かずに聞いて下さい。それから約三四時間夜具の中で辛抱して、今

度こそもうよかろうとぬっと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたって、上の方に細長い影がかたまって、ふわふわしている」

「いつまで行っても同じ事じゃないか」

えんがわ

「それから床を出て障子を開けて、椽側へ出て甘干しの柿を一つ食って……」

「また柿を食ったのかい。どうもいつまで行っても柿ばかり食ってて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いている方がよっぽどじれったいぜ」

せつかち

「先生はどうも性急だから、話がしにくくって困ります」

あんも

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗に不平を洩らした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たいていにして切り上げましょう。要する

のきばつ

に私は甘干しの柿を食ってはもぐり、もぐっては食い、とうとう軒端に吊るした奴をみんな食ってしまいました」

「みんな食ったら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食って、もうよかろうと首を出して見ると、相変わらず烈しい秋の日は六尺の障子へ一面にあたって……」

は

「僕あ、もう御免だ。いつまで行っても果てしがない」

あ

「話す私も飽き飽きします」

じょうじゅ

「しかしそのくらい根気があればたいていの事業は成就するよ。だまっていたら、あしたの朝まで秋の日がかんかんするんだらう。全体いつ頃にヴァイオリンを買う気なんだ

しんぼう

い」とさすがの迷亭君も少し辛抱し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然として、あしたの朝まででも、あさつての朝まででも、いくら秋の日がかんかんしても動

けしき

ずる気色はさらがない。寒月君も落ちつき払ったもので

「いつ買う気だとおっしゃるが、晩になりさえすれば、すぐ買いに出掛けるつもりなのです。ただ残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかんしているものですから――

わたく

いえその時の私の苦しみに云ったら、とうてい今あなた方の御じれになるどころの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干しを食っても、まだ日が暮れないのを見て、として思わ

なさ  
ず泣きました。東風君、僕は実に情けなくって泣いたよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話はもっと早く進行させたいものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で滑稽な挨拶をしている。

こっけい  
「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」  
「そう日が暮れなくちゃ聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなくなったと見えて云い出した。

い  
「やめちゃんお困ります。これからがいよいよ佳境に入るところですから」  
「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよかろう」

ま  
「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事ですから、枉げて、ここは日が暮れた事に致しましょう」  
「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどっと噴き出した。

よ くらかけむら  
「いよいよ夜に入ったので、まず安心とほっと一息ついて鞍懸村の下宿を出ました。私は性来騒々しい所が嫌いですから、わざと便利な市内を避けて、  
しょうらいそうぞう きらい  
じんせきまれ かぎゅう いおり  
人迹稀な寒村の百姓家にしばらく蝸牛の庵を結んでいたのです……」

おおげさ  
「人迹の稀なはあんまり大袈裟だね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛の庵もぎょうさん  
仰山だよ。床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷亭君も

ほ  
苦情を持ち出した。東風君だけは「事実はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒めた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」  
「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとってるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

くら  
「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰わせる。

「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。……で当夜の服装と云うと、手織木綿

の綿入の上へ <sup>きんボタン</sup> 金 釦 <sup>がいとう</sup> の制服 外 套 <sup>ずきん</sup> を着て、外套の <sup>かぶ</sup> 頭 巾 をすぼりと 被 っ

るべく人の目につかないような注意をしました。 <sup>おりから</sup> 折 柄 柿 落 葉 の時節で宿から

なんごうかいどう <sup>こ</sup> 南 郷 街 道 へ出るまでは木の葉で路が一杯です。一 <sup>ひとあし</sup> 歩 運ぶごとにがさがさ

るのが気にかかります。誰かあとをつけて来そうでたまりません。振り向いて見ると

とうれいじ <sup>東嶺寺</sup> の森がこんもりと黒く、暗い中に暗く写っています。この東嶺寺と云うのは

まつだいらけ <sup>ぼだいしょ</sup> 松 平 家 の 菩 提 所 で、<sup>こうしんやま</sup> 庚 申 山 の <sup>ふもと</sup> 麓 にあって、私の宿とは一丁くら

へだた <sup>ゆうすい</sup> 離 れて、<sup>ぼんせつ</sup> 幽 邃 な 梵 刹 です。森から上はのべつ幕なし

の星月夜で、例の天の河が長瀬川を <sup>すじかい</sup> 筋 違 に横切つて末は——末は、そうですね、まず

ハワイ <sup>布</sup> 哇 の方へ流れています……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云った。

「南郷街道をついに二丁来て、<sup>たかのだいまち</sup> 鷹 台 町 から市内に這入って、<sup>こじょうまち</sup> 古 城 町 を通

って、<sup>せんごくまち</sup> 仙 石 町 を曲って、<sup>くいしろちょう</sup> 喰 代 町 を横に見て、<sup>とおりちょう</sup> 通 町 を一丁目、

二丁目、三丁目と順に通り返して、それから <sup>おわりちょう</sup> 尾 張 町 、<sup>なごやちょう</sup> 名 古 屋 町 、

<sup>しゃちほこちょう</sup> しゃちほこちょう <sup>かまぼこちょう</sup> かまぼこちょう  
<sup>鮪 鉾 町</sup> 鮪 鉾 町 、<sup>蒲 鉾 町</sup> 蒲 鉾 町 ……」

「そんなにいろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と主人がじれったそうに聞く。

<sup>かねぜん</sup> 「楽器のある店は <sup>金 善</sup> 金 善 即ち金子善兵衛方ですから、まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、店にはランプがかんかんともって……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだから <sup>なんじゅう</sup> 難 渋 するよ」と



今度は迷亭が予防線を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びま

せん。……<sup>ほかげ</sup>灯影にすかして見ると例のヴァイオリンが、<sup>ひ</sup>ほのかに秋の灯を反射して、く

り込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びています。つよく張った<sup>きんせん</sup>琴線の一部だけがきらき

らと白く眼に<sup>うつ</sup>映ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に<sup>どうき</sup>動悸がして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「<sup>か</sup>思わず馳け込んで、<sup>かくし</sup>隠袋から<sup>がまぐち</sup>蝦蟇口を出して、蝦蟇口の中から五円札を二枚出し  
て……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、ましてばし、ここが<sup>かんじん</sup>肝心のところだ。<sup>めった</sup>滅多な事をして

は失敗する。まあよそうと、<sup>きわ</sup>際どいところで思い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺でなかなか人を引っ張るじゃないか」

「引っ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんですから仕方ありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ<sup>よい</sup>宵の口で人が大勢通るんですもの」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって、君はよっぽど妙な男だ」と主人はふん  
ぷんしている。

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステ

ッキを持って<sup>はいかい</sup>徘徊しているんだから容易に手を出せませんよ。中には<sup>ちんでんとう</sup>沈澱党  
などと号して、いつまでもクラスの底に溜まって喜んでるのがありますからね。そんなの

に限って柔道は強いのですよ。<sup>めった</sup>滅多にヴァイオリンなどに手出しは出来ません。どんな

<sup>あ</sup>目に逢うかわかりません。私だってヴァイオリンは欲しいに相違ないですけども、命は

これでも惜しいですからね。ヴァイオリンを弾いて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買うさ。いやならいやでいいから、早くかたをつけたらよさそうなものだ」

「えへへへ、世の中の事はそう、こっちの思うように<sup>らち</sup>埒があくもんじゃありませんよ」と云いながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になったと見えて、ついと立って書斎へ<sup>はい</sup>這入ったと思ったら、何だか古ぼけ

た洋書を一冊持ち出して来て、ごろりと<sup>はらばい</sup>腹這になって読み始めた。独仙君はいつの間

にやら、床の間の前へ退去して、<sup>ひと</sup>一人で碁石を並べて<sup>ひとりずもう</sup>一人相撲をとっている。せっかくの逸話もあまり長くかかるので聴手が一人減り二人減って、残るは芸術に忠実なる

<sup>へきえき</sup>東風君と、長い事にかつて<sup>辟易</sup>した事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月君は、やがて<sup>ぜんどうよう</sup>前同様の速度をもつて談話をつづける。

「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこりゃ宵の口は駄目だ、と云って真夜中に来れば金善は寝てしまうからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時を見計らって来なければ、せっかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計うのがむずかしい」

「なるほどこりゃむずかしかりょう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積ったね。それで今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ。うちへ帰って出直すのは大変だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか気が

<sup>とが</sup>咎めるようで面白くなし、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。ところが平生ならば二時間や三時間はぶらぶらあるいているうちに、いつの間にか経

ってしまうのだがその夜に限って、時間のたつのが遅いの何のって、——<sup>せんしゅう</sup>千秋の思とはあんな事を云うのだらうと、しみじみ感じました」とさも感じたらしい風をしてわざ

と迷亭先生の方を向く。

おきごたつ  
「古人を待つ身につらき置炬燵と云われた事があるからね、また待たる身より待つ身はつらいともあって軒に吊られたヴァイオリンもつらかったろうが、あてのない探偵のようるにうろうろ、まごついている君はなおさらつらいだろう。累々として喪家の犬のごとし。いや宿のない犬ほど気の毒なものは実際ないよ」  
「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでもまだありませんよ」

むか  
「僕は何だか君の話をきくと、昔しの芸術家の伝を読むような気持がして同情の念に堪えない。犬に比較したのは先生の冗談だから気に掛けずに話を進行したまえ」と東

いしや  
風君は慰藉した。慰藉されなくても寒月君は無論話をつづけるつもりである。

おかちまち ひゃっきまち りょうがえちょう  
「それから徒町から百騎町を通って、両替町から  
たかじょうまち ひ  
鷹匠町へ出て、県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の横で窓の灯を計算して、  
こんやばし まきたばこ  
紺屋橋の上で巻煙草を二本ふかして、そうして時計を見た。……」  
「十時になったかい」

のぼ あんま  
「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切って川添に東へ上って行くと、按摩に  
ほ  
三人あった。そうして犬がしきりに吠えましたよ先生……」

おちゅうど  
「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちょっと芝居がかりだね。君は落人と云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」  
「これからしようと云うところさ」

かわいそう  
「可哀相にヴァイオリンを買うのが悪い事じゃ、音楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」  
「人が認めない事をすれば、どんないい事をしても罪人さ、だから世の中に罪人ほどあて

ヤソ  
にならないものはない。耶蘇もあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオリンを買えば罪人さ」

「それじゃ負けて罪人としておきましょう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかんかんさせるさ。それでもおっつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑った。

「そうせん先を越されては降参するよりほかはありません。それじゃ一足飛びに十時にして

しまいましょう。さて御約束の十時になってかねぜん金善の前へ来て見ると、夜寒の頃ですか

ら、さすが目貫の両替町もほとんど人通りが絶えて、むこう

駄の音さえさみ淋しい心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかにくぐりと

しょうじ障子にしています。私は何となく犬に尾けられたような心持で、障子をあけてはい入るのに少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたならしい本からちょっと眼をはずして、「おいもうヴァイオリンを買ったかい」と聞いた。「これから買うところです」と東風君が答えると「まだ買わないの

か、実に永いな」とひとり言のように云ってまた本を読み出した。独仙君は無言のまま、

白と黒で碁盤を大半うず埋めてしまった。

「思い切って飛び込んで、ずきんかぶ頭巾を被ったままヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢の周囲に四五人小僧や若僧がかたまって話をしてるのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイ

オリンをくれと二度目に云うと、一番前にいて、私の顔をのぞ覗き込むようにしていた小僧

がへえとおぼつか覚束ない返事をして、立ち上がって例の店先に吊るしてあったのを三四挺一

度におろ卸して来ました。いくらかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃじゃないか」

どうね  
「みんな 同 価 かと聞くと、へえ、どれでも変りはございません。みんな丈夫に念を入れ

こし がまぐち  
て 拵 らえてございますと云いますから、蝦 蟄 口のなかから五円札と銀貨を二十銭出し

あいだ  
て用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。この 間 、店のものは話を中止

きづかい  
してじっと私の顔を見えています。顔は頭巾でかくしてあるから分る 気 遣 はないのです

たま  
けれども何だか気がせいて一刻も早く往来へ出たくて 堪 りません。ようやくの事風呂敷

がいとう そろ  
包を 外 套 の下へ入れて、店を出たら、番頭が声を 揃 えてありがとうと大きな声を出

さいわい  
したのにはひやっとしました。往来へ出てちょっと見廻して見ると、 幸 誰もいない

むこう  
ようですが、一丁ばかり 向 から二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして来ます。

ほりばた やくおうじみち  
こいつは大変だと金善の角を西へ折れて 濠 端 を 菓 王 師 道 へ出て、はんの木村

こうしんやま すそ  
から 庚 申 山 の 裾 へ出てようやく下宿へ帰りました。下宿へ帰って見たらもう二  
時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が気の毒そうに云うと「やっと上がった。

どうちゅうすごろく  
やれやれ長い 道 中 双 六 だ」と迷亭君はほっと一と息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのは君に逢っちゃ根気負け  
をするね」

「根気はとにかく、ここでやめちゃ仏作って魂入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買ってしまいましたよ。  
ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくってもいい」

「まだ売るどこじゃありません」

「そんならなお聞かなくともいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがま  
あ仕方がない、ざっと話してしまおう」

ゆっ  
「ざっとでなくてもいいから 緩 くり話したまえ。大変面白い」  
「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、まず第一に困ったのは置き所だね。僕の  
だいぶ めった  
所へは大分人が遊びにくるから 滅多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露  
見してしまう。穴を掘って埋めちゃ掘り出すのが面倒だろう」  
「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気楽な事を云う。

ひゃくしょうや  
「天井はないさ。百 姓 家 だもの」  
「そりゃ困ったろう。どこへ入れたい」  
「どこへ入れたと思う」  
「わからないね。戸袋のなかか」  
「いいえ」  
「夜具にくるんで戸棚へしまったか」  
「いいえ」

かく が  
東風君と寒月君はヴァイオリンの 隠れ家についてかくのごとく問答をしているうちに、  
主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりゃ何と読むのだい」と主人が聞く。  
「どれ」  
「この二行き」  
「何だって？ Quid aliud est mulier nisi amicitiae [ # 「amicitiæ」は底本では

ラテンゴ  
「amiticiae」] inimica……こりゃ君 羅 匈 語 じゃないか」  
「羅匈語は分ってるが、何と読むのだい」  
「だって君は平生羅匈語が読めると云ってるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取って、  
ちょっと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりゃ何だい」  
「読める事は読めるが、こりゃ何だは手ひどいね」  
「何でもいからちょっと英語に訳して見ろ」  
「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」  
「従卒でもいいから何だ」

つかまつ  
「まあ羅匈語などはあとにして、ちょっと寒月君のご高話を拝聴 仕 ろうじゃないか。

あたか せき  
今大変なところだよ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う 安 宅 の 関 へかか

ってるんだ。——ねえ寒月君それからどうしたい」と急に乗気になって、またヴァイオリンの仲間入りをする。主人は情<sup>なさ</sup>けなくも取り残された。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母さんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持って来たものだそうです」

こぶつ  
「そいつは古物だね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」  
「ええ、ちと調和せんです」  
「天井裏だって調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

あきさび  
「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給え。秋淋しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君」

だいぶ  
「先生今日は大分俳句が出来ますね」

ぞうけい  
「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣

こしきしま  
と云ったら、故子規子も舌を捲いて驚ろいたくらいのものさ」

しんそつ  
「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率な質問をかける。  
「なにつき合わなくっても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。

かす  
「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困った。ただ出すだけなら人目を掠

ながひ  
めて眺めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。弾かなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちょうど木槿垣を一重隔て

ちんでんぐみ けんのん  
て南隣りは沈澱組の頭領が下宿しているんだから剣呑だあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

こごう つぼね  
「なるほど、こりゃ困る。論より証拠音が出るんだから、小督の局も全くこれでし

にせさつ  
くじったんだからね。これがぬすみ食をするとか、 贗 札 を造るとか云うなら、まだ始

おんぎよく  
末がいいが、 音 曲 は人に隠しちゃ出来ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

かく おお  
「ちょっと待った。音さえ出なけりゃと云うが、音が出なくても 隠 し 了 せないのがあ

むか とう  
るよ。昔 し僕等が小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木 の 藤 さんと云う人がいて

みりん とつくり  
ね、この藤さんが大変 味 淋 がすきで、ビールの 徳 利 へ味淋を買って来ては一人で

とう  
楽しみに飲んでいたのさ。ある日 藤 さんが散歩に出たあとで、よせばいいのに苦沙弥君  
がちよっと盗んで飲んだところが……」

「おれが鈴木 の 味淋などをのむものか、飲んだのは君だぜ」と主人は突然大きな声を出し  
た。

「おや本を読んでるから大丈夫かと思ったら、やはり聞いているね。油断の出来ない男だ。  
耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには  
相違ないが、発覚したのは君の方だよ。——両君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲  
めないのだよ。ところを人の味淋だと思って一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔

まっか ふため  
中 真 赤 にはれ上ってね。いやもう 二 目 とは見られないありさまさ……」

ラテング  
「黙っている。羅 甸 語 も読めない癖に」

とう  
「ハハハハ、それで 藤 さんが帰って来てビールの徳利をふって見ると、半分以上足りな

しゅでい  
い。何でも誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将隅の方に 朱 泥 を練  
りかためた人形のようにかたくなっていらいね……」

こうぜん ひと  
三人は思わず 哄 然 と笑い出した。主人も本をよみながら、くすくすと笑った。 独

きがい き ろう  
り独仙君に至っては 機 外 の機を 弄 し過ぎて、少々疲労したと見えて、碁盤の上へのし

ま  
かかって、いつの間にやら、ぐうぐう寝ている。



うばこ  
「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔し 姥 子 の温泉に行って、一人のじじいと相宿になった事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだったがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが、ただ困った事が一つ出来てしまった。

うばこ たばこ  
と云うのは僕は 姥 子 へ着いてから三日目に 煙 草 を切らしてしまったのさ。諸君も知っ

はい  
てるだろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ温泉に這入って飯を食うよりほかにどうもこうも仕様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもので、煙草がないなと思うやいなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用

あぐら  
意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前で 胡 坐 をかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁のしようもあ

たて ないし  
るが、しまいには煙を輪に吹いて見たり、 豎 に吹いたり、横に吹いたり、 乃 至 は

かんたんゆめ まくら ぎゃく ほらい ほらがえ  
邯 鄲 夢 の 枕 と 逆 に吹いたり、または鼻から獅子の 洞 入り、 洞 返  
りに吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

いしょうどうぐ  
「衣 装 道 具 なら見せびらかすのだが、煙草だから呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰ったらいいでしょう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

ぬす  
「貰わないで 偷 んだ」

「おやおや」

てぬぐい  
「奴さん 手 拭 をぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここだと思って一心不乱立て

ま しょうじ  
つづけに呑んで、ああ愉快だと思いう間もなく、 障 子 がからりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」

「湯には這入らなかったのですか」

きんちやく  
「這入ろうと思ったら 巾着 を忘れたのに気がついて、廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりゃしまいし第一それからが失敬さ」

おてぎわ  
「何とも云えませんが、煙草の御手際じゃ」

「ハハハハじいもなかなか眼識があるよ。巾着はとにかくだが、じいさんが障子をあけると二日間の溜め呑みをやった煙草の煙りがむっとするほど 室のなかに 籠ってるじゃないか、悪事千里とはよく云ったものだね。たちまち露見してしまった」  
「じいさん何とかいいましたか」

まきたばこ  
「さすが年の功だね、何にも言わずに 巻煙草 を五六十本半紙にくるんで、失礼ですが、

そは ゆつぽ  
こんな粗葉でよろしければどうぞお呑み下さいませと云って、また湯壺へ下りて行ったよ」  
「そんなのが江戸趣味と云うのでしょうか」

おおい  
「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それから僕は爺さんと 大に  
かんたんあいて とうりゅう  
肝胆相照らして、二週間の間面白く 逗留して帰って来たよ」

「煙草は二週間で爺さんの御馳走になったんですか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はようやく本を伏せて、起き上がりながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちょうどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちゃ、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちゃ毒だとさ。奥さんが心配だとさ」

やぎひげ よだれ  
「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯を伝わって垂涎が一筋長々と流れて、  
かたつむり あと  
蝸牛の這った迹のように歴然と光っている。

ものう ね  
「ああ、眠かった。山上の白雲わが 懶きに似たりか。ああ、いい心持ちに寝たよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちっと起きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするんだったかな、苦沙弥君」

けんとう

「どうするのかな、とんと見当がつかない」

「これからいよいよ弾くところです」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。こっちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

むげん そきん

「君は無絃の素琴を弾ずる連中だから困らない方なんだが、寒月君のは、きいきいび

きんじょがっぺき おおい  
いびい 近所合壁へ聞えるのだから大に困ってるところだ」

ほう

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾く方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

ろじ びやくぎゅう

「伺わなくても露地の白牛を見ればすぐ分るはずだが」と、何だか通じない事

ろう

を云う。寒月君はねぼけてあんな珍語を弄するのだろうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は天長節だから、朝からうちにいて、つ

ふた

いちんち

づらの蓋をとって見たり、かぶせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいました  
がいよいよ日が暮れて、つづらの底でが鳴き出した時思い切って例のヴァイオリンと弓を  
取り出しました」

めった

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

きっさき つばもと

「まず弓を取って、切先から鏝元までしらべて見る……」

ひやか

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評した。

さむらい と

ちょうや ほかげ

「実際これが自分の魂だと思おうと、侍が研ぎ澄した名刀を、長夜の灯影で

さやばらい

鞘を払をする時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶるとふるえました」

てんかん  
「全く天才だ」と云う東風君について「全く癩 癩 だ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかろう」と云う。独仙君は困ったものだと云う顔付をする。

そば  
「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくランプの 傍 へ引き付けて、  
あいだ  
裏表共よくしらべて見る。この 間 約五分間、つづらの底では始終が鳴いていると思っ  
て下さい。……」

「何とでも思っやるから安心して弾くがいい」

きず  
「まだ弾きやしません。——幸いヴァイオリンも 疵 が無い。これなら大丈夫とぬつくと  
立ち上がる……」

「どっかへ行くのかい」

「まあ少し黙って聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとき。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

か ぞうり つつ  
「ヴァイオリンを小脇に抱い込んで、草 履 を 突 かけたまま二三歩草の戸を出たが、ま  
てしばし……」

「そらおいでなすった。何でも、どっかで停電するに違ないと思った」

「もう帰ったって甘干しの柿はないぜ」

いかん  
「そう諸先生が御まぜ返しになってははなはだ 遺 憾 の至りだが、東風君一人を相手にす  
るより致し方がない。——いいかね東風君、二三歩出たがまた引き返して、国を出るとき

あかげつと かぶ  
三円二十銭で買った 赤 毛 布 を頭から 被 ってね、ふっとランプを消すと君  
まっくらやみ ぞうり ありか  
真 暗 闇 になって今度は草 履 の所在地が判然しなくなった」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけて、表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布

つまさきあが こうしんやま  
にヴァイオリン。右へ右へと 爪 先 上りに 庚 申 山 へ差しかかってくると、

とうれいじ けつと なんじ  
東 嶺 寺 の鐘がボンと 毛 布 を通して、耳を通して、頭の中へ響き渡った。何 時  
だと思ふ、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山道八丁を <sup>おおだいら</sup> 大平 と云う所まで登るのだが、平生なら臆病な僕の事だから、恐しくってたまらないところだけれども、一心不乱

となると不思議なもので、<sup>こわ</sup> 怖いにも怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸が一杯になってるんだから妙なものさ。この大平と云う所は庚申山の南側で天気の良い日に登って見ると赤松の間から城下が一目

<sup>みおろ</sup> 見下せる眺望佳絶の平地で——そうさ広さはまあ百坪もあろうかね、真中に八畳敷ほ

どな一枚岩があつて、北側は <sup>うぬま</sup> 鵜の沼 と云う池つづきで、池のまわりは三抱えもあろうと

云う <sup>くすのき</sup> 樟ばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は <sup>しょうのうと</sup> 樟脳 を採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でもあまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習のた

め道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折れない。ようやく一枚岩の上へ来て、<sup>けつと</sup> 毛布 を敷いて、ともかくもその上へ坐った。こんな寒い晩に登ったのは始めてなんだから、岩

の上へ坐って少し落ち着くと、あたりの <sup>さみ</sup> 淋しさが次第次第に腹の底へ <sup>し</sup> 沁み渡る。こう云

う場合に人の心を乱すものはただ <sup>こわ</sup> 怖いと云う感じばかりだから、この感じさえ引き抜く

と、余るところは <sup>こうこうれつれつ</sup> 皎々冽々 たる空霊の気だけになる。二十分ほど <sup>ぼうぜん</sup> 茫然 としているうちに何だか水晶で造った御殿のなかに、たった一人住んでるような気になった。しかもその一人住んでる僕のからだが——いやからだばかりじゃない、心も魂もことごと

く寒天か何かで製造されたごとく、不思議に透き <sup>すとお</sup> 徹 ってしまうと、自分が水晶の御殿の中にいるのだから、自分の腹の中に水晶の御殿があるのだから、わからなくなって来た……」

「飛んだ事になって来たね」と迷亭君が真面目にからかうあとに付いて、独仙君が「面白

<sup>きょうがい</sup> い境界だ」と少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝まで、せつかくのヴァイオリンも弾かず

<sup>ぼん</sup> に、茫 やり一枚岩の上に坐ってたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなって、生きているか死んでいるか方角のつかない

時に、突然<sup>うし</sup> 後ろの古沼の奥でギャーと云う声がした。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の<sup>こずえ</sup> 梢<sup>のわき</sup>を、野分と共に渡ったと思ったら、はつと我に帰った……」

「やっと安心した」と迷亭君が胸を撫<sup>な</sup>でおろす真似をする。

「たいしいちばんけんこんあらた  
「大死一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする。寒月君にはちっとも通じない。

「それから、我に帰ってあたりを見廻わすと、<sup>こうしんやま</sup> 庚申山一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。はてな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭すぎるし、鳥の声にしては大き過ぎるし、猿の声にしては——この辺によもや猿はおるまい。何だろう？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これを解釈しようとするので今まで静まり返って

いたやからが、<sup>ふんぜんざつぜんじゅうぜん</sup> 紛然雑然糅然としてあたかもコンノート殿下歓迎の当時

における都人士狂乱の態度を<sup>もつ</sup> 以て脳裏をかけ廻る。そのうちに<sup>そうしん</sup> 総身の毛穴が急にあ

いて、<sup>しょうちゅう</sup> 焼酎<sup>けずね</sup> を吹きかけた毛脛のように、勇氣、胆力、分別、沈着などと号す

るお客様がすうすうと蒸発して行く。心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足が紙鳶の

うなりのように震動をはじめ。これはたまらん。いきなり、<sup>けつと</sup> 毛布を頭からかぶって、

<sup>か</sup> ヴァイオリンを小脇に搔い込んでひよろひよろと一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁

を<sup>ふもと</sup> 麓<sup>ふとん</sup>の方へかけ下りて、宿へ帰って布団へくるまって寝てしまった。今考えてもあんな気味のわるかった事はないよ、東風君」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくっても、弾かれないじゃないか。ギャーだもの。君だってきっと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持って行くにはだいぶ苦心惨憺たるものがあつたのだ

ろう。僕は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の 邦 <sup>くに</sup> に出現するところかと思って、今まで真面目に拝聴していたんだよ」と云った迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの講釈でも

聞くかと思のほか、何にも質問が出ないので「サンドラ・ベロニが月下に 堅 <sup>たてごと</sup> 琴 を弾い

て、以太利亜ふう <sup>イタリアふう</sup> の歌を森の中でうたつてるところは、君の 庚申山 <sup>こうしんやま</sup> へヴァイオリ

ンをかかえて <sup>のぼ</sup> 上るところと同曲にして異巧なるものだね。惜しい事に向うは

げっちゅう <sup>じょうが</sup> 月 <sup>ふるぬま</sup> 中の嫦娥を驚ろかし、君は古 <sup>かいり</sup> 沼の怪狸におどろかされたので、

きわ <sup>こっけい</sup> 際 <sup>いかん</sup> どのところで滑稽と崇高の大差を来たした。さぞ遺憾だろう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかさされるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

こうかん <sup>きくつり</sup> 「好漢この鬼窟裏に向って生計を営む。惜しい事だ」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかったためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだろう。

「そりゃ、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行って <sup>たま</sup> 珠ばかり磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんですから、<sup>ざんじ</sup> 暫時中止の姿です。珠ももうあきましたから、実はよそうかと思ってるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エヘヘヘ。博士ならもうならなくってもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありゃしません、そんな事を言ひ<sup>ふ</sup>触らすなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるばかりじゃない、公然の秘

密として天下一般に知れ渡ってる。現に<sup>まんちょう</sup>万朝<sup>ふ</sup>なぞでは花婿花嫁と云う表題で両君の  
写真を紙上に掲ぐるの栄はいつだろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞きにく

るくらいだ。東風君なぞはすでに<sup>えんおうか</sup>鴛鴦歌<sup>ぜん</sup>と云う一大長篇を作って、三箇月前<sup>ぜん</sup>から  
待ってるんだが、寒月君が博士にならないばかりで、せっかくの傑作も宝の持ち腐れにな  
りそうで心配でたまらないそうだ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかってはいませんが、とにかく満腹の同情をこめた作を公け  
にするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。  
少ししっかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう<sup>れっき</sup>歴然とした女房があるんです」

「いや、こりゃえらい。いつの間に<sup>ま</sup>秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。  
苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたたないうちに子供が生れちゃ事できあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待ってたのです。今日先生の所へ持って来

た、この<sup>かつぶし</sup>鰹節は結婚祝に親類から貰ったんです」

「たった三本祝うのはけちだな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」



「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりゃ少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりゃ同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないでもすむところをわざわざ鉢合せるんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なの

えんおうか  
は 鴛 鴦 歌 を作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によって、こちらへ向け易えてもよろしゅうございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあって自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙っていれば沢山です。——なあに黙ってても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかって一部始終残らず知れていますよ」

ことば にか  
探偵と云う 言 語 を聞いた、主人は、急に 苦 い顔をして

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、それでも飽き足らなかつたと見えて、な

しも  
お探偵について 下 のような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懐中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知

ま ぬす すべ  
らぬ間に雨戸をはずして人の所有品を 偷 むのが泥棒で、知らぬ間に口を 滑 らして人の心を読むのが探偵だ。ダンピラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、

し  
おどし文句をいやに並べて人の意志を強うるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥

かざかみ  
棒、強盗の一族でとうてい人の 風 上 に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したって 怖 くはあり

たます  
ません。珠 磨 りの名人理学士水島寒月でさあ」

おうせい  
「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあって元気 旺 盛 なものだね。しかし  
苦沙弥さん。探偵がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金田君のごときものは  
何の同類だろう」

くまさかちょうはん  
「熊坂長範 くらいなものだろう」

う  
「熊坂はよかったね。一つと見えたる長範が二つになってぞ失せにけりと云うが、あんな  
からすがね しんだい むこうよこちょう ごう  
鳥金で身代をつくった 向横丁の長範なんかは 業つく張りの、

きづかい  
慾張り屋だから、いくつになっても失せる 氣遣はないぜ。あんな奴につかまったら因

しょうがい  
果だよ。生涯 たたるよ、寒月君用心したまえ」

ぬすびと  
「なあに、いいですよ。ああら物々し 盗人よ。手並はさきにも知りつらん。それにも  
こ  
懲りず打ち入るかって、ひどい目に合せてやりませあ」と寒月君は自若として  
ほうしょうりゅう きえん は  
宝生流に 氣を吐いて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵のようになる傾向があるが、どう云う訳だ  
ろう」と独仙君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が答える。

つの こんぺいとう  
「人間に文明の 角が生えて、金米糖のようにいらいらするからさ」と迷亭君が  
答える。

ぶ  
今度は主人の番である。主人はもったい振った口調で、こんな議論を始めた。

だいぶ  
「それは僕が大分考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚  
心の強過ぎるのが原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、  
けんしょうじょうぶつ たぐい  
見性成仏とか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の 類ではない。  
……」

だいぶ ぜつとう  
「おや大分むずかしくなって来たようだ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭

ろう はばか  
に弄する以上は、かく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を  
堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

おおい うやま  
「ところがある。大にある。君なぞはせんだっては刑事巡査を神のごとく敬い、

また今日は探偵をスリ泥棒に比し、まるで矛盾のへんげ変怪だが、僕などは終始一貫

ふもみしょういぜん  
父母未生以前からただ今に至るまで、かつて自説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだってはせんだってで今日は今日だ。自説が変らな

かぐ  
いのは発達しない証拠だ。下愚は移らずと云うのは君の事だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可愛いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論の  
あとを拝聴しよう」

せつぜん こうこう  
「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があると云  
う事を知り過ぎていと云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがっ  
て一日一日と鋭敏になって行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないよ

うになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを評して彼は鏡のかかった部屋に 入って、

ごと  
鏡の前を通る毎に自己の影を写して見なければ気が済まぬほど瞬時も自己を忘るる事の

出来ない人だと評したのは、よく今日の趨勢を言いあらわしている。寝てもお

さ  
れ、覚めてもおれ、このおれが至るところにつけまつわっているから、人間の行為言動が  
人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちょう

ど見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくらすなければならない。悠々とか

しょうよう かく  
従容とか云う字は劃があつて意味のない言葉になってしまう。この点において

きんだい かす  
今 代 の人は探偵的である。泥棒的である。探偵は人の目を 掠 めて自分だけうまい事

いきおい つか  
をしようと云う商売だから、 勢 自覚心が強くならなくては出来ん。泥棒も 捕 まる  
か、見つかるかと云う心配が念頭を離れる事がないから、勢自覚心が強くならざるを得な

おの さ  
い。今の人はどうしたら 己 れの利になるか、損になるかと寝ても醒めても考えつづけだ  
から、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソ

い じゅそ  
コソして墓に入るまで一刻の安心も得ないのは今の人々の心だ。文明の 呪 詛 だ。馬鹿馬鹿  
しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。こんな問題になると独仙君はなかなか

ひっこ わがい むか  
引 込んでいない男である。「苦沙弥君の説明はよく 我 意 を得ている。昔 しの人は  
己れを忘れろと教えたものだ。今的人是己れを忘れるなど教えるからまるで違う。二六時  
中己れと云う意識をもって充滿している。それだから二六時中太平の時はない。いつでも

さんこうげつか  
焦熱地獄だ。天下に何が薬だと云って己れを忘れるより薬な事はない。三 更 月 下

むがにいる えい  
入 無 我 とはこの至境を 咏 じたものさ。今的人是親切をしても自然をかいている。

イギリス  
英 吉 利 のナイスなどと自慢する行為も存外自覚心が張り切れそうになっている。英国の

インド  
天子が 印 度 へ遊びに行き、印度の王族と食卓を共にした時に、その王族が天子の前と

じゃがいも てづか  
も心づかずに、つい自国の我流を出して 馬 鈴 薯 を手 攫 みで皿へとって、あとから

まっか は  
真 赤 になって愧じ入ったら、天子は知らん顔をしてやはり二本指で馬鈴薯を皿へとった  
そうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問であった。

あと  
「僕はこんな話を聞いた」と主人が 後 をつける。「やはり英国のある兵營で聯隊の士官

ガラスばち  
が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗う水を 硝 子 鉢  
へ入れて出したら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐ  
うと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒン

ガー・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並みいる士官も我劣らじと  
みずさかずき  
水 盃 を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんな はなし 癖 もあるよ」とだまってる事の きらい 嫌 な迷亭君が云った。「カーライルが始

めて じょこう 女 皇 に謁した時、宮廷の礼に なら へんぶつ 爛 わぬ 変 物 の事だから、先生突然どうです

と云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。ところが女皇の うし 後ろに立っていた大勢の  
侍従や官女がみんなくすくす笑い出した——出したのではない、出そうとしたのさ、する

と女皇が後ろを向いて、ちょっと何か相図をしたら、 おおぜい 多 勢 の侍従官女がいつの間にか  
みんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目を失わなかったと云うんだが随分御念の入っ  
た親切もあったもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立ってても平気だったかも知れませんよ」と寒月君が短  
評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をす  
るにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従って殺伐の気がなくなる、個  
人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚心が強くな  
って、どうしておだやかになれるものか。なるほどちょっと見るとごくしずかで無事なよう

だが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちょうど相撲が土俵の真中で四つに組んで動かない  
ようなものだろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか」

けんか むか  
「喧嘩も 昔 しの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえって罪はなかったが、近頃じゃな  
かなか巧妙になってるからなおなお自覚心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上  
に廻って来る。「ベーコンの言葉に自然の力に従って始めて自然に勝つとあるが、今の喧  
嘩は正にベーコンの格言通りに出来上ってるから不思議だ。ちょうど柔術のようなものさ。

たお  
敵の力を利用して敵を 斃 す事を考える……」

「または水力電気のようなものですね。水の力に逆らわないでかえってこれを電力に変化  
して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取

った。「だから 貧 時には 貧 に 縛 せられ、富時には富に縛せられ、憂 時には 憂

きじ き たお  
に縛せられ、喜時には喜に縛せられるのさ。才人は才に 斃れ、智者は智に敗れ、苦沙弥

かんしゃくも かか  
君のような 癩 癩 持 ちは癩癩を利用さえすればすぐに飛び出して敵のぺてんに 罹  
る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君はにやにや笑いながら「これでなかなか

うま  
そう 甘 くは行かないのだよ」と答えたら、みんな一度に笑い出した。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

いんごう  
「女房は鼻で斃れ、主人は 因 業 で斃れ、子分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云えないが——まず着倒れか、食い倒れ、もしくは

たぐい そとばこまち  
は呑んだくれの 類 だろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町  
のように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

おうむしよじゅうにしょうごしん  
「だから 応 無 所 住 而 生 其 心 と云うのは大事な言葉だ、そう云う

きょうがい ひと  
境 界 に至らんと人間は苦しくてならん」と独仙君しきりに 独 り悟ったような事  
を云う。

でんこうえいり  
「そう威張るもんじゃないよ。君などはことによると 電 光 影 裏 にさか倒れをやる  
かも知れないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行った日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出  
した。

ごんか どうは  
「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が 言 下 に 道 破 する。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見え  
ますね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」  
とこんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦しむものは幸福さ」

しゅっせけんてき  
と独仙君は超然として 出 世 間 的 である。

ずぶと  
「君のように云うとつまり 図 太いのが悟ったのだね」

てつぎゅうめん てつぎゅうしん  
「そうさ、禅語に 鉄 牛 面 の 鉄 牛 心 、牛鉄面の牛鉄心と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱と云う病気が発明されてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

かけあい  
迷亭と独仙が妙な 掛 合 をのべつにやっていると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちゃなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞くがいい。どうして借りた金を返さずに済ますかが問題であるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であった。

れんきんじゅつ  
錬 金 術 はこれである。すべての錬金術は失敗した。人間はどうしても死ななけ

ぶんみょう  
ればならん事が 分 明 になった」

「錬金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明になった時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神経衰弱の国民には生きて

いる事が死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが 厭 だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配するのである。ただたいて

ちえ ほうてき  
いのものは智慧が足りないから自然のままに 放 擲 しておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものでは

かなら ざんしん  
ない。必ずや死に方に付いて種々考究の結果、嶄新な名案を呈出するに違ない。

こうご すうせい  
だからして世界向後の趨勢は自殺者が増加して、その自殺者が皆独創的な方法をもってこの世を去るに違ない」

だいぶぶっそう  
「大分物騒な事になりますね」  
「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンズと云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」  
「自殺するんですか」  
「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違

のち  
ないよ。万年の後には死と云えば自殺よりほかに存在しないもののように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」  
「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になって、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」  
「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御名論を」  
「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野

ぼくしゅ  
蛮の遺風を墨守してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は

おの ほど  
自殺である。しかし己れの好むところはこれを人に施こして可なる訳だから、自殺

きゅうそだい  
を一步展開して他殺にしてもよろしい。ことに表の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござるのが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早く殺して進ぜるのが

やり なぎなた  
諸君の義務である。もっとも昔と違って今日は開明の時節であるから槍、薙刀もし

たぐい ひきょう  
くは飛道具の類を用いるような卑怯な振舞をしてはなりません。ただあてこす

くどく  
りの高尚なる技術によって、からかい殺すのが本人のため功德にもなり、また諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」  
「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的とし





きせんろうにやく 　　ただ  
「その辺はたしかに知らんが、とにかく 貴 賤 老 若 の別なく河へ飛び込む。但し

男子は一人も交らない。ただ遠くから見ている。遠くから見ていると 暮 色 蒼 然 た

はだえ もこ  
る波の上に、白い 肌 が模糊として動いている……」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は 裸 体 が出さえず  
れば前へ乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といっしょに泳ぐ事も出来ず、さればと云  
って遠くから判然その姿を見る事も許されないのを残念に思っ、ちょっといたずらをし  
た……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は おおい 大 に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に 賄 賂 を使って、日没を合図に撞く鐘を一時間前に鳴らした。すると

あさはか 　　かし  
女などは 浅 墓 なものだから、そら鐘が鳴ったと云うので、めいめい河岸へあつまって  
はんじゅばん はんももひき  
半 襦 袢 、半 股 引 の服装でざぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みは  
したもの、いつもと違って日が暮れない」

はげ  
「 烈 しい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立って 眺 めている。恥ずかしいがどうする事も出来ない。大  
に赤面したそうだ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだから気をつ  
けないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。こ

の間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師の小説があった。僕がまあここで書画

こっとうてん 　　ふく  
骨 董 店 を開くとする。で店頭で大家の 幅 や、名人の道具類を並べておく。無論

にせもの しょうじきしょうめい  
贋 物 じゃない、正 直 正 銘 、うそいつわりのない上等品ばかり並べて

ものずき  
おく。上等品だからみんな高価にきまつてる。そこへ物数奇な御客さんが来て、この  
もとのぶ  
元信の幅はいくらだねと聞く。六百円なら六百円と僕が云うと、その客が欲しい事は  
ほしいが、六百円では手元に持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

しばいぎ  
「そう云うときまつてるかい」と主人は相変らず芝居気のない事を云う。迷亭君はぬか  
らぬ顔で、

だい  
「まあさ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで僕がなに代は構いませんから、お気  
ちゅうちよ  
に入ったら持っていらっしやいと云う。客はそうも行かないからと躊躇する。それ

げっぶ  
じゃ月賦でいただきますしょう、月賦も細く、長く、どうせこれから御最賃になるん  
ごひいき  
ですから——いえ、ちっとも御遠慮には及びません。どうです月に十円くらいじゃ。何な

ごく  
ら月に五円でも構いませんと僕が極きさくに云うんだ。それから僕と客の間に二三の間  
かのうほうげん  
答があつて、とど僕が狩野法眼元信の幅を六百円ただし月賦十円払込の事で売渡  
す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

ふたしか  
「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥だよ。これからがいよいよ巧妙なる詐  
かいさい  
偽に取りかかるのだけ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百円なら何年で皆済になると  
思う、寒月君」

「無論五年でしょう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思うか短かいと思うか、独仙君」

いちねんばんねん ばんねんいちねん  
「一念万年、万年一念。短かくもあり、短かくもなしだ」

どうか  
「何だそりゃ道歌か、常識のない道歌だね。そこで五年の間毎月十円ずつ払うのだから、  
つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も  
同じ事を毎月繰り返していると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十二回にも十  
円払う気になる。六十二回六十三回、回を重ねるにしたがってどうしても期日がくれば十  
円払わなくては気が済まないようになる。人間は利口のようなのだが、習慣に迷って、根本を

忘れると云う大弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ずつ毎月得をするのさ」  
「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならないでしょう」と寒月君が笑うと、主人はいささか真面目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の<sup>たいひ</sup>貸費を毎月毎月勘定せずに返して、しまい<sup>むこう</sup>に向から断われた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしかなものだ。だから僕の<sup>さつき</sup>先刻述べた文明の未来記を聞いて冗談だなどと笑うものは、六十回でいい月賦を<sup>しょうがい</sup>生涯払って正当だ

と考える連中だ。ことに寒月君や、東風君のような経験の<sup>とぼ</sup>乏しい青年諸君は、よく僕らの云う事を聞いてだまされないようにしなくっちゃいけない」  
「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に致します」  
「いや冗談のようだが、実際参考になる話ですよ、寒月君」と独仙君は寒月君に向いだし

た。「たとえばですね。今苦沙弥君か迷亭君が、君が無断で結婚したのが<sup>おんとう</sup>穏当でないから、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。謝罪する了見ですか」  
「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」  
「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「<sup>ごめんこうむ</sup>ななお御免蒙ります」  
「大臣とか華族ならどうです」  
「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変ってる。昔は<sup>おかみ</sup>御上の御威光なら何でも出来た時代です。その次には御上の御威光でも出来ないものが出来てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかれるものの方では不

愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は<sup>むか</sup>昔しと違って、御上の御威光だから出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、昔しのものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説

明したものとすれば、なかなか <sup>あじわい</sup> 味 があるじゃないですか」

「そう云う知己が出てくると是非未来記の続きが述べたくなるね。独仙君の御説のごとく

今の世に御上の御威光を <sup>かさ</sup> 笠 にきたり、竹槍の二三百本を <sup>たのみ</sup> 恃 にして無理を押し通そう

とするのは、ちょうどカゴへ乗って何でも蚊でも汽車と競争しようと思わせる、時代後れの

がんぶつ <sup>か</sup> 頑物 ———— <sup>ちょうほん</sup> ちょうほん <sup>からすがね</sup> からすがね <sup>ちょうはんせんせい</sup> ちょうはんせんせい <sup>張本</sup> 張本、<sup>烏金</sup> 烏金の <sup>長範</sup> 長範 <sup>先生</sup> 先生 くら

<sup>おてぎわ</sup> おてぎわ  
いのもだから、黙って御手際を拝見していればいいが——僕の未来記はそんな当座間に合せの小問題じゃない。人間全体の運命に関する社会的現象だからね。つらつら目下文

<sup>すうせい</sup> すうせい <sup>ぼく</sup> ぼく  
明の傾向を達観して、遠き将来の <sup>趨勢</sup> 趨勢 を卜 すると結婚が不可能の事になる。驚ろく

<sup>ぜん</sup> ぜん  
なかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前申す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかった。あっても認められなかった。それががらりと変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよと云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞ

<sup>うちけんか</sup> うちけんか  
と心の <sup>中</sup> 中で喧嘩を買いながら行き違ふ。それだけ個人が強くなった。個人が平等に強くなったから、個人が平等に弱くなった訳になる。人がおのれを害する事が出来にくくな

<sup>めった</sup> めった  
った点において、たしかに自分は強くなったのだが、<sup>滅多</sup> 滅多 に人の身の上に手出しがならなくなった点においては、明かに昔より弱くなったんだろう。強くなるのは嬉しいが、弱

<sup>いちごう</sup> いちごう <sup>おか</sup> おか  
くなるのは誰もありがたくないから、人から <sup>一毫</sup> 一毫 も犯 されまいと、強い点をあくま

<sup>はんもう</sup> はんもう <sup>おか</sup> おか  
で固守すると同時に、せめて <sup>半毛</sup> 半毛 でも人を侵 してやろうと、弱いところは無理にも

<sup>ひろ</sup> ひろ  
拡 げたくなる。こうなると人と人との間に空間がなくなって、生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張りつめて、はち切れるばかりにふくれ返って苦しがつて生存している。苦しいから色々の方法で個人と個人との間に余裕を求める。かくのごとく人間が自業自得

まぎ  
で苦しんで、その苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ

いっけいちもん  
這入って見給え。一家門ことごとく一軒のうちにごろごろしている。主張すべき個性もなく、あっても主張しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の間で

わがまま いきお  
もお互に我儘を張れるだけ張らなければ損になるから勢い両者の安全を保持するためには別居しなければならない。歐洲は文明が進んでいるから日本より早くこの制度

むすこ  
が行われている。たまたま親子同居するものがあったても、息子がおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払ったりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晩日本へも是非輸入しなければならない

こんにち  
らん。親類はとくに離れ、親子は今日に離れて、やっと我慢しているようなものの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては楽が出来ない。しかし親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない訳だから、最後の方案として夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいっしょにいるから夫婦だと思ってる。それが大きな了見違いさ。いっしょにいるためにはいっしょにいるに充分なるだけ個性が合わなければならないだろう。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云って、目

いちにんまえ  
には夫婦二人に見えるが、内実は一人前なんだからね。それだから

かいろうどうけつ  
偕老同穴とか号して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蛮なものさ。今はそうは行かないやね。夫はあくまでも夫で妻はどうしたって妻だからね。その妻が女学校で

あんどんばかま は ろうこ きた  
行灯袴を穿いて牢乎たる個性を鍛え上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通りになるような妻なら妻じゃ

すご  
ない人形だからね。賢夫人になればなるほど個性は凄いほど発達する。発達すればする

いきおい  
ほど夫と合わなくなる。合わなければ自然の勢夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎える

せつぜん  
ほど双方共苦しみの程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截然たるしきりがあって、それも落ちついて、しきりが水平線を保っていればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震のように上がったり下がったりする。ここ

において夫婦雑居はお互の損だと云う事が次第に人間に分ってくる。……」

「それで夫婦がわかるんですか。心配だな」と寒月君が云った。

「わかる。きっとわかる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいっしょにいたのが

夫婦であったが、これからは <sup>どうせい</sup> 同棲 しているものは夫婦の資格がないように世間から  
もく  
目 されてくる」

「すると私なぞは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は <sup>きわ</sup> 際 どのところでのろ  
けを云った。

<sup>みよ</sup> 「明治の御代に生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあって、頭脳が時勢より一二歩ず  
つ前へ出ているからちゃんと今から独身でいるんだよ。人は失恋の結果だなどと騒ぐが、

<sup>み</sup> 近眼者の視るところは実に憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記の続きを話

すところさ。その時一人の哲学者が <sup>あまくだ</sup> 天 <sup>はてんこう</sup> 降 って 破天荒 の真理を唱道する。その説

に <sup>いわ</sup> 曰 くさ。人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると同結果に <sup>おちい</sup> 陥 る。

いやしくも人間の意義を <sup>まった</sup> 完 からしめんためには、いかなる <sup>あた</sup> 価 を払うとも構わない

からこの個性を保持すると同時に発達せしめなければならん。かの <sup>ろうしゅう</sup> 陋 習 に縛せられ  
て、いやいやながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であって、個性の発

達せざる <sup>もうまい</sup> 蒙 昧 の時代はいざ知らず、文明の <sup>こんにち</sup> 今 <sup>へいとう</sup> 日 なのこの <sup>おちい</sup> 弊 竇 に 陥 っ

<sup>てん</sup> て 恬 として <sup>かえり</sup> 顧 みないのははなはだしき <sup>びゅうけん</sup> 謬 見 である。開化の高潮度に達せる

<sup>きんだい</sup> 今 代 において二個の個性が普通以上に親密の程度をもって連結され得べき理由のあ

るべきはずがない。この <sup>みやす</sup> 観 易 き理由はあるにも関わらず無教育の青年男女が一時の劣情に

<sup>みだり</sup> 駆られて、 <sup>ごうきん</sup> 漫 に <sup>はいとくぼつりん</sup> 合 の式を挙ぐるは 悖 徳 没 倫 のはなはだしき所為で  
ある。吾人は人道のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護のため、全力を挙げこの  
蛮風に抵抗せざるべからず……」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこの時思い切った調子でひらて平手

ひざがしら たつと  
で 膝 頭 を叩いた。「私の考では世の中に何が 尊 いと云って愛と美ほど尊いも

いしや  
のはないと思います。吾々を慰 藉 し、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者  
の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情を洗練するのは全く両  
者の御蔭であります。だから吾人はいつの世いづくに生れてもこの二つのものを忘れるこ  
とが出来ないです。この二つの者が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係になり

しいか  
ます。美は詩 歌、音楽の形式に分れます。それだからいやしくも人類の地球の表面に存  
在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなかろうと思います」

「なければ結構だが、今哲学者が云った通りちゃんと滅してしまうから仕方がないと、あ  
きらめるさ。なに芸術だ？ 芸術だって夫婦と同じ運命に帰着するのさ。個性の発展とい  
うのは個性の自由と云う意味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ、人は人と云う  
意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術家

きょうじゅしや  
と 享 受 者 の間に個性の一致があるからだろう。君がいくら新体詩家だって

ふんば  
踏 張 っても、君の詩を読んで面白いと云うものが一人もなくっちゃ、君の新体詩も御気

えんおうか  
の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳だろう。鴛 鴦 歌 をいく篇作ったって始まら

こんにち こぞ  
ないやね。幸いに明治の 今 日 に生れたから、天下が 挙 げて愛読するのだろうが……」

「いえそれほどでもありません」

じんぶん すなわ  
「今でさえそれほどでなければ、人 文 の発達した未来 即 ち例の一大哲学者が出  
て非結婚論を主張する時分には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから読まないのじゃ

にんにんここ いっこう  
ない。人々 個々 おのおの特別の個性をもってるから、人の作った詩文などは 一 向  
面白くないのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃんとあらわれている。現今英国  
の小説家中でもっとも個性のいちじるしい作品にあらわれた、メレジスを見給え、ジェー

きわ わけ  
ムスを見給え。読み手は 極 めて少ないじゃないか。少ない 訳 さ。あんな作品はあんな  
個性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発達



まった  
して婚姻が不道徳になる時分には芸術も 完 く滅亡さ。そうだろう君のかいたものは僕  
にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなった日にゃ、君と僕の間には芸術  
も糞もないじゃないか」

「そりゃそうですけれども私はどうも直覚的にそう思われたいんです」

きょっかくてき  
「君が直覚的にそう思われなければ、僕は 曲 覚 的 にそう思うまでさ」

「曲覚的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出す。「とにかく人間に個性の自由を許

かつ  
せば許すほど御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか 担 ぎ出すのも  
全くこの窮屈のやりどころがなくなって仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちょ  
っと見るとあれがああの男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平さ。個性の

めった  
発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく 滅 多に寝返りも打てないから、大  
将少しやけになってあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云うよりむし

ゆうもうしょうじん  
ろ気の毒になる。あの声は 勇 猛 精 進 の声じゃない、どうしても

えんこんつうふん おん  
怨 恨 痛 憤 の 音 だ。それもそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下

きゅうぜん  
翁 然 としてその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。こんな愉快が事実に出て  
くれば何もニーチェ見たように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だか  
らホームーでもチェヴィ・チエズでも同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違  
うからね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写し

にがみ  
かえたのだから、苦 味 はないはずだ。ニーチェの時代はそうは行かないよ。英雄なんか

こうし  
一人も出やしない。出たって誰も英雄と立てやしない。昔は 孔 子 がたった一人だったか

き  
ら、孔子も幅を利かしたのだが、今は孔子が幾人もいる。ことによると天下がことごとく

おし  
孔子かも知れない。だからおれは孔子だよと威張っても 圧 が利かない。利かないから不  
平だ。不平だから超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得  
た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちょっとい  
いようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔しから心の修行をした。その方  
が正しいのさ。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくなった時、

おうしゃ たみとうとう むい か  
王者の民蕩々たりと云う句の価値を始めて発見するから。無為にして化すと  
云う語の馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟ったってその時はもうしようがない。ア

かか  
ルコール中毒に罹って、ああ酒を飲まなければよかったと考えるようなものさ

だいぶ  
「先生方は大分厭世的な御説のようだが、私は妙ですね。いろいろ伺っても何とも感じ  
ません。どう云うものでしょう」と寒月君が云う。

「そりゃ妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ解釈した。すると主人が突然こんな事  
を云い出した。

さい  
「妻を持って、女はいいものだななどと思うと飛んだ間違になる。参考のためだから、お

さいぜん  
れが面白い物を読んで聞かせる。よく聴くがいい」と最前書斎から持って来た古い本  
を取り上げて「この本は古い本だが、この時代から女のわるい事は歴然と分ってる」と云  
うと、寒月君が

「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞く。「タマス・ナッシと云って十六世  
紀の著書だ」

さい  
「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻の悪口を云ったものがあるんですか」

さい  
「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻も這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いているかね」

「みんな聞いているよ。独身の僕まで聞いているよ」

いわ ろく  
「アリストートル曰く女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さ

な嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が わざわい 災 少なし……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりゃ面白い本だ。さああとを読んだ」

さいだいきせき  
「或る人問う、いかなるかこれ最大奇蹟。賢者答えて曰く、貞婦……」

「賢者ってだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人問う、妻を<sup>めと</sup>娶るいずれの時に於いてすべきか。

ダイオジニス答えて曰く青年は<sup>いま</sup>未だし、老年はすでに遅し。とある」

「先生<sup>たる</sup>樽の中で考えたね」

「ピサゴラス<sup>いわ</sup>曰く天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」

「ギリシヤ<sup>うかつ</sup>の哲学者などは存外迂濶な事を云うものだね。僕に云わせると天下に恐る

べきものなし。火に入って焼けず、水に入って溺れず……」だけで独仙君ちょっと行き詰る。

「女に逢ってとろけずだろう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさっさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を<sup>ぎよ</sup>御するは人間の最大難事と云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日と

なく夜となく彼を<sup>よ</sup>困<sup>こんぱい</sup>憊起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無学をもって世界における二大厄とし、マーカス・オーレリアスは女子は制御し難き点に

おいて船舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅を飾るの性癖をもってその<sup>きら</sup>天<sup>てんぴん</sup>稟

の醜を<sup>おお</sup>蔽<sup>ろうさく</sup>うの陋策にもとづくものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某におく

って告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし得ざるものあらず。願わくは皇天<sup>あわれみ</sup>憐

を垂れて、君をして彼等の術中に<sup>おちい</sup>陥らしむるなかれと。彼また曰く女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざる苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑

にあらずや、<sup>みつ</sup>蜜に似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざ

るは一層の<sup>かしゃく</sup>呵責と云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」

「ウフフフ」と主人は笑いながら「構うものか」と云った。

ま  
「奥さん、奥さん。いつの間に御帰りですか」

茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナッシ君の説ですから御安心なさい」

「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。寒月君はくすくすと笑った。

かどぐち  
「私も存じませんで失礼しましたアハハハハ」と迷亭君は遠慮なく笑っていると、門口をあらあらしくあけて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がしたと思ったら、座敷

たたらさんぺい  
の唐紙が乱暴にあいて、多々良三平君の顔がその間からあらわれた。

おろした  
三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに卸立てのフロックを着て、すでに幾分か

そうば ビール かつぶし  
相場を狂わせてる上へ、右の手へ重そうに下げた四本の麦酒を縄ぐるみ、鰹節の

そば めざま  
傍へ置くと同時に挨拶もせず、どっかと腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚しい

むしやぶり  
武者振である。

「先生胃病は近来いいですか。こうやって、うちにばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

きい  
「いわんばってんが、顔色はよかなかごたる。先生顔色が黄ですばい。近頃は釣がいいです。品川から舟を一艘雇うて——私はこの前の日曜に行きました」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくても面白いのかい」

こうぜん  
「浩然の気を養うたい、あなた。どうですあなたがた。釣に行った事がありますか。」

面白いですよ釣は。大きな海の上を小舟で乗り廻してあるくのですからね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。

くじら  
「どうせ釣るなら、鯨か人魚でも釣らなくっちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないですね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先生私は近来よっぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいると、

はた  
傍が傍だから、おのずから、そうになってしまうです」

「どうになってしまうのだ」

たばこ しきしま き  
「煙草でもですね、朝日や、敷島をふかしては幅が利かんです」と云いなが

きんぱく エジプト  
ら、吸口に金箔のついた埃及煙草を出して、すばすば吸い出した、

ぜいたく  
「そんな贅沢をする金があるのかい」

「金はなかばってんが、今にどうかなるたい。この煙草を吸っていると、大変信用が違います」

てすう  
「寒月君が珠を磨くよりも楽な信用でいい、手数がかからない。軽便信用だね」と迷亭が寒月にいうと、寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんのですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御気の毒と思うたですたい。しかし先方で是非貰う

き  
てくれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極めました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思って心配しています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は

あいまい  
「貰いたければ貰ったら、いいだろう」と曖昧な返事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持っても心配するがものはないんだよ。だ

むこ  
れか貰うと、さっき僕が云った通り、ちゃんとこんな立派な紳士の御賀さんが出来たじ

やないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作ってくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

ごろ にゆうよう  
「ええ何か作りましょう、いつ頃御入用ですか」

「いつでもいいです。今まで作ったうちでもいいです。その代りです。披露のとき呼ん

ごちそう  
で御馳走するです。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲んだ事がありますか。

うま  
シャンパンは旨いです。——先生披露会のときに楽隊を呼ぶつもりですが、東風君の作を譜にして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんですか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。しっかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらいじゃ承知しそもない男だ」

ひとびん  
「シャンパンもですね。一瓶四円や五円のじゃよくないです。私の御馳走するのはそんな安いじゃないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパンがいやなら、こう云う御礼はどうです」

かくし  
と云いながら上着の隠袋のなかから七八枚の写真を出してばらばらと畳の上へ落す。半

はかま は  
身がある。全身がある。立ってるのがある。坐ってるのがある。袴を穿いてるがある。

ふりそで  
振袖がある。高島田がある。ことごとく妙齡の女子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあるです。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりゃどうです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願ひましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の <sup>めい</sup> 姪 です」

「そうか」

「この方は性質が <sup>ごく</sup> 極 いです。年も若いです。これで十七です。——これなら持参金が千円あります。——こっちのは知事の娘です」と一人で弁じ立てる。

「それをみんな貰う訳にやいかないでしょうか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君 <sup>いっふたさいしゆぎ</sup> 一 夫 多 妻 主 義 ですか」

「多妻主義じゃないですが、<sup>にくしよくろんしゃ</sup> 肉 食 論 者 です」

「何でもいいから、そんなものは早くしまったら、よかろう」と主人は叱りつけるように言い放ったので、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。<sup>まえいわい かど</sup> 前 祝 に 角 の 酒屋 で 買 う て 来 ま し た 。 一 つ 飲 ん で 下 さ い」

主人は手を拍って下女を呼んで <sup>う</sup> 栓 <sup>せん</sup> を抜かせる。主人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君

は <sup>うやうや</sup> 恭 しくコップを捧げて、三平君の <sup>えんぷく</sup> 艶 福 を祝した。三平君は <sup>おおい</sup> 大 に愉快的な様子で

「ここにいる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の <sup>たいれい</sup> 大 礼 ですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がないですか。<sup>はかま</sup> 袴 くらいどうでもみたいです。<sup>ひとなか</sup> ちと 人 中 へも出るがよかたい先生。有名な人に紹介して上げます」

まっぴら めん  
「真平ご免だ」

なお  
「胃病が癒りますばい」

さしつか  
「癒らんでも差支えない」

がんこば  
「そげん頑固張りなさるならやむを得ません。あなたはどうぞ来てくれますか」

ばいしゃくにん  
「僕かね、是非行くよ。出来るなら媒酌人たるの榮を得たいくらいのものだ。

なこうど とう  
シャンパンの三々九度や春の宵。——なに仲人は鈴木藤さんだって？なるほどそこいらだろうと思った。これは残念だが仕方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、ただの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうぞ」

「僕ですか、一竿風月閑生計、ひとひとりす

はくひんこうりょうのかん  
白蘋紅蓼間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わかりませんか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きっと出る事にします、僕の作った曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですとも。君はどうです東風君」

ごりょうにん  
「そうですね。出て御両人の前で新体詩を朗読したいです」

「そりゃ愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビー

ルを飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲んでまっか赤になった。

しがい  
短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の死骸が算を乱す火鉢のなかを見れば火はと

のんき だいぶ  
くの昔に消えている。さすが呑気の連中も少しく興が尽きたと見えて、「大分遅くなつた。もう帰ろうか」とまず独仙君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々に玄関に



よせ  
出る。寄席がはねたあとのように座敷は淋しくなった。

ゆうはん はださむ じゅばん えり  
主人は夕飯をすまして書斎に入る。妻君は肌寒の襦袢の襟をかき合

あら ざら  
せて、洗い晒しの不断着を縫う。小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行った。

のんき  
呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟ったようでも独仙君の足はやはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にか

たます  
いた世の中ではない。寒月君は珠磨りをやめてとうとうお国から奥さんを連れて来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定めし退屈だろう。東風君も今十年したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至っては水に住む人か、山に住む人かち

しょうがいシャンパン  
と鑑定がむずかしい。生涯三鞭酒を御馳走して得意と思う事が出来れば結構

とう ころ  
だ。鈴木藤さんはどこまでも転がって行く。転がれば泥がつく。泥がついても転が

き  
れぬものよりも幅が利く。猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになる。自分ではこ

せんだっ  
れほどの見識家はまたとあるまいと思うていたが、先達でカーテル・ムルと云う見ず

だいきえん あ びっくり  
知らずの同族が突然大気を揚げたので、ちょっと吃驚した。よくよく聞いて

ぜん  
見たら、実は百年前に死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊になって吾輩を驚

めいど  
かせるために、遠い冥土から出張したのだそうだ。この猫は母と対面をするとき、挨拶

さかな くわ  
のしるしとして、一匹の肴を啣えて出掛けたところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなって、自分で食ってしまったと云うほどの不孝ものだけあって、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時などは詩を作って主人を驚かした事もあるそうだ。こんな豪傑

ろく おいとま  
がすでに一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような碌でなしはとうに御暇を頂

むかうのきょう きが  
戴して無何有郷に帰臥してもいいはずであった。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでいる。秋の木の葉は大概落ち

じょうごう  
尽した。死ぬのが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはい

ま  
つの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コップが盆の上に三つ並んで、

ガラス  
その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。硝子の中のものは湯でも冷たい気がする。

ひけしつぽ  
まして夜寒の月影に照らされて、静かに火消壺とならんでいるこの液体の事だから、唇をつけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかしものは試した。三平などはあれを

まっか あつくる いきづか  
飲んでから、真赤になって、熱苦しい息遣いをした。猫だって飲めば陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。

く  
死んでからああ残念だと墓場の影から悔やんでもおっつかない。思い切って飲んで見ると、勢よく舌を入れてぴちゃぴちゃやって見ると驚いた。何だか舌の先を針でさされたように

すいきょう  
ぴりりとした。人間は何の酔興でこんな腐ったものを飲むのかわからないが、猫に

しょう  
はとても飲み切れない。どうしても猫とビールは性が合わない。これは大変だと一度

ひっこ なが  
は出した舌を引込めて見たが、また考え直した。人間は口癖のように良薬口に苦しと

かぜ なお  
言って風邪などをひくと、顔をしかめて変なものを飲む。飲むから癒るのか、癒るのに

さいわい  
飲むのか、今まで疑問であったがちょうどいい幸だ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹の中までになくなったならそれまでの事、もし三平のように前後を忘れる

もうもの  
ほど愉快になれば空前の儲け者で、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やっつけると決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しっかり眠って、またぴちゃぴちゃ始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従っ

てようやく<sup>らく</sup>楽になって、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなった。もう大丈夫と二杯目は難なくやっつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも<sup>ぬぐ</sup>拭うがごとく<sup>ふくない</sup>腹内に収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺うため、じっとすくんでいた。次第にからだは暖かになる。眼のふちがぼうっとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ

猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭も独仙も糞を<sup>くら</sup>食えと云う気になる。金田のじいさん

を<sup>ひっか</sup>引搔いてやりたくなる。妻君の鼻を食い欠きたくなる。いろいろになる。最後にふら

ふらと立ちたくなる。<sup>た</sup>起ったらよたよたあるきたくなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだらうと思ひながら、あてもなく、そこかしこと散歩するよな、しないよな心持でしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだか、あるいてるのだか判然しない。眼はあけるつもりだが重い事おびただ

<sup>夥</sup>しい。こうなればそれまでだ。海だらうが、山だらうが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思う途端ぼちちゃんと音がして、はっと云ううち、——やられた。

どうやられたのか考える間<sup>ま</sup>がない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になってしまった。

我に帰ったときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもって<sup>やたら</sup>矢鱈に搔いたが、搔け

るものは水ばかりで、搔くとすぐもぐってしまう。仕方がないから<sup>あとあし</sup>後足で飛び上って

おいて、前足で搔いたら、がりりと音がしてわずかに<sup>てごたえ</sup>手応があった。ようやく頭だけ

浮くからどこだらうと見廻わすと、吾輩は大きな<sup>かめ</sup>甕の中に落ちている。この<sup>かめ</sup>甕は夏ま

で<sup>みずあおい</sup>水葵と称する<sup>みずくさ</sup>水草が茂っていたがその後烏の勘公が来て葵を食い尽した上

ぎょうずい だいぶ  
に 行 水 を使う。行水を使えば水が減る。減れば来なくなる。近来は大 分 減って

さつき  
鳥が見えないなど 先 刻 思ったが、吾輩自身が鳥の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思いも寄らなかった。

ふち よ  
水から 縁 までは四寸余もある。足をのばしても届かない。飛び上っても出られない。

のんき  
呑 氣 にしていれば沈むばかりだ。もがけばがりがりと甕に爪があたるのみで、あたって時は、少し浮く気味だが、すべればたちまちぐっともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりがりやる。そのうちからだが疲れてくる。あせ 焦 るが、足はさほど利かなくなる。ついにはもぐるために甕を搔くのか、搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなった。

かしゃく  
その時苦しいながら、こう考えた。こんな 呵 責 に逢うのはつまり甕から上へあがりたばかりの願である。あがりたのは山々であるが上がれないのは知れ切っている。吾

おもて  
輩の足は三寸に足らぬ。よし水の 面 にからだが浮いて、浮いた所から思う存分前足をのぼしたって五寸にあまる甕の縁に爪のかかりようがない。甕のふちに爪のかかりようが

が こ  
なければいくらも搔いても、あせっても、百年の間身を粉にしても出られっこない。出られないと分り切っているものをしようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しい

みずか ごうもん かか  
のだ。つまらない。自 ら求めて苦しんで、自ら好んで 拷 問 に 罹 っているのは馬鹿気ている。

めんこうむ  
「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご 免 蒙 るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

さしつか  
次第に楽になってくる。苦しいのだからありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても 差 支 えはない。

いな じつげつ ふんせい  
ただ楽である。否 楽そのものすらも感じ得ない。日 月 を切り落とし、天地を 粉 壘 して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得

なむあみだぶつ  
られぬ。南 無 阿 弥 陀 仏 南 無 阿 弥 陀 仏。ありがたいありがたい。

---

底本：「夏目漱石全集 1」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 9 月 29 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999 年 9 月 17 日公開

2010 年 11 月 2 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

[#…] は、入力者による注を表す記号です。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

アクセント符号付きラテン文字は、画像化して埋め込みました。

---

# 10. 走れメロス

太宰治

じゃちぼうぎやく

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発

こ

し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律気な一牧人

はなむこ

を、近々、花婿として迎える事になっていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。路で逢った若い衆をつかまえて、何かあったのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも

はず

皆が歌をうたって、まちは賑やかであった。管だが、と質問した。若い衆は、首を振って

ろうや

答えなかった。しばらく歩いて老翁に逢い、こんどはもっと、語勢を強くして質問した。老翁は答えなかった。メロスは両手で老翁のからだをゆすぶって質問を重ねた。老翁は、あたりをはばかりる低声で、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

よつぎ

「はい、はじめは王様の妹さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「おどろいた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きょうは、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「<sup>あき</sup>呆れた王だ。生かして置けぬ。」

メロスは、単純な男であった。買い物、背負ったままで、のそのそ王城にはいつて行った。たちまち彼は、<sup>じゅんら</sup>巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは、王の前に引き出された。

「この短剣で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニスは静かに、けれども威

<sup>もつ</sup>厳を以て問いつめた。その王の顔は<sup>そうはく みけん しわ</sup>蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたように深かった。

「市を暴君の手から救うのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか？」王は、<sup>びんしょう</sup>憫笑した。「仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ。」

「言うな！」とメロスは、いきり立って<sup>はんぱく</sup>反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑って居られる。」

「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着

<sup>つぶや</sup>いて、<sup>ためいき</sup>呟き、ほっと溜息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」こんどはメロスが嘲笑した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

<sup>げせん</sup>「だまれ、下賤の者。」王は、さっと顔を挙げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、

<sup>はりつけ</sup>はりつけ<sup>わ</sup>磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」

<sup>りこう</sup>「ああ、王は<sup>うぬぼ</sup>伶俐巧だ。自惚れているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、——」と言いかけて、メロスは足もとに視線を落とし瞬時ためらい、「ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えて下さ

い。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます。」

「ばかな。」と暴君は、<sup>しわが</sup> 嘎<sup>うそ</sup> れた声で低く笑った。「とんでもない嘘を言うわい。逃がした小鳥が帰って来るといのか。」

「そうです。帰って来なのです。」メロスは必死で言い張った。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまって、三日目の日暮まで、ここに帰って来なかったら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ、そうして下さい。」

それを聞いて王は、<sup>ほくそえ</sup> 残虐な気持で、そっと北<sup>だま</sup> 叟<sup>だま</sup> 笑<sup>だま</sup> んだ。生意気なことを言うわい。ど

うせ帰って来ないにきまっている。この嘘つきに<sup>だま</sup> 騙<sup>だま</sup> された振りして、放してやるのも面白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、

<sup>やつばら</sup> 正直者とかいう奴<sup>やつばら</sup> 輩<sup>やつばら</sup> にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰って来い。おくれたら、その身代りを、きっと殺すぞ。ちょっとおくれて来るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。おまえの心は、わかっているぞ。」

<sup>じだんだ</sup> メロスは口惜しく、地<sup>じだんだ</sup> 団<sup>じだんだ</sup> 駄<sup>じだんだ</sup> 踏<sup>じだんだ</sup> んだ。ものも言いたくなくなった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語った。セリヌンティ

<sup>うなず</sup> ウスは無言で首<sup>うなず</sup> 肯<sup>うなず</sup> き、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、<sup>あく</sup> 翌<sup>あく</sup> る日の午前、陽は既に高く昇って、村人たちは野に出て仕事をはじめていた。メロスの十六の妹

も、きょうは兄の代りに羊群の番をしていた。よろめいて歩いて来る兄の、<sup>こんぱい</sup> 疲労<sup>こんぱい</sup> 困<sup>こんぱい</sup> 憊<sup>こんぱい</sup>



の姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い。」メロスは無理に笑おうと努めた。「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよかろう。」

妹は頬をあからめた。

きれい

「うれしいか。綺麗な衣裳も買って来た。さあ、これから行って、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだ。」

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、

ぶどう

こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄の季節まで待ってくれ、と答えた。メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給え、と更に押してたのんだ。婿の牧人も頑強であった。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぼつりぼつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それ

こら

でも、めいめい気持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも 忪え、陽気に歌

う

たた

をうたい、手を拍った。メロスも、満面に喜色を 湛え、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入っていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願ったが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。ちょっと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。その頃には、雨も小降りになっていよう。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまっていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものは在る。今宵杳然、歓喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「おめでとう。私は疲れてしまったから、ちょっとご免こうむって眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまえの兄の、一ばんきらいなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。おまえも、それは、知っているね。亭主との間に、どんな秘密でも作ってはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りを持っている。」

うなず  
花嫁は、夢見心地で首肯いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、  
「仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝とっては、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ。」

も えしゃく  
花婿は揉み手して、てれていた。メロスは笑って村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

眼が覚めたのは翌日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。きょうは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑って磔の台に上ってやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになっている様子である。身仕度は出来た。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の

かんねい  
奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名誉を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。幾度か、立ちどまりそうになった。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走った。村を出て、野を横

や  
切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇って、そろそろ暑く

ひたい  
なって来た。メロスは額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。妹たちは、きっと佳い夫婦になるだろう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。

のんき  
ゆっくり歩こう、と持ちまへの呑気さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。

わ  
ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降って湧いた災難、メロスの足は、はたと、とまった。見よ、前方の川を。きのうの豪雨で山の水源地は

はんらん とうとう  
氾濫し、濁流滔々と下流に集り、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあ

こっばみじん はしげた  
げる激流が、木葉微塵に橋桁を跳ね飛ばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。

けいしゅう  
あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟は残らず浪に

さら

浚 われて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようになっている。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。

しず

「ああ、鎮めたまえ、荒れ狂う流れを！ 時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことが出来なかったら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。浪は浪を呑み、捲

あお

き、煽り立て、そうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ発揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きず

か

る流れを、なんのこれしきと搔きわけ搔きわけ、めくらめつぼう獅子奮迅の人の子の姿に

れんびん

は、神も哀れと思ったか、ついに 憐 愍 を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切って、ほっとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他には何も無い。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」

こんぼう

山賊たちは、ものも言わず一斉に 棍 棒 を振り上げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、

すき

「気の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ 隙

さすが

に、さっさと走って峠を下った。一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後

しゃくねつ  
の 灼 熱 の太陽がまともに、かつと照って来て、メロスは幾度となく眩 暈を感じ、  
これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、ついに、がくりと膝  
を折った。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、

いだてん  
濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋 駄 天、ここまで突破して来たメロスよ。真の  
勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切って動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまえ

きたい  
を信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、稀 代の不信の人間、まさ

つぼ な いもむし  
しく王の思う 壺 だぞ、と自分を叱ってみるのだが、全身萎えて、もはや 芋 虫 ほど  
にも前進かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝ころがった。身体疲労すれば、精神も共にや

ふてくさ  
られる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不 貞 腐れた根性が、心の隅に巢  
喰った。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かった。神も照覧、  
私は精一ぱいに努めて来たのだ。動けなくなるまで走って来たのだ。私は不信の徒では無

た  
い。ああ、できる事なら私の胸を 截ち割って、真紅の心臓をお目に掛けたい。愛と信実の  
血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も  
根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の一家も笑われ

あざむ  
る。私は友を 欺 いた。途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、  
もう、どうでもいい。これが、私の定った運命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、  
ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかった。私たちは、本当に  
佳い友と友であったのだ。いちどだって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことは無か  
った。いまだって、君は私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありが  
とう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友  
の間の信実は、この世で一ぱん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走っ  
たのだ。君を欺くつもりは、みじんも無かった。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで  
来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて来  
たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給うな。放って置いてくれ。  
どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑ってくれ。王は私に、ちょっと  
おくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束し  
た。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになってい  
る。私は、おくれて行くだらう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事も無く私を  
放免するだらう。そうなったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で

最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。

かな  
やんぬる 哉。——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

せんせん  
ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞えた。そっと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目か

こんこん ささや  
ら滾々と、何か小さく 囁きながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い

すく  
込まれるようにメロスが身をかがめた。水を両手で掬って、一くち飲んだ。ほうと長い

かいふく  
溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労 恢復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言って居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！ メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立って走れるようになったのではないか。ありがたい！ 私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。私は生れた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい。

は  
路行く人を押しのけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、そ

け  
の宴席のまっただ中を駈け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川を飛び越

さ  
え、少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。一団の旅人と颯っとすれちがった瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかかっているよ。」あ

あ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であった。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風と共に聞えた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でございます。む

かた  
だでございます。走るのは、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません。」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」

「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。おうらみ申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめていた。走るより他は無い。

「やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平気でいました。王様が、さんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ちつづけている様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。ついて来い！ フィロストラトス。」

「ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひょっとしたら、間に合わぬものでもない。走るがいい。」

言うにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走った。メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合った。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た。」と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、喉がつかれてしわが  
のど  
がつかれて 嘎れ

かす  
た声が 幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メ

ロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を掻きわけ、掻きわけ、  
「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」  
と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両

かじ  
足に、齧りついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは眼に涙を浮べて言った。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬  
も  
を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君  
と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ。」

うなず  
セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高  
ほほえ  
くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だ  
け、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私  
は君と抱擁できない。」

うな  
メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。  
「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい  
声を放って泣いた。

きよき  
群衆の中からも、歎歎の聲が聞えた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様を、  
まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言った。

かな  
「おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して  
空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願  
いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

どっと群衆の間に、歓声が上がった。  
「万歳、王様万歳。」

ひ  
ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気  
をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、まっぴだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さ  
んは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

(古伝説と、シルレルの詩から。)



---

底本：「太宰治全集 3」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 10 月 25 日初版発行

1998（平成 10）年 6 月 15 日第 2 刷

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和 50）年 6 月～1976（昭和 51）年 6 月

入力：金川一之

校正：高橋美奈子

2000 年 12 月 4 日公開

2011 年 1 月 17 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/) (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

---

# 11. 蜘蛛の糸

芥川龍之介

+目次

—

おしゃかさま はすいけ  
ある日の事でございます。御 積 迦 様 は極楽の 蓮 池 のふちを、独りでぶらぶら

はす  
御歩きになっいらっしゃいました。池の中に咲いている 蓮 の花は、みんな玉のように

きんいろ すい よ におい  
まっ白で、そのまん中にある 金 色 の 蕊 からは、何とも云えない好い 匂 が、

たえま あふ  
絶 間 なくあたりへ 溢 れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

おたたず おもて おお  
やがて御積迦様はその池のふちに 御 佇 みになって、水の 面 を 蔽 っている蓮

ようす じごく  
の葉の間から、ふと下の 容 子 を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度 地 獄

すいしよう さんず  
の底に当って居りますから、水 晶 のような水を透き徹して、三 途 の河や針の山

のぞ めがね  
の景色が、丁度 覗 き 眼 鏡 を見るように、はっきりと見えるのでございます。

うごめ  
するとその地獄の底に、と云う男が一人、ほかの罪人と一しょに 蠢 いている姿が、  
御眼に止まりました。この 犍 陀多と云う男は、人を殺したり家につけたり、いろいろ  
悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがござい

くも  
ます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路

は  
ばたを這って行くのが見えました。そこで 犍 陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しま

むやみ  
したが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を 無 暗 に  
とると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛  
を殺さずに助けてやったからでございます。

御積迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この 犍 陀多には蜘蛛を助けた事があるのを

御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした <sup>むくい</sup>報 には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、<sup>ひすい</sup>翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手に御取りになって、玉のような <sup>しらはす</sup>白 蓮 の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御 <sup>おろ</sup>下 しました。

## 二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていただがいます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上っているものがあると思えますと、それは恐い針の山の針が光るのでございませから、その心細さと云ったらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、た

まに聞えるものと云っては、ただ罪人がつく <sup>かすか たんそく</sup>微 かな嘆息ばかりでございませ。こ

れはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の <sup>せめく</sup>責 苦 に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているでございませう。ですからさすが大泥坊の <sup>健陀多</sup>健陀多も、やは

り血の池の血に <sup>むせ</sup>咽 びながら、まるで死にかかった <sup>かわず</sup>蛙 のように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。 <sup>なにげ</sup>何 気 なく <sup>健陀多</sup>健陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺め

ますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参る

のではございませぬか。 <sup>う</sup>健陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。この糸に

すが <sup>縋</sup>りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ませう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

こう思いましたからは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事

には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら <sup>あせ</sup>焦って見た所で、  
容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる <sup>うち</sup>中に、とうとう **犍**陀多もくたびれて、  
もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまいました。そこで仕方がございませんから、  
まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼった甲斐があって、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。**犍**陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気が

つきますと、蜘蛛の糸の下の方には、<sup>かずかぎり</sup>数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をついて、まるで <sup>あり</sup>蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではござい

ませんか。**犍**陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、<sup>ばか</sup>莫迦のよ  
うに大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人で <sup>き</sup>さえ断れそうな、

この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの <sup>にんず</sup>人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし  
万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの <sup>かんじん</sup>肝腎な自分まで

も、元の地獄へ <sup>さかおと</sup>逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でござい  
ます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の  
<sup>は</sup>池の底から、うようよと這い上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せ  
っせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落  
ちてしまうのに違いありません。

そこで **犍**陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は <sup>おれ</sup>己のものだぞ。

お前たちは一体誰に <sup>き</sup>尋いて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と <sup>わめ</sup>喚きました。

その途端でございす。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に **犍**陀多のぶら下つてい

る所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから健陀多もたまりません。あつと云う間

もなく風を切って、こま独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきりと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

おしゃかさま はすいけ はすいけ しじゅう しじゅう  
御 積 迦 様 は極楽の 蓮 池 のふちに立って、この一部 始 終 をじっと見ていらっしゃいましたが、やがてが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、健陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御積迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には とんじゃく 頓 着 致しません。その玉のような  
白い花は、御積迦様の おみあし 御 足 のまわりに、ゆらゆら うてな 萼 を動かして、そのまん中に

ある金色の ずい 蕊 からは、何とも云えない好い匂が、よ 絶 たえま 間 なくあたりへ あふ 溢 れて居りま

す。極楽ももう ひる 午 に近くなったのでございましょう。

(大正七年四月十六日)

---

底本：「芥川龍之介全集 2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 10 月 28 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 7 月 15 日第 11 刷発行

親本：筑摩全集類聚版芥川龍之介全集

1971（昭和 46）年 3 月～11 月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 11 月 10 日公開

2011 年 1 月 28 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

---

# 12.羅生門

芥川龍之介

ある日の暮方の事である。一人の下人<sup>げにん</sup>が、羅生門<sup>らしょうもん</sup>の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗<sup>にぬり</sup>の剥げた、大きな  
まるばしら<sup>きりぎりす</sup>の柱<sup>すざく</sup>に、蟋蟀<sup>おおじ</sup>が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上

は、この男のほかに、雨やみをする市女笠<sup>いちめがさ</sup>や揉烏帽子<sup>もみえぼし</sup>が、もう二三人はありそ  
うなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風<sup>つじかぜ</sup>とか火事とか饑饉とか云う  
わざわい<sup>らくちゅう</sup>の災<sup>らくちゅう</sup>がつづいて起った。そこで洛中<sup>らくちゅう</sup>のさびれ方は一通りではない。旧記によ

ると、仏像や仏具を打碎いて、その丹<sup>に</sup>がついたり、金銀の箔<sup>はく</sup>がついたりした木を、路ば

たにつみ重ねて、薪<sup>たきぎ</sup>の料<sup>しろ</sup>に売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、  
羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよ

こり<sup>こり</sup>すぬすび<sup>ぬすびと</sup>と  
い事にして、狐狸が棲む。盗人<sup>ぬすびと</sup>が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人  
を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくな  
ると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまった  
のである。

その代りまた鴉<sup>からす</sup>がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽と

なく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空

が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻<sup>ごま</sup>をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、

門の上にある死人の肉を、啄<sup>ついで</sup>みに来るのである。——もっとも今日は、刻限<sup>こくげん</sup>が遅  
いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の

はえた石段の上に、鴉の糞<sup>ふん</sup>が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段あ

る石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襦<sup>あお</sup>の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな  
にきび  
面<sup>きび</sup>皴<sup>あお</sup>を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、  
格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所  
がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通

りならず衰<sup>すい</sup>微<sup>び</sup>していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたの  
も、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と  
云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方  
が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme

に影響した。申<sup>さる</sup>の刻<sup>こく</sup>下<sup>さ</sup>りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、

下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならな  
い事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大  
路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空

を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した<sup>いらか</sup> 蕨<sup>いらか</sup>の先に、重たくうす暗い雲  
を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる<sup>いとま</sup> 違<sup>いとま</sup>はない。選ん

でいけば、築<sup>ついじ</sup>土<sup>ついじ</sup>の下か、道ばたの土の上で、饑<sup>うえじに</sup>死<sup>うえじに</sup>をするばかりである。そうして、  
この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば

——下人の考えは、何度も同じ道を<sup>ていかい</sup> 低<sup>ていかい</sup> 徊<sup>あげく</sup>した揚<sup>あげく</sup>句<sup>あげく</sup>に、やっとこの局所へ<sup>ほうちやく</sup> 逢<sup>ほうちやく</sup> 着<sup>ほうちやく</sup>  
した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、  
手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、

その後に来る可き<sup>ぬすびと</sup>「盗<sup>ぬすびと</sup> 人<sup>ぬすびと</sup>になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定す  
るだけの、勇気が出ずにいたのである。



くさめ たいぎ  
下人は、大きな 嚏 をして、それから、大 儀 そうに立上った。夕冷えのする京都は、

ひおけ  
もう 火 桶 が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、

にぬり きりぎりす  
吹きぬける。丹 塗 の柱にとまっていた 蟋 蟀 も、もうどこかへ行ってしまった。

くび やまぶき かざみ あお  
下人は、頸 をちぢめながら、山 吹 の汗 衿 に重ねた、紺の 襖 の肩を高くして

うれえ おそれ  
門のまわりを見まわした。雨風の 患 のない、人目にかかる 惧 のない、一晚楽にね  
られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、

はしご  
幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った 梯 子 が眼についた。上なら、人が

ひじりづか たち  
いたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた 聖 柄 の太刀が

さやばし わらぞうり  
鞘 走 らないように気をつけながら、藁 草 履 をはいた足を、その梯子の一番下の  
段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の

ようす  
男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の 容 子 を窺っていた。楼の上から

うみ  
さす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く 膿 を持

にきび  
った面 皰 のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を

くく  
括 っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもそ

くも  
の火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の  
巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜  
に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

やもり  
下人は、守 宮 のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うよう

たいら  
にして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平 にしながら、頸を出来るだけ、前へ

のぞ  
出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きて

いた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上どころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしな

おし  
がら、永久に唾の如く黙っていた。

げにん ふらん おお  
下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

うづくま  
下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている人間を見た。

ひわだいろ や しらがあたま  
檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。

きざれ  
その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

ざんじ いき  
下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れて

とうしん  
いた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手

しらみ  
をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。

ごへい  
—いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪

に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっ

き門の下でこの男が考えていた、<sup>うえじに</sup> 餓死 <sup>ぬすびと</sup> をするか 盗人 になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、

この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の <sup>きざれ</sup> 木片 のように、勢いよく燃え上り出して  
いたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして  
ひじりづか  
聖柄 の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云  
うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで <sup>いしゆみ</sup> 弩 <sup>はじ</sup> にでも 弾 かれたように、飛び上った。  
「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を <sup>ふさ</sup> 塞いで、  
ののし  
こう 罵 った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを  
行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合っ  
た。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無

理にそこへ倒した。丁度、<sup>にわとり</sup> 鶏 の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。  
「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の <sup>さや</sup> 鞘 を払って、白い <sup>はがね</sup> 鋼 の色をその眼  
の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を  
切りながら、<sup>めだま</sup> 眼 球 がの外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように <sup>しゅうね</sup> 執拗 しく  
黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に  
支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎

あと  
悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

おれ けびいし  
「己は検非違使の序の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。

なわ  
だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。の赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻のどぼとけと一つになった唇を、何か物でも嚙んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏

からす あえ  
の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

かずら  
「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしよと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しょに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持った

ひき  
なり、藁のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

しびと  
「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここに

しすん ほしうお  
今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干魚だと

たてわき い えやみ  
云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯ども

さいりよう  
が、欠かさず菜料に買っていたそうなの。わしは、この女のした事が悪いとは思っていない。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするのじゃて、仕方

がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を <sup>さや</sup>鞘におさめて、その太刀の <sup>つか</sup>柄を左の手でおさえながら、冷然として、

この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな <sup>にきび</sup>面皰を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が <sup>おわ</sup>完ると、下人は <sup>あざけ</sup>嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出る

と、不意に右の手を <sup>にきび</sup>面皰から離して、老婆の <sup>えりがみ</sup>襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云った。

<sup>おれ</sup>おれ <sup>ひはぎ</sup>ひはぎ  
「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人

<sup>ひわだいろ</sup>ひわだいろ  
は、剥ぎとった <sup>うね</sup>檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短

<sup>しら</sup>しら <sup>さかさま</sup>さかさま <sup>こくとうとう</sup>こくとうとう  
い白髪を <sup>たか</sup>倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

<sup>ゆくえ</sup>ゆくえ  
下人の行方は、誰も知らない。

(大正四年九月)

---

底本：「芥川龍之介全集 1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 9 月 24 日第 1 刷発行

1997（平成 9）年 4 月 15 日第 14 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997 年 10 月 29 日公開

2010 年 11 月 4 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

---

# 13. 杜子春

芥川龍之介

一

ある  
或 春の日暮です。

とう らくよう  
唐 の都 洛 陽 の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がいました。

若者は名を杜子春とって、元は金持の息子でしたが、今は財産を つか 費い尽して、その

あわれ  
日の暮しにも困る位、 憐 かな身分になっているのです。

はんじょう きわ  
何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、 繁 昌 を 極 めた都ですから、往来にはまだしっきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当たっている、油の

しや トルコ みみわ  
ような夕日の光の中に、老人のかぶった 紗 の帽子や、 土耳古の女の金の 耳 環 や、

しろうま たづな ようす  
白 馬 に飾った色糸の 手 綱 が、絶えず流れて行く 容 子は、まるで画のような美しさです。

もた なが  
しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を 凭 せて、ぼんやり空ばかり 眺 めていました。

なび かすみ あと  
空には、もう細い月が、うらうらと 靡 いた 霞 の中に、まるで爪の 痕 かと思う程、  
かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまった方が  
ましかも知れない」

杜子春はひとりさっきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

すがめ  
するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目 眇 の老人があります。

それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落とすと、じっと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。

わたし  
「私 ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしました。

「そうか。それは可哀そうだな」

しばらく  
老人は暫く何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を  
指さしながら、

い  
「ではおれが好いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映

よなか  
ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋

はず  
まっている筈だから」

「ほんとうですか」

あ  
杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。ところが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の

なお  
月の色は前よりも猶白くなって、休まない往来の人通りの上には、もう気の早い

こうもり  
蝙蝠が二三匹ひらひら舞っていました。

## 二

ただ  
杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそっと掘って見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

うち げんそう  
大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、

ぜいたく らんりょう けいしゅう  
贅沢な暮しをし始めました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の

りゅうがんにく よたび ぼたん  
竜眼肉をとりよせるやら、日に四度色の変る牡丹を庭に植えさせるやら、

しろくじゃく にしき  
白孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦を縫わせるやら、



こうぼく ぞうげ あつら  
香 木 の車を造らせるやら、象 牙 の椅子を 誂 えるやら、その贅沢を一々書いて  
いては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

うわさ みち あいさつ  
するところいう 噂 を聞いて、今までは 路 で行き合っても、挨 拶 さえしな  
った友だちなどが、朝夕遊びにやって来ました。それも一日 毎 に数が増して、半年ばか

た  
り経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないもの  
は、一人もない位になってしまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛り  
を開きました。その酒盛りの又 盛 なことは、中 々 口には尽されません。極 か

さかづき ぶどうしゅ く  
いつまんだだけをお話しても、杜子春が金の 杯 に西洋から来た 葡 萄 酒 を汲ん  
てんじく の  
で、天 竺 生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十

ひすい はす めのう  
人の女たちが、十人は翡 翠 の 蓮 の花を、十人は瑪 瑙 の牡丹の花を、いずれも髪に  
飾りながら、笛や琴を 節 面白く奏しているという景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、  
一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、  
きのう  
昨 日 までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通過してさえ、挨拶一つして行きません。

ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽  
の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなってしまうました。いや、宿を

わん  
貸すどころか、今では 椀 に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ぼんやり空を眺めな  
すがめ  
がら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目 眇 の老人が、ど  
こからか姿を現して、

「お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。  
が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、  
「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事を

しました。

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」

老人はこう言ったと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、<sup>たちま</sup>忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいにあった、あの<sup>おびただ</sup>夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなってしまいました。

### 三

「お前は何を考えているのだ」

<sup>すがめ</sup>片目 <sup>どとししゅん</sup>眇の老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問いかけました。

もちろん  
勿論 彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光を眺

<sup>たたず</sup>めながら、ぼんやり佇んでいたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っっているのです」  
「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好いことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの——」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を<sup>さえぎ</sup>遮りました。

「いや、お金はもういらぬのです」  
「金はもういらぬ？ ははあ、では贅沢をするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」

<sup>いぶか</sup>老人は 審しそうな眼つきをしながら、じっと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛<sup>あいそ</sup>想<sup>そ</sup>がつきたのです」

杜子春は不平そうな顔をしながら、突<sup>つっけんどん</sup>慳<sup>ん</sup>貪<sup>ん</sup>にこう言いました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追<sup>ついしょう</sup>従<sup>じゅう</sup>もしますけれど、一

旦貧乏になって御覧なさい。柔<sup>やさ</sup>しい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になったところが、何にもならないような気がするのです」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。

「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか」

杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切った眼を挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になって、仙<sup>でし</sup>術<sup>せんじゅつ</sup>の修業をしたいと思うのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でし

う。仙人でなければ、一<sup>ひとよ</sup>夜<sup>よ</sup>の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。

どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えてください」

老人は眉<sup>まゆ</sup>をひそめたまま、暫くは黙って、何事か考えているようでしたが、やがて又にっこり笑いながら、

「いかにもおれは峨<sup>がびさん</sup>眉<sup>す</sup>山<sup>てっかんし</sup>に棲んでいる、鉄冠子という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好きそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ

程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と、快<sup>ねがい</sup>願<sup>い</sup>を容れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終わらない内に、彼は

大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時宜をしました。

「いや、そう御礼などは言って貰うまい。いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな。——が、ともかくもまずおれと

い さいわい たけづえ  
一しょに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。おお、幸、ここに竹杖が一本落ち  
ている。では早速これへ乗って、一飛びに空を渡るとしよう」

うち じゅもん  
鉄冠子はそのにあった青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文を唱えながら、杜  
子春と一しょにその竹へ、馬にでも乗るように跨りました。すると不思議ではありま  
またが

いきおい  
せんか。竹杖は忽ち竜のように、勢よく大空へ舞い上って、晴れ渡った春の夕空を  
峨眉山の方角へ飛んで行きました。

きも  
杜子春は胆をつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が  
ゆうあか  
夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、(とうに霞に紛れたのでし

よう) どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢の毛を風に吹かせて、

うた  
高らかに歌を唱い出しました。

あした くれ そうご  
朝に北海に遊び、暮には蒼梧。

しゅうり せいだ たんきそ  
袖裏の青蛇、胆気粗なり。

し  
三たび岳陽に入れども、人識らず。

ひか どうていこ  
朗吟して、飛過す洞庭湖。

#### 四

さが  
二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞い下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、

なかぞら ちゃわん じんせき  
中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光っていました。元より人跡

の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やっとうしろの  
うしろの

は  
絶壁に生えている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

せいおうぼ  
「おれはこれから天上へ行って、西王母に御眼にかかって来るから、お前はその間こ

いに坐って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな

ましよう  
魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうとも、

ひとつことき  
決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれ

い  
ないものだど覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と言いました。

「大丈夫です。決して声などは出しません。命がなくなっても、黙っています」

「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨って、夜目にも削ったような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

しずか  
杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静に星を眺めていました。するとかれ

はんときとお  
これ半時ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に  
声があつて、

「そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。

おしえ  
しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしずにいました。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

おど  
「返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇しつける  
のです。

杜子春は勿論黙っていました。

らんらん とら こつぜん  
と、どこから登って来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上

のぼ にとら たけ  
に躍り上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮りました。のみならずそれと

はげ うしろ  
同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思うと、後の絶壁の頂からは、

しとだる はくだ  
四斗樽程の白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

まゆげ  
杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。

えじき ねら すき うかが てい  
虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うのか、暫くは睨合いの体

でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛

の またた  
まれるか、蛇の舌に呑まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなってしまうと思った

う  
時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通り  
こうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどん  
なことが起るか、心待ちに待っていました。

すると一陣の風が吹き起って、墨のような黒雲が一面にあたりをとぎすや否や、うす紫

すさま らい  
の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄じく雷が鳴り出しました。いや、雷ばかり

たき  
ではありません。それと一しょに瀑のような雨も、いきなりどうどうと降り出したので

なか げ  
す。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐っていました。風の音、雨のしぶき、そ

くつがえ  
れから絶え間ない稲妻の光、—暫くはさすがの峨眉山も、覆るかと思う位でした

とどろ うず  
が、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思うと、空に渦巻いた黒雲  
の中から、まっ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見る

そび  
と、空は以前の通り晴れ渡って、向うに聳えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、  
やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、

いたずら ようや  
鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯に違いありません。杜子春は漸く安心

ひやあせ ぬぐ  
して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

よろい きくだ  
が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧を着下

たけ おごそ みつまた  
した、身の丈 三丈もあろうという、 巖 かな神将が現れました。神将は手に 三 又

ほこ きっさき むな  
の 戟 を持っていました、いきなりその戟の 切 先 を杜子春の 胸 もとへ向けなが  
いか  
ら、眼を 噴 らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地 開 闢 の昔から、おれが  
すまい はばか  
住 居 をしている所だぞ。それも 憚 らずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よ  
もや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、もくねん つぐ  
し 然 と口を 嚙 んでいました。  
「返事をしないか。——しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれ  
けんぞく き  
の 眷 属 たちが、その方をずたずたに斬ってしまうぞ」

神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさっと裂けると、  
みちみ やり  
驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に 充 満 ちて、それが皆 槍 や刀をきらめかせ  
ながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。

この景色を見た杜子春は、思わずあっと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉  
を思い出して、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、おこ  
怒 らないではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとってやるぞ」

わめ ひらめ  
神将はこう 喚 くが早いか、三又の戟を 閃 かせて、一突きに杜子春を突き殺しまし  
た。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしま  
いました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しょに、夢のように消え  
失せた後だったのです。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こう  
あおむ  
こうと枝を鳴らせています。が、杜子春はとうに息が絶えて、 仰 向けにそこへ倒れてい  
ました。

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、<sup>あんけつどう</sup>闇穴道という道があって、そこは年中暗い空に、氷の  
ような冷たい風がびゅうびゅう吹き<sup>すさ</sup>荒んでいるのです。杜子春はその風に吹かれながら、  
暫くは唯木の葉のように、空を漂って行きましたが、やがて<sup>しんらでん</sup>森羅殿という<sup>がく</sup>額の懸  
った立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを<sup>ま</sup>取り捲いて、  
<sup>きざはし</sup>階の前へ引き据えました。階の上には一人の王様が、まっ黒な<sup>きもの</sup>袍に金の冠を  
かぶって、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて<sup>うわさ</sup>噂に聞いた、<sup>えんま</sup>閻魔大王  
に違いありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ<sup>ひざまず</sup>跪いて  
いました。

「こら、その方は何の<sup>ため</sup>為に、峨眉山の上へ坐っていた？」

閻魔大王の声は<sup>らい</sup>雷のように、階の上から響きました。杜子春は早速その間に答えよう  
としましたが、ふと又思い出したのは、「決して口を利くな」という<sup>き</sup>鉄冠子の<sup>いまし</sup>戒めの  
言葉です。そこで唯<sup>かしら</sup>頭を垂れたまま、<sup>おし</sup>唾のように黙っていました。すると閻魔大王  
は、持っていた鉄の<sup>しゃく</sup>笏を挙げて、顔中の<sup>ひげ</sup>鬚を逆立てながら、

「その方はここをどこだと思う？ <sup>すみやか</sup>速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さ

ず、地獄の<sup>かしゃく</sup>呵責に遇わせてくれるぞ」と、<sup>いたけだか</sup>威丈高に<sup>ののし</sup>罵りました。

が、杜子春は相変らず<sup>くちびる</sup>唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼ど



もの方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に <sup>かしこま</sup> 畏 <sup>たちま</sup> って、 <sup>ち</sup> 忽ち  
杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、 <sup>つるぎ</sup> 剣 の山や血の池の外にも、焦熱地獄という <sup>ほのお</sup> 焰

の谷や <sup>ごくかん</sup> 極 寒 地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地

獄の中へ、 <sup>ほう</sup> 代る代る杜子春を 抛 りこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫

かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の <sup>は</sup> 杵 <sup>きね</sup> に撞

かれるやら、油の <sup>なべ</sup> 鍋 に煮られるやら、毒蛇に <sup>のうみそ</sup> 脳 味 噌 を吸われるやら、 <sup>くまたか</sup> 熊 鷹 に眼

を食われるやら、—その苦しみを数え立てては、到底際限がない位、あらゆる <sup>せめく</sup> 責 苦

に <sup>あ</sup> 遇わされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じっと歯を食いしばったまま、 <sup>ひとこと</sup> 一 言  
も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、 <sup>あき</sup> 呆 れ返ってしまったのでしょう。もう一度 <sup>よる</sup> 夜 のような

空を飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を <sup>きざはし</sup> 階 の下に引き据え  
ながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言う <sup>けしき</sup> 気 色 がございません」と、口を <sup>そろ</sup> 揃 えて

<sup>ごんじょう</sup> 言 上 しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見え  
て、

「この男の <sup>ちちはは</sup> 父 母 は、 <sup>ちくしょうどう</sup> 畜 生 道 に落ちている筈だから、早速ここへ引き立てて  
来い」と、一匹の鬼に言いつけました。

鬼は忽ち風に乗って、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二

<sup>けもの</sup> 匹の 獣 を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春  
は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえばそれは二匹とも、形は見すばら

や  
しい瘦せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞ」

おど  
杜子春はこう嚇されても、やはり返答をせずにいました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いと思っ  
ているのだな」

くず すさま わめ  
閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ」

むち  
鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭をとって立ち上ると、四方八方から二

みしゃく きら  
匹の馬を、未練未積なく打ちのめしました。鞭はりゆうりゆうと風を切って、所嫌  
わず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、—畜生になった父母は、苦しそうに

もだ いなな  
身を悶えて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程嘶き立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。も

きざはし  
うその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階の前へ、倒れ伏  
していたのです。

かた  
杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊く眼をつぶっていました。

ほとんど  
するとその時彼の耳には、殆声とはいえない位、かすかな声が伝わって来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより

おっしや  
結構なことはないのだからね。大王が何と仰っても、言いたくないことは黙って

おい  
御出で」

たしか  
それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。  
そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じっと眼をやって

いるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に

うら けしき  
打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何とい

けなげ まろ  
う健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよる

くび つか  
と、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。……………

## 六

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼん

たたず  
やり佇んでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、—すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」

すがめ  
片目眇の老人は微笑を含みながら言いました。

わたし かえ  
「なれません。なれませんが、しかし私 はなれなかったことも、反って嬉しい気がするのです」

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」

おごそか  
「もしお前が黙っていたら—」と鉄冠子は急に厳な顔になって、じっと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶ててしまおうと思っていたのだ。

のぞみ  
—お前はもう仙人になりたいという望も持っていない。大金持になることは、元より

はず い  
愛想がついた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」

「何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」

こも  
杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が單っていました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇<sup>あ</sup>わないから」

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

「おお、<sup>さいわい</sup>幸、今思い出したが、おれは<sup>たいざん</sup>泰山の南の<sup>ふもと</sup>麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。

---

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和 43）年 11 月 15 日発行

1989（平成元）年 5 月 30 日 46 刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005 年 1 月 7 日作成

2005 年 11 月 23 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 14.注文の多い料理店

宮沢賢治

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲

をかついで、しろくま ひき やまおく  
白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさか

い  
さしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。

け けもの  
「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わ  
ないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

しか みまい  
「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。

たお  
くるくるまわって、それからどたっと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、ど  
こかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

ものすご  
それに、あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまい

うな あわは  
を起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

ま  
「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちょっとか  
えしてみ言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いま  
した。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見な  
がら云いました。

もど  
「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

す  
「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹は空いてきたし戻ろうとおもう。」

きのう じゅうえん  
「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も  
買って帰ればいい。」

うさぎ  
「 兎 もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」  
ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなく  
なっていました。

ふ  
風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りま  
した。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

た  
「喰べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

いつけん  
その時ふとうしろを見ますと、立派な 一 軒 の西洋造りの家がありました。

げんかん  
そして 玄 関 には

## RESTAURANT

西洋料理店

## WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろうじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

せと れんが  
二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。

がらす  
そして硝子の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

えんりよ  
「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、

ちそう  
こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を<sup>お</sup>押して、なかへ入りました。そこはすぐ<sup>ろうか</sup>廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに<sup>ふと</sup>肥ったお方や若いお方は、<sup>だいかんげい</sup>大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの<sup>ぬと</sup>扉がありました。

「どうも変な<sup>うち</sup>家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきっと注文があまり多くて<sup>したく</sup>支度が手間取るけれどもごめん下さいと<sup>こ</sup>斯ういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか<sup>へや</sup>室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに<sup>すわ</sup>座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかか

って、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで<sup>かみ</sup>髪をきちんとして、それからはきもの

<sup>どろ</sup>の泥を落してください。」



と書いてありました。

「これはどうも <sup>もっと</sup> 尤もだ。僕もさっき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ」

「作法の厳しい家だ。きっとよほど <sup>えら</sup> 偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、<sup>くつ</sup> 靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや <sup>いな</sup> 否や、そいつがぼうっとかすんで無くなつて、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、<sup>たがい</sup> 互によりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう <sup>とほう</sup> 途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

<sup>たま</sup> 「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

<sup>ぼうし がいとう</sup> 「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつほどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートを <sup>くぎ</sup> 釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

<sup>めがね さいふ</sup> 「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、

<sup>とが</sup> ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いて

かぎ そ  
ありました。鍵まで添えてあったのです。

かなげ  
「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものはおぶない。ことに尖つたものはおぶないと斯う云うんだらう。」

かんじょう はら  
「そうだらう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きっと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスポタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱ

じょう  
ちんと錠をかけました。

と がらす つぼ こ  
すこし行きますとまた扉があって、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

へや  
「これはね、外がひじょうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたが、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

と書いてあって、ちいさなクリーム壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。ここの

しゅうとう  
主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。」

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に <sup>びん</sup> 瓶 の中の香水をよく <sup>ふ</sup> 振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へばちやばちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔のような <sup>す</sup> 匂 <sup>におい</sup> がするのです。

「この香水はへんに酔くさい。どうしたんだろう。」

<sup>かぜ</sup> 「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん

よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

<sup>たくさん</sup>

「沢 <sup>さん</sup> 山 の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にた

べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる <sup>うち</sup> 家 とこういうことなんだ。

これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

<sup>に</sup>

「逃げ……。」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、

<sup>いちぶ</sup>

戸はもう一 <sup>ぶん</sup> 分 も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。」

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い<sup>めだま</sup>眼玉がこっちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないんだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさ

かったでしょう、お気の毒でしたなんて、<sup>まぬ</sup>間抜けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいって来なかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっしや

<sup>さら</sup>い。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい。」

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダは<sup>きら</sup>お嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの<sup>かみくず</sup>紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふつとわらってまた<sup>さけ</sup>叫んでいます。

「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては<sup>せっかく</sup>折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。」

「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っていられます。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声が出て、あの <sup>しろくま</sup> 白熊 のような犬が二 <sup>ひき</sup> 疋、扉をつき

<sup>へや</sup> やぶって <sup>かぎあな</sup> 室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもは

ううとうなってしばらく室の中をくるくる <sup>まわ</sup> 廻っていましたが、また一声

<sup>ほ</sup> 「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」という声が出て、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や <sup>くつ</sup> 靴 や <sup>さいふ</sup> 財布 やネクタイピンは、あっちの <sup>えだ</sup> 枝にぶらさがったり、こ

っちの根もとにちらばったりしています。風がどうと <sup>ふ</sup> 吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなって <sup>もど</sup> 戻ってきました。

そしてうしろからは、

<sup>だんな</sup> 「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

<sup>にわ</sup> 二人は俄かに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。

<sup>みのぼうし</sup> みのぼうしをかぶった専門の <sup>りょうし</sup> 猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた <sup>だんご</sup> 団子をたべ、<sup>とちゅう</sup> 途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。

---

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 15. オツベルと象

宮沢賢治

+目次

うしか  
.....ある牛飼いがものがたる

第一日曜

いねこき す  
オツベルときたら大したもんだ。稲扱器械の六台も据えつけて、のんのんのんの  
のんのんと、大そろしない音をたててやっている。

ひやくしょう ふ  
十六人の百姓どもが、顔をまるっきりまっ赤にして足で踏んで器械をまわし、  
小山のように積まれた稲を片っぱしから扱いて行く。藁はどんどんうしろの方へ投げら

もみ た ちり  
れて、また新しい山になる。そこらは、粃や藁から発ったこまかな塵で、変にぼう  
と黄いろになり、まるで沙漠のけむりのようだ。

こはく ふきがら  
そのうすくらい仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹殻を  
め い  
藁に落さないよう、眼を細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせて、ぶらぶら往  
ったり来たりする。

がんじょう  
小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稲扱器械が、六台も  
そろってまわってるから、のんのんのんふるうのだ。中にはいるとそのために、すっ  
す  
かり腹が空くほどだ。そしてじっさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめし

ぞうきん  
どきには、六寸ぐらいのピフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを  
たべるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんのんやっていた。

ぬ  
そしたらそこへどういいうわけか、その、白象がやって来た。白い象だぜ、ペンキを塗っ

たのでないぜ。どういうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入口に、ゆっくり顔を出したとき、百姓どもはぎょっとした。なぜぎょっとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合っては大へんだから、どいつもみな、いっしょうけんめい、じぶんの稲を扱っていた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらっと <sup>するど</sup> 鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、何でもないといいふうで、いままでどおり往ったり来たりしていたもんだ。

<sup>かたあしゆか</sup>  
するとこんどは白象が、片脚床にあげたのだ。百姓どもはぎょっとした。それで <sup>いそが</sup> も仕事が忙しいし、かかり合ってはひどいから、そっちを見ずに、やっぱり稲を扱っていた。

<sup>おく</sup>  
オツベルは奥のうすくらいところで両手をポケットから出して、も一度ちらっと象を

<sup>たいくつ</sup>  
見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろ

<sup>いせい</sup> <sup>まえあし</sup>  
に組んで、行ったり来たりやっていた。ところが象が威勢よく、前肢二つつきだして、小屋にあがって来ようとする。百姓どもはぎくっとし、オツベルもすこしぎょっとして、大きな琥珀のパイプから、ふっとけむりをはきだした。それでもやっぱりしらないふうで、ゆっくりそこらをおろしていた。

<sup>のんき</sup>  
そしたらとうとう、象がこのこのこ上って来た。そして器械の前のところを、呑気にあるきはじめたのだ。

<sup>まわ</sup> <sup>もみ</sup> <sup>あられ</sup>  
ところが何せ、器械はひどく廻っていて、杵は夕立か霰のように、パチパチ象にあたるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその眼を細めていたが、またよく見ると、たしかに少しわらっていた。

<sup>かくご</sup> <sup>いねこき</sup>  
オツベルはやっと覚悟をきめて、稲扱器械の前に出て、象に話をしようとしたが、そのとき象が、とてもきれいな、<sup>うぐいす</sup> <sup>い</sup> 鶯みたいないい声で、こんな文句を云ったのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。」



まったく靱は、パチパチパチパチ歯にあたり、またまっ白な頭や首にぶつつかる。

いのちが　こ  
さあ、オツベルは命懸けだ。パイプを右手にもち直し、度胸を据えて斯う云った。

ここ　おもしろ  
「どうだい、此処は面白いかい。」

なな  
「面白いねえ。」象がからだを斜めにして、眼を細くして返事した。

「ずうっとこっちに居たらどうだい。」

百姓どもははっとして、息を殺して象を見た。オツベルは云ってしまってから、にわか

ふる  
にがたがた顫え出す。ところが象はけろりとして

「居てもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をく

よるこ  
しゃくしゃにして、まっ赤になって悦びながらそう云った。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、はたらかせるか、サーカス団に売りとばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたら大したもんだ。それにこの前稲扱小屋で、うまく自分のものにした、

象もじっさい大したもんだ。力も二十馬力もある。第一みかけがまっ白で、牙はぜんた

ぞうげ　じょうぶ  
いきれいな象牙でできている。皮も全体、立派で丈夫な象皮なのだ。そしてずい

かせ　えら  
ぶんはたらくもんだ。けれどもそんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。

い  
「おい、お前は時計は要らないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥

き  
珀のパイプをくわえ、顔をしかめて斯う訊いた。

「ぼくは時計は要らないよ。」象がわらって返事した。

「まあ持って見ろ、いいもんだ。」斯う言いながらオツベルは、ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶらさげた。

「なかなかいいね。」象も云う。

くさり  
「鎖もなくちゃだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前肢にくっつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三あし歩いて象がいう。

くつ  
「靴をはいたらどうだろう。」

「ぼくは靴などはかないよ。」

「まあはいてみろ、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとははめた。

「なかなかいいね。」象も云う。

かざ  
「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を靴の上か

は  
ら、穿め込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二あし歩いてみて、さもうれしそうにそう云った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とはやぶけ、象は鎖と分銅だけで、大

お  
よろこびであるいて居った。

く  
「済まないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水を汲んでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで、顔をしかめて象に云う。

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何ばいでも汲んでやるよ。」

象は眼を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜っ葉の畑にかけた。

ば わら  
夕方象は小屋に居て、十把の藁をたべながら、西の三日の月を見て、

かせ ゆかい  
「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ」と云っていた。

「済まないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ」オツベルは

ふさ ぼうし  
房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしにつっ込んで、次の日象にそう言った。

「ああ、ぼくたきぎを持って来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大すきなんだ」象はわらってこう言った。

オツベルは少しぎょっとして、パイプを手からあぶなく落としそうにしたがもうあのときは、象がいかにも愉快的なふうで、ゆっくりあるきだしたので、また安心してパイプをく

せき  
わえ、小さな咳を一つして、百姓どもの仕事の方を見に行った。

そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ。

晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て

「ああ、せいせいした。サンタマリア」と斯うひとりごとしたそうだ。

その次の日だ、

「済まないが、税金が五倍になった、今日は少し鍛冶場へ行って、炭火を吹いてくれな  
いか」

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石もなげとぼせるよ」

オツベルはまたどきとしたが、気を落ち付けてわらっていた。

象はそのそ鍛冶場へ行って、べたんと肢を折って座り、ふいごの代りに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把の藁をたべながら、空の五日の月を見て

「ああ、つかれたな、うれしいな、サンタマリア」と斯う言った。

どうだ、そうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はただ五把だ。よくまあ、五把の藁などで、あんな力がでるもんだ。

じっさい象はけいざいだよ。それというのもオツベルが、頭がよくてえらいためだ。オツベルときたら大したもんさ。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、おれも云おうとしてたんだが、居なくなったよ。

まあ落ちついてききたまえ。前にはなしたあの象を、オツベルはすこしひどくし過ぎた。

しかたがだんだんひどくなったから、象がなかなか笑わなくなった。時には赤い竜の眼をして、じっとこんなにオツベルを見おろすようになってきた。

ある晩象は象小屋で、三把の藁をたべながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と云ったということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、藁もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と斯う言った。

「おや、何だって？ さよならだ？」月が <sup>にわ</sup> <sup>き</sup> 俄かに象に訊く。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からっきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらしいや。」月がわらって斯う云った。

「お筆も紙もありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしく泣き出した。

「そら、これでしょう。」すぐ眼の前で、<sup>かあい</sup> 可愛い子どもの声がした。象が頭を上げて見

ると、赤い着物の童子が立って、<sup>すずり</sup> <sup>ささ</sup> 硯と紙を捧げていた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはずいぶん眼にあっている。みんなで出て来て助けてくれ。」

童子はすぐに手紙をもって、林の方へあるいて行った。

<sup>せきい</sup> 赤衣の童子が、そうして山に着いたのは、ちょうどひるめしごろだった。このとき山

の象どもは、<sup>さらじゅ</sup> <sup>ご</sup> 沙羅樹の下のくらがり、碁などをやっていたのだが、額をあつめてこれを見た。

「ぼくはずいぶん眼にあっている。みんなで出てきて助けてくれ。」

象は一せいに立ちあがり、まっ黒になって吠えだした。

「オツベルをやっつけよう」議長の象が高く <sup>さけ</sup> 叫ぶと、

「おう、でかけよう。グララアガア、グララアガア。」みんながいちどに呼応する。

さあ、もうみんな、<sup>あらし</sup> 嵐のように林の中をなきぬけて、グララアガア、グララアガア、

野原の方へとんで行く。どいつもみんなきちがいだ。小さな木などは根こぎになり、<sup>やぶ</sup> 藪や何かもめちゃめちゃだ。グワア グワア グワア グワア、花火みたいに野原の中へ飛び出した。それから、何の、走って、走って、とうとう向うの青くかすんだ野原のはてに、

オツベルの <sup>やしき</sup> 邸の <sup>みつ</sup> 黄いろな屋根を見附けると、象はいちどに <sup>ふんか</sup> 噴火した。

グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の <sup>しんたい</sup> 寝台の上

からす ゆめ  
でひるねのさかりで、鳥の夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向うを見た。林のような象だろ  
う。汽車より早くやってくる。さあ、まるっきり、血の気も失せてかけ込んで、

だんな  
「旦那あ、象です。押し寄せやした。旦那あ、象です。」と声をかぎりに叫んだもんだ。  
ところがオツベルはやっぱりえらい。眼をぱっちりとかいたときは、もう何もかもわかつていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。居る？ 居る？ 居るのか。よし、戸をしめろ。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし、早く丸太を持って来い。とじこ

ちくしょう  
めちまえ、畜生めじたばたしやがるな、丸太をそこへしばりつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五六本持って来い。さあ、大丈夫だ。大丈夫だとも。あわてるなったら。おい、みんな、こんどは門だ。門をしめろ。かんぬきをかえ。つっぱり。つっぱり。そうだ。おい、みんな心配するなったら。しっかりしろよ。」

したく  
オツベルはもう支度ができて、ラッパみたいないい声で、百姓どもをはげました。とこ

ろがどうして、百姓どもは気が気じゃない。こんな主人に巻き添いなんぞ食いたくないか

ら、みんなタオルやはんげちや、よごれたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をするしるしなのだ。

オツベルはいよいよやっきとなって、そこらあたりをかけまわる。オツベルの犬も気が

立って、火のつくように吠えながら、やしきの中をはせまわる。

間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしゃばしゃくらくらくなり、象はやしきをと

りまいた。グララアガア、グララアガア、その恐ろしいさわぎの中から、  
「今助けるから安心しろよ。」やさしい声もきこえてくる。

「ありがとうございます。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。

さあ、そうすると、まわりの象は、一そうひどく、グララアガア、グララアガア、塀の

まわりをぐるぐる走っているらしく、度々中から、怒ってふりまわす鼻も見える。けれ

ども塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象もこわせない。塀の中には  
オツベルが、たった一人で叫んでいる。百姓どもは眼もくらみ、そこらをうろうろするだ

けだ。そのうち外の象どもは、仲間のからだを台にして、いよいよ塀を越しかかる。だん

だんにゆうと顔を出す。その皺くちやで灰いろの、大きな顔を見あげたとき、オツベル

の犬は気絶した。さあ、オツベルは射ちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グララア

ガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ところが弾丸は通らない。牙に

あたればはねかえる。一疋なぞは斯う言った。

「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へあたるんだ。」

オツベルはいつかどこかで、こんな文句をきいたようだと思いながら、ケースを帯から  
つめかえた。そのうち、象の片脚が、塀からこっちへはみ出した。それからも一つはみ出  
した。五匹の象が一ぺんに、塀からどっと落ちて来た。オツベルはケースを握ったまま、

もうくしゃくしゃに潰れていた。早くも門があいていて、グララアガア、グララアガア、  
象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折ら

れ、あの白象は大へん瘠せて小屋を出た。

「まあ、よかったねやせたねえ。」みんなはしずかにそばにより、鎖と銅をはずしてやっ  
た。

「ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かったよ。」白象はさびしくわらってそう云った。

おや〔一字不明〕、川へはいつちやいけないったら。

---

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十三巻」筑摩書房

1980（昭和55）年3月

※「〔一字不明〕」は、底本編集時の注記です。

入力：r.sawai

校正：篠宮康彰

1999年2月6日公開

2011年2月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

---

# 16. 銀河鉄道の夜

宮沢賢治

+目次

ごご

一、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう<sup>い</sup>に川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に<sup>つる</sup>吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のよう<sup>さ</sup>なところを指しながら、みんなに<sup>とい</sup>問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。  
「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは<sup>いきおい</sup>勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはっきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすくすとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよっく調べると銀河は大体何でしょう。」  
やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、  
「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。



先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では、よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかに  
なみだ ぼく もちろん  
は 涙 がいっぱいになりました。そうだ 僕 は知っていたのだ、勿 論 カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を讀

むと、すぐお父さんの 書 齋 から 巨 きな本をもってきて、ぎんがというところをひろ  
ページ  
げ、まっ黒な 頁 いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでし

た。それをカムパネルラが忘れる 筈 もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしもこの 天 の 川 がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな

星はみんなその川のそこの砂や砂 利 の 粒 にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまる

で細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりその

なかに 浮 んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんください。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶのとつ入った大きな両面の 凸 レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあって地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの

中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが<sup>うす</sup>薄いのでわずかの光る粒  
すなわ

即ち星しか見えないのでしょうか。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるというこれつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく<sup>つくえ</sup>机の<sup>ふた</sup>蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

## 二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中  
すみ さくら  
にして校庭の隅の桜の木のところ集まっていた。それはこんやの星祭に青い

からすうり  
あかりをこしらえて川へ流す鳥瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく<sup>ふ</sup>振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の

家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの<sup>えだ</sup>枝にあかりをつけ

したく  
たりいろいろ仕度をしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲ってある大きな活版処にはいってすぐ入口の計算  
台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは<sup>くつ</sup>靴をぬいで上りま

つ  
すと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪  
転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりランプシェードをかけたたりした人た

ちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。<sup>お</sup>

テーブル すわ  
ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い 卓 子 に 座 った人の所へ行っておじぎを

ました。その人はしばらく 棚 をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを 渡 しました。ジョバン

ニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい 函 をとりだして向うの電燈のたくさ

んついた、たてかけてある 壁 の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで

あわつぶ

粟 粒 ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニ  
のうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこっ  
ちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を ぬぐ 拭 いながら活字をだんだんひろいました。

六時がうってしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい

はこ

箱 をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来まし

た。その人は だま 黙 かってそれを受け取って かす 微 かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさ  
っきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョ

バンニは にな わ かに顔いろがよくなって いせい 威 勢 よくおじぎをすると台の下に置いた かばん 鞆

をもっておもてへ飛びだしました。それから元気よく くちぶえ 笛 を吹きながらパン屋へ寄っ

てパンの かたまり 塊 を一つと角砂糖を ふくろ 一 袋 買いますと いちもくさん 一 目 散 に走りだしまし  
た。

三、家

ジョバンニが いきおい 勢 よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つなら

むらさき  
んだ入口の一番左側には空箱に 紫 いろのケールやアスパラガスが植えてあって小

ひおお  
さな二つの窓には 日 覆 いが下りたままになっていました。

つか ぐあい  
「お母さん。いま帰ったよ。工 合 悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云  
いました。

すず  
「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は 涼 しくてね。わたしはずうっと  
工合がいいよ。」

げんかん へや  
ジョバンニは 玄 関 を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の 室 に

きれ かぶ やす  
白い 巾 を 被 っ て 寝 んでいたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったろうかねえ。」

「ぼく行ってとって来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何か  
こしらえてそこへ置いて行ったよ。」

「ではぼくたべよう。」

さら  
ジョバンニは窓のところからトマトの 皿 をとってパンといっしょにしばらくむしゃむ  
しゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰ってくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

かんごく はず  
「きっと出ているよ。お父さんが 監 獄 へ入るようなそんな悪いことをした 筈 がない

きぞう おお かに こう  
んだ。この前お父さんが持ってきて学校へ 寄 贈 した 巨 きな 蟹 の 甲 らだのとなか  
いの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわ

る教室へ持って行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数文字分空白〕

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもってくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころ

はよかったなあ。ぼくは学校から帰る <sup>とちゅう</sup> 途 中 たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青

くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、 <sup>かま</sup> 罐

<sup>すす</sup> がすっかり 煤 けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるで <sup>ほうき</sup> 箒 のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もっとなついてくることもあるよ。今夜

はみんな <sup>からすうり</sup> 烏 瓜 のあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんと <sup>いっしょ</sup> 一 緒 なら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

<sup>かたづ</sup> ジョバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を 片 附 けると勢よく靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

#### 四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、<sup>ひのき</sup> 檜 のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、ど

んどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろ

へ引いていたジョバンニの<sup>かげ</sup> 影<sup>こ</sup> ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなって、足をあげた

<sup>ふ</sup> 手を振ったり、ジョバンニの横の方へまわって来るのでした。  
(<sup>こうばい</sup> ぼくは立派な機関車だ。ここは<sup>こ</sup> 勾配 だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるっとまわって、前の方へ来た。)

とジョバンニが思いながら、<sup>おおまた</sup> 大股 にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるま

のザネリが、新らしいえりの<sup>とが</sup> 尖ったシャツを着て電燈の向う側の暗い<sup>こうじ</sup> 小路 から出て来て、ひらっとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、  
「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうし

<sup>さけ</sup> ろから 叫びました。

ジョバンニは、ぱっと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。  
「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植

った家の中へは行っていません。  
「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはま

<sup>ねずみ</sup> るで 鼠 のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがば

かなからだ。」  
ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまさまの<sup>あかり</sup> 灯<sup>えだ</sup> や木の枝 で、

<sup>かざ</sup> すっかりきれいに 飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がつ

<sup>め</sup> いて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるっくるっとうごいたり、いろい

ガラス ばん の めぐ  
ろな宝石が海のような色をした厚い 硝子 の 盤 に載って星のようにゆっくり 循 った  
り、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこっちへまわって来たりするのです。そのま  
ん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて

盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま 楯 円 形 のなかにめぐってあらわれる

お  
ようになって居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯

ばくはつ  
になってその下の方ではかすかに 爆 発 して湯気でもあげているように見えるのでし

あし  
た。またそのうしろには三本の 脚 のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立ってしまし

かべ けもの へび びん  
たしいちばんうしろの 壁 には空じゅうの星座をふしぎな 獣 や 蛇 や魚や 瓶 の形

さそり  
に書いた大きな図がかかっていた。ほんとうにこんなような 蝸 だの勇士だのそら  
にぎっしり居るだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思ったりして  
しばらくぼんやり立って居ました。

にわ  
それから 俄 かにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれまし

かた  
た。そしてきゅうくつな上着の 肩 を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を  
振って町を歩いて行きました。

す  
空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青

なら たくさん  
なもみや 檜 の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中に 沢 山  
の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのです。子どもらは、

くちぶえ ぶ  
みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの 口 笛 を吹いたり、

つゆ  
「ケンタウルス、 露 をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したり  
して、たのしそうに遊んでいるのです。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂  
れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐので

した。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が <sup>いくほん</sup> 幾本も幾本も、高く星ぞらに <sup>うか</sup> 浮んで  
いるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の <sup>におい</sup> 匂のするうすくらい

台所の前に立って、ジョバンニは <sup>ぼうし</sup> 帽子をぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中は  
しいんとして <sup>たれ</sup> 誰も居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしば  
らくたってから、<sup>と</sup> 年老った女の人が、<sup>ぐあい</sup> どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か  
用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が <sup>ぼく</sup> 僕 ※ [#小書き平仮名ん、168-12] とこへ来なかったので、<sup>もら</sup> 貰  
いにあがったんです。」ジョバンニが一生けん命 <sup>いきおい</sup> 勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のとこを <sup>こす</sup> 擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。  
「おっかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです。」  
「ではもう少したってから来てください。」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとうございます。」ジョバンニは、<sup>じぎ</sup> お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、  
黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったり

して、<sup>あかり</sup> めいめい烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、み  
んな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニ

は思わずどきっとして <sup>もど</sup> 戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて  
行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニ  
はまっ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとしたら、そ



のなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらっ

おこ  
て、怒らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

に さ  
ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが  
過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりか  
えって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネルラもま  
た、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジ  
ョバンニは、なんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出しました。すると耳に手を

と  
あてて、わああと云いながら片足でぴよんぴよん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニ

おもしろ おか  
が面 白く けてかけるのだと思ってわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い 丘  
の方へ急ぎました。

## てんきりん

五、天 気 輪 の柱

おおぐまぼし  
牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大 熊 星 の下に、  
ぼんやりふだんよりも低く連って見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどのぼって行きました。  
まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一  
すじ白く星あかりに照らしてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す  
小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さっきみんなの持って行っ

からすうり  
た 烏 瓜 のあかりのようだとも思いました。

なら こ にわ あま がわ  
そのまっ黒な、松や 檜 の林を越えると、俄 かにがらんと空がひらけて、天 の 川

わた いただき  
がしらしらと南から北へ 亘 っているのが見え、また 頂 の、天気輪の柱も見わけら

ゆめ かお  
れたのでした。つりがねそうか野ざくかの花が、そこらいちめん、夢 の中からでも 薫

ぴき  
りだしたというように咲き、鳥が一 疋 、丘の上を鳴き続けながら通って行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げ

ました。

町の灯は、<sup>やみ</sup>暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの<sup>さけ</sup>叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くて鳴り、丘の草もし

ずかにそよぎ、<sup>あせ</sup>ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一行小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、<sup>りんご む</sup>苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考

えますと、ジョバンニは、もう何とも云えなくなっていて、また眼をそらに挙げました。あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。ところがいくら見ても、そのそらはひる先生の云ったような、がらんとした冷いと

こだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧

場やらある野原のように考えられて仕方なかったのです。そしてジョバンニは青い<sup>こと</sup>琴の星が、三つにも四つにもなって、ちらちら<sup>またた</sup>瞬き、脚が何べんも出たり引っ込んだりし

て、とうとう<sup>きのこ</sup>蕈のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

## 六、銀河ステーション

そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、

しばらく<sup>ほたる</sup>蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだ

んだんはっきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い<sup>こ こうせい</sup>鋼青のそらの野原

にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い<sup>や はがね</sup>鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声<sup>い</sup>がした

と思うといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の<sup>ほたるいか</sup>螢鳥賊の火を一ぺん

に化石させて、そら中に<sup>しず</sup>沈めたという<sup>ぐあい</sup>工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやす

くならないために、わざと<sup>と</sup>穫れないふりをして、かくして置いた<sup>こんごうせき</sup>金剛石を、誰か

がいきなりひっくりかえして、<sup>ま</sup>ばら撒いたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、

ジョバンニは、思わず何べんも眼を<sup>こす</sup>擦ってしまいました。

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄い

ろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら<sup>すわ</sup>座っていたのです。車室の中は、青い

びろうど<sup>こしか</sup>天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、向うの<sup>ねずみ</sup>鼠いろのワニスを塗った

かべ<sup>しんちゅう</sup>壁には、<sup>真鍮</sup>真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出し

て外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの<sup>かた</sup>肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこっちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こっちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども<sup>おく</sup>遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」と云いました。

ジョバンニは、（そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けたのだ。）とおもいながら、

「どこかで待っていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが<sup>むか</sup>迎いにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいという

ふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというよう  
な、おかしな気持ちがしてだまってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、  
いきおい  
勢よく云いました。

すいとう  
「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わな  
い。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠く  
を飛んでたって、ぼくはきっと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようにな  
った地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわさ  
れた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そし

てその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒なばん盤の上に、一一の停車場や  
さんかくひょう  
だいだい  
三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてあ  
りました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るとこ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

かわら  
「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめ  
ん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるでね上りた

ゆかい  
いくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの

くちぶえふ  
口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしま  
したが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつ

めて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加

むらさき  
にじ  
減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりし

ながら、声もなくどンドン流れて行き、野原にはあっちにもこっちにも、<sup>りんこう</sup> 燐 光 の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは

橙や黄いろではっきりし、近いものは青白く少しかすんで、<sup>ある</sup> 或 いは三角形、或いは四辺

形、あるいは <sup>いなくさ</sup> 電 や 鎖 の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているの

でした。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに<sup>ふ</sup>振りしました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、

ちらちらゆれたり <sup>ふる</sup> 顫 えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ごとごとごとと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、

<sup>びこう</sup> 天の川の水や、三角点の青じろい 微 光 の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くの  
でした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい <sup>しばくさ</sup> 芝 草 の中に、月長石ででも <sup>きざ</sup> 刻 まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジョバンニは胸を <sup>おど</sup> 躍  
らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっばいに光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもつたりんどうの花のコップ

<sup>わ</sup> が、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

七、北十字とプリオシン海岸

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、<sup>せ</sup>急きこんで云  
いました。

ジョバンニは、

(ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのように見える<sup>だいたい</sup> 橙 いろ  
の三角標のあたりにいらっしゃって、いまぼくのことを考えているんだった。) と思いな  
がら、ぼんやりしてだまっていました。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに<sup>さいわい</sup> 幸 になるなら、どんなことでもする。けれども、  
いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なん  
だか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびっくりし

<sup>さけ</sup>  
て 叫 びました。

「ぼくわからない。けれども、<sup>たれ</sup> 誰 だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸な  
んだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、な  
にかほんとうに決心しているように見えました。

<sup>にわ</sup>

俄 かに、車のなかで、ぱっと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、

<sup>こんごうせき</sup> <sup>つゆ</sup>  
金 剛 石 や草の 露 やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の

<sup>かわどこ</sup>

河 床 の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうっと青白く後

<sup>さ</sup>  
光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるよ

<sup>じゅうじか</sup> <sup>こお</sup> <sup>い</sup>  
うな、白い十 字 架 がたって、それはもう 凍 った北極の雲で鑄たといったらいいか、  
すきっとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が上がりました。ふりかえって見ると、  
車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてた

<sup>すいしょう</sup> <sup>じゅうず</sup> <sup>いの</sup>  
り、水 晶 の珠 数をかけたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そっちに 祈

っているのです。思わず二人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、

まるで熟した蘋果のあかしのようにつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向う岸も、青じろくぼうと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さっとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんど

うの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちょっとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうっと遠く小さく、絵のようになってしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなっていました。ジョバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカト

リック風のあまさんが、まん円な緑の瞳を、じっとまっすぐに落して、まだ何かこと

ばか声かが、そっちから伝わって来るのを、度々で聞いているというように見えまし

た。旅人たちはしずかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新しい気持ち

を、何気なくちがったことばで、そっとはな話し合ったのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑のあかりと、ぼんやり白い柱とが、ちらっと窓のそとを過ぎ、そ

れから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなってひろがって、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くっきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなってしまいました。

〔二十分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジョバンニが云いました。

「降りよう。」

二人は一度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところ

が改札口には、明るい紫がかった電燈が、一つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。

二人は、駐車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。

そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思いながら、ジョバンニもぼんやり答えていました。

河原の礫は、みんなすきとおって、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉や

らでした。ジョバンニは、走ってその渚に行って、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりももっとすきとおっていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたったところが、少し水銀いろに浮いたように見

え、その手首にぶつかってできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりました。



川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えている <sup>がけ</sup> 崖 の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五六人の人 <sup>ほ</sup> かけが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり <sup>かが</sup> 屈 んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩 <sup>ところ</sup> になった 処 の入口に、

[プリオン海岸] という、瀬 戸 物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の <sup>らんかん</sup> 欄 干 も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い <sup>とが</sup> 細長いさきの 尖 ったくるみの実のようなものをひろいました。

<sup>たくさん</sup> 「くるみの実だよ。そら、沢 山 ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」  
「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」  
「早くあそこへ行って見よう。きっと何か掘ってるから。」  
二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きまし

<sup>いはずま</sup> た。左手の渚には、波がやさしい 稲 妻 のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん <sup>かいがら</sup> 銀や 貝 殻 <sup>ほ</sup> でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、 <sup>ながぐつ</sup> 長 靴 をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、 <sup>つるはし</sup> 鶴 嘴 をふりあげたり、スコープをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに <sup>むちゅう</sup> 夢 中 でいろいろ指図をしていました。

<sup>とつき こわ</sup> 「そこのその 突 起 を 壊 さないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おっと、も少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い <sup>やわ</sup>柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい <sup>けもの</sup>獣の骨が、横に  
たお <sup>つぶ</sup>つぶ  
倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて

見ると、そこらには、<sup>ひづめ</sup>蹄の二つある <sup>あしあと</sup>足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、<sup>めがね</sup>眼鏡をきらっとさせて、こっちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざっと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていね

<sup>のみ</sup>い <sup>むかし</sup>に <sup>むかし</sup>鑿でやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年

<sup>しょうこ</sup>ぐらい前にできたという <sup>しょうこ</sup>証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えるやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい。そこもスコープでは

<sup>ろっこつ</sup>いけない。そのすぐ下に <sup>はず</sup>肋骨が埋もれてる <sup>はず</sup>筈じゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と <sup>うでどけい</sup>腕時計とをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジョバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また <sup>いそ</sup>忙がしように、あちこち歩きまわっ

<sup>かんとく</sup>て <sup>かんとく</sup>監督をはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないよ

うに走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず <sup>ひざ</sup> 膝 もあつく  
なりませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だってかけれると、ジョバンニは思いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく

二人は、もとの車室の席に <sup>すわ</sup> 座 っ て、いま行って来た方を、窓から見ていました。

## と

八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの <sup>が</sup> 外 <sup>い</sup> 套 <sup>う</sup> を着て、白い <sup>きれ</sup> 巾 <sup>で</sup> つつんだ荷物を、二つに

<sup>か</sup> 分けて肩に掛けた、<sup>あかひげ</sup> 赤 <sup>髯</sup> のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて <sup>あいさつ</sup> 挨拶 <sup>し</sup> ました。その人は、

<sup>わら</sup> ひげの中であかひげに微笑いながら荷物をゆっくり <sup>あみだな</sup> 網 <sup>棚</sup> にのせました。ジョバンニは、  
なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていまし

<sup>ガラス</sup> たら、ずうっと前の方で、<sup>ふえ</sup> 硝 <sup>子</sup> の <sup>笛</sup> のようなものが鳴りました。汽車はもう、しずか

にうごいていたのです。カムパネルラは、車室の <sup>てんじょう</sup> 天 <sup>井</sup> を、あちこち見ていました。

<sup>かぶとむし</sup> その一つのあかりに黒い <sup>甲</sup> 虫 <sup>が</sup> とまってその影が大きく天井にうつっていたので  
す。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネルラのよ  
うすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の  
外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらっとこっちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったで

もなく、頬をびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間

から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どっちでもいいと思いながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおっとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、

あし脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴ

たっと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んでしまいます。あとはもう、わかり切ってますあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

ふしん  
「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

さけ  
「ほんとうに驚だねえ。」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北のじゅうじか  
十字架のように光る鷺のからだは、十ばかり、少しひらべたくなって、黒い脚をち

うきぼり  
ぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

つぶ  
「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそっと、鷺の三日月がたの白い瞑った眼

やり  
にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんといっていました。

ふろしき ひも  
「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくと包んで紐でくくり

たれ た  
ました。誰がいったいここらで鷺なんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

がん がら  
「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もっと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょう

そろ ひら  
どさっきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べたくなって、ならんでいました。

「こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートででもできているように、すっときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしまし

かし  
た。ジョバンニは、ちょっと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこ

かしや  
かそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。)とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もったべたかったのですけれども、

い えんりよ  
「ええ、ありがとう。」と云って遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、  
かぎ  
鍵をもった人に出しました。

もら ぼうし  
「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

わた どり  
「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

おととい ひ  
「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間〔一字分空白〕させるかって、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こっちがやるんじゃないくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのどこへ

とほう  
持って来たって仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将  
こ  
へやれって、斯う云ってやりましたがね、はっは。」

さ  
すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。  
「驚の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さっきから、訊こうと思っていたのです。

「それはね、驚を喰べるには、」鳥捕りは、こっちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけあ、砂に三四日うずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみ

たず  
えて、カムパネルラが、思い切ったというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなけあ。」と云いながら、立って荷物をとったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだろう。」

二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそっちを見ましたら、たったいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい <sup>りんこう</sup> 燐 光 を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じっとそらを見ていたのです。

「あすこへ行ってる。ずいぶん <sup>きたい</sup> 奇 体 だねえ。きっとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云った <sup>とたん</sup> 途 端、がらんとした <sup>ききょう</sup> 桔 梗 いろの空から、さっき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫

びながら、いっばいに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかっつきり六十度を開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で <sup>かた ぱし</sup> 片 っ 端 から押えて、<sup>ふくろ</sup> 布の 袋 の中に入れるのでした。すると鷺

は、<sup>ほたる</sup> 螢 のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのです。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に <sup>あま がわ</sup> 天 の 川 の砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや <sup>いな と</sup> 否 や、まるで雪の融けるように、<sup>ちぢ</sup> 縮

まって <sup>ひら</sup> 扁 べったくなって、間もなく <sup>ようこうろ</sup> 熔 鋳 炉 から出た銅の <sup>しる</sup> 汁 のように、砂や <sup>じやり</sup> 砂 利 の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのですが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまうのです。

鳥捕りは二十 <sup>びき</sup> 疋 ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が <sup>てっぽうだま</sup> 鉄 砲 弾 にあたって、死ぬときのような形をしました。と思ったら、もうそこに鳥捕

かえ  
りの形はなくなって、却って、

「ああせいせいした。どうもからだに ちょうど 合せ  
度 合うほど 稼いでいるくらい、いいことは

ありませんな。」というききおぼえのある声が、ジョバンニの とな  
隣りにしました。見ると  
鳥捕りは、もうそこでとって来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているの  
でした。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」ジョバンニが、なんだかあたり  
まえのような、あたりまえでないような、おかしい気がして問いました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいで  
ですか。」

ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたがけれども、さあ、ぜんたいどこから来たの  
か、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔を真っ赤にして何か思い  
出そうとしているのです。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

## きつぷ

九、ジョバンニの 切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所  
です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四  
むね  
棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青 宝 玉 と 黄 玉  
め サファイア トパース  
の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄  
いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二

つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面 凸  
とつ レンズのかたちをつくり、それも  
だんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に来ま

したので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、

く  
前のレンズの形を逆に繰り返して、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、  
黄いろのはこっちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもな



く音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、<sup>ねむ</sup> 睡 っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」<sup>とりと</sup> 鳥 捕りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い<sup>ぼうし</sup> 帽子をかぶったせいの高い

しゃしょう  
車 掌 が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちょっと見て、すぐ眼をそらして、(あなた方のは?) というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもない

という風で、小さな<sup>ねずみ</sup> 鼠 いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見まし

たら、何か大きな<sup>たた</sup> 畳 んだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やっちまえと思つて渡しましたら、

車掌はまっすぐに立ち直つて<sup>ていねい</sup> 町 寧 にそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたずねました。

<sup>だいじょうぶ</sup>  
「何だかわかりません。」もう 大 丈 夫 だと安心しながらジョバンニはそっちを見あげてくつつつ笑いました。

<sup>サウザンクロス</sup>  
「よろしゅうございます。南 十 字 へ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だつたか待ち兼ねたというように急いでのぞきこみま  
した。ジョバンニも全く早く見たかつたのです。ところがそれはいちめん黒い<sup>からくさ</sup> 唐 草 のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかそ

こ  
の中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらっとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な げんそう 幻想 第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける はず であ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなって答えながらそれを また 畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこっちを見ているのがぼんやりわかりました。

わし  
「もうじき 鷲 の停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい  
みくら  
三角標と地図とを見 較 べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなり  
さぎ  
なりました。 鷲 をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で見えてあわててほめだしたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っている  
さいわい  
ものでも食べるものでもなんでもやっつけてしまいたい、もうこの人のほんとうの 幸 に

かわら  
なるなら自分があの光る天の川の 河 原 に立って百年つづけて立って鳥をとってやっても

だま  
いいというような気がして、どうしてももう 黙 っていたらなくなりました。ほんとうに

き ぬ  
あなたのほしいものは一体何ですか、と訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、

ふ  
どうしようかと考えて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。

あみだな  
網 棚 の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそれを見

したく  
上げて鷲を捕る 支 度 をしているのかと思って、急いでそっちを見ましたが、外はいちめ

んのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも <sup>とが</sup>尖った帽子も見えませんでした。

「あのどこへ行ったろう。」カムパネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行ったろう。一体どこでまたあうのだろう。 <sup>ぼく</sup>僕はどうしても少しあの人に物を言わなかったろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

<sup>じゃま</sup>「僕はある人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思いました。

<sup>りんご</sup>「何だか苹果的の匂がする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

<sup>のいばら</sup>「ほんとうに苹果的の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

<sup>にわ</sup> <sup>かみ</sup>そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけずひどくびっくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っ

<sup>とな</sup> <sup>ふ</sup>ました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだよ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの

<sup>かあい</sup> <sup>がいとう</sup> <sup>うで</sup>眼の茶いろな可愛い女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のし

<sup>め</sup>るしです。もうなんにもこわいことはありません。わたくしたちは神さまに召されているの

<sup>い</sup>です。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかま

しわ  
た額に深く 皺 を刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子を

すわ  
ジョバンニのとなりに 座 らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。

こしか  
「ぼくおおねえさんのところへ行くんだよう。」腰 掛 けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じっとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしゃいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていらっしゃったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわたこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待って心配していらっしゃるんですから、早く行っておっかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかったなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター をうたってやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそっと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいところを旅して、じき神さまのところへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きっとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたって行きましょう。」青

なぐさ  
年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを 慰 めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。どうなすったのですか。」さっきの燈台看守がやっと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

しず  
「いえ、氷山にぶっつかって船が 沈 みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な

用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発ったのです。私は大学へは

いって、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日

のあたりです、船が冰山にぶつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあか

りはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは

さげん  
左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。

もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さ

いと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉  
れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たち

お  
やなんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしても  
この方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたから前にいる子供らを押しつけよう  
としました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはそのまま神のお前にみんなで  
行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪  
はわたくしひとりです。よってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見  
ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さん

きょうき  
が狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてまっすぐに立つ

はらわた  
ているなどとてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みま

かくご だ うか  
すから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうと

たれ  
かたまって船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来まし

すべ かんぱん  
たけれども滑ってずうっと向うへ行ってしまうました。私は一生けん命で甲板の

こうし  
格子になったところをはなして、三人それにしっかりととりつきました。どこからともなく

〔約二字分空白〕番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそ

にわ うず  
れをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入った

と思いながらしっかりこの人たちをだいてそれからぼうっとしたと思ったらもうここへ来

ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没なくなられました。ええボートはきっと助  
かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕こいですばやく船からはなれて  
いましたから。」

そこらから小さいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていた

ろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

(ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北

のはての海で、小さな船に乗って、風や凍こおりつく潮水や、烈はげしい寒さとたたかって、  
たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすま  
ないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろ

う。) ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込こんでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがたどしいみ

ちを進む中でのできごとなら、峠とうげの上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あし  
ずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼ  
しめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉きょうだい弟ねむはもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡ねむっていた

ました。さっきのあのはだだった足にはいつか白い柔やわらかな靴くつをはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐りんこう光の川の岸を進みました。向うの方の窓を

見ると、野原はまるで幻げんとう燈のようなものでした。百も千もの大小さまざまな三角標、その大  
きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たく  
さんたくさん集ってぼおっと青白い霧のよう、そこからかまはもっと向うからかときど

きさまざまの形のぼんやりした狼煙のろしのようなものが、かわるがわるきれいな桔ききょう梗

いろいろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった <sup>きれい</sup> 奇麗な風は、ばらの  
におい  
匂いでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう <sup>りんご</sup> 苹果はおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか  
<sup>きん</sup> 黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で <sup>ひざ</sup> 膝の上にかか  
えていました。

「おや、どっから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」  
青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を  
細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は一つとってジョバンニたちの方をちょっと見ました。

<sup>ぼっ</sup>  
「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジョバンニは坊ちゃんといわれたのですこしやくにさわってだまっていたましたがカム  
パネルラは

「ありがとう、」と云いました。すると青年は自分でとって一つずつ二人に送ってよこし  
ましたのでジョバンニも立ってありがとうと云いました。

<sup>りょううで</sup>  
燈台看守はやっと両腕があいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の  
膝にそっと置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでにいいものができるよう

<sup>やくそく</sup> <sup>お</sup>  
な約束になって居ります。農業だってそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の

<sup>たね</sup> <sup>ま</sup> <sup>から</sup>  
望む種子さえ播けばひとりでにどんどんできます。米だってパシフィック辺のように殻  
もないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらっしゃる方なら農業  
はもうありません。苹果だってお菓子だっかすが少しもありませんからみんなそのひと  
そのひとによってちがったわずかのいいかおりになって毛あなからちらけてしまうので  
す。」

にわかには男の子がぼっかり眼をあいて云いました。

ゆめ とだな  
「ああぼくいまお母さんの 夢 をみていたよ。お母さんがね立派な 戸 棚 や本のあるとこ  
に居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらったよ。ぼくおっかさん。りん  
ごをひろってきてあげましょうか云ったら眼がさめちゃった。ああここさっきの汽車の  
なかだねえ。」

りんご  
「その 苹 果 がそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いまし  
た。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ね  
えさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」

姉はわらって眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の

子はまるでパイを た 喰べるようにもうそれを喰べていました、また せっかくむ 折 角 剥いたそのきれ

いな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって ゆか 床 へ落ちるまでの間にはすうっと、  
灰いろに光って蒸発してしまうのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く しげ 茂 った大きな林が見え、その えだ 枝 には熟してまっ赤に光る円い実  
がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベル  
やジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように し 浸みるように風  
つれて流れて来るのでした。

青年はぞくっとしてからだをふるうようにしました。

だまってその 譜 を聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷

物かがひろがり、またまっ白な ろう 蠟 のような つゆ 露 が太陽の面を かす 擦 めて行くように思われ  
ました。

「まあ、あの からす 烏 。」カムパネルラのとなりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく しか 叱 るように叫びま  
したので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく

かわら 河 原 の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になってとまっ



びこう  
てじっと川の 微 光 を受けているのです。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと伸びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。そのとき汽車のずうっと

さんびか  
うしろの方からあの聞きなれた〔約二字分空白〕番の 讚 美 歌 のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのです。青年はさっと顔いろが青ざめ、たって一ペ

すわ  
んそっちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた 座 りました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつとも

たれ  
なく 誰 ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバン

いっしょ  
ニもカムパネルラも 一 緒 にうたい出したのです。

かんらん  
そして青い 榎 欖 の森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまいそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の  
へ  
音にすり耗らされてずうっとかすかになりました。

くじゃく  
「あ 孔 雀 が居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなっていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさと青じろく時々光ってその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

い  
「そうだ、孔雀の声だってさっき聞えた。」カムパネルラがかおる子に云いました。

びき  
「ええ、三十 疋 ぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」

にわ  
女の子が答えました。ジョバンニは 俄 かに何とも云えずかなしい気がして思わず  
「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は二つにわかれしました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれて

ゆる ぼうし  
その上に一人の 寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもってそらを見上げて信号しているのです。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていましたが俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青

はげ ふ  
い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように 烈しく振りました。すると空中にざあっと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも

てっぼうだま  
鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのです。ジョバンニは思わず窓からか

ききょう  
らだを半分出してそっちを見あげました。美しい美しい 桔梗いろのがらんとした空の

いくくみ  
下を実に何万という小さな鳥どもが 幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのです。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄

きょうき  
かに赤い旗をあげて 狂気のようにふりうごかしました。するとぴたっと鳥の群は通ら

つぶ  
なくなりそれと同時にぴしゃあんという 潰れたような音が川下の方で起ってそれからし

さけ  
ばらくしいんとしました。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふって 叫んでいたので。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはっきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけたのです。二人の顔を出

ほほ  
しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい 頬をかがやかせながらそらを

あお  
仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいたいと思いながらだまって口

もど  
をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほっと息をしてだまって席へ 戻り

こ  
ました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引っ込めて地図を見ていました。

「あの鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそっとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引っ込めたかったのですけれども明るいところへ顔を出すのがつらかった

くちぶえ ふ  
のでだまってこらえてそのまま立って 口 笛 を吹いていました。

ぼく  
(どうして 僕 はこんなになさしいのだろう。僕はもっとところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにすずかでつめたい。僕はあれをよく見てところもちをすずめる

ほて おさ  
んだ。) ジョバンニは 熱 って痛いあたまを両手で 押 えるようにしてそっちの方を見ました。(ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。

はな  
カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに 談 しているし僕はほんとうにつらい

なみだ  
なあ。) ジョバンニの眼はまた 泪 でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

がけ  
そのとき汽車はだんだん川からはなれて 崖 の上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。そしてちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはも

ほう は  
う美しい緑いろの大きな 苞 が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらっと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめん植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った

こんごうせき つゆ  
金 剛 石 のように 露 がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのでした。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持ちがなおりませんでしたからただぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんすずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

ふりこ  
その正面の青じろい時計はかっきり第二時を示しその 振 子は風もなくなり汽車もうごかずすずかなすずかな野原のなかにカチッカチッと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすか  
せんりつ こうきょうがく  
な旋律が糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひ  
とりごとのようにこっちを見ながらそっと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の  
たけたか たれ ゆめ  
丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

ゆかい  
(こんなしずかないいところで僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてこん  
なにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕とといっし  
はな  
よに汽車に乗っていながらまるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほん  
とうにつらい。) ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見  
ガラス  
つめていました。すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カム  
パネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

たれ  
「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい  
め  
人のいま眼がさめたという風ではきはき談している声がしました。

あな ま  
「どうもろこしだって棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」  
「そうですか。川まではよほどありましようかねえ、」

きょうこく  
「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になっ  
ています。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったろうか、ジョバンニは思わずそう思いま  
した。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹  
りんご

とつぜん  
のような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ているのでした。突然どうもろこしが

おお  
なくなって巨きな黒い野原がいっぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはっき

わ  
り地平線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを一人のインディアンが白い鳥の羽根を頭

うで つが いちもくさん  
につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を

追って来るのでした。

「あら、インディアンですよ。インディアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけているんでしょう。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。 <sup>りょう</sup> 獵 <sup>おど</sup> をするか <sup>おど</sup> 踊るかしてるんですよ。」

青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインディアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもっと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくっきり白いその羽根は前の方へ

たお

倒れるようになりインディアンはびたっと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そ

こから一羽の <sup>つる</sup> 鶴 がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インディアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をも

ってこっちを見ている <sup>かげ</sup> 影 ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの <sup>がいし</sup> 碍子がきらつきらっと続いて二つばかり光ってまたとうもろこしの林になってしまいました。こっち

側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い <sup>がけ</sup> 崖の上を走っていてその谷の底には川がや

<sup>はば</sup> っぱり幅ひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんです

から容易じゃありません。この <sup>けいしゃ</sup> 傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通過してその前にしょんぼりひとりの子供が立ってこっちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんどんどんどん汽車は走って行きました。 <sup>へやじゅう</sup> 室中のひとたちは半分うしろの方へ

倒れるようになりながら <sup>こしかけ</sup> 腰掛にしっかりしがみついていた。ジョバンニは思わず

カムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど <sup>はげ</sup> 激

かわら  
しく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているのでした。うすあかい河原  
なでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走  
っていました。

向うとこっちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジョバンニがやっものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

か  
「橋を架けるとこじゃないんでしょうか。」女の子が云いました。

かきょう  
「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えない  
ねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように

はげ  
高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

はっぱ  
「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりしました。

さけ ます  
その柱のようになった水は見えなくなり大きな鯉や鱒がきらっきらっと白く腹を

ほう  
光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうは  
ねあがりたいくらい気持が軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕  
こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中  
に。」

はなし こ  
「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだか

きげん おもしろ  
らいま小さいの見えなかったねえ。」ジョバンニはもうすっかり機嫌が直って面白  
そうにわらって女の子に答えました。

ふたご さけ  
「あれきっと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びま  
した。

おか すいしょう  
右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

き  
「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきっとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」

けんか  
「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話をすったわ、……」

ほうきぼし  
「それから彗星がギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ。」

「いやだわあたちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

ふえ ふ  
「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだらうか。」

「いま海へ行ってらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがっていらっしやったのよ。」

「そうそう。ぼく知ってらあ、ぼくおはなししよう。」

にわ やなぎ  
川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に

ききょう こ  
大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦

よしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりにリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」ジョバンニ

い  
が云いました。

さそり また  
「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首っ引きして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「蝸の火ってなんだい。」ジョバンニがききました。

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴

いたわ。」

「蝸って、虫だろう。」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあ

ってそれで螫<sup>さ</sup>されると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯<sup>こ</sup>う云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一匹の蝸がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたち

に見附<sup>みつ</sup>かって食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命<sup>に</sup>遁げて遁げたけどと

うとういたちに押<sup>おさ</sup>えられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があってその中に

落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺<sup>おぼ</sup>れはじめたのよ。そのと

きさそりは斯<sup>いの</sup>う云ってお祈りしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだ

まっていたちに呉<sup>く</sup>れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまこと

のみんなのさいわい<sup>さいわい</sup> 幸のために私のからだをおつかい下さい。って云ったというの。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らし

ているのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん<sup>おっしや</sup> 仰ったわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。」

ジョバンニはまったくその大きな火の向うに三つの三角標がちょうどさそりの腕<sup>うで</sup>のよう  
うにこちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そして  
ほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざま



ね におい  
の楽の音や草花の 匂 のようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあってそこにお祭でもあるというような気がするのです。

つゆ ねむ  
「ケンタウル 露 をふらせ。」いきなりいままで 睡 っていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

とうひ  
ああそこにはクリスマストリイのようにまっ青な 唐 檜 かもみの木がたってその中には  
まめでんとう ほたる  
たくさんのたくさんの 豆 電 燈 がまるで千の 蛍 でも集ったようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。〔以下原稿一枚？なし〕

ぼく  
「ボール投げなら 僕 決してはずさない。」

おおいば  
男の子が大 威 張 りで云いました。

したく  
「もうじきサウザンクロスです。おける 支 度 をして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとなりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたいようなようすでした。

「ここでおりにけあいけないのです。」青年はきちっと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

いや  
「厭 だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

いっしょ きっぷ  
「僕たちと 一 緒 に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける 切 符 持ってるんだ。」  
「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいと

こをこさえなけあいけないって僕の先生が云ったよ。」

「だっておっ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰<sup>お</sup>っしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。

女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や<sup>だいだい</sup> 橙 やもうあらゆる光

でちりばめられた<sup>じゅうじか</sup> 十字架 がまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきそ

の上には青じろい雲がまるい環になって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りを

はじめました。あっちにもこっちにも子供が<sup>うり</sup> 瓜 に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん

十字架は窓の正面になりあの<sup>りんご</sup> 苹果 の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに

めぐ<sup>めぐ</sup> 繞 っているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。

そしてたくさんのシグナルや電燈の<sup>あかり</sup> 灯 のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえって二人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえて <sup>おこ</sup>怒ったようにぶっきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こっちをふりかえってそれからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いて

<sup>にわ</sup>しまい <sup>ふ</sup>俄かにがらんとしてさびしくなり風が <sup>こ</sup>いっばいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりの <sup>こうごう</sup>神々しい白いきものの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう <sup>よびこ</sup>ガラスの呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの <sup>きり</sup>霧が川下の方からすうっと流れて来てもうそっちは何も見えなくなりました。ただたくさんくるみの木が <sup>きん</sup>葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち <sup>りす</sup>黄金の円光をもった電氣栗鼠が <sup>かあい</sup>可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうっと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一行についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど <sup>あいさつ</sup>挨拶でもするよ <sup>つ</sup>うにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのです。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいほんとうにもうその <sup>つる</sup>まま胸にも <sup>なぎさ</sup>吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い <sup>なぎさ</sup>渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。

僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの <sup>さいわい</sup>幸のためならば僕のからだなん

や  
か百ペン灼いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな <sup>なみだ</sup>涙 がうかんでいました。  
「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。  
「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭 <sup>ぶくろ</sup>袋 だよ。その <sup>あな</sup>孔 だよ。」カムパネルラが少しそっちを避けるようにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川のひととこに大きなまっくらな孔がどほんとあいているのです。

その底がどれほど深いかその <sup>おく</sup>奥 に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな <sup>やみ</sup>暗 の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」  
「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネル

にわ <sup>さけ</sup>らは 俄 かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して 叫 びました。

ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼ

んやりそっちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から <sup>うで</sup>腕 を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが <sup>こ</sup>斯う云いながらふりかえって

見ましたらそのいままでカムパネルラの <sup>すわ</sup>座 っていた席にもうカムパネルラの形は見えず

ただ黒いびろうどばかりひかっていました。ジョバンニはまるで <sup>てっぽうだま</sup>鉄 砲 丸 のように立

ちあがりました。そして <sup>たれ</sup>誰 にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱい

のど  
はげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

おか  
ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。

ほて ほほ  
胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさん

つづ  
の灯を綴ってはいましたがその光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。そして

ゆめ  
てたったいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒

こと さそりざ  
な南の地平線の上では殊にけむったようになってその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変ってもいないようでした。

ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお

まつ  
母さんのことが胸いっぱいに思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を歩いてそ

さく  
れからほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そ

たる  
こには誰かがいま帰ったらしくさっきなかった一つの車が何かの樽を二つ乗けて置いてありました。

「今晚は、」ジョバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

ぎゅうにゅうびん  
「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもって来

わた  
てジョバンニに渡しながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行って半分ばかり吞んでしましましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のでのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。そしてしばらく木のある町を歩いて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になってその右手の方、通りのはずれにさっきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集って橋の方を見ながら何かひそひそ <sup>はな</sup>談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいっぱいなのでした。

ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなったように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあったんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは <sup>いつせい</sup>一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい

で河が見えませんでした。白い服を着た <sup>じゅんさ</sup>巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の <sup>たもと</sup>袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の <sup>みずぎわ</sup>水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもうからすうり <sup>み</sup>瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのです。

河原のいちばん下流の方へ <sup>す</sup>州のようになって出たところに人の集りがくっきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどンドンそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさっきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から <sup>お</sup>烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだ

んだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい <sup>とが</sup> 尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじっと河を見ていました。 <sup>たれ</sup> 誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が <sup>おお</sup> 巨きく写ってまるで水の無いそのままのそらのように見えました。

ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか <sup>ある</sup> 或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかという

ような気がして仕方ないらしいのでした。けれども <sup>にわ</sup> 俄かにカムパネルラのお父さんがきっぱり云いました。

<sup>だめ</sup> 「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもう

のどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが <sup>あいさつ</sup> 挨拶に来たとでも思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」と <sup>てい</sup> 町ねいに云いまし

た。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は <sup>かた</sup> 堅く <sup>にぎ</sup> 時計を握ったまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには <sup>おととい</sup> 一昨日大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりも

う着くころなんだが。船が <sup>おく</sup> 遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいうつた方へじっと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。



---

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：中村隆生、野口英司

校正：野口英司

1997年10月28日公開

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

この作品には、JIS X 0213 にない、以下の文字が用いられています。（数字は、底本中の出現「ページ-行」数。）これらの文字は本文内では「※ [#...]」の形で示しました。

小書き平仮名ん 168-12

---

# 17.かちかち山

楠山正雄

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんが  
はたけ はたら うら ふる  
いつも 畑 に出で 働 いていますと、裏 の山から一ぴきの 古 だぬきが出てきて、  
おじいさんがせっかく たんせい はたけ あ  
おじいさんがせっかく 丹 精 をしてこしらえた 畑 のものを荒らした上に、どんど  
いし つち な  
ん 石 ころや 土 くれをおじいさんのうしろから投げつけました。おじいさんがおこって  
お に き  
追っかけますと、すばやく逃げて行ってしまいます。しばらくするとまたやって来て、あ  
こま  
いかわらずいたずらをしました。おじいさんも 困 りきって、わなをかけておきますと、  
ある日、たぬきはとうとうそのわなにかかりました。

おど あ よろこ  
おじいさんは 躍 り上がって 喜 びました。

きみ  
「ああいい気味だ。とうとうつかまえてやった。」

い よ あし かえ  
こう言って、たぬきの四つ 足 をしばって、うちへかついで 帰 りました。そして  
てんじょう さ  
天 井 のはりにぶら下げて、おばあさんに、

に ばん ばん かえ じる  
「逃がさないように 番 をして、晩 にわたしが 帰 るまでにたぬき 汁 をこしらえて  
おいておくれ。」

い はたけ  
と言いのこして、また 畑 へ出ていきました。

さ うす だ  
たぬきがしばられてぶら下げられている下で、おばあさんは 臼 を出して、とんとん  
むぎ  
麦 をついていました。そのうち、  
「ああくたびれた。」

い あせ さ  
とおばあさんは言って、汗をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下が  
っていたたぬきが、上から 声 をかけました。

すこ てっだ か  
「もしもし、おばあさん、くたびれたら 少 少お手 伝いをいたしましょう。その代わり  
なわ くだ  
この 縄 をといて 下 さい。」

まえ てっだ なわ  
「どうしてどうして、お 前 なんぞに 手 伝ってもらえるものか。 縄 をといてやった  
てっだ に い  
ら、手 伝うどころか、すぐ逃げて行ってしまいうだろう。」

いま に  
「いいえ、もうこうしてつかまったのですもの、今 さら逃げるものですか。まあ、ため  
お  
しに下ろしてごらんなさい。」

しゅしょう  
あんまりしつこく、殊 勝 らしくたのむものですから、おばあさんもうかうか、  
なわ お  
たぬきの言うことをほんとうにして、縄 をといて下ろしてやりました。するとたぬきは、  
「やれやれ。」

てあし  
としばられた手 足をさすりました。そして、  
「どれ、わたしがついてあげましょう。」

い と あ むぎ  
と言いながら、おばあさんのきねを取り上げて、麦 をつくふりをして、いきなりおば  
のうてん う お ま  
あさんの 脳 天 からきねを打ち下ろしますと、「きゃっ。」という間もなく、おばあさ  
たお し  
んは目をまわして、倒 れて死んでしまいました。

りょうり じる か じる  
たぬきはさっそくおばあさんをお 料 理 して、たぬき 汁 の代わりにばばあ 汁 を  
じぶん ば かお ろ まえ すわ  
こしらえて、自 分はおばあさんに化けて、すました 顔 をして炉の 前 に 座 って、  
かえ ま  
おじいさんの 帰 りを待ちうけていました。

ゆうがた し  
夕方になって、なんにも知らないおじいさんは、

ばん じる た  
「晩はたぬき汁が食べられるな。」

おも ひとり いそ かえ き  
と 思 っ て、一 人 でにこにこしながら、急いでうちへ 帰 っ て来ました。すると

ま  
たぬきのおばあさんはさも待ちかねたというように、

「おや、おじいさん、おかいんなさい。さっきからたぬき 汁 をこしらえて待っていましたよ。」

い  
と言いました。

「おやおや、そうか。それはありがたいな。」

い ぜん まえ すわ  
と言いながら、すぐにお膳の前 に 座 りました。そして、たぬきのおばあさんの

きゅうじ  
お給 仕 で、

「これはおいしい、おいしい。」

い した じる むちゅう た  
と言っ て、舌 つづみをうって、ばばあ 汁 のおかわりをして、夢 中 になっ て食べ

ていました。それを見てたぬきのおばあさんは、おも わら  
思 わず、「ふふん。」と 笑 うひょうし

しょうたい あらわ  
にたぬきの正 体 を 現 しました。

「ばばあくったじい、

なが ほね み  
流 しの下の骨 を 見ろ。」

い だ うらぐち に  
とたぬきは言いながら、大きなしっぽを出して、裏 口 からついと逃げていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり こし  
腰 をぬかしてしまいました。そして 流 しの下

ほね な  
のおばあさんの骨 をかかえて、おいおい泣いていました。

すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。」

い うら しろ はい き  
と言って、これも 裏 の山にいる 白 うさぎが 入 って来ました。

「ああ、うさぎさんか。よく 来 ておくれた。まあ聞いておくれ。ひどい目にあつたよ。」

い はなし  
とおじいさんは言って、これこれこういうわけだとすっかり 話 をしました。うさぎ

き どく  
はたいそう気の 毒 がって、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどもかたきはわたしがきつととって 上 げますから、

あんしん  
安 心 していらっしゃい。」

い なみだ  
とたのもしそうに言いました。おじいさんはうれし 涙 をこぼしながら、

「ああ、どうか 頼 みますよ。ほんとうにわたしはくやしくてたまらない。」

い  
と言いました。

だいじょうぶ さそ だ あ  
「大 丈 夫 。あしたはさっそくたぬきを 誘 い出して、ひどい目に合わしてやりま

ま  
す。しばらく待っていらっしゃい。」

い かえ  
とうさぎは言って、 帰 っていきました。

二

さてたぬきはおじいさんのうちを逃げ出してから、 何 だかこわいものですから、どこ

あな ひ こ  
へも出ずに 穴 にばかり引っ込んでいました。

こし あな  
するとある日、うさぎはかまを 腰 にさして、わざとたぬきのかくれている 穴 のそば

い だ か か  
へ行つて、かまを出してしきりにしばを刈っていました。そしてしばを刈りながら、

ふくろ い も き ぐり だ た  
袋 へ入れて持って来たかち 栗 を出して、ぱりぱり食べました。するとたぬきはそ

おと き あな だ  
の 音 を聞きつけて、 穴 の中からのそのそはい出してきました。

「うさぎさん、うさぎさん。 なに た  
何 をうまそうに食べているのだね。」

くり み  
「 栗 の実さ。」

すこ  
「 少 しわたしに出来ないか。」

あ はんぶんむ  
「上げるから、このしばを 半 分 向こうの山までしょっていっておくれ。」

くり せお さき た ある  
たぬきは 栗 がほしいものですから、しかたなしにしばを背負って、先 に立って 歩

だ む かえ  
き出しました。向こうの山まで行くと、たぬきはふり 返 って、

「うさぎさん、うさぎさん。かち ぐり  
栗 を出来ないか。」

あ む  
「ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら。」

しかたがないので、またたぬきはずんずん さき た ある  
先 に立って 歩 いていきました。やがても

む かえ  
う一つ向こうの山まで行くと、たぬきはふり 返 って、

「うさぎさん、うさぎさん。かち ぐり  
栗 を出来ないか。」

あ む あ  
「ああ、上げるけれど、ついでにもう一つ向こうの山まで行っておくれ。こんどはきっとあ  
げるから。」

しかたがないので、たぬきはまた さき た なん はや む  
先 に立って、こんどは 何 でも 早 く向こうの山

まで行きつこうと おも む ある  
思 っ て、うしろもふり向かずにせつせと 歩 いていきました。うさぎ

ひう いし だ  
はそのひまに、ふところから火打ち 石 を出して、「かちかち。」と火をきりました。たぬ

おも  
きはへんに 思 っ て、

なん  
「うさぎさん、うさぎさん、かちかちいうのは 何 だろう。」

「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

い ある だ  
と 言 っ て、たぬきはまた 歩 き 出 っ ました。そのうちにうさぎのつけた火が、たぬきの

せなか も だ おも  
背 中 のしばにうつって、ぼうぼう燃え出 っ ました。たぬきはまたへんに 思 っ て、

なん  
「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼういうのは 何 だろう。」

む  
「向こうの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

い せなか も  
とたぬきが言ううちに、もう火はずんずん 背 中 に燃えひろがってしまいました。たぬ  
きは、

たす  
「あつい、あつい、 助 けてくれ。」

むちゆう だ やまかぜ ふ  
とさげびながら、 夢 中 でかけ出 っ ますと、 山 風 がうしろからどっと吹きつけ

な ごえ あ くる  
て、よけい火が大きくなりました。たぬきはひいひい泣き 声 を上げて、 苦 し がつて、

も お あな こ  
ころげまわって、やっこのことで燃えるしばをふり落として、 穴 の中 にか け 込 みました。

こえ  
うさぎはわざと大きな 声 で、

かじ かじ  
「やあ、たいへん。 火 事 だ。 火 事 だ。」

い かえ  
と 言 い ながら 帰 っ ていきました。

そのあくる日、うさぎはおみその中に 唐<sup>とう</sup> がらしをすり込んでこうやくをこしらえて、  
それを<sup>も</sup>持ってたぬきのところへお見舞いにやっ<sup>みま</sup>て来<sup>き</sup>ました。たぬきは背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>中<sup>ちゆう</sup>大<sup>おほ</sup>  
やけどをして、うんうんうなりながら、まっくらな<sup>あな</sup>穴<sup>あな</sup>の中<sup>なか</sup>にころがっていました。  
「たぬきさん、たぬきさん。ほんとうにきのうはひどい目にあつたねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目にあつたよ。この<sup>おほ</sup>大<sup>おほ</sup>やけどはどうしたらなおるだろう。」

「うん、それでね、あんまり<sup>き</sup>気<sup>どく</sup>の毒<sup>どく</sup>だから、わたしがやけどにいちばん<sup>き</sup>利<sup>き</sup>くこうやくを

こしらえて<sup>も</sup>持<sup>き</sup>って来たのだよ。」

「そうかい。それはありがたいな。さっそくぬってもらおう。」

こういってたぬきが火ぶくれになって、<sup>あかはだ</sup>赤<sup>あか</sup>肌<sup>はだ</sup>にただれている<sup>せなか</sup>背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>を出<sup>だ</sup>しますと、

うさぎはその上<sup>とう</sup>に唐<sup>とう</sup> がらしみそをと<sup>と</sup>ころかまわずこてこてぬりつけました。すると  
<sup>せなか</sup>背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>はまた火がついたようにあつくなくて、  
「いたい、いたい。」

<sup>い</sup>と<sup>あな</sup>言<sup>い</sup>いながら、たぬきは<sup>あな</sup>穴<sup>あな</sup>の中<sup>なか</sup>をころげまわっていました。うさぎはその<sup>ようす</sup>様<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>を見<sup>み</sup>  
てにこにこしながら、

「なあにたぬきさん、ぴりぴりするののははじめのうちだけだよ。じきになおるから、<sup>すこ</sup>少<sup>すこ</sup>し

<sup>あいだ</sup>の<sup>あいだ</sup>間<sup>ま</sup>がまんおし。」

<sup>い</sup>と<sup>かえ</sup>言<sup>い</sup>って<sup>かえ</sup>帰<sup>かえ</sup>っていきました。

#### 四

それから四、五<sup>にち</sup>日<sup>にち</sup>たちました。ある日<sup>にち</sup>うさぎは、



「たぬきのやつどうしたろう。こんどはひとつ <sup>うみ</sup> 海 <sup>つ</sup> に連れ出して、ひどい目にあわせてやろう。」

ひと <sup>ごと</sup> い <sup>き</sup>  
と 独 <sup>り</sup> 言 <sup>を</sup> 言っているところへ、ひょっこりたぬきがたずねて来ました。  
「おやおや、たぬきさん、もうやけどはなおったかい。」

かげ  
「ああ、お 陰 <sup>で</sup> たいぶよくなったよ。」  
「それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか。」  
「いやもう、山はこりごりだ。」

「それなら山はよして、こんどは <sup>うみ</sup> 海 <sup>うみ</sup> へ行こうじゃないか、海 <sup>うみ</sup> はおさかながとれるよ。」

「なるほど、<sup>うみ</sup> 海 <sup>うみ</sup> はおもしろそうだね。」

そこでうさぎとたぬきは連れだつて <sup>うみ</sup> 海 <sup>ふね</sup> へ出かけました。うさぎが木の <sup>ふね</sup> 舟 <sup>ふね</sup> をこしらえますと、たぬきはうらやましがって、まねをして土の <sup>ふね</sup> 舟 <sup>ふね</sup> をこしらえました。舟 <sup>ふね</sup> ができあ <sup>ふね</sup> 上がると、うさぎは木の <sup>ふね</sup> 舟 <sup>つち</sup> に乗りました。たぬきは <sup>つち</sup> 土 <sup>の</sup> の舟 <sup>の</sup> に乗りました。べつべつ <sup>ふね</sup> に <sup>おき</sup> 舟 <sup>おき</sup> をこいで <sup>おき</sup> 沖 <sup>おき</sup> へ出ますと、

てんき  
「いいお天 <sup>てんき</sup> 気 <sup>だ</sup> ねえ。」  
「いいけしきだねえ。」

とてんでんに言いながら、めずらしそうに <sup>うみ</sup> 海 <sup>おき</sup> をながめていましたが、うさぎは、  
「ここらにはまだおさかなはいないよ。もっと <sup>おき</sup> 沖 <sup>ほう</sup> の <sup>ほう</sup> 方 <sup>ほう</sup> までこいで行こう。さあ、どっ <sup>は</sup> ち <sup>や</sup> が <sup>き</sup> 早 <sup>き</sup> いか <sup>き</sup> 競 <sup>き</sup> 争 <sup>き</sup> しよう。」

い  
と言いました。たぬきは、  
「よし、よし、それはおもしろかろう。」

い  
と言いました。

そこで一、二、三とかけ <sup>ごえ</sup> 声 <sup>だ</sup> をして、こぎ出しました。うさぎはかんかん <sup>ふな</sup> 舟 ばたをたたいて、

「どうだ、木の <sup>ふね</sup> 舟 <sup>かる</sup> は <sup>はや</sup> 軽 <sup>く</sup> くて <sup>はや</sup> 速 <sup>か</sup> ろう。」

い  
と言いました。するとたぬきも <sup>ま</sup> 負 <sup>き</sup> けない <sup>ふな</sup> 気 <sup>にな</sup> って、 <sup>ふな</sup> 舟 ばたをこんこんたたいて、

「なあに、土の <sup>つち</sup> 舟 <sup>ふね</sup> は <sup>おも</sup> 重 <sup>く</sup> くて <sup>じょうぶ</sup> 丈 <sup>夫</sup> だ。」

い  
と言いました。

そのうちにだんだん水がしみて <sup>つち</sup> 土 <sup>ふね</sup> の <sup>くず</sup> 舟 <sup>だ</sup> は <sup>崩</sup> れ出 <sup>し</sup> ました。

「やあ、たいへん。 <sup>ふね</sup> 舟 <sup>が</sup> こわれてきた。」

とたぬきがびっくりして、 <sup>おお</sup> 大 <sup>さわぎ</sup> をはじめました。

「ああ、 <sup>しず</sup> 沈 <sup>む</sup>、 <sup>しず</sup> 沈 <sup>む</sup>、 <sup>たす</sup> 助 <sup>け</sup> てくれ。」

うさぎはたぬきのあわてる <sup>ようす</sup> 様 <sup>子</sup> をおもしろそうにながめながら、

「 <sup>み</sup> さまを見ろ。おばあさんを <sup>だまして</sup> 殺 <sup>ころ</sup> して、おじいさんに <sup>じる</sup> 汁 <sup>く</sup> を <sup>食</sup> わせた <sup>むく</sup> いた。」

い  
と言いますと、たぬきはもうそんなことはしないから <sup>たす</sup> 助 <sup>い</sup> けてくれ <sup>い</sup> と言って、うさぎを

おがみました。そのうち <sup>ふね</sup> どん <sup>くず</sup> どん <sup>舟</sup> は <sup>崩</sup> れて、あっぷあっぷいうまもなく、たぬきは

とうとう <sup>しず</sup> 沈 <sup>んで</sup> しまいました。

---

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和 58）年 5 月 10 日第 1 刷発行

1992（平成 4）年 4 月 20 日第 14 刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003 年 8 月 2 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 18.花咲かじじい

楠山正雄

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。

正直（しょうじき）な、人のいいおじいさんとおばあさんどうしてでしたけれど、子どもがないので、飼犬（かいいぬ）の白（しろ）を、ほんとうの子どものようにかわいがっていました。白も、おじいさんとおばあさんに、それはよくなつていました。

すると、おとなりにも、おじいさんとおばあさんがありました。このほうは、いけない、欲（よく）ばりのおじいさんとおばあさんでした。ですから、おとなりの白をにくらしがって、きたならしがって、いつもいじのわるいことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわ〔#「くわ」に傍点〕をかついで、畑をほりかえしていますと、白も一緒（いっしょ）についてきて、そこらをくんくんかぎまわっていましたが、ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの、大きなえのきの木の下までつれて行って、前足で土をかき立てながら、

「ここほれ、ワン、ワン。

ここほれ、ワン、ワン」

となきました。

「なんだな、なんだな」

と、おじいさんはいいながら、くわ〔#「くわ」に傍点〕を入れてみますと、かちりと音がして、穴のそこできらきら光るものがありました。ずんずんほって行くと、小判（こばん）がたくさん、出てきました。おじいさんはびっくりして、大きな声でおばあさんをよびたてて、えんやら、えんやら、小判をうちのなかへはこび込みました。

正直（しょうじき）なおじいさんとおばあさんは、きゅうにお金持ちになりました。

二

すると、おとなりの欲（よく）ばりおじいさんが、それをきいてたいへんうらやましがって、さっそく白（しろ）をかりにきました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白をかしてやりますと、欲ばりおじいさんは、いやがる白の首（くび）になわをつけて、ぐんぐん、畑のほうへひっぱって行きました。

「おれの畑にも小判がうまっているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」

といいながら、よけいつよくひっぱりますと、白は苦しがつて、やたらに、そこらの土を

ひっかきました。欲（よく）ばりおじいさんは、

「うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」

といいながら、ほりはじめましたが、ほっても、ほっても出てくるものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらにほって行きますと、ぷんとくさいにおいがして、きたないものが、うじゃうじゃ、出てきました。欲ばりおじいさんは、「くさい」とさけんで、鼻（はな）をおさえました。そうして、腹立（はらだ）ちまぎれに、いきなりくわ【#「くわ」に傍点】をふり上げて、白（しろ）のあたまから打ちおろしますと、かわいそうに、白はひと声（こえ）、「きゃん」とないたなり、死んでしまいました。

正直（しょうじき）おじいさんとおばあさんは、あとでどんなにかなしがったでしょう。けれども死んでしまったものはしかたがありませんから、涙（なみだ）をこぼしながら、白の死骸（しがい）を引きとって、お庭のすみに穴をほって、ていねいにうずめてやって、お墓（はか）の代（かわ）りにちいさいまつの木を一本、その上にうえました。するとそのまつが、みるみるそだって行って、やがてりっぱな大木（たいぼく）になりました。

「これは白の形見（かたみ）だ」

こうおじいさんはいって、そのまつを切って、うす【#「うす」に傍点】をこしらえました。そうして、

「白（しろ）はおもちがすきだったから」

といって、うす【#「うす」に傍点】のなかにお米を入れて、おばあさんとふたりで、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめますと、ふしぎなことには、いくらついてもついても、あとからあとから、お米がふえて、みるみるうす【#「うす」に傍点】にあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所（だいどころ）いっぱいお米になってしまいました。

### 三

するとこんども、おとなりの欲（よく）ばりおじいさんとおばあさんがそれを知ってうらやましがって、またずうずうしくうす【#「うす」に傍点】をかりにきました。人のいいおじいさんとおばあさんは、こんどもうっかりうす【#「うす」に傍点】をかしてやりました。

うす【#「うす」に傍点】をかりるとさっそく、欲ばりおじいさんは、うす【#「うす」に傍点】のなかにお米を入れて、おばあさんをあいてに、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめましたが、どうしてお米がわき出すどころか、こんどもぷんといやなにおいがして、なかからうじゃうじゃ、きたないものが出てきて、うす【#「うす」に傍点】にあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所（だいどころ）いっぱい、きたないもの

だらけになりました。

欲（よく）ばりおじいさんは、またかんしゃくをおこして、うす [#「うす」に傍点] をたたきこわして、薪（まき）にしてもしてしまいました。

正直（しょうじき）おじいさんは、うす [#「うす」に傍点] を返してもらいに行きますと、灰になっていましたから、びっくりしました。でも、もしてしまったものはしかたがありませんから、がっかりしながら、ざるのなかに、のこった灰をかきあつめて、しおしおうちへ帰りました。

「おばあさん、白（しろ）のまつの木が、灰になってしまったよ」

こういっておじいさんは、お庭のすみの白のお墓（はか）のところまで、灰をかかえて行ってまきますと、どこからか、すうすうあたたかい風が吹いてきて、ぱっと、灰をお庭いっぱい吹きちらしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のままだっていたうめの木や、さくらの木が、灰をかぶると、みるみるそれが花になって、よそはまだ冬のさなかなのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春げしきになってしまいました。

おじいさんは、手をたたいてよろこびました。

「これはおもしろい。ついでに、いっそ、ほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」

そこで、おじいさんは、ざるにのこった灰をかかえて、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、往来（おうらい）をよんであるきました。

すると、むこうから殿（との）さまが、馬にのって、おおぜい家来（けらい）をつれて、狩（かり）から帰ってきました。

殿さまは、おじいさんをよんで、

「ほう、めずらしいじじいだ。ではそこのさくらの枯れ木に、花を咲かせて見せよ」

といいつけました。おじいさんは、さっそくざるをかかえて、さくらの木に上がって、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

といいながら、灰をつかんでふりまきますと、みるみる花が咲き出して、やがていちめん、さくらの花ざかりになりました。殿さまはびっくりして、

「これはみごとだ。これはふしぎだ」

といって、おじいさんをほめて、たくさんにごほうびをくださいました。

するとまた、おとなりの欲（よく）ばりおじいさんが、それをきいて、うらやましがって、のこっている灰をかきあつめてざるに入れて、正直（しょうじき）おじいさんのまねをして、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」

と、往来（おうらい）をどなってあるきました。

するとこども、殿（との）さまがとおりにかかって、

「こないだの花咲かじじいがきたな。また花を咲かせて見せよ」

といいました。欲（よく）ばりおじいさんは、とくいらしい顔をしながら、灰を入れたざるをかかえて、さくらの木に上がって、おなじように、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

ととなえながら、やたらに灰をふりまきましたが、いっこうに花は咲きません。するうち、どっとひどい風が吹いてきて、灰は遠慮（えんりょ）なしに四方八方（しほうはっぽう）へ、ばらばら、ばらばらちって、殿さまやご家来（けらい）の目や鼻（はな）のなかへはいりました。そこでもここでも、目をこするやら、くしゃみをするやら、あたまの毛をはらうやら、たいへんなさわぎになりました。殿さまはたいそうお腹立（はらだ）ちになって、

「にせものの花咲かじじいにちがいない。ふとどきなやつだ」

とって、欲ばりおじいさんを、しばらせてしまいました。おじいさんは、「ごめんなさい。ごめんなさい」といいましたが、とうとうろう [#「ろう」に傍点] 屋（や）へつれて行かれました。

---

底本：「むかし むかし あるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

ファイル作成：野口英司

2001年12月19日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 19.浦島太郎

楠山正雄

一

たんご みず え うら  
むかし、むかし、丹後の国水の江の浦に、浦島太郎というりょうしがありました。

浦島太郎は、毎日つりざおをかついでは海へ出かけて、**たいや、かつお**などのおさかなをつつて、おとうさんおかあさんをやしなっていました。

ある日、浦島はいつものとおり海へ出て、一日おさかなをつつて、帰ってきました。

とちゅう おうらい なに  
途中、子どもが五、六人往來にあつまって、がやがやいていました。何か

とおもって浦島がのぞいてみると、小さいかめの子を一ぴきつかまえて、<sup>ぼう</sup>棒でつついたり、石でたたいたり、さんざんにいじめているのです。浦島は見かねて、「まあ、そんなかわいそうなことをするものではない。いい子だから」と、とめました。子どもたちはきき入れようもしないで、「なんだい。なんだい、かまうもんかい」

といいながら、またかめの子を、あおむけにひっくりかえして、足でけったり、<sup>すな</sup>砂のなかにうずめたりしました。浦島はますますかわいそうにおもって、

「じゃあ、おじさんが**おあし**をあげるから、そのかめの子を売っておくれ」

といいますと、こどもたちは、

「うんうん、**おあし**をくれるならやってもいい」

といって、手を出しました。そこで浦島は**おあし**をやったかめの子をもらいうけました。

子どもたちは、

「おじさん、ありがとう。また買っておくれよ」

と、わいわいいいながら、行ってしまいました。

そのあとで浦島は、<sup>くび</sup>こうらからそっと出したかめの首をやさしくなでてやって、

「やれやれ、あぶないところだった。さあもうお帰りお帰り」

といって、わざわざ、かめを海ばたまで持って行ってはなしてやりました。かめはさもうれしように、首や手足をうごかして、やがて、ぶくぶくあわをたてながら、水のなかにふかくしずんで行ってしまいました。

それから二、三日たって、浦島はまた舟にのって海へつりに出かけました。遠い 沖<sup>おき</sup>の

ほうまでもこぎ出して、一<sup>いっしょう</sup> 生<sup>せい</sup> けんめいおさかなをつっていますと、ふとうしろのほうで

「浦島さん、浦島さん」

とよぶ声がしました。おやとおもってふりかえってみますと、だれも人のかげは見えませ

ん。その 代<sup>かわ</sup>り、いつのまにか、一ぴきのかめが、舟のそばにきていました。

浦島がふしぎそうな顔をしていると、

「わたくしは、先日 助<sup>たす</sup> けていただいたかめでございます。きょうはちょっとそのお 礼<sup>れい</sup>にまいりました」

かめがこういったので、浦島はびっくりしました。

「まあ、そうかい。わざわざ礼なんぞいいにくるにはおよばないのに」

「でも、ほんとうにありがとうございました。ときに、浦島さん、あなたはりゅう<sup>りゅう</sup> 宮<sup>ぐう</sup>を  
ごらんになったことがありますか」

「いや、話にはきいているが、まだ見たことはないよ」

「ではほんのお礼のしるしに、わたくしがりゅう宮を見せて上げたいとおもいますがいかがでしょう」

「へえ、それはおもしろいね。ぜひ行ってみたいが、それはなんでも海の底にあるということではないか。どうして行くつもりだね。わたしにはとてもそこまでおよいでは行けないよ」

「なに、わけはございません。わたくしの背<sup>せなか</sup> 中<sup>なか</sup>におのりください」

かめはこういって、背中を出しました。浦島は半分きみわるくおもいながら、いわれるままに、かめの背中にのりました。

かめはすぐに白い 波<sup>なみ</sup> を切って、ずんずんおよいで行きました。ざあざあいう波の音が

だんだん 遠<sup>とお</sup> くなって、青い青い水の底へ、ただもう 夢<sup>ゆめ</sup> のようにはこぼれて行きますと、

ふと、そこらがかつとあかるくなって、白<sup>しらたま</sup> 玉<sup>たま</sup> のようにきれいな 砂<sup>すな</sup> の 道<sup>みち</sup> が つづい

て、むこうにりっぱな門が見えました。その 奥<sup>おく</sup> にきらきら光って、目のくらむような金

銀のいらかが、たかくそびえていました。

「さあ、りゅう<sup>ぐう</sup>宮へまいりました」

かめはこういって、浦島を背<sup>せなか</sup>中からおろして、

「しばらくお待ちください」

といったまま、門のなかへは行って行きました。

## 二

まもなく、かめはまた出てきて、

「さあ、こちらへ」

と、浦島を御殿<sup>ごてん</sup>のなかへ案内<sup>あんない</sup>しました。たいや、ひらめやかれいや、いろいろのおさかなが、ものめずらしそうな目で見ているなかをとおって、はいつて行きますと、

おとひめ<sup>おとひめ</sup>乙姫さまがおおぜいの腰元<sup>こしもと</sup>をつれて、お迎え<sup>むか</sup>に出てきました。やがて

おとひめ<sup>おとひめ</sup>乙姫さまについて、浦島はずんずん奥<sup>おく</sup>へとおって行きました。めのうの

てんじょう<sup>てんじょう</sup>天井にさんご<sup>ろうか</sup>の柱、廊下にはるりがしきつめてありました。こわごわその上を

あるいて行きますと、どこからともなくいいにおいがして、たのしい楽<sup>がく</sup>の音がきこえてきました。

やがて、水<sup>すいしょう</sup>晶の壁に、いろいろの宝<sup>ほうせき</sup>石をちりばめた大広間<sup>おおひろま</sup>にとおりますと、

「浦島さん、ようこそおいでくださいました。先日はかめのいのちをお助<sup>たす</sup>けくださいまして、まことにありがとうございます。なんにもおもてなしはございませんが、どうぞゆつくりおあそびくださいまし」

と、乙姫さまはいつて、ていねいにおじぎしました。やがて、たいをかしらに、かつおだの、ふぐだの、えびだの、たこだの、大小いろいろのおさかなが、めずらしいごちそうを

山とはこんできて、にぎやかなお酒<sup>さかもり</sup>盛<sup>こしもと</sup>がはじまりました。きれいな腰元<sup>こしもと</sup>たちは、

歌をうたったり 踊りをおどったりしました。浦島はただもう 夢のなかで夢を見ているようでした。

ごちそうがすむと、浦島はまた乙姫さまの案内で、御殿のなかをのこらず見せてもらいました。どのおへやも、どのおへやも、めずらしい宝石でかざり立ててありますからそのうつくしきは、とても口やことばではいえないくらいでした。ひととおり見てし

まうと、乙姫さまは、

「こんどは四季のけしきをお目にかけてしょう」

とって、まず、東の戸をおあけになりました。そこは春のけしきで、いちめん、ぼうっ

とかすんだなかに、さくらの花が、うつくしい絵のように咲き乱れていました。青青

としたやなぎの枝が風になびいて、そのなかで小鳥がないたり、ちょうちょうが舞ったりしていました。

次に、南の戸をおあけになりました。そこは夏のけしきで、垣根には白いうの花が咲

いて、お庭の木の青葉のなかでは、せみやひぐらしがなっていました。お池には赤と白

のはすの花が咲いて、その葉の上には、水晶の珠のように露がたまっていま

した。お池のふちには、きれいなさざ波が立って、おしどりやかもがうかんでいました。

次に西の戸をおあけになりました。そこは秋のけしきで花壇のなかには、黄ぎく、白ぎくが咲き乱れて、ぷんといいかおりを立てました。むこうを見ると、かつともえ立つよ

うなもみじの林の奥に、白い霧がたちこめていて、しかのなく声がかなくきこえませんでした。

いちばんおしまい、北の戸をおあけになりました。そこは冬のけしきで、野には散り

のこった枯葉の上に、霜がきらきら光っていました。山から谷にかけて、雪がまっ白

に降り埋んだなかから、柴をたくけむりがほそぼそとあがっていました。

浦島は何を見ても、おどろきあきれて、目ばかり見はっていました。そのうちだんだん  
ぼうつとしてきて、お酒に酔<sup>よ</sup>った人のようになって、何もかもわすれてしまいました。

### 三

毎日おもしろい、めずらしいことが、それからそれとつづいて、あまりりゅう宮がたの  
しいので、なんということもおもわずに、うかうかあそんでくらすうち、三年の月日がた  
ちました。

三年めの春になったとき、浦島はときどき、ひさしくわすれていたふるさとの<sup>ゆめ</sup>夢を見  
るようになりました。春の日のぼかぼかあたっている<sup>みず え</sup>水の江の浜で、りょうしたちが

げんきよく舟うたをうたいながら、<sup>あみ</sup>網をひいたり舟をこいだりしているところを、まざ  
まざと夢に見るようになりました。浦島はいまさらのように、

「おとうさんや、おかあさんは、いまごろどうしておいでになるだろう」  
と、こうおもい出すと、もう、いても立ってもいられなくなるような気がしました。なん  
でも早くうちへ帰りたいとばかりおもうようになりました。ですから、もうこのごろでは、

<sup>おど</sup>歌をきいても、踊りを見ても、おもしろくない顔をして、ふさぎこんでばかりいました。

<sup>ようす</sup>その様子を見ると、<sup>おとひめ</sup>乙姫さまは<sup>しんぱい</sup>心配して、  
「浦島さん、ご気分でもおわるいのですか」  
とおききになりました。浦島はもじもじしながら、  
「いいえ、そうではありません。じつはうちへ帰りたくなつたものですから」  
といいますと、乙姫さまはきゆうに、たいそうがっかりした様子をなさいました。  
「まあ、それはざんねんでございますこと。でもあなたのお顔をはいけんいたしますと、

この上おひきとめ申しても、むだのようにおもわれます。ではいたし<sup>かた</sup>方<sup>ご</sup>ざいませぬ、  
行っていらっしゃいまし」

こうかなしそうにいつて、乙姫さまは、<sup>おく</sup>奥から<sup>ほうせき</sup>きれいな宝<sup>はこ</sup>石でかざった箱  
を持っておいでになって、

たまたまばこ  
「これは玉手箱といって、なかには、人間のいちばんだいじなたからがこめてございます。これをおわかれのしるしにさし上げますから、お持ちかえりくださいまし。ですが、  
あなたがもういちどりゅう宮へ帰ってきたいとおぼしめすなら、どんなことがあっても、  
けっしてこの箱をあけてごらんになってはいけません」

たまたまばこ  
と、くれぐれもねんをおして、玉手箱をおわたしになりました。浦島は、  
「ええ、ええ、けっしてあけません」

と、玉手箱をこわきにかかえたまま、りゅう宮の門を出ますと、乙姫さまは、

またおおぜいの腰元をつれて、門のそとまでお見送りになりました。

もうそこには、れいのかめがきて待っていました。

浦島はうれしいのとかないのとで、胸がいっぱいになっていました。そしてかめの  
せなか  
背中にのりますと、かめはすぐ波を切って上がって行って、まもなくもとの浜べにつ  
きました。

「では浦島さん、ごきげんよろしゅう」

と、かめは行って、また水のなかにもぐって行きました。浦島はしばらく、かめの行くえ  
を見送っていました。

#### 四

浦島は海ばたに立ったまま、しばらくそこらを見まわしました。春の日がぼかぼかあ  
たって、いちめんにかすんだ海の上に、どこからともなく、にぎやかな舟うたがきこえまし

た。それは夢のなかで見たふるさとの浜べの景色とちっともちがったところはありません

ようす  
せんでした。けれどよく見ると、そこらの様子になんとかかわっていて、あう人もあ  
う人も、いっこうに見知らない顔ばかりで、むこうでもみょうな顔をして、じろじろ見  
ながら、ことばもかけずにすまして行ってしまいます。

「おかしいこともあるものだ。たった三年のあいだに、みんなどこかへ行ってしまいうはず

はない。まあ、なんでも早くうちへ行ってみよう」

こうひとりごとをいいながら、浦島はじぶんの家の<sup>ほうがく</sup>方角へあるき出しました。ところが、そことおもうあたりには草や<sup>あし</sup>あしがぼうぼうとしげって、家なぞはかげもかたちもありません。むかし家の立っていたらしいあとさえものこってはいませんでした。いったい、おとうさんやおかあさんはどうなったのでしょうか。浦島は、

「ふしぎだ。ふしぎだ」

とくり返しながら、きつねにつままれたような、きょとんとした顔をしていました。

するとそこへ、よぼよぼのおばあさんがひとり、つえにすがってやってきました。浦島はさっそく、

「もしもし、おばあさん、浦島太郎のうちはどこでしょう」

と、声をかけますと、おばあさんはげげんそうに、しょぼしょぼした目で、浦島の顔をながめながら、

「へえ、浦島太郎。そんな人はきいたことがありませんよ」

といいました。浦島はやっきとなって、

「そんなはずはありません。たしかにこのへんに住んでいたのです」

といいました。

そういわれて、おばあさんは、

「はてね」と、<sup>くび</sup>首をかしげながら、つえでせいのびしてしばらくかんがえこんでいましたが、やがてぼんとひざをたたいて、

「ああ、そうそう、浦島太郎さんというと、あれはもう三百年も前の人ですよ。なんでも、

わたしが子どものじぶんきいた話に、むかし、むかし、この<sup>みず え</sup>水の江の浜に、浦島太郎という人があって、ある日、舟にのってつりに出たまま、帰ってこなくなりました。たぶん

<sup>ぐう</sup>りゅう宮へでも行ったのだらうということです。なにしろ<sup>おおむかし</sup>大昔の話だからね」

こういって、また<sup>こし</sup>腰をかがめて、よぼよぼあるいて行ってしまいました。

浦島はびっくりしてしまいました。

「はて、三百年、おかしいこともあるものだ。たった三年<sup>りゅう</sup>宮にいたつもりなのに、

それが三百年とは。すると<sup>ぐう</sup>りゅう宮の三年は、人間の三百年にあたるのかしらん。それでは家もなくなるはずだし、おとうさんやおかあさんがいらっしゃらないのもふしぎはない」

こうおもうと、浦島はきゅうにかなしくなって、さびしくなって、目の前がぐらぐら

ました。いまさらりゅう宮がこいしくてたまらなくなりました。

しおしおとまた浜べへ出てみましたが、海の水はまんまとたたえていて、どこがはてともしれません。もうかめも出てきませんから、どうしてりゅう宮へわたろう手だてもありませんでした。

たまたま  
そのとき、浦島はふと、かかえていた玉手箱に気がつきました。

はこ  
「そうだ。この箱をあけてみたら、わかるかもしれない」

おとひめ  
こうおもうとうれしくなって、浦島は、うっかり乙姫さまにいわれたことはわすれて、箱のふたをとりました。するとむらさき色の雲が、なかからむくむく立ちのぼって、それが顔にかかったかとおもうと、すうっと消えて行って箱のなかにはなんにもものこって

かわ  
いませんでした。その代り、いつのまにか顔じゅうしわになって、手も足もちぢかまっ

かげ かみ  
て、きれいなみぎわの水にうつった影を見ると、髪もひげも、まっしろな、かわいいおじいさんになっていました。

はこ  
浦島はからになった箱のなかをのぞいて、

おとひめ  
「なるほど、乙姫さまが、人間のいちばんだいじなたからを入れておくとおっしゃっ

じゅみょう  
たあれは、人間の寿命だったのだな」

と、ざんねんそうにつぶやきました。

とお  
春の海はどこまでも遠くかすんでいました。どこからかいい声で舟うたをうたうのが、またきこえてきました。

浦島は、ぼんやりとむかしのことをおもい出していました。



---

底本：「むかし むかし あるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年12月19日公開

2008年10月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 20.赤ずきんちゃん

# ROTKAPPCHEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

むかし、むかし、あるところに、ちいちゃいかわいい女の子がありました。それはたれだって、ちょいとみただけで、かわくなるこの子でしたが、でも、たれよりもかれよりも、この子のおばあさんほど、この子をかawaiiがっているものではなく、この子を見ると、なにもかもやりたくてやりたくて、いったいなにをやっているのかわからなくなるくらいでした。それで、あるとき、おばあさんは、赤いびろうどで、この子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似あうので、もうほかのものは、なんにもかぶらないと、きめてしまいました。そこで、この子は、赤ずきんちゃん、赤ずきんちゃん、とばかり、よばれるようになりました。

ある日、おかあさんは、この子をよんでいいました。

「さあ、ちょいといらっしゃい、赤ずきんちゃん、ここに<sup>かし</sup>お菓子がひとつと、<sup>しゅ</sup>ぶどう酒がひとつびんあります。これを赤ずきんちゃん、おばあさんのところへもっていらっしゃい。おばあさんは、ご病気でよわっていらっしゃるが、これをあげると、きっと元気になるでしょう。それでは、あつくなならないうちにおでかけなさい。それから、そとへでたら気をつけて、おぎょうぎよくしてね、やたらに、しらない横道へかけだしていったりなんかしないのですよ。そんなことをして、ころびでもしたら、せつかくのびんはこわれるし、おばあさんにあげるものがなくなるからね。それから、おばあさんのおへやにはいったら、まず、おはようございます、をいうのをわすれずにね。はいると、いきなり、おへやの中をきよろきよろみまわしたりなんかしないでね。」

「そんなこと、あたし、ちゃんとよくしてみせてよ。」と、赤ずきんちゃんは、おかあさんにそういつて、指きりしました。

ところで、おばあさんのおうちは、村から半道はなれた森の中にありました。赤ずきんちゃんが森にはいりかけますと、おおかみがひょっこりでてきました。でも、赤ずきんちゃんは、おおかみって、どんなわるいけだものだからしりませんでしたから、べつだん、こわいともおもいませんでした。

「赤ずきんちゃん、こんちは。」と、おおかみはいいました。

「ありがとう、おおかみちゃん。」

「たいそうはやくから、どちらへ。」

「おばあちゃんのところへいくのよ。」

「前かけの下にもってるものは、なあに。」

「お菓子に、ぶどう酒。おばあさん、ご病気でよわっているでしょう。それでおみまいにもってあげようとおもって、きのう、おうちで焼いたの。これでおばあさん、しっかりなさるわ。」

「おばあさんのおうちはどこさ、赤ずきんちゃん。」

「これからまた、八、九 <sup>ちょう</sup>町 もあるいてね、森のおくのおくで、大きなかしの木が、三

ぼん立っている下のおうちよ。おうちのまわりに、くるみの <sup>いけがき</sup>生垣 があるから、すぐわかるわ。」

赤ずきんちゃんは、こうおしえました。

おおかみは、心の中でかながえていました。

「わかい、やわらかそうな小むすめ、こいつはあぶらがのって、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっとあじがよかろう。ついでにりょうほういっしょに、ぽっくりやるくふうがかんじんだ。」

そこで、おおかみは、しばらくのあいだ、赤ずきんちゃんとならんであるきながら、道みちこう話しました。

「赤ずきんちゃん、まあ、そこらじゅうきれいに咲いている花をごらん。なんだって、ほうぼうながめてみないんだろうな。ほら、小鳥が、あんなにいい声で歌をうたっているのに、赤ずきんちゃん、なんだかまるできいていないようだなあ。学校へいくときのように、むやみと、せっせこ、せっせこと、あるいているんだなあ。そとは、森の中がこんなにあかるくてたのしいのに。」

そういわれて、赤ずきんちゃんは、あおむいてみました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からもれて、これが、そこでもここでも、たのしそうにダンスしていて、どの木にもどの木にも、きれいな花がいっぱい咲いているのが、目にはいりました。そこで、

「あたし、おばあさまに、げんきでいきおいのいいお花をさがして、花たばをこしらえて、もってあげようや。するとおばあさん、きつとおよろこびになるわ。まだ朝はやいから、だいじょうぶ、時間までに行かれるでしょう。」

と、こうおもって、ついと横道から、その中へかけだしては行って、森の中のいろいろの花をさがしました。そうして、ひとつ花をつむと、その先に、もっときれいなものがあるんじゃないか、という気がして、そのほうへかけて行きました。そうして、だんだん森のおくへおくへと、さそわれて行きました。

ところが、このあいだに、すきをねらって、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのおうちへかけて行きました。そして、とんとん、戸をたたきました。

「おや、どなた。」

「赤ずきんちゃんよ。お菓子とぶどう酒を、おみまいにもって来たのよ。あけてちょうだい。」

「とっ手をおしておくれ。おばあさんはご病気でよわっていて、おきられないのだよ。」

おおかみは、とっ手をおしました。戸は、ぼんとあきました。おおかみはすぐとはいって、なんにもいわずに、いきなりおばあさんのねているところへ行って、あんぐりひと口に、おばあさんをのみこみました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさ

とこ  
んのずきんをかぶって、おばあさんのお床にごろりと寝て、カーテンを引いておきました。

赤ずきんちゃんは、でも、お花をあつめるのにむちゅうで、森じゅうかけまわっていました。そうして、もうあつめるだけあつめて、このうえ持ちきれないほどになったとき、おばあさんのことをおもいだして、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸があいたままになっているので、へんだとおもいながら、中へはいりました。すると、なにかが、いつもとかわってみえたので、

「へんだわ、どうしたのでしょうか。きょうはなんだか胸がわくわくして、きみのわるいこと。おばあさんのところへくれば、いつだったのしいのに。」と、おもいながら、大きな声で、

「おはようございます。」

と、よんでみました。でも、おへんじはありませんでした。

とこ  
そこで、お床のところへ行って、カーテンをあけてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、ずきんをすっぽり目までさげて、なんだかいつもとようすがかわっていました。

「あら、おばあさん、なんて大きなお耳。」

「おまえの声が、よくきこえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおめめ。」

「おまえのいるのが、よくみえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおてて。」

「おまえが、よくつかめるようにさ。」

「でも、おばあさん、まあ、なんてきみのわるい大きなお口だこと。」

「おまえをたべるにいいようにさ。」

こういうがはやいか、おおかみは、いきなり寝床からとびだして、かわいそうに、赤ずきんちゃんを、ただひと口に、あんぐりやっしまいました。

これで、したたかおなかをふくらませると、おおかみはまた寝床にもぐって、ながなが

と寝そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかきだしました。

ちょうどそのとき、かりうどがおもてを通りかかって、はてなと思って立ちどまりました。

「ばあさんが、すごいいびきで寝ているが、へんだな。どれ、なにかかわったことがあるんじゃないか、みてやらずばなるまい。」

そこで、中へは行って見て、寝床のところへ行ってみますと、おおかみが横になっていました。

「ちきしょう、このばちあたりめが、とうとうみつけたぞ。ながいあいだ、きさまをさがしていたんだ。」

そこで、かりうどは、すぐと鉄砲をむけました。とたんに、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのままのんでいるのかもしれないし、まだなかで、たすかっているのかもしれないぞ、とおもいつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみをだして、ねむっているおおかみのおなかを、じょきじょき切りはじめました。

ふたはさみいれると、もう赤いずきんがちらと見えました。もうふたはさみいれると、女の子がとびだしてきて、

「まあ、あたし、どんなにびっくりしたでしょう。おおかみのおなかの中の、それはくらいったらなかったわ。」と、いいました。

やがて、おばあさんも、まだ生きていて、はいだしてきました。もう、よわって虫の息になっていました。赤ずきんちゃんは、でも、さっそく、大きなごろた石を、えんやらえんやはこんできて、おおかみのおなかのなかにいっぱい、つめました。やがて目がさめて、おおかみがとびだそうとしますと、石のおもみでへたばりました。

さあ、三人は大よろこびです。かりうどは、おおかみの毛皮をはいで、うちへもってかえりました。おばあさんは、赤ずきんちゃんのもってきたお菓子をたべて、ぶどう酒をのみました。それで、すっかりげんきをとにかえしました。でも、赤ずきんちゃんは、（もうもう、二どと、森の中で横道には行って、かけまわったりなんかやめましょう。おかあさんがいけないと、おっしやったのですものね。）と、かんがえました。

---

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※原題の「ROTK **Ä** PPCHEN」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「ROTKAPPCHEN」としました。

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

2005年11月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

アクセント符号付きラテン文字は、画像化して埋め込みました。

# 21.桃太郎

楠山正雄

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。まいにち、お  
じいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川へ洗<sup>か</sup>濯<sup>せんたく</sup>に行きました。

ある日、おばあさんが、川のそばで、せっせと洗<sup>せんたく</sup>濯<sup>せんたく</sup>をしていますと、川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>か  
ら、大きな桃<sup>もも</sup>が一つ、  
「ドンブラコッコ、スッコッコ。  
ドンブラコッコ、スッコッコ。」

なが<sup>なが</sup>き<sup>き</sup>  
と流<sup>なが</sup>れて来<sup>き</sup>ました。

「おやおや、これはみごとな桃<sup>もも</sup>だこと。おじいさんへのおみやげに、どれどれ、うちへ持<sup>も</sup>  
て帰<sup>かえ</sup>りましょう。」

おばあさんは、そう言いながら、腰<sup>こし</sup>をかがめて桃<sup>もも</sup>を取ろうとしましたが、遠<sup>とお</sup>く  
って手がとどきません。おばあさんはそこで、

みいず  
「あっちの水<sup>みいず</sup>は、かあらいぞ。

みいず  
こっちの水<sup>みいず</sup>は、ああまいぞ。

みいず<sup>こ</sup>  
かあらい水<sup>みいず</sup>は、よけて来い。

みいず<sup>こ</sup>  
ああまい水<sup>みいず</sup>に、よって来い。

うた<sup>もも</sup>  
と歌<sup>うた</sup>いながら、手をたたきました。すると桃<sup>もも</sup>はまた、  
「ドンブラコッコ、スッコッコ。  
ドンブラコッコ、スッコッコ。」

まえ なが き  
といいながら、おばあさんの 前へ流れて来ました。おばあさんにはこにこしながら、

はや ふたり わ た  
「早くおじいさんと二人で分けて食べましょう。」

い もも あ せんたくもの い  
と言って、桃をひろい上げて、洗濯物といっしょにたらいの中に入れて、え

かえ  
っちら、おっちら、かかえておうちへ帰りました。

ゆうがた せお かえ き  
夕方になってやっと、おじいさんは山からしばを背負って帰って来ました。

いまかえ  
「おばあさん、今帰ったよ。」

ま はや あ  
「おや、おじいさん、おかいんなさい。待っていましたよ。さあ、早くお上がんなさい。

あ  
いいものを上げますから。」

なん  
「それはありがたいな。何だね、そのいいものというのは。」

あ ま  
こういいながら、おじいさんはわらじをぬいで、上に上がりました。その間に、おばあ

とだな もも おも き  
さんは戸棚の中からさっきの桃を重そうにかかえて来て、

もも  
「ほら、ごらんなさいこの桃を。」

い  
と言いました。

もも か き  
「ほほう、これはこれは。どこからこんなみごとな桃を買って来た。」

か き きょう ひろ き  
「いいえ、買って来たのではありません。今日川で拾って来たのですよ。」

ひろ き  
「え、なに、川で拾って来た。それはいよいよめずらしい。」

い もも りょうて  
こうおじいさんは言いながら、桃を両手にのせて、ためつ、すがめつ、ながめ

もも わ  
ていますと、だしぬけに、桃はぼんと中から二つに割れて、



「おぎゃあ、おぎゃあ。」

いさ こえ あ あか げんき だ  
と 勇 ましいうぶ 声 を上げながら、かわいらしい 赤 さんが元 気よくとび出しま  
した。

「おやおや、まあ。」

おじいさんも、おばあさんも、びっくりして、ふたり こえ た  
二人 いっしょに 声 を立てました。

「まあまあ、わたしたちが、へいぜい、どうかして 子 供 が 一 人 ほしい、ほしいと言っ  
かみ くだ  
ていたものだから、きっと 神 さまがこの子をさずけて 下 さったにちがいない。」

おじいさんも、おばあさんも、うれしがって、い  
こう 言いました。

ゆ  
そこであわてておじいさんがお湯をわかすやら、おばあさんがむつきをそろえるやら、  
おお あか だ あ ゆ  
大 さわぎをして、 赤 さんを抱き上げて、うぶ湯をつかわせました。するといきなり、  
「うん。」

い あか だ  
と言いながら、 赤 さんは抱いているおばあさんの手をはねのけました。

なん げんき  
「おやおや、何 という元 気 のいい子だろう。」

い かお みあ  
おじいさんとおばあさんは、こう言って 顔 を見合わせながら、「あッは、あッは。」と  
わら  
おもしろそうに 笑 いました。

もも う ももたろう な  
そして 桃 の中から生まれた子だというので、この子に 桃 太 郎 という名をつけま  
した。

## 二

おじいさんとおばあさんは、それはそれはだいじにして ももたろう そだ  
桃 太 郎 を 育 てました。

ももたろう せいちょう こども  
桃 太 郎 はだんだん 成 長 するにつれて、あたりまえの 子 供 にくらべては、ず

からだ ちから つよ きんじよ むら  
つと 体 も大きいし、 力 がばかに 強 くて、すもうをとつても 近 所 の 村

ひとり き  
じゅうで、かなうものは一 人 もないくらいでしたが、そのくせ気だてはごくやさしくつ

こうこう  
て、おじいさんとおばあさんによく 孝 行 をしました。

ももたろう  
桃 太 郎 は十五になりました。

にほん くにじゅう ももたろう つよ  
もうそのじぶんには、日本 の 国 中 で、桃 太 郎 ほど 強 いものはないよ

ももたろう がいこく うで ちから  
うになりました。桃 太 郎 はどこか 外 国 へ出かけて、腕 いっぱい、 力 だ  
めしをしてみたくになりました。

がいこく しまじま かえ き  
するとそのころ、ほうぼう 外 国 の 島 々 をめぐって 帰 って来た人があって、

はなし すえ  
いろいろめずらしい、ふしぎなお 話 をした 末 に、

なんねん なんねん ふね とお とお うみ おに  
「もう 何 年 も 何 年 も 船 をこいで行くと、遠い 遠い 海 のはてに、鬼

しま ところ わる おに しろ す  
が 島 という 所 がある。悪い 鬼 どもが、いかめしいくろがねのお 城 の中に住

くに と とうと たからもの まも  
んで、ほうぼうの 国 からかすめ取った 貴 い 宝 物 を守っている。」

い  
と言いました。

ももたろう はなし おに しま い  
桃 太 郎 はこの 話 をきくと、その 鬼 が 島 へ行ってみたいくって、もう居ても

た かえ まえ  
立ってもいられなくなりました。そこでうちへ 帰 るとさっそく、おじいさんの 前 へ出  
て、

くだ  
「どうぞ、わたくしにしばらくおひまを 下 さい。」

い  
と言いました。

おじいさんはびっくりして、

まえ  
「お前 どこへ行くのだ。」

き  
と聞きました。

おに しま おに おも  
「鬼が島へ鬼せいばつに行こうと思います。」

ももたろう  
と桃太郎はこたえました。

「ほう、それはいさましいことだ。じゃあ行っておいで。」

い  
とおじいさんは言いました。

えんぼう  
「まあ、そんな遠方へ行くのでは、さぞおなかがおすきだろう。よしよし、おべんと

あ  
うをこしらえて上げましょう。」

い  
とおばあさんも言いました。

にわ うす  
そこで、おじいさんとおばあさんは、お庭のまん中に、えんやら、えんやら、大きな臼

もだ と  
を持ち出して、おじいさんがきねを取ると、おばあさんはこねどりをして、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。」

と、おべんとうのきびだんごをつきはじめました。

あ ももたろう あ  
きびだんごがうまそうにでき上がると、桃太郎のしたくもすっかりでき上がりま  
した。

ももたろう さむらい き じんばおり き かたな こし  
桃太郎はお侍の着るような陣羽織を着て、刀を腰にさして、

ふくろ さ もも え ぐんせん も  
きびだんごの袋をぶら下げました。そして桃の絵のかいてある軍扇を手を持  
って、

「ではおとうさん、おかあさん、行ってまいります。」

い あたま さ  
と言って、ていねいに頭を下げました。

おに たいじ  
「じゃあ、りっぱに鬼を退治してくるがいい。」

い  
とおじいさんは言いました。

き  
「気をつけて、けがをしないようにおしよ。」

い  
とおばあさんも言いました。

だいじょうぶ につぼんいち も  
「なに、大丈夫です、日本一のきびだんごを持っているから。」と

ももたろう い  
桃太郎は言って、

「では、ごきげんよう。」

げんき こえ で もん そと  
と元気な声をのこして、出ていきました。おじいさんとおばあさんは、門の外

た みおく  
に立って、いつまでも、いつまでも見送っていました。

### 三

ももたろう き くさ  
桃太郎はずんずん行きますと、大きな山の上に来ました。すると、草むらの中

から、「ワン、ワン。」と 声 をかけながら、 犬 が一ぴきかけて来ました。

ももたろう かえ いぬ  
桃太郎がふり返ると、犬はていねいに、おじぎをして、

ももたろう ももたろう  
「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

おに しま おに  
「鬼が島へ、鬼せいばつに行くのだ。」

こし さ なん  
「お腰に下げたものは、何でございます。」

につぼん  
「日本一のきびだんごさ。」

くだ とも  
「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

いぬ ももたろう  
犬 はきびだんごを一つもらって、桃 太 郎 のあとから、ついて行きました。

お い もり  
山を下りてしばらく行くと、こんどは 森 の中にはいりました。すると木の上から、「キ

ヤッ、キャッ。」とさけびながら、さる お き  
猿 が一ぴき、かけ下りて来ました。

ももたろう かえ さる  
桃 太 郎 がふり返ると、猿 はていねいに、おじぎをして、

ももたろう ももたろう  
「桃 太 郎 さん、桃 太 郎 さん、どちらへおいでになります。」  
とたずねました。

おに しま おに  
「鬼 が 島 へ 鬼 せいばつに行くのだ。」

こし さ なん  
「お 腰 に下げたものは、何 でございます。」

につぼん  
「日 本 一のきびだんごさ。」

くだ とも  
「一つ 下 さい、お 供 しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

さる  
猿 もきびだんごを一つもらって、あとからついて行きました。

お もり のはら そら  
山を下りて、森 をぬけて、こんどはひろい野 原 へ出ました。すると 空 の上で、「ケ

ン、ケン。」と鳴く 声 がして、きじが一羽とんで来ました。

ももたろう かえ  
桃 太 郎 がふり返ると、きじはていねいに、おじぎをして、

ももたろう ももたろう  
「桃 太 郎 さん、桃 太 郎 さん、どちらへおいでになります。」  
とたずねました。

おに しま おに  
「鬼 が 島 へ 鬼 せいばつに行くのだ。」

こし さ なん  
「お腰に下げたものは、何でございます。」

につぼんいち  
「日本一のきびだんごさ。」

くだ とも  
「一つ下さい、お供しましょう。」

こ  
「よし、よし、やるから、ついて来い。」

ももたろう  
きじもきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとからついて行きました。

いぬ さる けらい ももたろう  
犬と、猿と、きじと、これで三にんまで、いい家来ができたので、桃太郎

いさ た すす うみ  
はいよいよ勇み立って、またずんずん進んでいきますと、やがてひろい海ばたに  
出ました。

ふね  
そこには、ちょうどいいぐあいに、船が—そうつないでありました。

ももたろう けらい ふね の こ  
桃太郎と、三にんの家来は、さっそく、この船に乗り込みました。

こ て  
「わたくしは、漕ぎ手になりましょう。」

い いぬ ふね だ  
こう言って、犬は船をこぎ出しました。

と  
「わたくしは、かじ取りになりましょう。」

い さる すわ  
こう言って、猿がかじに座りました。

ものみ  
「わたくしは物見をつとめましょう。」

い た  
こう言って、きじがへさきに立ちました。

てんき さお うみ なみ た  
うららかないいお天気で、まっ青な海の上には、波一つ立ちませんでした。

いなづま はし や い はや  
稲妻が走るようだといおうか、矢を射るようだといおうか、目のまわるような速

ふね じかん はし おも た  
さで 船 は走って行きました。ほんの一時 間も 走 ったと 思 うころ、へさきに立っ

む しま たか  
て向こうをながめていたきじが、「あれ、あれ、島 が。」とさけびながら、ぱたぱたと 高

はおと そら あ おも かぜ き  
い羽 音をさせて、空 にとび上がったと 思 うと、スウツとまっすぐに 風 を切って、  
と  
飛んでいきました。

ももたろう た む み とお とお  
桃 太 郎 もすぐきじの立ったあとから向こうを見ますと、なるほど、遠 い 遠 い

うみ くも うす み ふね すす  
海 のはてに、ぼんやり 雲 のような 薄 ぐろいものが見えました。船 の 進 むにし

くも み しま かたち  
たがって、雲 のように見えていたものが、だんだんはっきりと 島 の 形 になって、  
あらわれてきました。

み み おに しま み  
「ああ、見える、見える、鬼 が 島 が見える。」

ももたろう いぬ さる こえ ばんざい ばんざい  
桃 太 郎 がこういうと、犬 も、猿 も、声 をそろえて、「万 歳、万 歳。」  
とさけびました。

み み おに しま ちか かた いわ たた おに しろ み  
見る見る 鬼 が 島 が 近 くなって、もう 硬 い岩 で 畳 んだ 鬼 のお城 が見

もん まえ み おに へいたい  
えました。いかめしいくろがねの 門 の 前 に見ほりをしている 鬼 の 兵 隊 のすが

み  
たも見えました。

しろ たか やね み  
そのお城 のいちばん 高 い屋根の上に、きじがとまって、こちらを見ていました。

なんねん なんねん い おに しま  
こうして 何 年 も、何 年 もこいで行かなければならないという 鬼 が 島 へ、ほ

ま き  
んの目をつぶっている間に来たのです。

#### 四

ももたろう いぬ さる ふね おか あ  
桃太郎は、犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にとび上がりました。

み おに へいたい み み  
見はりをしていた鬼の兵隊は、その見なれないすがたを見ると、びっくりして、  
もん に こ もん かた とき  
あわてて門の中に逃げ込んで、くろがねの門を固くしめてしまいました。その時

いぬ もん まえ た  
犬は門の前に立って、

にほん ももたろう まえ  
「日本の桃太郎さんが、お前たちをせいばいにおいでになったのだぞ。あける、あける。」

とどなりながら、ドン、ドン、 とびら おに こえ き  
扉をたたきました。鬼はその声を聞くと、ふ  
あ いっしょうけんめい お  
るえ上がって、よけい一生懸命に、中から押さえていました。

やね お もん お おに  
するときじが屋根の上からとび下りてきて、門を押さえている鬼どもの目をつつ  
おに に だ ま さる  
きまわりましたから、鬼はへいこうして逃げ出しました。その間に、猿がするする

たか いわかべ のぼ もん  
と高い岩壁をよじ登って行って、ぞうさなく門を中からあけました。

こえ あ ももたろう しゅじゅう しろ  
「わあッ。」とときの声を上げて、桃太郎の主従が、いさましくお城の

せ こ おに たいしょう おお けらい ひ つ  
中に攻め込んでいきますと、鬼の大將も大ぜいの家来を引き連れて、

ひとりひとり ふと てつ ぼう む  
一人一人、太い鉄の棒をふりまわしながら、「おう、おう。」とさげんで、向  
かってきました。

からだ おに  
けれども、体が大きいばかりで、いくじのない鬼どもは、さんざんきじに目を

いぬ む いた いた  
つつかれた上に、こんどは犬に向こうずねをくいつかれたといっちは、痛い、痛い

に さる かお ひ な だ てつ ぼう  
と逃げまわり、猿に顔を引っかかれたといっちは、おいおい泣き出して、鉄の棒



なに だ こうさん  
も 何 もほうり出して、降 参 してしまいました。

おに たいしょう ももたろう  
おしまいまでがまんして、たたかっていた 鬼 の 大 将 も、とうとう 桃 太 郎

く ももたろう おに せなか うまの  
に組みふせられてしまいました。 桃 太 郎 は大きな 鬼 の 背 中 に、馬 乗 りにま  
たがって、

こうさん  
「どうだ、これでも 降 参 しないか。」

お  
といて、ぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅう、押 さ え つ け ま し た。

おに たいしょう ももたろう だいきり き くび くる  
鬼 の 大 将 は、桃 太 郎 の 大 力 で 首 を し め ら れ て、も う 苦 し く つ

おお なみだ  
てたまりませんから、大 つぶの 涙 を ぼ ろ ぼ ろ こ ぼ し な が ら、

こうさん こうさん いのち たす くだ か  
「降 参 します、降 参 します。 命 だけはお 助 け 下 さい。その代わり

たからもの あ  
宝 物 を の こ ら ず さ し 上 げ ま す。」

い  
こ う 言 っ て、ゆ る し て も ら い ま し た。

おに たいしょう やくそく しろ がさ  
鬼 の 大 将 は 約 束 の と お り、お 城 から、か くれ み の に、か くれ 笠、

こ によいほうじゅ  
うちでの小づちに 如 意 宝 珠、そのほかさんごだの、たいまいだの、るりだの、

せかい とうと たからもの くるま つ だ  
世 界 で い ち ば ん 貴 い 宝 物 を 山 の よ う に 車 に 積 ん で 出 し ま し た。

ももたろう たからもの つ けらい  
桃 太 郎 は た く さ ん の 宝 物 を の こ ら ず 積 ん で、三にんの家 来 と い っ し ょ

ふね の かえ ふね はし はや  
に、また 船 に 乗 り ま し た。 帰 り は 行 き よ り も ま た 一 そ う 船 の 走 る の が 速 く つ

ま にほん くに つ  
て、間もなく日 本 の 国 に 着 き ま し た。

ふね おか つ たからもの つ くるま いぬ さき た  
船 が 陸 に 着 き ま す と、宝 物 を い っ ぱ い 積 ん だ 車 を、犬 が 先 に 立

ひだ つな ひ さる お  
って引き出しました。きじが 綱 を引いて、 猿 があとを押しました。

「えんやらさ、えんやらさ。」

おも ごえ すす  
三にんは 重 そうに、かけ 声 をかけかけ 進 んでいきました。

うちではおじいさんと、おばあさんが、かわるがわる、

ももたろう かえ  
「もう 桃 太 郎 が 帰 りそうなものだが。」

い い くび ま ももたろう  
と言い言い、 首 をのぼして待っていました。そこへ 桃 太 郎 が三にんのりっぱな

けらい たからもの ひ ようす かえ  
家 来 に、ぶんどりの 宝 物 を引かせて、さもとくいらしい様 子をして 帰 っ

き はな よろこ  
て来ましたので、おじいさんもおばあさんも、目も 鼻 もなくして 喜 びました。

につぽんいち  
「えらいぞ、えらいぞ、それこそ 日 本 一 だ。」

い  
とおじいさんは言いました。

なに  
「まあ、まあ、けががなくって、 何 よりさ。」

い  
とおばあさんは言いました。

ももたろう ときいぬ さる ほう む い  
桃 太 郎 は、その 時 犬 と 猿 ときじの 方 を向いてこう言いました。

おに  
「どうだ。 鬼 せいばつはおもしろかったなあ。」

いぬ まえあし た  
犬 はワン、ワンとうれしそうにほえながら、 前 足 で立ちました。

さる わら しろ は だ  
猿 はキャツ、キャツと 笑 いながら、 白 い歯をむき出しました。

な ちゅうがえ  
きじはケン、ケンと鳴きながら、くるくると 宙 返 りをしました。

そら あおあお は あ にわ さくら はな さ みだ  
空 は 青 々と晴れ上がって、お庭には 桜 の花が咲き 乱 れていました。

---

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

※「そのお城のいちばん高い」「こうして何年も」の行頭が下がっていないのは底本のままです。

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 22.桃太郎

芥川龍之介

一

むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい <sup>もも</sup>桃の木が一本あった。大きいと  
だけではいい足りないかも知れない。この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は <sup>だいち</sup>大地  
の底の <sup>よみ</sup>黄泉の国にさえ及んでいた。何でも天地 <sup>かいびやく</sup>開 <sup>ころ</sup>關 <sup>いざなぎ</sup>の頃おい、伊弉諾の  
みこと <sup>よもつひらさか</sup>やっ <sup>いかずち</sup>しりぞ <sup>み</sup>つぶて  
尊は黄 <sup>最</sup>津 <sup>平</sup>阪に八つの <sup>雷</sup>を却けるため、桃の実を <sup>礫</sup>に  
打ったという、—その <sup>かみよ</sup>神代 <sup>の</sup>桃の実はこの木の枝になっていたのである。

この木は世界の夜明以来、一万年に一度花を開き、一万年に一度実をつけていた。花は  
<sup>しんく</sup>真 <sup>きぬがさ</sup>紅の衣 <sup>おうごん</sup>蓋に <sup>ふさ</sup>黄金の流蘇を垂らしたようである。実は—実もまた大きい  
はいうを待たない。が、それよりも不思議なのはその <sup>さね</sup>実は核 <sup>の</sup>あるところに美しい  
<sup>あかご</sup>赤児 <sup>はら</sup>を一人ずつ、おのずから <sup>孕</sup>んでいたことである。

むかし、むかし、大むかし、この木は <sup>やまたに</sup>山 <sup>おお</sup>谷 <sup>る</sup>を <sup>いるい</sup>掩 <sup>つづ</sup>った枝に、累々と実を綴  
ったまま、静かに日の光りに浴していた。一万年に一度結んだ実は一千年の間は地へ落ち  
ない。しかしある寂しい朝、運命は一羽の <sup>やたがらす</sup>八咫鳥 <sup>になり</sup>になり、さっとその枝へおろして来  
た。と思うともう赤みのさした、小さい実を一つ <sup>ついで</sup>啄 <sup>くもきり</sup>み落した。実は雲霧の立ち  
のぼ <sup>はる</sup>昇 <sup>もちろん</sup>る中に <sup>みずけぶり</sup>遥 <sup>か</sup>下の谷川へ落ちた。谷川は <sup>勿</sup>論 <sup>峯々</sup>の間に白い <sup>水</sup>煙 <sup>を</sup>をなび  
かせながら、人間のいる国へ流れていたのである。

<sup>あかご</sup>赤児 <sup>はら</sup>を <sup>のち</sup>孕 <sup>んだ</sup>実 <sup>は</sup>深い山の奥を離れた <sup>後</sup>、<sup>のち</sup>、<sup>のち</sup> どういう人の手に拾われたか？

—それはいまさら話すまでもあるまい。谷川の末にはお婆さんが一人、日本中  
ばあ にほんじゅう  
の子供の知っている通り、柴刈りに行ったお爺さんの着物か何かを洗っていたのであ  
しばか じい  
る。……

二

ももたろう おに しま せいぼつ わけ  
桃から生れた桃太郎は鬼が島の征伐を思い立った。思い立った訣は  
なぜかという、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るの  
わんぱく あいそ  
がいやだったせいである。その話を聞いた老人夫婦は内心この腕白ものに愛想を  
はた たち じんばおり  
つかしていた時だったから、一刻も早く追出したさに旗とか太刀とか陣羽織と  
したく にゆうよう  
か、出陣の支度に入用のは云うなり次第に持たせることにした。のみなら  
ひょうろう ちゅうもん きびだんご  
ず途中の兵糧には、これも桃太郎の注文通り、黍団子さえこしらえ  
てやったのである。

ようよう と のぼ のらいぬ  
桃太郎は意気揚々と鬼が島征伐の途に上った。すると大きい野良犬が一匹、  
う  
饑えた眼を光らせながら、こう桃太郎へ声をかけた。

「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございます？」

にっぽんいち  
「これは日本一の黍団子だ。」

桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、そんなことは彼にも怪し  
あや  
かったのである。けれども犬は黍団子と聞くと、たちまち彼の側へ歩み寄った。

とも  
「一つ下さい。お伴しましょう。」

とっさ そろばん  
桃太郎は咄嗟に算盤を取った。

「一つはやられぬ。半分やろう。」

犬はしばらく <sup>ごうじょう</sup>強情に、「一つ下さい」を繰り返した。しかし桃太郎は何と

も「半分やろう」を <sup>てっかい</sup>撤回しない。こうなればあらゆる商売のように、<sup>しょせん</sup>所詮持た

ぬものは持ったものの意志に服従するばかりである。犬もとうとう <sup>たんそく</sup>嘆息しながら、黍

団子を半分貰う代りに、桃太郎の <sup>とも</sup>伴をすることになった。

桃太郎はその <sup>のち</sup>後犬のほかにも、やはり黍団子の半分为 <sup>えじき</sup>餌食に、<sup>さる</sup>猿や <sup>きじ</sup>雉を

<sup>けらい</sup>家来にした。しかし彼等は残念ながら、あまり <sup>なか</sup>仲の好い間がらではない。丈夫な <sup>きば</sup>牙

を持った犬は意気地のない猿を莫迦にする。黍団子の <sup>かんじょう</sup>勘定に <sup>すばや</sup>素早い猿はもっと

もらしい雉を莫迦にする。地震学などにも通じた雉は頭の <sup>にぶ</sup>鈍い犬を莫迦にする。——こう  
いういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れるこ  
とではなかった。

その上猿は腹が張ると、たちまち不服を <sup>とな</sup>唱え出した。どうも黍団子の半分くらいでは、

鬼が島征伐の伴をするのも考え物だといひ出したのである。すると犬は吠えたけりながら、

<sup>か</sup>いきなり猿を噛み殺そうとした。もし雉がとめなかったとすれば、猿は <sup>かに</sup>蟹の仇 <sup>あだう</sup>打ちを  
待たず、この時もう死んでいたかも知れない。しかし雉は犬をなだめながら猿に主従の道  
徳を教え、桃太郎の命に従えと云った。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲撃を避けた

後だったから、容易に雉の言葉を聞き入れなかった。その猿をとうとう <sup>とくしん</sup>得心させたの

は確かに桃太郎の手腕である。桃太郎は猿を見上げたまま、日の丸の <sup>おうぎ</sup>扇を使い使いわ  
ざと冷かにいい放した。

「よしよし、では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても <sup>たからもの</sup>宝物は一つも分けてや  
らないぞ。」

まるめ  
欲の深い猿は <sup>まるめ</sup>円い眼をした。

「宝物？ へええ、鬼が島には宝物があるのですか？」

「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる <sup>うちで こづち</sup> 打出の小槌 という宝物さえある。」

「ではその打出の小槌から、幾つもまた打出の小槌を振り出せば、一度に何でも手にはい <sup>わけ</sup> わけ 訣 ですね。それは耳よりな話です。どうかわたしもつれて行って下さい。」

桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の <sup>みち</sup> 途 を急いだ。

### 三

鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山ばかりだった <sup>わけ</sup> 訣 ではな <sup>やし そび</sup> い。実は椰子の <sup>ごくらくちょう さえず</sup> 聳えたり、 <sup>てんねん</sup> 極楽鳥の <sup>てんねん</sup> 囀ったりする、美しい <sup>てんねん</sup> 天然の

<sup>らくど</sup> 楽土だった。こういう <sup>せい う</sup> 楽土に <sup>せい う</sup> 生を享けた鬼は勿論平和を愛していた。いや、鬼という

ものは元来我々人間よりも <sup>きょうらく</sup> 享乐的に出来上った種族らしい。 <sup>こぶ</sup> 瘤取りの話に出て

来る鬼は一晩中踊りを踊っている。一寸法師 <sup>いっすんぼうし</sup> [＃ルビの「いっすんぼうし」は底

本では「いっすんぼうし」の話に出てくる鬼も一身の危険を顧みず、 <sup>ものもう</sup> 物詣での姫君

に見とれていたらしい。なるほど <sup>おおえやま しゅてんどうじ らしょうもん</sup> 大江山の <sup>おおえやま しゅてんどうじ らしょうもん</sup> 酒顛童子や <sup>おおえやま しゅてんどうじ らしょうもん</sup> 羅生門の

<sup>いばらぎどうじ きだい</sup> いばらぎどうじ <sup>いばらぎどうじ きだい</sup> きだいは <sup>いばらぎどうじ きだい</sup> 稀代の悪人のように思われている。しかし茨木童子などは我々の銀

座を愛するように <sup>すざくおおじ</sup> 朱雀大 <sup>すざくおおじ</sup> 路を愛する余り、時々そつと羅生門へ <sup>あら</sup> 姿を <sup>あら</sup> 露わしたので

はないであろうか？ <sup>いわや</sup> 酒顛童子も大江山の <sup>いわや</sup> 岩屋に酒ばかり飲んでいたのは確かである。

<sup>にょにん</sup> その <sup>しんぎ</sup> 女人を奪って行ったというのは— <sup>しんぎ</sup> 真偽はしばらく問わないにしろ、女人自身 <sup>しんぎ</sup> のいう所に過ぎない。女人自身のいう所をことごとく <sup>しんぎ</sup> 真実と認めるのは、—わたしはこ

の二十年来、こういう疑問を抱いている。あの 頼 光 や 四 天 王 はいずれも多少気

すうはいか  
違いじみた女性 崇 拝 家 ではなかったであろうか？

うち こと ひ  
鬼は熱帯的風景の 中 に 琴 を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を歌ったり、  
すこぶ あんのん はた かも  
頗 る 安 穩 に暮らしていた。そのまた鬼の妻や娘も 機 を織ったり、酒を 醸 し

らん こしら  
たり、 蘭 の花束を 拵 えたり、我々人間の妻や娘と少しも変わらずに暮らしていた。殊

きば ぬ も  
にもう髪の高い、 牙 の脱けた鬼の母はいつも孫の守りをしながら、我々人間の恐ろしさ  
を話して聞かせなどしていたものである。――

いたずら  
「お前たちも 悪 戯 をすると、人間の島へやってしまうよ。人間の島へやられた鬼はあ  
の昔の酒顛童子のように、きっと殺されてしまうのだからね。え、人間というものかい？

つのは なまじろ  
人間というものは 角 の生えない、 生 白 い顔や手足をした、何ともいわれず気味の

なまり  
悪いものだよ。おまけにまた人間の女と来た日には、その生白い顔や手足へ一面に 鉛 の

こ い  
粉をなすっているのだよ。それだけならばまだ好いのだがね。男でも女でも同じように、

やきもち うぬぼれ  
はいうし、欲は深いし、 焼 餅 は焼くし、 己 惚 は強いし、仲間同志殺し合うし、

どろぼう  
火はつけるし、 泥 棒 はするし、手のつけようのない毛だものなのだよ……」

#### 四

かなぼう  
桃太郎はこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与えた。鬼は 金 棒 を忘れたな

ていてい そび やし うおうざおう  
り、「人間が来たぞ」と叫びながら、 亭 々 と 聳 えた椰子の間を 右 往 左 往 に逃

まど  
げ 惑 った。

「進め！ 進め！ 鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまえ！」



桃太郎は桃の旗<sup>はた</sup>を片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、犬<sup>いぬ</sup>猿<sup>さる</sup>雉<sup>きじ</sup>の三匹に号令した。犬猿雉の三匹は仲の好い家来<sup>けらい</sup>ではなかったかも知れない。が、饑えた動物ほど、忠勇無<sup>むそう</sup>双の兵卒の資格を具えているものはないはずである。彼等は皆あらしのように、逃げまわる鬼を追いまわした。犬はただ一<sup>ひとか</sup>噛みに鬼の若者を噛み殺した。雉も鋭いくちばし<sup>くちばし</sup>に鬼の子供を突き殺した。猿も——猿は我々人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を絞殺<sup>しめころ</sup>す前に、必ず凌辱<sup>りょうじょく</sup>を恣<sup>ほしい</sup>にした。……

あらゆる罪悪の行われた後<sup>のち</sup>、とうとう鬼の曾長<sup>しゅうちょう</sup>は、命をとりとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参<sup>こうさん</sup>した。桃太郎の得意は思うべしである。鬼が島はもう昨日<sup>きのう</sup>のように、極楽鳥<sup>ごくらくちょう</sup>の囀<sup>さえず</sup>る楽土ではない。椰子の林は至るところに鬼のしがい<sup>ま</sup>ま死骸<sup>けらい</sup>を撒き散らしている。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来<sup>けらい</sup>を従えたまま、ひらぐも<sup>ひらぐも</sup>おごそかにこういい渡した。

「では格別の憐愍<sup>れんびん</sup>により、貴様<sup>きさま</sup>たちの命は赦<sup>ゆる</sup>してやる。その代りに鬼が島のたからもの<sup>たからもの</sup>けんじょう宝<sup>けんじょう</sup>物<sup>けんじょう</sup>は一つも残らず献上<sup>けんじょう</sup>するのだぞ。」

「はい、献上致します。」

「なおそのほかに貴様の子供を人質<sup>ひとぢ</sup>のためにさし出すのだぞ。」

「それも承知致しました。」

鬼の曾長<sup>ひたい</sup>はもう一度額<sup>ひたい</sup>を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か無礼<sup>ぶれい</sup>でも致したため、御征伐<sup>ごせいばつ</sup>を受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういふ無礼を致し

がてん あか わけ  
たのやら、とんと合点が参りませぬ。ついではその無礼の次第をお明し下さる訣に  
は参りますまいか？」

ゆうぜん うなず  
桃太郎は悠然と頷いた。

につぼんいち  
「日本一 [#ルビの「につぼんいち」は底本では「につぼんいち」]の桃太郎は犬

かか  
猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」

さん わけ  
「ではそのお三かたをお召し抱えなすったのはどういう訣でございますか？」

きびだんご  
「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子をやっても召し抱えたのだ。  
—どうだ？ これでもまだわからないといえ、貴様たちも皆殺してしまうぞ。」

うしろ さが ていねい  
鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど後へ飛び下ると、いよいよまた丁寧

じぎ  
お時儀をした。

## 五

日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取った鬼の子供に宝物の車を引かせながら、  
とくとく がいせん にほんじゅう  
得々と故郷へ凱旋した。—これだけはもう日本中の子供のとうに知っ

わけ  
ている話である。しかし桃太郎は必ずしも幸福に一生を送った訣ではない。鬼の子供は

いちにんまえ か ちくでん  
一人前になると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼が島へ逐電した。のみ

やかた  
ならず鬼が島に生き残った鬼は時々海を渡って来ては、桃太郎の屋形へ火をつけたり、

ねくび  
桃太郎の寝首をかこうとした。何でも猿の殺されたのは人違いだったらしいという

うわさ かさ がさ たんそくも  
噂である。桃太郎はこういう重ね重ねの不幸に嘆息を洩らさずにはいられ  
なかった。

しゅうねん  
「どうも鬼というものの執念の深いのには困ったものだ。」

だいおん け  
「やっと命を助けて頂いた御主人の大恩さえ忘れるとは怪しからぬ奴等でございます。」

じゅうめん くや うな  
犬も桃太郎の渋面を見ると、口惜しそうにいつも唸ったものである。

いそ つきあか  
その間も寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帯の月明りを浴びた鬼の若者が五六人、

やし やさ  
鬼が島の独立を計画するため、椰子の実に爆弾を仕こんでいた。優しい鬼の娘たちに恋

ちゃわん かがや  
をすることさえ忘れたのか、黙々と、しかし嬉しそうに茶碗ほどの目の玉を赫かせながら。……

## 六

くもきり こんにち  
人間の知らない山の奥に雲霧を破った桃の木は今日もなお昔のように、  
るい ゐ み はら  
累々と無数の実をつけている。勿論桃太郎を孕んでいた実だけはとうに谷川を流  
れ去ってしまった。しかし未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。

やたがらす こずえ あら  
あの大きい八咫鴉は今度はいつこの木の梢へもう一度姿を露わすであろう？  
ああ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。……

(大正十三年六月)

---

底本：「芥川龍之介全集 5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 2 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 4 月 10 日第 6 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 8 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

[#...] は、入力者による注を表す記号です。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

## 23.一寸法師

楠山正雄

一

せつつのくに なにわ ところ ふうふ もの す  
むかし、摂津国の難波という所に、夫婦の者が住んでおりました。

こども ひとり な すみよし みょうじん  
子供が一人も無いものですから、住吉の明神さまに、おまいりをして  
は、

こども ひとり くだ ゆび ちい  
「どうぞ子供を一人おさずけ下さいまし。それは指ほどの小さな子でもよろ  
しゅうございますから。」

いっしょうけんめい ねが もう  
と一生懸命にお願い申しました。

ま かみ みも  
すると間もなく、お上さんは身持ちになりました。

ねが  
「わたしどものお願いがかなったのだ。」

ふうふ こども う きょう あす ま  
と夫婦はよろこんで、子供の生まれる日を、今日か明日かと待ちかまえていま  
した。

かみ ちい あか う ちい  
やがてお上さんは小さな男の赤ちゃんを生みました。ところがそれがまた小

ゆび  
さいといって、ほんとうに指ほどの大きさしかありませんでした。

ゆび こども もう あ ゆび こども  
「指ほどの大きさの子供でも、と申し上げたら、ほんとうに指だけの子供を

みょうじん くだ  
明神さまが下さった。」

ふうふ わら こども そだ  
と夫婦は笑いながら、この子供をだいじにして育てました。ところがこの子

ゆび ふうふ  
は、いつまでたってもやはり指だけより大きくはなりませんでした。夫婦もあきらめ

いっすんぼうし なまえ いっすんぼうし  
て、その子に一寸法師と名前をつけました。一寸法師は五つになって

せい おな こ  
も、やはり背がのびません。七つになっても、同じことでした。十を越しても、やは

いっすんぼうし いっすんぼうし おうらい ある きんじょ  
り一寸法師でした。一寸法師が往來を歩いていると、近所の

こども あつ  
子供たちが集まってきて、

ある  
「やあ、ちびが歩いている。」

ころ  
「ふみ殺されるなよ。」

「つまんでかみつぶしてやろうか。」

「ちびやい。ちびやい。」

くちぐち いっすんぼうし  
と口々にいって、からかいました。一寸法師はだまって、にこにこしてい  
ました。

## 二

いっすんぼうし いっすんぼうし  
一寸法師は十六になりました。ある日一寸法師は、おとうさんとおか

まえ  
あさんの前へ出て、

ひま くだ  
「どうかわたくしにお暇を下さい。」

といいました。おとうさんはびっくりして、  
「なぜそんなことをいうのだ。」

き いっすんぼうし かお  
と聞きました。一寸法師はとくいらしい顔をして、

きょうと のぼ おも  
「これから京都へ上ろうと思います。」

といいました。

きょうと のぼ  
「京都へ上ってどうするつもりだ。」

きょうと てんし につぼんいち みやこ  
「京 都 は 天 子 さ ま の い ら っ し ゃ る 日 本 一 の 都 で す し、おもしろいし  
ごとがたくさんあります。わたくしはそこへ行って、<sup>うん</sup> 運 だめしをしてみようと思いま  
す。」

き  
そう聞くとおとうさんはうなずいて、  
「よしよし、それなら行っておいで。」

ゆる くだ  
と許して下さいました。

いっすんぼうし たい たび したく  
一寸法師は大へんよろこんで、さっそく旅の支度にかかりました。ま

ばり ぼんいただ むぎ え  
ずおかあさんにぬい針を一本頂いて、麦わらで柄とさやをこしらえて、

かたな こし あたら ふね あたら  
刀にして腰にさしました。それから新しいおわんのお舟に、新しいお

そ すみよし はま ふなで  
はしのかいを添えて、住吉の浜から舟出をしました。おとうさんとおかあさん

はま みおく た くだ  
は浜べまで見送りに立って下さいました。

「おとうさん、おかあさん、では行ってまいります。」

いっすんぼうし ふね だ  
と一寸法師がいて、舟をこぎ出しますと、おとうさんとおかあさんは、

たっしや しゅっせ  
「どうか達者で、出世をしてくれ。」

といました。

しゅっせ  
「ええ、きつと出世をいたします。」

いっすんぼうし  
と、一寸法師はこたえました。

ふね まいにちすこ よどがわ のぼ ふね  
おわんの舟は毎日少しずつ淀川を上って行きました。しかし舟が

ちい すこ かぜ つよ ふ あめ ふ みず ま  
小さいので、少し風が強くと吹いたり、雨が降って水かさが増したりする

ふね かえ とき  
と、舟はたびたびひっくり返りそうになりました。そういう時には、しかたがない

いしがき あいだ はし かげ ふね と やす  
ので、石垣の間や、橋ぐいの陰に舟を止めて休みました。

ふう ひとつき きょうと ちか とぼ  
こんな風にして、一月もかかって、やっとのことで、京都に近い鳥羽と

ところ つ とぼ ふね きし あ きょうと  
いう所に着きました。鳥羽で舟から岸に上がると、もうすぐそこは京都の

まち ごじょう しじょう さんじょう まち  
町でした。五条、四条、三条と、にぎやかな町がつづいて、ひっ

うま くるま とお  
きりなしに馬や車が通って、おびたしい人が出ていました。

きょうと につぼんいち みやこ  
「なるほど京都は日本一の都だけあって、にぎやかなものだなあ。」

いっすんぼうし おうらい げた は ある  
と、一寸法師は往來の人の下駄の歯をよけて歩きながら、しきりに

かんしん  
感心していました。

さんじょう く やしきた なら  
三条まで来ると、たくさんりっぱなお屋敷が立ち並んだ中に、いちばん目

もんがま やしき いっすんぼうし  
にたったりっぱな門構えのお屋敷がありました。一寸法師は、

しゅっせ けらい  
「なんでも出世をするには、まずだれかえらい人の家来になって、それからだん

あ やしき ちが  
だんにし上げなければならない。これこそいちばんえらい人のお屋敷に違いない。」

おも もん はい ひろ じやりみち  
と 思って、のこのこ門の中に入っていました。広い砂利道をさんざん

ある げんかん まえ た さんじょう  
歩いて、大きな玄関の前に立ちました。なるほどここは三条の

さいしょうどの は だいじん やしき  
宰相殿とって、羽ぶりのいい大臣のお屋敷でした。

いっすんぼうし こえ  
そのとき一寸法師は、ありったけの大きな声で、

くだ  
「ごめん下さい。」

き  
とどなりました。でも聞こえないとみえて、だれも出てくるものがないので、こんどは



こえ だ  
いっそう大きな 声 を出して、

くだ  
「ごめん 下 さい。」

とどなりました。

ど いっすんぼうし  
三度めに 一 寸 法 師 が、

くだ  
「ごめん 下 さい。」

とき げんかん  
とどなった 時、ちょうどどこかへおでましになるつもりで、玄 関 までおいでにな

さいしょうどの こえ き  
った 宰 相 殿 が、その 声 を聞きつけて、出てごらんになりました。しかしだれ

げんかん い おも みまわ  
も玄 関 には居ませんでした。ふしぎに 思 っ てそこらをお見 回 しになりますと、

くつ あしだ かげ まめつぶ おとこ ひとり そ み  
靴 ぬぎにそろえてある足 駄 の 陰 に、豆 粒 のような 男 が一人、反り身

た さいしょうどの  
になってつつ立っていました。宰 相 殿 はびっくりして、

まえ いまよ  
「お前 か、今 呼んだのは。」

「はい、わたくしでございます。」

まえ なにもの  
「お前は 何 者 だ。」

なにわ いっすんぼうし  
「難 波 からまいりました 一 寸 法 師 でございます。」

いっすんぼうし ちが やしき き なん  
「なるほど 一 寸 法 師 に 違 いない。それでわたしの屋 敷 に来たのは 何 の  
よう  
用 だ。」

しゅっせ おも きょうと のぼ  
「わたくしは 出 世 がしたいと 思 っ て、京 都 へわざわざ 上 っ てまいりました。

いっしょうけんめいはたら やしき つか くだ  
どうぞ 一 生 懸 命 働 きますから、お屋 敷 でお使 いなさって 下 さい  
まし。」

いっすんぼうし さいしょうどの わら  
一寸法師はこういって、ぴよこんとおじぎをしました。宰相殿は笑  
いながら、

こぞう つか  
「おもしろい小僧だ。よしよし使ってやろう。」

やしき お  
とおっしゃって、そのままお屋敷に置いておやりになりました。

### 三

いっすんぼうし さいしょうどの やしき つか  
一寸法師は宰相殿のお屋敷に使われるようになってから、  
からだ ちい はたら たい りこう き  
体こそ小さくても、まめまめしくよく働きました。大へん利口で、気が  
き  
利いているものですから、みんなから、

いっすんぼうし いっすんぼうし  
「一寸法師、一寸法師。」

とって、かわいがられました。

やしき ひめ いっすんぼうし  
このお屋敷に十三になるかわいらしいお姫さまがありました。一寸法師は

ひめ だいす ひめ いっすんぼうし たい き い  
このお姫さまが大好きでした。お姫さまも一寸法師が大そうお気に入り  
りで、どこへお出かけになるにも、

いっすんぼうし いっすんぼうし  
「一寸法師や。一寸法師や。」

とも つ なか なん  
とって、お供にお連れになりました。だんだん仲がよくなるうち、何といっ

ふたり こども ともだち ときどき  
ても二人とも子供だものですから、いつかお友達のようになって、時々

あ な わら  
けんかをしたり、いたずらを合して、泣いたり笑ったりすることもありました。ある

とき いっすんぼうし ま いっすんぼうし  
時またけんかをして、一寸法師が負けました。くやしまぎれに一寸法師

ひめ ひるね じぶん との  
は、そっとお姫さまが昼寝をしておいでになるすきをうかがって、自分が殿さ

いただ かし のこ た のこ こな ひめ  
まから 頂 いたお菓子を 残らず食べてしまって、 残った粉をお姫さまの

ねむ くち じぶん  
眠っている口のはたになすりつけておきました。そして自分からはからっぽになった

かし ふくろ ても にわ ま なか こえ  
お菓子の袋を手を持って、お庭の真ん中に出て、わざと大きな声でおいお

な こえ き との えんがわ  
泣いておりました。その声を聞きつけて、殿さまが縁側へ出ていらして、

いっすんぼうし  
「一寸法師、どうした。どうした。」

き  
とお聞きになりました。

いっすんぼうし かな こえ  
すると一寸法師は、さも悲しそうな声をして、

ひめ との いただ かし と た  
「お姫さまがわたくしをぶって、殿さまから頂いたお菓子をみんな取って食べておしまいになりました。」

といました。

との ひめ へや ひめ  
殿さまはびっくりして、お姫さまのお部屋へ行ってごらんになりますと、お姫さ

くち かし こな ねむ  
まは口のはたにいっぱいお菓子の粉をつけて、眠っておいでになりました。

との たい よ  
殿さまは大そうおおこりになって、おかあさんと呼んで、

なん ひめ ぎょうぎ わる  
「何だって、姫にあんな行儀の悪いまねをさせるのだ。」

すこ わる  
ときびしくおしかりになりました。するとこのおかあさんは、少しいじの悪い人だ

ひめ じぶん たい  
ったものですから、お姫さまのために自分がしかられたのを大そうくやしがりま

した。そしてくやしまぎれに、ありもしないことをいろいろとこしらえて、お姫さまが

へいぜいだいじん むすめ にあ ぎょうぎ わる なら  
平生大臣のお娘に似合わず、行儀の悪いことをさんざんに並

べて、

と き  
「いくら止めても、ばかにしていうことをちっとも聴かないのです。」

とおいつけになりました。

さいしょうどの いっすんぼうし ひめ  
宰相殿 はなおなおおこりになって、一寸法師 にいっつけて、お姫

やしき おだ とお ところ す  
さまをお屋敷から追い出して、どこか遠い所へ捨てさせました。

いっすんぼうし だ ひめ おだ  
一寸法師 はとんだことをいい出して、お姫さまが追い出されるようになった

き どく ひめ とも  
ので、すっかり気の毒になってしまいました。そこでどこまでもお姫さまのお供を

なにわ つ おも とぼ  
して行くつもりで、まず難波のおとうさんのうちへお連れしようと思つて、鳥羽か

ふね の ま ふね かわ くだ  
ら舟に乘りました。すると間もなく、ひどいしけになって、舟はずんずん川を下

うみ ほう なが かぜ ふ なが  
って海の方へ流されました。それから風のままにまにまに吹き流されて、とうとう

みっかみばんなみ く よっか しま つ  
三日三晩波の上で暮らして、四日めに一つの島に着きました。

しま いま はなし き はな  
その島には今まで話に聞いたこともないようなふしぎな花や木がたくさん

す すがた み  
あって、いったい人が住んでいるのかいないのか、いっこうに人らしいものの姿は見  
えませんでした。

いっすんぼうし ひめ つ しま あ ある  
一寸法師はお姫さまを連れて島に上がって、きよろきよろしながら歩

いて行きますと、いつどこから出てきたともなく、二匹の鬼がそこへひょっこり飛び

だ ひめ ひとくち た  
出してきました。そしていきなりお姫さまにとびかかって、ただ一口に食べよう

ひめ き とお み  
としました。お姫さまはびっくりして、気が遠くなってしまうました。それを見ると、

いっすんぼうし れい ばり かたな ひぬ おに  
一寸法師は、例のぬい針の刀をきらりと引き抜いて、ぴよこんと鬼

まえ と こえ ふ た  
の前へ飛んで出ました。そしてありったけの大きな声を振り立てて、

かた おも さんじょう さいしょうどの ひめぎみ  
「これこれ、このお方をだれだと思ふ。三条の宰相殿の姫君

しつれい いっすんぼうし しょうち  
だぞ。うっかり失礼なまねをすると、この一寸法師が承知しないぞ。」

ひき おに こえ おどろ み あし  
とどなりました。二匹の鬼はこの声に驚いて、よく見ますと、足もとに

まめ つぶ こおとこ かえ た おに  
豆っ粒のような小男が、いぼり返って、つつ立っていました。鬼はからか

わら  
らと笑いました。

なん まめ つぶ  
「何だ。こんな豆っ粒か。めんどくさい、のんでしまえ。」

はや ぴき おに いっすんぼうし あ  
というが早いか、一匹の鬼は、一寸法師をつまみ上げて、ぱっくり

ひとくち いっすんぼうし かたな も  
一口にのんでしまいました。一寸法師は刀を持ったまま、するすると

おに こ はい  
鬼のおなかの中へすべり込んでいきました。入るとおなかの中をやたらにかけずり

まわ かたな まわ おに くる  
回りながら、ちくりちくりと刀でついて回りました。鬼は苦しがつて、

「あッ、いたい。あッ、いたい。こりやたまらん。」

じ まわ くる いき  
と地びたをころげ回りました。そして苦しまざれにかつと息をするはずみに、

いっすんぼうし くち そと とだ かたな ふ  
一寸法師はまたぴよこりと口から外へ飛び出しました。そして刀を振

あ おに き ぴき おに  
り上げて、また鬼に切っかかりました。するともう一匹の鬼が、

なまいき  
「生意気なちびだ。」

いっすんぼうし  
といて、また一寸法師をつかまえて、あんぐりのんでしまいました。のまれ

いっすんぼうし おど あ あな はな  
ながら一寸法師は、こんどはすばやく躍り上がって、のどの穴から鼻の

あな め あ おに めだま  
穴へ抜けて、それから眼のうしろへはい上がって、さんざん鬼の目玉をつつつき

おに おも  
ました。すると 鬼 は 思 わず、

「いたい。」

と あ いっすんぼうし め じ  
とさけんで、飛び上がったはずみに、一寸法師は、目の中からひょいと地びた

とお おに めだま ぬ だ おも  
に飛び下りました。鬼は目玉が抜け出したかと思っ、びっくりして、

たい たい  
「大へん、大へん。」

あと み に だ ぴき おに  
と、後をも見ずに逃げ出しました。するともう一匹の鬼も、

に に  
「こりやかなわん。逃げろ、逃げろ。」

あと お  
と後を追って行きました。

よわむし  
「はッは、弱虫め。」

いっすんぼうし に おに すがた きみ  
と、一寸法師は、逃げて行く鬼のうしろ姿を気味よさそうにながめて、  
「やれやれ、とんだことでした。」

たお ひめ だ お かいほう  
といいながら、そこに倒れているお姫さまを抱き起こして、しんせつに介抱し

ひめ しょうき た あ  
ました。お姫さまがすっかり正気がついて、立ち上がろうとしますと、すそから

ちい っち お  
ころころと小さな槌がころげ落ちました。

「おや、ここにこんなものが。」

ひめ ひろ み  
と、お姫さまがそれを拾ってお見せになりました。

いっすんぼうし っち も  
一寸法師はその槌を手に持って、

おに わす う で こづち ふ なん  
「これは鬼の忘れて行った打ち出の小槌です。これを振れば、何でもほしいと

おも で いま せい う だ  
思うものが出てきます。ごらんなさい、今ここでわたしの背を打ち出してお目に  
かけますから。」

いっすんぼうし う で こづち ふ あ  
こういって、一寸法師は、打ち出の小槌を振り上げて、

いっすんぼうし まえ せい  
「一寸法師よ、大きくなれ。あたり前の背になれ。」

どふ せい しゃく どふ じゃく  
といいながら、一度振りますと背が一尺のび、二度振りますと三尺のび、

ど しゃく ちか おおおとこ  
三度めには六尺に近いらつぱな大男になりました。

ひめ め  
お姫さまはそのたんびに目をまるくして、

「まあ、まあ。」

とっておいでになりました。

いっすんぼうし た  
一寸法師は大きくなったので、もううれしくってうれしくって、立ったりしゃ

ふむ まえ み じぶん じぶん からだ  
がんだり、うしろを振り向いたり、前を見たり、自分で自分の体をめずら

ひととお きゅう みつかみばん  
しそうにながめていましたが、一通りながめてしまうと、急に三日三晩な

た おも だ う で  
んにも食べないで、おなかのへっていることを思い出しました。そこでさっそく打ち出

こづち ふ た ふだ ひめ  
の小槌を振って、そこへ食べきれないほどのごちそうを振り出して、お姫さまと

ふたり なか た  
二人で仲よく食べました。

た きんぎん  
ごちそうを食べてしまうと、こんどは金銀、さんご、るり、めのうと、いろいろの

たから う だ ふね う だ  
宝を打ち出しました。そしていちばんおしまいに、大きな舟を打ち出して、

たからもの こ つ こ ひめ ふたり ふね の ま  
宝物を残らずそれに積み込んで、お姫さまと二人、また舟に乗って、間

につぼん くに かえ き  
もなく日本の国へ帰って来ました。

#### 四

いっすんぼうし さいしょうどの ひめ つ おに しま  
一寸法師が宰相殿のお姫さまを連れて、鬼が島から  
たからもの と かえ き せけん  
宝物を取って、めでたく帰って来たといううわさが、すぐと世間にひろまっ  
てんし みみ はい  
て、やがて天子さまのお耳にまで入りました。

てんし とき いっすんぼうし め  
そこで天子さまは、ある時、一寸法師をお召しになってごらんになります  
けだか ようす わかもの もの  
と、なるほど気高い様子をしたりっぱな若者でしたから、これはただ者では  
せんぞ しら いっすんぼうし  
あるまいと、よくよく先祖をお調べさせになりました。それで一寸法師のお  
ほりかわ ちゅうなごん つみ いなか お  
じいさんが、堀河の中納言というえらい人で、むじつの罪で田舎に追わ  
でき いっすんぼうし  
れて出来た子が、一寸法師のおとうさんで、それからおかあさんという人も、や  
ふしみ しょうしょう たね わ  
はりもとは伏見の少将といった、これもえらい人の種だということが分か  
りました。

てんし いっすんぼうし くらい ほりかわ  
天子さまはさっそく、一寸法師に位をおさずけになって、堀河の  
しょうしょう よ ほりかわ しょうしょう あらた  
少将とお呼ばせになりました。堀河の少将は、改めて  
さんじょうさいしょうどの ゆる ひめ よめ  
三条宰相殿のお許しをうけて、お姫さまをお嫁さんにもらいま  
せつつのくに なにわ よ よ  
した。そして摂津国の難波から、おとうさんやおかあさんと呼び寄せて、うち  
じゅう あつ たの よ おく  
中がみんな集まって、楽しく世の中を送りました。



---

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和 58）年 6 月 10 日第 1 刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006 年 7 月 28 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 24.アインシュタイン

寺田寅彦

一

この間日本へ立寄ったバートランド・ラッセルが、「今世界中で一番えらい人間はアインシュタインとレニンだ」というような意味の事を誰かに話したそうである。この「えらい」というのがどういう意味のえらいのであるかが聞きたいのであったが、遺憾ながらラッセルの使った原語を聞き洩らした。

なるほど二人ともに革命家である。ただレニンの仕事はどこまでが成効であるか失敗であるか、おそらくはこれは誰にもよく分らないだろうが、アインシュタインの仕事は少なくとも大部分たしかに成効である。これについては世界中の信用のある学者の最大多数が裏書をしている。仕事が科学上の事であるだけにその成果は極めて鮮明であり、従ってそれを仕遂げた人の科学者としてのえらさもまたそれだけはっきりしている。

レニンの仕事は科学でないだけに、その人のその仕事の遂行者としてのえらさは必ずしも目前の成果のみで計量する事が出来ない。それにもかかわらずレニンのえらさは一般の世人に分りやすい種類のものである。取扱っているものが人間の社会で、使っているものが兵隊や金である。いずれも科学的には訳の分らないものであるが、ただ世人の生活に直接なものであるだけに、事柄が誰にも分りやすいように思われる。

これに反してアインシュタインの取扱った対象は抽象された時と空間であって、使った道具は数学である。すべてが論理的に明瞭なものであるにかかわらず、使っている「国語」が世人に親しくないために、その国語に熟しない人には容易に食べ付けない。それで彼の

こか

仕事を正当に理解し、彼のえらさを如実に估価するには、一通りの数学的素養のある人でもちよつと骨が折れる。

かえ

到底分らないような複雑な事は世人に分りやすく、比較的簡単明瞭な事の方が却って分りにくいというおかしな結論になる訳であるが、これは「分る」という言葉の意味の使い分けである事は勿論である。

アインシュタインの仕事の偉大なものであり、彼の頭脳が飛び離れてえらいという事はもはや早くから一部の学者の間には認められていた。しかし一般世間に持て囃されるようになったのは昨今の事である。遠い恒星の光が太陽の近くを通過する際に、それが重力の場の影響のために極めてわずかに曲るだろうという、誰も思いもかけなかった事実を、彼の理論

610

名言思想学会

無断転載・複製を禁止します

の必然の結果として鉛筆のさきで割り出し、それを予言した。それが云わば敵国の英国の学者の日蝕観測の結果からある程度まで確かめられたので、事柄は世人の眼に一種のロマンチックな色彩を帯びるようになって来た。そして人々はあたかも急に天から異人が降っ

て来たかのように驚異の <sup>まなこ</sup> 眼 を彼の身边に集注した。

彼の理論、ことに重力に関する新しい理論の実験的証左は、それがいずれも極めて機微なものであるだけにまだ極度まで完全に確定されたとは云われないうちかもしれない。しかし万一将来の実験や観測の結果が、彼の現在の理論に多少でも不利なような事があつたとし

ても、彼の物理学者としてのえらさにはそのために少しの <sup>きず</sup> 疵 もつかないだろうという事は、彼の仕事の筋道を一通りでも見て通つた人の等しく承認しなければならない事であろう。

物理学の基礎になっている力学の根本に或る弱点のあるという事は早くから認められていた。しかし彼以前の多くの学者にはそれをどうしたらいいかが分らなかつた。あるいは大多数の人は因襲的の妥協に馴れて別にどうしようとも思わなかつた。力学の教科書はこの急所に触れないように知らん顔をしてすましていた。それでも実用上の多くの問題には実際差支えがなかつたのである。ところが近代になって電子などというものが発見され、あらゆる電磁気や光熱の現象はこの不思議な物の作用に帰納されるようになった。そしてこの物が特別な条件の下に驚くべき快速で運動する事も分つて来た。こういう物の運動に関係した問題に触れ始めると同時に、今までそつとしておいた力学の急所がそろそろ痛

みを感じずるようになって来た。ロレンツのごとき優れた老大家は <sup>はや</sup> 疾 くからこの問題に手を付けて、色々な矛盾の痛みを局部的の手術で治療しようとして骨折っている間に、この若い無名の学者はスイスの特許局の一隅にかくれて、もつともつと根本的な大手術を考えていた。病の根は電磁気や光よりもつと根本的な時と空間の概念の中に潜伏している事に眼をつけた。そうしてその腐りかかつた、間に合わせの時と空間を取つて捨てて、新しい健全なものをその代りに植え込んだ。その手術で物理学は一夜に若返つた。そして電磁気

や光に関する理論の多くの <sup>びょうそう</sup> 病 竈 はひとりでに綺麗に消滅した。

病源を見つけたのが第一のえらさで、それを手術した <sup>てぎわ</sup> 手 際は第二のえらさでなければならぬ。

しかし病気はそれだけではなかつた。第一の手術で「速度の相対性」を片付けると、必然の成行きとして「重力と加速度の問題」が起つて来た。この急所の痛みは、他の急所の痛みが消えたために一層鋭く感ぜられて来た。しかしこの方の手術は一層面倒なものであつた。第一に手術に使つた在来の道具はもう役に立たなかつた。吾等の祖先から二千年来

使い馴れたユークリッド幾何学では始末が付かなかった。その代りになるべき新しい利器を求めている彼の手に触れたのは、前世紀の中頃に数学者リーマンが、そのような応用とは何の関係もなしに純粋な数学上の理論的の仕事として残しておいた遺物であった。これ

きた  
を 鍛え直して造った新しい鋭利なメスで、数千年来人間の脳の中にへばり付いていたい

しっかい  
わゆる常識的な時空の観念を 悉皆 削り取った。そしてそれを切り刻んで新しく組立てた「時空の世界像」をそこに安置した。それで重力の秘密は自明的に解釈されると同時に古い力学の暗礁であった水星運動の不思議は無理なしに説明され、光と重力の関係に対する驚くべき予言は的中した。もう一つの予言はどうなるか分らないが、ともかくも今まで片側だけしか見る事の出来なかった世界は、これを掌上に置いて意のままに任意の側から観る事が出来るようになった。観者に関するあらゆる絶対性を打破する事によって現出された客観的実在は、ある意味で却って絶対なものになったと云ってもよい。

りょうが  
この仕事を仕遂げるために必要であった彼の徹底的な自信はあらゆる困難を 凌駕させたように見える。これも一つのえらさである。あらゆる直接経験から来る常識の幻影に惑わされずに純理の道筋を踏んだのは、数学という器械の御蔭であるとしても、全く抽象的な数学の枠に万象の実世界を寸分の隙間もなく切りはめた鮮やかな手際は物理学者としてその非凡なえらさによるものと考えなければならない。

こういう飛びぬけた頭脳を持っていて、そして比較的短い年月の間にこれだけの仕事を

おいた  
仕遂げるだけの活力を持っている人間の、「人」としての 生立ちや、日常生活や、環境は多くの人の知りたいと思うところであろう。

それで私は有り合せの手近な材料から知り得られるだけの事をここに書き並べて、この

おぼろげ  
学者の面影を 臚氣 にでも紹介してみたいと思うのである。主な材料はモスコフスキー

しろうとがか  
の著書に拠る外はなかった。要するに 素人画家のスケッチのようなものだと思って読んでもらいたいのである。

## 二

アルベルト・アインシュタインは一八七九年三月の出生である。日本ならば明治十二年卯歳の生れで数え年四十三（大正十年）になる訳である。生れた場所は南ドイツでドナウの流れに沿うた小都市ウルムである。今のドイツで一番高いゴシックの寺塔のあるという

外には格別世界に誇るべき何物をも有たないらしいこの市名は偶然にこの科学者の出現と結び付けられる事になった。この土地における彼の幼年時代について知り得られる事実は遺憾ながら極めて少ない。ただ一つの逸話として伝えられているのは、彼が五歳の時に、父から一つの羅針盤を見せられた事がある、その時に、何ら直接に接触するもののない磁針が、見えざる力の作用で動くのを見て非常に強い印象を受けたという事である。その時の印象が彼の後年の仕事にある影響を与えたという事が彼自身の口から伝わっている。

丁度この頃、彼の父は家族を挙げてミュンヘンに移転した。今度の家は前のせまくるしい住居とちがって広い庭園に囲まれていたので、そこで初めて自由に接することの出来た自然界の印象も彼の生涯に決して無意味ではなかったに相違ない。

彼の家族にユダヤ人種の血が流れているという事は注目すべき事である。後年の彼の仕事や、社会人生観には、この事実と意思合せて初めて了解される点が少なくないように思う。それはとにかく彼がミュンヘンの小学で受けたローマカトリックの教義と家庭におけ

るユダヤ教の教義との相対的な矛盾——因襲的な独断と独断の背馳が彼の幼い心にどのような反応を起させたか、これも本人に聞いてみたい問題である。

この時代の彼の外観には何らの鋭い天才の閃きは見えなかった。ものを云う事を覚えるのが普通より遅く、そのために両親が心配したくらいで、大きくなってもやはり口重であった。八、九歳頃の彼はむしろ控え目で、あまり人好きのしない、独りぼっちの仲間外れの観があった。ただその頃から真と正義に対する極端な偏執が目立った。それで人々は

ビーダーマイアー あだな  
「馬鹿正直」という渾名を彼に与えた。この「馬鹿正直」を徹底させたものが今日の彼の仕事になろうとは、誰も夢にも考えなかった事であろう。

音楽に対する嗜好は早くから眼覚めていた。独りで讚美歌のようなものを作って、独りでこっそり歌っていたが、恥ずかしがって両親にもそれは隠して聞かせなかったそうである。腕白な遊戯などから遠ざかった独りぼっちの子供の内省的な傾向がここにも認められる。

後年まで彼につきまとったユダヤ人に対するショーヴィニズムの迫害は、もうこの頃から彼の幼い心に小さな波風を立て初めたらしい。そしてその不正義に対する反抗心が彼の性格に何かの痕跡を残さない訳には行かなかつたろうと思われる。「ユダヤ人はその職業上の環境や民族の過去のために、人から信用されるという経験に乏しい。この点に関してユ

ダヤ人の学者に注目して見るがいい。彼等は論理というものに力瘤を入れる。すなわち理法によって他の承諾を強要する。民族的反感からは信用したくない人でも、論理の前には屈伏しなければならない事を知っているから。」こう云ったニーチェののがにがしい言葉が今更に強く吾々の耳に響くように思われる。

彼の学校成績はあまりよくなかった。特に言語などを機械的に暗記する事の下手な彼には当時の軍隊的な詰め込み教育は工合が悪かった。これに反して数学的推理の能力は早くから芽を出し初めた。計算は上手でなくても**考え方**が非常に巧妙であった。ある時彼の伯父に当る人で、工業技師をしているヤーコブ・アインシュタインに、代数学とは一体どんなものかと質問した事があった。その時に伯父さんが「代数というのは、あれは不精ものずるい計算術である。知らない答をXと名づけて、そしてそれを知っているような顔をして取扱って、それと知っているものとの関係式を書く。そこからこのXを定めるという

方法だ」と云って聞かせた。この <sup>ひょうきん</sup> 剽 軽 な、しかし要を得た説明は子供の頭に眠っている未知の代数学を呼び覚ますには充分であった。それから色々の代数の問題はひとりで

楽に解けるようになった。始めて、幾何学のピタゴラスの定理に打つかった時にはそれでも三週間頭をひねったが、おしまいには遂にその証明に成効した。論理的に確実なある物を捕える喜びは、もうこの頃から彼のうら若い頭に滲み渡っていた。数理に関する彼の所得は学校の教程などとは無関係に驚くべき速度で増大した。十五歳の時にはもう大学に入れるだけの実力があるという事を係りの教師が宣言した。

しかし中等学校を卒業しないうちに学校生活が一時中断するようになったというのは、彼の家族一同がイタリアへ移住する事になったのである。彼等はミランに落着いた。そこでしばらく自由の身になった少年はよく旅行をした。ある時は単身でアペニンを越えて漂流したりした。間もなく彼はチューリヒのポリテクニクムへ入学して数学と物理学を修める目的でスイスへやって来た。しかし国語や記載科学の素養が足りなかったので、しばらくアーラウの実科中学にはいつていた。わずかに十六歳の少年は既にこの時分から「運動体の光学」に眼を付け初めていたという事である。後年世界を驚かした仕事はもうこの時

<sup>ふたば</sup> から 双 葉 を出し初めていたのである。

彼の公人としての生涯の望みは教員になる事であった。それでチューリヒのポリテクニクムの師範科のような部門へ入学して十七歳から二十一歳まで勉強した。卒業後彼をどこかの大学の助手にでも世話しようとする者もあったが、国籍や人種の問題が邪魔になって思わしい口が得られなかった。しかし家庭の経済は楽でなかったから、ともかくも自分で働いて食わなければならないので、シャフハウゼンやベルンで私教師を勤めながら静かに深く物理学を勉強した。かなり貧しい暮しをしていたらしい。その時分の研学の仲間にも南ロシアから来ている女学生があって、その後一九〇三年にこの人と結婚したが数年後に

<sup>いとこ</sup> 離婚した。ずっと後に 従 妹 のエルゼ・アインシュタインを迎えて幸福な家庭を作っているという事である。

一九〇一年、スイス滞在五年の後にチューリヒの公民権を得てやっと公職に就く資格が

出来た。同窓の友グロスマンの <sup>しゅうせん</sup>周旋で特許局の技師となって、そこに一九〇二年から一九〇九年まで勤めていた。彼のような抽象に長じた理論家が極めて卑近な発明の審査をやっていたという事は面白い事である。彼自身の言葉によるとこの職務にも相当な興味をもって働いていたようである。

一九〇五年になって彼は永い間の研究の結果を発表し始めた。頭の中にいっぱいにたまっていたものが大河の堤を決したような勢いで溢れ出した。『物理年鑑』に出した論文だけでも四つでその外に学位論文をも書いた。いずれも立派なものであるが、その中の一つが相対論の元祖と称せられる「運動せる物体の電気力学」であった。ドイツの大家プランクはこの論文を見て驚いてこの無名の青年に手紙を寄せ、その非凡な着想の成效を祝福した。

ベルンの大学は彼を招かんとして <sup>ちゅうちよ</sup>躊躇していた。やっと彼の椅子が出来ると間も

なく、チューリヒの大学の方で理論物理学の助教授として <sup>しょうへい</sup>招聘した。これが一九〇九年、彼が三十一歳の時である。特許局に隠れていた足掛け八年の地味な平和の生活は、おそらく彼のにとっては意義の深いものであったに相違ないが、ともかくも三十一にして彼は立って始めて本舞台に乗り出した訳である。一九一一年にはプラークの正教授に招聘され、一九一二年に再びチューリヒのポリテクニクムの教授となった。大戦の始まった一九一四年の春ベルリンに移ってそこで仕事を大成したのである。

ベルリン大学にける彼の聴講生の数は従来のレコードを破っている。一昨年来急に世界的に有名になってから新聞雑誌記者は勿論、画家彫刻家までが彼の門に押しよせて、肖像を描かせる胸像を作らしてくれとせがむ。講義をすまして廊下へ出ると学生が押しかけて

<sup>うち</sup>質問をする。宅 <sup>しろうと</sup>へ帰ると世界中の学者や素人から色々の質問や注文の手紙が来ている。それに対して一々何とか返事を出さなければならないのである。外国から講演をしに来てくれと頼まれる。このような要求は研究に熱心な学者としての彼には迷惑なものに相

<sup>いや</sup>違ないが、彼は格別厭な顔をしないで気永に親切に誰にでも満足を与えているようである。

彼の名声が急に揚がる一方で、彼に対する迫害の火の手も高くなった。ユダヤ人種排斥という日本人にはちょっと分らない、しかし多くのドイツ人には分りやすい原理に、幾分は別の妙な動機も加わって、一団のアインシュタイン排斥同盟のようなものが出来た。勿論大多数は物理学者以外の人で、中にはずいぶんいかがわしい人も交じっているようであ

<sup>むやみ</sup>る。これが一日ベルリンのフィルハーモニーで公開の弾劾演説をやって無闇な悪口を並べた。中に物理学者と名のつく人も一人居て、これはさすがに直接の人身攻撃はやらない

で相対原理の批判のような事を述べたが、それはほとんど科学的には無価値なものであった。要するにこの演説会は純粋な悪感情の表現に終わってしまった。気の永いアインシュタインもかなり不愉快を感じたと見えて、急にベルリンを去ると言い出した。するとベルリン大学に居る屈指の諸大家は、一方アインシュタインをなだめると同時に、連名で新聞へ弁明書を出し、彼に対する攻撃の不当な事を正し、彼の科学的貢献の偉大な事を保証した。またアインシュタインは進まなかったらしいのを、すすめて自身の弁明書を書かせ、これを同じ新聞に掲げた。その短い文章は例の通りキビキビとして極めて要を得ているのは勿論であるが、その行文の間に卑怯な迫害者に対する苦々しさが滲透しているようである。彼に対する同情者は遠方から電報をよこしたりした。その中にはマクス・ラインハルトの名も交じっていた。

その後ナウハイムで科学者大会のあった時、特にその中の一日を相対論の論評にあてがった。その時の会場は何となく緊張していたが当人のアインシュタインは極めて呑<sup>のん</sup>気<sup>き</sup>な顔をしていた。レナードが原理の非難を述べている間に、かつてフィルハルモニーで彼の人身攻撃をやった男が後ろの方の席から拍手をしたりした。しかしレナードの急<sup>せ</sup>き込んだ質問は、冷静な、しかも鋭い答弁で軽く受け流された。

レナード「もし実際そんな重力の『場』があるなら、何かもっと見<sup>見</sup>やすい(anschaulich)現象を生じそうなものではないか。」

アインシュタイン「見<sup>見</sup>やすいとか見<sup>見</sup>や<sup>やす</sup>くないとかいう事は時代とともに変わるもので、云わば時の函数であります。ガリレーの時代の人には彼の力学はよほど見<sup>見</sup>や<sup>やす</sup>くないものだったでしょう。いわゆる見<sup>見</sup>や<sup>やす</sup>い観念などと称するものは、例の『常識』『健全な理知』(gesunder Menschenverstand) と称するものと同様にずいぶん穴だらけなものかと思えます。」

この返答で聴衆が笑い出したと伝えられている。この討論は到底相撲にならないで終結したらしい。

今年も米国へ招かれて講演に行った。その帰りに英国でも講演をやった。その当時の彼の地の新聞は彼の風采と講演ぶりを次のように伝えている。

「.....。ちょっと見たところでは別に堂々とした様子などはない。中背で、肥<sup>肥</sup>っていて、がっしりしている。四十三にしてはふけて見える。皮膚は蒼白に黄味を帯び、髪は黒に灰

く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>け<sup>け</sup>ず 梳<sup>し</sup>わ<sup>わ</sup>らない団塊である。額には皺<sup>皺</sup>、眼のまわりには疲労の線を印して

ひ<sup>ひ</sup>いる。しかし眼それ自身は磁石のように牽き付ける眼である。それは夢を見る人の眼であって、冷たい打算的なアカデミックな眼でない、普通の視覚の奥に隠れたあるものを見透す詩人創造者の眼である。眼の中には異様な光がある。どうしても自分の心の内部に生活



している人の眼である。」

「彼が壇上に立つと聴衆はもうすぐに彼の力を感じず。ドイツ語がわかる分らぬは問題でない。ともかくも力強く人に迫るある物を感じず。」

「重大な事柄を話そうとする人にふさわしいように、ゆっくり、そして一語一句をはっきり句切って話す。しかし少しも気取ったようなところはない。謙遜<sup>けんそん</sup>で、引きしまっていて、そして敏感である。ただ話が佳境に入ると多少の身振りを交じえる。両手を組合したり、要点を強めるために片腕をつき出したり、また指の端を唇に触れたりする。

しかし身体は決して動かさない。折々彼の眼が妙な表情をして瞬<sup>またた</sup>く事がある。するとドイツ語の分らない人でも皆釣り込まれて笑い出す。」

ひ  
「不思議な、人を牽き付ける人柄である。干からびたいいわゆるプロフェッサーとはだいぶ種類がちがっている。音楽家とでもいうような様子があるが、彼は実際にそうである。数学が出来ると同じ程度にヴァイオリンが出来ると。充分な情緒と了解をもってモザルト、シューマン、バッハなどを演奏する……。」

私が初めてアインシュタインの写真を見たのはK君のところであつた。その時に私達は「この顔は夢を見る芸術家の顔だ」というような事を話し合った。ところがこの英国の新聞記者も同じような事を云っているのを見ると、この印象はいくらか共通なものかもしれない。実際彼のような破天荒の仕事は、「夢」を見ない種類の人には思い付きそうに思われぬ。しかしただ夢を見るだけでは物にならない。夢の国に論理の橋を架けたのが彼の仕事であつた。

アメリカのスロツソンという新聞記者のかいた書物の口絵にある写真はちょっとちがった感じを与える。どこか皮肉な、今にも例の人を笑わせる顔をしようなどころがある。また最近にタイムス週刊の画報に出た、彼がキングス・カレッジで講演をしている横顔もちよつと変っている。顔面に対してかなり大きな角度をして突き出た三角形の大きな鼻が眼に付く。

アインシュタインは「芸術から受けるような精神的幸福は他の方面からはとても得られないものだ」と人に話したそうである。ともかくも彼は芸術を馬鹿にしない種類の科学者である。アインシュタインの芸術方面における趣味の中で最も顕著なものは音楽である。彼の弾くヴァイオリンが一人前のものだという事は定評であるらしい。かなりテクニック

むつ  
の六ヶしいブラームスのものでも鮮やかに弾きこなすそうである。技術ばかりでなくて相当な理解をもった芸術的の演奏が出来るといふらしい。

それから、子供の時に唱歌をやったと同じように、時々ピアノの鍵盤の前に坐つて即興的のファンタジーをやるのが人知れぬ楽しみの一つだそうである。この話を聞くと私は何

となくボルツマンを思い出す。しかしボルツマンは陰気でアインシュタインは明るい。

音楽の中では古典的なものを好むそうである。特にゴシックの建築に <sup>たと</sup> 譬えられるバッハのものを彼が好むのは偶然ではないかもしれない。ベートーヴェンの作品でも大きなシンフォニーなどより、むしろカンマーミュージックの類を好むという事や、ショパン、シュー

マンその他 <sup>ろうまんは</sup> 浪 漫 派 の作者や、またワグナーその他の楽劇にあまり同情しない事なども、何となく彼の面目を想像させる。

絵画には全く無関心だそうである。四元の世界を眺めている彼には二元の芸術はあるいはあまりに児戯に近いかもしれない。万象を時と空間の要素に切りつめた彼には色彩の美しさなどはあまりに空虚な幻に過ぎないかもしれない。

三元的な彫刻には多少の同情がある。特に建築の美には歎美を惜しまないそうである。

そう云えば音楽はあらゆる芸術の中で唯一の四元的のものとも云われない事はない。この芸術には一種の「運動」が本質的なものである。ただその時とともに運動する「もの」と空間とが物質的でないだけである。

文学にも無関心ではないそうである。ただ忙しい彼には沢山色々のものを読む暇がないのであろう。シェークスピアを尊敬してゲーテをそれほど思わないらしい。ドストエフスキー、セルバンテス、ホーマー、ストリンドベルヒ、ゴットフリード・ケラー\*、こんな名前が好きな方の側に、ゾラやイブセンなどが好かない方の側に挙げられている。この名簿も色々の意味で吾々には面白く感じられる。

\* ゴットフリード・ケラーとはどんな人かと思って小宮君に聞いてみると、この人（一八一九—一八九〇）はスイスチューリヒの生れで、描写の細かい、しかし抒情的気分が富んだ写実小説家だそうである。

哲学者の仕事に対する彼の態度は想像するに難くない。ロックやヒュームやカントには多少の耳を借しても、ヘーゲルやフィヒテは問題にならないらしい。これはそうありそうな事である。とにかく将来の哲学者は彼から多くを学ばねばなるまい。ショーペンハウアーとニーチェは文学者として推賞するのだそうである。しかしニーチェはあんまりキラキラしている (glitzernd) と云っている。

えんかへき  
彼が一種の 煙 霞 癖 をもっている事は少年時代のイタリア旅行から芽を出しているように見える。しかし彼の旅行は単に月並な名所や景色だけを追うて、汽車の中では居眠

りする亜類ではなくて、何の目的もなく野に山に海浜に <sup>ほうこう</sup> 彷徨 するのが好きだという事である。しかし彼がその夢見るような眼をして、そういう処をさまよい歩いている間に、

のうり  
どんな活動が彼の 脳 裡 に起っているかという事は誰にも分らない。

勝負事には一切見向かない。蒐集癖も皆無である。学者の中で彼ほど書物の所有に冷淡な人も少ないと云われている。尤も彼のような根本的に新しい仕事に参考になる文献の数は比較的極めて少数である事は当然である。いわゆるオーソリティは彼自身の頭蓋骨以外にはどこにも居ないのである。

彼の日常生活はおそらく質素なものであろう。学者の中に折々見受けるような金銭に無関心な人ではないらしい。彼の著者の翻訳者には印税のかなりな分け前を要求して来るといような噂も聞いた。多くの日本人には多少変な感じもするが、ドイツ人という者を知っている人には別にそう不思議とは思われない。特に彼の人種の事までも取り立てて考えるほどの事ではないと思われる。

夜はよく眠るそうである。神経のいらいらした者が、彼のような仕事をして、そしてそれが成効に近づいたとすればかなり興奮するにちがいない。勝手に仕事を途中で中止してのんきに安眠するという事は存外六ヶしい事であるに相違ない。しかし彼は適当な時にさっさと切り上げて床につく、そして仕事の事は全く忘れて安眠が出来ると彼自身人に話している。ただ一番最初の相対原理に取り付いた時だけはさすがにそうはゆかなかつたらしい。幾日も喪心者のようになって彷徨したと云っている。一つは年の若かったせいでもあろうが、その時の心持はおそらくただ選ばれたごく少数の学者芸術家あるいは宗教家にして始めて味わい得られる種類のものであったろう。

### 三

アインシュタインの人生観は吾々の知りたいと願うところである。しかし彼自身の筆に  
いっばん　うかが  
よらない限りその一斑をも窺う事はおそらく不可能な事に相違ない。彼の会話の断片を基にしたジャーナリストの評論や、またその下手な受売りにどれだけの信用がお  
措けるかは疑問である。ただ煙の上がる処に火があるというあまりあてにならない非科学的法則を頼みにして、少しばかりの材料をここに紹介する。

彼の人間に対する態度は博愛的人道的のものであるらしい。彼の犀利な眼にはおそらく人間のあらゆる偏見や痴愚が眼につき過ぎて困るだろうという事は想像するに難くない。

しんらつ　かいぎやく  
稀に彼の口から洩れる辛辣な諧謔は明らかにそれを語るものである。弱点を見破る眼力はニーチェと同じ程度かもしれない。しかしニーチェを評してギラギラしていると云った彼はこれらの弱点に対してかなり気の永い寛容を示している。迫害者に対しては常に受動的であり、教えを乞う者にはどんな馬鹿な質問にでも真面目に親切に答えている。

きつすい

智能の世界における貴族である彼は社会の一員としては生 粋 のデモクラットである。国家というものは、彼にとってはそれ自身が目的でも何でもない。金の力も無論なんでもない。そうかと云って彼は有りふれの社会主義者でもなければ共産党でもない。彼の説だというのに抛れば、社会の祝福が単に制度をどうしてみたところでそれで永久的に得られるものではない。ただ銘々の我慾の節制と相互の人間愛によってのみ理想の社会に到達する事が出来るというのであるらしい。

勿論彼は世界平和の渴望者である。しかしその平和を得るためには必ずしも異種の民族の特徴を減却しなくてもいいという考えだそうである。ユダヤ民族を集合して国土を立てようというザイオニズムの主張者としてさもありそうな事である。桑木理学博士がかつて彼をベルンに尋ねた時に、東洋は東洋で別種の文化が発達しているのは面白いといったような事を話したそうである。この点でも彼は一種のレラチヴィストであるとも云われよう。それにしても彼が幼年時代から全盛時代の今日までに、盲目的な不正当なショーヴィニズムから受けた迫害が如何に彼の思想に影響しているかは、あるいは彼自身にも判断し難い機微な問題であろう。

桑木博士と対話の中に、蒸気機関が発明されなかったら人間はもう少し幸福だったろうというような事があったように記憶している。また他の人と石炭のエネルギーの問題を論じている中に、「仮りに同一量の石炭から得られるエネルギーがずっと増したとすれば、現在より多数の人間が生存し得られるかもしれないが、そうなったとした場合に、それがために人類の幸福が増すかどうかそれは疑問である」と云ったとある。ただこれだけの断片

えんえき

から彼の文化観を演 繹 するのは早計であろうが、少なくとも彼が「石炭文明」の無条件な謳歌者でない事だけは想像される。少なくとも彼の頭が鉄と石炭ばかりで詰まっていない証拠にはなるかと思う。

彼はまだこれからが働き盛りである。彼が重力の理論で手を廻さなかった電磁気論は、ワイルによって彼の一般相対性原理の圏内に併合されたようである。これが成効であると

クアンタム

しても、まだ彼の目前には大きな問題が残されている。それはいわゆる「素 量」の問題である。この問題にも彼は久しい前から手を付けている。今後彼がこれをどう取り扱うかが何よりの見ものである。エジントンの云うところを聞くと、一般相対原理はほとんどすべてのものから絶対性を剥奪した。すべては観測者の尺度による。ただ一つ残され

アクション

たものが「作 用」と称するものである。これだけが絶対不変な「純粋の数」である。素量説なるものは取りも直さずこの作用に一定の単位があるという宣言に過ぎない。この

「純数」がおそらくある出来事の「<sup>プロバビリテイ</sup>確率」と結び付けられるものであろうと云っている。これに対するアインシュタインの考えは不幸にしていまだ知る機会を得ない。

ただ彼が昨年五月ライデンの大学で述べた講演の終りの方に、「素量説として<sup>ま</sup>纏められ

た事実があるいは『力の<sup>フェルド</sup>場』の理論に越え難い限定を与える事になるかもしれない」と云っている。この謎のような言葉の解釈を彼自身の口から聞く事の出来る日が来れば、それは物理学の歴史でおそらく最も記念すべき日の一つになるかもしれない。

(大正十年十月『改造』)

---

底本：「寺田寅彦全集 第六巻」岩波書店

1997（平成9）年5月6日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 文学篇」岩波書店

1985（昭和60）年

初出：「改造」

1921（大正10）年10月1日

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2006年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 25.アインシュタインの教育観

寺田寅彦

近頃パリに居る知人から、アレキサンダー・モスコフスキー著『アインシュタイン』という書物を送ってくれた。「停車場などで売っている俗書だが、退屈しのぎに……」と断つてよこしてくれたのである。

欧米における昨今のアインシュタインの盛名は非常なもので、彼の名や「相対原理」という言葉などが色々な第二次的な意味の流行語になっているらしい。ロンドンからの便りでは、新聞や通俗雑誌くらいしか売っていない店先にも、ちゃんとアインシュタインの著書（英訳）だけは並べてあるそうである。新聞の漫画を見ていると、野良のむすこが親爺

ごまかの金を誤魔化しておいて、これがレラチヴィティだなどと済ませているのがある。こうなるとはさすがのアインシュタインも苦い顔をしている事であろう。

わがくに我邦ではまだそれほどでもないが、それでも彼の名前は理学者以外の方面にも近頃だいぶ広まって来たようである。そして彼の仕事の内容は分らないまでも、それが非常に重要なものであって、それを仕遂げた彼が非常に優れた頭脳の所有者である事を認め信じている人はかなり多数である。そうして彼の仕事のみならず、彼の「人」について特別な興味を抱いていて、その面影を知りたがっている人もかなり多い。そういう人々にとってこのモスコフスキーの著書は甚だ興味のあるものであろう。

モスコフスキーとはどういう人か私は知らない。ある人の話ではジャーナリストらしい。自身の序文にもそうらしく見える事が書いてある。いずれにしても著述家として多少認め

られ、相当な学識もあり、科学に対してもかなりな理解を有っている人である事は、この書の内容からも了解する事が出来る。

この人のアインシュタインに対する関係は、一見ボスウェルのジョンソン、ないしエッカーマンのゲーテに対するようなものかもしれない。彼自身も後者の類例をある程度まで

こはくはえ承認している。「琥珀の中の蠅」などと自分で云っているが、単なるボスウェリズムでない事は明らかに認められる。

時々アインシュタインに会って雑談をする機会があるので、その時々々の談片を題目とし、その注釈や祖述、あるいはそれに関する評論を書いたものが纏まった書物になったという体裁である。無論記事の全責任は記者すなわち著者にあることが特に断つてある。

一人の談話を聞いて正当にこれを伝えるという事は、それが精密な科学上の定理や方針でない限り、厳密に云えばほとんど不可能なほど困難な事である。たとえ言葉だけは精密に書き留めても、その時の顔の表情や声のニュアンスは全然失われてしまう。それだからある人の云った事を、その外形だけ正しく伝えることによって、話した本人を他人の前に陥れることも揚げることも勝手に出来る。これは無責任ないし悪意あるゴシップによって日常行われている現象である。

それでこの書物の内容も結局はモスコフスキーのアインシュタイン観であって、それを私が伝えるのだから、更に一層アインシュタインから遠くなってしまう、甚だ心細い訳である。しかし結局「人」の真相も相対性のものかもしれないから、もしそうだとすると、この一篇の記事もやはり一つの「真」の相かもしれない。そうでない場合でも、何かしら考える事の種子くらいにはならない事はあるまい。

余談はさておき、この書物の一章にアインシュタインの教育に関する意見を紹介論評したものがあつた。これは多くの人に色々な意味で色々な向きの興味があると思われるから、その中から若干の要点だけをここに紹介したいと思う。アインシュタイン自身の言葉として出ている部分はなるべく忠実に訳するつもりである。これに対する著者の論議はわざと大部分を省略するが、しかし彼の面目を伝える種類の記事は保存することにする。

アインシュタインはヘルムホルツなどと反対で講義のうまい型の学者である。のみならず講義講演によって人に教えるという事に興味と熱心をもっているそうである。それで学生や学者に対してのみならず、一般人の知識慾を満足させる事を煩わしく思わない。例えば労働者の集団に対しても、分りやすい講演をやって聞かせるとある。そんな風であるから、ともかくも彼が教育という事に無関心な仙人肌でない事は想像される。

アインシュタインの考えでは、若い人の自然現象に関する洞察の眼を開けるという事が最も大切な事であるから、従つて実科教育を十分に与えるために、古典的な語学のみならず「遠慮なく云えば」語学の教育などは幾分犠牲にしても惜しくないという考えらしい。これについて持出された *So viele Sprachen einer versteht, so viele Male ist er Mensch.*

シュプラハ・アトレーテン

というカール五世の言葉に対して彼は、「語学競技者」は必ずしも「人間」の先頭に立つものではない、強い性格者であり認識の促進者たるべき人の多面性は語

へんば

学知識の広い事ではなくて、むしろそんなものの記憶のために偏頗に頭脳を使わないで、頭の中を開放しておく事にある、と云っている。

「人間は『鋭敏に反応する』(subtil zu reagieren) ように教育されなければならない。云わば『精神的の筋肉』(geistige Muskeln) を得てこれを養成しなければならない。それが

ドリル

ためには語学の訓練はあまり適しない。それよりは自分で物を考えるような修練に重きを置いた一般的教育が有効である。」



もっと  
「尤も生徒の個性的傾向は無論考えなければならない。通例そのような傾向は、かな

りに早くから現われるものである。それだから自分の案では、<sup>ギムナジウム</sup>中等学校の三年頃からそれぞれの方面に分派させるがいいと思う。その前に教える事は極めて基礎的なところだ

とど  
けを、偏しない骨の折れない程度に止めた方がいい。それでもし生徒が文学的の傾向があるなら、それにはラテン、グリーキも十分にやらせて、その代り性に合わない学科でい

よ  
じめるのは止した方がいい……」

これは明らかに数学などを指したものである。数学嫌いの生徒は日本に限らないと見えて、モスコフスキーの云うところに拠ると、かなりはしっこい頭でありながら、数学にかけてはまるで低能で、学校生活中に襲われた数学の悪夢に生涯取り付かれてうなされる人が多いらしい。このいわゆる数学的低能者についてアインシュタインは次のような事を云っている。

「数学嫌いの原因が果して生徒の無能にのみよるかどうだか私にはよく分らない。むしろ私は多くの場合にその責任が教師の無能にあるような気がする。大概の教師はいろんな下らない問題を生徒にしかけて時間を空費している。生徒が知らない事を無理に聞いている。本当の疑問のしかけ方は、相手が知っているか、あるいは知り得る事を聞き出す事でなけ

とが  
ればならない。それで、こういう罪過の行われるところでは大概教師の方が主な答を

こうむ  
蒙らなければならない。学級の出来栄えは教師の能力の尺度になる。一体学級の出来栄えには自ずから一定の平均値があつてその上下に若干の出入りがある。その平均が得られれば、それでかなり結構な訳である。しかしもしある学級の進歩が平均以下であるという場合には、悪い学年だというより、むしろ先生が悪いと云った方がいい。大抵の場合に教師は必要な事項はよく理解もし、また教材として自由にこなすだけの力はある。しかし

わざわい  
それを面白くする力がない。これがほとんどいつでも禍の源になるのである。先生

いき  
が退屈の呼吸を吹きかけた日には生徒は窒息してしまう。教える能力というのは面白く教える事である。どんな抽象的な教材でも、それが生徒の心の琴線に共鳴を起させるようにし、好奇心をいつも活かしておかねばならない。」

これは多数の人にとって耳の痛い話である。

この理想が実現せられるとして、教案を立てる際に材料と分布をどうするかという問に対しては、具体的の話は後日に譲ると云つて、話頭を試験制度の問題に転じている。

「要は時間の経済にある。それには無駄な生徒いじめの訓練的な事は一切廃するがいい。今日でも一切の練習の最後の目的は卒業試験にあるような事になっている。この試験を廃しなければいけない。」「それは修学期の最後における恐ろしい比武競技のように、遥かの手前までもその暗影を投げる。生徒も先生も不断にこの強制的に定められた晴れの日の準備にあくせくしていなければならない。またその試験というのが人工的に無闇に程度を

ね 高く捻じり上げたもので、それに手の届くように鞭撻された受験者はやっと数時間だけは持ちこたえていても、後ではすっかり忘れて再び取りかえす事はない。それを忘れてしまえば厄介な記憶の訓練の効果は消えてしまう。試験さえすれば数カ月後には大丈夫綺麗に忘れてしまうような、また忘れて然るべきような事を、何年もかかって詰め込む必要はない。吾々は自然に帰るがいい。そして最小の仕事を費やして最大の効果を得るという原則に従った方がいい。卒業試験は正にこの原則に反するものである。」

それでは大学入学の資格はどうしてきめるかとの問に対して、

「偶然に支配されるような火の試験でなく、一体の成績によればいい。これは教師にはよく分るもので、もし分らなければ罪はやはり教師にある。教案が生徒を圧迫する度が少なければ少ないほど、生徒は卒業の資格を得やすいだろう。一日六時間、そのうち四時間は学校、二時間は家で練習すれば沢山で、それすら最大限である。もしこれで少な過ぎると思うなら、まあ考えてみるがいい。若いものは暇な時間でも強い興奮努力を経験している。何故と云えば、彼等は全世界を知覚し認識し呑み込まなければならないから。」

「時間を減らして、その代りあまり必須でない科目を削るがいい。『世界歴史』と称するものなどがそれである。これは通例乾燥無味な表に詰め込んだだらしのないものである。これなどは思い切って切り詰め、年代いじりなどは抜きにして綱領だけに止めたい。特に古い時代の歴史などはずいぶん抜かしてしまっても吾人の生活に大した影響はない。私は学生がアレキサンダー大王その外何ダースかの征服者の事を少しも知らなくても、大した不幸だとは思わない。こういう人物が残した古文書的の遺産は、無駄なバラストとして記憶

の重荷になるばかりである。どうしても古代にさかのぼりたいたいなら、せめてサイラスやアルタセルキセスなどは節約して、文化に貢献したアルキメデス、プトレモイス、ヘロン、アポロニウスの事でも少し話してもらいたい。全課程を冒険者や流血者の行列にしないために発明家や発見家も入れてもらいたい。」

歴史の時間の一部を割いて、実際の国家組織に関する事項、社会学や法律なども授けてはどうかという問に対してはむしろ不賛成だと答えている。彼自身個人としては公生活の組織に関してかなりな興味をもっているが、学校で政治的素養を作る事は面白くないと云

ザハリヒ  
っている。その理由は第一こういう教育は官辺の影響のために本質的に出来にくいし、また頭の成熟しないものが政治上の事にたずさわるのは一体早過ぎるというのである。そ

さしもの  
の代り生徒に何かしら実用になる手工を必修させ、指物なり製本なり錠前なりとにか  
く物になるだけに仕込んでやりたいという考えである。これに対してモスコフスキーが、  
一体それは腕を仕込むのが主意か、それとも民衆一般との社会的連帯の感じを持たせるた  
めかと聞くと、

「両方とも私には重要に思われる。その上に私のこの希望を正当と思わせるもう一つの見  
地がある。手工は勿論高等教育を受けるための下地にはならないでも、人間 (sittliche Pers  
önlichkeit) として立つべき地盤を拓げ堅めるために役に立つ。普通学校で第一に仕立て  
るべきものは未来の官吏、学者、教員、著述家でなくて「人」である。ただの「脳」では  
ない。プロメトイスが最初に人間に教えたのは天文学ではなくて火であり、工作であった  
……」

かじ  
これに和してモスコフスキーは、同時に立派な鍛冶でブリキ職でそして靴屋であった昔

マイステルジンガー ひつきょう  
の名 歌 手 を引合いに出して、 畢 竟 は科学も自由芸術の一つである  
と云っている。しかしアインシュタインが、科学それ自身は実用とは無関係なものだと言  
明しながら、手工の必修を主張して実用を尊重するのが妙だと云うのに答えて次のような  
事を云っている。

「私が実用は無関係と云ったのは、純粋な研究の窮極目的についてである。その目的はた  
だ極めて少数の人にのみ認め得られるものである。それでせいぜい科学の準備くらいのと  
ころまでこの考えを持って行くのは見当違いである。むしろ反対に私は学校で教える理科

ドクトリネーア  
は今日やっているよりずっと実用的に出来ると思う。今のはあまりに非 実 際 的 過

つか  
ぎる。例えば数学の教え方でも、もっと実用的興味のあるように、もっとじかに 握 まれ  
るように、もっと眼に見えるようにやるべきのを、そうしないから失敗しがちである。子

むつ  
供の頭に考え浮べ得られる事を授けないでその代りに 六 かしい「定義」などをあてがう。  
具体的から抽象的に移る道を明けてやらないで、いきなり純粋な抽象的観念の理解を強  
めるのは無理である。それよりもこうすればうまく行ける。先ず一番の基礎的な事柄は教場

よそ  
でやらないで戸外で授ける方がいい。例えばある牧場の面積を測る事、他所のと比較する  
事などを示す。寺塔を指してその高さ、その影の長さ、太陽の高度に注意を促す。こうす

はくぼく  
れば、言葉と白墨の線とによって、大きさや角度や三角函数などの概念を注ぎ込むよりも遥かに早く確実に、おまけに面白くこれらの数学的關係を呑み込ませる事が出来る。一体こういう学問の實際の起原はそういう實用問題であつたではないか。例えばタレースは始めて金字塔の高さを測るために、塔の影の終点の辺へ小さな棒を一本立てた。それで子供にステッキを持たせて遊戯のような実験をやらせれば、よくよく子供の頭が釘付  
フェルナーゲルト  
け  
でない限り、問題はひとりでに解けて行く。塔に攀じ上らないでその  
よ  
高さを測り得たという事は子供心に嬉しかろう。その喜びの中には相似三角形に関する測量的認識の歓喜が籠っている。」

「物理学の初歩としては、実験的なもの、眼に見えて面白い事の外は授けてはいけない。

レトルト  
一回の見事な実験はそれだけでも頭の蒸餾瓶の中で出来た公式の二十くらいよりはもっと有益な場合が多い。やつと現象の世界に眼のあきかけた若いものの頭に公式などは一切容赦してやらねばいけない。公式は、丁度世界歴史の年代の数字と同様に、彼等の物理学の中に潜む気味の悪い怖ろしい幽霊である。よく訳のわかつた巧者な実験家の教師が得られるならば中頃の学級からやり始めていい。そうしてもラテン文法の練習などではめつたに出逢わないような印象と理解を期待する事が出来るだろう。」

「ついでながら近頃やつと試験的に学校で行われ出した教授の手段で、もっと拡張を奨励したいのがある。それは教育用の活動フィルムである。活動写真の勝利の進軍は教育の繩

張りにも踏み込んでくる。そしてそこで始めて、多数の公開觀覽所が卑猥なものやあく

きわもの  
どい際物で墮落し切っているのに対して、道徳的なものをもって對抗させる機会を得るだろう。教授用フィルムに簡単な幻燈でも併用すれば、従来はただ言葉の記載で長たらしくやっている地理学などの教授は、世界漫遊の生きた体験にも似た活気をもって充たさ

ま  
れるだろう。そして地図上のただの線でも、そのの实景を眼の当りに経験すれば、それまでとはまるで違つたものに見えて来る。また特にフィルムの繰り出し方を早めあるいは緩めて見せる事によって色々の知識を授ける事が出来る。例えば植物の生長の模様、動物の心臓の鼓動、昆虫の羽の運動の仕方などがそうである。それよりも一層重要だと思ふのは、万人の知っているべきはずの主要な工業經營の状況をフィルムで紹介する事である。動力工場の成り立ち、機関車、新聞紙、書籍、色刷挿画はどうして作られるか、発電所、ガラス工場、ガス製造所にはどんなものがあるか。こんな事はわずかの時間で印象深く觀せる事が出来る。更に自然科学の方面で、普通の学校などでは到底やって見せられないような困難な実験でも、フィルムならば容易に、しかも實際と同じくらい明瞭に示すことが出来

る。要するに教育事業を救うの道はただ一語で「もっと眼に浮ぶようにする」(die erhöhte Anschaulichkeit) という事である。出来る限りは知識 (Erlernen) が体験が (Erleben) にならねばならない。この根本方針は未来の学校改革に徹底させるべきものである。」

大学あたり的高等教育についてはあまり立入った話はしなかったそうである。しかしアインシュタインは就学の自由を極端まで主張する方で、聴講資格のせせこましい制定を撤廃したいという意見らしい。演習なり実習なりである講義を理解する下地の出来たものは自由に入れてやって、普通学の素養などは強要しない。ことに彼の経験では有為な徹底的な人間は往々一方に偏する傾向があるというのである。従って中等学校では生徒がある特殊な専門に入るだけの素養が出来次第その学科に対するだけの免状をやる事にすればいい。前に中学卒業試験全廃を唱えたのは、つまりこうして高等教育の関門を打破する意味と思

もつと  
われる。尤も彼も全然あらゆる能力験定をやめるというのではない。医科学生になるための予備試験などは止めた方がいいが、しかし将来教師になろうという人で、見込のないようなのは早く験出してやめさせる方がいいと云っている。これは生徒に寛で教師に厳な彼としてさもあるべきことだと著者が評している。

ここで著者はしばらくアインシュタインをはなれて、これらの問題に対するこの理学者の權威の如何について論じている。理論物理のような常識に遠い六かしい事を講義して、そして聴衆を酔わせ得るのは、彼自身の内部に燃える熱烈なものが流れ出るためだと云っている。彼の講義には他の抽象学者に稀に見られる二つの要素、情調と愛嬌が籠っている、とこの著者は云っている。講義のあとで質問者が押しかけてきても、厭な顔をしないで楽しそうに教えているそうである。彼の聴講者は千二百人というレコード破りの多数に達した。彼の講義室は聞くまでもなくすぐ分る。みんなの行く方へついて行けばいい、と云われるくらいだそうである。この人気に対して一種の不安の色が彼の眉目の間に読まれる。のみならず「はやりものだな」という言葉が彼の口から洩れた。しかしこれは悪く取ってはいけない、無理のないところもあると著者が弁護している。

それから古典教育に関する著者の長い議論があるが、日本人たる吾々には興味が薄いかから略する事にして、次に女子教育問題に移る。

婦人の修学はかなりまで自由にやらせる事に異議はないようだが、しかしあまり主唱し奨励する方でもないらしい。

「他の学科と同様に科学の方も、なるべく道をあけてやらねばなるまい。しかしその効果については多少の疑いを抱いている。私の考えでは婦人というものに天賦のある障害があって、男子と同じ期待の尺度を当てる訳にはいかないと思う。」

キュリー夫人などが居るではないかという抗議に対しては、  
「そういう立派な除外例はまだ外にもあろうが、それかといって性的に自ずから定まっている標準は動かされない。」

モスコフスキーは四十年前の婦人と今の婦人との著しい相違を考えると、知識の普及に

従って追々は婦人の天才も輩出するようになりはしないか、と云うと、

あなた

「貴方は予言が御好きのようだが、しかしその期待は少し根拠が薄弱だと思う。単に素養が増し智能が増すという『量的』の前提から、天才が増すというような『質的』の向上を結論するのは少し無理ではないか。」こう云った時にアインシュタインの顔が稲妻のようにちょっとひきつったので、何か皮肉が出るなど思っていると、果して「自然が脳味噌の

じょうだん  
ない『性』を創造したという事も存外無いとは限らない」と云った。これは無論笑談

であるが彼の真意は男女の特長の差異を認めるにあるらしい。モスコフスキーはこれを

ふえん

敷衍して「婦人は微分学を創成する事は出来なかったが、ライブニッツを創造した。純粹理性批判は産めないが、カントを産む事が出来る」と云っている。

話頭は転じて、いわゆる「天才教育」の問題にはいる。特別の天賦あるものを選んで特別に教育するという事は、原理としては多数の承認するところで問題は程度如何にある。これは元来ダーウィンの自然淘汰説に縁をひいていて、自然の選択を人工的に助長するにある。尤もこの考えはオリンピアの昔から、あらゆる試験制度に通じて現われているので、それ自身別に新しいことではないが、問題は制度の力で積極的にどこまで進めるかにある、と著者は云っている。これに対するアインシュタインの考えは試験嫌いの彼に相当したも

スポーツ

のである。「競技 かなんぞのようにやる天才養成」(quasisportm  $\ddot{u}$ ssig gehandhabte Begabetenz  $\ddot{u}$ chtung) はいけないと云っている。結果はいかものか失敗かである。しかしこの選択も適度にやれば好結果を得られない事はあるまい。これまでの経験ではまだ具体

ひなた  
的な案は得られないが、適当にやれば、従来なら日影でいじけてしまうような天才を日向へ出して発達させる事も出来ようというのである。

著者はこれにつづいて、天才を見付ける事の困難を論じ、また補助奨励と天才出現とは必ずしも並行しない事などを事例について論じている。そして一体天才の出現を無制限に望むのがいいか悪いかという根本問題に触れたところで、アインシュタインの独特な社会観をほのめかしている。しかしこれらの点の紹介は他の機会に譲ることにしたい。

(大正十年七月『科学知識』)

---

底本：「寺田寅彦全集 第六巻」岩波書店

1997（平成9）年5月6日発行

入力：Nana ohbe

校正：浅原庸子

2004年12月13日作成

2005年10月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

アクセント符号付きラテン文字は、画像化して埋め込みました。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 26. ソクラテス

新渡戸稲造

+目次

## 一 ソクラテスに依りて懷疑を解く

私は十五、六歳の学生時代から、世の中のことに就て思い悩んでいた。たとえば、自分では正しいと思つてすることも、相手の氣に障つて、予想外の怒りや<sup>うら</sup>恨みを受けることもあるために、これからは、<sup>いか</sup>一体如何なる心掛けで人生を送つたら好いものかということに考え及ぶと、<sup>いつ</sup>疑惑が百出して、<sup>いつ</sup>何時も何時もその解決に<sup>くるし</sup>苦しんだ。然るに、その後、ふとソクラテスの伝記を読むに至つて、私の満腔の崇拜心と愛好心は<sup>ことごと</sup>悉くこの偉人の上に<sup>そそ</sup>濺がれるようになり、同時に、永年の懷疑も、<sup>とみ</sup>頓に氷解するを得たのである。

即ち友人間の交際にしても、あるいは一歩進んで、人生に処する上にも、手を下し、口を開く前には、一、二歩<sup>しりぞ</sup>退いて、<sup>わがまま</sup>我儘の利己のためではないか、という事を慎重に反省してみる。しかして、いささかでもそういう氣味を帯びておるとすれば、断然これを中止するのであるが、一旦、自分が是なり善なりと信ずるに於ては、それを<sup>ぜ</sup>実行するに寸刻の猶予もしない——こういうことを思つて、<sup>やが</sup>頓てはこれを主義ともするようになった。

私が理想的実行家としてリンコーンを愛好すると同じ程度に於て、ここに理想的思想家の真意義をソクラテスの人格に見出して、すべての他の偉人にも増して、これが尊崇の念を禁じ得ないのである。

## 二 真に言行一致の人

ソクラテスの伝記書類は随分数多く読んだけれども、私の伝記研究は、学者のする学問のためではなく、常に応用的、いわば自分一個の精神修養を目的としたものであるから、



勿論、システムなどは立っておらぬ。従って、ソクラテスを読んでも、着眼するところはその一点で、ソクラテスの哲学や何かに就ては、始めからあまり調べる気もしない。

ソクラテスを読んで、一番に面白く思うところは、かのダイモンというものを常に信じて、絶えず、自分の心の<sup>うち</sup>中に、善悪邪正を区別する、我にあらざる一種の力を蔵している。訳してこれを鬼神とも称すべきか。とにかく、この一種の力が、たとえ自分の欲する

ことでも、これを行為に<sup>あら</sup>顕わさんとする場合には、<sup>あらかじ</sup>予めこの鬼神に伺いを立てて、

<sup>いんきよ</sup>允許を受けることにしていた。そして、もしその允許が出ない時には、結局実行を見

合わすということになっていた。—これが私の注意を深く<sup>ひきつ</sup>惹付けた点で、また私もかく

あろうとして、平生から<sup>つと</sup>夙に戒心しているところである。

私も随分無遠慮な口を利く方で、それが故には、<sup>いか</sup>如何なる時に、如何なる誤解を発生せしめ、如何なる迷惑を受けなければならないかも知れぬ。しかしながら、腹に確乎たる覚悟と信念とさえあるならば、さほどびくつくにも及ばない。ただし、考えてみれば、私な

どの主張するところは、存外穏やかなものである。一つの主義に固持して終世世に容れられなかった人もあり、あるいはソクラテスの如く刑罰に処せられたり、あるいは、大塩平

八郎の如く、世に反抗して反叛を起したりするのに比べては、私は気の弱い<sup>い</sup>所以でもあろうか、甚だしく穏やかである。思った事を実行するといっても、故意に社会の原則を無

視したり、<sup>せっかくおいた</sup>折角生立って来た習慣を、無闇と破壊するというほどの意気込はない。

また一面には、自分の所信にしてもし俗情に全然かなわない時に於ては、私は出来るだけ

<sup>ま</sup>譲って、主張を枉げることもする。そして、最後に、これ以上は譲られないというところまでは、自分の力を保留しておく考えである。

それはとにかく、ソクラテスの偉大なるところは、徹頭徹尾、思い切って所信を<sup>ひれき</sup>披瀝し

た、その無遠慮な点に存する事を<sup>いな がた</sup>否み難い。もしソクラテスにして、<sup>なにか</sup>何彼と

<sup>しんしゃく</sup>斟酌ばかりして、思う事も遠慮していわなかったとするならば、世界はまあどれほ

どの大損失であったことだろう。プラトンの花も咲き損い、アリストートルの実もまた結

そこな  
び 損 ったに違いない。

ソクラテス位の大人物になると、言と行との区別が全くなくなる。昔からいう言行一致

をする言葉が丁度それである。世には、能く「口の人だ」「口ばかりの人だ」といって、

はい あざけ  
言行不一致の 輩 を 嘲 ることがあるが、しかし、その「口ばかりの人」にして、もし

言うところのものが、すべて赤誠と確信から ほとばし い  
進 り出ずるものであって、その一語が、

ただち  
直 にその人の名誉地位に連関し、一命を賭して吐露する、というほどの概があるなら

たしか い なぜ  
ば、その言は 慥 に「行」である。否な、寧ろ「行」よりも意味が強いと思う。何故な  
らば、行は具体的にして、しかも場所と時とを制限するが、言に至っては、抽象的でその  
達し及ぶ所広く、時もまた無限であるではないか。

そこ  
ソクラテスがアテンの市長になって、其所の衛生工事を改良したとか、事務を整理した  
とか、あるいは軍人になって、ペルシャ人に勝ったことがあったとしても、それは恐らく、

とな  
彼が口その物で 称 えたことより以上の仕事とはならなかったことであろう。

### 三 崇拜する理由数箇条

私がソクラテスを好み、かつ崇敬する理由を数箇条にして述べてみるならば、先ず第一  
には、何事をなすにも、始め己を省み、本心に伺いをたててからするというので、これ

しき  
は、今日世間で 頻 りに唱道しつつある、修養なるものの根本となるものである。

むやみ  
第二は、無 闇 に人を区別せず、また責めない点である。たとえば、議論をするにして  
もその相手を選ばず、またその題目をも別に選ばない。そして、目的は、相手を負かそう

とう ごうまつ  
とか、自分の主張をあくまでも 徹 そうとか、そういう浅薄な野心は 毫 末 もない。た

ふう  
だ自分を忘れて、道のために議するという 風 の態度がありあり見える。だから、およそ  
志のあるものは誰でも相手にして、少しも意としないのである。

第三には、高慢な人でなかったということを数えたい。当時、ソクラテスは具眼者から

先生といわれるほどの尊敬を受けていながら、<sup>みじん</sup>微塵も高ぶる風がなかった。また当時、アテンの政治は民主主義であったが、しかし、その制度の下にも、不思議なことは、高慢な人が沢山いた。そして、ソクラテスばかりはその例に洩れていた。してみると、ソクラテスの人物の高慢臭くなかったのは、時代の<sup>しか</sup>然らしめたところというようなことが言えなくなる。私は、この徳をソクラテスの<sup>しょうとく</sup>性得に帰するよりも、寧ろ修養の結果と<sup>みな</sup>看做すことの妥当なるを信ずるものである。

第四には、年が行っても、油断せずに、修養を持続した点である。とかく、<sup>われわれ</sup>吾人は、<sup>かう</sup>いくらか名前を知られ、人の尊敬を贏ち得るようになると、<sup>たちま</sup>忽ちもう偉らくなつたよ<sup>え</sup>うな気がして、心が<sup>ゆる</sup>弛み、<sup>せつかく</sup>折角青年時代に守り本尊としていた理想を、<sup>へいり</sup>敝履の如く棄て去るのが多いものであるが、独りソクラテスに限っては、こういう不始末が<sup>ごうまつ</sup>毫末もなかった。孟子のいわゆる大人にして赤子の心を失わない態度が、実に歴然としてその生活中に見えるのである。

第五には、輿論というか、俗論というか、いわゆる世評なるものに<sup>とんちやく</sup>頓着しなかつたことである。

ソクラテスの容貌は、性来とはいいいながら、<sup>すこぶ</sup>頗る滑稽なもので、常に物笑いの種となっていた。特に、<sup>ちようざ</sup>衆人稠座の中に出ると、<sup>ただち</sup>直に<sup>つら</sup>面の批評をされる。けれども、ソクラテスは、その冷評や罵詈の声を聞いても、少しも<sup>ばり</sup>怒らない。のみならず、自分もまた一緒になって、<sup>いか</sup>声を立てて笑っていた。

また、ソクラテスはこういう<sup>ふう</sup>風の外觀的のことばかりではなく、時代の文学者仲間などには、その主義なり思想なりが、往々にして非難的となり、<sup>はなはだ</sup>甚しきは、この人を芝居の芸題などにして公々然と冷嘲を浴せかけたこともある。

じじやく

けれども、ソクラテスは終始 自若 としていて、こせこせした弁護をせず、やはり自分も一緒にその芝居見物をして、衆人と共に笑い興じていたほどである。

かかる美点を一々列挙するならば、それこそ僕を換うるもなお足らぬであろう。勿論、ソクラテスだとして、全智全能の神ではないから、欠点を探れば相応に求め得たであろう。

あ さしつか

けれども、私はこのソクラテスが全然好きなのだから、その美点ばかりを挙げて 差支

もと

えないことと思う。グロードなどという人は、ソクラテスの短所を 見 めて、悪辣な筆を運

ひ

ばし、一時読書界の注目を惹いたこともあったが、しかし、これも今日では、殆んど観察点が外れていて、いずれも正しい筆でないことが明かになった次第である。

#### 四 公明正大の死

しにぎわ

私は、ソクラテスの最も偉大なる点を以て、彼の悲劇なる 死 際の公明正大なものに持って行きたいと思う。ソクラテスの死は、真に死を見ること帰するが如しであった。彼が

もちろん うら

あつま

罪なくて牢獄の人となった時には 勿 論 人を 恨 まなかつた、弟子などが 集 って

しき

だんこ

うけが

来て、頻りに弁護せよ弁護せよと勧告するけれど 断 乎 として 肯 わない。弟子どもは声を励まして、「先生が何の罪もなくして死なれるのが残念です」というと、ソクラ

えんぜん

テスは 嬌 然 笑って、「さらば罪あって死ぬのは残念でないのか。死ぬる死なぬは

ひっきょう

畢 竟 第二義のことだ。心の鍛錬が第一義だ。」と聞いて聞かした。そして誰も 恨

うら

まず、天も地も怨みず、泰然自若として振りかかる運命を迎えたのである。

私は、平生自分に関した不愉快な世評を聞いたり、悪口などを耳にすると、この場合、ソクラテスであつたら、どういう風に始末したろう、と考える気になる。また、思う

らくたん

じい

事がならず、失望 落 胆 に沈んでいる時にも、もしこれがソクラテス 翁 さんであつた

いっせつな いか

しずか いらだ

ら、この 一 刹那 を如何に処するであろう、と振返って、 静 に 焦 立つ精神を

しず

ほんぜん

鎮 めてみると、ある雄々しい 本 然 の心が腹の底から声を出すのである。同時に、不

愉快的気分も、衰えた神経も、<sup>たちま</sup> 忽ちにして去ってしまう。

勿論、私はソクラテスの<sup>まね</sup>真似をするという<sup>わけ</sup>訳ではないが、書斎には常にこのソクラテスと、リンコルンのバストを飾っておく。これなども、立派に修養の功を積んだ人々には、かかる必要は全くないであろうが、私の如き未練なものには、これが一番に強い刺戟になるのである。

〔一九一一年一月一日『中学世界』一四卷一号〕

---

底本：「新渡戸稲造論集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成 19）年 5 月 16 日第 1 刷発行

底本の親本：「中学世界 一四巻一号」博文館

1911（明治 44）年 1 月 1 日

初出：「中学世界 一四巻一号」博文館

1911（明治 44）年 1 月 1 日

入力：田中哲郎

校正：ゆうき

2011 年 1 月 8 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

---

## 27.ゴッホについて

三好十郎

### ゴッホの三本の柱

ゴッホの人間及び仕事を支えていた三本の大きな柱として、私は次の三つのもの考えた。これは私がゴッホを好きで彼からの強い影響を受けて来た十代の頃から半ば無意識のうちに掴んで来たものであるが、この春ごろから、いよいよ戯曲に書くために改めて彼のことを考えたり、式場さんその他の研究書を調べたりした結果、さらにハッキリと確認したものである。劇を見てくれる人たちの参考になるかも知れないので、それを簡単に書く。

第一に、言うまでもなく、彼の持っていた高度に純粋な創造的な性格である。「あまりに純粋な」と言うべきかもしれない。生涯が、ほとんど燃えた生涯であった。生んで生んでさらに生んで生んで「燃烧」は常に白熱を帯びる。多分、彼の生活には、強度の芸術的昂奮と深い疲労しかなかった。ゆるやかな、中等度の気分や生活——普通の人々の「幸福」を作り上げるために必要なアヴェレージな要素は、極度に少なかった。彼においては走っているか倒れているかの二つの姿しかなかったとも言えよう。創造的性格というものは、いつでも多かれ少なかれそのようなものらしいが、ゴッホにおけるほど極端に純粋な例は、他に多く見られない。それは刻々に火が燃えているのと同じだ。美しいと同時に、あぶないような、怖ろしいような、感じにつきまとう。

ゴッホの生涯を見ていると、セツなくなり、少し息苦しくなって来るのは、たしかにそのセイである。私は彼を、普通言うところの精神病患者としては見ないのだが、右に述べたような意味でならば、彼の性格全体の中には「狂」に近いものがあつた。そして、それが、非常に強い美と真実の感じで、われわれを打つ。

第二のことは、ゴッホが徹頭徹尾「貧乏人の画家」であつたこと、言うところのプロレタリア画家の意では必ずしもない。貧乏に生れ、貧乏人の中に在り、貧乏人の気持で絵を描いたと言うことだ。サロンのためや、特権者たちのためには一枚も描いていない。しかもそれが、特に意気張った態度や、特定の思想体系から来たものでなく、きわめて自然なナイーヴなものとして出て来ている。それだけにまた、どんな場合にどんな目に逢つても取替えようのない根深い態度になっている。これがまた、私には、しんから美しく貴い姿に見える。

第三に、彼の中に生きていたキリスト教だ。ゴッホを、正当な意味でキリスト者と呼び得るかどうかには就ては議論があろう。また、現に、キリスト教の教師の家に生れ育つて青年時代に宣教師になって後しばらくしてキリスト教を捨てているのだから、「ゴッホの持っていたキリスト教」と言うのは、当らぬとも言える。私の言うのは、キリスト教を彼が捨

ててからさえも、彼の血肉の中に生き残りつづけた宗教性のことである。一般にキリスト教的伝統を持たない日本人がヨーロッパ人を理解しようとする時に最も大きな障害になるのは、この点である。それも、一つの理論ないしは観念としてならばある程度まで理解出来ないことはないが、理論や観念の域を脱した深奥の血肉の世界や日常の空気の中にまでにじみこんでいるキリスト教的実体となると、掴まえることがほとんど不可能なくらいに困難である。私がゴッホをとらえるのに一番困難を感じたのもこの点であった。しかも、たしかにゴッホの人間には終生を通じてキリスト教的血肉を除外しては理解出来ないものの在るのを私は感じる。実は彼の絵にも根幹の所にそれがあると思う。そしてその点が彼をして他の後期印象派の画家たち、またはその後の近代画家たちから区別している最も大きな要素のような気がする。

以上三つのことが、私がゴッホを掴まえようとした追求の結果であると同時に、ゴッホを掴まえるための重要な拠り所でもあった。

私の戯曲にそれらがどの程度にまで生きたものとして実現されているか、今のところ私自身にはハッキリわからない。ただそのために出来るだけの努力はした。後はさしあたり、戯曲をよんでくれ、劇を見てくれる人々の批判に、素直に耳を傾けたいと思う。

(一九五一年八月末)

#### 人生画家ゴッホ

画家は即ち画家とだけでたくさんで、それ以外の形容詞は要らないのだが、仮りに人生の画家という言葉が在るとするなら、ゴッホほどこれにふさわしい画家はいないであろう。

理屈ではない。また彼の生きがいの歴史を調べたうえでの結語のようなものでもない。ゴッホの絵を見て、ジカにわれわれの感ずるものとしてである。作品が彼の人生そのものとピッタリと一本になっている実感を持っていること。つまり「絵を生きている」こと彼のごとく素朴にして強烈な画家は他にあまりない。一枚のタブロウ全体でも、ひとタッチずつの中でも彼は生きている。

生きるということは、意識と無意識とを一度に働かして物にぶちあたることだ。行動の直中にキチガイになるということだ。そのことの直中に燃え、燃えつきるということだ。

画作十年の全作品を通じてそうであるが、特に完全に自己の独創に立って矢つぎ早に傑作を描いた晩年三、四年間の作品には、近代画家の大概にあるところの、自然を三段論法風に「解釈」した跡が、ほとんどない。無邪気に、無雑にただセッセと描いているだけ。自然や人間をながめたものを「それ自体」と信じ切って、それに筆を従わせているだけのようだ。絵を見る人の受け取り方まで計算に入れて、それに対応する「手」としての理論や構築や作為はないように見える。

「解釈」から絵を描けば、一方において唯美主義やデカダンスが生れ、一方においてキュービズム、アブストラクト、シュールその他が生れる。そのような絵になれた人たちが、



ゴッホの絵に物たりなさを感じずのも、いくらか当然ともいえよう。しかし、ゴッホの良さと強固さも実はその点に在る。

他の文化文物におけると同様に、絵も絵だけとして発達し爛熟すると、ライフから浮き上り、離れてしまい、そして衰弱する。それを時々、人生画家が出て来て救い、本道に立ちもどらせる。現在、パリその他に、アブストラクトやシュールを批判して否定して、もう一度強固な人生と実在を踏んまえて立とうとしつつ素朴なリアリストたちの動きが現われて来つつあるのはそれだろう。そして、それらがいろいろの意味でゴッホに血脈を引いていることは疑いのない所だろう。

美が美だけとしてライフから切り離されて追求された所で絵が描かれれば「手品」になる。西洋にも日本にも現在手品じみた絵が多過ぎる。そのことを反省する意味でもゴッホの絵は、今、丹念に振り返って見られる必要があると思う。

(「毎日新聞」一九五一年九月五日付)

## 炎の人

私がゴッホの絵に引きつけられ、彼の一生の足跡から強く動かされたのは、早く十代の中学一二年からのことである。

もともと絵がひどく好きで、青年時代まで画家になるつもりでいた。青年時代に、絵を描くだけではどうしても満たされない飢えのようなものから促されて詩を書き出し、それが発展してやがて劇作に移って行き今日に至っているが、その間も絵を描くことはやめない。時間が充分でないのと持続的に描かないため上達はしない。それに一枚の絵を永くつく tachina ので完成した絵は極く僅かしかない。現在も描いている。原稿を書くために二時間も机に坐っていると頭が痛くなってくるが、頭の痛い時でさえイーゼルに向って絵具をいじっていると三時間ぐらひは夢中に過ぎてしまう。絵画は主として感覚中心の仕事ゆえ、人を酔わせる作用があるからとも思うが、それよりも私という人間が本来ひどく感覚的な人間のためではないかという気がする。五官が過敏すぎるのである。とくに嗅覚と視覚がそうだ。物の匂いがあまり鼻に来るので、まるで犬のようだと人からいわれたことがなんどもある。また初夏の林の道などを歩いていると、あまりに多種多様の緑色が見えすぎて、その刺戟のために目まいを起して倒れることがある。私が神経衰弱になりやすいのは、これらの感覚過敏のためらしい。時にそれが呪わしいような気がする。しかし、次第に、それも自分に生れついたものだとかきらめるようになって来た。あきらめるといふよりも、これが自分というものだ。これらの過敏さを抜きにしては自分というものは存在し得なかったのだ、これは自分に与えられたものだ、してみれば自分にとってかけがえのないという意味で貴重なものであると考えるようになった。

私がゴッホに本能的に引きつけられることの理由に右のようなこともあるかも知れない。ゴッホの絵が唯単に良い絵として私に受け取られたのではない。実はゴッホの絵を「うま

い」と思ったり、「美しい」と思ったりしたことは、ほとんどないのである。ただドキンと  
するような感じがこちらに来るだけなのだ。彼の絵を貫いている根源的なイノチのような  
ものが、他人のもののようにでないジカな感じでこちらの内部に入りこんでしまった。だから  
私がゴッホから受けたものは影響とはいいいにくいかもしれない。もっと中心的なところ  
を動かされてしまったらしい。いわば私はゴッホを「食った」らしいのである。それが私  
の薬になったか毒になったか私は知らない。しかし、どうも食ったらしい。良かれ悪かれ  
食ったものは自分の血肉の一部になってしまっているのだろう。

私が時々ゴッホの絵の「ヘタさ」かげんが鼻について「なんとまあ小学生のようなヘタ  
さだ」と、まるで自分の作品のアラを見つけて嫌になった時と同じ気持ちに襲われたりする  
のも、そのためかもしれない。また、ゴッホと同じ血液を持ちながらゴッホの持たなかつ  
た静謐を持っていたジオットや、近代ではゴッホから出発してクラシックな安定の中に腰  
をすえたドラムなどに強く引かれるのもそのためらしいし、また、ルオウに敬礼しながら  
も彼の絵を永く見ていることに飽きてしまって「わかった、わかった。もうたくさんだ」  
といたくなるのもそのためらしい。それからまた、小林秀雄などが「麦畑の上を飛ぶ鳥」  
などを褒めちぎったりすると「じょうだんいってもらっては困る。あれは私の頭の調子が  
変になりきった時の、落ちついて絵具をしっかりとキャンバスに塗っていられなかった時の絵  
で、絵そのものが少し狂っている。異様なのは当然だろう。第一、あんたが打たれたとい  
う空のコバルトは、私の塗った時とは恐ろしく黒っぽく変色しているんだ。褒めるなら、  
せめてそれくらいのことにはわかった上で、もっとマシな絵を褒めなさい」とつぶやいて見  
たくなるのも、そのためかも知れないのである。

—それほど私にとって親しいものになってしまっていたゴッホではあるが、そのゴッホ  
のことを自分が戯曲に書くことがあろうなどとは想ってみたこともなかった。だから去年  
のはじめ劇団民芸の諸君からそれをすすめられた時には二重にギクリとした。一つはとん  
でもないことをいわれた気持ちと、一つは何か道具はずれを鋭く刺されたような気持ちだ  
った。いずれにしろ自分の力に及びそうには思われないので再三辞退したが、どうしても書け  
という。特に滝沢修君の熱意は烈しかった。それで、いろいろ考えたり調べたりしているう  
ちに、自分に書けるだろうとは思えなかったが、これほど少年時代からゴッホに動かされ  
て来ている人間だからゴッホのことを書く資格だけは有るのではないかと思った。すると  
パッと視界開けて書く気になった。

書くのはかなり苦しかった。画家の肉感を自分のうちにとらまえて離さないようにする  
ため、原稿紙ののっている机のわきに常にイーゼルを立てて置き、時々キャンバスに油絵具  
をつけては、指の先で伸ばしてみたりしながら書き進んだ。ゴッホが狂乱状態になって行  
く所を書いている時など、私の眼までチラチラと白い火花を見たりした。書きながら、だ  
から、ゴッホが錯乱して行く、行かざるを得ない必然性が、はじめてマザマザと私にわか  
った。そして今さらながら戯曲を書く仕事の良さと、それから怖ろしさが身にしみた。だ  
からこの作品を書いてはじめて私はゴッホを私なりに真に理解し得たといえる。

この作品で、かつてオランダに生きていたゴッホという画家がチャンと書けているとは私は思っていない。それはとても書けるものではない。まず西洋人である。西洋人には東洋人にはどうしてもよくわからない何かがある。次にゴッホの人間を深いところで決定づけていたキリスト教の実体がわれわれにはなかなか掴めない。この二つを掴むために私は私に出来る限りの努力はした。しかしこれでよいという気にはどうしてもなれなかった。

せいぜい「私がこんな人ではなかったろうかと思っているゴッホという人間」の姿の一部というところだろう。芝居としても上手に書けたという気にはどうもなれない。しかしゴッホという人間画家の一角に僅かながら爪を立てることだけは出来たと思う。

(『三好十郎作品集』より)

### ゴッホとのめぐりあい

言うまでもなくこの人は私にとって見も知らぬ外国人なのに、それに対して実に強い親近感を懐いている。それは非常に近いイトコのことでも考えるように強いもので、しかもそれがごく自然だ。この感じは「炎の人」を書くためにゴッホのことを調べたりしたために生れたものではなくて、ずっと以前からだ。

なぜだろうと考えても理由はよくわからない。第一ゴッホの絵を複製で見たり生涯のことを知ったのがいつだったか覚えていない。もともとすべてのことについての年月日についての記憶力が薄弱な人間だが、それにしてもこれほど強い影響を自分に及ぼしたゴッホとの最初のめぐりあいのことをこれほど忘れてしまっているのはチョット不思議だ。そうしてそのことがまた、ヒョイと気がついてみたら自分のイトコがすぐにそこに立っていたのに気がつきでもしたように、ゴッホへの親近感の深さや自然さの証拠になるかもしれない。

私は少年時代から青年時代へかけて非常に絵が好きで、人のかいた絵をみるのを好み自分でも水彩画を描いた。ことに中学の一年二年三年あたりの時代では夢中になって絵をかいた。主として自分の身の自然を写生した。今思い出してみると面白いことに私が生れて初めてまとまった金をかせいだのはその当時で、自分のかいた絵によってである。私はひどく貧乏で中学の学費だけは親戚の者たちからわずかづつ支給してもらっていたが、いつもほとんど金は持っていない。それが書店の店頭で雑誌を見ている間に、その当時あった雑誌の一つで確か武侠世界という雑誌で表紙の絵を懸賞募集していることを知ったので急いで描いて送ったが、まさかと思っていると次の月のその雑誌の表紙にどこかで見たような絵がのっていると思ったらそれが自分の絵で、びっくりしていると賞金が送ってきた。当時の金としては多額のものでそれに十八金製のエバーシャープの副賞がついていたように覚えている。その金でかねてほしいと思っていた書物や絵具などを買った上に、かねておごってもらったばかりの友達たちに今度はこちらがチャンポンやまんじゅうをふんだんにおごってやって一週間くらいで金の方は使ってしまった。当時中学の絵画の先生から

愛されて私だけはクラス中で特別に優遇され、年一回県庁で催される六人の画家たちによって私一人が作品を出品する資格を与えられたりした。その時代の大人の画家たちとも二三知り合いになったりして、いずれそういう人たちからゴッホの話を聞いたり画集を見せてもらったに違いない。ゴッホの絵を初めて見た時分は非常に驚いたに違いないが、今からそれを思ってみても格別それほどいちじるしいことが起きたようには感じない。まるで水が低い方に流れるように、自分がゴッホを知ったということが自然に思われるのである。

思い返してみると私の青少年時代は普通の人に比べてびっくりするくらい変化の多い生活であったが、ことに中学の二三年ぐらい私の上には境遇の点でもまた私という人間形成の点でも言ってみればシュトルム・ウント・ドラングの時代であって混乱と動揺に満ち満ちた月日であった。そうだ、当時の私がおそろしく貧乏で孤独でそして絵が好きであったという点では、ゴッホと類似があるかもしれない。食べる物も学費も着るものもいっさいがっさいが気まぐれな叔父叔母のめぐみによるものであって、学年末に至るまで教科書がそろわないことが常例であった。それに両親の味を知らない孤児で、自分を育ててくれた祖母は十二歳の時にすでに亡くなっていた。親戚や友達が多かったが心はいつでも肉親の愛に飢えていた。絵は前述の通り何よりも好きであったが、その水彩画を描く画用紙や絵具が完全にそろっていたということはめったになかった。それでいながら私の性格にはどこかしらのん気な所があって、そういうことをさまで苦にやんでいなかった点はゴッホの若いころとはだいぶ違うようだが、しかし貧乏で孤独であったという点では似ていたと言えよう。貧しい人間は本能的に貧しい人がわかるものだ。孤独な人間はこれまた本能的に孤独な人をかぎわける。そうだ、私のゴッホに対する強い親近感はあるいはそのようなところにも根ざしているかとも思う。

しかしもっと根本的にはゴッホの絵の本質に私が強く強く自分の内部を動かされたからだという気がする。彼の絵をじっと見ている私の内部の、ほとんど自分にも気がつかないような深いところが刺戟され、そこがうずき走るように快い。私は一般に絵画が好きだからどのような画家の絵も喜んで見るが、ゴッホの絵を見て感じを与えられる画家は他に幾人もいないのである。この感じは私に非常に親しいものであるのと同時にいつでも新鮮なものだ。言葉でも文章でもこれは説明ができない。しかしゴッホの絵を見ていると、それがそこに実在しているということをなんの疑いもなく私は感じる。そしてゴッホのことを「真の画家である」と思うのである。

(一九五八年九月上旬)

---

底本：「炎の人——ゴッホ小伝——」而立書房

1989（平成元）年10月31日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：伊藤時也

2009年3月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 28. ニイチェに就いての雑感

萩原朔太郎

ニイチェの世界の中には、近代インテリのあらゆる苦悩が包括されてゐる。だれでも、自分の悩みをニイチェの中に見出さない者はなく、ニイチェの中に、自己の一部を見出さないものはない。ニイチェこそは、実に近代の苦悩を一人で背負つた受難者であり、我々の時代の痛ましい殉教者であつた。その意味に於て、ニイチェは正しく新時代のキリストである。耶蘇キリストは、万人の罪を一人で背負ひ、罪なくして十字架の上に死んだ。フリドリヒ・ニイチェもまた、近代知識人の苦悩を一人で背負つて、十字架の上に死んだ受難者である。耶蘇と同じく、ニイチェもまた自己が人類の殉教者であり、新時代の新しいキリスト（救世主）であることを自覚して居た。それ故にこそ、彼の最後の書物に標題して、自ら悲壮にも **Ecce homo**（この人を見よ）と書いた。**Ecce homo** とは、十字架に書きつけられた受難者キリストの標語であつた。ニイチェの意味に於ては、それがキリストに叛逆する標語であつた。あの中世紀の魔教サバトの徒は、耶蘇とキリスト教とを冒瀆する目的から、故意に模擬の十字架を立てて裸女を架け、或は幼児を架けて殺戮した。反キリストの詩人ニイチェの意味に於て、**Ecce homo** がまた同じく、キリスト教への魔教的冒瀆を指示してゐるにちがひない。（彼は常にさうした辛辣な反語を好んだ。）にもかかはらず、ニイチェこそは新しい時代の受難者、耶蘇キリストにまちがひなかつた。

ニイチェの著書は、おそらく人間の書いた書物の中で、最も深遠で、且つ最も難解なものの一つであらう。その深遠な理由は、思想が人間性の苦悩の底へ、無限に深くもぐりこんで抜けないほどに根を持つて居ると、多岐多様の複雑した命題が、至るところで相互に矛盾し、争闘し、容易に統一への理解を把握することができないこと等に関聯して居る。ニイチェほどに、矛盾を多分に有した複雑の思想家はなく、ニイチェほどに、残忍辛辣のメスをふるつて、人間心理の秘密を切りひらいた哲学者はない。ニイチェの深さは地獄に達し、ニイチェの高さは天に届く。いかなる人の自負心をもつてしても、十九世紀以来の地上で、ニイチェと競争することは絶望である。

ニイチェの著書は、しかしその難解のことに於て、全く我々読者を悩ませる。特に「ツァラトストラ」の如きは、片手に註解本をもつて読まない限り、僕等の如き無識低能の読書人には、到底その深遠な含蓄を理解し得ない。「ツァラトストラ」の初版が、僅かにただ三部しか売れなかつたといふ歴史は、この書物の出版当時に於て、これを理解し得る人が、全独逸に三人しか居なかつたことを証左して居る。彼の著書の中で、比較的初学者に理解し易いと言はれ、したがつて又ニイチェ哲学の入門書と言はれるアフォリズム「人間的な、あまりに人間的な」でさへも、相当に成育した一般の文化常識と、特に敏感な詩人的感覚

とを所有しない読者にとっては、決して理解し易い書物ではない。

ニーチェの理解に於ける困難さは、彼の初期に於ける少数の著書論文（悲劇の出生など）を除いて、その後の者が多くアフォリズムの形式で書かれて居ることにある。彼がこの文章の形式を選んだのは、一つには彼の肉体が病弱で、体系を有する大論文を書くに適しなかつた為もあらうが、実にはこの形式の表現が、彼のユニークな直覚的の詩想や哲学と適応して居り、それが唯一最善の方法であつたからである。アフォリズムとは、だれも知る如くエッセイの一層簡潔に、一層また含蓄深くエキスをされた文学（小品エッセイ）である。したがつてそれは最も暗示に富んだ文学で、言葉と言葉、行と行との間に、多くの思ひ入れ深き省略を隠して居る。即ち言へば、アフォリズムはそれ自ら「詩」の形式の一種なのである。（したがつて西洋の詩人たちは、独りニーチェに限らず、グウルモンでも、ジャン・コクトオでも、ボードレエルでも、ヴァレリイでも、すべて皆アフォリズムを書いている。それは正しく「詩人の文学」なのである。）

アフォリズムは詩である。故にこれを理解し得るものも、また詩人の直覚と神経とを持たねばならない。そこでニーチェを理解するためには、読者に二つの両立した資格が要求される。「詩人」であつて、同時に「哲学者」であることである。純粹の理論家には、もちろんニーチェは解らない。だが日本で普通に言はれてるやうな範疇の詩人（彼等は全く没思想である）にも、また勿論ニーチェは理解されない。だがその二つの資格をもつ読者にとって、ニーチェほど興味が深く、無限に深遠な魅力のある著者は外にない。ニーチェの驚異は、一つの思想が幾つも幾つもの裏面をもち、幾度それを逆説的に裏返しても、容易に表面の絵札が現れて来ないことである。我々はニーチェを読み、考へ、漸く今、その正しい理解の底に達し得たと安心する。だがその時、もはやニーチェはそれを切り抜けて居る。彼は常に、読者の一步前を歩いて居る。彼は永遠に捉へ得ない。しかもただ一步で、すぐ捉へることができるやうに、虚偽の影法師で欺きながら、結局あの恐ろしい狂気が棲む超人の森の中へ、読者を魔術しながら導いて行く。

ニーチェを理解することは、何よりも先づ、彼の文学を「感情する」ことである。すべての詩の理解が、感情することの意味につきてるやうに、ニーチェの理解も、やはり感情することの外にはない。そして感情するためには、ニーチェの言葉の中から、すべての省略された意味、即ち彼の慣用する音楽術語で言ふ *Con moto*（思ひ入れ）の部分、自分で直感的に会得せねばならない。そして此処に、彼の理解への最も困難な鍵がある。たしかに人の言ふ如く、カントの哲学も難解である。特に僕等のやうな「柔軟な頭脳」の所有者にとっては、あの幾何学公式のやうな書体で書かれた「純粹理性批判」の第一頁を読むだけでも、独逸的軍隊教育の兵式体操を課されたやうで、身体中の骨節がギシギシと痛んで来る。カントは頭痛の種である。しかし一通り読んでしまへば、幾何学の公理と同じく判然明白に解つてしまふ。カントに宿題は残らない。然るにニーチェはどこまで行つても宿題ばかりだ。ニーチェの思想の中には、カント流の「判然明白」が全く無い。それは詩の情操の中に含蓄された暗示であり、象徴であり、余韻である。したがつてニーチェの善き

理解者は、学者や思想家の側にすくなくして、いつも却つて詩人や文学者の側に多いのである。

近代の文学者の中で、ニーチェほど大きく、且つ多方面に影響をあたへたものはない。思想方面では、レーニンやトロツキイの共産主義者を始め、その対蹠であるファッショや強権主義者等までが、多少みな間接にニーチェの影響を蒙つて居る。文学の方面では、ドストイェフスキイや、ストリンドベルヒヤ、アルチバセフや、アンドレ・ジイド等が、すべて皆ニーチェから影響されてゐる。特に就中、詩人の影響されたことは著るしく、独逸のデエメル、イワン・ゴール、仏蘭西のグウルモン、ジャン・コクトオ、ヴァレリイ等、殆んど近代の詩人にして、ニーチェからの思想的、哲学的影響を受けないものは一人もない。

それほどニーチェは、多くの影響を各方面にあたへながら、世に「ニーチェスト」とか「ニーチェズム」とかいふ言葉がないのは不思議であるが、実際ニーチェの思想の中には、多くの矛盾した対立があり、且つ複雑した多要素が混入して居るので、単純にこれを一つの概念でイズムに形態化することができないのである。人々は各々ニーチェの多様質の宇宙の中から、夫々の部分をとつて自家の食餌にしてゐる故、見方によればそのすべてがニーチェズムでもあるけれども、同様にまた、そのすべてがニーチェズムでないのである。甚だしきは独逸近代の軍国主義さへも、ニーチェの影響だと見る人がある。それによつてアメリカ人は、世界大戦の責任者をカイゼルとニーチェとの罪に帰した。

日本に於けるニーチェの影響は、しかしながら皆無と言ふ方が当つて居る。日本の詩人で、多少でもニーチェの影響を受けたと思はれる人は、過去にも現在にも一人も居ない。(生田春月だけが、少しばかりその影響を受けてた。) 況んや小説家の中にも皆無である。ただ一人、僕の知る範囲で芥川龍之介が居た。彼は自殺の一二年前から、その作品の風貌を全く変へたが、これがニーチェの影響であつたことは、その「歯車」「西方の人」「河童」等の作品によく現れて居る。且つ彼はそのエッセイにも、ニーチェの標題をそのままイミテートして「文芸的な、あまりに文芸的な」と書いた。特に「歯車」と「西方の人」の中には、ニーチェが非常に著るしく現れて居り、死を直前に凝視してゐたこの作者が、如何に深くニーチェに傾倒して居たかがよく解る。

西洋の詩人や文学者に、あれほど広く大きな影響をあたへたニーチェが、日本ではただ一人、それも死前の僅かな時期に於ける一小説家だけに影響をあたへたといふことは、まことに特殊な不思議の現象と言はねばならない。そのくせニーチェの名前だけは、日本の文壇に早くから紹介されて居た。生田長江氏はその全訳を出す以前にも、既に高山樗牛、登張竹風等の諸氏によつて、早く既に明治時代からニーチェが紹介されて居た。その上にもニーチェの名は、一時日本文壇の流行児でさへもあつた。丁度大正時代の文壇で、一時トルストイやタゴールが流行児であつた如く、ニーチェもまたかつて流行児であつた。そしてトルストイやタゴールが廃つた如く、ニーチェもまた忽ちに廃つてしまつた。それも



その筈である。人々はただニーチェの名前だけを、ジャーナリズムのニュースで知つてるだけで、実際には一頁のニーチェも読んで居なかつたのだ。彼等の中で、比較的忠実に読んだ人さへが、単なる英雄主義者として、反キリストや反道德の痛快なヒーローとして、単純な感激性で崇拜して居たこと、あたかも大正期の文壇でトルストイやドストイェフスキイやを、単なる救世軍の大將（人道主義者）として、白樺派の人々が崇拜して居たに同じである。甚だしきは、かつてニーチェズムの名が、本能主義や享樂主義のシノニムとして流行した。それからしてジャーナリスト等は、三角関係の恋愛や情死者等を揶揄してニーチェストと呼んだ。

何故にニーチェは、かくも甚だしく日本で理解されないだらうか。前にも既に書いた通り、その理由はニーチェが難解だからである。たしかメレヂコフスキイだかが言つたやうに、ニーチェの読者は、インテリの中での最上層に生活して居る読者である。ところで、日本のインテリは、欧羅巴のそれに比して一般に程度が低く、知識人としての下層に居る。単にそればかりでなく、日本の詩人や文学者は、一般に言つて「哲学する精神」を所有して居ない。そしてこれが、ニーチェを日本の理解からさまたげて居る最も根本の原因である。近頃日本の文壇では「日常性の哲学」といふことが言はれて居るが、元来文学者の生活には、常に「哲学する日常性」が必要なのである。即ちゲーテも言つて居るやうに、詩人に必要なものは哲学でなくして、哲学する精神である。ベルグソンやデルタイは言ふ。眞の意味の哲学者とは、哲学を学問する人のことでなくして、哲学する精神を氣質し、且つメタフィジックを直覚する人のことである。即ち眞の哲学者とは、所謂「哲学者」の謂でなくして「詩人」の謂である。詩人こそ眞の哲学者であると。文学者がもし眞の文学者であるならば、このベルグソン等の意味に於ける哲学者でなければならない。ところが日本の文壇には、その哲学者が甚だすくないのである。日本人は昔から「言あげせぬ国民」であり、思考したり哲学したりすることを好まない。日本の詩人は、芭蕉、西行等の古から、大正昭和の現代に至るまで、皆一つの極つた範疇を持つて居る。その範疇といふのは、単に感覚や気分だけで、自然人生を趣味的に觀照するのである。日本の詩人等は、昔から全く哲学する精神を欠乏して居る。そして此処に詩人と言ふのは、小説家等の文学者一般をも包括して言ふのである。

ニーチェは詩人である。何よりも先づ詩人である。しかしながら彼のポエジイには、多くの深遠な思想や哲学が含まれて居る。その内容を理解し得ないでは、ニーチェの詩を感情し得ない。しかも彼の思想や哲学や、学問する頭脳では理解し得ず、哲学する精神によつてのみ理解されるのである。その哲学する精神を欠いた日本の詩人や文学者にとつて、ニーチェが不可解なのは当然と言はねばならぬ。日本の詩人や文学者は、動物のやうに感覚がよく發育して居る。どんな深遠な美の秘密でさへも、いやしくも感覚される限りに於て、すぐに本質を嗅ぎつけてしまふ。彼等は全く動物の叡智を持つて居る。その不可思議な独特の叡智によつて、彼等はボードレエルを嗅ぎつけ、ドストイェフスキイを嗅ぎつけ、象徴派の詩を嗅ぎつけ、自然主義の文学を嗅ぎつけた。しかし流石にその智慧だけでは、

ニーチェを嗅ぎつけることが出来ないのである。

ニーチェはその哲学詩人としての本領の外に、純粹の詩人としての抒情詩を書いて居る。しかし抒情詩人としてのニーチェには、僕としてあまり崇敬できない点がある。ゲーテも言ふ如く、詩人に哲学する精神は必要だが、詩に哲学を語ることは望ましくない。特に抒情詩に哲学は禁物である。ニーチェの場合にあつては、この禁物が多すぎる為、詩がまるで理窟っぽい〔#「理窟っぽい」はママ〕警句のやうなものになつてしまつて居る。理智で考へながら読むやうな文学は、純正の意味で「詩」とは言へないのである。しかし流石にその二三の作品だけは、ニーチェでなければ書けない珠玉の絶唱で、世界文学史上にも特記さるべき名詩である。特に「今は秋、その秋の汝の胸を破るかな！」の悲壮な声調で始まつて居る「秋」の詩。及び

鴉等は鳴き叫び

風を切りて町へ飛び行く

まもなく雪も降り来らむ――

さいはひ

今尚、家郷あるものは 幸 福 なるかな。

の初聯で始まる「寂寥」の如き詩は、その情感の深く悲痛なることに於て、他に全く類を見ないニーチェ独特の名篇である。これら僅か数篇の名詩だけでも、ニーチェは抒情詩人として一流の列に入り得るだらう。

ニーチェのショーペンハウエルに対する関係は、新約全書の旧約全書に対するやうなものである。だれも知る通り、旧約の神エホバは怒と復讐の神であり、新約の神は愛と平和の神である。この二つの神は正反対の矛盾として対蹠して居る。しかも新約は旧約の続篇で、且つ両者の精神を本質的に共通して居る。ニーチェのショーペンハウエルに於ける場合も、要するにまたこれと同じである。ニーチェは如何にその師匠に叛逆し、昔の先生を「老いたる詐欺師」と罵つたところで、結局やはりショーペンハウエルの変貌した弟子にすぎない。彼はショーペンハウエルが揚棄した意志を、他の一端で止揚したまでである。あの小さな狡猾さうな眼をした、梟のやうな哲学者ショーペンハウエルは、彼の暗い洞窟の中から人生を隙見して、無限の退屈な欠伸をしながら、厭がらせの皮肉ばかりを言ひ続けた。一方であの荒鷲のやうなニーチェは、もつと勇敢に正面から突撃して行き、彼の師匠が憎悪して居たところの、すべての **Homo** と現象に対して復讐した。言はばニーチェは、師匠の仇敵を討つた勇士のやうなものである。文部省の教科書でも、ニーチェは大に賞頌して書かれねばならない。

最後に、僕自身のことを話さう。僕はショーペンハウエルから多くを学んだ。僕の第二

詩集「青猫」は、その惑溺の最中に書いた抒情詩の集編であり、したがってあのショーペンハウエル化した小乗仏教の臭気や、性慾の悩みを訴へる厭世哲学のエロチシズムやが、集中の詩篇に芬々として居るほどである。しかし僕は、それよりも尚多くのをニーチェから学んだ。ニーチェは正しく僕の「先生」である。だが僕の学んだ部屋は、主としてニーチェの心理学教室であつた。形而上学者としてのニーチェ、倫理学者としてのニーチェ、文明批判家としてのニーチェには、僕として追跡することが出来なかつた。換言すれば、僕は権力主義者でもなく、英雄主義者でもなく、況んやツァラトストラの弟子でもない。僕は「心理学」と「文学」だけを彼に学んだ。僕の他の教師であるところの、ポオやドストイェフスキやから、丁度その同じ学科だけを学んだやうに。

元来、僕は気質的にデカダンスを傾向した人間である。僕がポオやドストイェフスキに牽引されるのも、つまりは彼等の中に、異常性格者的なデカダンスがあるために外ならない。僕のやうな人間が、もし自然のままの傾向で惰力して行つたら、おそらく辻潤や高橋新吉のやうな本格的のダダイストになつたにちがひない。それが幸ひ（だか不幸だか知らないが）一つの昂然たる貴族的精神によつて、今日まで埋没から救はれてるのは、ひとへに全くニーチェから学んだ訓育の為である。そしてこの一事が、僕のニーチェから受けた教育のあらゆる「全体のもの」なのである。

---

底本：「日本の名随筆 別巻 92 哲学」作品社

1998（平成 10）年 10 月 25 日第 1 刷発行

底本の親本：「萩原朔太郎全集 第九巻」筑摩書房

1976（昭和 51）年 5 月

入力：加藤恭子

校正：門田裕志、小林繁雄

2005 年 5 月 3 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

[#...] は、入力者による注を表す記号です。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

# 29. 学生と教養

## ——教養と倫理学——

倉田百三

### 一 倫理的な問いの先行

何が真であるかいつわりであるかの意識、何が美しいか、醜いかの感覚の鈍感な者があつたら誰しも低級な人間と評するだろう。何が善いか、悪いか、正不正の感覚と興味との稀薄なことが人間として低卑であることはそれにもまして恥じねばならぬことである。人の道、天の理、心の自律——近くは人間学的倫理学の強調するような「世の中の道」にまでひろがるところの一般の倫理的なるものへの関心と心得とはカルチュアの中心題目といわねばならぬ。人生の事象をよらず善悪のひろがりから眺める態度、これこそ人格という語をかたちづくる中核的意味でなければならぬ。私はいかなる卓越した才能あり、功業をとげた人物であつても、彼がもしこの態度において情熱を持っていないならば決して尊敬の念を持ち得ないものである。その人生における職分が政治、科学、実業、芸術のいずれの方面に向かおうとも、彼の伝記が書かれるときには、あのワシントンのそれのように、小学校の教科書には「彼は偉大にして、善き人間なりき」と書かれるようにありたいものである。自分如きも、青春期、いのちの目ざめのときの発足は「善い人間」になりたいということであつた。「最も善い人間が最も幸福でなければならぬ」と自分は思った。自分はまだそのときカントの第二批判を知らなかったが、自分のたましいの欲するところはとり

#### フォルコンメンデスゲート

もなおさずカントの 至 完 善 の要請であつたのである。人間の倫理的養成がいかにもわれらの稟性に本具しているかはこれでも思いあたるのである。その青春時代学芸と教養とに発足する時期において、倫理的要求が旺盛であるか否かということはその人の一生の人格の質と品等とを決定する重大な契機である。倫理的なるものに反抗し、否定するアンチモラルはまだいい。それはなお倫理的関心の領域にいるからだ。最も許しがたいのは倫理的なものに関心を持たぬアモラルである。それは人間としての素質の低卑の徴候であつて、青年として最も忌むべき不健康性である。健康なる青年にあつてはその性慾の目ざめと同時に、その倫理的感覚が呼びさまされ、恋愛と正義とがひとつに融かされて要請されるものである。

#### エティク

さてかような倫理的要請は必ず倫理学という学に向かうとは限らない。一般に科学というものを知らなかった上古の人間も学としての形態の充分ととのっていない支那や日本の諸子百家の教えも、また文字なき田夫野人の世渡りの法にも倫理的関心と探究と実践と

はある。しかし現代に生を享けて、しかも学徒としての境遇におかれたインテリゲンチヤの青年にあっては、その倫理的要請は倫理学というひとつの合理的なる学に向かうということはきわめて自然なことである。自分の如きもその過程をとった一人であった。

上述の如く倫理学の研究にはまず人生の事象についての、倫理的関心と情熱とが先行しなければならぬ。そしてその具体的研究の第一着手は倫理的な問いから発足しなければならぬ。問いはすべての初めである。しかもまた問いはその解決でさえもあるのだ。ハイデッガーが「問いは何ものかへの問いとして『問われているもの』を持っている」といってするように、問いの中にすでにその事柄の本質が横たわっているのである。問いなくして倫理学の研究に着手することは無意味である。また問いこそその討究を真剣ならしめる推進機である。いかに問うかということ、その問い方の大いさ、深さ、強さ、細かさがやがてその解答のそれらを決定する条件である。故に倫理学の書をまだ一ページもひるがえさぬ先きに、倫理的な問いが研究者の胸裡にわだかまっていなければならぬ。そして実はその倫理的な問いたるや、すでに青年の胸を悩まし、押しつけ、迷わしめているところの、活ける人生の実践的疑団でなくてはならないのだ。

かくてこそ倫理学の書をひもどくや、自分の悩んでいる諸問題がそこに取り扱われ、解決を見出さんとして種々の視角と立場とより俎上にあげられているのを見て、人事ならぬ思いを抱くであろう。たといそれは充分には解決されず、諸説まちまちであり、また結論するところ自分を完くは満足させてくれなくとも、ともかくも自分の関心せずにおられぬ活きた人生の実践的問題がとりあげられ、巷間の常識ではそのままうち捨てられているのに、ここでは鋭い問いを發し熱心に討究されているのを見出しては、わが身に近く感じずにはいられない。この身に親しいインティメイトな感じが倫理学への愛と同情と研究の

コンスタンイン

恒 心 とを保證するものなのである。

## 二 倫理学の入門

倫理学の祖といわれるソクラテス以来最近のシェーラーやハルトマンらの現象学派の倫理学にいたるまで、人間の内面生活ならびに社会生活の一切の道徳的に重要な諸問題が、それを一貫する原理の探究を目ざしてとりあげられていないものはない。しかし初学者が倫理学研究の入門として、上述の倫理的問いをもって発足するには、やはりテオドル・リップスの『倫理学の根本問題』などが最もいいであろう。もつともこれはコーヘンとともに新カント派のいわゆる形式主義の倫理学であって、流行の「実質的価値の倫理学」とは相違した立場であるが、それにもかかわらず、深い内面性と健やかな合理的意志と、ならびに活きた人生の生命的交感とをもって、よく倫理学の本質的に重要な諸**根本**問題を取りあげその解決、少なくとも解決の示唆を与えているからである。この本は生の臭覚の欠けたいわゆる腐儒的道学者の感がなく、それかといって芸術的交感と社会的趨勢とに気をひ

かれすぎて、内面的自律の厳肅性の弱くなったきらいがなく（現象学派には多少この傾きがなくもない）意志の自律性を強靱に固守する点で形式的主観的でありながら、人間行為の客観的妥当性を強調して、主観的制約を脱せしめようと努め、また学的には十分な生の芸術的感覚の背景が行間に揺曳して、油気のない道学者の感がないからである。

初学者はこの書によって入門し、倫理学の根本課題の所在と、その解決の諸方途との手引きを得ることを自分は薦めたい。

私のこの稿は専門の倫理学者になる青年のためではなく、一般に人間教養としての倫理学研究のためであるが、人間の倫理的疑問及びその解決法は人と所と時とによって多様であるように見えても、自ら、きまった、共通なものである。まずその概観を得るがいい。それとともに倫理学史を読むべきだ。これは古今を縦に貫いて人間の倫理的思想が如何に発展し、推移して来たかを見るためである。後なるものは前なるものの欠陥を補い、また人間の社会生活の変革や、一般科学の進歩等の影響に刺激され、また資料を提供されて豊富となって来ている。しかし後期のものがすべての点において前期のものにまさっているとはいえない。ある時代には人性のある点は却って閑却され、それがさらに後にいたって、復活してくることは珍しくない。そしてその復活は元のままのくりかえしではなく必ず新しく止揚されて、現段階に再登場しているのだ。その二千五百年間の人間の倫理思想の発展と推移とを痕づけることは興味津々たるものである。

倫理学史にはフリードリッヒ・ヨードルの『倫理学史』、ヘンリー・シヂウィックの『倫理学史の輪郭』、ニコライ・ハルトマンの『独逸観念論史』等がある。邦文には吉田博士の『倫理学史』、三浦藤作の『晩近倫理学説研究』等があるが、現代の倫理学、特に現象学派の倫理学の評述にくわしいものとしては高橋敬視の『西洋倫理学史』などがいいであろう。しかしある人の倫理学はその人の一般哲学根柢の上に築かれないものはないから、倫理学の研究は哲学及び哲学史の研究に伴わねばならぬのはいうまでもない。しかしここではそれには触れない。

倫理学の根本問題と倫理学史とを学ぶときわれわれは人間存在というものの精神的、理性的構造に神秘の感を抱くとともに、その社会的共同態の生活事実の人間と起源を同じくする制約性を承認せずにはいられない。それとともに人間生活の本能的刺激、生活資料としての感性的なるものの抜くべからざる要請の強さに打たれるであろう。この三つのものの正当なる権利の要求を、如何に全人として調和統合するかが結局倫理学の課題である。

### 三 文芸と倫理学

人生の悩みを持つ青年は多くその解決を求めて文芸に行く。解決は望まれぬまでも何か活きた悩みに触れてもらいたいために小説や、戯曲に行く。それはもとより当然である。文芸はこの生の具象的な事実をその肉づけと香気のままに表現するものだからだ。少なくともそこにはかわいた、煩鎖な概念的理窟や、腐儒的御用的講話や、すべて生の緑野から

遊離した死骸のようなものはない。しかし文芸はその約束として個々の体験と事象との具象的描写を事とせねばならぬ故、人生全体としての指導原理の探究を目ざすことはできぬ。それ故一定の目的をもって文芸に向かうものにとっては、それは生きてはいるが低徊的である。それは行為の法則を与えようとしない。行為そのものを描く。ときとしては末梢の些末事と取り組んで飽くことを知らない。人生を全体として把握し、生活の原理と法則とを求めるものは倫理学に行くべきだ。これは文芸に求めるのが筋ちがいだからだ。もとより倫理学は学としての約束上概念を媒介としなければならぬ。文芸の如く具象的であることはできない。しかしすぐれた倫理学を熟読するならば、いかに著者の人間が誠実に、熱烈に、条理をつくして、その全容を表現しているかを見出して、敬慕の念を抱かずにはいられないであろう。それは文芸の傑作に触れた感動にも劣るものではない。そしてその感染性とわれわれの人格教養の血肉となり、滋養となり、靈感とさえもなる力もまた文芸の作品に劣るものではない。ただ文芸には文芸の約束があり、倫理学にはその特殊の約束があるのみである。カントの道德哲学を読んで人間理性の自律の崇高感に打たれないものはないであろう。

倫理学は人間行為の指導原理と法則とを与えようとするのみならず、また学者の個性をも表現する。コーヘンの『純粹意志の倫理学』と、ギョーの『義務と制裁のない倫理学』とを比較するならば、その個性の対比は文芸作品の個性の差異の如くいちじるしい。所詮倫理学は死せる概念の積木細工ではなくして、活きた人間存在の骨組みある表現なのである。この骨組みの鉄筋コンクリート構造に耐え得ずして、直ちに化粧煉瓦を求め、サロンのデコレーションを追うて、文芸の門はくぐるが、倫理学の門は素通りするという青年学生が如何に多いことであろう。しかしすぐれた文学者には倫理的教養はあるものである。人間の教養として文学の趣味はあっても倫理学の素養のないということは不具であって、それはその人の美の感覚に比し、善の感覚が鈍いことの証左となり、その人の人間としての素質のある低さと、頹廢への傾向を示すものである。美の感覚強くして善の関心鈍きとき、その美は感覚的の美とならざるを得ない。したがってかかる人の文芸の趣味はまた高い種類のものとは想像出来ないのである。リップスの『美学』を読むものはいかに彼の美の感覚が善の感覚と融合しているかを見て思い半ばにすぎるであろう。しかし生を全体として把握しようとするわれわれの目から見るとき、かくの如きは当然のことである。『モダンペインター』の著者ラスキンはまた熱心な善の使徒であった。美のセンスと善のセンスとがともに強く、深く、濃まやかであることが第一流の人間としての欠くべからざる教養である。

自分如きも文芸家となったけれども、学窓にあったときには最も深い倫理学者になることを理想とし、当時倫理学が知識青年からかえり見られなかった頃に、それを公言し、ほりともしていた。

文芸を愛好する故に倫理学を軽視するという知識青年の風潮は確かに青年層の人格的衰弱の徴候といわねばならぬ。



#### 四 社会運動と倫理学

青年層にはまた倫理学を迂遠でありとし、象牙の塔に閉じこもって、現実の世相を知らないものの机上の空論であるとしてかえり見ない向きもある。しかし街頭の実践運動家といえども倫理的な指導原理を持ち、それによって社会革新の情熱を刺衝されないものは少ない。それどころか自分の社会革新の思想の正しい所以を合理的に根拠づけんとするやみがたい要求から自ら倫理学を発表さえもしている。アナキストとして有名なクロポトキンには著書『倫理学』があり、マルクス主義運動家時代のカウツキーにさえ『倫理学と唯物史観』の著があるくらいである。ドイツ無産政党の組織者であったラサールには倫理的エッセイ多く、エンゲルスや、シュモルラーには社会主義的倫理思想の論述の少ないことは周知の如くである。そればかりでなくミルや、シヂウィックや、英国経験学派の系統を引く功利主義の倫理学はほとんどことごとく「最大多数の最大幸福」を社会理想として実現せんとする、多かれ少なかれ、社会改良運動の実践と結びついたものであり、現実のイギリス社会に影響する所大であったものである。

街頭の実践運動の背後には常に偉大なる思想がある。そして人間を実践的社会運動に駆

る思想は倫理的な思想である。共産主義の運動への情熱が日本の青年層を風靡し、犠牲的な行動にまで刺衝したのは、同主義の唯物的必然論にもかかわらず、依然として包蔵している人道主義的思想のためであったのだ。正義をもって社会悪を克服するという倫理的な根拠なくして、単なる物的必然力によって、人間は犠牲的奉仕にまで感奮することは出来るものではない。

倫理思想は内側から社会を動かす原動力である。そして倫理学はその実践への機を含んでしかも、直接に発動せず、静かに、謙遜に、しかも勇猛に徹底して、その思想の統一をとげ、不落の根拠を築きあげようと企図するものであり、そこには抑制せられたる実行意志が黙せる雷の如くに被覆されているのである。

倫理学を迂遠であり、机上の空論であるとして軽視するのはただ目先だけの短見にすぎない。真に社会に善事を成さんとする志有る者は軽忽に実行運動に加わる前に、しばらく意志を抑制して、倫理学を研究する必要があるのである。何が社会的に善事であるかを知らずして実行することは出来ず、行為の主体が自己である以上は自己と社会との関係を究めないわけにはいかないからである。それ故に倫理学の研究は単に必要であるというだけでなく、真摯な人間である以上、境遇が許す限りは研究せずにはいられないはずの学問なのである。

#### 五 根本問題の所在

この小さな紙幅に倫理学の根本問題を羅列することは不可能である。しかし具体的に問題の所在を示すために二、三の例証を引くことは絶対に必要である。

モラル ジットリヒカイト  
先ず道德思想と 道 徳 との弁別の問題がある。リップスによれば、モラルは時と処と人によって異なる道德的見解、要求の類であり、如何なる民族も、階級も、個人もそれぞれこれを持っている。かかるモラルには真に道にかなう因子が含まれているに相違ないが、人間が人間である限り、道にかなわぬものが混じているのを免れない。ヒルデブランドの道德的価値旨の説のように、人間の傲慢、懶惰、偏執、欲情、麻痺、自敬の欠乏等によって真の道德的真理を見る目が覆われているからだ。倫理学はこの道德旨を克服して、あらゆる人と時と処とにおいて不易なる道德的真理そのもの、ジットリヒカイトを見出すことを任務とする。

かかる普遍的に妥当なる道德的真理が存在するか否かがすでに根本的な問題である。た

モラル  
たとえば唯物史観的な倫理学は一定の生産関係、ある階級に妥当なる 道 徳 のほかは認めないであろう。また種々に道德を比較し、分析し、記述することを任務とするという倫理学もある。確かにわれわれが倫理的な問いを持つにいたった痛切な原因にはこの時と処と人によってモラルが異なるところに発する不安と当惑とがあるのである。

アナロジー  
これに対してリップスはいふ。一つの 比 論 をとれば、物理的真理において、真理そのものを万物の真相は如何という意味にとれば現在の科学は終局的な解答を与えることはできぬ。しかし真理そのものの本質は何か一般に真理の標識は何か。真理を発見せんとするときわれらは如何なる条件を満たさねばならぬか。真理の認識はいかなる法則に依従するか——。かくの如き意味に真理を解するならその解答は可能である。ジットリヒカイトの場合にも厳密にこれと等しい。ある特別の場合に正しく行為せんためにはわれらは何を行ない何を禁止すべきか。かかる問いに対しては完全な答えは不可能である。何故ならこれに答えるためには、その場合の事情の十全な認識、行為のあらゆる結果の十全なる予測が必要であるが、かかる知見は神ならぬ人間には存しないからだ。かかる意味で、道德上絶対に妥当な意志決定はありあたわぬ。しかしおよそ道德とは何か、道德的なるもの一般的標識は如何。それは如何なる条件にしたがい、如何なる法則に依拠するか、かかる問いには終局的な答えを与え得る。これが明らかとなって初めて、ある特定の意志決定がどの程度まで道德にかなっているかを判断することができるのである。倫理学はかかる問いに答えることを任務とする。それは行為とそのあり得べき結果との多様な、人間の精神に依従しない関係の認識を要しない。人間のもろもろの行為が人間の運命と世界過程とにいか影響するかの複雑な方式を洞察する必要もない。ただ人間の精神に関する知識が必要なるのみである。それは心理上の事実の問題であって、世界認識の問題ではない。自己認識の問題に終始する。

かくの如きはカントの主観主義、形式主義を継承するリップスの倫理学の定義であるが、かかる倫理学が答え得ることは人間の意志そのものの形式に終始せざるを得ず「いかに」のみに答えて、「何を」に答えることができない。「何々せよ」「何々するなかれ」と命ずることができずに、「いかようにせよ」「いかようにす」など命じ得るのみである。たとえばキリストの山上の垂訓にあるように、「隣人を愛せよ」とか「姦淫するなかれ」とか発言することができずに、「汝の意欲の準則が普遍的法則たり得るように行為せよ」とか、「汝の現在の態度について、汝自身に忠実であり得るよう態度をとれ」とかいい得るのみである。すなわち人間のあらゆる積極的な意欲はことごとく、道徳の実質であって道徳律はそ

### ほうへん

の意欲そのものを褒貶するのではなく、その意欲間の普遍妥当なる関係をきめるのである。しかしながらこの意欲そのもの、すなわち生の実質にかかわりなく純粹に形式的に行為を決定するということは、実は非常に意味のあることであって、私見によれば、われわれはかくするときのみ道徳的懷疑を免れ得るのである。行為の決定にあたって、ひとたびわれわれが生の実質的価値の高下の判断を混うるや否や、それは必ず懷疑に陥らざるを得ない。殺すは悪、恵むは善というような意欲の実質的価値判断を混うるならば、祖国のための戦いに加わるは悪か、怠け者の虚言者に恵むは善かというような問いを限りなく生ずるのである。東洋の禅や、一般に大乘的な宗教の行為の決定に形式の善をとって、実質の善をとらないのもそのためなのである。行為の決定の徹底的な正しさを追究するときには、カントのように純に意志そのものの形式によらざるを得なくなるのは当然であって、この意味で私は新カント派のリップスや、コーヘンの「純粹意志の倫理学」が、現象学派のハルトマンや、シェーラーの「実質的価値の倫理学」よりも共鳴されるのを禁じ得ない。

しかしそれはわれわれが行為決定の際の倫理的懷疑——それは頭のしんの割れるような、そのためにクロボトキンの兄が自殺したほどの名状すべからざる苦悩であるが——から倫理学によって救済されんことを求めるからであって、そのほかの観点からすれば、形式主義の倫理学は生の現実について貧困であることはいうまでもない。意欲そのものの善悪、いかに意欲するかでなく何を意欲するかの実質内容につき道徳的判断を下したいのはまたわれわれの今ひとつのやみ難き要請である。この要求からカントの倫理学を修正しようと

### マテリアーレウエルトエティク

するものが最近いわゆる実質的価値の倫理学である。『倫理学における形式主義の実質的価値倫理学』の著者であるマックス・シェーラーは初めオイケンに師事したが、フッサールの影響を受けて、現象学派の立場に移った。

彼はいう。価値は主観から独立な真の対象であって、価値現象として主観の感情状態や、欲求とは相違する。さまざまな果実の美味は果実の種類によって性質的に異なり、同一の美味が主観の感覚によってさまざまに感じられるのではない。美味そのものの相違である。その如く「純潔な」「臆病な」「気高い」「罪深い」等の倫理的価値もそのものとして先験的に存在するのである。財から抽象されたものでなく、実質的存在を持っている。

次にある価値を実現せしめることが、それ自らには善でも悪でもないというカントの考えは、価値が平等であるときには正しいが、実質的価値には等級がある。したがって意欲の対象たる価値そのものに即した善悪が存在する。より高い価値を実現する行為はより善である。カントが道徳律を全然形式的のものとして、実質的のものを斥けたのは実質はすべてアポステリオリでアプリオリのものは形式のみと考えたためであるが、実質的価値はアプリオリである。先験的倫理学は実質的にも可能である。選択愛憎等の情緒的な心情もアプリオリの内容を持ち、「心情の秩序」が存在する。道徳価値の把握は知的作用によらず、

#### ウェルトフェーレン

情緒的な直覚によって価値感知されるのである。これがシェーラーのいわゆる情緒的直覚主義の立場である。シェーラーはさらに価値の等級を直観するアプリオリの等級感があるといい、ある意欲対象である価値が、他の意欲のそれといずれが善であるかはこの等級感によってアプリオリに直覚されると主張する。シェーラーを継承してさらに発展せしめたニコライ・ハルトマンも実質的価値が等級において存在し等級感によってアプリオリに直覚されるという点ではシェーラーと同じである。しかしかような情緒的直覚主義が果して行為決定の際のわれわれの懐疑を救ってくれるであろうか。どの価値がどの価値よりも高いかは個人差があることは現にハルトマンがあげている価値等級の典型的表解を見てさえも、われわれとは等級感が相異なるのを見てもわかる。まして価値に高さや強さとの二次元を認める以上、高くても弱い価値と、低くても強い価値といずれを選ぶべきかは必ず懐疑に陥れる。大衆を啓蒙すべきか、二、三の法種を鉗鎖すべきか、支那の飢饉に義捐すべきか、愛児の靴を買うべきかはアプリオリに選択できることではない。個々の価値、個々の善を見ずして、あらゆる場合に正しき選択をなし得るような一般的心術そのものをきめようとする倫理上の形式主義には抜くべからざる根拠があるのである。その方向は大乗の宗教に通ずる。しかし意欲そのものに実質的に道徳的価値を付して、より高き意欲に権利を与えんとする要請にもやみがたいものがある。人情にはむしろこの方が適し、小乗の宗教に通じる。性欲を満したいという意欲と、国君に殉死したいという意欲とに、そのものとしての価値等級を付さないことは人情には無理である。大乗の宗教はしかしそこまで徹しなければならないのであるが、倫理学が宗教ならぬ道徳の学であり、人間らしい行為の追求を旨としなくてはならぬ以上、実質的価値の倫理学は人倫の要求により適わしいといわねばならぬ。いずれにせよ、この形式主義か実質主義かの問題は倫理学上の根本問題である。

#### エゴイスムス

つぎに人性の千古の悩みである利己か、利他かの問題がある。利己主義には深い根拠があり合理的に、正直に思索するときには誰しも一応は利己主義に帰著するくらいのものである。

#### アルトゥルイスムス

のである。むしろここから反転して利他主義に飛躍するのが道筋ともいえる。

### アインフュールング

リップスの感情移入の説はそのよき弾機であろう。他人の顔にある表情があらわれるのを見ると、同じ表情がわれ知らず自分にあらわれる本能的傾向が人間にはある。

### ミットレーベン

現在それが悲哀の表情であれば、自ら悲哀を感じる。これは他人の内生を共生すること、すなわち同情である。利他主義はこの同情という心理的事実にもとづくものである。人はいやしくも他人の願望を知れば、その実現を妨ぐる事情なき限り、自分の願望と等しく、この他人の願望によって規定されずにいられない自然の衝動を持っている。他人との同情はわれわれを利他的行為に駆るのである。利他は利己の打算的手段として起こったもので、畢竟賢き利己であるという説はこれで破られる。しかし利他の動機は確かに利己から独立に存在しても、利己と利他とが矛盾するときいずれをさきに、いかなる条件にしたがって満足せしむべきかの問題は依然として残る。これが「ギリシャ主義とキリスト教主義との調和の道」を求めねばならぬ所以であり、他人の天命を完うするとともに、自己の天命を完うするという共存共栄の道が実践的には矛盾と撞著を生ずる故、その場合の行為選択の標準がなくてはならない。他人の家の火災と、自分の入学試験の受験とがぶつかったとき、いずれをさきにすべきか、何によって決定したらいいか。この形の選択がわれわれの実際生活のすべてにわたってせまっているのである。これは直観主義でも決められない。

リップスによれば、この際主観的制約を去って、客観的事実の制約にしたがい、すなわち、受験は自分であり、火災は他人のものであるということから離れ、どちらも自分のことであるとして考えて決めよというのだ。それなら火事を消すことをさきにするであろう。

しかしこの決め方にも人情にかなわない無理があることを免れない。目の前に自分の子どもの手が霜焼けている。新聞に支那の洪水の義捐の募集が出ている。手袋を買ってやる金を新聞社に送るべきか。リップスによればそうすべきだ。しかし一方はわが子で目の前に見、他方は他国でうわさに聞くのみ。情緒の上には活々とした愛と動機力は無論幼児の手袋を買ってやる方にはたらいっている。客観的事実の軽重にしたがって、零細な金を義捐してもその役立つ反応はわからない。一方は子どものいたいけな指が守れるのが直ちに見える。この場合のような選択について、有名なシルレルとカントとの論争が起こるのだ。道徳的義務の意識からでなく、活々とした感情の動きにより、いわゆる「美しきたましい」によって行為すべきであるというシルレルの抗議が生じるのだ。

しかしひとたびかような主観的情緒主義を許すと、実践上の道徳的厳肅性というものは保てなくなる。文芸家の実行力の薄弱、社会的善の奉仕の懈怠等は皆ここから生じるのだ。この利己と利他、厳肅主義と情緒主義との調和の問題も倫理学上の根本問題である。

つぎに人格主義か、幸福主義かの問題が横たわる。

物象的価値の感情と自我価値感情とは対立する。人間には自敬の感情がある。この敬の意識は物の価値、福利とは全く次元を異にする。倫理はこの人格価値感情を究竟の目的と

すべきである。物の価値はただこの人格価値の手段としてのみ価値を持つのにすぎぬ。が人格価値はそれ自らの価値である。この人格価値を高めることが行為の目的である。快樂、幸福、福利は目的そのものとして追求せられるべきでない。これが人格主義の主張である。カントや、リップス、コーヘン等のカント学派も、フッサール、シェーラー、ハルトマン等の現象学派も人格主義の点では同じい。イギリスのトマス・グリーンの自我自現説もフイヒテをつぐ人格主義の系統である。彼によれば人間の目的は動物的有機体にもとづく快樂や、欲求を満足せしめることに存しない。人間の目的は神的意識の再現たる永久的自我を実現せしめることにある。社会を改善する目的も大衆に肉体的快樂、物的満足を与えるためではない。その各々の自我を実現せしめんがためである。

かような人格価値主義に対して幸福主義——自己の快樂の追求から社会の福利の増進にいたるまでの広汎な功利主義の倫理学が立つ。そのクライマックスはシヂウィックの「最大多数の最大幸福」の説である。幸福主義は初めは個人の感覺的快、不快から発祥する。ハートウレイによれば道德的情操は、他の高尚な諸感情とともに、感覺に伴う快、不快の念から連想作用によって発生したものである。彼は同情も、仁愛も利己的な快、不快の感から導き出した。初めは快、不快な結果を好悪する心から徳、不徳を好悪したのだが、広く連想をくりかえすうちに、直接に徳、不徳を好悪するようになった。これが道德的感情である。行為の価値は永続する、そして不快を結果せぬ快樂、すなわち幸福を生ずるところにあり、社会の幸福をもたらす行為が善である。ロックも、ヒュームも、ミルも幸福主義である。利己的であれ、利他的であれ、個人であれ、社会であれ、ともかくも道德の目的を福利においている点は同じである。これはいかにも常識的なイギリスに栄えそうな倫理学である。しかし幸福説は道德的意識の深みと先験性とをどうしても説明し得ない。それは量的に拮がり得るが質的のインテンシチイにおいてはなほだ足らず、心奥の神秘を探究するのにいかにも竿が短い。幸福主義は必ず結果主義と結びつき、動機を重んずる人格主義と対立するが、道德的価値の中核が動機になくってはならぬのは当然なことであって、結果の連想から生じたるものなら道德の名に値しない。また幸福説は敬の感情を説明し得ない。心の深い人は到底幸福説で満足できるものではない。これはアングロ・サクソンの倫理学である。ニイチェの如きは「最大多数の最大幸福主義」を賤民の旗じるしとして輕蔑している。がそれにもかかわらず、社会的、政治的の實行上の目標は結局この旗じるしの下に動いて来ていることは争われない。種々の社会政策、社会慈善事業、公共施設、社会改革運動等は大むねこの目標の下に行なわれている。常識的ではあるが実際の社会に影響を及ぼし、主義を実現する勢力の強いことはアングロ・サクソンの政治の如くである。しかしわれわれはそれに眩惑されてはならぬ。幸福主義は決して道德の究竟ではない。依然として第二義的の価値である。何が幸福かと問うとき、幸福の質を認めねばならず、かかる質的のものは幸福そのものの中からは導き出せない。「最大多数の最大幸福」は、ニコライ・ハルトマンのいわゆる「強き価値」であって、「高き価値」ではない。高き価値が実現せられるためには、先決の必要な地盤ではあるが、それは高き価値がその地盤の上に実

現されんがためである。高き価値そのものは飽くまでも性質的なる人間の価値、人格の価値である。

最近の人間学的な倫理学の方向が、この社会幸福主義を性質的に高め、浄化させんがために、一方では人格主義の、いわゆる人格の意味を、個人主義的な桎梏から解放して、これは社会的人間に鑄直すことにより、人格主義と社会幸福主義とを、本質的に止揚して調和せしめんとする傾向を帯び来たったことに注意すべきである。

すなわち人格とは真の**人間**の意味であり、人間とは個人のいいでなく、共同生活態の連関の中にある、「我」と「汝」と全体との、相互に対立しつつ、しかもひとつに融け合っている姿における**人**である。かかる人間はアトム的な個人の人格と人格とが、後から相互の默契によって結びつき、社会をつくるのでなく、当初から相互融入的であり、その住居、衣食、言語風習まで徹頭徹尾共同生活態に依属しているところの、アトム的なならぬ共同人間である人倫の事実は外に表現されて客観的社会となって厳存する。道徳は単に主観の事実として、個人の心の内面に在るのではなく、客観の事実として、外の共同態に表現されている。人格とはかかる意味の人間でなくてはならぬ。人の道とは同時に世の中の道である。人格を磨くとは世の中をよくすることである。

人格という意味をかかる共同人間の意味に解するならば、人格主義はその独善性から公共に引き出され、社会活動がその内面性の墮落かの如き懸念から、解放されて社会的風貌を帯びて行くであろう。一方では「社会公共の幸福」なる意味も、第一にその社会公共の意味が、アトム的個人の協定でなく、「我」と「汝」と全体との相互回入の共同態でなくてはならず、その「幸福」の意味も個人的快樂から導かれたものでなく、質的な精神的高さを持ったものに浄化されなくてはならない。かくして真の人間の立場から全体主義の人間倫理学がつくられて行くことが来たるべき史的展望ではあるまいか。

最後に倫理学の最も深き、困難な根本問題として「意志の自由」の問題がある。

「意志の自由」とは普通には、行為の選択の自由のいいである。一つの行為をなすまいと思えば為さずにすんだのに、為したという意味である。しかし反省すればこれは不思議なことである。意志決定の際、われわれはさまざまの動機の中から一つの動機を選択してこれを目標としたのだ。しかしこの際それらの動機がそれぞれの強さで存在せぬということ<sup>を</sup>われわれはその瞬間に企てることはできない。故に事実是一个の動機は選ばれないわけにはいかなかったのだ。それを選ばぬことは可能でなかったのだ。リップスによれば、これは疑いもなく決定論である。「自由」とは決定されていないという意味ならわれわれには自由は存在しない。その決定が自己以外の原因によらず、全く自己にもとづいているという意味が自由なのである。

われわれが、「別の決定もなし得たのだ」と思うのは、他の決定を可能にするような別の動機が当時の心中に存在していたことを知っているからだ。しかもそうしなかったのはさらにより強い動機がわれわれの態度を決定させたからだ。

この際より強い動機が決定させたということ<sup>を</sup>強制ととるのは無意味である。何故なら

強制には強制者と被強制者とが対立せねば無意味であるが、この場合にはより強い動機とは自分の意欲にはかならぬ、自己が自己を強制するとはナンセンスである。自由とは意欲が人格によって規定されるという意味である。したがってかくの如き人格が道徳的評価を受けるのである。

しかしかかる評価とは、かく煙を吐く浅間山は雄大であるとか、すだく虫は可憐であるとかいう評価と同じく、自然的事実に対する評価であって、その責任を問う道徳的評価の名に価するであろうか。ある人格はかく意志決定するということはその人格の必然である。彼が盗むということは彼の人格がそうしないわけにはいかないのであり、リップスがいうように、そのような人格故に卑しむべしと評価することはもとより可能であり、その評価はたしかに人格価値の評価ではあるが、それは盗む鼠に対するのと同じ評価であり、彼にそれを禁じる動機が存しなかったからといって、彼は責められるわけではないはずである。このことは変質者や、精神病者の場合には一層明らかである。色情狂はたしかに卑しむべきだ。そしてその卑猥の行為は疑いもなく、彼の人格に規定されている。しかし彼は道徳的評価の責に耐えるであろうか。責に耐えるとはどうしても、そうせぬことが可能であった場合でなくてはならぬ。人格に規定される故に自由であるという自由と責任の観念とは両立し得ない。しかしそれかといって、外部からも、人格からも、規定されないで、意志を決定するという意味の自由は事実上存在しない。しからば自由の意識そのものは不可解のものになる。リップスもいうように、非決定論の自由は意欲が因果律に従うことをこぼむものである。しかし因果律は先験的な精神の法則であって、これに従わずに思考することはわれわれにはできない。それなら非決定的の自由とは思考ではなく、その放棄であろうか。

ニコライ・ハルトマンはこの点に触れて、カントの「積極的自由」の思想をあげて、その功績としている。カントは外の世界も、内の世界も徹頭徹尾因果律に支配されているとして、因果関連からの自由を否定した。自由とは第一原因が因果関連の中に入りこむこととした。自由とは自然法則に従って進行する一列の現象を自ら始める絶対的に自発的な原因または能力と呼んだ。すなわち、「何々からの自由でなく、規定の一つ多い積極的自由である。規定が一つ減じることは因果律が許さないが、一つ増加することは差支えない。しからばかかる規定者はどこからくるか。カントは人間の英知的性格の中にその源を求めた。しかし自由を現象界から駆逐して英知的の事柄としたのでは、一般にカントの二元論となり終わり、われわれの意識を超越した英知的性格の行為にわれわれが責任を持つということが無意味になってしまう。

ハルトマンはかかる積極的な規定者がわれわれの意識の中にある証拠として、一切の行為、情操に伴う自己規定の意識、責任の感、罪の意識をあげているが、これらを合理化するためにこそ自由を証明したいのである。

ハルトマンはこれらのものから自由を証明できないが、不自由は一層証明し難い、というのみである。



詮ずるところ、われわれは決定論によっても、非決定論によっても、自由の満足なる説明を今のところ見出し得ない。この倫理学上の根本問題は謎として残されている。われわれがこの上もなく明らかな自覚を持って疑わぬ自由の意識と責任の感を、合理的に説明できないということは実に人性の構造の神秘というほかはない。

## 六 種々の視点への交感

教養としての倫理学研究は必ずしも一つの立場からの解決を必要としない。人間の倫理観のさまざまな考え方、感じ方、解決のつけ方等をそれぞれの立場に身をおいて、感味して見るのもいい。それは人間としての視野をひろくし、道徳的同情を豊かに、細緻にするからだ。

近世倫理学史も、哲学史のように、カントに集まって、カントから出て行く。カントの形式的倫理学に反対したのは実質的倫理学だけではなく、ギョーや、ディルタイの如き生命主義の倫理学や、フォイエルバッハから、エンゲルス、マルクス、カウツキーにいたる社会主義の倫理学がある。今これらを詳述する紙幅はないが、ギョーは『義務と制裁のない道徳論』において、生命の維持特に自我の本性である個性の維持と発展とを主張した。彼によれば、それ自体最高の価値を持ったものは個性であり、個性は何もの手段ともすべからざるものである。個性の発展は内生活の充実により、この過剰が義務であって、強制や、外的必然ではない。個性を発展せしめるためには狭隘な孤立的自己に閉じこもらず、社会連帯の生活の中に、できるだけ他と協働する生活をひろげなくてはならぬ。最高の徳は義侠である。カントは「汝はなさねばならぬ、それ故なし得る」といったが、これは顛倒されねばならぬ。「汝は能う、故になさねばならぬ」である。彼の義務は過剰であるというイデー、カントの命題の顛倒の思想はニイチェに影響した。ツァラツストラは知恵と力にふくれて山から下り、自己を与えんために民衆への没落を義務と感じ、「汝すべし」を「われは欲す」と顛倒することを宣した。

ディルタイもまた生命と個性との価値を強調した。彼は「全人」の活動を説き、「生」そのものの事実性が、知識の確実性の根拠であるとした。カントのアプリオリの如き不毛の主知的観念に知識の妥当性があるのではない。具体的、直接なる体験は「生」の進展して止まぬ発動である。彼はいった。「ロックや、ヒュームやカントが作りあげた認識主観の脈管には現実赤い血潮が通っているのではなくて、単に思惟活動として、理性の稀薄な液汁が流れているのみである」この紅い血潮は意志し、感じ表象する「全人」の立場からのみくみとることができる。「生」は自らの空虚を充すために価値に向かい、これを実現することによって、自らを充実する。これがわれわれの意志行為である。ライプニッツが同一の木の葉は一枚もないといったように、個性的なものはそれぞれ独自なもので、他に類例を許さない。自然科学では法則を求めるのが目的だから個性的ということは問題でない。熱鉛を水中に滴下すれば、さまざまな奇形を生ずる。しかし一つ一つの形は自然科学には一顧

の価もない。しかし精神科学では個性的なものが最も価値あるものである。フリードリッヒ大王や、ゲーテの事蹟は斯学の対象として、いつまでも研究をつづけていかれる。

社会主義の倫理観は一種の社会的幸福主義である。そして経済条件をその幸福の基礎とする点において、物的福利を重んずる。それが実質的、現実的、社会的であってカントの倫理学の形式主義、先験主義、自律主義に不満なのはもとよりそのところである。

フォイエルバッハはヘーゲルからエンゲルスの橋渡しとして、ヘーゲルの弁証法を唯物弁証法に媒介した意味で科学的社会主義の先駆ともいえる。

### ゲマインシャフト

彼によれば「人間相互の共同」が真理の普遍性の最初の原理である。認識において自己以外の他の物体の存在が他人の存在の確実によって媒介されるように、道徳も自己のみから引き出すことは出来ず、他人の存在に依従している。我と汝とが対立して初めてモラルがあり、ジッテがある。この生活共同態の思想は前にも述べた。道徳は如何なる事情の下にも幸福原理から離れ得ない。他人に幸・不幸をもたらしたとき初めて、行為者に善悪があり得るのだからだ。同情は他人の幸福衝動とともに損われ、ともに苦しむ自分の幸福衝動にほかならぬ。

彼はヘーゲルが概念をもって真の実在としたのをひるがえして、われわれの感官に与えられた自然をもって実在とした。マルクスはさらに進んで意識を自然の反映であるとし、道徳は経済関係の上部構造としての二次的のものにすぎないとした。生産関係はそれに内蔵する必然法則により発展して最後に幸福な社会を産み出す力があるとする。ブルジョア社会の道徳はその階級にのみ妥当するもの故これを忌避し、階級闘争をなさねばならぬ。それ以外の社会改良、労資協調的温情はかえって、理想社会の到達を遅らすのみである。エンゲルスはマルクスと、半世を献身的友情をもって共産主義宣伝のために働いた。『弁証法と自然』において、唯物弁証法を発展させ、『英国における労働階級の境遇』において、自由競争下の労働者の悲惨な実状を論じた。ラサールはマルクスと異なり、理念に導かれた人間の道徳的意志が歴史の発展を導き得るとなした。彼は個人主義の法治国家のかわりに、社会連帯の利害の上に建設せらるべき文化国家の理想をおき換えることを要請した。文化国家は国家の統制力によって、個人が孤立しては到底得られないような教養と力と自由とを国民に享受せしめねばならぬ。かかる理想から労働者階級に対する国家としての道徳的義務がある。労働階級といえどもこの努力に協力するの義務がある。富裕階級が労働階級の解放に参加しないのは個人的利害によって、この国家的な道徳的協同に反対するものであると説いた。われわれには共鳴するところ最も多い論拠である。マルクスの如く歴史の発展を物力の必然として人間の道徳的努力の参与を拒むことは、たといその結果が理想社会に到達しようと、人間性を侮蔑するものである。改革の手段に暴力を用いる用いないの点よりも、この人間の特性の貶斥は最も許し難き冒瀆である。人間の道徳意識そのものはマルクスによって泥を塗られただけで少しも高められず、退化するのみである。『キリスト教の本質』を書いたフォイエルバッハの人間の共同生活態という美しい、人類の輝か

しい希望をつなぐ理念を物的の意味に引き下してしまつて何の役に立つのであろう。資本主義制度はもとより悪い。道徳的意味においてこれは呪詛されねばならぬ。われわれは真の人間の共同態フョイエルバッハの **Gemeinschaft des Menschen mit dem Menschen** を建設せんことを熱願する。しかし物力の必然でなく、人間の道徳的努力の協同によってそれを成しとげたい。何故なら、つくり上げた共同態はまた道徳的協同によって維持発展されなければならないからである。人性の徳性の花の咲き盛らないような、物的福利の理想社会とは理想社会の名に値しないからである。

以上自分は与えられたスペースで、青年の教養に資する視点から、倫理学研究の手引きのようなものを書いた。書くべき多くのものが残された。中世期の神秘主義の倫理観、古代のストアやエピクロス派の倫理観、スピノーザやショーペンハウエルの形而上学的倫理観等に触れる暇がなかった。さらに東洋の倫理観にも手が染められなかった。それは本稿の目的上、羅列を事とせずして、活きた倫理的問いを中軸として、一つのまとまりのある叙述をものしたく思ったからである。

最後に一言付すべきことは、生の問いをもってする倫理学の研究は実は倫理学によって終局しないものである。それは善・悪の彼岸、すなわち宗教意識にまで分け入らねば解決できぬ。もとより倫理学としては、その学の中で解決を求めて追求するのが学の任務であるが、一般に学の約束として、それは絶えざる認識の拡充としての永久の追求であつていのである。しかし生の問いは解決されることを要する。したがつて学の中にとどまっていることはできぬ。善悪の二字総じて忘れる宗教のふところに入らねばならぬ。しかし善悪を忘れることは、善悪に執し切つた後においてのみ可能なのである。知識青年にして少なくともある時代、倫理学に身をやつさないような人間は決して善悪の彼岸には出で得ぬであらう。

(一九三六・一〇・七)

---

底本：「青春をいかに生きるか」角川文庫、角川書店

1953（昭和 28）年 9 月 30 日初版発行

1967（昭和 42）年 6 月 30 日 43 版発行

1981（昭和 56）年 7 月 30 日改版 25 版発行

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2005 年 9 月 9 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 30. 学生と生活

## ——恋愛——

倉田百三

### 一 学窓への愛と恋愛

学生はひとつの志を立てて、学びの道にいそしんでいるものである。まず <sup>あおぐも</sup>青雲を望み見るころと、学窓への愛がその衷になければならぬ。近時ジャーナリストの喧声はやもすれば学園を軽んじるかに見える。しかし今日この国に必要なのはむしろ新しき、健やかきアカデミーの再建である。学生にして学窓への愛とほこりを持たぬことは自ら軽んじるものである。もとより私といえども今日学生の社会的環境の何たるかを知らぬものではなく、その将来の見通しより来る憂鬱を解せぬものでもない。しかもそれにもかかわらず私は勧める。夢多く持て、若き日の感激を失うな。ものごとを物的に考えすぎるな。それは今の諸君の環境でも可能なことであると。私は学生への同情の形で、その平板と無感激とをジャスチファイゼンとする多くの学生論、青年論の唯物的傾向を好まぬものだ。夢見ると夢見ぬとはその環境にあるのでなく、その素質にあるのだ。王子が必ずしも夢見はしない。が大工の息子もまた夢見る。如何なる時代にあっても青年が夢見なくなるといふことはあるまじきことであり、もしあるなら人類は衰亡に向かったものである。夢見る、理想主義の青年のみが健やかなる青年であり、次代を荷い、つくる青年なのである。

まして学窓にあるほどの青年が環境をつぶやいたりなどできるものであろうか？ これに対してはクロポトキンの『青年への訴え』を読めと勧めるだけでついている。学生諸君はむしろ好運に選ばれたる青年であり、その故に生命とヒューマニティーと、理想社会について想い、夢見、たたかいに準備する義務があるのである。

さて私はかように夢と理想とを抱いて学窓にある、健やかなる青年として諸君を表象する。学業に勉強せぬ、イデアリストでない学生に恋愛を説く如きは私には何の興味もないことである。学生の常なる姿勢は一に勉強、二に勉強、三に勉強でなくてはならぬ。なるほど恋愛はこの姿勢を破らせようとするかもしれぬ。だがその姿勢が悩みのために、支えんとしても崩されそうになるところにこそ学窓の恋の美しさがあるのであって、ノートをほうり出して異性の後を追いまわすような学生は、恋の青年として美しくもなく、また恐らく勝利者にもなれないであろう。

しかし私がかくいうのは勉強と恋愛とをほどほどにやれというのではない。まして勉強の余暇に恋愛をたのしめというような卑俗な意味ではない。恋愛には恋愛のモラルと法則とがある。その意味では「学校を落第してまでは恋愛をせぬ」というモットーは理想主義

のものでなくして、散文主義のものである。イデアリストの青年にあつては、学への愛も恋への熱もともに熾烈でなくてはならぬ。この二つの熱情の相剋するところに学窓の恋の愛すべき浪漫性があるのである。

かようにして私は真摯な熱情をもって、学びの道にある青年の、しかも理想主義の線にそつての恋愛について説きたいのである。すでに女を知ってしまった中年のリアリストの恋愛など学生は軽蔑してあわれんでおればよい。それは多くは醜悪なものであり、最もい

い場合でも、すでに青春を失ってしまったところの、エスプリなき <sup>リーブシャフト</sup> 情 事 にすぎないからだ。

## 二 倫理的憧憬と恋愛

性の目ざめと同時に善への憧憬が呼びさまされるということは何という不思議な、そしてたのもしきことであろう。これが青年の健康性の標徴だ。ヒューマニティーの根源だ。この二つのものは同時に起こるだけでなく、まじり合い、とけ合つて起こるのだ。この二つがまじり合つて起こらないなら、それは病的徴候であり、人間性の邪道に傾きを持つてゐるものとして注意しなければならぬ。

青年にとって性の目ざめは肉体的な、そして霊的な出来ごとである。この湧き上つてくる衝動と、興奮と、美しく誘うが如きものは何であろう。人生には今や霞がかかり、その奥にあるらしい美と善との世界を、さらに魅力的にしたようである。若き春！

地上には花さえ美しいのにさらに娘というものがある。彼女たちは一体何ものだ。自然から美しく創りなされて、自分たちを誘うような、少なくとも待つてゐるように見えるこの人間群は。

彼女たちは自分たちよりつつましく、優美に造られているようである。粗暴と邪悪とを

知らぬかのような。自分たちより脆くできてはいるが、 <sup>しな</sup> 品 が高そうだ。そして何という美しい声を持つてゐることだろう。

彼の女たちはいうように見える。

「立派な男子におんななさい。私たちに相応しいもののために私たちの美はあるのです」

彼女たちはたしかに美しき、善き何ものかである。少なくともそれにつながつたものである。美と徳との理念をはなれて、彼女たちを考えることはできぬ。したがつて彼女たちが何であるかを探り、彼女たちを手に入れるためには美と徳との鍵を忘れることはできない。――

青年たちはこういうふうになつて、美と善との <sup>もや</sup> 靄 のなかにつつんで心に描くことは

あま

少しも甘いことではなく、むしろ健やかなことである。のみならず賢いことでさえある。古来幾多のすぐれたる賢者たちがその青春において、そうした見方をしたであろうか。ダンテも、ゲーテも、ミケランジェロも、トルストイもそうであった。ストリンドベルヒのような女性嫌悪を装った人にもなおつつみ切れぬものは、女性へのこの種の徳の要請である。かようなものとして女性を求める心は、おしなべて第一流の人間の常則である。とりわけダンテにとってベアトリーチェは善の君、徳の華であった。

わる

青春の黄金の日において、悪ズレのした、リアリスチックな女性侮蔑者であるほど悲しむべきことはない。ましてそれは早期の童貞喪失を伴いやすく、女性を弄ぶ習癖となり、人生一般を順直に見ることのできない、不幸な偏執となる恐れがあるのである。

てら

学生時代に女性侮蔑のリアリズムを銜うが如きは、鋭敏に似て実は上すべりであり、決して大成する所以ではないのである。すべてを順直にということが青年のモットーでなければならぬ。ませた青年になろうとするな。大きく、稚なく、純熟であれ。それがやがてはまことの知性の母なのだ。

天地の大道に則した善き人間になりたいという願い、『教養と倫理学』——（「学生と教養」中の一章）の中に私が書いたような青春のなくてならぬもひとつの要請と、やむにやまれぬこの恋のあくがれとを一つに燃えさしめよ。

善によって女性の美を求め、女性の美によって善を豊かに、生彩あらしめよ。美しい娘を思うことによって、高貴なたましいになりたいと願うところがますます刺激されるような恋愛をせよ。

音楽会に行つて、美しい令嬢のピアノを弾いた知性と魅力のある姿を見た。あるいは席にこぼれ、廊下を歩く娘たちの活々とした、しかし礼儀ある物ごし——寄宿舎に帰つても、美の幻にまだつつまれてるようだ。それは学べよ、磨けよというようだ。

寒い街を歩いて夕刊売りの娘を見た。無造作な髪、嵐にあがる前髪の下の美しい額。だ

ま

が自分から銅貨を受取ったときの彼女の悲しそうな目なざしは何だろう。道々いろいろなことが考えられる。理想的社会の建設——こうしたことまで思い及ぼされるようではなればならぬ。

学生時代の恋愛はその大半は恋の思いと憧憬で埋められるべきものだ。この部分が豊かであるだけ、それは青春らしいのだ。それが青春の幸福をつくるのだ。青春は浪漫性とともにある。未知と被覆とを無作法にかなぐり捨てて、わざと人生の醜悪を暴露しようとする者には、青春も恋愛も顔をそむけ去るのは当然なことである。

### 三 恋愛の本質は何か

恋愛とは何かという問題は昔から種々なる立場からの種々な解釈があつて、もとより定説はない。プラトンのように寓話的なもの、ショウペンハウエルのように形而上学的なもの、エレン・ケイのような人格主義的なもの、フロイドのように生理・心理学的なもの、スタンダールのように情緒的直観的なもの、コロンタイのように階級的社会主義的なもの、その他幾らでもあつて枚挙にいとまない。これらの諸説はみな恋愛の種々相のある一側面を捕え得たものには相異なる。この後とても世代の移るにつけいろいろな説がつみたされていくであろう。

が恋愛とは何であるかということを概念的にきめてかかることはさまで大事なことはない。むしろ自分自身の異性への要求と、恋愛の体験とによって自らこの問いをさぐっていき、自説を持つとうとするがよいのだ。

実際人間はその素質なみの恋愛をし、その程度の恋愛論を持つのだ。そして恋愛論はその人の宇宙ならびに人生への要求一般と切り離せるものではないのだ。フロイドがどんな分析をして見せても、宗教意識の強いものは恋愛を宗教にまで持ち上げずには満足するものではない。現実主義者が恋愛は性慾と生殖作用の上部構造にすぎないといつても、精神的憧憬の深いイデアリストは恋愛が性慾をこえた側面を持ち、むしろそのこえんとする悩みにこそ、恋愛の秘義があると主張してやまないであろう。

青年学生はいずれ関心事たる恋愛につき、いろいろな説を参考するもよかろう。また文芸や、映画でその種々相に触れずにもいないわけである。だが結局は自分の胸にわいてくるイメージと要請とをもって、自分たちの恋の世界を要求し、つくり出すべきだ。

今日の文芸や、映画に出てくる恋愛が不満ならば恐れずその不満を持て。それはむしろたのもしきことだ。

一般にいつて自分の恋愛の要求を引き下げる必要はない。自分の夢多き空想だとして、現実主義の恋愛作者に追従したりする必要はない。

観念的映像が多いただけむしろよく、それが青春の標徴である。恋愛を単に生物学的に考えたがることほど粗野なことはない。知性の進歩はその方角にあるのではない。恋愛を性慾的に考えるのに何の骨が折れるか。それは誰でも、いつでもできる平凡事にすぎない。今日の文化の段階にまで達したる人間性の精神的要素と、ならびに人間性に稟具するらしい可能的神秘の側面で、われわれの恋愛の要請とは一体どんなものであるかを探求するのこそ進歩的恋愛論の本質的任務でなくてはならぬ。これに比べれば恋愛の社会的基礎の討究さえも第二義的というべきだ。ましてすでに結婚後の壮年期に達したるものの恋愛論は、もはや恋愛とは呼べない情事的、享樂的漁色の材料から帰納されたものが多いのであつて、青年学生の恋愛観にとっては眉に唾すべきものである。

結婚後の壮年が女性を見る目は呪われているのだ。たとえば恋愛は未知の女性への好奇的欲望であるというような見方も、明らかに壮年の心理であつて、結婚前の青年の恋愛心理ではない。実はそれは美的狩獵の心理なのだ。



恋愛には必ず相手への敬の意識がある。思慕と憧憬との精神的側面があり、誇張して言えば、跪きたくなる感情がある。そして対象は単一的であって並列的ではない。美的狩猟はならべ描くことによって情緒をますのだ。

結婚前の青年、特に学窓にある青年にとって、恋愛とはまず精神的思慕であり、生命的憧憬でなければならぬ。美しい娘の中に自分の哀なる精神の花を皆投げこんで咲かせたものでなければならぬ。

おもわ  
君が面輪の美しき見れば  
花はみな君にぞある……

これは中世イタリーの詩人の句片だ。

め あも  
愛づらしと吾が思ふきみは秋山の初もみぢ葉に似てこそありつれ

これは万葉の一歌人の歌だ。汝らの美しき娘たちを花にたとえ、紅葉に比べていつくしめ。好奇と性慾とが生物学的人間としての青年たちにひそんでいることを誰が知らぬ者であろう。だがそれらは青春のわくが如き浪漫性と、さかんなる精神的憧憬の煙幕の下に押しかくされ、眠らされているのだ。

結婚前の青年にとって、恋愛とは未来の「よりよき半分」を求めんとする無意識模索である。それは正統派の恋愛論の核心をなすところの、あの「二つのもの一つとならんとする」願望のあらわれである。ペーガン的恋愛論者がいかに嘲っても、これが恋愛の公道であり、誓いも、誠も、涙も皆ここから出てくるのだ。二人の運命を——その性慾や情緒をだけでなく——ひとつに融合しようとするものでなくては恋愛ではない。この愛らしの娘は未来のわが妻であると心にきめその責任を負う決意がなければならぬ。互いの運命に責任を持ち合わない性関係は情事と呼ぶべきで、恋愛の名に値しない。

恋愛は相互に孤立しては不具である男・女性が、その人間型を完うせんために融合する作用であり、「を味う」という法則でなく、「と成る」という法則にしたがうものであり、その結果として両者融合せる新しき「いのち」が生誕するのだ。

子どもの生まれることを恐れる性関係は恋愛ではない。

「汝は彼女と彼女の子とを養わざるべからず」

学生時代私はノートの表紙に、こう書きつけて勉強のはげましにした。

#### 四 青春の長さと童貞

恋愛は倫理的なあこがれであるだけでなく、肉体的、感覚的な要請であることはいうまでもない。それは、露わに言えば、手を、唇を、肌を相触れんとするところの衝動でもあ

る。したがっていかなる倫理的な、たましいの憧憬を伴う恋愛も終局はその肉体的接触をまっけて完成すべきものではある。しかしたましいの要請が強ければ強だけ、その肉体的接触はその用意を要する。すなわち肉体だけがたましいの要請をはなれて結びつかぬように、そうした部分がないように隙間なく要求されてくるのは当然なことである。これは一方が打算から身を守るといようなことでなく、相互にそうしなければ恋愛の自覚上気がすまない。これが本当の慎しみというものだ。

学生は大体に見て二十五歳以下の青年である。二十五歳までに青年がその童貞を保持するに耐えないという理拠があるであろうか。また本人の一生の幸福から見て、そうすることが損失であろうか。私は経験から考えてそうは思われぬ。女を**知る**ことは青春の毒薬である。童貞が去るとともに青春は去るといも過言ではない。一度女を**知**った青年は娘に対して、至醇なる憧憬を発し得ない。その青春の夢はもはや浄らかであり得ない。肉体的快樂をたましいから独立に心に表象するという実に悲しむべき習癖をつけられるのだ。性交を伴わぬ異性との恋愛は、如何にたましいの高揚があつても、酒なくして佳肴に向かう飲酒家の如くに、もはや喜びを感じられなくなる。いかに高貴な、楚々たる女性に対してもまじりなき憧憬を感じられなくなる。そしてさらに不幸なことには、このことは人生一般の事象を見る目の純真性を曇らすのだ。快樂の独立性は必ず物的福利を、そして世間的権力を連想せしめずにはおかぬ。人間がそうした見方を持つにいたればもはや壮年であつて、青春ではないのである。

事実として青春の幸福はそこから去ってしまうのだ。如何に多くのイデアリストの憧憬に満ちたる青年が、このことからたちまち壮年の世俗的リアリズムに転落したことであろうか。

かりに既婚者の男子が一人の美しき娘を見るのと、未婚者の男子がそうするのとでは、後者の方がはるかに憧憬に満ちたものであることは容易に想像されるであろう。それが未婚者の世界の洋々たる、未知のよろこびなのだ。その如くに童貞者にあるまじりなき憧憬は青春の幸福の本質をなすものであつてひとたび女を**知る**ならば、もはや青春はひび割れたものとなり、その立てる響きは雑音を混じえずにはおかなくなる。そしてそれは性の問題だけでなく、人生一般の見方に及ぶのである。いかなるイデアリストの詩人、思想家も、彼が童貞を失った後にそれ以前のような至醇なる恋愛賛美が書けるはずはない。自分の例を引けば、「異性の内に自己を見出さんとする心」を書いたとき私はまだ童貞であつた。性交を賛美しつつも、童貞であつたのだ。

私がかようなことに好んでこだわるのではない。青春にとってこれは重要なことであつて触れずにおれないのだ。誰しも青春の長いことを望まぬものはあるまい。その長さは人生の幸福をはかる重要な尺度である。これは青春のすぎ去った者のしみじみ思うところである。そして青春の幸福を長く保とうとねがうならば、童貞を長く保たねばならぬ。学生時代を童貞で過ごすことは一生から見て、少しも損失ではない。これは冷淡な教父の如き心でいうのでなく、現実的な考慮を経ていふのである。つまり女を**知る**の機会を、もし欲

するなら、壮年期に幾らでもあるからである。

もっとも二十五歳まで女を知らなければ、知りたいための悩みを持つであろう。しかしその悩みは青春そのものの本質なのだ。それが青春の独特な歓楽をつくり出すところの種箱なのだ。それが青年を美しくし、弾力を与え、ものの考え方を純真ならしめる動機力なのだ。

私は青春をすごして、青春を惜しむ。そして青春が如何に人生の黄金期であったかを思うときにその幸福を惜しめとすすめたくなるのだ。そしてそれには童貞をなるべく長く保つべきだ。

しかし何かの運命でそれをすでに失ってしまったものはやむを得ない。そのひびの薄れるように、そのまわりに結締組織のできるように修養すべきだ。傷をいやすレーテの川、忘却というものも自然のたまものだ。絶対的にのみ考えなくてもいい。童貞の青年といえども、すでに自慰を知らぬものはなく、肉体的想像力を持たぬものもあり得ない。全然とり返しがつかぬという考え方はこれは天国的なものでなく、悪魔の考え方である。

しかし童貞を尊び、志向を純潔にし、その精神に夢と憧憬とを富ましめるということは、青年の恋愛にとって欠くべからざる心がけである。

## 五 相互選択と男性のイニシアチヴ

青年男女はその性の選択によって相互に刺激し合い、創造と淘汰との作用がおのずと行われる。青年や、娘の美の新しい型が生み出される。これは個人と個人との間だけでなく、ひとつのゼネレーションを通じてもあらわれる。青年たちがみな健康な、朗らかな、感覚的で多少茶目なところのある娘たちを要求すれば、そうした娘たちがあらわれてくる。娘たちが遅しく、しかし渋みがあって、少し憂鬱な青年を好めばそうした青年が本当にあらわれてくる。かようにしてクローデット・コルベールに似た娘や、クラーク・ゲーブル型の青年がちまたに見られるようになるのだ。

これは恐ろしいことだ。青年たちがどんな娘を好み娘たちがどんな青年を欲するかは実に次のゼネレーションの質と力と色とを動かすのだ。

そこで青年男女には、人類の健康と進歩性とを私たちが信じることができるような好み方、選び方をしてもらいたいものだ。

ところで今日娘たちの好みは果していいであろうか。その青年鑑賞の目は信頼するに足るであろうか。反対に青年たちの娘たちへのそれはどうであろうか。ある青年がどんな娘を好むかはその青年の人生への要求をはかる恰好の尺度である。美しくて、常識があって、利口に立ち働けそうな娘を好むならその青年の人物はそういうものなのだ。無造作で、精神的で、ささげる心の濃い娘を好むなら、そうした品性の青年なのだ。知性があって、質素で社会心のある娘を好むなら、そうした志向が青年にあるのだ。

娘に対して注文がないということは生への冷淡と、遅鈍のしるしでほめた話ではない。

むしろさかんな注文を出して、立派な、特色のある娘たちを産み出してもらいたいものだ。

イギリスの貴族の青年は祖国の難のあるとき、ぐずぐずしていると、令嬢たちに卑怯を軽蔑されるので、勇んで戦線におもむくといわれている。おどらぬ男には嫁に行かぬと「酋長の娘」にいわれては土人の若者はおどらずにはおられまい。

ところで今日この国の娘たちは十分に自覚しているとはいいい難い。次代を背負う青年がただ娘たちの好みに引きずられるだけでは心細い。彼女たちの好みにまかせておれば、ス

マートな、物わかりのいい、社会的技能のあるような青年がふえても、深みと、<sup>あつ</sup>敦みのある理想主義の青年などは減っていきそうに見える。貧困とたたかって民族的・社会的革新のためにたたかうような青年などはお目にとまりそうにもない。

そこで青年たちは断然相互選択にイニシアチヴをとって「愛人教育」をやる気でなくてはならぬ。素質のいい娘を見つけて、如何なる青年を好むべきかを教えこむのだ。偉大にして理想主義のたましい燃ゆる青年は、必ずしも舗道散歩のパートナーとして恰好でなくても、真に将来を託するに足るというようなことを啓蒙するのだ。貧しい大学生などよりは、少し年はふけていても、社会的地歩を占めた紳士のほうがいいなどといった考えは実に、愚劣なものであるというようなことを抗議するのだ。日本の娘たちはあまりに現実主義になるな、浪漫的な恋愛こそ青春の花であるというようなことを鼓吹するのだ。愛と情熱と自信とをもってすればできないことはない。現に私は学生時代に、修身教育しか知らなかった愛人を、ゴッホや、ベルグソンがわかり、ロダンの「接吻」にいやな顔をしないところまで、一年間で教えこんでしまった。およそ青年学生時代に恋を語り合うとき、その歓語の半分くらいは愛人教育にならないような青年はたのもしくなく、その恋は低いものといわなくてはならぬ。幾度もいうように、精神的向上の情熱と織りまじった恋愛こそ青年学生のものでなければならぬのだ。

きはく

かようにして志と気魄とのある青年は、ややもすれば甘いものしか好むことを知らない娘たちに、どんな青年が真に愛するに価するかを啓蒙して、わが心にかなう愛人に育てあげるくらいの指導性を持たねばならぬ。

娘たちに求愛し、その好みにそわんとするだけでは時代の青年の質は低下し、娘たちの好みもまた向上しないであろう。

## 六 恋愛以上の高所

恋愛が青春にとって如何に重要な、心ひかれるテーマであるからといって、人生において、恋愛が至上ではない。青春時代において恋愛問題が常に頭をいっぱい占領してはならない。宇宙と自己、社会共同体と自己、自己の使命的仕事、人類愛ならびに正義の問題等は恋愛よりもさらに重き、公なる題目として関心されていなければならない。恋愛より

もより強く、公なるイデーによって、衝き動かされないことは男子の不面目である。恋愛をもって終始し、恋愛に全情熱をささげつくし、よき完き恋人であることでつきることは、なるほど十分にロマンチックであり、美的同情に価し、またそれだけでも人格的誠実の証拠ではあるが、私は男子としてそれをいさぎよしとしない。青年がそれをもって満足することを好まない。

たとえば前イギリス皇帝の場合にしても皇位を抛ってまでも、シンプソン夫人への誠実を賞賛するにおいて私は決して人後に落ちるものではないが、もしかりに前英帝にイギリスの政治的使命についての、文明史的自覚が燃えていたとするならば、それでもそうした態度をとり得たであろうか。私は自作『大化改新』において、額田女王との恋と、国家革新の使命とに板ばさみとなった青年中大兄皇子をしてついに恋愛をすてて政治的使命を選ばしめた。アレキサンダーがペルシアの女との恋愛のために遠征を忘れ、スピノーザが性的孤独のために思索を怠り、ダヌンチオがフューメの女を恋するあまり戦いを捨てるようなことがあったとしたら、われわれは彼らのためにそれを惜しまずにはおられないであろう。

#### ベルーフ

使 命 の自覚は恋愛以上である。宗教的良心的命令も恋愛以上である。人類的正義と国家的義務も恋愛以上である。青年はこれらの恋愛を越えたる高所を持ちつつ、恋愛を追わねばならぬ。

さきに善への願いと恋愛の求めとをひとつに燃やしめよといったのもここに帰するのだ。恋以上のもののためには恋をも供えものとするを互いに誓うことは恋をさらに高めることである。

肉体的耽溺を二人して避けるというようなことも、このより高きものによって慎しみ深くあろうとする努力である。道徳的、霊魂的向上はこうして恋愛のテーマとなってくる。二人が共同の使命を持ち、それを神聖視しつつ、二人の恋愛をこれにあざない合わせていくというようなことであれば、これは最も望ましい場合である。

#### 七 私の経験と、若干の現実的示唆

以上は青年学生としての恋愛一般の掟の如きものである。しかし現実の恋愛は実に多様な場合があり、陥りやすき人間の弱点があり、社会的不備から生ずる同情すべき散文的側面があり、必ずしも一概にはいえないさまざまの事情があるものである。

ことに私の上来のいましめはイデアリストに現実的心得を説くよりも、むしろリアリストに理想的純情を鼓吹することをもって主眼としてきたものだけに、現実生活においてなるべく傷を受けないように損をしないようにという忠告は乏しいのだ。実際イデアリストの道は危険の道であり、私自身恋愛のために学生時代にひどい傷をつくって、学業も半ばに捨て、一生つづく病気を背負ったような始末である。私は青年学生に私の真似をせよと

勧める勇氣はもとより持っていない。しかしそれだからといって、学業を怠らぬよう、眠られぬ夜がつつかぬよう、社会や、家庭の掟を破らぬよう、万事ほどよく恋愛せよというようなことを忠告する気にはなれない。生命にはその発動の機微があり、恋愛にはそれ自らのいのちがある。異性を恋して少しも心乱れぬような青年は人間らしくもない。「英雄の心緒乱れて糸の如し」という詩句さえある。ことにその恋愛が障害にぶつかるときには勉強が手につかないようなこともある。ことには恋愛に熱中し得る力は、また君につくし、仕事にささげ得る力であることを思えば、生ぬるい恋の仕方をむしろしりぞけたい。だからこれは恋する力が強いのが悪いのではなく、知性や意力が弱いのがいけないのだ。奔馬のように狂う恋情を鋭い知性や高い意志で抑えねばならぬ。私の場合ではそれほどでもない女性に、目くもって勝手に幻影を描いて、それまで磨いてきた哲学的知性もどこへ

けが  
やら、一人相撲をとって、独り大負傷をしたようなものだ。これは知性上から見て恥である。

#### 飢えと焦り

青年はあまり恋に飢え、恋の理想が強いとこうした間違いをする。相手をよく評価せず  
に偶像崇拜に陥る。相手の分不相応な大きな注文を盛りあげて、自分でひとり幻滅する。相手の異性をよく見わけるとは何より肝要なことだ。恋してからは目が狂いがちだから、恋するまでに自分の発情を慎んで知性を働かせなければならぬ。よほどのロマンチストでない限り、一と目で恋には落ちぬ。二た目でそれほどでないと思えば憧憬は冷却する。自分で、自分を溺らすのが一番いけない。それほどでもない異性を恋して、大きな傷を受けるほど愚かしいことはない。

ときとして、性格によっては、恋人が欲しくてたえられないときがあるものだ。それは愛と美との要求が高まって相手が欲しくてたまらなくなるのだが、そんなとき気違いじみたことを考えるものだ。私は上野公園で音楽学校の女生徒をいちいち後をつけて、「僕を愛してくれますか」ときこうかと真面目に思ったことがある。そんなときは一番危ない。こ

あせ  
れはそんなに焦らずとも、待っていれば運命は必ずチャンスを与えるのだ。自分がまだごく若く、青春がまだまだ永いことが自分に考えられないのだ。二十五歳まで学生時代全然チャンスがなくなっても心配することはない。ましてそんなことはあり得ないことだ。恋愛のチャンス、女を知る機会にこと欠くようなことは絶対がない。ヴィナスが自分の番をかえりみってくれる摂理を待つべきだ。学生の場合早すぎるのは危険な場合が多いが、遅いのは心配することはない。

#### 恋をあさる害毒

その青春時代を早期から、多くの恋愛を経験したいというような考えは捨て去らねばならぬ。何故なら、自分たちはいま結婚前であり、その準備時期にあることを忘れてはならないからだ。美しい恋愛から結婚に入らねばならぬ。それは人生の大儀だ。結婚後に性の問題に多少心ゆるむことはまだしも許される。結婚前には心を張り、体を清くして、美しい恋愛に用意していなければならぬ。自分の妻を、子どもの母をきめんための恋愛だからだ。結婚前に遊戯恋愛や、情事をつみ重ねようとすることは実に不潔な、神聖感の欠けた心理といわねばならぬ。不潔なもの、散文的なもの、いかがわしいものはすべて壮年期に押しやって、その青春の庭をできるだけ清く保たねばならぬ。そしてとにかくその庭で神聖な結婚式を挙げねばならぬ。

嫌悪すべき壮年期が如何に人生のがらくたを一杯引っくり返してあらわれてこようとも、せめて美しく、清らかな青春時代を持たねばならぬ。ましてその青春を学窓にあって過ごし得ることは、五百人に一人しか恵まれない幸福である。それは学生諸君が自分で気のつかない実に大きな幸福であって、学びつつある姿勢の下で、かつ想いかつ恋し得ることは、この人生における天国ともいふべきものなのである。清らかな、熱き恋をしなければならぬのは当然な義務である。汚れた快樂など思ふべきものではない。

学生時代に汚れた快樂に習慣づけられた青年の行く先きは必ず有望なものでない。それ

お  
は私の周囲に幾多の例証がある。社会的にも、人間的にも凡俗に墮ちて行っている。その

おとな  
原因は肉体的快樂を知ることによって、あまりに大人となり、学窓の勉強などが子どもじみて見え、努力をつみ重ねて行く根気を失うところにあるのだ。努力をあまりつまずして具体的効果を得たいという、最もいとうべき考え方の傾向が必ずそれについて起こるものだ。そしていうまでもなく、社会はそうした傾向に対して最も冷淡に報いるものだ。彼らが社会的に輝やかなしい地位を勝ち得ないのは当然である。

汚れた快樂を追うことの今ひとつの害毒は浪費である。このことは卒業後の生活の物質的計画をきわめて困難な、不可能に近いものに考えさせるようになる。物質的清貧の中で精神的仕事に従うというようなことは夢にも考えられなくなる。一口にいえば、学生時代の汚れた快樂の習慣は必ず精神的薄弱を結果するものだ。そして将来社会的に劣弱者となつて、自らが求めた快樂さえも得られないという、あわれむべき状態に墮ちる恰好の原因となるものだ。

### 遊戯恋愛の習慣

肉慾にまで至らない軽い遊戯恋愛の習慣はこれとは別の害毒を持つものである。すなわちそれは「軽薄」という有為な青年に最も忌むべき傾向である。うち明けていけば、私は

この種の「薄っぺら」よりは、まだしも獲得の本能にもとづく肉慾追求の青年をとるものだ。「銀ぶら」「喫茶店めぐり」、背広で行くダンス・ホール、ピクニック、——そうした場所で女友を拾い、女性の香気を僅かにすすって、深入りしようとも、結婚しようともせず、春の日を浮き浮きとスマートに過ごそうとするような青年学生、これは最もたのもしからぬ風景である。彼らが浮き浮きとでなく、憂鬱にそうしているならなおさらつまらない。彼らの若い胸には偉大にして、深刻なる思想は訪ずれないのであろうか。時代が憂鬱ならば時代を転換せんとする意欲は起こらないのか。社会革新の情熱や、民族的使命の自覚はどこにおき忘れたのであろう。反逆の意志さえなきにまさるのである。永遠の恋、死に打ちかつ抱擁、そうしたイデーはもう「この春の流行」ではないとでも思っているのであろうか。

ヤンガー・ゼネレーションのこうした気風は私を嘆かしめる。私は彼らに時代の熱風が吹かんことを望まずにはおられぬ。

### 失恋の場合

#### かたこい

こちらで思う人が自分を思ってくれない場合、いわゆる片恋の場合にもいろいろある。胸の思いはいや増してもどうしてもうまくいかないことがある。原則としては恋愛というものは先方に気がなければ引き退るべきはずのものだ。しかし相手の娘の愛がまだ眠っていて目ざめないことがあるものだ。こちらの熱情がそれを呼びさまし、相手の注意がこちらに向いて、ついに熱烈な相思の仲になることもあるものだ。先方が稚い娘であるときにそうしたことがある。が、それにはよほどの熱誠と忍耐とがいるものだ。

が、それにもかかわらずどうしてもうまくいかぬことがある。これが失恋のひとつの場合である。その淋しさはいうまでもない。この寂寥を経験した人は実に多い。

それから誓いあった相手に裏切られた場合がある。今ひとつは相手に死なれた場合だ。このいずれの場合にも、その悲傷は実に深い。しかし人間はこの寂寥と悲傷とを真直ぐに耐えて打ち克つときに必ず成長する。たましいは深みと輝きをます。そのとき自暴になったり、女性呪詛者になったり、悲しみにくず折れてしまつてはならぬ。思いが深かつただけ傷は深く、軽い慰めの語はむしろ心なき業であるが、しかも忍び通さねばならないのだ。これを正しく忍び通した者は一生動かない精神的態度の純潤性と深みとを得る。死なれた場合が最も悲しみが永い。しかしこれとても時と摂理のいやしの力が必ず働くものだ。いやされるといふことさえもかえって淋しいことなのだが、しかし一生ただ一回の失つた恋の思い出だけに生きるということは、人間の浪漫性くらいではまずないことだ。

摂理は別の恋愛を恵むものだ。そして今度は幸福にいく場合が多い。恋を失つても絶望することはない。必ず強く生きねばならぬ。

しかし今日の青年学生にそんな深い失恋の苦しみなどするものがあるものかという声が、



どこからか聞こえてくるのはどうしたものだろう。

恋する力の浅くなることは青年の恥である。それはやがて、祖国にささげ、仕事にささげる力の弱さである。

### 誘惑

悪い方面をあげれば、肉慾狩猟や、「軽薄」のほか「女たらし」と呼ばれる詐偽的情事がある。すなわち将来学士となるという優越条件を利用して、結婚を好餌として女性を誘惑することだ。これは人間として最も卑怯な、恥ずべき行為である。どんなことがあっても、これだけはやってはならない。これはもう品性の死である。こうした行為をする者が将来社会に出て何を企てるであろうか。そうした品性のものは社会で必ず破滅するものだ。

あま  
末路は必ずよくない。社会は甘いいものではないのである。

反対にその優越条件に目をつけて、青年学生を誘惑しようとするたちのよくない女性があるに相異なる。純良な、世間知らずの学生がこの種の女に引っかかって、あたら青春の記憶を汚す例は少なくない。そのくらいではすまず、かなり大きな傷と負担を背負わされ

はめ  
ることがある。ことに妊娠というようなことにでもなれば、抜き差しならぬ破目に陥ることがある。これは充分警戒しなければならぬことだ。ダンサー、女給、仲居、芸者等いわ

くろうと としま  
ゆる 玄 人 の女性は気をつけねばならぬ。ことに自分より年増の女は注意を要する。

### 男女交際と素人、玄人

日本では青年男女の交際の機会が非常に限られていることは不便なことだ。そのためにレディとの交際が出来難く、触れ合う女性は喫茶ガールや、ダンサーや、すべて水

しょうばい  
稼業に近い雰囲気のものになるということは嘆くべきことだ。もっと男女選択のチャンスが広がるような、美しい賢明な男女交際の機関をこしらえてやることは社会的義務であると思う。

しかし如何に機会乏しくとも青年学生はその恋愛の相手をレディに求めよ。水稼業の女性はいかに美しく、磨きあげられていても、尋常なレディに及ぶものではない。比較的

くろうと  
見るとき、レディにはそのナイーブさ、素純さ、処女性の新鮮さにおいて、玄人にはとうてい見出されない肌ざわりがあるのだ。「良家の娘」という語は平凡なひびきしか持たぬが、そこにいうにいわれぬ相異なるのだ。一度媚びを売ることを余儀なくされた女性

は、たとい同情に価はしても、青年学生の恋愛の相手として恰好なものではない。

もとより「良家の娘」にもそのマンネリズムと、安易さと退屈とはあろう。しかしそれは熱烈なる「愛人教育」によって打破し、指導し得られぬことはない。だがひとたび不幸にしてその女性としての、本質を汚した女性、媚を売る習慣の中に生きた女性を、まだ二十五歳以下の青年学生の清き青春のパートナーとして、私は薦めることのできないものである。

彼女たちにはまた相応しき相手があるであろう。

いわゆる玄人でない職業婦人は別問題である。今日の状況において、これはレディの延長と見なければならぬ。卒業後の結婚の物質的基礎を考えると、夫婦の「共稼ぎ」はますます普通のこととなり行く形勢にある。のみならず職業婦人には澁刺とした知性と、感覚的新鮮さを持った女性がふえつつある。古き型の常套的レディは次第に取り残され、新しき機能的なレディの型が見出されつつある。青年学生の青春のパートナーとして、私が避けたいのは媚を売る女性のみである。

あせ

私の経験から生じる一般的助言としては、「恋愛に焦るな」「結婚を急ぐな」と私はいたい。二十五歳までの青年学生が何をあわてることがあろう。美しき娘たちは後から星の数ほどむらがり、チャンスはみちみちている。あまり早期に同じ年ごろの女性と恋愛し、結婚の約束をしてしまうことは、後にいたってあまり好結果でないことが少なくない。ことに不幸な娘に同情してそうするのが一番よくない。年齢の差が少なくとも五つ、六つ——十くらいはありたいが、二十二、三歳で相手を求めればどうしても年齢が近すぎる。といって、十四、五の少女では相手になれまい。

## 八 最後の立場——運命的恋愛

しかしこうした希望はすべて運命という不可知な、厳かなものを抜きにして、人間的規準をもって、きわめて一般的な常識的な、立言をしているにすぎないのである。

最も厳かな世界では一切の規準というものはない。そこでは恋愛もまた運命である。選択は第二義にすぎぬ。童貞の学生が年増の女給と愛し合おうと、盲目の娘と将来を誓おうと、ただそれだけで是非をいうことはできない。恋愛の最高原理を運命におかずして、選択におくことは決して私の本意ではない。それは結婚の神聖と夫婦の結合の非功利性とを説明し得ない。私は「運命的な恋愛をせよ」と青年学生に最後にいわなければならないのだ。私自身は恋愛が選択を越えたものであることを認め、またそうした恋をせずには満足できなかったものだ。青年学生がそれに耐え得るほど強く、人生の猛者であり、損害と不幸とを顧みずして運命を愛する真の生活者でありたいならば、私はこの保身と幸福にはまるで不便な、「恋愛運命論」によって、その恋愛を指導することを勧めたい。

われわれはちょうどわれわれの幸福と成功とに恰好な女性と、恰好な時機に、そうであ

る**故に**、恋に陥るとはかぎらない。何の内助の才能もなく、一生の負荷となるような女性と、きわめて不相応な時機に、ただ運命的な恋愛のみの故で、はなれ難く結びつくことはあり得るものだ。そして恋愛と結婚との真実の根拠はこの運命的な恋愛のみの上にあるのであって、その他は善悪とも付加条件にすぎないのである。この相手の女性は美しいから、善いから、好都合だから私の妻なのではない。二人の恋愛の中に運命を見たから、二人は夫婦なのだ。

もとより夫婦を結ぶ運命は恋愛を通してあらわれ、恋愛の心理は無意識選択のはたらきを媒介とする。しかし二人の結合を不可離的に感ぜしめる契機はこの選択になくして、かの運命にあるのだ。

私のこのような信念からは、青年学生への、実際的に有益な、恋愛についての心得を導き出すことは困難である。実際的とか、有益とかいう観念からして、もはや厳しい真理か

そ  
ら逸れたものだからだ。

恋愛を一種の熱病と見て、解熱剤を用意して臨むことを教え、もしくは造化の神のいたずらと見てユーモラスに取り扱うという態度も、私の素質には不釣り合いのことであろう。

かようにして浪漫的理想主義者としての私の、恋愛運命論を腹の底に持ったの、多少生真面目な、青年学生諸君への助言のようなものができあがったのである。

(一九三七・四・二〇)

#### 参考書のたぐい

Platon : Symposion, Phaidros.

Dante : Vita nuova.

Goethe : Die Leiden des jungen Werthers. (茅野訳)

Schopenhauer : Die Welt als Wille und Vorstellung. (姉崎訳)

Stendhal : De l'amour. (前川訳)

Russell : Marriage and morals.

Ellen Key : Love and marriage. (原田訳)

Freud : Vorlesungen zur Einfuhrung in die Psychoanalyse. (安田訳)

Kollontai : A great love. (中島訳)

Tolstoi : Anna Karenina. (中村訳)

Shakespeare : Romeo and Juliet. (坪内訳)

Maeterlinck : Pell é as et M é lisande.

D'anunzio : Il trionfo della morte.

Rousseau : Confessions. (石川訳)

Turgenev : Die erste Liebe. (米川訳)

Pushkin : Onegin. (米川訳)

Heine : Buch der Lieder.

Novalis : Hymnen an die Nacht.

Romain Rolland : Le jou de l'amour et de la mort. (片山訳)

D. H. Lawrence : Sons and lovers. (三宅訳)

Andr  Gide : La porte  troite. (山内訳)

万葉集、竹取物語、近松心中物、朝顔日記、壺坂靈驗記。

樋口一葉 にごりえ、たけくらべ

有島武郎 宣言

島崎藤村 春、藤村詩集

野上弥生子 真知子

谷崎潤一郎 春琴抄

倉田百三 愛と認識との出発、父の心配

---

底本：「青春をいかに生きるか」角川文庫、角川書店

1953（昭和 28）年 9 月 30 日初版発行

1967（昭和 42）年 6 月 30 日 43 版発行

1981（昭和 56）年 7 月 30 日改版 25 版発行

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2005 年 9 月 10 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

アクセント符号付きラテン文字は、画像化して埋め込みました。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 31. 学生と読書

## ——いかに書を読むべきか——

倉田百三

### 一 書とは何か

書物は他人の労作であり、贈り物である。他人の精神生活の、あるいは物的の研究の報告である。高くは聖書のように、自分の体験した人間のたましいの深部をあまねく人類に宣伝的に感染させようとしたものから、哲学的の思索、科学的の研究、芸文的の制作、厚生実地上の試験から、近くは旅行記や、現地報告の類にいたるまで、ことごとく他人の心身の労作にならぬものはない。そしてそのような他人の労作の背後には人間共存の意識が横たわっているのであり、著者たちはその共生の意識から書を共存者へと贈ったものである。

したがって、書を読むとはかような共存感からの他人の贈り物を受けることを意味する。

人間共存のシンパシィと、先人の遺産ならびに同時代者の寄与とに対する敬意と感謝の心とをもって書物は読まらるべきである。たとい孤独や、呪詛や、非難的の文字の書に対するときにも、これらの著者がこれを公にした以上は、共存者への「訴えの心」が潜在していることを洞察して、ゼネラスな態度で、その意をくみとろうと努むべきである。

人間は宿命的に利己的であると説くショウペンハウアーや、万人が万人に対して敵対的であるというホップスの論の背後には、やはり人間関係のより美しい状態への希求と、そして諷刺の形をとった「訴え」とがあるのである。

その意味において書物とは、人間と人間との心の橋梁であり、人間共働の記念塔である。

けいけん  
読書の根本原理が暖かき 敬 虔 でなくてはならぬのはこのためである。

### 二 生、労作そして自他

書物は他人の生、労作の記録、贈り物である。それは共存者のものではあっても、自分のものではない。自分の生、労作は厳として別になければならぬ。書物にあまりに依頼し、書物が何ものでも与えてくれ、書物からすべてを学び得ると考えるような没我主義があってはならない。実際研究することは読書することであると考えてるかのように見える思想家や、学者や学生は今日少なくないのである。明治以来今日にいたるまで、一般的にいつて、この傾向は支配的である。ようやく昨今この傾向からの脱却が獲得されはじめたくらいのものである。

### すうせい

これは明治維新以来の欧化 趨 勢 の一般的な時潮の中にあつたものであり、自覚的には、思想的・文化的水準の低かつた日本の学者や、思想家としてはやむをえない状態でもあつたのである。

けれどもいつまでもそうあるべきではなく、人生、思想、芸文、学問というものの本質がそれを許さない。ヨーロッパの誰某はかくいっているという引用の豊富が学や、思想を権威づける第一のものである習慣は改正されなければならぬのである。

この習慣の背後には、一般に、書物至上主義でないまでも、過度の書物依頼主義が横たわっている。この習慣は信じられぬほど安易への誘惑を導くものであり、もはや独立して思索したり、研究したりする労作と勇猛心と野望とにたえがたくするものである。他人の書物についてナハデンケンする習慣にむしばまれていない独立的な、生气潑刺とした学者や、思想家を見出すことはそう容易ではない。

これは学生時代から書物に対する態度をあまりに依属的たらしめず、自己の生と、目と、要請とを抱きつつ、書を読む習慣を養わなければならないのである。

他人の生と労作との成果をただ受容してすまそうとするのは怠惰な態度である。というのは生と労作は危険を賭し、血肉を削ってしかなされないものであつて、一冊のすぐれた著書を世に贈り得ることは容易ではないからである。

過度の書物依頼主義にむしばまれる時は創造的本能をにぶくし、判断力や批判力がラディカルでなくなり、すべての事態にイニシアチブをとって反応する主我的指導性が萎えて行く傾向がある。

知識の真の源泉は生そのものの直接の体験と観察から生まれるものであることを忘れてはならない。「直接にそしてラディカルに」このモットーを青年時代から胸間に掲げていなくてはならぬ。

けれどもいうまでもなく個人がすべてを実地に体験し得るものでもなく、前にいった人間共生と共働の原理により、他人の体験と研究の遺産と寄与とを受けて、自らを富ますことは賢明であり、必要であり、謙遜でもある。

この意味においては、書物とは見ざるを見、味わざるを味わい、研めざるを知得するためにあるものである。それどころではない、思わざるを思うためにさえもあるものである。すなわち、自己独りではとうてい理想できなかつたような高い、美しいイデーや、夢が他の天才の書を読むことにより、自分の精神の視野に目ざめてくるのである。

聖書を読むまでと、読後とでは、人間の靈的道德性はたしかに水準を異にする。プラトンとダンテとを読むと読まないとではその人の理念の世界の登 攀 の標高がきつと非常に相違するであらう。

高さとは一目見たことが致命的である。より高く、美しいものの一触はそれより低

く一通りのものでは満足せしめなくなるものである。それ故に青年時代に高く、美しい書物を読まずに逸することは恐るべく、惜しむべきことである。何をおいても、人間性の霊的・美的教養の書物は逸することを恐れて、より高く、より美しきものと求めて読んでおかなければならないのである。

学術的、社会・経済的ないし職業専門的の書物にあっても、つとめて勤勉して読むことは、非常に必要である。現実の心得としては、おそらくさきに述べたような私の高等的忠言よりも、「読むべし、読むべし」と鞭撻すべきかもしれない。読みすぎることをおもんばかりなのは現代学生の勤勉性を少しく買いかぶっているかもしれない。

生と観察との独自性を失わない限りは、寸陰を惜しんで読書すべきである。すぎた多読も読まないより遙かにまさっている。

学生時代においては読書しないとは怠惰の別名であるのが普通である。「勉強の虫」といわれることは名誉である場合が多い。われわれも学生時代に課業のほか、寄宿舎の消灯後にも蠟燭をともして読書したものである。深い、一生涯を支配するような感激的印銘も多くそうした読書から得たのである。西田博士の『善の研究』などもそうして読んだ。とぼとぼと瞬く灯の下で活字を追っていると、窓の外を夜遊びして帰った寮生の連中が、「ローベン（蠟燭の灯で勉強すること）はよせ」「糞勉強はやめろ」などと怒鳴りながら通って行く。その声を聞きつつ何か勝利感に似たものをハッキリと覚えている。

読書は自信感を与えるものである。読書しないでいると内部が空虚になっていく。読書しない青年には有望な者はいない。天才はたとい課業の読書は几帳面でないまでも、図書館には籠って勉強するものである。

読書にとられる、とられないというのはそれ以上の高い立場からの要請であって、勉強して読書することだけにできない者にとっては、そんな懸念は贅沢の沙汰である。

読書に励む青年は見るからにたのもしそうである。生を愛し、人類を思う青年は読書せ

しし  
ずにいられるものではない。孜々として読書している青年たちを見ると、あの中から世を驚かす未来の天才が出てくるのであろうかと心強い気がする。

「予を秀才といふはあたらず、よく刻苦すといふはあたれり」といった頼山陽の言は彼のすなおな告白であつたに相違ない。

つとめて書を読み、しかもそれが他人の生と労作からの所産であって、自分のそれは別になければならぬことを自覚し、他人の生にあずかり、その寄与をすなおに受けつつ、しかも自らの目をもって人生を眺め、事象を考察することのできるもの、これが理想的の読書青年である。

### 三 教養の読書と専門職能の読書

読書には人間教養のためのものと、社会において分担すべき職能のためのものとある。



後者に関してはその種類が多様であるのと、技術知の習得に関するもので、特に挙げてあげつらうことができない。ただこの場合において一、二の注意を述べるなら、職能に関する

読書はその部門の全般にわたる <sup>ちょうかん</sup>鳥瞰 が欠くべからざるものであるが、そのあいだにもおのずと自分の特に関心し、選ぶ種目への集注的傾向が必要である。何事かを好み、傾くということがそのことへの愛と練達との基礎だからである。「この一技につながる」という決意は人間的にも肝要なものである。またそれとともに、職能というものは真摯にラディカルに従事して行けば、必ず人生哲学的な根本問題に接触してくるものである。医者は生と、精神の課題に、弁護士は倫理と社会制度の問題に、軍人は民族と国際協同の問題に接触せずにはおられない。その最も適切な例証は、最近に結成せられた「産業技術連盟」の声明書である。それは純粋に専門的な技術家のみで結社であるが、技術は社会的・政治的問題と関連することなしには、その技術の任務と成果とをとげることができないと宣言しているのである。

かような事情である故、職能の習得のための読書もまた一般人生哲学的な課題のための読書と結びつかずにはおられないのである。

がここでは特に人間教養のための読書に重点をおいて説述したい。それは職能の何たるを問わず、何人もその人格完成を願い精進しなければならないからである。

私は青年学生が人生の重要問題に関する自らの「問い」をもって読書することをすすめたい。生に真摯であれば「問い」がないはずはない。そして「問い」こそ自発的に読書への欲求を促すものである。法然はその「問い」の故に比叡山で一切経をみたびも閲読したのである。

書物は星の数ほどある。しかしかような「問い」をもってたち向かうとき、これに適切に答え得る書物はそれほど多いものではないのである。むしろそのはなはだ少ないのに意外の感を持つであろう。

かくして「問い」はおのずと書物を選ばしめる。自らの「問い」なくして手当たり次第に読書することは、その割合に効果乏しく、また批判の基準というものが立ちがたい。

自ら問いを持ち、その問いが真摯にして切実なものであるならば、その問いに対する解答の態度が同様なものである書物を好むであろう。まず問いを同じくする書物こそ読者にとって良書なのである。かような良書の中で、自分の問いに、深く、強く、また行きわたって精細にこたえてくれる書物があるならば、それは愛読書となり、指導書となるであろう。かような愛読書ないし指導書は一生涯中数えるほどしかないものである。

たとえば私にとっては、テオドル・リップスの『倫理学の根本問題』はかような指導書の一つであった。かような指導書を見出したときには、これをくりかえし、幾度となく熟読し、玩味し、その解答を検討すべきである。手垢に汚れ、ページがほどけるほど首引きするのこそ指導書である。

広く読書することも必要であるが、指導書を精読することは一層大切である。

それは問題の所在と、その難点とを突き止め、これが解決の方法を示唆するものだからである。たとい満足な解決が与えられなくとも、解決の方法をつくり、その難点と及び限界とを良心的に示してくれるならば、われわれは深き感謝を持たねばならぬ。徹頭徹尾会心の書というものはあるものではない。

私の場合でいえば、リップスの倫理学も私には充実な満足を与えてはくれなかった。かえって倫理学というものの限界と、失望とを私に与えた。私はこの書を反復熟読し、それを指導原理として私の実践生活を規範しようとさえもしたが、しかし結局はそれも破綻して、私は倫理学以上の、「善悪を横に截る道」を求めて、宗教的方法の探求へと向かったものであった。

がここでいいたいのは、かような指導書の精読ということである。かような指導書を発見するには、自分の生の問いを抱いて、その問いを同じくし、解決を与えんと擬する書物を捜せばいいのである。

下宿を捜すにも実際にかような仕方で、要求の条件に適するものを、数多くの中から選んだわけである。

同一人にとっても、問いの所在ならびに解決方途の異なるにしたがって、かような指導書もまた推移していく。私にとってはそれはカルル・ヒルティの『眠られぬ夜のため』であった時期もあった。『歎異抄』であった時期もあった。禅宗の普覚大師の書であったときもあった。中山みき子の『みかぐら歌』であったときさえあるのである。

かような時期においては反復熟読して暗記するばかりに読み味わうべきものである。

一度通読しては二度と手にとらぬ書物のみ書庫にみつことは寂寞である。

自分の職能の専門のための読書以外においては、「物識り」にならんがために濫読することは無用のことである。識見は博きにこしたことはないが、そのためにしみじみと心して読まぬのでは得るところが少ない。浅き「物識り」を私はとらない。

「物識り」と「深き人」とは同一人であることはまれである。

特に実践の問題においては、「知る」とは「行なう」ことと不可分である故に、なおさら物識りにはなり難い事情があるのである。

読書とは単なる知性の領域にある事柄ではない。それは情意と、実践との世界に関連しているのである。特に東洋においては、それはむしろ実践のためにあるものなのであった。

しかしながら前にも述べた如く、良書とは自分の抱く生の問いにこたえ得る書物のみではなく、生の問いそのものをも提起してくれるものはさらに良書ではある。「いかに問うか」ということは素質に属する。天才は常人よりももっと深く、高く、鋭く問い得る人間である。常人が問わずしてみすごすことを天才は問い得るのである、林檎はなぜ地に落ちるか？ これはかつてニュートンが問うまで常人のものではなかった。姦淫したる女を石にて打つにたうる無垢の人ありや？ イエスがこの問いを提出するまで誰も自分の良心に対してかく問い得なかった。財の私的所有ならびに商業は倫理的に正しきものなりや？ マルクスが問うてみせるまで、常人はそれほどにも自分らの禍福の根因であるこの問いを問うこと

ができなかった。

天才の書によってわれわれは自分の力では開き得ない宇宙と人間性との奥深き扉をのぞき得るのである。それは最も深き意味での人間教育である。真と美とモラルの高みへとわれわれを引き上げてくれるのである。かような人間教育をなし得る書物こそ最良の書であり、青年がたましいを傾けて愛読すべきものである。

われわれが読書に意を注がぬことの最も恐ろしいのは、かような人間教育の書にふれる機会を失うからである。仏教の開教偈に、

微妙甚深無上の法は、百千万劫にも遇ひ難し。我れ今見聞して受持するを得たり。願はくは如来の真実義を解かん。

とあるのはこの心である。「あいがたき法」「あいがたき師」という敬虔の心をもっと現代の読書青年は持たねばならぬのである。

街頭狗肉を売るところの知的商人、いつもの説教師たちを輩出せしめる現代ジャーナリズムに毒されたる読書青年が、かような敬虔な期待を持つことができないのは同情に値する。しかしながらジャーナリズムはまた需要にこたえるものでもある。読書子の書物への期待が深く、高いならば、そのような書物についてはあうことができるであろう。

#### 四 書物無き世界

人間教養の最後は、しかしながら、書物によるものではない。人は知性と、一般に思想とを究竟のものと思つてはならないのである。人間の宇宙との一致、人間存在の最後の立命は知性と思想とをこえた境地である。いと高く、美しき思想もそれが思想である限りは、「なくてならぬ究竟唯一」のものではない。書物は究竟者そのものを与え得ない。それは仏教では「絶学無為の真道人」と呼ぶのである。学を絶って馳求するところなき境地である。「マルタよ、マルタよ、汝思ひわづらひて疲れたり。されどなくてならぬものは唯一つなり」とキリストがいったように、思想そのものは実は「思い煩い」であり、袋路である。はてしなき迷路である。知識階級とは、この意味においては、永遠の懐疑の階級なのである。立命のためには知性そのものを超克しなくてはならぬ。知性を否定して端的に啓示そのものを受けいれねばならぬ。それは書物ではできない。その意味においては、弁証法的神学者がいうように、聖書でさえも啓示を語った書ではあるが、啓示そのものではないのである。

かように書物と知性から離れて端的に神の啓示につくまでの人間超克の道程に読書があるのである。読書は無意義ではない。啓示を指さす指である。解脱への通路である。書を読んで終に書を離れるのが知識階級の真理探究の順路である。

現代青年学生は盛んに、しかしながら賢明に書を読まねばならぬ。しかしながら最後には、人間教養の仕上げとしての人間完成のためには、一切の書物と思想とを否定せねばならぬものであることを牢记しておくべきものである。

キリストのいうように「嬰兒」の如くになり、法然の説く如くに、「一文不知の尼入道」となり、趙州の如くに「無」となるときにのみ、われわれは宇宙と一つに帰し、立命することができるのである。

## 五 知性か啓示か

今日この国の知識階級の前には知性か啓示かの問題がおかれている。知性主義は主として現在の文化指導者たちによってとなえられているものである。そして今のところ青年学生はこの知性主義を支持し、それが読書の方向を支配しているかに見える。

われわれはインテリゼンスの階層である読書青年が今その旺盛な知識欲をもって、その知的胃腑を満たし、また思考力を操練せねばならないとき、知性の拡充よりもその揚棄を先きに説かんと欲するものではない。しかしながら知性そのものにもその階層がある。真理を把握するオルガンとしての知性は、直観となり、啓示となるのでなければ全くはない。今日この国の知的指導者たちの主張するのは主として合理的知性である。「合理的なるもの」を認識するための知性である。しかし生の真理の重要な部分はむしろ非合理的の構造を持ち、それを把握するためにはそれに対応する直観的英知によらねばならぬ。さらに生の真理の最深部は啓示によるのでないならとらえることができぬ。否それはわれわれがとらえるのでなく、とらえられるのである。

ブルンナーやバルトらの主張する如くに、啓示なくして、理性知のみによって、生の真理をとらえ得るという考え方そのものが、すでに生への要請を平浅ならしめるものである。

最近にはこの国の知性主義者たちも、その非を認めて知性の改造をいうようになった。それはよろこぶべき転向である。しかしながらまだ、彼らが知性の否定や、啓示の肯定をいうようになる時機はおそらく遠いであろう。

われわれは生の探求に発足した青年に、永遠の真理の把握と人間完成とを志向せしめようと祈願するとき、彼らがいずれはその理性知を揚棄せねばならぬことを注意せざるを得ず、またその読者の選択を合理的知性に対応する方向のみに向けしむることは衷心からの不安を感じる。

彼らに祖国への愛を植えつるためには、非合理的なるものへの直観を要し、さらに彼らに神への帰依を目ひらかしむるためには、啓示への受容を説かなければならないからである。

人間教育者としてのわれわれの任務を思うとき、われわれは彼ら純真の若き生命に対し、生と人間性とを最高の可能性において、その存在の神秘性において、提起しておかなければならない命令を感じる。

たとい彼らにとって当面には、そして現実身边には、合理的知性の操練と、科学知の蓄積とが適当で、かつユースフルであろうとも、彼らの宇宙的存在と、靈的の身分に関しては、彼らが本来合理的の平民の子ではなくして、神秘的の神の胤であることを耳に吹きこん

でおきたいのである。なぜならいつかは彼らはその霊的の身分に目ざめねばならないから、  
そして聖なる国と神の街との建設に向かわねばならないからである。

(一九三八・一二・二)

---

底本：「青春をいかに生きるか」角川文庫、角川書店

1953（昭和 28）年 9 月 30 日初版発行

1967（昭和 42）年 6 月 30 日 43 版発行

1981（昭和 56）年 7 月 30 日改版 25 版発行

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2005 年 6 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 32. 一問一答

太宰治

「何か、最近の、御感想を聞かせて下さい。」

「困りました。」

「困りましたでは、私のほうで困ります。何か、聞かせて下さい。」

「人間は、正直でなければならない、と最近つくづく感じます。おろかな感想ですが、きのうも道を歩きながら、つくづくそれを感じました。ごまかそうとするから、生活がむずかしく、ややこしくなるのです。正直に言い、正直に進んで行くと、生活は実に簡単になります。失敗という事が無いのです。失敗というのは、ごまかそうとして、ごまかし切れなかった場合の事を言うのです。それから、無慾ということも大事ですね。慾張ると、どうしても、ちょっと、ごまかしてみたくくなりますし、ごまかそうとすると、いろいろ、や

ついで  
やこしくなって、遂に馬脚をあらわして、つまらない思いをするようになります。わかり切った感想ですが、でも、これだけの事を体得するのに、三十四年かかりました。」

「お若い頃の作品を、いま読みかえして、どんな気がしますか。」

「むかしのアルバムを、繰りひろげて見ているような気がします。人間は変わっていません

ほほえ  
が、服装は変わっていますね。その服装を、微笑ましい気で見ている事もあります。」

「何か、主義、とでもいったようなものを、持っていますか。」

「生活に於いては、いつも、愛という事を考えていますが、これは私に限らず、誰でも考えている事でしょう。ところが、これは、むずかしいものです。愛などと言うと、甘ったるいもののお考えかも知れませんが、むずかしいものですよ。愛するという事は、どんな事だか、私にはまだ、わからない。めったに使えない言葉のような気がする。自分では、たいへん愛情の深い人のような気がしていても、まるで、その逆だったという場合もあるのですからね。とにかく、むずかしい。さっきの正直という事と、少しつながりがあるような気もする。愛と正直。わかったような、わからないような、とにかく、私には、まだわからないところがある。正直は現実の問題、愛は理想、まあ、そんなところに私の主義、とでもいったようなものがひそんでいるのかも知れませんが、私には、まだ、はっきりわからないのです。」

「あなたは、クリスチャンですか。」

「教会には行きませんが、聖書は読みます。世界中で、日本人ほどキリスト教を正しく理解できる人種は少ないのではないかと考えています。キリスト教に於いても、日本は、これから世界の中心になるのではないかと考えています。最近の欧米人のキリスト教は実に、いい加減のものです。」

「そろそろ展覧会の季節になりましたが、何か、ごらんになりましたか。」

「まだどこの展覧会も見ていませんが、このごろ、画をたのしんでかいている人が実に少い。すこしも、よろこびが無い。生命力が貧弱です。

ばかに、威張ったような事ばかり言って、すみませんでした。」



---

底本：「太宰治全集 10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

初出：「芸術新聞」

1942（昭和17）年4月11日発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 33.わが文学修業

織田作之助

本当に小説の勉強をはじめたのは、二十六の時である。それまでは専ら劇を勉強していた。小説は殆んど見向きもしなかったようである。ドストイェフスキイやジイドや梶井基次郎などを読んだほかには、月々の文芸雑誌にどんな小説が発表されているかも良く知らなかった。その代り、戯曲は実によく読んだ。しかし、それも学者のようなペダンチックな読み方で、純粋戯曲の理論というものをつくりだすためにのみ読んでいたようである。こと劇に関する限り、変に理論家であったのは今考えてみるとおかしい。私の純粋戯曲理論から見ると、小説本など形式がだらだらして、なんだか汚らわしいように思われた。高等学校時代のことである。

高等学校は三高、山本修二先生、伊吹武彦先生など劇に関係のある先生がいて、一緒に脚本朗読会をやって変な声をだしていた。そういう関係から劇に志したのには無論違いないだろうけれど、しかし、中学校の三年生の時の作文に、股旅物の戯曲を書いて叱られたところを見ると、もともと好きだったのだろう。そういえば、たしか小学校の五年生の時にも対話風の綴方を書いていて、彼女だとか少女だとかいう言葉が飛び出したが、それを先生は「かのおんな」「かのおとめ」と訂正して読まれた。

戯曲ではチェーホフ、ルナアル、ボルトリッシュ、ヴィルドラック、岸田国土などが好きで、殆んど心酔したが、しかし、同じクラスに白崎礼三という詩人がいて、これと仲が良く、下宿も同じにしていたくらいだったから、その感化でランボオやヴァレリーやマラルメを読み、その雰囲気から戯曲を書いた。従って実に変な戯曲を書いていたようだ。十九から二十五まで七年の間に、四つ戯曲を書いた。そのうちの二つは、三高の五年生の時に、もう東京帝大へ行っている友人らとはじめた「海風」という同人雑誌に発表したけど、問題にされなかった。

大学へ行かず本郷でうろうろしていた二十六の時、スタンダールの「赤と黒」を読み、いきなり小説を書きだした。スタイルはスタンダール、川端氏、里見氏、宇野氏、滝井氏から摂取した。その年二つの小説を書いて「海風」に発表したけど、二つ目の「雨」というのがやや認められ、翌年の「俗臭」が室生氏の推薦で芥川賞候補にあげられ、四作目の「放浪」は永井龍男氏の世話で「文学界」にのり、五作目の「夫婦善哉」が文芸推薦になった。

こんなことなれば、もっと早く小説を書いて置けばよかったと、現金に考えた。八年も劇を勉強して純粋戯曲論などに凝っている間に、小説を勉強して置けばよかったと、私は未だ読みもせぬ小説家の数を数えて、何か取りかえしのつかぬ気がした。けれど、八年の劇勉強はさすがに私の小説の上に影響を及さなかったわけではない。

私の戯曲がものにならなかったのは純粋戯曲理論というものをまずつくって置いて、それにあてはめて書こうとしたことも一つの原因だと思った。で、私は小説の場合、あらか

じめ理論をつくってそれをあてはめるといふようなことはしなかった。次に、永年科白で苦勞していい加減科白に嫌気がさしていたので、小説では会話をすくなくした。なお、文楽で科白が地の文に融け合う美しさに陶然としていたので会話をなるべく地の文の中に入れて、全体のスタイルを語り物の形式に近づけた。更に言えば、戯曲的一幕はたいがい三十分か一時間を克明にうつすので時間的に窮屈極まる。そこで、小説では場面場面の描写を簡略にし、年代記風のものを書きたいと思い、既に二作目の「雨」でそれをやった。してみれば、私の小説は、すくなくともスタイルは、戯曲勉強から逆説的に生れたものであると言えるだろう。私の小説の話術は、戯曲の科白のやりとりの呼吸から来ている筈だ。

「夫婦善哉」を書くまでは、一人の作家とも知己がなかった。原稿を見て貰ったことも教を仰いだこともない。間接に師と仰いだのは、前記の作家たち、ことにスタンダール、そしてそこから出ているアラン。なお、小林秀雄氏の文芸評論はランボオ論以来ひそかに熟読した〔#「熟読した」は底本では「塾読した」〕。

西鶴を本当に読んだのは「夫婦善哉」を単行本にしてからである。私のスタイルが西鶴に似ている旨、その単行本を読んだある人に注意されて、かつて「雨」の形式で「一代男」をひそかに考えていたことはあるにせよ、意外かつ嬉しかった。その頃まだ「一代男」すら通読していなかった私は、あわてて西鶴を読みだし、スタンダールについてわが師と仰ぐべき作家であることを納得した。

私は「世間胸算用」の現代語訳を試み、去年は病中ながら「西鶴新論」という本を書いた。西鶴の読み方は、故山口剛氏の著書より多くを得た。都新聞の書評で私のこの書を酷評した人があるが、私はその人たちよりは西鶴を知っている積りである。西鶴とスタンダールが似ていることを最初に言ったのは私であるが、これは他日詳しく論ずる。ただ、ここでは、私の西鶴観は「西鶴はリアリストの眼を持っていたが、書く手はリアリストのそれではなかった」というテーマから出発していることを言うて置こう。これは即ち私にとっては、西鶴は大坂人であったということの意味する。もつとも、こう言ったからとて、私は西鶴を狭義の大坂人という範疇の中にせばめる積りはない。私にとって、大阪人とは地理的なものを意味しない。スタンダールもアランも私には大阪人だ。すこし強引なようだが、私は大阪人というものをそのように広く解している。義理人情の世界、経済の世界が大阪ではない。元禄の大坂人がどんな風に世の中を考え、どんな風に生きたかを考えれば判ることである。まして、東京が考えているエンタツ、アチャコだけが大阪ではない。通俗作家が大阪を歪めてしまったのである。

してみれば、私の文学修業は大阪勉強ということに外ならない。大阪は私の生れ故郷であり、そして私の師である。なお、ほかに、私には気になる作家がある。正宗白鳥氏、内田百閒氏。気になる余り、暇さえあれば読んでいる。川端氏、太宰氏の作品のうらにあるものは掴めるが、ああ、やってるなと思うが、もう白鳥、百閒となると、気味がわるくてならない。怖い作家だ、巧いなあと思う作家は武田麟太郎氏、しかもこの人の巧さはどぎつくない。この人の帰還がたのしみである。この人が帰れば、上京して会いたいと思う。

その作家魂を私淑し、尊敬しながら、なんだか会うのが怖い作家は、室生氏である。会う機会を得た作家は、会った順に言うと、藤沢、武田、久米、片岡、滝井、里見の諸氏。最近井上友一郎氏に会い、その大阪訛をきいて、嬉しかった。

小説の勉強をはじめてからまだ四年くらいしか経たない。わが文学修業はこれからである。健康が許せば、西鶴が小説を書いた歳まで生きられるだろう。まだ十年ある。文学修業はそれからだと思う。私は最悪の健康状態でよく今日まで生きて来られたと思っている。文学が恐らく私の生命を救って来たのだろう。常に酷評されながら、何糞と書いて書いている。それで表面はぴんぴんしている。そのうち、戯曲も書こうと思う。最近、友人が「君は本職をもう捨てたのか」といった。小説は私の副職だということである。「いや、今に戯曲も書くよ」と答えたが、その実、素人劇の脚本を昨年頼まれて書き演出もした。満更でもないと思った。いろいろ楽みで、なかなか死ねないと思う。

---

底本：「定本織田作之助全集 第八巻」文泉堂出版

1976（昭和 51）年 4 月 25 日発行

1995（平成 7）年 3 月 20 日第 3 版発行

初出：「現代文学」

1943（昭和 18）年 4 月

入力：桃沢まり

校正：小林繁雄

2007 年 4 月 25 日作成

2007 年 8 月 18 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

[#...] は、入力者による注を表す記号です。

## 34.愛読書の印象

芥川龍之介

子供の時の愛読書は「西遊記」が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの「天路歷程」なども到底この「西遊記」の敵ではない。それから「水滸伝」も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。一時は「水滸伝」の中の一百八人の豪傑の名前を悉く

あんき

諳記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒険小説や何かよりもこの「水滸伝」だの「西遊記」だのといふ方が遙かに僕に面白かつた。

中学へ入学前から徳富蘆花氏の「自然と人生」や樗牛の「平家雑感」や小島烏水氏の「日本山水論」を愛読した。同時に、夏目さんの「猫」や鏡花氏の「風流線」や緑雨の「あられ酒」を愛読した。だから人の事は笑へない。僕にも「文章倶楽部」の「青年文士録」の中にあるやうな「トルストイ、坪内士行、大町桂月」時代があつた。

中学を卒業してから色んな本を読んだけれども、特に愛読した本といふものはないが、

けんらん

概して云ふと、ワイルドとかゴーチエとかいふやうな 絢爛とした小説が好きであつた。

たし

それは僕の気質からも来てゐるであらうけれども、一つは 慥かに日本の自然主義的な小説に厭きた反動であらうと思ふ。ところが、高等学校を卒業する前後から、どういふものか趣味や物の見方に大きな曲折が起つて、前に言つたワイルドとかゴーチエとかといふ作家のものがひどくいやになつた。ストリンドベルクなどに傾倒したのはこの頃である。その時分の僕の心持からいふと、ミケエロ・アンヂエロ風な力を持つてゐない芸術はすべて瓦礫のやうに感じられた。これは当時読んだ「ジャンクリストフ」などの影響であつたらうと思ふ。

さういふ心持が大学を卒業する後までも続いたが、段々燃えるやうな力の崇拜もうすらいで、一年前から静かな力のある書物に最も心を惹かれるやうになつてゐる。但、静かなと言つてもたゞ静かだけでも力のないものには余り興味がない。スタンダールやメリメエや日本物で西鶴などの小説はこの点で今の僕には面白くもあり、又**ため**にもなる本である。

序ながら付け加へておくが、此間「ジャンクリストフ」を出して読んで見たが、昔ほど感興が乗らなかつた。あの時分の本はだめなのかと思つたが、「アンナカレニナ」を出して二三章読んで見たら、これは昔のやうに有難い気がした。

---

底本：「芥川龍之介全集 第六巻」岩波書店

1996（平成8）年4月8日発行

初出：「文章倶楽部 第5年第8号」

1920（大正9）年8月1日発行

※初出誌に、顔写真と「曇天の水動かずよ芹の中」の句の筆跡写真と共に掲載された。

入力：砂場清隆

校正：高柳典子

2006年2月21日作成

2006年4月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 35. 生きること 作ること

和辻哲郎

+目次

一

私は近ごろ、「やっとわかった」という心持ちにしばしば襲われる。対象はたいていこれまで知り抜いたつもりでいた古なじみのことに過ぎない。しかしそれが突然新しい姿になって、生き活きと私に迫って来る。私は時にいくらかの誇張をもって、絶望的な眼を過去に投げ、一体これまでに自分は何を知っていたのだとさえ思う。

たとえば私は **affectation** のいやなことを昔から感じている。その点では自他の作物に対してかなり神経質であった。特に自分の行為や感情についてはその警戒を怠らなかつた。しかるにある日突然私は眼が開いた気持ちになる。そして自分の人間と作物との内に多分の醜い **affectation** を認める。私はこれまで何ゆえにそれに気がつかなかつたかを自分ながら不思議に、また腹立たしく思う。**affectation** が何であるか、それがどういう悪い根から生いでて来るか、それはまるきりわかっていなかったのである。何というばかだ、と私は思わないではいられない。

そういう時には自分の悪いことばかりが眼につく。自分の理解を疑う心が激しく沸き立つ。「人生を見る眼が鈍く浅い。安価な自覚でよい心持ちになっている。自分で自分を甘やかすのだ。」こう自分で自分を罵る。そして自分の人格の惨めさに息の詰まるような痛みを感ずる。

しかしやがて理解の一步深くなった喜びが痛みのなかから生まれて来る。私は希望に充ちた心持ちで、人生の前に——特に偉人の内生の前に——もつともつと謙遜でなくてはならないと思う。そして底力のある勇気の徐々によみがえって来ることを意識する。

二

ただ「知る」だけでは何にもならない、真に知ることが、体得することが、重大なのだ。——これは古い言葉である。しかし私は時々今さらしくその心持ちを経験する。

——誰でも自分自身のことは最もよく知っている。そして最も知らないのはやはり自己である。「汝自身を知れ」という古い語も、私には依然として新しい刺激を絶たない。

思索によってのみ自分を捕えようとする時には、自分は霧のようにつかみ所がない。しかし私は愛と創造と格闘と痛苦との内に——行為の内に自己を捕え得る。そして時には、思わず顔をそむけようとするほどひどく参らされる。私はそれを自己と認めたくない衝動にさえ駆られる。しかし私は絶望する心を鞭うって自己を正視する。悲しみのなかから勇ま



しい心持ちが湧いて出るまで。私の愛は恋人が醜いゆえにますます募るのである。

私は絶えずチクチク私の心を刺す執拗な腹の虫を断然押えつけてしまうつもりで、近ごろある製作に従事した。静かな歓喜がかなり永い間続いた。そのゆえに私は幸福であった。ある日私はかわいい私の作物を抱いてトルストイとストリンドベルヒの前に立った。見よ。その鏡には何が映ったか。それが果たして自分なのか。私はたちまち暗い谷へ突き落とされた。

私は自分の製作活動において自分の貧弱をまざまざと見たのである。製作そのものも、そこに現われた生活も、かの偉人たちの前に存在し得るだけの権威さえ持っていなかった。私は眩暈を感じた。しかし私は踏みとどまった。再び眼が見え出した時には、私は生きることと作ることとの意義が「やっとわかった」と思った。私は自分を愧じた。とともに新しい勇気が底力強く湧き上がって来た。

親しい友人から受けた忌憚なき非難は、かえって私の心を落ちつかせた。烈しい苦しみと心細さとのなかではあったが、自分にとっての恐ろしい真実をたじろがずに見得た経験は私を一步高い所へ連れて行った。私は黒い鉄の扉に突き当たったが、自分の力で動かし難い事を悟るとともに、鍵穴を探し出す余裕を取り返したのである。

三

トルストイやストリンドベルヒの作物を読んでみる。語の端々までも峻厳な芸術的良心が行きわたっている。はち切れるような力が語の下からのぞいている。短い描写が驚くべき豊富な人生を示唆する。

ところで自分はどうかであろう。強調すべき点は気が済むまでも詳しく書こうとする。そのために空虚な語のはいつて来ることには気づかない。従って多くを示唆する少ない語の代わりに、少なくを説明しようとする多くの語がある。しかも熱に浮かされた自分にはその空虚が充溢に見えるのである。

おおぎょう

大業にし過ぎるということは若い者にあり勝ちの欠点かも知れない。重大事を重大事として扱うのに不思議はないと思うから。しかし引きしめて控え目に、ただ核実のみを絞り出す事は、嘘を書かないための必須な条件であった。製作者自身は真実を書いているつもりでも、興奮に足をさらわれて手綱の取り方をゆるがせにすれば、書かれた物の内からは必ず虚偽が響き出る。大業にすることはすなわち致命傷であった。

私はこの点に自己を警戒すべき重大事を認めた。いかに苦しんでも苦しみ足りるという事のないこの人生を、私はともすれば調子づいて軽々しく通って行く、そしてその凝視の不足は直ちに表現の力弱さとして私に報いて来るのである。私はもっとしっかりと大地を踏みしめて、あくまで浮かされることを恐れなくてはいけない。生活態度の質実はやがて製作態度をも質実にするだろう。製作態度の質実はやがて表現の簡素と充実とをもたらすだろう。

私は芸術的良心が生活態度の誠実でない人の心に榮えるとは思わない。

#### 四

フランスやイタリアの作家には饒舌が眼につく。私はダヌンチオやブウルジェエの冗漫に堪え切れない。トルストイに至ってはさすがに偉大である。たとえばあの大部なアンナ・カレニナのどのページを取ってみても、私は極度に緊縮と充実とを感じるのである。

ドストイェフスキイを冗漫だとする批評はかなり古くからあるが、私は冗漫を感じない。内容がはち切っているから。——もつとも技巧から言えばかなり隙がある。夏目先生はカラマゾフ兄弟のある点をディクンスに比して非難された。その時私は承服し兼ねたが、しかし考えてみると私はディクンスの本体を知らない。それにドストイェフスキイには浪漫派らしい弱点がある。恐らく夏目先生の非難は当たっているのだろう。

けれどもドストイェフスキイの偉大な内生活は表現の上の欠点を消してしまう。カラマゾフ兄弟は我々の新しい聖書である。そこには「人間」の心がすみからすみまで書き現わされている。そして生の渦巻の内から一道の光明を我々に投げ掛ける。

ストリンドベルヒに至っては、その深さと鋭さにおいて——簡素と充実とにおいて近代に比肩し得るものがない。また心理と自然と社会との観察者としても、ロシアの巨人の墨を摩する。彼もまた「人間」の運命を描いた。そして我々に新しいファウストを与えた。

私は近ごろ彼の『赤い室』をゾラの『パリ』と比較してみた。彼がゾラの影響の下にその処女作を書いたことは疑いがない。しかし驚くべき事は三十歳の青年が自然主義の初期にすでにゾラを追い越しモウパッサンの先を歩いていたことである。題目とねらい所は両者ほとんど同じで、構図さえも似かよっているが、ゾラの百ページを費やす所は彼の筆によればわずかに二三十ページで済む。しかも描写が具体的で事実迫っている点では、ゾラははるかにかなわない。ゾラには強く作為の匂いがする。そして心理が浅くかつ足りない。その上かなり冗漫である。ストリンドベルヒはこれに反して社会の断層を描くのに自伝的の匂いをもって貫ぬいている。心理は鋭く、描写はカリカチュアに近いほど鮮やかである。しかも彼の心理観察の周密は常に描写のカリカチュアに墮するのを救う。従って彼の描写は簡素の限度だと言う事もできる。

ストリンドベルヒの頭は恐ろしくよい。ゾラの頭はきわめて平凡である。

#### 五

告白の欲望はともすれば直ちに製作衝動と間違えられる。もとより体験の告白を地盤としない製作は無意義であるが、しかし告白は直ちに製作ではない。告白として露骨であることが製作の高い価値を定めるとは思っていない。けれどもまた告白が不純である所には芸術の真実は榮えない。私の苦しむのは真に嘘をまじえない告白の困難である。この困難に打ち克った時には人はかなり鋭い心理家になっているだろう。今の私はなお自欺と自

己弁護との痕跡を、十分消し去ることができない。自己弁護はともすれば浮誇にさえも流れる。それゆえ私は苦しむ。真実を愛するがゆえに私は苦しむ。

六

私は自分に聞く。——お前にどんな天分があるか。お前の自信が虫のよいうぬぼれでない証拠はどこにあるのだ。

そこで私は考える。——私には物に食い入るかなり鋭い眼がある。一つの人格、一つの世相、一つの戦い、その秘められた核を私は一本の針で突き刺して見せる。その証拠は私の製作が示すだろう。

そして私は製作する。できたものをたとえばストリンドベルヒの作に比べてみる。何という鈍さと貧弱さだろう。私は差恥と絶望とで首を垂れる。

微妙な線、こまやかな濃淡、魔力ある抑揚、秘めやかな諧調、そういう技巧においてもまた、私の生まれつきのうぬぼれは製作によって裏切られる。要するに私は要求と現実とを混同する夢想家に過ぎなかった。

こうして私は自分の才能に失望してかなり苦しむ。しかし私は思う。私の問題は与えられた物が何であるかに——私の Was にあるのではなかった。私はただ与えられた物を愛し育てるために生きているのであった。私はただ自分の愛の力の弱らないように、また与えられた物の発育の止まらないように心配していればよい。私の苦しみと愛とで恐らく私の生活の価値は徐々に築かれて行くだろう。

運命を愛せよ。与えられた物を呪うな。生は開展の努力である。生の重点はこの努力に

あつて、与えられた物にあるのではない。呪詛は生を <sup>そこな</sup>傷い、愛は生を高める。ただ愛せよ、そしてすべてを最もよく生かせよ。——こうして私は喜悦と勇氣とに充たされる。天分の疑懼はしばらくの間私の心を苦しめなくなる。

天才はその悲痛な運命の愛によってのみ非凡であった。彼らは多くを与えられた事よりも、むしろ多くを最もよく生かした事において偉大であった。私はその驚嘆すべき誠実のゆえにのみ彼らの前にひざまずく。

そして私は自分に聞く。——お前は誠実か。お前の努力は最大限まで行っているか。それが自欺でない証拠はどこにあるのだ。

七

人生は戦いである。そして戦いの大小深淺がまた人間の価値を左右する。

戦いの態度の純一は、複雑な内生よりも、単純な迷いのない生活にはるかに起こりやすい。それゆえただ純一のゆえに意を安めてはいけない。純一の態度に固執する者はともすれば内容を空疎にする。

私はある冬の日、紺青鮮やかな海のほとりに立った。帆を張った二三十艘の小舟が群れをなして沖から帰って来る。そして鳩が地へ舞いおりるように、徐々に、一艘ずつ帆をお

たむろ  
ろして半町ほどの沖合いに「屯」した。岸との間には大きい白い磯波が巻き返している。いつのまにか薄穢ない老人と子供とが岸べに群がり立った。やがて、体のよい若者のそろった舟が最初に突き進んで来る。磯波は烈しく押し戻す。綱が投げられる。若者が波の間へ飛び込んで行く。舟は木の葉のようにもまれている。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸

もろごえ  
からは綱を引くものが「諸」声に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散らし、足をそろえ、声を合わせて舟を砂の上に引きずり上げて行く。

一艘上がるとともに、舟にいた若者たちは直ちに綱を取って海に向かった。次の一艘が磯波に乗り掛かると、ちょうど綱を荒れ回る鹿の角に投げ掛けるように、若者は舟へ綱を投げる。そして他の若者たちは躍り掛かって、肩をあてて一気に舟を引き上げる。こうして次から次へと数十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人数はますます殖える。舟はますますおもしろそうに上がって来る。老人と子供と女房たちは綱に捕まって快活に跳ねている。誰が命令するというでもないのに、一団の人々は有機体のように完全に協力と分業とで仕事を実現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見まもった。海の力と戦う人間の姿。……集中と純一とが最も具体的な形に現われている。……力の充実……隙間のない活動。——一人の少年が両手を高くあげて波のなかに躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらわれた板切れに追いつがる。やがて板切れを抱いて水を跳ね飛ばしながら駆け上がって来る。——生が踊り跳ねている。生が自然と戦いそれを征服している。

私はそこに現われた集中と純一と全存在的な活動とのゆえにしばし恍惚とした。

この気持ちのよさは我々がすべての活動に追い求めている所の一種の法悦であった。我々の内にもまた、生の焰はかく燃え上がらなくてはいけない。まことにそれは生本来の姿であり、また生本来の歓喜である。

こうして漁師の群れの活動をながめている内に私はふと傍観者の手持ち無沙汰を感じ出した。私は漁師の群れに投じてともに働くか、でなければ傍観者としての自己の立場を是認するか、いずれかに道を極めなければならなくなった。そして私の頭には百姓とともに枯れ草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見おろして坐すべきあの「考える人」の姿とが、相並んで浮かび出た。私は石の上に腰をおろして、左の肱を右の膝に突いて、顎を手の甲にのせて、——そして考えに沈んだ。残った舟はもう二三艘になっていた。

私は思った。漁師の群れに貴い集中と純一とを認めたのは私の心に過ぎなかったではないか。彼らが浜から家へ帰る。そこにはもう貴さはない。彼らは波と戦って勇ましく打ち克つ。しかし敵手が人間になり、さらに自分の心になると、彼らはもう立派な戦士ではない。彼らの活動は真生の面影を暗示する。しかしそれは彼ら自身の生活ではなかった。彼

らは低い力と戦っている時にのみ強いのであった。

私は複雑な、深さの知れぬ人生のいろいろな力を思った。そして集中と純一との欠けている惨めな醜さを心に浮かべた。そこにある苦しい戦いは、裸になって冬の海に飛び込むことによって、解決されそうにもなかった。私はただ自分のやり方で、自分の内生に、あの集中と純一とを獲得するほかはない。そのためには私のすべての戦いを終局まで戦わなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活の惨めさは、目下の自分の力ではいかんともし難い。

私は一つのことを悟り得た。迷いと屈托とに遅滞しているゆえをもって、直ちにその人の人格を卑しめてはいけない。態度の純一のゆえに、直ちにその人の人格を過大視してはいけない。態度の美しさのほかに、なお一つ、戦いの深さによって人を見る視点があるからである。

八

は  
私は誤解を恐れる。そしてその恐れを愧じる。私はその恐れに打ち克たなくてはならない。

もとより誤解は不愉快である。できるならばそれを解きたいと思う。ただ言葉の間違いや事件の行き違いのほかに根のない誤解ならば、解くこともまたやすい。

しかし私は、人格の相違が誤解を必然ならしめる場合を少なからず経験する。それを解き得るものはただ大きい力と愛とである。私はそのためにはいまだあまりに弱い。私のなすべきことは、誤解を気にしないでただ力と愛とを強め育てる所にのみあるのだった。

相手の人格が頑固野卑である場合には、誤解を解くことはますますむずかしい。耶蘇でさえそれを解き得なかった。

私は群集の誤解を恐れてはならない。そして誤解を解くための焦燥などは絶対にしてはいけない。たやすく群集に理解されることは危険である。群集の喝采は必ずしも作者の勝利を示しはしない。虚偽と阿諛に充ちた作品をさえ喜ぶ人々の喝采は、恐らく不愉快なものだろうと思う。

万人の胸を潤す物を作ることは我々の理想である。我々は端的に「人間」の心に迫って行かなくてはならぬ。しかしいまだ力に乏しい私の眼には、それがほとんど不可能に見える。深いものを見得るのはただ少数の人々に過ぎない。大多数の人々を共通に動かし得る物は、今の所、センチメンタリズムのほかにないだろう。

誤解を恐れるな。ただ真実の道を歩め。

九

怒りをもって怒りを鎮める事はできない。主我心をもって主我心を砕く事もできない。それをなし得るのはただ愛のみである。

怒りは怒りをあおり、主我心は主我心を高める。もし他人の怒りと主我心を呪うならば、まず自己の内の怒りと主我心とを征服せよ。まことの愛はその時初めて湧き出るだろう。

一〇

私は彼を愛し、尊敬し、恐れ、憐れみ、そして侮蔑する。

私は愛する者、尊敬する者、恐れる者、憐れむ者、侮蔑する者を持っている。また愛し尊敬する者、愛し憐れむ者、憐れみ侮蔑する者を持っている。尊敬し恐れる者、恐れ侮蔑するものもないではない。私はこれら対人感情をただ一つの大きい愛に高めようと努力する。そのために絶えず自責の苦しみがある。複雑に結びついた感情ほど不安を起こす程度がはなはだしい。

しかしこれらの感情のすべてが一個人に集まるのは、ただ彼に対してのみである。それゆえに彼は何人よりも激しく私を不安ならしめる。私は一人でいて彼の名を思い浮かべただけでも、もういらいらし初める。そしてそのいらいらする事が自分ながら癩にさわる。

彼に対する私の態度は純一の正反である。それがあたかも、彼に打ち砕かれたような感じをさえ私の内に起こさせる。私は彼の前にひざまずくことはできない。そのくせひざまずこうとしている者のようにうろうろしている。

私は彼よりももっと愛し、もっと尊敬する人を持っている。私の生活に食い入っている点から言えば、彼と私との間にはさほど深い関係はない。しかし彼は最も辛辣に私の注意を刺激する。従って私の意識を占領する度数が非常に多い。彼の特質がこの刺激性にないとは言い切れまい。

彼の現在は未知数である。彼が私の注意を引くのは価値が高いゆえでなくて価値がいまだ現われないからである。彼は確実性の代わりに不安定をもって、力の代わりに予感をもって、形の代わりに影をもって、思想の代わりに情調をもって、何者かをほのめかす。彼は実をもって人に迫らずに虚をもって人を釣るのである。彼が偉いか偉くないか、私は知らない。

私は彼に悩まされることを愧じる。しかしその刺激のゆえに彼に感謝する。

一一

私はこういう事を夢みている。——私は自分の体験から、私のファウストを書かねばならぬ、と。この夢想の情熱は、わからないなりにファウストを読んだ少年の時から年とともに、経験とともに、高まって行く。

もとよりそこには、ファウストを書き得た偉大な人格のように、高く全く自己を築き上げようとする欲動がひそんでいる。そしてその欲動のゆえに自己を悲観し自己を鞭うつ。

私の考えでは、私の夢想するファウストは私の愛がゾシマのように深くならなくてはとも書けそうにない。今の私の愛は愛と呼ぶにはあまりに弱い。私はまだ愛するものの罪を完全には許し得ないのである。愛するものの運命をことごとく担ってやることもできない

いのである。それどころではない。迷う者を憐れみ、怒るものをいたわることすらもなし得ない。力の不足は愛の不足であった。我を張るのは自己を殺すことであった。自己を愛において完全に生かせるためには、私はまだまだ愛の悩み主我心の苦しみを——愛し得ざる悲しみを——感じていなくてはならない。

しかし私はこの愛の理想のゆえに一つの「人間」の姿を描きたいと思う。主我心の蛇に喉を嚙まれながら、はるかなる蒼空を見上げている「人間」の姿を。

それは実に人類の運命であった。人は誠実に生きる限り——生を避けて、生きながら死んだものにならない限り——才なき者は才なきままに、弱き者は弱きままに、人類の運命を象徴するのである。

それゆえ私は、現在の自分もまた小さい一つのファウストを描く権利を持ちたい。私は体験の渦巻のなかにいる。そこに一つの **Leitmotiv** が現われる。そして磁石のように砂のなかからただ鉄のみを吸い上げる。それはほとんど本能的である。かくして作られたる体験の体系は、一つの新しい生として創造の名に価する。

ただしかし、その体験が浅薄なゆえに偽りを含んでいるとしたら——

---

底本：「偶像再興・面とペルソナ 和辻哲郎感想集」講談社文芸文庫、講談社

2007（平成 19）年 4 月 10 日第 1 刷発行

初出：「新小説」

1916（大正 5）年 4 月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2011 年 5 月 7 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

---



## 36.生きるための恋愛

宮本百合子

こういう質問が出ることはわたしたちに深く考えさせるものがあります。ブルジョア雑誌は毎号かかさないうに新しい時代の幸福とか恋愛とか結婚の問題をとりあげて沢山のページをさいています。『アカハタ』にはぬやま・ひろしの「大うけだった恋愛談義」という見出しで記事がのりました。それらの恋愛論はそして結婚論は今日こういう問が出てくることに対してどういう責任を負うのでしょうか。幸福というものはできあい品となってヤミ市に売っているものではありません。わたしたちを不幸にしている今日の現実の社会の矛盾と闘って人間らしい生活を組立ててゆこうとしている、その建設のうちにわたしたちの感じる幸福と幸福への途があります。

女性の古い抑圧がとりさられて自分の判断で結婚の相手をえらび、また恋愛をする人間らしい自由が日本の社会にもだんだん実現してくるということは、自分で働き自分で人生の道を進んでゆく力のない昔の女が、どうせ愛情もなしに結婚するならばちょっとでもくらしの楽な身分のいい相手をみつけようとしてあせったその同じことを、こんどは親の手ばかりわずらわせず自分でさがしまわるといことでしょうか。決してそうは思えません。まだまだ生活の実際では主食のことから住居のことからまったく自由でない苦しい生活のなかで、その苦しさで闘いながらすこしでも苦しみの原因となっている今日の社会の矛盾を改善してゆこうと努力する若い婦人であるならば、恋愛の相手としてヤミ屋の親分がえらべましようか。食うに困らず、顔がきき、絹くつ下にも困らないからといって、そういう人の最善の愛人でありうるのでしょうか。恋愛ということは字が示す通り、人間と人生を愛する心のうえにたって、男と女とが互いにひかれあう感情です。昔の人が手鍋さげてもといったその感情は、とぼしいなかにも二人が希望のある、そして見通しのある生き方をみとめあって、たすけあって不幸と闘ってゆくその幸福をいみした言葉ではないでしょうか。

若い婦人が戦争の間、あれほど幸福をうちやぶられてくらししてきたのに、まだ幸福というものが一つのきまった箱のようにどこかにあって、それを自分のものにするかしないかというふうを考えているとすれば、あんまり悲惨なことだと思います。愛は創造の力です。苦痛をのりこえてそこによるこびをつくりだしてゆく能力をもつものです。今日の主婦のすべてが経験している家事の重荷、これから結婚しようとする若い婦人たちをおそれさすほど重い世帯の苦労は、まじめなすべての男子が自分たちの不幸の一つとして見ているものです。愛しあった男女というのは、その社会的な苦労を、自分たちの一生の努力で社会的に少くしてゆこうと心をあわせて進んでゆく、そこに決して、倦怠の生じないような愛の発展を生むでしょう。

幸福になるために結婚する、結婚するために恋愛する、これはなんていう理屈っぽいよ

うな理屈にあわないことでしょう。わたしたちは互いに生きてゆく心のうえで気があうからこそ愛すのです。愛する人間同士だからこそ、結婚もしたいのです。幸福に生きてゆきたいからこそ、その愛をまもり、発展させてゆく社会的な条件をふやそうとして努力するのです。わたしたちはこの人生において自分たちの幸福を、自分たちの生きる力こそがつくってゆくものであることを、腹から知らなければならないと思います。

〔一九四七年七月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第三十巻」新日本出版社

1986（昭和 61）年 3 月 20 日初版発行

初出：「アカハタ」

1947（昭和 22）年 7 月 7 日

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2007 年 11 月 30 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 37. 生存理由としての哲学 ——哲学界に与うる書——

三木清

時代は行動を必要とする、あらゆるものが政治的であることを要求している。このときしかし、哲学するということは、およそ人間の生存理由もしくは意義をなし得るであろうか。人間の「レエゾン・デエトル」として、哲学はいかなるものであるべきであろうか。これは現代において、すべての哲学者にとって、最も切実な問題でなければならぬ。哲学が学問としていかなるものであるべきかということも、かようなレエゾン・デエトルとしての哲学の問題に従属し、それとの関連において初めて具体的に答えられ得るはずだ。

しかるにわが国の哲学は今に至るまでかくのごとき問題をあからさまに問題にしたことがない。そしてそれこそ「哲学的精神」の根本的な窮乏を語るものである。なるほど、日本の哲学は、知識としては十年前とは比較にならぬくらい発達した。けれど今日、哲学に従事する者自身ですら誰も、哲学が隆盛だとは信じていないのである。悪いことには、なまじっか哲学的知識が殖えたために、この時代において哲学することそのことが危機にあるのでないかどうか、を真面目に考える者がほとんどいない。

一方ではすべてがルーティヌに従ってなされている。哲学は教授用のものとなり、あるいは単に教授になるためのものとなっている。哲学は今日人間の可能なる生存理由としていかなるものであるかについて、ひとは根源的に問おうとはしない。他方講壇哲学を見捨てた者の多くは、いわゆる知識社会学、イデオロギー論、等々、に赴いた。しかしながらこの者も、そのイデオロギー論、等々が果たして本来の哲学であり得るか否かについて、あまりに単純に考え、もしくは少しも考えてみない。

ここではすべてがイージーに行なわれるのをつねとした。問題は社会だといえ、社会の概念が、問題は歴史だといえ、歴史の概念が、問題は唯物論だといえ、唯物論的見

方が、それぞれ哲学の中へ取り入れられた。すべては <sup>なめら</sup>滑 <sup>けんそう</sup>かに、多少の喧 噪 があつたにしても根本においては何事も起らなかったかのように取り行なわれた。

文壇においては事情は多少異なっている。いわゆる純文学の危機として提出され、討論された問題を通じて、この時代における人間のレエゾン・デエトルとしての文学の問題は、多かれ少なかれ自覚的にされた。しかるに最もラジカルであるべき哲学の領域においては、何事もあまりに無感覚に、安易に、妥協的に片づけられて来た。何よりも「問の情熱」、この哲学的情熱が喪失しているのである。

誰も語学者と文学者とを区別することを知っている。学校において文学の代りに語学の講義を聞かされて憤ることのできる者は、いわゆる哲学者の間にも同様の区別のあること

を感じることはできないはずだ。

現代において、哲学するということは、人間の生存理由のいかなるものであり得るか、この根源的な問に対する情熱が哲学者といわれる者の倫理でなければならぬ。科学としての哲学、イデオロギーとしての哲学、等々の問題も、この問に比しては従属的であり、皮相的ですからあろう。生存理由としての哲学の問題との関係において哲学の方法も、対象も、形態も現実的に決定されるものである。この根源的な問の生きている場合初めて、哲学の言葉、その面倒な術語ですらもが、「具体性」をもつことができる。或る哲学が具体的であるか抽象的であるかは、主として、この点にかかるのであって、それが認識の問題を取扱うか社会の問題を取扱うかというようなことによるのではない。

知識としての、あるいは教養としての、文化としての、もしくはイデオロギーとしての哲学の問題に先立って、現代の社会的精神的状況のうちにおける人間の可能なる生存理由としての哲学が問題にされねばならぬ。哲学することの倫理について、哲学者が根源的に問うことが何よりも要求されているのである。

(『読売新聞』一九三三年四月十九日)

---

底本：「現代日本思想大系 33」筑摩書房

1966（昭和 41）年 5 月 31 日初版発行

1975（昭和 50）年 5 月 30 日初版第 14 刷

初出：「読売新聞」

1933（昭和 8）年 4 月 19 日

入力：文子

校正：川山隆

2007 年 2 月 18 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 38.善くならうとする祈り

倉田百三

我建超世願 必至無上道 斯願不満足 誓不取正覺 —無量寿經—

私は私の心の内に善と悪とを感別する力の存在することを信ずる。それは未だ茫漠として、明かな形を成してはゐないけれど、確かに存在してゐる。私はこの力の存在の肯定から出発する。私はこの善と悪とに感じる力を人間の心に宿る最も尊きものと認め、そしてこの素質をさながら美しき宝石の如くに愛で慈しむ。私は私の中に棲んでゐるこのエゴイスティッシュな、荒々しい、そして浅い現代の潮流から犯されないやうに守りつつ、この素質を育ててゐる。私は沁々と中世を慕ふ心地がする。其処には近代などに見出されない、美しい宗教的気分が罩めてゐた。人はもつと品高く、善悪に対する感受性は遙かにデリケートであつたやうに見える。近代ほど罪の意識の鈍くなつた時代は無い。女の皮膚の感触の味を感じ分ける能力は驚くほど繊細に発達した。そして一つの行為の善悪を感じ分ける魂の力は実に粗笨を極めてゐる。これが近代人の恥づべき特色である。多くの若き人々は殆ど罪の感じに動かされてゐない。そして最も不幸なのは、それを当然と思ふやうになつたことである。或る者はそれを知識の開明に帰し、或る者は勇しき偶像破壊と呼び、モラルの名を無みすることは、ヤンガー・ゼネレーションの一つの旗号の如くにさへ見える。この旗号は社会と歴史と因襲と、すべて外より来る価値意識の死骸の上にのみ樹てらるべきであつた。天と地との間に懸るところの、その法則の上に己れの魂がつくられてゐるところの、善悪の意識そのものを否定せんとするのは近代人の自殺である。素より近代人がかくなつたのには複雑な原因がある。その過程には痛ましき様々の弁解がある。私はそれを知悉してゐる。併し如何なる罪にも弁解のないのはない。如何なる行為も充分なる動機の充足律なくして起るのは無いからである。道德の前には一切の弁解は成り立たない。かの親鸞上人を見よ。彼に於ては、すべての罪は皆「業」に依る必然的なものであつて、自分の責任ではないのである。しかも自ら極重悪人と感じたのである。弁解せずして自分が、自らと他との運命を損じることを罪と感じるところに道德は成立するのである。

多くの青年は初め善とは何かと懷疑する。そしてその解決を倫理学に求めて失望する。併し倫理学で善悪の原理の説明できないことは、善悪の意識そのものの虚妄であることの証明にはならない。説明できないから存在しないと云へない。凡そいかなる意識と雖も完全には説明できるものではない。そして深奥な意識ほど益※概念への翻訳を超越する。倫理学の役目は、私たちの道德的意識を概念の様式で整理して、理性の目に見えるやうに (veranschaulichen) することにあつて、その分析の材料となるものは、私たちの既に持つてゐる善悪の感じである。善とは何かといふことは今の私にも少ししか解つてゐない。私は倫理学の如き方法でこの問に答へ得るとは信じない。善悪の相は、私たちの心に内在

する臙げなる善悪の感じを便りに、様々の運命に試みられつつ、人生の体験の中に自己を深めて行く道すがら、少しづつ理解せられるのである。歩みながら知つて行くのである。親鸞が「善悪の二字総じてもて存知せざるなり。」と言つたやうに、その完全なる相は、聖人の晩年に於てすら体得できがたき程のものである。すべてのものの本体は知識では解らない。物を知るとは、その物を体験すること、更に所有（アンアイグネン）することである。善悪を知るには徳を積むより外はない。

善と悪との感じは、美醜の感じよりも遥かに非感覺的な価値の意識であるから、その存在は茫として見えるがもつと直接に人間の魂に固存してゐる。魂が物を認識するとき用ゐる範疇のやうなものである。魂の調子のやうなものである。否、寧ろ魂を支へてゐる法則である。それを無みすれば魂は滅ぶのである。或る種類の芸術家には、人生の事象に対するとき、善悪を超越して、ただ事実を事実として観るといふ人がある。自分の興味からさやうに或る方面（ザイテ）を抽象するのは随意である。併し、それを具体的なる実相として強ひ、或は道德の世界に通用させようとするのは錯誤である。或る人生の事象があれば、それは大きかつたり小さかつたりする如く、同様に善かつたり悪かつたりする。物を観るのに善・悪の区別を消却するのは、恰も物体に一つのディメンションを認めないやうなものである。人生に一つの出来事があれば、必ず一面に於て道德的出来事である。而して私はそのザイテに最も重大に関心して生きねばならぬと感ずるのである。それは何故であらうか？ 私はよく解らない。恐らくこの価値の感じが他の価値の感じよりも一層魂の奥から発するからであらうと思はれる。私たちが真に感動して涙をこぼすのは、善に対してである。美に対してではない。もし美学的なるもの *das Aesthetische* と倫理的なるもの *das Ethische* とをしばらく分けるならば、私たちの涙を誘ふものは芸術でも人生でも後者である。美しい空を見入つて涙がこぼれたり、調子の乱れた音楽を聞いて怒りを発したりする時でも、私たちの心を支配してゐる調子は後のものである。善悪の感じは私たちの存在の深き本質を成してゐるものであるらしい。私は芸術に於てもこの道德的要素は重要な役目を持つべきものと信ずる。私はこの要素を取扱はない作品から殆ど感動することはできない。トルストイやドストエフスキーやストリンドベルヒの作に心惹かれるのはその中に深い善・悪の感じが滲み出てゐるからである。「真の芸術は宗教的感情を表現したものである。」と云ふトルストイの芸術論が如何に偏してゐても、其処には深いグルンドがある。素より道德を説明し或は説教せんとするアプジヒトの見え透くやうな作品からは、純なる芸術的感動を生ずることはできないけれども、たとひその作には際立つた道德的の文字など用ゐてなくとも、その作の裏を流れてゐる、或は寧ろ作者の人格を支配してゐるところの人間性の深い、悲しい、或は恐ろしい善悪の感じが迫つて来るやうな作品を私は尊ぶ。決してイースセティシズムだけで深い作が出来るものではない。素より善・悪の感じといつても、私は深い、溶けた、輝いてゐる純粋な善・悪の感じを指すのであつて、世の中の社会的善悪や、パリサイの善をいふのではない。それらの型と約束を一切離れても、私たちの魂の内に稟在する、先験的の善悪の感じ、それはもはや、決して彼の自然主義の



倫理学者たちの説くやうな、群居生活の便利から発したやうな方便的なものではなく、聖書に録されたる如く、魂がつくられた時に造り主が附与したる属性としてでなくては、その感じを説明できないやうな深い、霊的な善悪の感じを指すのである。かかる善・悪の感じは、芸術でなくては表現することはできない。ドストイェフスキーやストリンドベルヒ等の作品にはこのやうな道徳的感情が現はれてゐる。

ここにまた一種の他のアモーラリストがある。それは世界をあるがままに肯定するために悪の存在を認めない人々である。凡そ存在するものは皆善い。一として排斥すべきものは無い。姦淫も殺生もすでに許されて此の世界に存在する以上は、善いものであるに相違ないと云ふのである。この全肯定の気持は深い宗教的意識である。私もその無礙の自由の世界を私の胸の内に実有することを最終の願望としてゐるものである。併しそれは決してアモーラルな心持からではない。世界をそのあるがままの諸相のままに肯定するといふのは、差別を消して一様なホモゲンなものとして肯定するのは全く異なつてゐる。大小・美醜・善悪等の差別はそのまま残して、その全体を第三の絶対境から包摂して肯定するのである。その差別を残してこそ、あるがままと云へるのである。ブレークが「神の造り給うたものは皆善い」と云つたのは、後の意味での自由の地からである。ニイチェの願つた如く「善悪の彼方の岸」に出づることは、決して善悪の感じを薄くして消すことによつて達せられるのではなく、却つてその対立を益々峻しくし、その特質をドイトリッヒに發揮せしめて後に、両者を含むより高き原理で包摂することによつて成就するのである。天国と地獄とが造り主の一の愛の計画として収められるのである。善を追ひ悪を忌む性質は益々強くならねばならぬ。姦淫や殺生は依然として悪である。ただその悪も絶対的なものではなく、「赦し」を通して救はれることができ、善と相並んで共に世界の調和に仕へるのである。併しその「赦し」といふのは悪に対して無頓著なインダルゼンスとは全く異なり、悪の一点一点をも見遁さず認めて後に、そのいまはしき悪をも赦すのである。「七度を七十倍するまで赦せ」と教へた耶蘇は、「一つの眼汝を罪に墮さば抜き出して捨てよ」と誡めた同じ人である。「罪の価は死なり」とある如く、罪を犯せば魂は必ず一度は死なねばならぬ。魂は、さながら面を裹む皇后がいかなる小さき侮辱にも得堪へぬやうに、一点の汚みにも恥ぢて死ぬほど純潔なものである。モンナが夫に貞操を疑はれた時に、「私の眼を見て下さい」と云ふところがあるが、私は彼処を読む時に実に純潔な感じがした。裁かぬといふのは尊い徳である。併しこれと似て而も最も嫌なのはズボラ (indulgence) である。好人物といふ感じを与える人にはこのズボラが多い。『アンナ・カレンナ』の中のオブロンスキーのやうな人がそれである。オブロンスキーは好人物である。誰も憎む気にはなれない。併しその妻の心はどれほど傷つくか知れない。かやうな人は悪意なくして実に最も他人の運命を損じるエゴイスティックな生き方をしてゐるのである。グレヒティヒカイトの盛んな人は裁く心も強い。そして鋭いといふ感じを他人に与へる。裁くのは素より悪い、その鋭さは天に属するものではない。併しズボラより遥かに増しである。何となれば、その鋭さは真の赦しの徳を得た人には深いレリヂアスなものとなるけれど、ズボラは真の赦しの心

と一見似て実は最も遠いものだからである。凡そ宗教には二つの要素が欠けてはならない。一はいかなる微細な罪をも見遁さず裁くこと、一はいかなる極悪をも赦すことである。この矛盾を一つの愛に包摂したのが信心である。キリストの説教にはこの二つの要素が鮮かに現はれてゐる。

私は飽くまでも善くなりたい。私は私の心の奥に善の種のあるのを信じてゐる。それは造り主が蒔いたのである。私は真宗の一派の人々のやうに、人間を徹頭徹尾悪人とするのは真実のやうに思へない。人間には何処かに善の素質が備はつてゐる。親鸞が自らを極重悪人と認めたのもこの素質あればこそである。自分の心を悪のみと宣べるのは、善のみと宣べるのと同じく一種のヒポクリシーである、偽悪である。その上私はかく宣べるのは何者かに対して済まないやうな気がする。私はかやうな問題について考へる度に、何となく胸の底で「否定の罪」とでもいふやうな宗教的な罪の感じがする。凡そ存在するものはでき得る限り否定しないのが本道である。造られたるものの造り主に対する務めである。私の魂は果して私の私有物であらうか。或は神の所有物ではあるまいか。私は、魂の深い性質の内には、自分の自由にならない、或る公けなもの、或る普遍なもの、自己意識を越えて能（はたら）く堂々たる力があるやうな気がする。私たちの善・悪の意識に内在するあの永遠性は何処から来るのであらうか。或は造り主の属性（アツトリブート）が私たちの先天的の素質として顕はれるのではあるまいか。「魂は聖霊の宮なり。」といふのはかやうな気持ちをいふのではあるまいか。その公けな部分を悪しざまに言ふことは、自分の持物を罵るやうにはできない気がする。「聖霊に対する罪」といふやうな気がする。「私たちの魂は悪のみなり」と宣べる時、私たちは他人のもの、造り主のものを罵つてはゐないであらうか。私は寄席に行つて彼の「話し家」が自分の容貌や性質を罵り、甚しきは扇子を以て己れの頭を打つて客を笑はせようと努めるのを見る時に、他人のをさうしたよりも一層深い罪のやうな感じがする。私は、私の魂は悪しと無下に言ひ放つのはそれと似た不安な感じがして好ましくない。やはり私は、私たちは本来神の子なのが悪魔に誘惑せられて悩まされてゐる、それで魂の内には二元が混在するけれども、結局善の勝利に帰するといふやうな聖書の説明の方が心に適ひ、又事実に近い気がする。私たちの魂は善悪の共棲の家であり、そして悪の方が遥かに勢力を逞しくしてゐる。併し心を深く省みれば、二つのものには自ら位の差が附いてゐる。善は君たるの品位を備へて臨んでゐる。さながら幼い皇帝が逆臣の群れに囲まれてゐるにも似てゐる。私たちの魂には或る品位がある。落ちぶれてはゐても名門の種といふやうな気がする。昔は天国に居たのが、悪魔に誘はれて今は地上に墮ちて居るといふのは、よくこの気持ちを説明してゐる。私たちは墮ちたる神の子である、心の底には天国の傍のおぼろなる思ひ出が残つてゐる。それはふる郷を慕ふやうなあくがれの気持となつて現はれる。私たちが地上の悲しみに濡れて天に輝く星をながめる時、私たちの魂は天つふる郷へのゼーンズフトを感じないであらうか？ 私は私たちの魂がこの悪の重荷から一生脱することができないのは何故であらうかと考へる時、それは課せられたる刑罰であるといふ、トルストイやストリンドベルヒ等の思想が、今までの思想のうち

では最も私を満足させる。その他の考へ方では天に対する怨嗟と不合理の感じから医せられることはできない。「ああ私は私が知らない昔悪い事をしたのだ、その報いだ」かう思ふと、自ら跪かれる心地がする。「夫れ太初に道（ことば）あり、万の物これに由りて創らる。」とヨハネ伝の首（はじめ）に録されたる如く、世界を支へる善・悪の法則を犯せば必ず罰がなくてはなるまい。是れ中世の神学者の云つた如く、神の自律でもあらう。私たちの罪は償はれなくてはならない。併し百の善行も、一つの悪行を償ふことはできない。私たちは善行で救はれることはできない。救ひは他の力に依る。善行の功に依らず愛に依つて赦されるのである。宗教の本質はその赦しにある。併し善くならうとする祈りがなければ、己れの罪の深重なることも、その赦されの有り難さも解りはしないであらう。例へば親鸞が人間の悪行の運命的なることを感じたのは、永き間の善くならうとする努力が、積んでも積んでも崩れたからである。比叡山から六角堂まで雪ふる夜の山道を百日も日参した程の親鸞なればこそ、法然上人に遇つた時即座に他力の信念が腹に入つたのである。その時赦されの有り難さがいかに沁々と感ぜられたであらうか。思ひやるだに尊い気がする。私は親鸞の念仏を善くならうとする祈りの断念とよりも、その成就として感ずる。彼は念仏によつて成仏することを信じて安住したのである。彼が「善悪の字知り顔に大虚言の貌なり」と云つたのは、何々するは善、何々するは悪といふやうに概念的に区別することはできないと云つたのである。善悪の感じそのものを否定したのではない。彼は善悪の感じの最も鋭い人であつた。故に仏を絶対に慈悲に、人間を絶対に悪に、両者をディステインクトに峻別せねば止まなかつたのである。

人間の心は微妙な複雑な動き方をするものである。生きた心は様々のモチーフやモメントでその調子や方向を変ずる。私は決して善・悪の二つの型を以てそれを測り切らうとするのではない。善と悪とは人の心の内で分ち難く纏れ合つて働く。嘘から出た誠もあれば誠から出た嘘もある。只それらの心の動乱の中を貫き流れて稲妻の如く輝く善が尊いのである。ドストイェフスキーの作などに描かれてあるやうに、怒りや憎みの裏を愛が流れ、争ひや呪ひの中に純な善が耀くのである。私はそれらの内面の動揺の間に次第に徳を積み、善の姿を知つて行きたい。人生の様々の悲しみや運命を受ける毎に、心の眼を深めて、先きには封じられてゐたものの実相も見えるやうになり、捨てたものをも拾ひ、裁いたものをも赦し、漸く心の中から呪ひを去つて、万人の上に祝福の手を延ばすやうに、博く大きくなりたいのである。魂の内なる善の芽を培うて、「空の鳥来たつてその影に棲む」やうな豊かな大樹となしたいのである。造り主の名によつて凡ての被造物と繋りたいのである。ああ、私は聖者になりたい。（かく願ふことがゆるさるるならば）聖者は被造物の最大なるものである。併しながら、聖者といつても、私は水晶でつくられたやうな人を描くのではない。私の描く聖者は人間性を超越したる神ではなく、人間性を成就したる被造物である。それは造られたものとしての限りを保ち、人生の悲しみに濡れ、煩惱の催しに苦しみ、地上のさだめに嘆息しつつ、神を呼ぶところの一個のモータルである。真宗の見方からは猶ほ一個の悪人であつて、「赦し」なかりせば滅ぶべき魂である。私は罪の中に善を追ひ、さ

だめの中に聖さを求めるのである。私は、たとひ、親鸞が信心決定の後、業に催されて殺人を犯さうとも、パウロが百人の女を犯さうとも、その聖者としての冠を吝まうとは思はない。

願はくば我等をして、我等が造られたものであることを承認せしめよ。この承認はすべての愛でたき徳を生む母である。而して造られたるものの切なる願ひは、造り主の完さに似るまで己れをよくせんとの祈りである。

---

底本：「日本の名随筆 86・祈」 作品社

1989（平成元）年 12 月 25 日発行

底本の親本：「新装・倉田百三選集 第一巻」 春秋社

1976（昭和 51）年 10 月

入力：加藤恭子

校正：菅野朋子

ファイル作成：野口英司

2000 年 11 月 22 日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

本文中の※は、底本では次のような漢字（JIS 外字）が使われている。

益※	𠄎
	第 3 水準 1-2-22

## 39.如何に読書すべきか

三木清

一

先ず大切なことは読書の習慣を作ることである。他の場合と同じように、ここでも習慣が必要である。ひとは、単に義務からのみ、或いは単に興味からのみ、読書し得る

ものではない、習慣が実に多くのことを為すのである。そして他のことについてと同じように、読書の習慣も早くから養わねばならぬ。学生の時代に読書の習慣を作らなかった者は恐らく生涯読書の面白さを理解しないで終るであろう。

読書の習慣を養うには閑暇を見出すことに努めなければならぬ。そして人生において閑

暇は見出そうとさえすれば何処にでもあるものだ。朝出掛ける前の半時間、夜眠る前の一

時間、読書のための時間を作ろうと思えば何時でもできる。現代の生活はたしかに忙しく

なっている。終日妨げられないで読書することのできた昔の人は羨望に値するであろう。しかし如何に忙しい人も自分の好きなことのためには閑暇を作ることを知っている。読書の時間がないと云うのは読書しないための口実に過ぎない。まして学生は世の中へ出

た者に比して遙かに多くの閑暇をもっている筈だ。そのうえ読書は他の娯楽のように相手を要しないのである。ひとはひとりで読書の楽しみを味わうことができる。いな、東西古今のあらゆるすぐれた人に接することができるというのは読書における大きな悦びでなければならぬ。読書の時間を作るために、無駄に忙しくなっている生活を整理することができたならば、人生はそれだけ豊富になるであろう。読書は心に落ち着きを与える。そのことだけから考えても、落ち着きを失っている現代の生活にとって読書の有する意義は大きいであろう。

読書を欲する者は閑暇を見出すことに賢明でなければならぬと共に、規則的に読書するというのを忘れてはならない。毎日、例外なしに、一定の時間に、たとい三十分にしても、読書する習慣を養うことが大切である。かようにして二十年間も継続することができれば、そのうちにひとは立派な学者になっているであろう。読書の習慣は読書のための閑暇を作り出す。読書の時間がないと云う者は読書の習慣を有しないことを示している。読書の習慣を得た者は読書のうちに全く特別の楽しみを見出すであろうし、その楽しみが彼を読書から離さないであろう。

他の場合においてと同様、読書にも勇気が必要である。ひとは先ず始めなければならぬ。我々はつねに読書に好都合な状態にあるのではない。読書に好都合な状態ができてから読書しようとするならば、遂に読書しないで終るであろう。ひとたび読書し始めるならば、落ち着かない心も落ち着き、憂いも忘れられ、不運も心にかかることなく、すべて読書に好都合な状態が生ずるであろう。いやいやながら始めて、やがて面白くなってやめられなくなる場合が多い。先ず読書することから読書に適した気分が出てくる。ひとたび読書の習慣を得れば、習慣があらゆる情念を鎮めてくれる。落ち着いた大学生といわれる者はたいてい読書の習慣を有するものである。

## 二

読書は一種の技術である。すべての技術には一般的規則があり、これを知っていることが肝要である。読書法についても古来いろいろ書かれてきた。しかし技術は一般的理論の単なる応用に過ぎぬものではない。技術においては一般的理論が主体化されねばならず、主体化されるということは個別化されるということである。これがその技術を身につけることであって、身につけていない技術は技術と云うことができぬ。読書にとって習慣が重要であるというのも、読書が技術であることを意味している。技術は習慣的になることによって身につくのであり、習慣的になっていない技術は技術の意義を有しないであろう。そのことは固より読書にとって一般的規則が存在しないことを意味するのではない、もし何等の一般的規則も存在しないとすれば、それが技術であることもできぬ筈である。

一般的規則の主体化を要求する点において、すでに手工業的技術は工場的生産の技術よりも遙かに大きいものがあるであろう。まして読書の如き精神的技術にあっては、一般的

いよいよ  
規則が各人の気質に従って個別化されることが愈々必要になってくる。めいめいの気質を離れて読書の技術はないと云っても好いほどである。読書法は各人において性格的なものである。それ故に各人にとって自分に適した読書法を發明することが最も大切である。読書の技術においてひとはめいめい発明的でなければならぬ。もちろんこの場合においても發明の基礎には一般的規則がある。しかし自分の気質に適した読書法を自分で發明することに成功しない者は、永く、楽しく、また有益に読書することはできないであろう。

ところでかように自分自身の読書法を見出すためには先ず多く読まなければならぬ。多

らんどく  
読は濫読と同じでないが、濫読は明かに多読の一つであり、そして多読は濫読から始まるのが普通である。古来読書の法について書いた人は殆どすべて濫読を戒めている。多

みだ  
くの本を濫りに読むことをしないで、一冊の本を繰り返して読むようにしなければならぬと教えている。それは、疑いもなく真理である。けれどもそれは、ちょうど老人が自分

の過去のあやまちを振り返りながら後に来る者が再び同じあやまちをしないようにと青年に

対して与える教訓に似ている。かような教訓には善い意志と正しい智慧<sup>ちえ</sup>とが含まれているであろう。しかしながら老人の教訓を忠実に守るに止まるような青年は、進歩的な、独創

的なところの乏しい青年である。昔から同じ教訓が絶えず繰り返されてきたにも<sup>かかわ</sup>拘<sup>ら</sup>

ず、人類は絶えず同じ誤<sup>ご</sup>謬<sup>びゅう</sup>を繰り返しているのである。例えば、恋愛の危険について

は古来幾度となく論<sup>さと</sup>されている。けれども青年はつねにかように危険な恋愛に身を委<sup>ゆだ</sup>ねることをやめないのであって、そのために身を滅す者も絶えないではないか。あやまち

を為すことを恐れている者は何も<sup>つか</sup>掴<sup>む</sup>ことができぬ。人生は冒険である。恥ずべきこと

は、誤謬を犯すということよりも<sup>むし</sup>寧<sup>ろ</sup>自分の犯した誤謬から何物をも学び取ることができないうことである。努力する限りひとはあやまつ。誤謬は人生にとって飛躍的な発展の契機ともなることができる。それ故に神もしくは自然は、老人の経験に基く多くの確かに有益な教訓が存するにも拘らず、青年が自分自身でつねに再び新たに始めるように仕組んでいるのである。だからといって、もちろん、先に行く者の与える教訓が後に来る者にとって決して無意味であるというのではない。そこに人生の不思議と面白さがあるのである。読書における濫読も同様の関係にある。濫読を戒めるのは大切なことである。しかしひとは濫読の危険を通じて自分の気質に適した読書法に達することができる。一冊の本を精読せよと云われても、特に自分に必要な一冊が果して何であるかは、多く読んでみなくては分らないではないか。古典を読めと云われても、すでにその古典が東西古今に互って数多く存在し、しかも新しいものを知っていなくては古典の新しい意味を発見することも不可能であろう。読書は先ず濫読から始まるのが普通である。しかしいつまでも濫読のうちに止まっていることは好くない。真の読書家は殆どみな濫読から始めている、しかし濫読から抜け出すことのできない者は真の読書家になることができぬ。濫読はそれから脱却するための濫読であることによって意味を有するのである。

濫読に止まるなということとは多読してはならぬということではない。多読家でないよう

な読書家があるであろうか。寧ろ読書家とは多読家の別名である。<sup>ことわざ</sup>諺<sup>に</sup>、賢者はただ一冊の本の人間を恐れる、という。ひとは多く読まなければならぬ。読書の必要はただ一冊の本の人間にならないために、云い換えれば、一面的な人間にならないために、存在するのである。単に自分自身の時代のみでなく、また過ぎ去った時代について、単に、自分自身の国のみでなく、また世界について、全体の生活と思想について正しい見通しを得



るために、多く読まなければならぬ。即ち読書において一般的教養を心掛けることが大切である。読書家とは一般的教養のために読書する人のことである。単に自分の専門に関してのみ読書する人は読書家とはいわれぬ。教養とは或る専門の知識を所有することをいう

かえ  
のではなく、却って、教養とはつねに一般的教養を意味している。専門家になるために読書の必要のあることは云うまでもないが、ひとは特に一般的教養のために読書しなければならぬ。そして専門家も一般的教養を有することによって自分の専門が学問の全体の世界において、また社会及び人生にとって、如何なる地位を占め、如何なる意義を有するか

そな  
に就いて正しい認識を得ることができるのである。専門家も人間としての教養を具え専門家の一面性の弊に陥らないように読書は勧められるのである。そのうえ自分の専門以外の書物から専門家が自己の専門に有益な種々の示唆を与えられる場合も少なくないであろう。かくして多読は濫読の意味においては避くべきことであるとしても博読の意味においては必要であると云わねばならぬ。

然るに濫読と博読とが区別されるようになる一つの大切な基準は、その人が専門を有するか否かということである。何等の方向もなく何等の目的もない博読は濫読にほかならぬ。一般的な読書に際しても、ひとはなお何等か専門というべきものを有しなければならぬ。一般的教養も専門によって生きてくるのであって、専門のない一般的教養はディレッタンティズムにほかならない。一般的教養と専門とは排斥し合うものでなく、むしろ相補わね

もと  
ばならぬものである。ひとは固よりつねに一定の目的をもって読書するものではない。何か目的がなければ読書しないというのは読書における功利主義であって、かような功利主義は読書にとって有害である。目的のない読書、いわば読書のための読書というものも大切である。これによってひとは一般的教養に達することができる。一般的教養を得ると

もちろん  
いう目的で一定の計画に従って読書することは勿論善いことではあるが、しかしかような計画は実行されないのが普通であって、むしろ若い時代から手当たり次第に読んだものの結果が一般的教養になるという場合が多い。一般的教養は目的のない読書の結果である。けれども当てなしに読んだものが身に附いて真の教養となるというには他方専門的な読書が必要である。専門のない読書は中心のない読書であって、如何に多く読んでも何も読まなかったに等しいことになる。いわゆる読書家の陥り易い弊はディレッタンティズムである。

### 三

かんれん

如何に読むべきかという問題は何を読むべきかという問題と 関 聯 している。ひとは  
すべ

凡ての書物を同じ仕方で読むことはできないし、また同じ仕方で読んでではならぬ。博く  
読むためには書物の種類に従って読み方を変えなければならない。そこに読書の技術があ  
るのである。

何を読むべきかに就いては、もちろん、善いものを読まねばならず、悪いものを読んで  
はならぬということは明かである。悪い本を読むことはそのこと自身無益であるばかりで  
なく、悪い本を読んでいるうちには善いものと悪いものとを区別することができなくなっ  
てしまうという危険がある。ひとはただ善いものを読むことによって善いものと悪いもの  
とを見分ける眼を養うことができるのであって、その逆ではない。善い本は必ずしも読み  
易い本ではない。大きな、分厚な、むつかしい本であるからといって避くべきではなく、  
その方面で最も善い本を読むように努めなければならぬ。読書においても努力が大切であ

こ

り、そして努力はつねに報いられるのである。やさしい本、読者に媚びる本ばかりを讀ん  
でいては、真の知識も教養も得ることができぬ。一度でその本が全部理解されなくても好  
い、ともかく善いものにぶつつかってゆくことが肝要である。もし一度で理解することが

しば

できなければ、暫らく間をおいて再び読むようにするのが好い。努力して読書する習慣を  
作ることが大切である。尤も、むつかしい本、大きな本がつねに善い本であるという風に  
誤解してはならぬ。それはペダンチックな人の陥る誤解である。善い本は本質的に云って  
すべて最も理解し易い本であるというのみでなく、初めから困難なしに読める本にも善い  
本は多いのである。そして読書においてぶつつかる困難を克服するためには系統的に読む  
ことが大切である。読書も無秩序であっては益がなく順序を追うて読むようにしなければ  
ならぬ。先輩の意見を聞くことが有益であるのは何よりもこの点についてである。

一般に何が善い本かといえば、もちろん古典といわれるような書物である。古典は歴史  
の試煉を経て生き残ってきたものであり、すでに価値の定まった本である。古典は決して

ふる

旧くなることなく、つねに新しく、つねに若々しいところを有している。古典を読む  
ことによってひとは書物の良否に対する鑑識眼を養うことができるのである。古典を愛し  
ないような真の読書家はなく、古典についての教養を有しないような真の教養人はない。  
古典はつねに安心して読むことができ、幾度繰り返し読んでもつねに新たな利益を得るこ  
とのできるものである。かように価値の定まった本を読むように心掛けねばならぬところ

しばしば

から、人々は 屢々、古典というほどでなくても既にいくらかの年数を経てなお読まれ  
ているような本を読むことにして、新刊書をすぐ手に取ることはやめねばならぬという風

に忠告している。これは確かに有益な忠告である。ただ新刊書ばかり <sup>あさ</sup> 漁るのは好くない

ことに相違ない。しかしながら読書における <sup>しょうこ</sup> 尚古主義にもまた限界がある。アカデミズムに対してジャーナリズムには独自の意義があるように新刊書を読むということにもそ

れ自身の意義があるのである。時代の感覚に触れるために、また今日の問題が <sup>どこ</sup> 何処にあるかを知るために、ひとは新刊書に接しなければならぬ。新しい感覚をもち新しい問題をもって対するの でなければ古典も生きてこないであろう。すべて過去が活かされ、伝統が <sup>よみがえ</sup>

<sup>甦</sup> ってくるのは現在からである。古典を顧みないというのは固より悪いことであるが、新刊書を恐れるというのも正しくないことである。古典は安心して読むことができる本であるに対して、新刊書を読むことは一種の冒険である。しかし読書においても冒険するのでなければ得ることがないであろう。古典を偏愛して新刊書を嫌悪する者において読書は単に趣味的になる傾向があり、一種のディレクタンティズムに陥り易い。しかしまた新刊書ばかり漁って古典を顧みない者も他の種類のディレクタンティズムに陥る危険がある。読書にも年齢があり、老人は古典的なものを好み、青年は新しいものを求めるという

のが普通である。青年が新刊書を喜ぶということはその知識欲の <sup>おうせい</sup> 旺盛を示すものであ

って排斥すべきことではないが、しかしそこにはまた単なる好奇心の <sup>とりこ</sup> 虜になる危険も

あるのである。古典のために新刊書を <sup>けいべつ</sup> 軽蔑することなく、新刊書のために古典を忘却することのないようにするのが肝要である。

古典を読むことが大切である如く、ひとはまたつねに原典を読むように心掛けねばならぬ。解説書とか参考書とかを読むことも固より必要ではあるが、本質的には原典を中心としてこれに頼らねばならぬ。原典はつねに最も信頼し得る書物である。例えばプラトンとかカントとかについて千の文献を読むにしても、原典を読むこと、これを繰り返して読むことをしないならば、深く根本的に学ぶことができぬ。第三者の書いた解説書よりも原典は本質的な意味においては一層理解し易いものである。多数の参考書を読むよりも一冊の原典を繰り返して読むことがそのものを掴むのに結局近道である。そのうえ原典は屡々解説書よりも短いという利益を有している。原典を読むことは読書を単純化するに必要な方法である。それは何よりも読書の経済化、簡易化を意味している。前に述べた規則的に読むという必要は原典の場合において特に大きいであろう。本はひとに読んで貰うのでなくて自分自身で読まねばならぬとすれば、この自分自身で読むという必要は原典の場合においては絶対的である。然るに世の中には文学上の作品についてさえ、それを自分で読まな

いで、他人の書いた解説や批評ばかりを読んでいる人が少くないのである。ひとはつねに

く  
源泉に汲まねばならぬ。源泉はつねに新しく、豊富である。原典を読むことによって最も多く自分自身の考えを得ることもできるのである。

原典を読むことが必要であるように、できるだけ原書を読むようにすることが好い。どのような翻訳よりも原書がすぐれていることは確かである。原書の有する微妙な味、繊細な感覚は翻訳によって伝えられることが不可能である。そのうえ翻訳はすでに解釈であるということを知らねばならぬ。ひとは原語で読む困難を避けてはならない。翻訳で読むのが原書で読むのよりも速いということはあるにしても、ゆっくり読むことはそれだけ自分で考えながら読む余裕を与えることにもなるのであり、そしてこれは大切なことである。原書を読むには語学の力がなければならないが、その語学というものも決して手段に過ぎないようなものではなく、却って語学そのものが一つの重要な教養である。一つの国語はその民族の精神の現われであり、その思想の蓄積であるということが出来る。勿論あらゆるものを原語で読むということは不可能であり、またあらゆる場合に原語で読まねばならぬというわけではない。原語で読むことができないという理由でそれを読まないというのは悪い口実である。また翻訳で間に合わせて十分な書物も多い。しかし重要な本はできるだけ原書で読むようにしなければならぬ。翻訳の方が簡単であるからというので原語で読むことを避けようとするのは読書における便宜主義であって、便宜主義は読書においても有害である。

善い本を読まねばならぬことは明かであるにしても、何が善い本であるかを見分けることは容易でない。古典といわれるものは善い本であるに相違ないが、その古典も多数であ

いよいよ  
って選択が必要であり、殊に新刊書の場合においては選択は愈々困難である。自分ですべての本に当たってみることは不可能であるとすれば、読書の指針として他人の挙げた目録とか新刊紹介とかに頼らねばならず、すでに定評のあるものを読むようにしなければならぬ。しかしながら定評とか他人の意見とかにばかり頼るということは危険である。読書においてもひとは自主的でなければならず、発見的であることが大切である。各人は自分に適した読書法を見出さねばならぬように自分に適した本を見出すことに努めなければな

こ  
らぬ。単に自分に媚びるというのでなくて、自分に役立つ、自分を高めてくれるような本を読むようにしなければならぬ。各々の人間には個性があるのであるから、一人の人間に適する本がすべて他の人間にも適するというわけではない。読書においても個性は尊重されねばならぬ。一般に善い本といわれるものの中でも自分に適したものとそうでないものと自分の個性によって決ってくる。読書においてひとは何よりも特に古典の中から自分に適したものを発見するように努力しなければならぬ。それによって自分の思想というものも作られてくるのであり、愛読書といわれるものも定まってくるのである。愛読書を有

しない人は思想的に信用のおけない人であるときえ云うことができるであろう。自分に適した善い本が決ってくれば読書もおのずから系統立ってくるのであって、即ちそれと同じ

系統に属する書物を、或いは過去に <sup>さかのぼ</sup> 遡り或いは現代に <sup>くだ</sup> 降って、読むようにすれば好い。固より他の系統のものを読まなくても好いというわけではなく、却って偏狭にならないために博く読むことはつねに必要なことである。けれども無系統な博読は濫読に過ぎない。

#### 四

善いものを読むということと共に正しく読むということが大切である。正しく読まなければ善いものの価値も分らないであろう。正しく読むということは何よりも自分自身で読むということである。マルクス・アウレリウスは彼の師について感謝をもって書いている。「ルスティクスは私に、私の読むものを精密に読むこと、皮相な知識で満足しないこと、また軽薄な批判者が云うことに直ちに同意しないことを教えた」。正しく読むことは自分の見識に従って読むことである。

正しく読もうというには先ずその本を自分で所有するようにならね。借りた本や図書館の本からひとは何等根本的なものを学ぶことができぬ。高価な大部の全集とか

辞典のようなものは図書館によるのほかに <sup>ちよつと</sup> 一寸見たいもの、その時の調べ物にだけ必要なもの、多数の専門文献のために利用されるのであって、一般的教養に欠くことのできぬもの、専門書にしても基礎的なものはなるべく自分で所有するようになるが好い。しかしただ手当り次第に本を買うことは避けねばならず、本を買うにも研究が必要であり、自分の個性に基いた選択が必要である。その人の文庫を見れば、その人がどのような人であるかが分る。ただ沢山持っているというだけでは何にも

ならぬ。自分に役立つ本を <sup>そろ</sup> 揃えることが必要である。ただ善い本を揃えるというのでも足りない、すべての善い本が自分に適した本であるのではない。各人は自分に適した読書法を見出さねばならぬように、自分自身の個性のある文庫を備えるようにならね。何を読むべきかについて、ひとは本に対する或る感覚を養うことが大切である。古本屋は自分の立場からであるにしても自分の決して読まない本に対して特殊な価値の感覚を有している。一つの本を見たとき読書家にも何かそれに類似の感覚がなければならぬ、さもなければ彼は読書において真に発見的であることができぬ。しかも本に対するこの感覚は本に親しむことによって得られるのである。

正しく読むためには緩やかに読まねばならぬ。決して急いではない。その本から学ぶためにも、その本を批評するためにも、その本を楽しむためにも、緩やかに読むことが

まれ  
大切である。然るに緩やかに読むということは今日の人には次第に稀な習慣である。生活が忙しくなり、書物の出版が多くなった今日においては、新聞や雑誌、映画やラジオなどの影響が深くなった今日においては、その習慣を得ることは困難になっている。自分で写本して読んだ昔の人には緩やかに読むという善い習慣があった。しかし今日においてもこの習慣を養うことは必要であり、特に学生の時代に努力されねばならぬ。勿論すべての本を緩やかに読まねばならぬというのではない。或る本はむしろ走り読みするのが好く、また或る本はその序文だけ読めば済み、更に或る本はその存在を知っているだけで十分である。そのような本が全く不必要な本であるというのでもない。すべての書物を同じ調子で読もうとすることは間違っている。しかし様々な本をただ走り読みしたり、拾い読みしたりするのは根本的な知識も教養も得ることができぬ。自分の身につけようとする書物は緩やかに、どこまでも緩やかに、そして初めから終りまで読まなければならぬ。途中で気が変ることは好くない。最後まで読むことによって最初に書いてあったことの意味も真に理解することができるのである。他の仕事においてと同様、一冊の本にかじりついて読

ゆえん  
み通すということは読書の能率をあげる所以である。

緩やかに読むということはその真の意味においては繰り返して読むということである。ぜひ読まねばならぬ本は繰り返して読まなければならぬ。繰り返して読むということは老人の楽しみであると云われるであろう。老人は新刊書を好まないで、昔読んだ本を繰り返して読むことを好むのが普通である。しかし繰り返して読むことは青年にとってもまた楽しみであり、有益でなければならない。繰り返して読むことは先ずよく理解するために必要である。左右を比較し前後を関係づけることによってよく理解することができる。よく理解するためには精読しなければならないのであって、精読は古来つねに読書の規則とされている。よく理解するためには全体を知っていなければならないので、すべての部分は全体に関係づけられ、全体から理解されることによって、初めて真に理解されるのであり、そのためには繰り返して読むことが必要である。ひとは初めから全体を予料しながら読んでゆ

ひるがえ  
くのであるが、全体は読み終ったとき初めて現実的になるのであって、かくして翻  
って再び読み返すことが要求されるのである。尤も我々は必ずしもつねに直ぐ繰り返して読まねばならぬわけではない。読んでみて結局分らなかったものはそのままにしておいて、暫らく時を経て自分の知識や思索が進んだ時に再び取り出して読むようにするのも好い。以前に読んだことのある本を繰り返して読んでみるということは楽しいものである。その

よみがえ  
当時の記憶が甦ってくるということもあろうし、また思わぬ誤解をしていたことを見出すということもあろうし、また新しい発見をするということもあるであろう。繰り返して読むということの楽しみは、その本と友達になるということの楽しみである。緩やか

に読むことは大切であるが、最初から緩やかに読まねばならぬものは古典のように価値の定まった本であって、新しい本を手にした場合にはむしろ最初は一度速く読んでみてその

つか  
内容の大体を掴み、それから再び繰り返して今度は緩やかに読むようにするのも好い。緩やかに読むということは本質的には繰り返して読むということである。

繰り返して読むことは細部を味うために必要である。一冊の本の全体の意味を掴むだけならば緩やかに読む必要もないのであって、繰り返して緩やかに読むことは寧ろその部分部分を味って読むために要求されることである。とりわけ古典的な書物には一見無駄に思われるようなところのあるものである。全く無駄のないような書物は善い書物ではない。一見無駄に思われるような部分からひとは思い掛けぬ真理を発見するに至ることがある。今日の多くの著述家とは違って昔の人は彼自身極めて緩やかに、自然に書いたということを考えねばならぬ。彼等の書物を味うために我々もまた緩やかに読まねばならず、繰り返して細部に互って吟味しつつ読まねばならぬ。著者がさほど重要性をおかなかったところに読者が自分自身にとって重要な意味を発見するということが可能である。繰り返して読むことは読書において発見的であるために特に要求されている。

かように発見的であるということは読書において何よりも大切である。もちろん著者の真意を理解するということがあらゆる場合に必要なことであり、それにはできるだけ客観的に読まなければならず、そしてそれには繰り返して読むということが必要な方法である。自分の考えで勝手に読むのは読まないのと同じである。ひとはそれから何物かを学ぼうという態度で書物に対しなければならぬ。理解は批評の前提として必要である。かようにして客観的に読むということは大切であるが、しかし書物に対しては単に受動的であることは好くない。発見的に読むということが最も重要なことである。発見的に読むには自分自身に何か問題をもって書物に対しなければならぬ。そして読書に際しても自分で絶えず考えながら読むようにしなければならぬ。読書はその場合著者と自分との間の対話になる。この対話のうちに読書の真の楽しみが見出されねばならぬ。自分で考えることをしないで著者に代って考えて貰うために読書するというのは好くない。もとより自分自身だけで何でも考えることができるものであるならば、読書の必要も存在しないであろう。読書は思索のためのものでなければならず、むしろ読書そのものに思索が結び附かなければならぬ

ことごとし  
い。悉く書を信ずれば書なきに如かずと古人も云った。批評的に読むということは自分で思索しながら読むということであり、自分で思索しながら読むということは単に批判的に読むということにのみ止まらないで、発見的に読むということではなければならぬ。しかも発見的に読むためには既に云ったように自分自身の読書法を身につけることが必要である。そしてこの読書法そのものも自分が要求をもって読書することによっておのずから発見されるものである。

---

底本：「読書と人生」新潮文庫、新潮社  
1974（昭和 49）年 10 月 30 日発行  
1986（昭和 61）年 9 月 30 日 20 刷

初出：「学生と読書」  
1938（昭和 13）年 12 月

入力：Juki

校正：小林繁雄

2010 年 1 月 5 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。



## 40. 読んだ本

牧野信一

今僕の枕元には、ジイド全集の第四巻と久保田万太郎氏の「月あかり・町中」の二部があるのみ。ろく／＼本も読めぬ病弱つゞきで、この幾ヶ月、たゞ窓外の風景を眺めるばかりをことゝして、あちこちの田舎ばかりを転々として漸くこゝに落ついたところだ。薬瓶とブロバリンと二三個のトランクと廻送される郵便と、だから本は何も持ち歩けなかつた。久保田氏のもは大概発表の当座読むのだが、この二篇とも本になるまで知らなかつた。吾ながら随分とあちこちと歩きまはつてみたものだとあきれた。

そんな間に、あれらの海村の漁家の二階で、あの寒村の水車小屋の炉端で熱ばかりを気にしながら読んだ本を回想すると、宇野浩二氏の「枯木のある風景」「子の来歴」瀧井孝作氏の「慾呆け」織田正信氏訳「D・Hローレンスの手紙」永井龍男氏の「絵本」などがかぞへられる。「絵本」の中の「黒い御飯」といふのは一昔に近い文藝春秋で読み、愛読といふ言葉に最もふさはしい感を享けたことを忘れぬので、本を手にした時も先づそれを読んだ。はじめて読んだ時は、作者とは未知のころで次の作が未だか／＼と随分と待ち構へたことを覚えてゐる。知るに及んでからは何か僕が悪友のやうな思ひで云ひそびれ、酔払つてばかりゐたが、久しく筆を断つてみた彼がこの本の出る前後からぼつ／＼と新作を発表しはじめたことに就いては、一昔前と変らぬ期待で逃さず読んでゐるつもりだ。

織田氏訳の「ローレンスの手紙」から、僕は漁村の二階で斯んな章を抜書してゐる。

「僕の信じる偉大な宗教とは、理智よりも賢明なものとして、血を、肉を信じることだ。精神は我々を誤らせる。けれども、我々の血が感じ、血が信じ、血が説くものは、常に真理である。理智は単に、拘束であり制御である。知識は僕の与り知らぬ所。僕の欲する凡ては、我が血の欲求に答へることだ。精神・道徳とか何でもさう言つたものゝくだらぬ干渉を受けず、直接答へることだ。」

読んだものゝ感想といふ程度にもならぬが、読んでいつまでも記憶してゐるものといふものは、病気になどなつて見ると反つてはつきりと、わづかであることが解る。以上挙げた本及び作家については健康をとり戻した別の機会に述べさせて貰はう。

---

底本：「牧野信一全集第五卷」筑摩書房

2002（平成14）年7月20日初版第1刷

底本の親本：「文藝通信 第二卷第十一号（十一月号）」文藝春秋社

1934（昭和9）年11月1日発行

初出：「文藝通信 第二卷第十一号（十一月号）」文藝春秋社

1934（昭和9）年11月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5・86）を、大振りにつくっています。

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

---

# 41.異性の何処に魅せられるか

宮本百合子

斯ういう感情上のことは、各人各様であって、「男子は」「婦人は」と概括的に考えると、至極平凡なつまらないものになってしまいます。此世の何より、金持がいい人もあろう。美貌の異性がよい人もあろう。知識的なのが第一な人もあるでしょう。一種の人間としての魅力が、普通考える美点、美德でない場合も多くあります。私は男にしる、女の人にしろ、人生に其の人としての感情、見方をはっきり持っているのを見ると、心を惹かれ興味を覚えます。情感のゆたかな深い点に触れ得る人は好しいものです。

〔一九二四年五月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十七巻」新日本出版社

1981（昭和 56）年 3 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

初出：「婦人倶楽部」

1924（大正 13）年 1 月号

※底本の「解題」（大森寿恵子）は、この作品名を「仮題」としています。

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003 年 9 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 42. 芸術上の心得

倉田百三

一、堅く堅く志を立てること。

およそ一芸に秀で一能に達するには、何事によらず容易なことではできない。それこそ薪に臥し胆を嘗めるほどの苦心があるものと覚悟せねばならない。昔から名人の域に達した人が、どれほど苦しんだかということは歴史に伝わっている。芸術は百芸の長である。故にその芸術を一生の仕事としようとする者は、初めに堅く志を立てて如何なる困難に出会

たわ  
っても 撓まず、その奥義を極めるまでは死すとも止めないほどの覚悟をしなくてはならない。

一、身体を大切にせねばならない。

仕事には非常の根気とエネルギーが要る。身体が丈夫ならば丈夫なだけいい。(病身でもそれに打ち克って私の如くやることができるが、丈夫だったらどんなにいいだろうかと思う) 芸術上の仕事には種々な経験が豊かなほどいいのだが、身体が弱ければ生活が狭くなる。少なくともかなりの程度の健康を保つことを常に心掛けなくてはならない。それには、一、十一時以後は必ず夜更かしせぬこと。二、寝床のなかで物を考えぬこと。この二つだけ守ればどんなに勉強してもそれほど弱くはならない。これだけは守らねばならぬ。

一、でき得る限り刻苦勉強すること。

これはどんな天才にも必要なことである。努力せぬ者は終にはきっと負ける。初め鈍いよ  
たの  
うに見える者が刻苦して大成した人は多いが、初め才能があつてそれを 恃んで刻苦しないために駄目になった者も多い。素質のいい才はじけぬ人が絶え間なく刻苦するのが一番いいらしい。アララギ派の元素伊藤左千夫氏は正岡子規の弟子のうち一番鈍才であつたが、刻苦のために一番偉くなった。

一、よく考えて生きること。

良い芸術は良い生活からしか生まれぬ。こんなことはいふまでもないことと思う。浅い生活をしていて良い芸術を生むことは不可能である。但しここに良い生活というのは迷いや慎みや、あるいは罪がない生活という意味ではない。そういうものを持ちながらも正しい生活に達しようとして努力する生活をいうのである。

一、よく自然と人生を観察すること。

芸術は結局**人生の相に対する愛**から生まれる。よく気をつけて人生を観ることが一番である。そうすればちょっとした出来事にも深い運命や悲哀やまた美の調和や不調和やつまり人生に対する愛と悲しみの意識がだんだんこまやかになるものである。この心持はすなわち良い作の生まれる原動力になる。

一、よく読書すること。

われわれの尊い先人の作をできるだけ熱心に読まねばならぬ。これを怠っては芸術の成長の一つの大きな滋養を失うことになる。いい人のものはたくさん読むだけ良い。しかし読書は考えたり観察したりすることほど大切ではない。良く考え良く観察し、良く読むことが揃わねばならぬ。

一、できるだけ多く書くこと。

これは芸術に志す者の第一の本業である故に、絶え間なく書かねばならぬ。芸術は一つの技術である。技術は何によらず練習するより他に上達する道はない。一つ書くごとに成長してゆくものである。ロダンなどは絶え間なく練習していたということである。

以上を常に忘れず心に止め、固く守って気長く根気強く努力したならば、素質のいい者はきっとすぐれた芸術家になれる。(もし運命がそれを許すならば)

---

底本：「青春をいかに生きるか」角川文庫、角川書店

1953（昭和 28）年 9 月 30 日初版発行

1967（昭和 42）年 6 月 30 日 43 版発行

1981（昭和 56）年 7 月 30 日改版 25 版発行

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2005 年 1 月 6 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 43. 経験派

織田作之助

彼は小説家だった。下手な小説家だった。その証拠に実感を尊重しすぎた。

すり

彼は掏摸の小説を構想した。が、どうも不安なので、掏摸の顔を見たさに、町へ出た。

ところが、一人も掏摸らしい男に出会わなかった。すごすご帰りの電車に乗って、ふと気がつく、財布がない。掏られていたのだ。彼は悲しむまえに喜んだ。

「これで掏摸の小説が書ける」

彼は飛ぶように家へ帰った。そして机の前に坐ると、掏られたはずの財布がちゃんと、のっている。持って出るのをすっかり忘れていたのだ。

彼は原稿用紙の第一行に書かれている「掏摸の話」という題を消して、おもむろに、「あわて者」

という題を書いた。そして、あわて者を主人公にした小説を書き出した。



---

底本：「定本織田作之助全集 第六巻」文泉堂出版

1976（昭和 51）年 4 月 25 日発行

1995（平成 7）年 3 月 20 日第 3 版発行

入力：桃沢まり

校正：小林繁雄

2009 年 8 月 22 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 44.個性

北大路魯山人

ある晴れた日の午後であった。と、こう書き出しても、芥川賞をもらうつもりで、文学的に書き出したのではないから心配しないでくれ <sup>たま</sup> 給え。いったいこのごろは、何賞何々賞というものが多過ぎるようだ。常務取締役が社長が多過ぎるのも気にかかる。知人に道でも会って、久しぶりに会ったなつかしさかなんだか知らんが、きまって名刺を出される。例えばどんな若僧にもらっても、見給え、たいていは社長か常務取締役である。社長だからと思ってあわててはいけない。電話が一本に机一つ椅子一つ、社長一人の社長もあれば、銀行に知人があるというので、金を借りに行くだけの常務取締役だってある。何々賞もそれと似たようなもので、余り多過ぎはしないか。ひとをけなすよりほめる方が美し

いことだし楽しいことには違いないが、<sup>ほ</sup> 賞めそこなったために、そのひとの前途をあやまらす結果にならぬともかぎらぬ。たまたま格のある何々賞があつてそれを受けたと思ったら、棺桶に片足突っこんでいることの証明みたいなことになってしまったり……。

さて、なにをいおうとと思っていたのかな。そうだ。ある晴れた日の午後であった……のつづきだ。わたしは、犬をつれて散歩に出た。いや、そうではない。小学校の先生と散歩したのだ。その先生は、遠いところからわたしを訪ねてきてくれたのである。福井県のひとであった。わたしに、福井の産物をいつも送ってくれるひとだ。福井の**ガクブツ**である。

わけても福井の**う**には日本一だ。方々の国々に**う**にの産地はあつても、おそらく福井の

<sup>しかうら</sup>  
**う**には格別である。福井の四箇浦の**う**にはとげがない。とげというか、針というか、あのくちやくちやと突き出た奴がないのだ。割ってみると、他の**う**にのように、やわらかい肉がなくて、からの中にかたまつた、乾いたような、ちょうど木の実のような奴がはいっている。落とせば、かんからかんのかんと鳴るだろう。それを取り出して、俎板の上で、念入りに何度もムラのないように練られたものだ。その**う**にの産地のひとと、駅へわたしも行くので、いっしょに出かけたのだ。すると、道ばたで遊んでいた小学生が、その先生を見て、チョココンと頭をさげたものだ。その先生はわたしを見返って、笑いながらいう。

「わたしはどこへ行っても、子供におじぎをされますよ。どこへ旅行しても、わたしは子供たちの目からは学校の先生に見えるのですね」

わたしは感心したり、寒心したりした。先生、という型にはまりこんでしまったひとを、わたしは立派だと思ったが、同時に大変さみしく思った。型にはまればこそ、型にはまった教育を間違いなくやれるのだ。だが、型にはまってしまっているがために、型にはまったことしかできないのだ、と、思った。

料理だって同じことだ。型にはまって教えられた料理は、型にはまったことしかできない。わたしは、決して型にはまったものを悪いというのではない。無茶苦茶な心ない料理よりは、まだ型にはまったものの方が見苦しくない。大学を出ない無知よりは、同じ大学を出た無知の方がましだ。だが、大学に行っても自分でやろうと思ったこと以外はなにもしにつかないものだ。本当にやろうと思って努力するひとにとって、学校は不要だ。学校は、やらされねばならない人間のためにある。自分で努力し研究するひとなら、なにも別に学校へ行かなくともよい。とはいうものの、習ったから、自分でやったからといって、大きな違いがあるわけでもない。字でいえば、習った「山」という字と、自分で研究し、努力した「山」という字が別に違うわけではない。やはり、どちらが書いても、山の字に変わりはなく「山」は「山」である。違いは、型にはまった「山」には個性がなく、みずから修めた「山」という字には個性があるということである。みずから修めた字には力があり、心があり、美しさがあるということだ。型にはまって習ったものは、仮に正しいかも知れないが、正しいもの、必ずしも楽しく美しいとはかぎらない。個性のあるものには、楽しさや尊さや美しさがある。しかも、自分で失敗を何度も重ねてたどりつくところは、型にはまって習ったと同じ場所にたどりつくものだ。そのたどりつくところのものはなにか。正しさだ。しかも、個性のあるものの中には、型や、見かけや、立法だけでなく、おのずからなる、にじみ出た味があり、力があり、美があり、色も匂いもある。いや、習いたければ習うもよい。習ったとて、やはり力を、美を、味をと教えてくれるだろう。気をつけねばならぬことは、レディーメイドの力や美を教えこまれぬことだ。型から始まるのも悪くはないが、自然に型の中にはいつて満足してしまうことが恐ろしい。型を抜けねばならぬ。型を越えねばならぬ。型を卒業したら、すぐ自分の足で歩き始めねばならぬ。同じ型のものがたくさん出ても日本は幸福にはならぬ。山あり、河あり、谷ありで美しいのだ。しかも、山にも、谷にも、一本の同じ形の木も、同じ寸法の花もない。しかも、その花の一つ一つは、初めはみな同じような種から発芽したのだ。芽を出したが最後、それらのものは、みなそれぞれ自分自身で育ってゆく。

習うな、とわたしがいうことは、型にはまって満足するな、精進を怠るなということだ。

この本を読んだからとて、決して立派になるとはかぎらない。表面だけ読んで、満足してしまつてはなお困る。実行してくれることだ。そして、それぞれに研究し、成長してくれることだ。読みっぱなしで分つたようなつもりになつてくれては困る。

それでは、個性とはどんなものか。

うりのつるになすびはならぬ——ということだ。

自分自身のよさを知らないで、ひとをうらやましがることも困る。誰にも、よさはあるということ。しかも、それぞれのよさはそれぞれにみな大切だということだ。

牛肉が上等で、だいこんは安ものだと思つてはいけない。だいこんが、牛肉になりたいと思つてはいけないように、わたしたちは、料理の上に常に値段の高いものがないのだと思ひ違いをしないことだ。

すきやきの後では、誰だって漬けものがほしくなり、茶漬けが食べたくなるものだ。料理にそのひとの個性というものが表われることも大切であると同時に、その材料のそれぞれの個性を楽しく、美しく生かさねばならないとわたしは思う。

---

底本：「魯山人の美食手帖」グルメ文庫、角川春樹事務所

2008（平成20）年4月18日第1刷発行

底本の親本：「魯山人著作集」五月書房

1993（平成5）年発行

初出：「独歩」

1953（昭和28）年

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年12月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 45. 愛妻家の一例

岸田國士

ルナルの日記を読んで、いろいろ面白い発見をするのだが、彼は自分の少年時代を、「にんじん」で過したゞけあつて、大人になつてからも、常に周囲を「にんじん」の眼で眺め暮した世にも不幸な人間なのである。一度は友達になるが、その友達は、大概いつかは彼のひねくれ根性に辟易し、彼の方でも、その友達のどこかに愛想をつかして、どちらからともなく離れて行つてしまふ。

作家として、痛ましいほどの良心をもち、真実を追求する態度の厳肅さは、凡そ悪魔に憑かれてみるとでも云ひたいくらゐだのに、人を愛し、人から愛される何ものかを欠いてゐる不思議な性格が、針のやうに彼を見る心を刺すのである。

さういふ彼が、この世で唯一人、無条件に愛し得たのは、平凡なやうだが、その妻のマリイであつた。しかも、その愛情の濃やかさ、純粹さ、気高さは、まづ、私の知る限り類がないといつてもいゝくらゐである。

彼の日記は、その細君について屢々語つてゐるが、細君なら時々それを読むかも知れないといふ配慮の下に書かれてはゐない。その証拠に、細君に知れては困るやうなことも書いてある。

彼は、二十二で結婚した。巴里で腰弁生活をはじめた時代である。処女作の出版を断はられた時代である。

細君はマリネットといふ愛称で呼ばれ、十年の糟糠の妻は、彼の眼に常に新鮮であつた。

彼は彼女を芝居に連れて行つて、さて云ふ――

「マリネットもまた、彼女の楚々たる装ひに於いて成功した。レースにくるまつて、しとやかな共和の女神のやうだ」と。

彼はまた、一座の女たちの露骨な話題にうち興じてゐるなかで、自分の細君がどんな風かといふのを、「退屈しきつた純潔さ」と見るのである。

大概の男がかういふことを云ふと、常にどこか「甘く」なるものである。さう感じる事が決して甘いのもなく、感じたらそれをその通り云つて、これまた必ずしも甘いわけではないが、さう感じる感じ方、それを云ふ云ひ方のなかに、ある種の間が生じるのである。

さういふ隙が、生活の全体をふくらましてゐる場合があり、それが人間の愛嬌のやうなものにまでなつて、時には底の知れない深みを与へることがある。露西亞人などにはさういふ傾向が多い。

それが、仏蘭西人、殊にその中でも、神経の塊りのやうなこのルナルの細君礼讃振りには、普通にいふ「甘さ」といふものは微塵も感じられず、その代り、泣いてゐる子供がふと玩具を見せられて泣き止んだ時の、云はゞあのほつとするやうなものが潜んでゐる。

天真爛漫は、彼に於いては、まことに痛切な救ひなのである。そして、彼をその状態におき得るものは、天下に細君一人なのである。

彼のけち臭い自尊心、蒼白い懷疑、燻ぶる反抗精神が、彼女の前で、雲散霧消する現象は、まことに、壯絶の極みである。尤も、壯絶といふ言葉に皮肉な意味はない。或ひは悲壯といふ方がいゝかもしれない。事実、私の胸は涙でいつぱいになることがある。

彼はあるところでかう書いてゐる。

「マリネットは、次第に伸び育つて怒りになりさうな私の不機嫌を、芽生のうちに摘み取る術を知つてゐる」と。

世間にかういふ細君が絶無であるとはいはない。また、自分の妻の美点を、かく知り、感謝の念を以てかく語る男が、まつたくみないとは限るまい。しかし、ルピツク夫人を母親にもち、「自分は誰からも愛されてゐない」と叫ぶ少年「にんじん」の生涯を考へたならば、結婚が彼にもたらした一つの幸福について、われわれはそれを単なる幸福といふ言葉で片づけ得るであらうか？

表を見せれば、必ず裏を云ふ彼、成功の蔭で自己を嘲笑ひ、友情の重さを秤りにかける彼、そして、浮気をしない亭主とはこの世で一番しよんぼりした男であることを認める彼が、たゞ望んで獲た女なるが故に妻を貴しとする筈はないのである。

マリネットとは、どんな女性であつたらうか？

二人はある日、墓地を散歩した。彼女は、一つの墓石の前に跪き、その表面へ指で——それゆゑ跡は残らないが、——二人の名前を書いた。

その時の、彼ルナルのしんみりした顔附を想像するのは、これは読者の当然な権利である。

聡明で、聡明なるが故に単純で、貞淑で、貞淑なるが故にコケツトな一人の女性を考へてみることもできる。

再び云ふが、結婚後十年、稀代の拗ね者、純日本的照れ屋ルナルをして、野に堇を摘ましめ、これを妻への土産とせしめたものは、たゞ単に、孤独な魂の感傷にすぎないであらうか？

彼は結局、妻のすがたを次のやうに描いた。

——パジイへ散歩。私は林を抜ける、感じのいゝ道を選んだ。ところが、まるでどろどろの道だ。泥の中に踏み込むたびに、マリネットは、「なんでもないわ」とか、「もう大丈夫、心配しないで。草のなかで足を拭くわ」とか云ふ。こんな風に、泥だらけの道にも文句を云はない女、それは、生活を恐れない、いゝ道連れだ。

——ところで、この頃はもう、私は小さな子供みたいにしてゐる。私はマリネットに云ふ——お前には、母性の本能をすっかり満足させてくれる申し分のない子供が出来たんだよ。その子供は、先づ、なんでも赦して貰ひたがつてるんだ。仕事をしないでもあんまり叱ら

ないでくれつていふんだ。さうして、全然なんにもしないでゐられれば、いつまでも喜んでるんだ。

マリネットは私にすべてを与へてくれた。私の方は、彼女にすべてを与へたといへるだらうか！ やつぱり、私のエゴイズムはそつくりそのまゝ残つてゐるやうな気がする。

私が彼女に、「率直に云つてくれ」と云ふ時、彼女は私の眼の色で、どこまで本当のことを云つていゝか、といふことをちやんと読みとる。

これは、私が愛してゐると、確信できる唯一の人間だ——それから私自身と。が、まだ私自身の方は……。私はよく、自分で自分に嫌悪の蹙め面をさせることがある。さうだ、彼女を私は非常に愛してゐる。しかも、決して私が見損つてゐるわけではない。

恐らく、彼女は私のことが不安になつて、そして、自分でかう云ひきかせたのだらう——「自分を救ふ道はたつた一つしかない。あの人を絶対に信頼することだ。さうすれば、決してやり損ふことはないだらう。知らないで万一やり損つても、あの人が教へてくれるだらう。さうして赦してくれるだらう」と。

時々、彼女が子供たちを見守つてゐると、実に子供たちに近く見えて、まるで子供たちは彼女の二本の枝みたいだ。

彼女の心はその眼に表はれてゐる薔薇色の心だ。太陽のやうな心だ。

彼女の眼の底には、網膜の上には、愛情にも曇らされない一つの鏡、一つの小さな部分があるのだらうか。そして、そこには私も美しくは映らないのだらうか？

彼女の剥き出しの腕には涼味がある。

私にはマリネットがある。私はもうなんにも要求する権利はない。

彼女のそばでは、私は、「俺の作品は……」とか、「俺の特質は……」とか、「俺の才気は……」とか平気で云へる。そして、少し躊躇しながら、「俺の才能は……」とも云へる。彼女はかういふ云ひ方を実に自然に受け取つてくれるので、私の方でも、ちつとも気はづかしさを感じない。

彼女が私をよくしてくれたかどうか、それははつきりわからない。然し、見たところは確かによくなつた。

彼女が私のおかげでひどい貧乏をするかもしれないと思ふと、胸がつまるやうな気がする。

然し、私は大急ぎでかう考へる。——「彼女はきつと、立派にそれに堪へてくれるだらう。さうして、ますます俺を愛してくれるだらう」

彼は仏蘭西に生れ、作家となり、しかもその作品のうちで、一度も「姦通」を描かなかつた珍しい人物である。恐らく、この種の空想は、彼には堪へられないものであつたに違ひない。ある作家について、彼は軽蔑の口調を以て云ふのである——妻に裏切られても傑作が書けさへすればいゝと思つてゐるやうな男——と。

しかし、その彼も屢々夫婦生活の危機を問題とした作を書いてゐる。『日々の麵麩』や『ヴ



エルネ氏』の如きは、それである。

『日々の麴麴』の女主人公マルトには、たしかに彼の祈願が籠められてゐる。

「……アルフレッドを騙さうなんて気は、毛頭ありませんわ。それにしても、決して騙さないつてことが確かにわかつてたら、それやつまりませんわ、あたくし……」

これが美しい人妻マルトの言葉なのである。夫の友人で、彼女を讃美する男に対する婉曲な防禦である。

彼女はかうも云ふ――

「永久に節操を守るなんていふ誓ひを立てたくないんですの。真面目な女でも、あたくしは、時として自分の抵抗力を疑ふ真面目な女ですわ……」

作家ルナアルの「女性」は、彼の「言葉」の如く陰翳に富み、男心の隅々までを知り尽してゐる。

妻マリネットの面影が、そのまゝこのマルトの中に映つてゐるかどうかは疑問である。恐らく、本質的に別個なタイプのやうであるが、彼が女性、殊に、「自分の女」に求め、望むものは、彼のエゴイズムと、脆さに対する趣味との惨憺たる摩擦から生ずるものであつて、彼の愛妻心理も亦尋常一様なものではないにきまつてゐる。（「婦人公論」昭和十年十二月）

---

底本：「岸田國士全集 22」岩波書店

1990（平成 2）年 10 月 8 日発行

底本の親本：「現代風俗」弘文堂書房

1940（昭和 15）年 7 月 25 日発行

初出：「婦人公論 第二十卷第十二号」

1935（昭和 10）年 12 月 1 日発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009 年 9 月 5 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 46.悪妻論

坂口安吾

悪妻には一般的な型はない。女房と亭主の個性の相対的なものであるから、わが平野謙の如く（彼は僕らの仲間では大愛妻家といふ定説だ）先日両手をホータイでまき、日本が木綿不足で困つてゐるなどゝは想像もできない物々しいホータイだ。肉が炙ぐられる深傷だといふ無慙な話であるけれども、彼の方が女房の横ッ面をヒッパたいたことすらもないといふ沈着なる性格、深遠なる心境、まさしく愛猫家や愛妻家の心境といふものは凡俗には理解のできないものだ。

思ふに多情淫奔な細君は言ふまでもなく亭主を困らせる。困らせられるけれども、困らせられる部分で魅力を感じてゐる亭主の方が多いので、浮気な細君と別れた亭主は、浮気な亭主と別れた女房同様に、概ね別れた人にミレンを残してゐるものだ。

ミレンを残すぐらゐなら別れなければ良からうものを、つまり、彼、彼女らは悪妻とか悪亭主といふ世の一般の通念や型をまもつて、個性的な省察を忘れたのだ。悪妻に一般的な型などあるべきものではなく、否、男女関係のすべてに於て型はない。個性と個性の相対的な加減乗除があるだけだ。わが平野謙の如く、戦争をその残酷なる流血の故に呪ひ憎んでゐても、その女房を戦争犯罪人などゝは言はず惜しみなくホータイをまいて満足してゐるから、さすがに文学者、沈着深遠、深く物の実体を究め、かりそめにも世の型の如きもので省察をにぶらせることがない。偉大！ かくあるべし。

然し、日本の亭主は不幸であつた。なぜなら、日本の女は愛妻となる教育を受けないから。彼女らは、姑に仕へ、子を育て、主として、男の親に孝に、わが子に忠に、亭主そのものへの愛情に就てはハレモノにさはるやうに遠慮深く教育訓練されてゐる。日本の女を女房に、パリジャンヌを妾に、といふ世界的な説がある由、然し、悲しい日本の女よ、彼女らは世界一の女房であつても、まさしく男がパリジャンヌを必要とする女房だ。日本人の蓄妾癖は野蛮人の証拠だなどゝはマッカな偽り、日本の女房の型、女大学の猛訓練は要するに亭主をして女房に満足させず、妾をつくらずにゐられなくなる性格を与へるためにシシとして勉強してゐるやうなものだ。

武家政治このかた、日本には恋愛といふものが封じられ、恋愛は不義で、若氣のアヤマチなどゝ云つて、恋愛の心情に対する省察も、若氣のアヤマチ以上に深入りして個別的に考へられたこともない。恋愛に対する訓練がミヂンもないから、お手々をつないで街を歩くこともできず、それでいきなり夫婦、同衾とくるから、男女関係は同衾だけで、まるで動物の訓練を受けてゐるやうなもの、日本の女房は、わびしい。暗い。悲しい。

女大学の訓練を受けたモハンの女房が良妻であるか、そして、左様な良妻に対比して、日本的な悪妻の型や見本があるなら、私はむしろ悪妻の型の方を良妻也と断ずる。

センタクしたり、掃除をしたり、着物をぬつたり、飯を炊いたり、労働こそ神聖也とア

ッパレ丈夫の心掛け。けれども、遊ぶことの好きな女は、魅力があるにきまつてる。多情淫奔ではいさゝか迷惑するけれども、迷惑、不安、懊惱、大いに苦しめられても、それでも良妻よりはいい。

人はなんでも平和を愛せばいいと思ふなら大間違ひ、平和、平静、平安、私は然し、そんなものは好きではない。不安、苦しみ、悲しみ、さういふものの方が私は好きだ。

私は逆説を弄してゐるわけではない。人生の不幸、悲しみ、苦しみといふものは厭悪、厭離すべきものときめこんで疑ふことも知らぬ魂の方が不可解だ。悲しみ、苦しみは人生の花だ。悲しみ苦しみを逆に花さかせ、たのしむことの発見、これのあるひは近代の発見と称してもよろしいかも知れぬ。

恋愛といふと得恋、メデタシ／＼と考へて、なんでもさうでなければならぬものだときめてゐるが、失恋などいふものも大いに趣味のあるもので、第一、得恋メデタシ／＼よりも、よつぽど退屈しない。ほんとだ。

先日、本の広告を見てみたら、人妻とある詩人の恋文を、二人が恋しながら、肉体の関係のなかつた故に神聖な恋だと書かれてゐた。をかした神聖があるものだ。精神の恋が清

#### おつしや

らかだなどいふものはインチキで、ゼスス様も仰 有る通り行きすぎの人妻に目をくれても姦淫に変わりはない。人間はみんな姦淫を犯してをり、みんなインヘルノへ落ちるものにきまつてゐる。地獄の発見といふものもこれ又ひとつの近代の発見、地獄の火を花さかしめよ、地獄に於て人生を生きよ、こゝに於て必要なものは、本能よりも知性だ。いはゆる良妻といふものは、知性なき存在で、知性あるところ、女は必ず悪妻となる。知性はいはゞ人間性への省察であるが、かゝる省察のあるところ、思ひやり、いたはりも大きく又深くなるかも知れぬが、同時に衝突の深度が人間性の底に於て行はれ、ぬきさしならぬものとなる。

人間性の省察は、夫婦の関係に於ては、いはゞ鬼の目の如きもので、夫婦はいはゞ、弱点、欠点を知りあひ、むしろ欠点に於て関係や対立を深めるやうなものでもある。その対立はぬきさしならぬものとなり、憎しみは深かまり、安き心もない。知性あるところ、夫婦のつながりは、むしろ苦痛が多く、平和は少いものである。然し、かゝる苦痛こそ、まことの人生なのである。苦痛をさけるべきではなく、むしろ、苦痛のより大いなる、より鋭くより深いものを求める方が正しい。夫婦は愛し合ふと共に憎み合ふのが当然であり、かゝる憎しみを怖れてはならぬ。正しく憎み合ふがよく、鋭く対立するがよい。

いはゆる良妻の如く、知性なく、眠れる魂の、良犬の如くに訓練されたドレイのやうな従順な女が、真実の意味に於て良妻である筈はない。そしてかゝる良妻の附属品たる平和な家庭が、尊ばれるべきものでないとは言ふまでもない。男女の関係に平和はない。人間関係には平和は少い。平和をもとめるなら孤独をもとめるに限る。そして坊主になるがよい。出家遁世といふ奴は平安への唯一の道だ。

だいたい恋愛などいふものは、偶然なもので、たまたま知り合つたがために恋し合ふにすぎず、知らなければそれまで、又、あらゆる人間を知つての上での選択ではなく、少

数の周囲の人からの選択であるから、絶対などといふものとは違ふ。その心情の基盤はきはめて薄弱なものだ。年月がすぎれば退屈もするし、欠点があれば、いやにもなり、外に心を惹かれる人があれば、顔を見るのもイヤになる。それを押しての夫妻であり、矛盾をはらんでの人間関係であるから、平安よりも、苦痛が多く、愛情よりも憎しみや呪ひが多くなり、関係の深かまるにつれて、むしろ、対立がはげしくなり、ぬきさしならぬものとなるのが当然なのである。

夫婦は苦しめ合ひ、苦しみ合ふのが当然だ。慰め、いたはるよりも、むしろ苦しめ合ふのがよい。私はさう思ふ。人間関係は苦痛をもたらす方が当然なのだから。

ゼス様は姦淫するなかれと仰有るけれども、それは無理ですよ。神様。人の心は姦淫を犯すのが自然で、人の心が思ひあたはぬ何物もない。人の心には翼があるのだ。けれど

か  
も、からだには翼がないから、天を翔けるわけにも行かず、地上に於て巢をいとなみ、夫婦となり、姦淫するなかれ、とくる。それは無理だ。無理だから、苦しむ。あたりまへだ。かういふ無理を重ねながら、平安だつたら、その平安はニセモノで、間に合はせの安物にきまつてゐるのだ。だから、良妻などいふのは、ニセモノ、安物にすぎないのである。

然し、しからは悪妻は良妻なりやといへば、必ずしもさうではない。知性なき悪妻は、これはほんとの悪妻だ。多情淫奔、たゞ動物の本能だけの悪妻は始末におへない。然し、それですら、その多情淫奔の性によつて魅力でもありうるので、そしてその故にミレンにひかれる人もあり、つまり悪妻といふものには一般的な型はない。もしも魅力によつて人の心をひくうちは、悪妻ではなく、良妻だ。いかに亭主を苦しめても、魅力によつて亭主の心を惹くうちは、良妻なのだらう。

魅力のない女は、これはもう、決定的に悪妻なのである、男女といふ性の別が存在し、異性への思慕が人生の根幹をなしてゐるのに、異性に与へる魅力といふものを考へること、創案することを知らない女は、もしもそれが頭の悪さのせゐとすれば、この頭の悪さは問題の外だ。

才媛といふタイプがある。数学ができるのだから、語学ができるのだから、物理学ができるのだから知らないが、人間性といふものへの省察に就てはゼロなのだ。つまり学問はあるかも知れぬが、知性がゼロだ。人間性の省察こそ、真実の教養のもとであり、この知性をもたぬ才媛は野蛮人、原始人、非文化人と異らぬ。

まことの知性あるものに悪妻はない。そして、知性ある女は、悪妻ではないが、常に亭主を苦しめ悩まし憎ませ、めつたに平安などは与へることがないだらう。

苦しめ、そして、苦しむのだ。それが人間の当然な生活なのだから。然し、流血の惨は、どうかな？ 平野君！ あゝ、戦争は野蛮だ！ 戦争犯罪人を検索しようよ。平野君！

---

底本：「坂口安吾全集 05」筑摩書房

1998（平成 10）年 6 月 20 日初版第 1 刷発行

底本の親本：「婦人文庫 第二巻第七号」

1947（昭和 22）年 7 月 1 日発行

初出：「婦人文庫 第二巻第七号」

1947（昭和 22）年 7 月 1 日発行

入力：tatsuki

校正：oterudon

2007 年 7 月 13 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

「くの字点」は「／＼」で表しました。

# 47.愛の問題（夫婦愛）

## ——生命の法に随う——

倉田百三

一人の男と一人の女とが夫婦になるということは、人間という、文化があり、精神があ

ジッテ

り、その上に霊を持った生きものの一つの習わしであるから、それは二つの方面から見ねばならぬのではあるまいか。

すなわち一つは宇宙の生命の法則の見地から見て、かりのきめであって、固執すると無理があるということだ。も一つはたとい多少の無理を含んでいても、進化してきた人間の理想として、男女の結合の精神的、霊的指標として打ち立て、築き守って、行くべきものであるということである。

生命の法則についての英知があって、かつ現代の新生活の現実と機微とを知っている男女はこの二つの見方を一つの生活に融かして、夫婦道というものを考えねばならぬ。

人間が、文化と、精神と霊とを持っているのでなかったら夫婦道というものは初めから無理で意味をなさないのだから、夫婦になる以上は性に関する、文化的、精神的、霊的要求を十分に夫婦道に盛るべきだ。そういう愛を互いに期待すべきだ。だからこのごろときどき耳にする恋愛結婚より、見合結婚の方がましだなどと考えずに結婚に入る門はやはりどこまでも恋愛でなくてはならぬ。純な、一すじな、強い恋愛でなくてはならぬ。恋愛から入らずに結婚して、夫婦道の理想を立てようなどというのは、霊のない人間に初めて考えられることであって、たとえ円満にそいとげても、結局常識的、事務的な結合にすぎぬ。こういうことはやはり正面からの道が一番いいので、ほかから見れば、円満幸福に見えても、一つ一つの生活のはしばしまで、愛の行き渡り方、心のとけ合い方が違うのだ。

それに夫婦生活には必ず、倦怠期があるし、境遇上に不幸が襲うし、相手にそれほどでもなかったという期待はずれが生じるものだ。そういうとき、本当に愛し合ったいろいろの思い出は愛を暖め直すし、またあきらめがつく。あれだけ愛したのだからと思わせる。そうしているうちには、もともと人生と人間とを知ることに浅く、無理な、過大な要求を相手にしているための不満なのだから、相方が思い直して、もっと無理のない、現実に根のある、しんみりした、健実な夫婦生活を立てていこうとするようになる。

今さらに何かなげかん打ちなびき心はきみによりにしものを

これは万葉にある歌だがいい歌だと思う。

こんな気持は恋愛から入った夫婦でなくては生じないだろう。

性交は夫婦でなくてもできるが、子どもを育てるということは人間のように愛が進化し、また子どもが一人前になるのに世話のやける境涯では、夫婦生活でなくては不都合だ。そ

れが夫婦生活を固定させた大きな条件なのだから、したがって、夫婦愛は子どもを中心として築かれ、まじめな課題を与えられる。恋愛の陶酔から入って、それからさめて、甘い世界から、親としてのまじめな養育、教育のつとめに移って行く。スイートホームというけれども、恋愛の甘さではなく、こうなってから初めて夫婦愛が生まれてくる。子どもを可愛がる夫婦というのはよそ目にも美しく、その家庭は安泰な感じがするものだ。

人間は社会生活をして生きているから、夫婦の生活をささえ子どもを養、教育していくことは生活の「たたかい」を意味する。この闘いに協同戦線を張って助け合うことが夫婦愛を現実に活かす大きな機会でなくてはならぬ。たのみ合うという夫婦愛の感じは主としてここから生まれる。この問題でたよりにならない相手では、たのみにならない味方ということになる。この闘いは今日の場合では大概是容易ならぬ苦闘だからだ。しかしこれは協同する真心というので、必ずしも働く腕、才能をさすのではない。妻が必ず職業婦人になって、夫の収入に加えねばならぬというのではない。働く腕、金をとる才能のあることがかえって夫婦愛を傷つける場合は少なくないし、またあまりそういう働きのあるような婦人は、愛が濃やかでなく、すべて受身でなく可愛らしげがないという意味あいもあるのだ。

婦人が育児と家庭以外に、金をとる労働をしなければならないというのは、社会の欠陥であって、むしろやむを得ない悲惨事である。婦人を本当に解放するということは、家庭から職業戦線へ解放することではなくて、職業戦線から解放して家庭へ帰らせることだ。

しかし現状では夫婦共稼ぎもやむを得ない。が、この際夫としてはなるべく妻を共稼ぎさせないようにするのが夫婦愛であり男の意気地である。妻の方では共稼ぎもあえて辞めないという心組みでいてほしいものだ。

私の知ってるある文筆夫人に、女学校へも行かなかった人だが、事情あって娘のとき郷里を脱け出て上京し、職業婦人になって、ある新聞記者と結婚し、子どもを育て、夫を助けて、かなり高い社会的地位まで上らせ、自分も独学して、有名な文筆夫人になっている人がある。夫も薄給で子どもをおんぶして、貸家を捜しまわった時代のことが書いてある。その人の歌に、

事にふれてめをと心ぞたのもしきあだなる思ひはみなほろぶもの

というのがある。この「めおと心」というのが夫婦愛で、これは長い年月を経済生活、社会生活の線にそうて、助け合ってきた歴史から生まれたものである。

そして不思議なことには、この人は子どもも可愛がるが、生活欲望も非常に強い。妻らしく、母らしい婦人が必ずしも生活欲望が弱いとしたものでもないようだ。

子どももなく、生活にも困らない夫婦は、何か協同の仕事を持つことで、真面目な課題をつくるのが、愛を堅め、深くする方法ではあるまいか。

すなわち学校、孤児院の経営、雑誌の発行、あるいは社会運動、国民運動への献身、文学的精進、宗教的奉仕等をともしにするのである。

二つ夫婦そらうてひのきしんこれがだいいちものだねや



これは天理教祖みき子の数え歌だ。

子をなさぬ二人がなかのめぐし子と守りてぞ行かな敷島の道

これは子どものないある歌人の詠だ。

ブース夫婦、ガンジー夫婦、リープクネヒト夫婦、孫逸仙と宋慶齡女史、乃木大将夫婦  
これらは、子どもの有無はともかく同じ公なる道、事業に心をあわせ、力を一つにして、  
夫婦愛が固くなったものだ。

やんごとなき仏にならせわがために死にしころのそのままにして

これは自分の妻をあることで、苦しめ抜いたある真宗信徒の歌である。

### さてつ

夫婦愛というものは少しの蹉 跌 があったからといって滅びるようなものではつまらない。初めは恋愛から入って、生活と歳月の移るにしたがって、人生の苦渋にもまれ、鍛えられて、もっと大きな、自由な、地味なしんみの、愛に深まっていく。恋愛よりも、親の

### ふんけい

愛、腹心の味方の愛、 匆 頸 の友の愛に近いものになる。そして背き去ることのできな

### きずな

い、見捨てることのできない深い 絆 にくくられる。そして一つの墓石に名前をつらねる。「夫婦は二世」という古い言葉はその味わいをいったものであろう。

アメリカの映画俳優たちのように、夫婦の離合の常ないのはなるほど自由ではあろうが、夫婦生活の真味が味わえない以上は人生において、得をしているか、失っているかわからない。色情めいた恋愛の陶醉は数経験するであろうが、深みと質とにおいて、より貴重なものを経験せずに逸するなら、賢く生きたともいえまい。深い心境を経験しないで済むことは、歓楽を逃がすより、人生において、より惜しいことだからだ。そして夫婦別れごとに金のからんだ訴訟沙汰になるのは、われわれ東洋人にはどうも醜い気がする。何故ならそれだと夫婦生活の黄金時代にあったときにも、その誓いも、愛撫も、ささやきも、結局そんな背景のものだったのかと思えるからだ。

権利思想の発達しないのは、東洋の婦人の時代遅れの点もあろうが、われわれはアメリカ婦人のようなのが、婦人として本性にかなった正常な姿ではなく、やはり社会の欠陥から生じた変態であって、われわれは早く東洋的な、理想的国家をつくって、東洋婦人が安んじてその本性を生かせるように、アメリカ婦人の真似をしなくてもいいようにしなければならぬと思うのである。婦人をその天与の生理にも、心理にも合わない労働戦線に狩り出して、男子のような競争をさせるのでなく、処女らしさ、妻らしさ、母らしさを保護し、育児と、美容とに矛盾しない範囲の労働にとどめしめることは、新しい社会の義務だと思うのである。天理の自然、生命の法則に従うことは、目前の生活解放権利拡張ということより根本的である。現在の社会ではいわゆる婦人の権利拡張の闘争から手を引くことは、一層鎖を重くすることになるが、理想的国家では、処女性、母性、美容の保護、ならびに、これと矛盾しない仕事しかしないということが婦人の天与の権利でなくてはならぬ。そし

てこれを保証することは国家と男性との義務でなくてはならぬ。

最後にこの天理の自然、生命の法則という視点から、最初に立ちかえって、夫婦生活というものには無理が含まれていることも、英知をもって認めておかななくてはならぬ。この無理をどう扱うかということが生活のひとつの知恵である。

性の欲求、恋愛は人間の本性上、ことに男子にとっては、自由を欲するものであって、それはまた生活精力上、審美上、優生学上の機微とからまり、自然の不思議な意志が織りこまれていくものである。この天然と生命との機微を無視するキリスト教的、人道主義は、簡単に、一夫一婦の厳守を強制するのみで、その無理に気がつかない。それは夫婦というものが、人間という生きもののかりのきめであることを忘れるからである。この天与の性的要求の自由性と、人間生活の理想との間に矛盾が起こるのはむしろ当然のことである。この際自由の抑制、すなわち善というわけにいかぬものがある。

この男性にあらわれる生活精力上、審美上、優生学上の天然の意志については、婦人は簡単に獣慾とか、不貞操とか考えたのでは実相にあたらぬ。したがってただそれだけで、夫の人格を評価して、夫婦生活にひざまずいたりするのは浅慮である。

天然と歴史とは往々にして偉大なる男性に、超家庭的の性格と使命とを与える。すべての男性が家庭的で、妻子のことにのみかかわって、日曜には家族的のトリップでもするというだけで満足していたら、人生は何たる平凡、常套であろう。男性は獅子であり、鷹であることを本色とするものだ。たまに飛び出して巣にかえらぬときもあろう。あまり小さく、窮屈に男性を束縛するのは、男性の世界を理解しないものだ。小さい几帳面な男子が必ずしも妻を愛し、婦人を尊敬するものではない。大事なところで、献身的につくしてくれるものでもない。要は男性としての本質を見よ。夫としてのたのみがいを見よ。婦人に対する礼と保護との男性的負荷を見よ、事業と生活に対する熱情と欲望とを見よ。そしてこれらのものにして欠けていないならば、あまりに窮屈な、理解のないことをいうな。極端な束縛とヒステリーとは夫の人物を小さくし、その羽翼を撈ぐばかりでなく、また男性に対する目と趣味との洗練されてないことを示すものに外ならない。

(一九三四・八・三〇)

---

底本：「青春をいかに生きるか」角川文庫、角川書店

1953（昭和 28）年 9 月 30 日初版発行

1967（昭和 42）年 6 月 30 日 43 版発行

1981（昭和 56）年 7 月 30 日改版 25 版発行

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2005 年 1 月 6 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 48.愛は神秘的な修道場

宮本百合子

恋愛は、実に熱烈で霊感的な畏ろしいものです。

人間の棲む到る処に恋愛の事件があり、個人の伝記には必ずその人の恋愛問題が含まれてはいますが、人類全般、個人の全生活を通観すると、それらは、強いが烈しいが、過程的な一つの現象と思われま。

恋愛経験の最中にある時、或は何かの理由で恋愛的雰囲気に対して非常に敏感になっているとき、私共は自分にもひとにも第一、気になるのは恋愛のことばかりだと云う風に思っています。けれども、じっと見るとどんな熱情的な恋愛をしている人でも、人間として他方面の必然な生活条件は満しています。生活の大河は、その火花のような恋、焰のような愛

たる  
を包括して 怠みなく静かに流れて行く。確かに重大な、人間の霊肉を根本から 震盪  
しんとう  
するものではあっても、人間の裡にある生活力は多くの場合その恋愛のために燃えつきるようなことはなく、却って酵母としてそれを暖め反芻し、個人の生活全般を豊富にする養液にしてしまいます。

また恋愛は、独特な創造力を持っているとも思われます。恋愛は決して百年同一の状態に止ることをしません。必ず或る消長があります。草木が宇宙の季節を感じるように、一

たそがれ  
日に暁と白昼と優しい 黄昏の愁があるように、推移しずにはいません。いつか或るところに人間をつき出します。それが破綻であるか、或いは互いに一層深まり落付き信じ合

だんらん  
った愛の 団欒か、互いの性格と運とによりましょが、いずれにせよ、行きつくところまで行きついてそこに新たな境地を開かせる本質が恋愛につきものなのです。

自然は、人間の恋愛を唯だ男性と女性との+《プラス》だけでは終らせず、精神に於て、男をA、女をBとすれば  $A + A \times B : B + B \times A$  [ # 「 $A + A \times B : B + B \times A$ 」は横書き ] という風な関係にすると思われます。そして、数学と全然違うところは、これらの関

マイナス  
係がまるで逆になって、+《プラス》のところが一 になり、 $\times$ 《タイム》が $\div$ 《デバ

もくあみ  
イデッド》となっても、一度真面目に恋愛した人間の心では、決して元の 壱阿彌の単一なAならA、BならBには還ることがないと云うことです。きっと、より広い人生への理解、愛、認識が加えられています。恋愛ばかりは、真に主観的な豊富さから見ると、失っても得ても、ともに尊い、有難いものと云えます。その一段深まり拮った人間と自然との

生存を味わせようとして、神は人間に複雑な全心的な恋愛の切な情を与えたのかと思われることさえある程です。

恋愛の真実な経験は間違いなく生活内容を増大させます。けれども、私には、恋愛生活ばかり切りはなして、それ自身全般的なものとは考えられません。恋愛過程を含む或人の生活とは云えても、人間は生れるときから死ぬまで恋愛ばかりに没頭しているのではありません。又、他人の恋愛問題と自分のそれとは全然個々独立したもので、それぞれ違った価値と内容運命とを持っている筈のものです。恋愛とさえ云えば、十が十純粋な麗わしい花であるとも思えません。

私は、恋愛生活と云うものを余り誇張してとり扱うのは嫌いです。恋愛がそれに値いしないと云うのではなく、正反対に、本当の恋愛は人間一生の間に一遍めぐり会えるか会えないかのものであり、その外観では移ろい易く見える経過に深い自然の意志のようなものが感じられ、又よき恋愛をすることは容易な業ではないと感じているからです。

恋愛生活と芸術創造とは何処か似たところがあります。

よき作品も創りたいとあせって、外に求めても時が熟さなければ、何より大切な心の準備が出来ない。つつましい、引しまった、鋭い精神の上に、徐々日の出のように方向が見え、自分の意企が輝いて来たら、嬉しさではしゃいではいけない。じっと心を守り、余分な精力と注意は一滴も他に浪費しないように、念を入れ心をあつめて、ペンならペン、絵筆なら絵筆を執るべきでしょう。

恋愛に対してもそうであろうと思われます。決して卑しく求むべきではないし、最上とか何とか先入的な価値の概念は持つべきでないし、同時に、恋愛の本質に素直でそこから自分の誠実さが感じ理解出来るだけのものを余りなく得て全生活を浄め豊かにするだけの、視野の宏大な愛、人間、自分への信任が大切と思われます。

恋愛が人間にとって、先験的な重大さを持つ点では、男性も女性も同じと思います。その人々が一生をつくして仕上げたいと思う生存の目標に向って進む自己を悦びにより、苦しみにより一層豊饒にし、賢くしてくれる恋愛、それから発足した範囲の広い愛の種々相に対して、私共は礼讃せずにはいられませんが、無限な愛の一分野と思われる恋愛ばかりを（まして今日世俗で意味するだけの内容で）天地に漲り、それなくしては生きるに甲斐ないと云うもののように考えるのは、不自然すぎると思います。

〔一九二四年二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十四巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 7 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

初出：「女性」

1924（大正 13）年 2 月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 5 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

[#...] は、入力者による注を表す記号です。

# 49. 愛人と厭人

宮原晃一郎

有島武郎君の「惜みなく愛は奪ふ」は出版されるや否や非常な売れ行きであるさうな。しかし売れ行きといふことが直にその本の真価を示すものではないと同時に、売れ行く本は直に俗受けのものと独断して、文壇の正系(?)が之を無視するのはよくないことだ。

過般有島君の芸術を通じてその生活を一般が云々することについて、中央文学にちよつと

一寸書いた時、「三部曲」の批評が出なかつたことを指摘して置いたが、此本の「後書」を見ると、矢張りあの書に対する批評は賀川氏ものゝみが只一つ公にされたつきりで

あつたさうな。自分は武郎君の門下でもなければ、乾分でもないのだから、敢て

おべつか

阿諛をつかつて彼是言はねばならぬ義務は持たぬが、当然問題となるべき「三部曲」の批評が一つも文学雑誌——少なくとも文芸をその要素の一つとする雑誌や新聞に、殆ど一言半句ものせられなかつた不公正に対して、自分は親友としては勿論、仮りに無関係な立場にある人としても非常に遺憾とするものである。従つて今度出た「惜みなく愛は奪ふ」は武郎君が五ヶ年の心血を注いで、その思想上の頂点を為すものと言はれてゐるだけに、決して同一の不公正が行はれはすまいと思ひながらも、又一方にはなほその懸念がないでもない。願はくは之は自分の杞憂であつて呉れゝばいゝが。

自分が彼の書を読んだところでは、武郎君はその思想を自我の肯定にまで溯りデカルトの *Cognito ergo sum* の代りに、*Cognosco ergo sum* だといつてゐる。併し表現の方法は哲学的の論文ではなく論文の形を借りた詩である。組織されたる思想といふよりも寧ろ生み出された思想といふが適當だ。然らばその生み出された思想とは何かと云へば、それは

ただ 愛だ。 嘗に最近五年間といはず、有島君が最初から目指してきた、又総て武郎君の生命

活動の 主 動 を為した愛が、此処にその全我の大肯定の 下 に、自らを確立したのである。武郎君の愛なるものゝ本質が何であるか、惜みなく奪ふ愛そのものである主我は他の多くの同様な主我と如何に対立共存し得られるか、武郎君の見るところ、説くところ、信ずるところに対してきつといろ／＼な意見が発表せられるであらうし、又さういふことを論じ合ふのは、下らぬ揚足とりや、与太話よりも、ズツトましであるから、大なる期待を以て自分は観てゐるのである。

然し自分は此処に「惜みなく愛は奪ふ」の批評をする積りでもなければ、武郎君の人生

観を彼是言ふものでもない。只之を所縁としてつく／＼と感じたことを述べてみたいのである。

他人のことを言ふ資格のない私は矢張り自分のことを言ふ。私は「惜みなく愛は奪ふ」を読んで、今更に自分の生き永らへてゐることを奇怪に、恥辱に、又恐ろしくさへ思つた。

けたは  
一体自分は考へてみると善にしろ、悪にしろさう大した 桁 外 づれではない。平たく言へ

ちくち  
ば凡骨だ。君は立派な人格の所有者だなんかと、過つて言はれでもすると、内心頗る 忸 怩  
たるものがあるが、さりとして偽善者だと名乗つてそれを打消すにも価ひしないと自分を侮  
つてゐる。然し悪に対する自分の態度は寸毫も仮借しない激烈を極めてゐる。邪悪といふ  
ものは真黒々で、そこには一点の光明を認めることが出来ない、そして此暗黒は光りのあ  
るところに陰の必ず伴ふ如く、善に伴つてゐる。否寧ろ暗い夜に灯火をつけるやうに、大  
きな暗は小さな光りを隠くさんとする。是は今日の文壇に主潮を為してはゐないかと思は  
れる人道主義的傾向とも、又有りふれた道德観念とも正反対である。自分には今、どんな  
墮落した人間の裡にも神の光りを認める偉大なドストイエヴスキイの垂流で世の中が満ち  
てゐるやうに見える。その証拠は此観念を裏切る典型の一人を描かうものなら、批評家は  
直ぐに、うまくは描けたが、もつと人間らしいところを見てやるべきと言ふ。即ち文学者  
たる者は、その作に、お菓子に砂糖のいるやうに、きつと甘いところを添ふべきことにな  
つてゐるのだ。自分もクロポトキンだつたか誰かゞいつたやうに、ロムブロオゾオの所謂  
罪人型の人間は先天的にはゐないものと信じてゐる。けれども悪いものを悪いまゝに描  
き、又悪いことを悪いと痛撃するに何の容赦も要らないものと思つてゐる。或は言ふ人が  
あるかも知れない。お前は同じ人間に善と悪とが対立してゐることを忘れて、只その悪ば

をとく  
かりを見るからいけないのだ。そんな見方は人間を 汚 流 し、生命を殺すものだ。自分  
もそれを思はぬではない、いやそれを思へばこそ恥しくも、恐しくもなるのだ。然しそれ  
でも自分は今日の正義の声は余りに、かしましい拙悪な吹奏者の喇叭のやうに、その底に

くすぐ  
或る不協和な、 擦 つたい何ものかゞ聞きとれると白状しないではをられない。自分は  
人性を善なりと大掴みにきめてかゝれないと同時に、その反対に悪なりとも断言すること  
を躊躇するものだが、誰も彼も皆正義人道の擁護者らしく見えるときに、自分の汚ない心

はや  
は皮肉な嘲笑を催して、それぢや是を見ろと現実暴露といふ昔流行つたアナクロニズムを

こんな  
やつてみ度くなる。そしてあらゆるものがカリカチュア化してみえる。自分も 恚 心理  
は一種病的で、医学上の露出狂 **Expositionmania** のやうなもので、何れも立派に着かざり、  
万物の霊長とは之だぞと取繕つて坐つてゐる真中に、容赦なく、赤裸々の醜をさらけ出し



あと

て、皆を座に堪へぬまで赤面させ自分は 後 で指弾と、冷罵と、憫笑とを、播いた収穫として投げ返されると知つて、自分が恚<sup>イ</sup>病に罹つてゐるのではないかと思ふと堪らなく恥しくもなる、がそれはまだ治癒の望みもある、絶望ではない、併し本当の厭人厭世となつたら、なかなかそのやうな生優しいものではない。「惜みなく愛は奪ふ」を読んだとき、自分はその行先にある此暗い深淵が大きな咽喉を開いて自分を一步々々その方へ吸ひ寄せてゐることを、愕然として悟つた。語彙の概念に捕はれ易い自分は虚無といふ幻想的な非實在の名を以て此深淵を称ふことは出来ないが、其処には総てが否定で、絶望であるといふ、自分の此観照に目醒めて、驚きかつ顛ひをのゝいたとき、更に自分はその死の谷への道を安んじて、恰も生命の門に進むが如く、平然と寧ろあらゆる空しき影に無限の希望を置き、喜びをさへ感じて生きてゐる矛盾を、無頓着を、冷淡を、倦怠を痛感して、此処に改めて自分に対する反抗と、嫌悪の念がむづの走るが如く、心に湧き起つた。そして自分は此急激な靈の嘔吐を押へる対症療法として、短時間のうちに、今まで漠然として感じてゐたことを、どうか纏まりをつけねばならなくなつた。どんなふうに解決をつけたか、それを詳しくいふことになれば、如何に一夜づけでも十枚や二十枚では書き足りないから、只一言にして尽くすことにすれば、それは至極平凡なもので、武郎君の「我は知る、故に我は在る」よりも、もうちつと前なる意識に溯つて「我は感ず、故に我はある」 *sencio, ergo sum* といふ生存の根帯を肯定して次には「在る」という事実はその終りが死であらうと、滅亡であらうと、又その「在る」道程が美であらうと、醜であらうと、善であらうと、悪であらうとに論なく、あらんとするその慾望であつて、我を中心に見た、一切のものは之に根ざしてゐる。此慾望を指して人は愛とよぶもまた憎みといふもそは関するところでない。そは一本質の只形を異にした現はれに過ぎないのだから。ツウルゲーニエフが「煙」の中で、誰だつたかに「私は限りなく露国を愛するが故に、限りなく露国を憎む」と言はしたやうに、生きんとする生命の促進から起つた執着があればこそ、厭人も厭世も、憤りも憎みもあるのだ。若しその慾がなくなつたら、そのときこそは生きてはゐられないときである。

こ

恚う考へたとき自分が生きてゐること、憎みながら、厭ひながらも生きてゐる理由が分つたやうな気がした。恥づることも、恐るゝこともいらぬやうに思つた。自分が世を厭ひ、憎むといふことはその実、生に対する執着が深いからである。憎むことが深ければ深い程、生命の力は強いのである。それは矢張り愛ではないかと或は人はいふかも知れない。

或はさうであらう。それは視点の相違である、愛を力説する人は、金を砂中に拾ひ上げる人だ。憎みを主張する人は鉱石を熔炉に投じて、金塊から不純の分子を潔める人だ。何れにしても同じことだ。只何れにするも不徹底が一番にいけない。その時愛は偽善となり、憎みはカリカチュアとなる。自分は信ず何時何処でも偉大な人の多くはミスアンスロツプであるか、さもなければ境遇上から、又は能動的に求めて、靈肉の苦行を経た人であると。

象牙の椅子に倚りて、民の疾苦を説く政治家の態度を学ぶフイランソロブは盲目的な獸類の愛、非常に **Selfish-ness** を含む危険に陥り易い。今我々の間には斯るフイランソロブが甚だ多くはないだらうか。自分はこれを厭ふ余りにその反端のカリカチューリストになつたではあるまいか。しかし他人のことはどうでもかまはない。自分は今後此立場から大

に厭人的の苦がい憎悪を吐き散らして呉れようと決心した。そして若し生命そのものが愛

といふものであるならば、此苦い憎悪の中から、<sup>とげ</sup> 棘 と、渋皮の奥なる甘い栗を取り出す

やうに、美味な純真な愛に到達しようと思ふ。<sup>もつと</sup> 尤 も生物の死滅は個体として、種属として、又全体より見て、如何にしても免れぬことで、生命の飛躍といひ、靈魂の不滅とい

ふも、そは<sup>く</sup> 只奇しき夢を見るべく運命づけられた人間のあこがれの幻影で、愛は<sup>うまざけ</sup> 美酒の一場の酔に過ぎないことは、千古の鉄案として動かせないのであるが、我れ感じ、我れ生きて、なほ只生きんと衝動の波に押しすゝめられて行く間は、せめては冷たく、堅く、

物凄い真理のゴルゴンの見えぬやう、愛なる酒に酔うて、幻滅に開かんとする眼を<sup>くら</sup> 眩まして置かう。自分には「虚無に立脚した力強い肯定も」出来ねば、「絶望の法悦」も味はは

れぬ身であるから、<sup>りんね</sup> 輪廻を想うて非常な悒鬱、絶望に陥りかけたニイチエか **Uacht Zum Nille** を高調し、そこに悦ばしい生命の隠遁所を発見したやうに憎悪を通じて自己肯定へ進まう。

(大正九・八「新潮」)

---

底本：「惜しみなく愛は奪う」角川文庫、角川書店  
1969（昭和 44）年 1 月 30 日改版初版発行  
1979（昭和 54）年 4 月 30 日改版 14 版発行

初出：「新潮」  
1920（大正 9）年 8 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2008 年 3 月 20 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

「くの字点」は「／＼」で、「濁点付きくの字点」は「／＼」で表しました。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 50.愛

宮本百合子

愛ということばは、いつから人間の社会に発生したものでしょう。愛という言葉をもつようになった時期に、人類はともかく一つの飛躍をとげたと思います。なぜなら、人間のほかの生きものは、愛の感覚によって行動しても、愛という言葉の表象によってまとめられた愛の観念はもっていませんから。

更に、その愛という言葉が、人間同士の思いちがいや、だましあいの媒介物となったのは、いつの頃からでしょう。そして、愛という字が近代の偽善と自己欺瞞のシムボルのようになったのはいつの時代からでしょう。三文文士がこの字で幼稚な読者をごまかし、説教壇からこの字を叫んで戦争を煽動し、最も軽薄な愛人たちが、彼等のさまざまなモメントに、愛を囁いて、一人一人男や女をだましています。

愛という字は、こんなきたならしい扱いをうけていていいのでしょうか。

愛という**言葉**をもったとき、人間の悲劇ははじまりました。人類愛という声がかましく叫ばれるときほど、飢えや寒さや人情の刻薄がひどく、階級の対立は鋭く、非条理は横行します。

わたしは、愛を愛します。ですから、このドロドロのなかに溺れている人間の愛をすくい出したいと思います。

どうしたら、それが可能でしょうか。わたしの方法は、愛という観念を、あっち側から扱う方法です。人間らしくないすべての事情、人間らしくないすべての理窟とすべての欺瞞を憎みます。愛という感情が真実わたしたちの心に働いているとき、どうして漫画のように肥った両手をあわせて膝をつき、存在もしない何かに向って上眼をつかつていられましょう。この社会にあっては条理にあわないことを、ないようにしてゆくこと。憎むべきものを凜然として憎むこと。その心の力がなくて、どこに愛が支えをもつでしょうか。

愛とか幸福とか、いつも人間がこの社会矛盾の間で生きながら渴望している感覚によって、私たちがわれとわが身をだましてゆくことを、はっきり拒絶したいと思います。愛が聖らかであるなら、それは純潔な怒りと憎悪と適切な行動に支えられたときだけです。そして、現代の常識として忘れてならぬ一つのことは、愛にも階級性があるという、無愛想な真実です。

〔一九四八年二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十七巻」新日本出版社

1981（昭和 56）年 3 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房

1953（昭和 28）年 1 月発行

初出：「朝日評論」

1948（昭和 23）年 2 月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003 年 9 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 51.愛よ愛

岡本かの子

この人のうえをおもうときにおもわず力が入る。この人とのくらしに必要なわずらわし  
き日常生活もいやな交際も <sup>おぼつか</sup> 覚 束 なきままにやっつてのけようとおもう。この人のために  
はすこしの恥は涙を隠しても忍ぼうとおもう。

朝夕見なれしこの人、朝夕なにかしら <sup>めあた</sup> 眼 新 らしきものをその上に見 <sup>みいだ</sup> 出すこの人。世  
間ではこの人をおとなのなかのおとなのようにいう。けれどもわたしにはこどもに見える。

というわたしをこの人はまだこどものように見てなにかと <sup>たがい</sup> 覚 束 ながる。 <sup>みは</sup> 互 に眼を瞞目  
って、よくぞこのうき世の <sup>あらなみ た</sup> 荒 浪 に堪うるよと思う。

おいおい <sup>すご</sup> たがいに無口になって、ときには無口の一日が <sup>な</sup> 過 される。けれども心のつな  
がりの無い一日では無い。この人が眼で見よと知らず庭の初雪。この人が耳かたむける  
のき <sup>すずめ</sup> 軒 の 雀 にこのわたしも――。

むかし、いくたりの青年が、この人に <sup>きそ</sup> 競 い負けてわたしのまわりから姿を消したこと  
であろう。おもえば相当に、罪を <sup>にの い</sup> 担 うて居るこの人である。けれどもこの人の、いまの

静けさに <sup>にくし</sup> 憎 みを返す人があろうか。この人のわたしを <sup>かば</sup> 庇 い通した永い年月を他所  
ながら眺めてその人達も <sup>うらみ</sup> 恨 をおさめて居るに相違あるまい。もういくたりの児の父と

なあって。もし逢ってもその人達はこの人になつかしく <sup>あ</sup> 差 出 <sup>さしだ</sup> す手を用意して居るに相違な  
い。そういえばわたしとてよくもこの人を <sup>と</sup> 庇 い通した——おもえば氷を水に溶く幾年月。そ  
の年月に涙がこぼれる。

和服を着せれば幾日でもおとなしく和服を着ている。洋服を着せれば黙って洋服を着て

居る。この人はまるで阿呆<sup>あほう</sup>のようだ。そのくせわたしの着物にはいろいろと世話をやく。

がら<sup>がら</sup> 柄<sup>へら</sup>のものをわたしが着さえすれば悦<sup>よろ</sup>んで居る。ときには少女が着でもするよう  
な派手な着物を買ってさえ来る。わたしは訊<sup>き</sup>く「どうしてこんなものを」この人は答える

「うちには娘<sup>な</sup>が無いからお前に着せる。でないと、うちのなかに色彩<sup>さみ</sup>がなくて淋<sup>しみ</sup>しい」

いくら忠告してもこの人がたった一つよこさないものはフランス製の西洋寝巻<sup>ねまき</sup>だ。洋

行<sup>パリ</sup>からわたし達がかえるとき巴里に置いて来たこどもが訣<sup>わか</sup>れしなに父のこの人を買っ

く  
て呉れた寝巻だ。厚いラクダの毛。これをこの人は夏冬なしに寝巻に着る。夏は毒ですよ、

といってもききはしない。そして枕につくとき云<sup>い</sup>う「こどもはどうして居るかな」

子を思えばわたしとても寝られぬ夜々<sup>よよ</sup>が数々ある。わたしという覚束<sup>おぼつか</sup>ない母が

ようや<sup>ようや</sup> 漸<sup>いつ</sup>く育てた、ひとりのこども。わたしに許しを得て髪を分けたこども、一<sup>いっ</sup>しよに洋

行したこども。おとなびてコーヒーに入れる角砂糖<sup>き</sup>の数を訊いて呉れるこども。フランス

からひとりで英国のわたし達に逢<sup>あ</sup>いに来たこども。パリでは手を握り合<sup>あ</sup>ってシャリアピン

に感心したこども。置いて日本へかえってからは寄越<sup>よこ</sup>す手紙ばかりを楽しみにして居るわ

たし達、冬の灯<sup>あかり</sup>ともす頃はことさら巴里の画室で故郷をおもうと書き寄越した手紙を

す  
読んだわたしは直ぐにもこの人を起こす。いつも寝入ればなかなか起きないこの人がたや

すく起きる。そして涙ぐみつつふたり茶をのむ夜<sup>こがらし</sup>ふけ——外にはかすかな木<sup>こがらし</sup>枯<sup>こがらし</sup>の風。

---

底本：「愛よ、愛」メタローグ

1999（平成 11）年 5 月 8 日第 1 刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社

1976（昭和 51）年発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004 年 3 月 30 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。



## 52.新しい一夫一婦

宮本百合子

私たちが、恋愛とか結婚とかの問題について話す場合、特別その上に**新しい**という形容詞をつけて持ち出す場合、それは多かれ少かれ、従来理解され、また経験されて来た恋愛や結婚より何かの意味で豊富な、新鮮な、我々の生きる歓喜となり得るものを求めようとする心持が働いていると思う。

昨今のように、一般の社会状況が息苦しく切迫し、階級対立が最も陰性な形で激化しているような時期に、鬱屈させられている日常生活のせめてもの明るい窓として、澁刺として、新しい恋愛がどことなし人々の心に翹望されていることは感じられる。しかも、社会の現実が進んでいて、往年の情熱詩人、与謝野晶子が「みだれ髪」に歌ったような恋愛の感情は、今日の若い人々の心には住み得ない。ましてや「万葉」の境地においておやである。中産階級の急速な貧困化、それにともなって起っている深刻な失業、インテリゲンツ

ィアの経済的、精神的苦悩は、実際にあたって、恋愛や結婚問題解決の <sup>こんたい</sup>根 藩 をその時代的な黒い爪でつかんでいるのである。この事実を痛切に自覚しない若者は、恐らく一人もないであろう。

まず根底をなす社会機構が、もっとすべての人民にとって人間的に生きる可能性を与えるようにならない限り、窮極は社会関係の最も総合的な表現である恋愛や結婚の問題が、人類的な規範で、各人の幸福にまで発展せられないこともまた大多数の人々に、はっきり理解されていることであると思う。けれども、歴史がそこまで進む過程は実に単純でなく、容易でなく、多くの堅忍が要求される。今のように表面的にはそういう新たな歴史の建設的推進力が見にくくされているような時期には、窮乏化する小市民インテリゲンツィアが、確信をもって新たな次代の階級へ自身を移行させることが困難であると同様に、恋愛や結婚の実際に当たっても、本質的な発展は非常にされにくい状態にある。だから、気分的には **新たな**つよい、晴やかで情趣深い恋愛が求められているとしても、男女の社会関係の実体は、ふるい世界の鎖にからみつかれている有様である。

基本的な社会関係までを自分の問題としてとりあげる迫力がなく、しかも常に朗らかでばかりあり得ない気分の上でだけ新らしさを追求する結果、すでに映画制作者が巧みにも把えている古いものの **新らしげな扮飾**が、恋愛の技巧の上で横行する。互にまともな結婚もなかなかできない下級サラリーマンとウーマンとが、自分たちのゆがめられしぼられている小さい恋の花束を眺めて、野暮に憤る代りに、肩をすくめ、目交ぜし合い、やがて口笛を吹いてゆくような **新らしげな受動性**。あるいは「女の心」に扱われているような至極手の **こんだデカダニズム**など。それとても条件の自由なスクリーンの上での影である。われわれを埃っぽくとりまく実際のきのう、きょうを見わたして、**新しい**恋愛や結婚が、は

たしてブルジョア社会のどこに見出せるであろうか。

子福者小笠原伯爵の何番目かの娘さんが最近スポーツマンであった体躯肥大な某氏と結婚された写真が出ていた。月給は七十円だけれども、豪壮な新邸に住まわれるそうである。一寸名のあるスポーツマンになるといって、就職が楽だぜ。そういう功利的通念は、今や、オイ、御新邸を背負って華族の娘さんが嫁に来るぜ、という例外の一例とはなるかもしれないが、この結合を、社会的な評価で新しい内容をもつものであるといい得ないことは自明である。

われわれ個人の恋愛や結婚の幸福を、かくも不自由きわまるものとしている根本原因が、階級社会の諸関係である以上、真の新しい恋愛や結婚が内容・形態ともに、その諸関係のより合理的な組みかえのための闘争の過程において発展されつつあるのはむしろ当然ではなかろうか。今日は一見大差なく目前の困難に圧せられているごとくではあるが、それどころか、勤労階級の男女は一層ひどい封建性の下で家庭生活を営んでいるのであるが、新たな歴史の担い手である勤労階級の社会関係の必然から、見とおしとしては結局、プロレタリアートの勝利のみが、恋愛や結婚の幸福をも我々に与え得るものであることは実に興味深い事実であると思う。

ソヴェト同盟における新しい内容での一夫一婦制の確立は、男女の日常生活に作用する社会関係全体が、彼ら自身の犠牲多い積年の努力で健康な土台の上に組み直されて始めて、現実の可能となったのであった。

日本の解放運動は、広く知られているとおり、最近八九年間に世界史にも多く例を見ないほど複雑な困難を経験した。その困難な実践をとおし、次代の建設との関連において、恋愛・結婚観も徐々に高められて今日に至っていることを私たちは見落してはならぬと思う。

階級的な男女の結合というと、すぐコロタイの「赤い恋」が話題にのぼったのは、かれこれ七年くらい前のことであろうか。当時私はモスクワにいた。そして本家本元のソヴェト同盟では厳密に批判され、本屋に本も出ていないようなコロタイズムが流布することを知って、非常に苦しいような驚いた心持がしたのを今もはっきり覚えている。

コロタイズムは、全く一九一七年から二三年間の混乱期にふるいブルジョア社会の性的放縦の最後の反映、火花として現れた変則な社会現象であった。四五年以上も経過してから、日本において、一つの急進的な性関係のタイプとして、イデオロギー的にコロタイズムが流布したのには、またそれだけの社会的必然があったと思われる。

いわゆる、マルクス・ボーイ、エンゲルス・ガールという名ができたほど、当時は広汎に小市民層の若い男女がマルクスズムをうけ入れた時代であった。

それらの急進的な若い男女があふれるような活力と感受性とを傾けて、学内の活動などに吸収されて行った有様は、めざましいものであったろう。ところが彼らが研究会やなかでイデオロギー的に獲得した輝かしい未来の社会、両性関係の見とり図と、現実の日常生活との間には、少なからぬギャップがあったであろうことは、たやすく推察することが

できる。歴史的にも若々しかった彼らのある者は、性急にそのギャップを自分たちの身をもって埋めようとした。性的な欲望を満たすことは喉の干いた時一杯の水をのむにひとしいという言葉の最も素朴な理解が、恋愛、結婚に対する過去の神秘主義的封建的宿命論の反撥として、勇敢に実行にうつされた。個人生活と階級人としての連帯的活動とが二元的な互に遊離したものとして承認され、階級的な活動の邪魔にさえならなければ、個人的な生活の面では何をしようとするそれはその人の勝手であるという考えかたがあつたらしい。このことを、当時性関係の面で論議をかもされつつも強い勢力をもって一部に実行されていたコロタイズム類似の行動と照らしあわせて今日のみで見ると、その頃の運動の歴史がもっていた小市民的な制約性の性質がまざまざとわかり、深い教訓を我々に語るものであると思う。

三・一五、四・一六などの後、運動の困難と再建の事業が集注的関心となった時代には、コロタイズムは一応揚棄され、運動のためにはあらゆる**個人の感情、個人生活**の利害を犠牲にしなければならぬものであるという、いわゆる鉄の規律が一般の理解におかれた。

片岡鉄兵氏が一九三〇年に書かれた「愛情の問題」は、その点で非常に興味のある作品であると思う。闘争に参加している夫婦が部署の関係で別々の活動に従わなければならないことになり、妻である婦人闘士はある男の同志と共同生活をはじめ。男の同志はその女に性的な要求を感じ、「同棲しているのなら近所に変に思われぬ為にも、本当の夫婦になってしまわなければ不便でもあるし、不自然でもある」といい出す。女はそのことに同意できない感情で苦しむ。同志というより一人の好きでない男という心持がその共働者に対して爆発し、ある夜、良人である同志の家へ逃げ出して来る。すると、良人はその一部始終をきいて、静かに、眼を伏せながらいった。「お帰り。」女は「だって……」と了解しかねていうと良人は昂奮し、

「ここへ来て、そんな問題がどう片づくというんだ。そんなことで部署をすてて、それでこれからどうするというんだ？」

「だって——だって——」彼女も亢奮して一生懸命だった。

「あんまりきたなすぎるわ、まるで泥まみれじゃない」

「泥まみれになるのが厭か」彼は笑った。

「泥まみれも事によると思うわ」

「そうか。泥まみれの選り食いも好かろう。だがな、そんな問題が起るたびに部署をすてたんじゃ、限らない退却があるばかりだ。俺はそんな敗北主義には賛成しないな」

やがて若い階級的な妻である女は、自分が良人のところへかけ込んだことを自己批判し、終局に「物事が乱れるような結果になるかもしれない。けれどもそれが何だろう」あらゆるものを投げ出したものに貞操なんか何だ？　そして石川という共働者との場合には逃げ出した彼女は、「もっともっと自由な女性を自分の中に自覚していた、たとえ肉体は腐ってもよかった。革命を裏切らず、卑怯者にならずに自分を押しすすめてゆく途中で、どうせすてた体だ。もはや彼女にとって革命以外に大切にすることは何もないのだ。貞操ばかり

をこわれ物のように気にかけていたら、それでどうなるというのだ」と、可憐にも当時の不十分に心の深められていなかった鉄則に屈することが、描かれているのである。

片岡氏は、当時のブルジョア道徳が逆宣伝的に、階級闘争に従う前衛のはなはだしく困難な生活の中に、不可避免的に起ったさまざまな恋愛錯雑を嘲笑したのに対し、抗議としてこの小説を書かれた。そのことは、同じ小説の中の文句でもはっきり宣言せられているのであるが、今私たちがこの小説を読むと、何か一口にいい表わせぬ深い感慨に打たれざるを得ないのである。

この小説の書かれた時代でさえも、まだ**個人の感情**や**個人生活の利害**が、階級の感情や利害と一応きりはなされ、ある種の活動家にとっては別個なもののように考えられ得る時代であったこと、また、プロレタリアの世界観は、現実の問題として、階級対立の社会にあっては支配階級のイデオロギーの侵害を多く受けているものであり、特に日本のように封建性の重いきずなが男女を圧しているところでは、女の性的受動性、男に対する自主的な選択権が隷属的に考えられる習俗をもっているのであるから、新しい社会の建設者たちの努力は、運動内部においても絶えずさまざまな形で作用する、そういう過去の残滓との闘いの面にも払われなければならないものである。そのことを「愛情の問題」において作者が念頭に置かない一般の情勢であったこと、それらが私たちの心をまじめな感想にひきこむのである。

種々のゆがみをもちつつ、献身的な努力でともかく今日まで押しすすめられて来た運動の段階にあって、私たちは大きい成果の上に生きていると思う。

時間的に四五年といえは短かいがその間急速に激化した闘争は、広い範囲で運動内における女の活動家をも増大させ、実際の感情として、個人の感情利害と階級の感情利害とは、一致せざるを得ないところまで具体的な条件において高められて来ている。かつて長谷川如是閑氏は、個人的感情を階級の義務の前に殉ぜしめることを主題としたプロレタリア文学に対して、「新しいつもりか知らぬが、義理のしがらみに身をせめられる義太夫のさわりと大差ない」という意味の評をしたことがある。私はその言葉を心に印されて今なお記憶しているのであるけれども、そのような批評を可能ならしめた、階級感情の小市民的分裂は、この二三年間の画期的鍛錬によって、一般的に統一の方向にむかい、もとの低さに止ってはいないのである。

先月号の『行動』に婦人詩人中河幹子さんが、婦人作家評を執筆された。中で、私のことにもふれられ「獄中の人と結婚せられた心理はわかるようで不可能である。ああいうことはオクソクの他であるが、私は無意味であると思っている」と結論しておられる。

私はその文章をよんで、女同士の共感というものも歴史性の相異によっては、全く裂かれているものだという事実を面白く思った。そして自分に即さず一つの社会的な事実としてこの事を観察すると、私は、日本の現在の階級対立のけわしさや、そのきびしい抑圧の中からも何かの可能性をひき出し、たとえ半歩たりとも具体的に前進しようとする階級の、いよいよ強靱にされる連帯性、積極性の大小さまざまな情熱的な現実の内容は、遙に歌人

中河幹子氏の感情と芸術とを超えたものであることを痛感したのであった。

日本の現実には、階級的に共通な立場において結ばれた男女を日々夜々実にきびしく鍛錬しつつある。活動と抑圧との実際は、ますます深められ、ひろめられる階級的連帯性の上に立って、屈伸きわまりなく発動する男女の結合を教えている。いわば連帯性の薄弱な愛情は永年にわたって持ちこしてゆけない。それほど、風雨はきついのである。あるときはちりぢりとなって、あるときは獄の内外に、あるときは一つ屋根の下に、それぞれの活動に応じ千変万化の必要な形をとりつつ階級の歴史とともにその幸福の可能性をも増大させつつ進んでゆく一貫性は、もはや単に希望されているところの理想に止ってはいないのである。

目さきの気分まぎらわされ、スクリーンの上で、新しい恋愛や結婚の夢を夢と知りつつ描いている実に多くの若い男女も、一度、真に愛さんと欲する熱情に燃え、真に幸福を追求すれば、現実には、おのずから社会の矛盾をそれらの人々の前にさらし、希望するとなしにかかわらず、何かの形でその桎梏との決戦をよぎなくさせる。真によく愛すことと、真によく闘うことは、今日のような階級対立の鋭い大衆の不幸な社会にあって、全く同義語のような歴史的意義をもっていると私は思うのである。

〔一九三五年五月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十四巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 7 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第九巻」河出書房

1952（昭和 27）年 8 月発行

初出：「行動」

1935（昭和 10）年 5 月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 5 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 53.新しい卒業生の皆さんへ

宮本百合子

きょう、この会に出席して、みなさまにお目にかかれたいのを、ほんとうに残念に思います。去年の秋、過労して健康をわるくしてから、おはなしができないで、ずいぶんあちこちの学校からの御希望に添えませんでした。そういう学校からの方たちも、あるいは、新しい卒業生としてきょうの会に御出席かもしれません。それを思うと、一層ひとこと御挨拶をしたい心持がして、これをかいております。

みなさまはこの数日来、卒業し、送別会、上級学校の新入生としての歓迎会と、若々しい人生の一つの門から他の門へとおくぐりになりました。その間に、いろいろのことをお感じになっていることと思います。そのさまざまな感じのなかで、きょうに生きる若い女性として一番痛切に感じていらっしゃることは何でしょうか。

専門学校を卒業したかたは、それぞれ就職のために忙しい日を送られたでしょう。就職しない方の気持ちにはどんな思いがあるのでしょうか。この間から、わたくしはたびたびこういう不安をききました。やっと家のものを説得して専門学校は出たけれども、出てから先の生活を考えると、何ともいえない心持がして来る、だって、その先にある生活は、もう大体わかっているんですもの、と。そういう述懐をもっている方は、きょうの会に来ていらっしゃる方々の中に一人もいないのでしょうか。女学校を卒業する人からの手紙で、一番心痛の種になっていることは、もっと何か勉強したい自分の心と、お嫁入りということだけを先に見ていて、洋裁でも稽古していればそれで十分だと考える親たちとの意見のくいちがいです。この二つの悩みのどっちをとってみても、きょうの若い女性がどんなにゆたかな進歩した人生を欲しているかという事実と、反対に、日本の社会の現実はまだなかなか

若々しくどこまでも伸びようとする女性のねがいの枝を <sup>たわ</sup> 撓める状態におかれているという現実を語っていると思います。

きょうの若い女性に出あって、一つ、きわめて率直な質問をいたします。あなたは、あなたのお母さんが生きていらしたとおりの女の一生を御自分でくりかえして見たいとお思いですか、と。—そうきかれたとき、幾人のかたがイエスとお答えなさるでしょう。ほとんど大部分のかたは、母のいとしさ、母への思いやりいたわりとは別に、これまで日本の女がおかれて来た生活の現実を、重くおそろしいものに見ていられるのが事実でしょう。母はほんとに尊敬します。ある意味で実にえらいとも思う。けれども、わたしたちの人生は、もっと別なものであるべきだと思います。母たちのことをしみじみ思えば、母への愛のためにも、わたしたちはもっとちがった人生をくみだしてゆかなければならないと思う。私は、現実にも幾度もこういう話題について語る若い方々の意見をきいております。

現代の世紀には、世界じゅうの女性が、それをきらっている一つの言葉があります。それは「歴史はくりかえす」という言葉です。現代の世界じゅうの女性にとって、「歴史はくりかえす」という一つの言葉は、次のようないくつかの質問となります。

- 一、あなたは、また戦争がほしいですか。
- 二、あなたは、あなたの姉や先輩たちがそういう経験をして来たように愛人や良人を失いたいですか。
- 三、あなたがたは、未亡人が御希望ですか。

こういう不自然な質問に対して誰が、いやだ、と答えないでしょう。あなたがたは、つよい感情をこめてお答えなさるでしょう。わたしたちの人生は、まだ無傷です。傷ついたにせよ、若い命がすぐそれを癒す傷しかもっていません。呪うような質問なんかやめて！わたしたちは生きたいんです、つよく、たのしく、不屈に生きたいんです。きっと、そうしか答える言葉をもってられないと信じます。

若いあなたがたの心もちに立ってみれば、そうしか思えないのが本当です。でも、その真直な人生への希望を実現してゆく道は、一度か二度の、若々しくつよい感情表現だけで、きりひらかれてゆくでしょうか。特にこの日本で。——この民主化をねじまげる古い力のつよい日本で。——

わたしたち日本の明日の女性は、世界のどの国の女性にもまして、「歴史はくりかえす」という利口ぶったいいまわしに抵抗しなければ、どんな幸福も保証されません。日本の新聞は、なんと恥しらずに戦争挑発をしているでしょう。アメリカの科学者たちが、アインシュタインをはじめとして、人類の平和のための原子力の使いかたを主張していることは、くりかえして報道しないで、こんどは原子力よりももっと殺戮力のつよい放射線の雲をつくることが発明されたなどと、得意そうに報道しました。心あるアメリカの人々、平和を愛するアメリカの女性たちにとって、あんな記事は腹立たしいものだろうと信じます。愛する自分の国の科学力の発達、人畜を殲滅する能力などという点でほこられるとしたら、それは、よろこびよりも苦痛と恥辱を感じさせるのが自然です。

では、どうして、日本の新聞は、そういう誇るべからざる誇りを、毒々しく報道したりするのでしょうか。日本の若い女性が、心の目を見ひらいて理解しなければならないことがあります。それは、日本のなかには、決してファシズムと軍国主義の思想が**根だやし**になっていないということです。

ポツダム宣言を受諾した表面上、日本の民主化は、政府が世界に向って義務づけられた仕事です。けれども、みなさまは、どうお思いになりますか？ 日本の権力者は**しん**から民主的になろうと努力しておりますか。武装解除した日本として、最後の正義として絶対平和のまもりてとして立つ決心をしているとお思いになりますか？ わたしは、これに対する答えを、みなさんの言葉として伺おうと思いません。ただ、どうぞ、あなたがたの若く感じやすい心が、それに対して何と感じているか、ということ、しんから考えて頂き



とうございます。

一部の人は、自分たちが、もう一遍うまいことのやり直しとして希望する世界の悲劇は、そう簡単にひき起されるものではなく、人間はそれほど愚かではない、という事実を認めたくないようです。だから、戦争に関する非人道的な挑発は、日本の新聞にこんなにおくめんなくのるのです。その一方、戦犯被告と捕虜に対する残虐行為の裁判は続行されています。この面こそ強調されるべきです。

歴史はくりかえすものではありません。全く同一の現象が、同一の内容でくりかえされることは歴史上ないことです。まして、歴史は決してそのままのくりかえしでない、という事実をはっきり知り、あなたがたの愛人たちの頭の上にチョン髷はないのだという事実をしっかりとつかんだとき、若い世代が歴史そのものを発展させてゆく能力は非常に大きく発揮されます。

皆さまも御覧でしょうが三月二十五日の婦人民主新聞の論壇に「新帰朝者の言葉」という文章がありました。筆者の矢田喜美子という方は、どなたか存じませんが、この記事は、何となく私の心にのこりました。ヨーロッパから最近帰って来たある日本人が、今日の日本をみて、みんなの生活が無計画で、食えないといいながらたかいタバコをプカプカふかしている、政府はから約束をして、内閣がかわれればそのまますっぱかしている。雑誌をひらけば現実生活と縁のない理屈をこねている。「現実から足の浮いた、頭でっかちの日本人」というのが、その新帰朝者の感想だそうです。矢田喜美子さんはそれに同感していられます。

けれどもね、みなさま。たとえば、あなたがたが、ことしの新卒業生として、無計画でしょうか。専門学校を出て、就職するとき、職場の選びかたを**てあたり**ばったりした方があるでしょうか。実にきょうの若い真面目な女性は、精密なプランをもって、経済をやりくり、人生をくみだててゆく努力をしています。女学校を出て専門学校へ進もうという方々は、いわばまだ少女らしさの多い心の一方で、どんなに現実的に、学資のことを考えたでしょう。日本の中産階級は戦争によって、最も生活の安定を失いました。日本の女子教育はおくれているから、専門学校程度の勉強をするのは、これまでは中産階級の娘さんたちでした。本年ぐらいから、統計の上にもはっきり、専門学校を受験する女子学生の層がかわって、新円成金の娘さんがふえて来ています。普通の家庭の娘さんはアルバイトを考えずに、専門学校の生活を考えることは不可能になりました。アルバイトを二つもって医学の勉強をしているひとを知っております。彼女の二十四時間は何と計画的につかわれているでしょう。収入がどんなにこまかく割当計画されているでしょう。

その新帰朝者という人は、こういう若い女性のいじらしい大努力に立つ計画性にはふれていない生活環境にいるのでしょうか。彼の周囲には、ぐちをいいいいプカプカたかいタバコをすっている男たちがおり、彼のひらく雑誌は、抽象的論議だらけの旧型総合雑誌なのでしょう。そして、最もおどろくべきことは、政治の面で、内閣のからやくそくとすっぱかしに対して、わたしたちの抗議がどんな形で示されているかまるで知らないことです。

婦人労働者が平等の賃銀と母性保護を求め、女子学生が文部省のひどい月謝値上げに反対して、男子学生とともに、働きながら学べる大学を求めていることは、この新婦朝者に知られていません。日本のわたしたちは、憲法の抽象的な人権擁護の文句を、実質のあるものにしてゆこうと、計画的に努力していないでしょうか。

「日本人ほど抽象的な議論の好きな国民はない」という言葉に筆者は同感されています。それは一部には当てはまります。たとえば、みなさま御存知の経済安定本部——安本——あそこはたしかに抽象がすきです。その点で日本のわるい面の代表ですが、それは、新婦朝者のいうように、日本が思想とか主義とかいってられる時代でない、ということになるでしょうか。

日本には、社会生活のほんとの考えかたが民主的に訓練されていないからこそ、抽象論が多いのです。アルバイトしている男女学生の生活は、経済安定本部の抽象性の修正者です。日本のわたしたちは、考えるということを禁じられて来たから、きょうの混乱が一層めっちゃめっちゃなのです。第一、考えること、思想するというを、現実からはなれることと考へた古いブルジョア文化の分裂した理解こそ、非現実です。日本では、封建の習慣から、女性にはなおさら、むずかしく考えるにはおよばない、という態度が示されました。ところが、現実はどうでしょう。親にまかせ、夫にまかせていてよかつたはずの女の人生は、今日、ずっしりと女一人の肩にのしかかっています。考へて、理屈をいつている時代でない、食うためにだけ計画性をもつとすれば、面白いことに、食うための計画性そのものが、社会的な計画性と一致して来てしまいます。正業に従っている限り。だって、そうでしょう？ 千八百円ベースが公称二千九百円になれば税率も高く、いろいろの給与が包括されてしまって、若い人は結局千八百円よりかえって少ししかとれなくなるのですから。

同じ婦人民主新聞に、G・H・Qの労働課長シュークリフ女史が、今年義務教育を終った十三万人の女の子の就職について語っている親切な忠告を見くらべると、深い感情にうたれます。シュークリフ女史はいつています。日本の紡績工業者は、新卒業子女の大部分に当る十万八千三百六十八人を就職させようとしているが、日本の紡績工業界は永年、少女たちを搾取する傾向で世界に有名である。このような封建的な思想を違法とするいくつかの法律がきめられたが、少女たちも親たちもそれを知らない。知つていても、よく理解していない。今年の新卒業生が有害な制度の犠牲になるのを防ぐために、と職業安定法、労働基準法などの箇条を説明していられます。どのような職業につく人にもあてはまる——つまりことしから就職なさるみなさまのなかのある人々にもあてはまることとして。——

この場合、勤労という実際問題について正しく理解し考へる必要が示されています。ほんとにわたしはなにも考へずにただ家の中で働いて来たばかりだよ、という母の歎息を、若い世代がくりかえしたいと思つていないならば、そして、時間がなくて、ものを考へるどころじゃないわよ、というこんにちの若い主婦の苦悩をくりかえしたくないのならば、若い世代は自分で自分の運命の主人になって働ける道を発見しなくてはなりません。人生

の風波の間に、自分という可愛い小舟をホンローさせず、人間、女として自身の進路を見出してゆかなければならないと思います。

どうか皆さま、お元気に。よろこびが、あなたの前途にみちているように。苦しみと悲しみがあなたを囲んだとき、涙の浮ぶ瞳ながらやはり太陽はその涙にきらめいているように。人間の美こそ、女性の美の最高のものです。

〔一九四八年四月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十五巻」新日本出版社

1980（昭和 55）年 5 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十二巻」河出書房

1952（昭和 27）年 1 月発行

初出：「新しい卒業生のための集会」（婦人民主クラブ・民主保育連盟共催）へのメッセージ

1948（昭和 23）年 3 月 30 日開催

「婦人民主新聞」

1948（昭和 23）年 4 月 8、15 日号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 6 月 4 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 54.新しい躰

宮本百合子

この半年ばかりのうちに、私たちの生活におこった変化は、日本のこれまでのいつの歴史にもその例がないほど、激しいものです。日本は今、非常な困難とたたかいながら、一日も早く民主の国となり、平和の保証された国となり、世界に再び独立国として登場するための努力をはじめております。

これからの私たち日本人は、世界に恥しくない市民として、どういう風でなければならぬでしょうか。新しい躰の問題も、こういう広い、雄大な立場から考えられなければならないであろうと思います。

躰という字をみますと、美しく身をもつ、ことと思えます。美しく身を持した生活態度というのは、どういうことをさしているのでしょうか。

昔から躰というと、とかく行儀作法、折りかがみのキチンとしたことを、躰がよいとい  
あわただ  
いならわして来ました。しかし、今日の生活は 遑 しく、変化が激しく、混んだ電車一つに乗るにしても、実際には昔風の躰とちがった事情がおこって来ています。しとやかに、男の人のうしろについて、つつましく乗物にのるのが、昔の若い女性の躰でした。

毎朝、毎夕、あの恐い省線にワッと押しこまれ、ワッと押し出されて、お勤めに通う若い女性たちは、昔の躰を守っていたら、電車一つにもものれません。生活の現実が、昔の形式的な躰の型を、押し流してしまいました。

けれども、私たちの心には、やはり美しく、立派な生きかたをしたいと思う念願は、つよくあります。そうだとすれば、新しい躰の根本は、第一に、毎日の荒っぽい生活に、さらわれてしまわないだけの根深い根拠をもつものでなければならないということが分ります。そのように、しっかりした躰は、どこから、生れて来るものでしょうか。

親が子供を躰けるとき、先ず願うことは、体が丈夫であることの次に、正直な、公明正大な人間になって欲しいということであると思います。

子供たちが、正直な、公明正大な人間となってゆくために、果して現在の社会の有様は、ふさわしいものでしょうか。

子供たちが、いつもおなかをすかしていなければならないという、事情一つを考えてみても、子供のためにより社会の状態であるとは、いいかねます。国民学校の教育も戸惑っ

ている形ですし、住宅難の問題もあり、子供は可哀そうに、悪くなってゆくどっさりの条件の中に、さらされております。

こういう困難の中で、公明正大な人間を作ろうとするのは、理想論だといわれるかもしれませんが、しかし、子供は実に敏感です。

同じ辛苦をしながらも、親たちが、いつも明るい愛と勇気と、率直公平な物わかりよさをもって困難をしのいでゆくならば、子供たちは、困苦の中にも伸び伸びとして育つものです。これまでにしろ、誰が金持の子なら必ず立派だと考えていたでしょう。却って、あれは、金持の息子さ、という言葉には、人間として、余り期待しないという意味が仄めかされていたではありませんか。

躰の根本は、真面目に社会のために働く人間としての誇りの自覚であると、信じます。

こまかい実際問題として、躰の一つに欠かされないことがあります。それは、これからの日本人は、ひとから意見を問われたとき、これまでのように、あいまいに「サア、私はどうでもいいんだが——」という風な返事をしないようにならなければならないということです。問われたことをよく考えてみて、よいならよい、悪いならわるい。もし又、はっきり分らなければ、そのとおりに、はっきり分らないと答える習慣を持たなければなりません。今すぐ返事が出来ないから、待ってくれという場合もあるでしょう。いずれにせよ、明白に責任のある答えをする習慣を身につけなければなりません。

これまでの私たち日本人は、大事なことはみんな役所まかせで、肝腎の命さえ、自分の勝手にはなりません。役所は、小さな区役所から内閣まで、一度で用のすまないのが普通です。云ってみれば、これまでの私たちには、自分で自分がままならず、自分で自分のことがすっかり分ってもいなかったのです。従って、日本人の返事の曖昧さは、世界でおどろかれる特徴の一つとなりました。私たちは、この習慣をやめなければなりません。

はっきり返事をして、ひとの意見も落付いてきくという躰は、日本人にとって、思っているより大切です。

ひとがものを云っているときには、わきから口を出して邪魔をしてはいけません。自分の気に入らない意見でも、しまいまでチャンときいて、堂々とそれを討論してゆく人間にならなければなりません。

自分で考えてみる力を、守り立ててやりましょう。

自分の思いつきを大切に、それを実現してゆく方法を、根気よく見つけてゆく人間を作らなければなりません。

人間の社会には、いろいろの行きちがい、矛盾、醜いことがあるけれども、最後のとこ

ろへゆけば、人間は道理に従って生きるものである、という、動かすことの出来ない天下の真理を、稚い心のうちに明るく、しっかりと植えつけてやらなければなりません。

そのために母親は、自分の都合でばかり子供を叱らず、忙しくても辛抱して、とっくりと子供の言い分をきいてやり、親の思いちがいであったならば、さっぱりと、母さんが間違えていてわかったね、ごめんよ、と云ってやるのが大切です。こういう親の扱いこそ、子供にとっていいつくせないよろこびであり、尊敬であります。子供が将来、独立人としての見識をもち、同時に、美しい寛大さと、威厳を失うことのない譲歩とを学ぶ、みなもとです。

日本が民主の国にならなければならない、その大切な毎日の発展は、こういう母たちの心がけのうちに、かもされてゆくのだと思います。

このように明るく、親も子も同じように、道理には従うというきちんとした習慣で育てられれば、男の子も女の子も、おのずから動作もしつとりとし、正しいことに従う素直さをもち、互に扶け合う気風も出来ます。

躰にも筋がとおる、ということが大切です。手足の上げおろしを細々と、やかましくいって、肝腎の性根に及ばない躰は、最悪です。

今日男女の青年たちの或るものが、形式ばった挨拶だけは上手で、一向に公德心も、若者らしいやさしさもない心でいるのは、形式一点ばりであった軍事的教育の害悪です。

女の子だからと云って、女のくせに、と禁止ばかり多い育てかたをする時代でないことは、もう申すまでもないことです。

人間を育てる根本の精神では、男の子も女の子も、同じであってよいと思います。

女の子は、愛嬌がないときらわれる、意志がつよいと敬遠される、と、受け身にばかり育てられた日本の若い女性が、今日、どのような姿で、この古い日本の躰の欠陥を社会に示しているのでしょうか。

世界の人が、日本の謎の一つとする「日本人の笑い」というものがあります。本当に嬉しいこと、おかしいこと、楽しいことが一つもないのに、日本人はいつもぼんやりした微笑を、顔の上に漂べている、と、不思議に気味わるく思うのです。

言葉の通じない外国人に、こちらのおだやかな気持を通じさせようとするのかもしれない。けれども、ニヤニヤしないでも、真実のこもった親切な表情で十分心もちは通じます。

長い歴史の間、過去の日本人が、上から抑えつけられてばかりいた結果、習慣となった卑屈な愛嬌笑いは、男にも女にも、不用です。

私たちは、そういう日本人であることを、自分に拒絶しなければならないと思います。

ところで、躰の根本を、そういう風なものとして考え直して来たとき、新しい躰は、果して子供たちにだけ必要なものであろうかと、自分に向って質ねたい心持になりました。

私たちは、自分のうちのものは、実によく気をつけて大切に使い、清潔に保ちます。しかし、汽車の中をよごすので有名なのは日本人です。公共建物の洗面所その他を、よくこわし、よくよごしばなしにすることでも有名です。

これは、わたしたち日本の国民が、すべての公共物を自分たちの計画と資力・労力で建て、それを自分たちで愉快地使う場所とする習慣がなかったからです。つまり、社会万端の施設も、民主の方法で利用されるものでなかったからでしょう。

せまい、個人的なまとまりよさだけを眼目とする躰は、社会全体の幸福を目ざす、大きい着眼点に移されなければなりません。

愛の躰は、社会に対する愛と識見の、よりひろい土台の上に立てられるべきであろうと思います。

〔一九四六年四月〕



---

底本：「宮本百合子全集 第十五巻」新日本出版社

1980（昭和 55）年 5 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十二巻」河出書房

1952（昭和 27）年 1 月発行

初出：NHKラジオ

1946（昭和 21）年 4 月 19 日放送

「女性の歴史」婦人民主クラブ出版部

1948（昭和 23）年 4 月発行

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 6 月 4 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 55.新しい文学の誕生

## ——若い人に贈る——

宮本百合子

文学に心をひかれる人は、いつも、自分がかきはじめるより先にならず読みはじめている。しかも、わたしたちがはじめて読んだ小説や、詩はどんな工合にして手にふれたかと云えば、それは十中八九偶然である。そういう人は大抵よむのがすきで、年の小さいときからいつとはなしに、あれやこれやの文学をよんで来ているのだが、はじめて読んだ小説をいまわたしたちがわきまえているような意味では、小説だとさえ知らずに読みはじめ

たような場合も多いと思う。ふとよんだものに不思議にひきつけられ、<sup>こうし</sup> 犢 がうまい草にひかれてひろい牧場の果から果へ歩くように、段々そういう種類の本をさがして読みすすんで、あるとき、ほんとに自分は文学が好きなのだった、と自分に発見する。こういう過程は、私たちのすべてが経験していることではないだろうか。

文学の発端とでもいうような、こういういきさつを、思いかえしてみると、わたしの少女時代の遠い記憶のなかには、一つの棚があって、そこにゴタゴタにつみこまれていた無

数の雑誌や本が浮んで来る。文芸倶楽部、新小説、ムラサキ、古い女<sup>じょかん</sup>鑑という雑誌。

はほん  
浪六の小説本。紅葉全集の端本。馬琴の「白縫物語」、森鷗外の「埋木」と「舞姫」「即

みなわしゅう  
興詩人」などの合本になった、水泡集と云ったと思うエビ茶色のローズの厚い本。『太陽』の増刊号。これらの雑誌や本は、はじめさし絵から、子供であったわたしの生活に入ってきている。くりかえし、くりかえしさし絵を見て、これ何の絵？ というようなことを母にきいているうちに、年月がたつままに、その中のどれかを偶然によみはじめて、少女雑誌から急速に文学作品へ移って行った。

わたしたちの文学にふれはじめる機会が、多くの場合は偶然だ、ということについて、深く考えさせられる。わたしの母が本ずきであったために、父の書斎になっていた妙な長四畳の部屋の一方に、そんな乱雑な、唐紙もついていない一間の本棚があった。わたしの偶然は、そういう家庭の条件と結びついたのだったが、ほかのどっさりの人々の偶然は、どこでどんな条件と結び合うのだろう。

マクシム・ゴーリキイの「幼年時代」は、幼年時代について書かれた世界の文学のなかで独特な価値をもっている。あれをよむと、おそろしいような生々しさと、子供だったゴーリキイの生きていた環境の野蛮さ、暗さ、人間の善意や精力の限りない浪費が描かれて

いる。その煙の立つような生存の渦のなかで、小さいゴーリキイは、自分のまわりにどんな一冊の絵本ももたなかった。ゴーリキイが、はじめて、本をよむことを学んだのは、彼が十二三歳になってヴォルガ河通いの蒸汽船の皿洗い小僧になってからだった。同じ船に年配の、もののわかった船員がいて、一つの本をつめた箱をもっていた。彼は少年のゴーリキイと一緒に、自分の読み古した本をよみはじめ、やがて、ゴーリキイが勝手にそこから本を出して読んではかえして置くことを許すようになった。そして、その男は、ゴーリ

しばしば  
キイに 屢々 云った。ここはお前のいるところじゃあない、と。

ゴーリキイの人生に、こうして、入って来た文学は、大したものではなく、ロシアの民衆の間にある物語の本だった。それにしても、ゴーリキイは、本を読むということが、自分の生きている苦しさや悩みを救い、またその苦しさや悩みについて、ほかのどっさりの人はどう感じ、考え、そこから抜け出そうともがいているかということについて知り、慰めと希望とよろこびを見出したのだった。

この本をよみはじめた時代の思い出のなかで、ゴーリキイは、きょうのわたしたちにとって極めて暗示にとんだ回想をしている。わたしの生活はこのようにあんまり野蛮で苦しかったから、読む本は英雄的なものや、空想的なものが面白かった。そういう本をよんでいる間は現実の苦しさからはなれることが出来たから、と。そういう意味を書いている。このことも、わたしたちが文学にふれる機会が、多く偶然からはじまる、という事実とともに、考えさせられる第二のことである。

資本主義の社会では、出版という仕事も企業としてされる。資本主義の企業は、本質として利潤をもとめている。一定の量の紙をつかって一冊の雑誌をこしらえるために或る資本がいる。その投資を出来るだけ利まわりよく回収するためには、一冊の雑誌が高くてもどっさりうれるようにしなければならず、売れる、ということのためには、日本の人口の大部分を占める人々——大衆のこのみに合うことが必要となって来る。大衆のこのみとはどういうものだろう。こまかくしらべれば大変複雑で、音楽好き、映画好き、スポーツ好き、様々ではあるが、大体、人間として一応興味をひかれることがらというものはある。衣、食、住のこと、それから恋愛など、愛と憎しみの諸問題。その素朴なくつかの主題は、その社会がそのときおかれている歴史的な条件で、さまざまに表現をかえて来る。衣、食、住、愛憎の問題だけを見ても、戦争中は、人間的な欲求の一切を抹殺した権力によって、そういうテーマは、すべて自然の文明的な主張をかくし、軍国主義への献身だけが強調された。小説にしろ、そうだった。大衆のこのみは、そこに追いこまれ、すべての出版物がそういう傾向であった。

だから、そういう時代に本をよみはじめる年ごろになった若いひとたちは、偶然よんだ小説が、竹田敏彦であったり、尾崎士郎の従軍記であったり、火野葦平の麦と兵隊であったりした。本をよむことそれ自体が、一人の人間の生活の環のひろがりの意味するし、心

の世界の拡大を意味することは、ゴーストの思い出に云われているとおりだから、あの時代、ひとは、一冊の本をよめば、よむほど、その偶然によって戦争気分へひきこまれた。戦争について考え直して見ようとする本、戦争について日本の権力が語るひとりよがり不審とする論文、そういうものは発表されなかったのだから。

さて、戦争が終って、ポツダム宣言が受諾され、日本は人民の幸福のための民主国にならなければならないことになった。三年経った今日、わたしたちの周囲に、いまはじめて、文学にふれてゆく人のために、最も多い偶然として氾濫している雑誌、小説類は、どんな種類のものであろう。衣、食、住、愛憎の主題に戻って、今日の出版物の多くを眺めると、戦争が社会の安定を破壊し、個々の人の物質と精神のよりどころを粉碎した、その乱脈ぶりと、傷口とが、まざまざ反映している。既成の文学のなかで、愛憎の問題は、人間の発展のモメントとして、まともに扱われる基礎を失ってしまった。こういうテーマに熱中していたのは中産階級の作家であり、文学であり、またその読者であったのだが、今日、日本の中産階級というものの実態はどうだろう。経済的に破滅した。経済上、精神上の闇が

うめ  
洪水のように、最もよわいこの社会層をつきくずしている。戦争中、非人間的な抑圧に 呻  
いていた気分の反動で、すべての人間としての欲望をのばしたい衝動がある。その半面、  
経済的な社会生活の現実では、その激しい衝動を順調にみたしてゆく可能が奪われている  
から、虚無的な刹那的な官能のなかに、生存を確認する、というようなデカダンス文学が  
生れた。封建的な人間抑圧への反抗ということも、理由とされているが、それは、その第  
一步、第一作の書かれた動機のかげにあった一つのぼんやりしたバネであったにすぎない。  
二作、三作、ましてそれで儲かって書きつづけてゆく作品のモチーフになってはいない。

わたしたちのきょうの生活をリアリスティックに見つめれば、人民の殆んどすべてが日  
向と日かげの境で暮している。わるいことといいこととの**まだら**を身につけて生きざるを  
得ない状態である。今日の生活としてだれしもやむを得ないことは、その程度のちがいで  
だけであるところまで迂りこむと、本質をかえて社会悪となり、また犯罪的性格をもつよう  
になってしまう。公然の**うそ**が、わたしたちの生活にある。**うそ**であることを政府も人民  
も知っている。だけれども**うそはわるいこと**とも知っている。モラルの基準もぐらついて  
いる。百万円の宝くじに当たった人はバクチ打ちとして捕えられない。けれども、バクチは  
千葉県の競馬場でも大騒動して検挙されているし、新宿もそれでさわいだ。五十円の宝く  
じを買って、百万円あたる、ということはバクチでないだろうか。勤労の所得と云えるか  
しら。政府が赤字やりくりのために思いついて、先ず五十円券をどっさり買わせ、それで  
第一段儲け、ついで五人のひとに百万円あてさせて、こんどは売れのこりに一本あったか  
ら四百万円だけはらって、それが何かの形でまた逆にかえって来て、金まわりを助けてゆ  
く。こういうことは、わたしたちの常識にとっては異状に見える。堅実に、堅実に、耐乏  
して生産復興と云われ、勤労者はその気で生きている傍で踊子たちが宝くじのぐるぐる廻  
るルーレットを的に矢を射ている。しかし、きょう勤労するすべての人に企業整備の大問

題が迫っている。税の問題がある。

社会のこういう矛盾と撞着、それをみんなが知っているくせに、いちいちおどろいたり、苦しんだりしないような顔でいるくせになってしまった。しかも心は晴れていない。ロシア文学の古典の中でも、いま日本に流行しているのは、プーシュキンやゴゴリの作品でなく、その文学の世界が、永久の分裂で血を流しているドストイェフスキーであるという事情には、いまの日本のこの社会的な心理がかかわっている。解決のない人間の間の利害や心理の矛盾、無目的な情熱の絡み合いの世界を、坂口安吾より太宰治より濃厚に戦慄的に描き出しているドストイェフスキーの文学は、目的のはっきりしない社会混乱のなかに生きているきょうの若い人の心をひきつける。その相剋の強烈さで。その暗さの深さで。自分が感じている明るくなさや、ひとも自分も信じがたさを、刺戟し、身ぶるいさせる自虐的な快感でひきつけられているのだと思う。

ここで、再びわたしたちは、文学にふれてゆく機会が偶然であるという事実と、ある文学にひきつけられるモメントの問題に立ちかえてみる。

こういう現実の事情で、人々のうちにある文学の種や芽は全く今日戦争後の廃墟の間にばらまかれている有様だと云えると思う。わたしたちが激しい現実を生きてゆく道で、偶然に接触するいろいろの現象を箱入り風にあらかじめ選んでゆけるわけではない。肉体とともに精神も、実に荒っぽくもまれる。エロティックなものにもふれ、人格分裂の風景にふれる。その、それぞれに反応する生きた心を生きている。その波風の間で、では、何がわたしたちの日夜、まともに伸びたいとねがっている人間性の砦となり、その人の文学の足場となってゆくのだろう。

平凡だと思われるほどすりへることのない一つの真実がある。それは、一人一人のひとが、自分のまともに生きようとする願望について不屈であることである。過去の文学談では、こういう問題は、文学以前のことという風に扱われる習慣があった。いまでも、そういう流儀はのこっている。しかし、それは間違っている。

わたしたちが、ほんとにこの社会でまともに生きようとするとき、現実とその願望との間には忽ち摩擦がおこって、いやでも応でも私たちに、自分のこの社会での立場、属している階級の意味を目ざまさせる。勤労して生きているものの人生の内容と、徒食生活の男女の生活内容の絶対のちがいは、一つの恋愛小説をよめば、まざまざとしている。二十四時間を、八時間から九時間以上職場にしばられ、千八百円でしめつけられつつ家族の生活をみている正直な勤労者の青春にとって、きょうの猟奇小説と、ロシアの人民が暗黒のなかに生を苦しんでいた時代のドストイェフスキーの世界は、何を与えるだろう。しかし、偶然は、そういう作品をも或る休みの日の夜、人々の手にとらせるのだ。その人は、何の気もなしに読む。そして何と思うだろう。どんな感じがしただろう。

勤労して生きるすべての人の新しい文学の胎動と可能のめざめは、この単純な、**どんな感じがしたか**、というところに源泉をもっているのである。読ますことは読ますが、どう

も。そういう感じもある。ドストイェフスキーってなるほど大したものらしいが、しかし、カラマゾフの世界が、これからの現実に再びあるとしたらどうだろう。社会の歴史は、どっち向きに動くはずのものなんだろう。そういう疑問もあり得る。

どれも、文学の作品批評とは云えないかもしれない。そんなにまとまっではない。だけれども、どだい文学というものは、非常に複雑な世界の底を、びっくりするほど単純で、しかもまじりけないもので支えられているのがその本質である。それは、どうしてだろう？ という疑問と、何故？ という問いかけである。バルザックの世界、トルストイの世界、小林多喜二の世界の底に、一つの、どうして？ が存在する。この根本的な疑問を、それぞれの作家が、どんな歴史の見かたで、どんな歴史のなかで、どんな階級の人として、どんな方法で追究し、芸術化して行ったかが、作品形成の一つの過程である。

きょう作品を読む人々は、自分が現代の日本の現実の中に働いて生きるものとして生きているという社会的な本質にたって、まともに生きようと欲している、という人生のテーマと、そこにある感覚をしっかりとって、ふれる文学作品の一つ一つについて、心にひきおこされる直感的な判断を大切に保って、それを社会的に文学的に成長しつつ深め展開させて行ってこそ、はじめて、その人としての文学が生れる**めど**がつかまれて来る。そういう心でよんでみれば、古典から現代作家の、国内国外のあらゆる作家が、それぞれに見事な業績をのこしながらも、ほんとに自分の云いたいこと、あらわしてみたい心、描きたい情景だけは、誰もかいていないことを見出して、どんなおどろきと、新しい世界の発見にうたれるだろう。

多くの文学作品をよんだあと、人はやがて自分で書くようになる、という事実は、決してただ書きかたがわかった結果ではない。他の人々が精神こめて、一生かかって芸術化した世界は、これほどどっさりあるのに、こんな小さい自分の人生であっても、やっぱりほかの誰にもかかれていず、自分しか書けないことがあるのだ、という発見こそ、その人を謙遜な勇氣にふるいたたせ、人生の豊かさや人間社会の歴史の貴重さに感動させる。歴史が前進しないものなら、過去の天才は文学のテーマをかきつくしてしまえたらう。その人が自分の社会的・階級的な人生を発見したからこそ、そこにおこるすべてのことの人間らしい美醜、悲喜の歴史的意味を知り、自分をもある時代の階級的な人間の一典型として、客観的に描き出してゆく歓喜を理解するのである。

わたしたちの人生と文学の偶然はこうして、偶然から意味ふかい必然に移ってゆく。リアリズムは、人間の生きる社会とその階級の歴史と個人の複雑な発展の諸関係を、社会の歴史と個人の諸要因の総合的な動きそのものの中で現実的に掴もうとする本質によって、文学の最も強固な手法である。リアリズムが人間の芸術表現にとって大地のような性質だということは、すべての架空な物語、幻想をとりあげてしらべてみるとわかる。どんな虚構、どんな作為のファンタジーにしても、それが文学として実在し、読者の心に実在感をもって受け入れられるためには、力をつくして、そのファンタジーや、ディフォーメーションにそのものとしての現実性を与えることに努力しているのである。

〔一九四八年三月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十三巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 11 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十一巻」河出書房

1952（昭和 27）年 5 月発行

初出：「勤労者文学」創刊号

1948（昭和 23）年 3 月

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 4 月 23 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。



# 56.新らしき文学

坂口安吾

その本質に就て

近年、新興芸術の名に於て幾多の文芸運動が試みられてきたが、徒らに皮相の新奇を追うほかに為すところを知らなかった。従来幾多の此の如き新（？）文学運動の完全な失敗は、「新らしき」を誤らしめ、同時に文学を過らしめた。

\*

私の考えによれば、芸術は反撥精神のあらわれであり、時代創造的な激しい意志によって為さるべきものであると思われるに拘らず、最近日本文学の新しい傾向は、老人の趣味に一致することを最も純粹と見做し、最も無気力な、自慰的な人間探究に過った亢奮を感じている。不動のもの永遠のものは已に亡びている。われわれは変化の中に、発展の一過程の中に、反撥から創造へ向う人間を探究し創りつづけてゆかなければならない。

然し、日本文壇の此の過った新傾向は、実は常軌を逸した従来幾多の新芸術運動の浅薄きわまる新らしきが、人に新らしきの本質を疑わしめた罪による。

\*

昔アリストテレス以前には、人々は虹に三色のみを識別した。更に昔は人々は色感に於て赤と黄の二色を識別し得たにすぎない。リグ・ベエダの時代には赤と黒は殆ど識別されておらず、サンスクリットの全時代に於て緑は完全に発見されておらぬ。(Hugo Magnus. *Sens des Couleurs*) 我々以後の時代に於て、さらに多くの分類が色彩に就てなされることは予想に難くない。これは単に感覚に於ける新らしきの一例にすぎない。

人物の僅かな身振りによって、何らの説明なしに複雑な感情を判断させようとする文学上の一技術は、恐らく映画以前には存在せず映画以前の老人には理解できまい。

然し、上述の如き新らしきは尚末節にすぎない。そして我々の文学は此の程度の愚劣な末梢的新らしきによって毒されすぎた。

\*

文学に形式を提出することは末梢である。言葉や形式の新様式はそれも新らしきには違いないが、本質的なものではない。小説家の観念は直接言葉の形に於て形成し、画家の観念は色彩の組合せに、音楽家の観念は音の組合せに於て形成する。小説家の観念は言葉の形に於てのみ結晶するが、問題はあくまで「観念」であって、言葉そのものではない。言葉、音、色彩 etc. は芸術家にとって単に当然な基本条件であって、観念そのものの必然性に動かされぬ単なる言葉や形式は芸術活動以前に属する。単なる言葉や形式を問題にするが如きは芸術家に最大の恥辱である。

\*

文学の真の新らしさは此の如き末梢的装飾によって瞞着さるべきでない。同時に此の如き末梢的装飾を新らしさの全てと誤解し、軽率に本質的な新らしささえ背を向け去った現下の現象は、これ又甚だ非文学的な現象と言わねばならぬ。なぜなら、「まことの新らしさ」は同時に文学の本質であるから。

年齢には年齢の、若さには若さの果実がある。そして時代に時代の果実がある。進歩と退歩に拘らず、全ては常に変化する。変化それ自らが常に厳然たる新らしさであるが、文学は変化の流れに押し流されるものではなく、時代創造的な「意志」によって、変化に方向と意志を与え得るものである。

### 文学は常に反逆だ

文学の領域は言うまでもなく個人である。個人を離れて文学は成り得ない。然し不滅の人間、不変のエゴは形而上学と共に亡び去っている。我々の個人は変化の一過程に於て歴史に続き永遠につながる。然し文学は単に変化への、そして時代への追従ではない。変化に方向を与える能動的な役割をなすものが文学であって、時代創造的な意思なくして文学は成り立たぬ。社会は常に一つの組織の完成を意味し、科学的なものであるが、個人は常に破壊的、反社会的であり、文学的である。文学は科学の系統化に対して、個人の立場から反逆的な役割をなす。

\*

由来、文化は個人生活の内容（幸福と言ってもいい）の減少を条件として出発し、進化する。かく圧迫を余儀なくせしめられた個人のために、その血と肉の人間悲劇を代弁し、反逆しうるものは文学である。文学は血と肉に彩られた文明批判の書である。科学に、社会に、問題を提出するものである。文学の立場からすれば、科学は文学以前のシステムにすぎない。

\*

私の考えによれば、文学の作用は常に反逆的、闘争的、破壊的である。文学の精神は現実へ反撥する時代創造的な意思であると述べたが、時代創造的な意思は、文学に於ては反逆的、破壊的な形に於てあらわれる。進化の過程に於て個人は常に反社会的、即ち破壊的、闘争的な形を示す。建設は常に社会的、科学的なものである。文学の破壊作用は破壊によって内包の増大を促し、建設の萌芽的役割を務めることによって足りる。

文学は常に問題を提出する。文学そのものに解決はない。なぜなら人間の血と肉は歴史の終局に於て解決すべきものであって、概念の中に解決すべきものでない。

\*

現在プロレタリア文学は、その反逆的な闘争的な点に於て一つの意義と役割をもつが、人間を安易に仮定し、文学の唯一の領域たる個体を、血と肉に縁のない概念の中へ押し去り曖昧化し、科学への御用的役割を務めるのは凡そ意味ない。文学本来の面目に反している

る。

現在ソヴィエト・ロシヤに於て文学に課せられた一つの課題は社会的な感情を探り出し書きあらわすことであるというが、文学の反逆的な役割を巧に瞞着した為政者の手腕もさることながら、漠然として社会感情を探しあぐねるロシヤ作家のだらしなさは滑稽である。文学は永遠に政治に対する反逆である。個人のために血と肉の人間悲劇を語らなければならない。

日本のプロレタリア文学は一つの宣伝文として或いは有効である。なぜなら科学と協力し妥協することによって、一つの昂奮をもたらすことはできるから。しかしそれは文学本来の昂奮でなく、感銘でない。寧ろ完全に非文学的なものである。やがて政治の御用文学となる**それ**である。それはもはや文学でない。

### そのものによる批判

芸術は反逆精神のあらわれであり、時代創造的な意志によって出発し、同時に意義をもつものであることを述べた。

芸術は常に観念を変形せしめる。常に新らたな観念に拠って出発する。

それ故、芸術の一作品は、他の作品に比較して批判さるべきものではない。古い観念に順って批判してはならない。芸術は常にそれ自身として批判されねばならぬ。

\*

一フランス人の言葉によれば、ランプを批判するのに椅子の効用に順って批判するのは滑稽であると。このランプは腰かけることができない。それ故このランプは良いランプでないと言うのは滑稽である。然し此の滑稽は、他の形に於て、我々の日常に極めて普通に横行している。ランプは常にランプ自身の効用に順って批判されねばならぬのである。

私は古い観念によって私の作品が判断されることを好まないばかりでなく、私の作品を、古い観念を固執する人々におしつけようとは決してしない。新らしい芸術は新らしい人々のために書かれている。現実をたのみず、自ら変化することを望む好学的な、そして私流の言い方で言えば、反逆的な、闘争的な、破壊的な人々のために書かれている。純粋な青年のために書かれている。

\*

然し芸術は理論でない。芸術は理論的に説明し得るものではない。若し理論によって説明し得る芸術があるとすれば、それは本来芸術ではなかったのだ。芸術は芸術それ自らのもつ感銘によって読者に訴えるものだ。

私は昨日までの二日間に於て、新らしき文学の本質問題を述べ、従来の末梢的な新興文学と称するものを否定し、プロレタリア文学を否定し無気力な老人趣味的文学を否定した。そして、反逆的な、それ故、時代創造的な意思によって、血と肉の人間悲劇を語るものが文学であることを述べた。私に許された紙数は至極簡単な、いわば骨組的な荒筋を述べる

ほかに仕方がなかったが、然したとえ幾十枚の紙数を許されたにしても、理論は結局理論でしかない。いかほど具体的に詳述するとしても、芸術家は芸術以外に武器はない。

\*

今度我々九名の同志が新らしき文学の建設を意図して「桜の会」を結成し、機関紙「桜」を発刊した。我々の仕事はこれによって其の実際を知っていただきたい。

私は確言するが、真実の文学は今我々の仕事のほかにない。

諸君は私の此の言い方を愚な宣伝と冷笑してはならない。懷疑それ自身は別である、突きつめるところ、自信なく、且つ自己を主張せんとする因循な術学的な気取りはもう私に必要でない。我々の時代には飛ぶ矢は常に飛んでいる。身をもってなす仕事には悔なく自分を主張しなければならぬ。雑誌「桜」を読んでくれたまえ。ここに真実の新らしき文学がある。

『時事新報』昭8・5・4～6

---

底本：「坂口安吾選集 第十卷エッセイ 1」講談社

1982（昭和 57）年 8 月 12 日第 1 刷発行

初出：「時事新報」

1933（昭和 8）年 5 月 4 日～6 日号

入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース

校正：小林繁雄

2006 年 9 月 16 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 57.新しき夫の愛

## —— 牢獄の夫より妻への愛の手紙

若杉鳥子

山内ゆう子——私は一人の新しい女性を紹介する。見た処彼女はまだほんの初々しい、はにかみがちな少女に過ぎない。だが少し相對して話していると、聡明な実にしっかりした女性であることが解ってくる。

彼女の生まれは九州だそうだが、父が地方長官をしていた関係で、女学校を東北のA市で卒業した。父の没後は、母と一緒に東京の郊外に棲み、女子\*\*に通学していた。卒業後は独自の生活を立てながら、医学の研究を続けてゆく決心でいたが、美しい彼女のもとへは女学校時代から、結婚の申し込みが殺到していた。それに、財務官をしている叔父夫妻までが、彼女のお嫁入りの世話に躍起となっていた。——だが本人はというのに、ようやく時代にめざめつつある彼女が、先ず周囲を見廻す時に、真面目に問題とするような男は一人もいなかった。

階級闘争の激烈な時代に生きながら、この有産階級の男達は、脚下に迫っている明日の没落の運命を少しも知らない。或ものは刹那の歓楽を追い、或ものは醜い利己の欲望に駆けめぐっている。そういう男達の無智に対して、彼女はひそかに絶望していた。

丁度そうした時、彼女の眼の前に、実に長い間待っていた人のように現れて来た人があった。それこそ、これから展開してゆく手紙の主人公——左翼の闘士Eである。

Eと彼女が知ったのは、ある洋画家の処だが、Eと知り合いになると間もなく彼女は、Eの関係している\*\*\*\*の仕事を手伝わして貰うようになったが、そのうち、それは実に周囲の者も気がつかない程急速なテンポで二人の恋愛が進んで行った。だがゆう子が住所不定のEと結婚する為には、その準備金が必要なので、彼女は今まで、ブルジョアの娘としての自分を飾っていた、着物や装身具一切を持ち出して、母に内密で多額の金と換えてしまった。

そうやって、家出娘のゆう子と住所不定のEとが、やっと一軒の隠れ家をみつけて落ちついたのだが、それで決して彼等の恋愛は、ハッピーエンドを告げるのではなかった。

問題はむしろこれからなのである。

一九二九年夏、荒れ狂う暴圧のもとに、最初の\*\*\*\*が\*\*停止に会い、関係者全部が検挙投獄されたことは、日本のプロレタリアートの\*\*\*\*史上に特筆さるべき有名な重大事件であるが、丁度、彼等の結婚もその時期（とき）に当たっていた。

そして二人がある小路の奥に巣を作った四日目の朝、Eは同志との連絡をとりに出たき

り帰って来なかった。後で、Eがある同志の家の近くで捕まったということを彼女は、知ったのだが、何にしてもEとゆう子が一緒に暮らしたのは、たった三日間だった。現在の下(もと)に繋がる限り何時迄待てば解放される彼であるのか——誰にもそれは解らない。まだ処女の如く、若く美しい三日間の妻だった山内ゆう子は、その後どんな道に生きてゆくか？ 或いは白髪の日まで夫を待つ妻であるだろうか？

これでひとまず山内ゆう子とEとの紹介を打ち切って置く。

革命後のソヴェット・ロシアに於いては、コロタイの恋愛観等にも現れた乱婚生活が一時盛んであったということだが、それは今日ではもう、反動的な頹廢的な何等××とは縁のないものとして批判し尽くされた。だがまだ日本ではこの小ブル的な恋愛観が何か新しいものでもあるかの如く問題にされている。

その時にあって、前に述べたこの二人の男女は、どんな風に恋愛を考えているか、或いは又実行に移しているか？ 読者はいま此処に発表する十通の手紙——牢獄の夫から妻に宛てた——を読んでゆかれたなら、鬨争の嵐の中に戦う二人の姿を、はっきりと見出し、この圧搾された愛情を、如何に貴く痛感されることであろう。この手紙の書かれた季節は、春から夏にかけてであって、手紙と手紙の間の欠けている処もあるが、日附順に並べて行こう。

## 1

一ヶ月振りて君の手紙を見た。

そしていつもそうには違いないが、特に昨夜の手紙には、いささか幸福を感じた。実際君は、誰に指導されなくても自分自身で、自分の思ったことを実行してゆけるようではないか。それならばそれが一番いいことだと僕は思う。だから是非そうして、しっかりやってくれ給え！

それから君はKに就いて不備を洩らしているが、Kは僕にとっては事実いい友達なのだ。然し決して「同志」ではなかった。この事をよく考えなければいけない。戦闘的な労働者を見る眼をもってKを見ればもう、全然問題にはならない。だが〔#底本では「だか」と誤植〕兎に角彼は左翼運動に興味を持っている心掛けのよい紳士なのだ。ポケットに資本論を突っ込んで銀座をブラついて歩いたって咎めるわけにはいかない。Hについては問題にする方が間違っている。彼等にはそのつもりで交際してゆき給え。「宅下げ」は厨川白村二冊、「ドイツ語動詞変化表」の一冊。洗濯の事は心配しなくてもいいよ。監獄に来てまで毎日、「洗いたてのシャツ」をとという約束の実行を迫る程俺も贅沢ではない。先月一日に城東道子という人が差し入れてくれた。僕にも見当がつくが、君が知っていたらよろしくいってくれ。

俺のようにロクな仕事もしないでトッ捕まって不生産的な別荘生活をしているものにも、外の諸君が色々心配してくれてることを思うと、赤面しないわけにはいかない。Aが

まるで、シンボリストのような手紙をくれた。はっきり意味は解らないが、都会の騒音と歴史の機関車の轟進する轟音とを感じる事ができた。新しい革命的現実的象徴主義の芸術が、こんな処から発生しやしないか等と、馬鹿なことを考えた。——誰かホイットマンの詩集か、ヴェルハーレンの「触手ある都会」を持っていないか。字引き受け取った。有り難う。アドが変わるようだったら面会で知らせてくれ。

## 2

先週中に四月九日から五月二日までの手紙が連日のようにやって来た。しかも君が投函するのは反対の順序で、つまり一番古い四月九日ののが最近に手に入った。だから返事したいことも沢山あるのだが、一々書いていられない。残念ながら何時ものように出てから緩（ゆ）っくり話してやろうと思って我慢するより仕方がない。マジョール湖の絵葉書は、表も裏も面白かった。またあんな絵葉書にそしてあんな報告を書いたのをくれ給え。

僕が君に忠告したいことは君が本ばかりでなく、「事実」に注意して欲しいということだ。例えば市電の争議についても、電柱のビラを見て感激している奴はいても、その「要求」について真面目に研究をしている奴は割に少ない。ヒドイのになると、市電の職場が運輸とか、車庫とか、被服工場とか色々に分かれていて、それぞれの問題があることすら知らない奴がいる。総同盟や組合同盟にどんな組合が所属しているか（つまり\*\*\*の\*\*\*でも知ってるようなことすら）知らないマルクス主義者がいる。それ等の人々は現実に対する真面目な興味の欠けてることを示している。（大山郁夫がそれだったように）君はそんな風なマルクス主義者になってはならないし、又如何に上手に組み立てられていても、そうした事実を知らない人に対しては、その議論を絶対に信用してはならないのだ。

まだ書きたいことがあるが書けなくなってしまった。宅下げしたのはドンキホーテ二冊、それから郵便で着物を送った。あのシーツの黒くなったことには、近来急速にプロレタリア化しつつある君も流石（さすが）に驚くだろう。今「西部戦線」を読んでいる。それからドイツ語の文法、君の送ってくれた奴をもう一度差し入れしてくれないか。然し手許（てもと）になればいいんだよ。では又。馬鹿に急いだったので何も書けなかった。

## 3

此の間は思いがけない人にも逢ったし大変愉快だった。「理論的には大分しっかりして来たつもり」の人よ！ 君は非常に丈夫そうに見えた。そう見えるだけではなくて本当に丈夫になったのだろう。処で宅下げの本はこの手紙が君の手許へ届くまでには三冊になる。前便で着物のことを書いておいたが二三日何だか寒いので見合わせているのだ。そのうち郵便でKの処へでも送ることにしよう。君達に余り面倒な思いをさせるのも気の毒だから。読書に関するプランは中止したよ。だが、心理学の本を読む前提として、解剖、組織、生



理学に関するものを読みたい。急ぐわけではないから、何処からか見つけて来てくれ給え。

俺のドイツ語も近頃では君の理論のように、「大分しっかりして来たつもり」だよ。文法的にもそれからまた単語についても。K夫人は病気ではないのかね。そんな気がする。逢ったらよろしくいってくれ給え。K夫人の亭主にもたまには手紙をよこせと云ってくれ給え。

4

幾分かキートンに似ているというオカミさん！ 忙しいですね。相変わらず。兎に角君に「公休日」があるようになったのは劃時代的だよ。以前は毎日公休日だったのに！ 此の間送った着物、それから宅下げした本（ドイツ文典、西部戦線）は受け取ってくれたかね。計画的な読書については暫く前に書いたように、もう止めたんだよ。僕はヒマだからいくらでも綿密なプランを立てるし、また立てたくもあるのだが、君は多忙であるし、俺の親類の連中から寄附を募集することも君にはもういいかげん沢山だろう。君の不足な生活費から搾取するのもいやだ。等々々だから何でもいいから成（なる）べく実際的なものを入れてくれればいい。小説はこの頃余り読みたくないよ。よっぽど面白いのでなければ。「西部戦線」は面白くあったし、それに少し沈滞していた食欲を恢復させてくれたのは有り難かった。兵隊が書いた本だけあって、食うことばかり書いてあるんだもの。ベーコンや豌豆やチーズなんか盛んに出てくるじゃねえか、しかも、なかなか、うまそうに書いてある。ではまた来週！

5

手紙を、五月になってから二つ受け取った。第三信というのと第四信とである。

ゴールキーの小説のような街で君が生活してること、めし屋で食事をする事等々、はなはだ愉快ではあったが、もうそんなことは当然すぎる話になってしまわなければならぬ。現代支那語講座を受け取った。しかし、あれは毎月つづくらしいが、後はどうなんだろう。発音は此処にいては到底物になるべくもない。だが読むだけなら、字引きさえあれば全くゾーサないことだ。一体この牢屋で読めるような「現代支那語」の書物が日本で発行されてるか知ら？ 誰かに聞いて見てくれ。ユーデット其の他宅下げした。今ドイツ語はトーマス・マンの短編を讀んでる。物理の本はドイツ文典を宅下げした後で入れてくれ。今、満員だ。

Sはまったく真面目な人だよ。むしろどっちかと云えばリゴリストでさえある。君にとって見当がつかないというのは、多分、向こうでも、君に対して態度がはっきり定められないで困ってるからなのであろう。つまり、子供として取り扱っていいか——大人として待遇していいかが——僕にはそう思えるのだが。それから僕が\*\*\*\*\*の残滓をもってい

たという話はどうも承認しかねるね。僕が何か間違いをやったということの原因は決して\*\*の残滓ではなくて他のことに原因してるようだ。一口に\*\*といっても、\*\*を排撃するにしても、その歴史的役割や功禍を正しく批判しなければいけない [#底本では「しなければいけない」と誤記]。昔の\*\*は昔の\*\*より仕事をしたし\*\*的でもあった。それがどうして、\*\*\*の列中に移行したかを、よく理解していなければアナを批判することは出来ない。

此処では「人」という雑誌を売っている。見ると村山貯水池の防空施設の話や、軍縮の話等が出ている。又夜になるとよく機関銃の演習が聞こえて来る。そんなことが\*\*\* \*\*のことを色々と考えさせる。運動の時間はずい分有効に用（つか）っている。運動場の廻りを百回づつ走っているよ。では又来週！

## 6

此の間、面会の時の話は（何のことだか—こう見当もつかないが）要するに誰かが何か君の悪口を云って来ても、それについて煩わされることはないということ、それは十分に承知してるから心配することはないよ。まだ誰もそうしたことを云っては来ないし、又云って来た処で僕には問題が君の個人的な事柄に関する限り、君の云うことが先ず第一に信じられるのだから。次に青バスの事は如何にも残念だった。しかしすぐに他の口があったことは何よりだ。君の労働への進出については、僕にして見れば相当に感激もしているしほめたくもあるのだが、今あんまり口を極めて賞賛してしまうと、直ぐ二三ヶ月してから（そんなこともないだろうが）すっかりヘタバッテしまうようなことになるすると、君はその時、余計恥ずかしい思いをしなければならぬから、今は余りホメないよ。

よほどの事のない限り、ちょいちょい転職してはいけない。そんな風だと人間までが散漫な性格になってしまうから—亭主の義務が命ずる所に従って説教しておくが、近頃閑（ひま）になったせい何かしら説教めいたことを口走る癖がついたのに自ら呆れている。まるでインキョの如く！ お母さんはどうしてるかね。おばあさん [#底本では「あばあさん」と誤記] は眼鏡がガタつく程やせてしまったと云う話だがどうなんだ。

終わりに臨んで余り喧嘩をしないことを勧告しておく。必要な喧嘩ならどうしてもしなければならぬし、又、気を強く持つことは今の君には絶対必要なのだが、しかし君は軍鶏（しゃも）ではなくて、俺のオカミさんなんだからな。

## 7

まるで君が写真をうつす時のように少しスマシて書いたらしい手紙を受け取った。それによると、尊敬すべき俺のオカミさんは、「四日間の労働体験」を誇って（誇ってるわけでもないだろうが）いるようだ。勿論それは立派な体験には異（ちが）いない。その点には

異議はないが、「体験」も四日間位だと、それは却って「如何に体験が少ないか」と云うことの証明として、より多く役立ちはしないかね。だが、今はもう四日間を十倍した以上の体験を得ている筈だし、俺が出る頃には、それこそまるっきりプロレタリアになっていることだろうな。今、君は余計なことを考える必要はないから、なるべく沢山仲のいい友達を作るようにしなければならない。つまらない活動写真を一緒に見に行ったり出来るだけ親切に交際（つきあ）ったりして。——そうしてプチブル的な環境から次第に完全に絶縁してしまうようにしてくれ。

仕事はどんなことがあっても、チョイチョイ変えないようにしてくれ。そうすると何にもならないばかりか、変にルンペンな癖がついてしまうから。——勿論一時的なつもりではなく、今の決心なり実践なりは永久的なものであろうことは、俺も固く信じているし、信頼してもいるのだが。モップル（1）に行ったら、土岐哀果の歌集「空を仰ぐ」と「現代支那語講座」が宅下げしてあるから頼むよ。——俺の手紙の字はまた大分大きな字になってしまった。そのうち小さな字でウンと色々なことを書くからカンベンしてくれ。俺も出たら「労働しろ」という君の勧告は、その原則は、勿論賛成なんだが、俺をやとう工場もないだろうし、俺は労働していない方が、社会的に有用な人間ではないかね？ 手紙よこせ。では失敬。

## 8

子犬と食器を一緒にしているなんて、汚ねえからよしな。——

さて俺の方は実に、実に相変わらずだ。此の間の君の手紙は少し「令女界」だったね。（一々色々な批評はするが、一々君のように気にしてはいけな。口が滑るばかりだから）そうしてあの手紙から想像される君の生活は、何だか馬鹿に淋しそうだったので、ひどく気の毒になったが、しかしそんなに気にすることもないらしいのを、あの同じ手紙の最後の方で知ったので安心した。「個人的な感情」などを余りかえりみないで、一生懸命やってくれ。実際この頃は痛切にそのことを感じているのだ。君の手紙にあるように「七年」でも或いは「十五年」でも、僕達にとっては、少しも「元気」に関係しはしない。いづれにしても.....

それから僕の「病氣」については心配しないでほしい。今形勢を見ている。僕だって体の大切なことは知っているから、その必要を認めればそのようにする。君の手紙にある玉井ドクトルの親切な忠告もまだその必要はない。モルガンの「古代社会」と「ドイツ新聞」とそれから、「鼠色寝間衣」なるものを宅下げしたからたのむ。支那語は辞書を購求していいよ本気でやることになった。まったく、予定どおりドイツ語の方ははかどったから、今年中に支那語の基礎をやって、来年からエスペラントか、出来ればロシア語をやりたいと思っている。

少し悪い癖で先のことばかり考えているが、しかし予定は確実に履行するんだから、そ

の悪い癖を謝してやってもさしつかえないのだ、では又来週だ。鐘紡の争議どうなったかね。失敬。

9

君の「講義」はそんなに「固い」のかね。多分ひどく難しいことを云うのだろう？ 俺も一度聞いてみたいものだ。——だが要するに第一の問題は、集会そのものに興味を持たせ、次には君自身に対しても、「個人的」に好意乃至信頼を持たれるようにならなければ何事も始めるわけには行かないだろう。それから僕が一番気にするのは、君が労働者の友達に、日常の実践道徳について忠告せずにはいられないような事になりはしないかということだ。君はその点についても非常に神経質だから——まさか「太陽のない街」の婦人部長のような、話せないおばさんになることもあるまいけれど。——そういうことは第二義的のことで、それが、「第一義的のこゝろ」に差しつかえないかぎり、黙って見ていた方がいいことなんだ。等とまだ色々考えたこともあったが、今世間の有り様が如何なる次第になっているか見当もつかない俺は、うっかりすると頓珍漢なことをいいそうだからこれくらいで止めた。

要するに、君が非常にいい道を歩いているらしいから、非常に愉快だ。だが——僕が此処にいる間は手紙で色々なことを、余り具体的に知らせてくれない方がいいのではないかね？ もっとそのかわり一般的なことを知らせてくれたまえ！ それから「物価問題」その他が宅下げしてある。モップルの人に、今後時々行って見てくれるように頼んで置いてくれないか。モップルから入れてくれたドイツ語の本は、書き入れがあるので不許可になった。Kから入れてもらったものはKへ返さなければならぬだろう。それも頼んでおいてくれ。

監獄の庭は色々なものがゴタゴタと成長し、日毎に丈が伸びて行って賑やかになった。小鳥にとっては此処は安全地帯だと見えて、時々東京には珍しい奴がやって来て鳴いている。俺が中学の一年生の時、聖書を習った女の先生は、丁度今の君と同じ年齢であったことを思い出した。なる程あんなものかなと思った。だが、その時分は、その女の児（こ）を立派な先生だと思って尊敬していたものだ。

10

此の間は、なかなか愉快なことを聞かせてもらったのですっかり安心した。君は八十銭の日給でうまく生活して行くことが出来るのかね。多分お母さんに支持してもらっているのだろうが。なるべく一人ですっかりやった方がいいじゃないか？ お母さんには今度逢ったらよろしく云ってくれ（さしつかえなかったら）——本が三冊宅下げしてある。「明治大正文学全集」とトーマスマン短編集と、ドイツ語の本だ。なるべくKに返して貰うように誰かに依頼してくれ。

今度T子さんに逢ったら（嘘のようだが、あの尊敬すべき夫人の名前を僕は此処に来てから始めて知ったのだ。何か珍しい単語を字引で引き当てたような気がした）——経済学全集の中から、さしつかえなさそうなものを、毎月位の割で入れてくれるように頼んでくれ。それは彼の偉大な頭を持って（ただし形式の）有名な俺の竹馬の友、Nという男がもっている筈だ。俺の「病氣」はまだ大したことはないから心配するな。此処にいる間は少し位体が悪くても一こうさしつかえないではないか。君の健康こそなかなか心配すべき点と理由とを持っているのだが、近頃は非常にいいらしいので安心している。

もうそろそろ、俺達の一年が周ってくる。あの画家のうちは、青葉の中に埋没されて毛虫やナメクジが密集していることだろう。画家は絵が描けないと悲観しているそうだ。あの驢馬のような絵描きは、昔のようにノンキにノンキな画を描くことは出来なくなってしまったらしい。何か特別な「美」をデッチ上げることにサンタンたる苦心ばかりしているが、元来そんな「特別な美」なんてものはありえないから、其処に表現されているものは、唯重苦しい苛々（いらいら）した気持ちだけなのだ。あれでは絵も描けなくなる筈だ。処で僕が一番初めに君にすすめた本を、君は読んでしまったかね。あの本は非常にいい本だから是非一生懸命に読めよ。 完

此処では男の人の手紙ばかりで、残念ながら女の人のがない。然しながらこの手紙を読んでゆけば、その前に女の人がどんな手紙を出したかは、ほぼ推察されることだろう。と同時に、女の人——山内ゆう子——の境遇が転々と変化して行くことも想像されるだろうが、実際また彼女はあらゆる苦難と戦いながら、勇敢に勤労婦人の生活の中へ飛び込んで行った。ある時はタイピストにある時はバス車掌に、——それは止むをえない事情で職場を変えたのだった。

だが、今ではもう完全に、彼女は街頭から姿を消してしまって、知る人は一人もいない。

読者はこれを読んでゆくうちに、この手紙が単なるあまい恋文でないことに気づかれたであろう。と同時に、二人が如何にその恋愛を階級的に高めて行こうと努力しあっているか？ 夫は妻を同志として如何に訓練してゆこうとしているか？ 彼等の愛情がどんなものであるかを、十分に正しく洞察されたことであろう。

注：（1）国際赤色救援会の略。筆者もこの会で活動していた。

---

底本：「空にむかひて」 武蔵野書房

2001（平成13）年1月21日第1刷発行

底本の親本：「婦人公論」第16年1号、中央公論社

1931（昭和6年）1月1日発行

入力：林 幸雄

校正：小林 徹

ファイル作成：野口英司

2001年3月19日公開

2001年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 58.新しき世界の為めの新しき芸術

大杉栄

一

去年の夏、本間久雄君が早稲田文学で「民衆芸術の意義及び価値」を発表して以来、此の民衆芸術と云う問題が、僕の眼に触れただけでも、今日まで十余名の人々によって

あちこち つど  
彼地此地で論ぜられている。其の都度僕は、一つは民衆と云う事をいつも議論の生命とし対象としている僕自身の立場から、もう一つは誰れ一人として本当に此の民衆芸術と云う問題の真髓を掴んでいる人のいないらしいのに対する遺憾から是非とも其のお仲間入りをしたいとは思いながらも、遂に其の意を果たす事が出来なかった。

もう丸一年にもなる。文壇のいつもの例に拠ると、もう此の問題も消えて無くなる頃である。それでなくとも、民衆には丸で無関心な、若しくはロメン・ロオランの云ったように、民衆を少しも軽蔑しないと云う事を却って軽蔑のたねにする、即ち其の膏汗で自分等の力を養ってくれた親の田舎臭いのを恥じる、成上り者共の多い文壇の事である。五人や十人の、篤志なしかし無邪気な、或は新しもの好きの、或は又物知りぶりや見え坊の先生等が、其の一角で少々立ち騒いで見たところで、殆んど何んの跡かたも残さずに過ぎ去ら

しま  
れて了うに違いない。

しかし僕は、飽くまでも此の問題は、いつものような文壇の流行品扱いを避けさせたい。民衆芸術は、ロメン・ロオランの云ったように、流行品ではない、ディレタント等の遊びではない。又、新しき社会の、其の感情の、其の思想の、已むに已まれぬ表現であると共に、古い傾いた旧い社会に対する其の闘争の機関である、ばかりではない。ロメン・ロオランが起草した、民衆劇場建設の檄にもあるように、此の問題は実に、民衆にとっても亦芸術にとっても、死ぬか生きるかの大問題である。

大げさな事を云う、と笑ってはいけない。殊に、今まで何んの彼のと我物顔に民衆芸術を説いていた人達には、単に闘争の機関と云っただけでも既にしかめっ面をしなければな

け  
らない怪しからぬ事のように聞えるのであろうが、更に生きるか死ぬかの大問題だなどと云えば、きっと途方もない大げさな物の云いかたに聞えるに違いない。しかし、これが大げさに響かないようにならなければ、民衆芸術の本当の意義や価値は分からないのだ。

二

ロメン・ロオランは、前世紀の末年から現世紀にかけて非常な勢で拡まった民衆芸術の大運動に就いて、次ぎの二つの事実を記して置きたいと云って、民衆が急に芸術の中に勢力を得て来た事と、民衆芸術と云う総名の下に集まる諸説の極めて紛々たる事とを挙げている。

「現に民衆劇の代表者と云われる人々の間に、全く相反する二派がある、其一派は、今日有るがままの劇を、何劇でも構わず、民衆に与えようとする。他の一派は、此の新勢力たる民衆から、芸術の新しい一様式、即ち新劇を造り出させようとする。一は劇を信じ、他は民衆に望みを抱く。」

此の「諸説」は、日本ではまだ或る理由から、さほど明瞭には「紛々」としてもないが、若し民衆芸術に就いての議論がもっと盛んになり、或は其の議論の実行が現われるようになれば、どれほど「紛々」として来るか分からない。今日でも既に其の萌芽は十分にある。芸術を信ずるものと、民衆に望みを抱くものと、其の中間をぶらついているものと、いろいろある。

民衆即ち **People** と云う言葉は、最初本間久雄君によって、平民労働者と解釈された。

本間君が主として其の人の説に拠ったエレン・ケイは、「休養的教養論」の最初に「八時間の労働と八時間の睡眠と云う事と共に八時間の休養と云う正当な要求を其の旗印としている群集」と云って、明かに平民労働者を其の休養的教養の対象としている。ロメン・ロオランの民衆即ち **People** が平民労働者である事は後に明かになるであろう。然るに、此の

**People** は民衆ではない、平民労働者ではない、謂わゆる民衆劇即ち **People's Theatre** の **People's** は一般的 (**general**) とか普遍的 (**universal**) とかの意味で、アメリカなどでは **People** をそう云う事が沢山ある、と云い出した人さえある。アメリカ帰りの語学者山田嘉吉君及び其の細君の山田わか子君の如きそれである。しかしこんな場合には、アメリカ通とか語学通とか云う事それ自身が間違いのもとである。石坂養平君の如きも、矢張りそのような意味で、「民衆芸術家としての中村星湖」を論じている。

次ぎには、民衆と云う文字と芸術と云う文字との間にはいるべき前置詞に就いての問題である。本間久雄君はそれを「の為めの」即ち **for** と解釈した。中村星湖君はそれを「から出た」即ちフランス語の **de part** と解釈した。又富田碎花君は「の所有する」即ち **of** と

解釈しているらしい。しかしこれは、嘗つて本当の意味の民主政治を、民衆によって民衆の為に造られ而して民衆の所有する政府、即ち **Government by the people, for the people and of the people** と云ったように、先きの三君のを合せて、民衆によって民衆の為に造られ而して民衆の所有する芸術、即ち **Art by the people, for the people and of the people** と云わなければ精確ではないのだ。そして其の中の「民衆によって」若しくは「民衆から出た」と云うのが最も肝心である事は勿論である。田中純君は正しく云う。「民衆自



らの造り出した芸術はそれ自身民衆の為めの芸術であり、民衆の所有する芸術であり得る。真実に十分に民衆の為めの芸術と云い得るものは、民衆自らの産み出した芸術であらねばならない。」

幸いに、日本にはまだ、「今日有るがままの劇を、何劇でも構わず、平民に与える」と云う民衆芸術論はない。ただ実際方面では、特に平民労働者の為めに催すと云う従来の演芸

すべ  
会は、総て此の種のものであった。又、若し島村抱月君が、多少そう云う風に臭わしているように、其の芸術座の演劇が民衆芸術であるなどと敢て云うならば、それは矢張り殆ど此の種のものである。

### 三

僕は先きに、民衆芸術論は日本ではまだ、或る理由からさほど明瞭に紛々としていない、と云った。其の理由と云うのは、民衆芸術論の謂わゆる提唱者等が、まだ本当に民衆的精神を持っていない事、従って又今日の芸術に対する民衆的憤懣を持っていない事である。斯くして、彼等の議論は極めて曖昧である。微温である。曖昧微温な民衆側の議論は非民

いざ  
衆側の直截熱烈な議論を誘なわない。

嘗つて僕は、歴史を一貫する、そして今日では資本家階級と労働者階級との形式によって現わされている、彼の「征服の事実」を説いて、

「敏感と聡明とを誇ると共に、個人の權威の至上を叫ぶ文芸の徒よ。諸君の敏感と聡明とが、此の征服の事実と、及びそれに対する反抗とに触れない限り、諸君の芸術は遊びである、戯れである。吾々の日常生活にまで圧迫して来る、此の事実の重さを忘れしめんとする、あきらめである、組織的瞞着の有力なる一分子である。

「吾々をして徒らに恍惚たらしめる静的美は、もはや吾々とは没交渉である。吾々はエクスタジイと同時にアントウジウムスを生ぜしめる動的美に憧れたい。吾々の要求する文芸は此の征服の事実に対する憎悪美と反抗美との創造的文芸である。」

と云った。そして更に、此の憎悪と反抗とによる「生の拡充」を説いて、

「生の拡充の中に生の至上の美を見る僕は、此の憎悪と此の反抗との中にのみ、今日生の至上の美を見る。征服の事実が其の絶頂に達した今日に於ては、諧調はもはや美ではない。美はただ乱調にある。諧調は偽りである。真はただ乱調にある。

「事実の上に立脚すると云う日本の此の頃の文芸が、なぜ社会の根本事実たる、しかも今日其の絶頂に達した、此の征服の事実に触れないのか。近代の生の悩みの根本に触れないのか。」

と云った。僕の此の芸術論は明白な民衆芸術論であったのである。僕の要求する芸術は、ロメン・ロオランの謂わゆる、新しき世界の為めの新しき芸術であったのである。然るに、

第一に此の芸術論に反対したものは、実に今回の民衆芸術論の最初の提唱者、本間久雄君其人であったのだ。本間久雄君は憎悪に美はないと云った、反抗に美はないと云った。

フランスでの民衆芸術の提唱者、ロメン・ロオランはさすがに分っている。ロオランは云う。

「強暴と云う事は決して芸術のつき物ではない。人間の良心が、それに衝突してそしてそれを打破って行かなければならない、不正不義のつき物である。芸術は闘争を絶滅する事を目的とするものではない。芸術の目的は、生を豊富にし、力強くし、更に大きく更に善くする事にある。されば、若し愛と結合とが其の目的であるとすれば、憎悪は或る時期までは恐らくは其の武器である。セント・アントワヌ郊外の一労働者が、一切の憎悪は悪で

しき  
あると云う事を 切りに説いて聞かせた一講演者に云った。『憎悪は善である。憎悪は正義

た  
である。被圧制者をして圧制者に反抗して起たしめるのは此の憎悪である。私は或る男が他の人々を圧制しているのを見れば、私は其の事を憤慨する。其の男を憎む。そして憤慨し憎悪する自分が正しいのだと思う。』悪を憎まないものは、又、善をも愛せないものである。不正不義を見てそれと闘う気を起さないものは、全然芸術家でもなければ、又、全然人間でもない。」

憎悪や反抗に美があるかないかの問題などはどうでもいい。しかし此の憎悪や反抗にくみ

与しないものは「全然芸術家でもなければ、又、全然人間でもない」のだ。此の本間君の思想は、其の後二カ年間に、どれほどの進歩があったかは知らない。しかし兎に角此の本間君が、日本に於ける民衆芸術論の最初の提唱者であったのだ。

#### 四

本間久雄君は何事にも篤志なしかし無邪気な学者である。だから君は、エレン・ケイの「休養的教養論」を一読して、至極殊勝な篤志を起したものの、却って安成貞雄君に散々

や  
に遣っつけられたように、へまな民衆芸術論の説きかたをしたのである。

エレン・ケイの論旨は、要するに、スエデンの青年社会民主党に対して、「ひまな時間を増やす事の為に闘うと共に、其のひまな時間の悪用されないように休養的教養を獲得しなければならない。

「何事に於ても旧社会よりより善き新社会を造る責任を帯びている青年等の間に、又其の青年等によって、階級戦争 (class war) と共に、絶えず教養戦争 (culture war) をも営ませなければならない」

と勧告したものである。娯楽にも善し悪しがある。肉体上及び精神上の更新を<sup>もた</sup>齎らさない娯楽は有害である。休養的教養（recreative culture）とは、先ず諸種の快樂を識別する能力を意味し、次ぎに更に新しき力を齎らす生産的な快樂を選んで不生産的な快樂をしりぞ<sup>け</sup>ける意志を意味する。そしてエレン・ケイは猶続けて云う。

「いずれの階級に於ても、大多数の人々は空虚な快樂に<sup>ふけ</sup>耽っている。しかし、斯くの如きは、他のいずれの階級に於ても労働者階級に於けるほど甚だしい危険はない。なぜなら、劣等な快樂によって精神上に傷害を蒙むるのは、いずれの階級のいずれの個人にも等しく有害である事は勿論であるが、其の掌中に共同団体の近い将来の諸問題を握っている第四級民が甚だしく此の傷害を蒙むるのは、共同団体の全体にとって又其の将来にとって、更に遥かに有害である。

「労働者階級は、其の仕事の為めの力を強大にする為めに、有らゆる手段を、快樂の手段をすらも用いなければならない。

「されば、労働者等が現に持っている僅かな余暇が、又彼等が獲得せんと欲しているそれ以上の余暇が、値打のない娯楽で費されているか、若しくは本当の休養即ち肉体上及び精神上の力の更新の為に使われているか、と云う事は最も重大な一問題である。」

エレン・ケイの此の勧告に対しては、いかにつむじ曲りの社会民主党と<sup>いえど</sup>雖も、然らば女史も亦其の謂わゆる教養戦争と共に階級闘争をも鼓吹せよと云う外には、黙って傾聴する外はあるまい。又、若し本間君が単にこれだけの紹介にとどめたならば、安成君からあんな意地の悪い妙な質問を受けなくても済んだのであろう。

エレン・ケイは、本間君が云ったようには「要するに彼等労働者には惨めさと醜くさがあるばかりである」とは云っていない。「慈母のような温情」を以て、此の「惨めさと醜

くさとを人一倍深く感じ、そして人一倍深く憐れんでいる」と云う程でもない。「其処には、人間と人間とが互に抱き合うような情味や、人間としての生の享樂など云う事は棄にしたくもない」とも云っているようだ。それ程醜い「蛮人」に、どうして、「人類全体の直接の将来」などが握られていよう。又、どうして握らせて置かれよう。

又、エレン・ケイは、本間君が云ったようには、専門的な予備知識を持たなければ了解されない謂わゆる高級芸術とを並立させてはいない。「民衆の為めとは、労働者階級の人々の為めと云う意味であるから、其の芸術は、彼等労働者にもよく鑑賞され、理解されるほど、通俗的な、普遍的な、非専門的なものでなければならない」とも云っていない。こんな誤解され易い、又誤解する方が尤もな、余計な事は云っていない。

これを要するに、エレン・ケイはただ、ロメン・ロオランの民衆芸術論の要旨を紹介し

て、それに「其の一語も残さずに賛成し」更に其の一方面の休養的教養を力説して、現在の民衆の娯楽物を批評したにとどまる。そして、此の休養的教養を力説した事が、何事にも精神的で個人的で且つ謂わゆる温健な、エレン・ケイの特徴なのである。従って、本間久雄君のように、此の方面からのみしかも極くまずく民衆芸術を説くとすると、<sup>すこぶ</sup>頗る妙なものが出来上るわけだ。

## 五

然らば、エレン・ケイが「其の一語も残さずに賛成した」と云う、ロメン・ロオランの民衆芸術論の要旨はどんなものか。ロオランの民衆芸術論は主として民衆劇論である。以下出来るだけロオラン自身の言葉によって、其の要旨を述べる。

今や、旧社会は其の繁栄の絶頂を超えて、既に老朽の坂を降りつつある。或は既に瀕死の状態にあるものと見ていい。そして其の廢墟の上に、民衆の新しき社会が<sup>まさ</sup>將に勃興せんとしつつある。

此の新勃興階級はそれ自身の芸術を持たなければならない。其の思想と感情との已むに已まれぬ表白としての、其の若い澁瀾とした生命力の発現としての、そして又、古い傾いた旧い社会に対する戦闘の機関としての、新しき芸術を持たなければならない。民衆によって民衆の為に造られた芸術を持たなければならない。新しき世界の為めの新しき芸術を持たなければならない。若し此の芸術が出来なければ生きた芸術はない。過去のミイラが眠っている、一種の墓地のような、博物館があるばかりだ。

少しも党派心のない、無限な、永遠な、普遍的な、民衆芸術と云うような事を云う人がある。これは貴い夢想である。将来の世代は、若しそれが出来れば、幾世紀かの後にはそれを実現するだろう。しかし今のところは、永遠を現在の瞬間に置いて、今日の時代と共に生きる事を努めなければならない。芸術は其の時代の渴望と引離される事は出来ない。民

衆芸術は、民衆の苦痛と、其の希望と、其の闘争とを<sup>あいとも</sup>相<sup>俱</sup>にしなければならない。

如何なる美も、如何なる偉大も、青春や生命の代わりをする事は出来ない。諸君の芸術は老人の芸術である。吾々が、吾々の晩年に吾々の任務を果たし、吾々の共同行為の義務を尽した後に、公平無私の芸術や、ゲーテの晴朗や、純粹の美を望むのは、善い事でもあり自然の事でもある。それは人生の旅の至上の理想であり究竟である。しかし、其処へ行くだけの功蹟もなしに、余りに早く其処に到達する人々や民族は、悲しむべきものである。其等の人々や其等の民族には、其の晴朗は、無感覚即ち死の前兆に過ぎない。生は不斷の更新である。闘争である。有らゆる苦難のある闘争の方が、諸君の美わしい死よりも善いのだ。

### しあわせ

静穏な時代や芸術は如何にも望ましい 仕 合 である。しかし其の時代が乱れている時には、其の国民が闘っている時には、其の国民に味方して闘い、其の国民を奮起せしめ、其の国民の行くべき道をさえぎっている無知を打破り、偏見を斥けて行くのが、芸術の目的である。

シルレルは既に、一七九八年に、其の「ワルレンスタインの戦」の上場の際に云っている。

「今其の幕を開きつつある此の新時代は、詩人にも旧い道を去らせて、諸君をして紳士閥生活の狭い範囲から、吾々が今奮闘努力しつつある此の崇高な時代に相応しい、もっと、高貴な劇に移らせようとしている。なぜなら、独り大きな題目のみが人間の奥深い臟腑を揺り動かす事の出来るものである。今、現実其者が詩になっている。そして人々が人類の大利益たる主権と自由とのために闘っている。此の厳粛な時期に際して、芸術も亦、鬼神を喚び起す其の劇の上に、更に大胆な飛躍を試みる事が出来るのだ。芸術は此の飛躍を試みる事が出来るばかりではない。此の実生活の劇の前に赤恥をかいて消えて失くなる事を望まないならば、是非ともそれを試みなければならないのだ。」

若し芸術が此の時代に応ずる事が出来なければ、芸術は、少なくとも生きた芸術は消滅しなければならない。又、此の新芸術を創る事の出来ない民衆は、其の新勃興階級たる運命をも放棄しなければならない。斯くして民衆芸術の問題は、民衆にとっても亦芸術にとっても、実に死ぬか生きるかの問題である。

### のが ひ

民衆にも二種の民衆がある。其の一つは、貧窮から 遁 れ出て、直ちに紳士閥に心を惹かれ、紳士閥に吸収されて了ったものである。もう一つは、此の仕合な兄弟に見棄てられて、

### うごめ

其の貧困のどん底に 蠢 いているものである。紳士閥の政策は、此の後者を絶滅させ、前者を同化させる事にある。そして吾々自身の政策は、即ち吾々の芸術的であると共に社会的な理想は、此の二種の民衆を融合させて、民衆自体に其の階級的自覚を与える事にある。

若し民衆が第二の紳士閥となって、それと同じように其の享樂は粗雑であり、其の道徳は偽善であり、そして紳士閥と同じような愚鈍な無感覚なものになるのなら、吾々はもう民衆の事などを心配しない。声ばかり高くて空っぽな芸術や、屍骸のような人類を生き延びさす事は、吾々にはどうでもいい事なのだ。

しかし吾々は民衆の若い生命力を信ずるものである。又、人類の道徳的及び社会的の革命を信ずるものである。

此の民衆芸術に対する吾々の信仰、即ちパリの遊人等の懦弱なお上品に対して、集合的生活を表明し種族の更生を準備し促進する頑丈な男性的の芸術を建設せんとする、此の熱烈な信仰は、吾々の青年時代の最も純潔な且つ最も健全な力の一つであった。吾々は決し

て此の信仰を失わない。

## 六

ロメン・ロオランの民衆芸術論の要旨はこれで尽きる。しかしこれは要するに理想である。信仰である。此の理想や信仰の実現される前に、「民衆によって」と云うよりも寧ろ「民衆の為めの」芸術が生まれなければなるまい。

今や芸術は利己主義と混乱とに悩まされている。少数の人々が芸術を其の特権としている。民衆は芸術から遠ざけられている。国民中の最も数の多い、そして最も活力のある部分が、芸術の中に何等の表現をも持っていない。斯くして思想は甚だしく貧弱となり、芸術の為めには重大な危険が迫っている。

芸術を或る一階級の独占的享樂として了うのは、此の芸術を奪われた階級の人々をして、やがて芸術を憎悪せしめ且つ破壊せしめる事に導くものである。

芸術を救う為めには、芸術に生命の門戸を開かなければならない。有らゆる人々を其処に容れなければならぬ。平民にも発言権を与えなければならぬ。

しかし生は死と結びつく事は出来ない。過去の芸術は既に四分の三以上死んだものである。過去の芸術は生には何んの役にも立たない。却って往々生を <sup>そこな</sup>害う恐れすらある。健全な生の必須条件は、生の新しくなるに従って、絶えず新しくなる芸術の出来る事である。

何者もただ、其の生れた場所と時代とにのみ、善いものである。善や美が絶対的存在であるとか、又は永遠的観念であるとかは信ずる事が出来る。しかし其の表現は人心の様式によって変わる。選ばれた人々にとっての美も、民衆にとっては醜であり、又選ばれた人々の欲望と同じ正当の権利を持っている民衆の欲望に応じない事もある。二十世紀の民衆に過去の世紀の貴族的社会の芸術や思想を強いる事は出来ない。

しばしば  
紳士閥の批評家は 屢々 云う。民衆は自分の階級よりも上の階級のものを主人公とした小説や脚本でなければ喜ばない。富裕な社会の描写は民衆をして自分自身の貧困の <sup>けんえん</sup>倦厭を忘れさせるものであると。なるほど、民衆が半睡眠状態にある間は或はそうであるかも知れない。しかし、其の人格の感情が目覚め其の市民としての品位を自覚するようになれば、民衆は斯くの如き従僕芸術に恥じなければならぬ。そして又、民衆を尊敬する人達の義務は、斯くの如き芸術から民衆を救い出す事にある。

民衆は紳士閥芸術の残り物を集めるよりも、もっと遙かに善いしなければならぬ事を持っている。現在の芸術のお客を増やす事を努めなくてもいい。吾々は現在の芸術の為めに働いているのではない。吾々は芸術の善と民衆の善と云う事だけを考えればいいの

だ。そして、現在の一般の芸術的教養を普及さす事が、此の芸術の善又は民衆の善になるなどと考えるのは、余りに傲慢な楽観であらねばならない。

吾々の目的とするところは、平民の善ばかりでない。又芸術の善である。芸術は人間の魂の偉大さを現わすものである。人間の魂の有らゆる創造の中で、しかも此の創造が始めて生命に値打がつくのであるが、吾々は芸術を限りなく崇拜するものである。

吾々は血の気のない芸術に生気を与え、其の痩せ衰えた胸を太らせて、民衆の力と健康とを其の中にとり入れさせようと云うのだ。吾々は人間の魂の榮譽を民衆の為に使おうと云うのではない。民衆を吾々と一緒に、此の榮譽の為に働かせようと云うのだ。

此の意味での民衆芸術は、其の第一条件として、それが娯楽である事である。民衆芸術は、先ず民衆の為めになるものであると共に、一日の労働に疲れた労働者の為めの肉体上及び精神上の休養でなければならない。

なまけ者の理知にすら往々多くの害悪を及ぼすデカダン芸術の最後の所産を民衆に与える事は出来ない。又、選ばれた人々の苦痛や煩悶や疑惑は、其の人々自身が保管して置くがいい。民衆には、民衆自身の苦痛や煩悶や疑惑が、其の分前以上にある。それ以上に増やす要はない。少数の或る人々が、「鼯鼠が卵を吸うように憂鬱を吸う」事が好きだからと云って、此の貴族共の知識的禁欲主義を民衆に強いる事は出来ない。腐った木の上に出た大きな苔のような、誘惑的な、しかし一切の行為を殺す夢想によって害毒された、選ばれた人々の病的な感情の複雑さを平民に強いる事は出来ない。よし吾々が其の病気を吾々自身の中に養う事にどれ程の満足を感じても、吾々の其病気を民衆に感染させてはならない。吾々よりも更に健全な、更に値打のある種族をつくる事に努めなければならないのだ。

民衆は猛烈な芝居が好きだ。しかし其の猛烈は、実生活の上でもそうだが舞台の上でも、民衆が自分を其の人になぞらえて見ているヒロオを破滅させて了ってはいけない。民衆は自分自身はどれ程諦らめどれ程気落ちしていても、其の夢想の人物の為めには非常に楽

#### たま

観的なものである。悲しい結末になつては堪らない。最後に善が勝つと云う皆んなの心の奥底に持っている衷心からの確信が、芝居の中で証明されなければならない。これは民衆の心が無邪気なせいではない。却って其の健全な為めである。民衆の此の確信には道理がある。此の確信は、生活に必須の一つの力であり、又進歩の法則でもある。

然らば、民衆には、散々人を泣かせて置いて遂に目出度し目出度しで終るメロドラマでなければいけないと云うのか。決してそうではない。斯う云う粗雑な虚偽は、アルコールと同じように、民衆を無気力にする催眠剤である。麻酔剤である。吾々が芸術に持たせたいと思う娯楽の力は、精神的元気を犠牲にするものであつてはならない。

次に民衆芸術は元気の源でなければならない。元気を弱らしたり凹ましたりする事を避けなければならないと云う義務は全く消極的のものである。従つて此の義務には、必然に、其の反対の、即ち元気を得させ又強めさせる、と云う積極的の方面がある。民衆芸術は民衆を休息させつつ、更に翌日の活動に適せしめるようにしなければならない。

第三に、民衆芸術は理知の為めの光明でなければならない。民衆を其の目的地にまっす

ぐに導いて、途々自分の周囲をよく見る事を教えなければならない。暗い蔭と 嬖 と妖怪  
ひだ  
とに充ち満ちた人間の恐ろしい脳髄の中に、光りを広げなければならない。労働者は其の  
肉体は動いているが、其の思想は大抵休んでいる。此の思想を働かせる事が肝心なのだ。  
そして、少しでも其の思想を働かせる事が出来て来ると、それは労働者にとって快樂にさ  
えなるのだ。しかし、民衆をただ考えさせ働かせる状態に置くだけでとどめなければならない。  
如何に考え如何に導くべきかを教えてはいけない。労働者をして、有らゆる物事を、  
人間や自分自身を、明かに観察し明かに審判する事を覚えさせなければならない。

歓喜と元氣と理知と、これが民衆芸術の主なる条件である。其他の諸条件は自然と備わ

って来る。そしてお説法やお談義は、折 角 芸術を好きなものまで嫌いにさせて了う、  
せっかく  
手段としても極めて拙劣な非芸術的のものである。

又、此の種の民衆芸術は、近代の謂わゆる社会劇とも違う。たとえば、平民を最もよく  
理解し、又最もよく愛した現代人トルストイは、あれ程厳しく其の傲慢を圧えていたのにも  
拘らず、使徒と云う其の使命と自分の信仰を他人に強いなければやまない強い欲望と、  
及び其の芸術上のレアリズムの要求とは「暗の力」などでは、其の非常な慈悲心よりも余  
程強かった。斯くの如き作物は、民衆の為めには、有益と云うよりも却って気落ちさせる  
ものである。要するに、此の「暗の力」や又は「織工」の如き作物は、貧窮の長い絶叫か  
若しくは悲嘆話して、其の杞憂や絶望は、既に余りに生活の為に苦しめられている貧民  
に元氣をつけるとか慰安を与えとかと云うよりも、寧ろ富者の良心を覚醒させる為めの  
ものである。或いは又、せいぜい、貧民の中の少数の、選ばれた人々の為めのものである。

## 七

しかし、此の主として「民衆の為めの」芸術が民衆に享樂されるようになるには、又彼  
の本当に「民衆の」芸術が生れるようになるには、先ず其の「民衆」が必要である。

「嘗つて」とイタリアの革命家マジニイは云った。当時彼れはまだ若くて、其の生涯を文  
学に貢献するつもりでいたのだ。「嘗つて私は斯う思った。芸術がある為めには、先ず国民  
が無ければならないと。当時のイタリアには其のいずれもなかったのだ。祖国もなく自由  
もない吾々は芸術を持つ事も出来なかった。されば吾々は先ず、『吾々は祖国を持つ事が出  
来るだろうか』と云う問題に献身して、此の祖国を建設する事に努めなければならなかつ  
たのだ。斯くてイタリアの芸術は吾々の墳墓の上に栄えるのだ。」

吾々も矢張り云おう。諸君は民衆芸術を欲するのか。然らば、先ず民衆其者を持つ事か

たの  
ら始めよ。其の芸術を 娯 しむ事の出来る自由な精神を持っている民衆を。容赦のない労



働や貧窮に蹂みにじられないひまのある民衆を。有らゆる迷信や、右党若しくは左党の狂信に惑わされない民衆を。自分の主人たる、そして、目下行われつつある闘争の勝利者たる民衆を。ファウストは云った。

「始めに行為あり」と、

斯くしてロメン・ロオランは、其の民衆芸術の当然の結論として、芸術的運動と共に、と云うよりも寧ろそれに先だって、社会的運動に従わなければならないと断言した。

ひるがえ

然るに、<sup>翻</sup>って我が日本での民衆芸術論者を見るに、此の点に於て果してどれ程の用意があり又覚悟があるか。少なくとも又、果して此の点に考え及んだ事すらあるか。

猶ロメン・ロオランは、其の民衆芸術論を労働運動論で結んでいると共に、其の芸術論をも生活論で終らせている。彼れは云う。

「私は劇が好きだ。劇は多くの人々を同じ情緒の下に置いて友愛的に結合させる。劇は、皆んなが其の詩人の想像の中に活動と熱情とを飲みに来る事の出来る、大きな食卓のようなものだ。しかし私は劇を迷信してはいない。劇は、貧しいそして不安な生活が、其の思想に対する避難所を夢想の中に求める、と云う事を前提とするものである。若し吾々がもっと幸福でもっと自由であったら、劇の必要はない筈である。生活其者が吾々の光栄ある観物になる筈である。理想の幸福は吾々がそれに進むに従って益々遠ざかって行く。従っ

つい

て吾々は遂に達する事は出来ない。しかし人間の努力が芸術の範囲を益々狭めて生活の範囲を益々広めて行くと云う事は、若しくは芸術を閉ざされた世界即ち想像の世界としないうで、生活其者の装飾とするようになると云う事は、敢て云える。幸福なそして自由な民衆には、もう劇などの必要がなくなって、お祭が必要になる。生活其者が其の立派な観物になる。民衆の為に此の民衆祭を来させる準備をしなければならない」

近代の最大の芸術家たるワグネルも、若い率直さで、敢て斯う云っている。

「若し吾々が生を持ったら、芸術なぞは要らなくなるのだ。芸術は丁度生の終るところで始まる。生が吾々に何んにも与えなくなった時に、吾々は芸術品によって『私は斯くの如く望む』と叫ぶのだ。本当に幸福な人がどうして芸術をやろうなどと云う考を持つ事が出来るのか私には分らない。……芸術は吾々の無力の告白である。……芸術は一つの渴想に過ぎない。……私の若さや健康を再び見る為めには、自然を娛しむ為めには、限りなく私を愛する女の為めには、美しい子供の為めには、私は私の全芸術を与える。さあ、私の全芸術を今此処へ出す。其の残りの物を私にくれ。」

若し吾々が「此の残りの物」の僅かでも不仕合な人々に与える事が出来たら、生に少しの喜びでも与える事が出来たら、よしそれが芸術を犠牲にしてでも、吾々はそれを悔まない。

〔『早稲田文学』一九一七年十月号〕

---

底本：「日本プロレタリア文学評論集・1 前期プロレタリア文学評論集」新日本出版社  
1990（平成2）年10月30日初版

初出：「早稲田文学」  
1917（大正6）年10月号

入力：田中敬三

校正：土屋隆

2009年3月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)で作  
られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 59.新らしき性格感情

坂口安吾

最近私は、N・R・Fの新年号に於て、イリヤ・エレンブルグが「青年期ロシヤ」という一種の報告書を寄せているのを読んだ。U・R・S・Sも生誕十五年をむかえている。あそこでは、学生達は学ぶことの報酬として給料を貰い、その給料で老いたる両親を扶養することも出来るらしい。こんなに我々とかけ違った方法で成人した若いロシヤの青年達は、彼等の性格に於て、心理に於て、まるで変った人間が育ちはじめているのではないか？エレンブルグは新しい性格と感情をロシヤから探りだすために、若い学生達との問答録と彼等の手紙、日記等を此の報告書の中へ提出している。私は興味をもって読んだ。

生憎、報告書の内容は私を失望させた。彼等の性格も心理も、まだ我等のままである。空疎な概念として心理の変化を主張していても、まだ身についていない。中には、嫉妬や愛情は、如何なる制度の変化の中でも、消滅したり変ったりすることはあるまいと述べている学生達も多かった。

しかし生誕十五年のロシヤでは急速に変化を断定することはできぬ。環境の力は必ず人を変化させる。やがてロシヤの人々は変化しよう。だが、その程度が問題である。

極めて急進的な、人間の完全なる変化を力説する一学生は述べている。人間にはサンチマン・ソシヤル サンチマン・ピオロジック  
社 会 感 情 と 動 物 感 情 とがあるが、ソビエットに於ては、動物感情は次第に消滅して、人は全て社会感情によって行動するに至るだろうと。

社会感情とは恐らく理性を言うものらしい。そして動物感情とは、嫉妬や愛情などの超理性的な感情を言うのである。

私は軽率に否定することも差控えるが、さりとて軽率に賛同することもなりがたい。人を美醜によって判断せずに、才能によって判断するということは、所詮同じことではないか。標準が美醜から才能へ変ったところで、五十歩百歩のことである。そこから動物感情の消滅する理由は見出しがたい。同時に動物感情の消滅が人生を豊富にするかどうかを、私は今判じがたい。しかし私は、私自身を実験台上へのせて、一人のテスト氏を私の中から出発せしめ、このことを考えてみようという気持ちになっている。所詮文学に解決はない。ただ作家は誰しも自分のテスト氏を育てつつけていなければなるまいと思う。

差当って、今私に動物感情の消滅を空想しうる一つの場合が可能のように考えられる。それは人間から「死」が完全に取り去られた時。そしてその時、人間は永遠に死滅し、新しい理性的生物が誕生するかも知れない。

私は、我々の生活に解き難い神秘と超越を与える奇怪な魔物が、全てその不思議な源を遠く「死」に発しているように思えてならない。やがて死なねばならぬこと——生き生きと

した生活の中では一見さらに問題でないこの事が、実は無限の錯雑と、思いがけない表情を、最も進化した文化の諸相へさえ滲みだし、根を張りめぐらしているように思えてならぬ。完璧の制度も、死を、順って、人間を解きがたいように思われてならぬのだ。

今、私にとって、死は我々の生活に最大のからくりを生む曲者に見える。

『桜』昭8・5

---

底本：「坂口安吾選集 第十卷エッセイ 1」講談社

1982（昭和 57）年 8 月 12 日第 1 刷発行

初出：「桜」

1933（昭和 8）年 5 月号

入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース

校正：小林繁雄

2006 年 7 月 4 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 60.新しい神話を追い求めつつ

中井正一

夜の家庭の雑談の中で、十歳の女の子が、「神様はほんとにあるの、地球の外は宇宙でしょう。神様は何処に棲むの？」と問うた。

皆はっと顔を見あわせて、一瞬たじろいだ。そう簡単に答えられる問いではない。

死んだ母が天にいると先達まで固く云いきっていた十歳の子に芽生えた疑問なのである。どの大人も、この至純な問いをつづけることを怠り、その問いそのものを掌から落しているにしかすぎないのである。それは成長ではなくして、只墮落にしかすぎないのである。

ルソーは「エミール」で、五歳の子をほんとうに五歳たらしめよ、十歳の子をほんとうに十歳の子供たらしめよ。そのとき、ほんとうの二十歳の青年、人間が生れるであろう、と云っている。

十歳の子供の問いと、夢は、大人のいかなる饒舌な哲学よりも、至純で具体的で人間的であるに違いない。只その表現の手段と技術がないだけである。

かくて大人の書く童話は、子供への愛に加うるに、洗練さえたる技術と回顧の中から生れて来るべきである。ところがこの当の子供は歴史の中に成長しつつある。大人の回顧がそれに堪えないまでに子供の歴史の中での成長が伸びつつあることを深く畏れ、心を用うべきである。

新しい時代に、新しい夢と、神話と、人間像が、子供の中にも巨大に成長しつつある。それをこそ、大人は真剣になって子供達と共に追い求めるべきである。

それは大人自身が、人間として、自らに至純になることでもある。

---

底本：「アフォリズム」てんびん社

1973（昭和 48）年 11 月 8 日第 1 刷発行

初出：「読書春秋」

1952（昭和 27）年 2 月

入力：鈴木厚司

校正：染川隆俊

2010 年 3 月 13 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 61.新しい船出

### —女らしさの昨日、今日、明日—

宮本百合子

女らしさというものについて女自身はどう感じてどんなに扱っているのだろうか。これはなかなか微妙で面白いことだし、また女らしさというような表現が日常生活の感情の中に何か一つの範疇のようなものとしてあらわれはじめたのは、いつの時代頃からのことなのであろうか。そういう点にも興味がある。

万葉集を読んだ人は、誰でもあの詩歌の世界で、実にすなおに率直に男女の心持が流露されているのを知っているが、あのなかには沢山の可愛い女、美しい女、あでやかな女を恋い讚えた表現があるけれども、一つも女らしい女という規準で讚美されている女の例はない。これは本当に心持のよいことだと思う。あの時代、女と男との生活は原始ながら自然な条件を多くもっていたために、女は美しい女、醜い女、賢い女、愚かな女というようなおのずからな差別をうけながらも、女らしいという自然性については、何も特別な見か

あじさい

たはされていない。紫陽花が紫陽花らしいことに何の疑いもはさまれていず、紅梅が紅梅らしいのに特殊な観念化は附加されていない。それなりに評価されていて、紫陽花には珍しい色合いの花が咲けば、その現象を自然のままに見て、これはマア紫陽花に数少ない色合であることよ、という風に鑑賞されている。牝鹿がある時どんなに優しく、ある時どんなに猛くてもやはりそれなり牝鹿らしいと見るままの心で女の女らしさが社会の感情の中に流動していたのであったと思われる。

近松になると、もう明瞭に女の女らしさ、男の心に対置されたものとしての女心の独特な波調が、その芸術のなかにとらえられて来ている。よきにつけあしきにつけ主動的であり、積極的である男心に添うて、娘としては親のために、嫁いでは良人のために、老いては子のために自分の悲喜を殺し、あきらめてゆかねばならない女心の悶えというものを、近松は色彩濃やかなさまさまのシチュエーションの中に描き出している。彼の芸術が日本の文芸史のなかにあれほど巨大な場所を占めているのを見れば、近松の情の世界が、日本の社会の歴史のなかではいかに長い世代にわたって一般の感情に共感をよびますものであったかがうかがわれる。その封建時代の女心が男女にこぼさせた涙が今日でもまだ私たちの生活の中では完全に昔の物語となり切っていない有様である。

女らしさ、という表現が女の生活の規準とされるようにまでなって来た社会の歴史の過程で、女がどういう役割を得てきているかといえば、女らしさという観念を女に向ってつくったのは決して女ではなかった。社会の形成の変遷につれ次第に財産とともにそれを相続する家系を重んじはじめた男が、社会と家庭とを支配するものとしての立場から、その



便宜と利害とから、女というものを見て、そこに求めるものを基本として女らしさの観念をまとめて来たのであった。それ故、女らしさ、という一つの社会的な意味をもった観念のかためられる道筋で女が演じなければならなかった役割は、社会的には女の実権の喪失の姿である。

女らしさは一番家庭生活と結びついたものとしていわれているかのようでありながら、そういう観念の発生の歴史をさかのぼって見れば、現代でいう家庭の形が父権とともに形成せられはじめたそもそもから、女ののびのびとした自然性の発露はある絆をうけて、決して万葉時代のような天真なものであり得なくなっているということは、まことに意味深いところであると思う。

源氏物語の時代にしろ、女らしさは紫式部が描き出しているとおりになかなか多難なものであった。仏教や儒教が、女らしさにますます忍苦の面を強要している。孟母三遷というような女の積極的な判断が行動へあらわれたような例よりも、女は三界に家なきもの、女は三従の教えにしたがうべきもの、それこそ女らしいこととされた。従って女としてのそういう苦痛な生涯のありようから人間的な成長、達観へ到達する道は諦めしかなく、諦めということもそれだから女らしさといわれる観念の定式の中には一つの大切な要素としてあげられて来ているのである。

戦国時代ある大名の夫人が、戦いに敗れてその城が落ちるとき、実父の救い出しの使者を拒んで二人の娘とともに自分の命をも絶って城と運命を共にした話は、つよく心にのこすものをもっていると思う。当時の男のこしらえた女らしさの掟にしたがって、その夫人は最初ある大名の許に嫁しずけられた。ところが、その時代の政略にしたがって実父はその娘の良人と不和に到ったら娘を強いてもとり戻して、さらに二度目の良人であるその城主に嫁しずけた。不幸にもまたここに実父の側との戦いがはじまって、良人の軍は敗れたので、夫人の実父は前例どおり、また夫人を救い出そうとしたのであった。これまでまことに女らしく父の命のままに行動した娘に、今回も父が期待していたことは、彼女の無事な脱出と身の平安とやがて輝くような美貌によって三度目の縁につくこと、そのことで父の利益を守ることであつたらう。しかし、その麗しくまた賢い心の夫人の苦悩は、全く異った決心を彼女にさせた。最初の良人の許をも彼女は決して愛を失って去ったのではなかった。二度目の良人に縁あつて妻となつて、二人の美しい娘たちさえ設けた今、三度そこを去って行手に何が待っているかということは、彼女には十分推察のつくことであつた。二人の娘の女としての行末もやはり自分のように他人の意志によってあちらへ動かされ、こちらへ動かされするはかないものであつて見れば、後に生き永らえさせることも哀れと思うからというはっきりした遺書をのこして、娘たちをわが手にかけて自刃したのであつた。当時の周囲から求められている女らしさとはまるでちがった悽愴な形で、その夫人の高貴で混りけない女の心の女らしさが発揮されなければならなかったのであつた。女らしさの真実なあらわれが、過去においてもこのように喰いちがった表現をもつところ、女らしさの含んでいる深刻な矛盾があるのではないだろうか。そして、形こそさまざま

まに変転していながら今日の私たちも、やはり一層こみ入った本質でその同じ女らしさの矛盾に苦しんでいるのではないだろうか。

ヨーロッパの社会でも、女らしさというものの観念はやはり日本と似たりよったりの社会の歴史のうちに発生していて、あちらでは仏教儒教の代りにキリスト教が相当に女の天真爛漫を傷つけた。原始キリスト教では、キリスト復活の第一の姿をマリアが見たとされて、愛の深さの基準で神への近さがいわれたのだが後年、暗黒時代の教会はやはり女を地獄と一緒に罪業の深いものとして、女に求める女らしさに生活の受動性が強調された。

十九世紀のヨーロッパでさえ、まだどんなに女の生活が女らしさで息づまるばかりにされていたかということは、ジョルジュ・サンドの「アンジアナ」を序文とともによんで感じることだし、ジェーン・オウスティンやブロンテ姉妹の生涯の実際を見ても感じられる。二十世紀の初頭、イギリスでヴィクトリア女皇の治世時代、いわゆるヴィクトリアンの風俗が、女らしさの点でどんなに窮屈滑稽、そして女にとって悲しいものであったかということは、沢山の小説が描き出しているばかりでなく、今日ヴィクトリアンという言葉

そのものが、当時の女らしさの掟への <sup>びんしょう</sup> 憫 笑 を意味していることで十分に理解されると思う。

女らしさは、女にとって随分不自然の重荷であった。真に人間らしい伴侶として婦人を求めている男にとっても苦痛を与えた。従って、その固定観念への闘争は十八世紀ぐらいから絶えず心ある男女によって行われてきているということは注目すべきことだと思う。それらの運動は単純に家長的な立場から見られている女らしさの定義に反対するというだけではなくて、本当の女の心情の発育、表現、向上の欲求をも伴い、その可能を社会生活の条件のうちに増して行こうとするものであった。社会形成の推移の過程にあらわれて来ているこの女にとって自然でない女らしさの観念がつみとられ消え去るためには、社会生活そのものが更に数歩の前進を遂げなければならないこと、そしてその中で女の生活の実質上の推進がもたらされなければならないということを、今日理解していない者はないのである。

女らしさ、などという表現は、雨について雨らしさ、というのが奇妙であるように、いわば奇妙なものだと思う。社会が進んで万葉集の時代の条件とは全く異りつつしかも自然な合理性の上に自由に女の生活が営まれるようになった場合、はたして女らしさというよ

うな社会感情の <sup>ヴォキャビュラリ</sup> 語 彙 が存在しつづけるものだろうか。きっと、それは一つの古語になるだろうと思われる。昔は、女らしさというようなことで女が苦しんだのね。まアねえ、と、幾世紀か後の娘たちは、彼女たちの純真闊達な心に過ぎし昔への恐怖と同情とを感じて語るのではあるまいか。私たちはそういう歴史の展望をも空想ではない未来の絵姿として自分の一つの生涯の彼方によるこびをもって見ているのも事実である。

未来の絵姿はそのように透明生氣充滿したものであるとしても、現在私たちの日常は実

### ちみもうりょう

に女らしさの 魑 魅 魍 魎 にとりまかれていると思う。女にとって一番の困難は、いつとはなし女自身が、その女らしさという観念を何か自分の本態、あるいは本心に附随したもののよう思いこんでいる点ではなかろうか。自身の人生での身ごなし、自身のこの社会での足どりに常に何か女らしさの感覚を自ら意識してそれに沿おうとしたり、身をもたせようとしているところに女の悲劇があるのではないだろうか。いい意味での女らしさとか、悪い意味での女らしさということが今日では大して怪しみもせずにいわれ、私たち自身やはりその言葉で自分を判断しようともしている。つまり、その観念の発生は女の内部にかかわりなく外から支配的な便宜に応じてこしらえられたものなのに歴史の代を重ねるにつれてその時から狭められた生活のままいつか女自身のものの感じかたの内へさえその影響が浸透してきていて、まじめに生きようとする女の総てのひとは、自分のなかにいよいよ女らしさだの悪い意味での女らしさだのを感じるようになっていくそのことに、今日の女の自身への闘いも根ざしていると思われるのである。

男が主になってあらゆることを処理してゆく社会の中で、女に求められた女らしさ、その受け身な世のすごしかたに美德を見出した根本態度は、社会の歴史の進む足どりの速さにつれて、今日の現実の中では、男自身、女自身の実感のなかで、きわめてずれた形をとっていると思われるがどうだろうか。昔の女らしさの定義のまま女は内を守るものという観念を遵守すれば、国防婦人会の働く形体にしる現実にそれとは対置されたものである。内を守るという形も、さまざまな経済事情の複雑さにつれて複雑になって来ていて、人間としてある成長の希望を心に抱いている男のひと自身、すでに、いわゆる女らしく、朝は手拭を姉様かぶりにして良人を見送り、夕方はエプロン姿で出迎えてひたすら彼の力弱い月給袋を生涯風波なしの唯一のたよりとし、男として愛するから良人としての関係にいるのか月給袋をもって来るから旦那様として大事に扱われるのか、そのところが生活の心持で分明をかいているというような女らしさには、可憐というよりは重く肩にぶら下る負担を感じているであろう。

そんな心持で安心しては過せない自分の心を、多くの若い女のひとたちは自覚していると思う。人間として成長のためには、本当に愛情を育ててゆけるためにも、社会生活のひろさの中に呼吸して職業をも持って結婚生活をしてゆきたいと思う。そういう希望も現在では女の本心から抱かれていると思う。ところが、職業の種類で結婚のあいてにめぐり合うことがむずかしくなったり、結婚生活と職業とが労力的に両立しがたかったりして、そういう困難にぶつかると、女のひとはそれを我々の今日生きている社会のおくれた形から蒙っている男女の損失として見るより先に、わが心のうちに旧い呼び声をめざめさせられ、結局女はやっぱり女らしく、と新しい生活形態を創造してゆくための努力はすてる傾きが多い。

男のひとにしる、そういう社会的な障害にぶつかった場合、やはりとかく不満や居心地わるさの対照に女をおいて、女らしさという呪文を思い浮べ、女には女らしくして欲しい

ような気になり、その要求で解決がつけば自分と妻とが今日の文明と称するもののうちに深淵をひらいている非文明の力に金縛りになっているより大きい事実にはあまり目を向けないという結果になっている。

こういう面での押し合いは実に一朝一夕に、また一面的に解決されないものだから、近代社会は、その間に、たくさんの犠牲を生み出している。女らしさというものの曖昧で執拗な桎梏に圧えられながら生活の必要から職業についていて、女らしさが慎ましさを外側から強いるため恋愛もまともに経験せず、真正の意味での女らしさに花咲く機会を失って一生を過す人々、または、女らしき貞節というものの誤った考えかたで、わが人生もひとの人生も歪めて暮す心持になっている不幸な人々、そういう犠牲の姿は、多くの場合後から来る若い女のひとたちに漠然とした恐怖をおこさせる。そのことも肯けると思う。何故あのひとたちの生活はあすこに陥ったのだろうかという一節を辿りつめてそこに女を殺している女らしさを見出し、それへの自分の新しい態度をきめて行こうとするよりは、多くの場合ずっと手前のところで止ってしまうと思う。ああはなりたくないと思う、そこまでの智慧にたよって、自分をどう導いてゆくかといえば、自分の娘の代になっても社会事情としては何の変化も起り得ないありきたりの女らしさに、やや自嘲を含んだ眼元の表情で身をおちつけるのである。

この点での現代の若い女のひとの自嘲的な賢さというものを、それらの人たちは何と見ているだろう。もっともわるい意味での女らしさの一つであって、外面のどんな近代様式にかかわらず、そのような生きるポーズは昔の時代の女が生きた低さより自覚を伴っているだけに本質はさらに低いものであるということ率直に認め、それを悲しむ真の女の心をもっているであろうか。われから作っている女らしさの故に女の本心を失っている女たちという逆説も今日の現実では一つの事実に触れ得るのである。

まともに相剋に立ち入っては一生を賭しても解決はむずかしいのだからと、今日の文化がもっている凹みの一つである女らしさの観念をこちらから把んで、そこで女らしさの取引きを行って処世的にのしてゆくという態度も今日の女の生きる打算のなかには目立っている。それを現実的な女の聰明さというように見る女自身の誤りの上に、その実際はなり立っている。矛盾の多い社会の現象の間では、軽蔑に価する態度が、功利的な価値を現してゆくことも幾多ある。そんなこといったって、あの人はあれで名声も金もえているという場合もあるが、現代の若い女のひとは、人生の評価をそこで終りにしてしまわないだけには人間として成長もして来ているのではないだろうか。私たちの生きている時代は外廓的には随分進んでいるから、女のおくれている面で食っている女というものもどっさり出て来ている。真に女の生活のひろがりのため、高まりのため、世の中に一つの美をもたらそうという念願からでなく、例えば女らしさを喰いものにしてゆく女が、肉体を売る商売ではなく精神を売る商売としてある。

社会のある特殊な時代が今日のような形をとって来ると、女の職業的な進出や、生産へ労働力として参加する数や質のひろがり逆比例して、女らしい羨みだとか慎しさとか従

順さとかが、一括した女らしさという表現でいっそう女につよく求められて来ている。日夜手にふれている機械は近代の科学性の尖端に立っているものだけれども、それについて働いている若い女のひとに求められている女らしさの内容のこまかいことは、働いている女のひととして決して便利でものぞましいものでもないという場合は到るところにあると思う。そういうことについて苦痛を感じる若い女の心が、真率にその苦痛を社会的にも訴えてゆく、そこにも自然な女らしさが認められなければならないのだと思う。女自身が、女同士としてそのことを当然とし自然としてゆく気持が必要だといえると思う。こういう場合についても、私たちは女の進む道をさえぎるのは常に男だとばかりは決していえない、という現実を、被いなく知らなければならないと思うのである。

女の本来の心の発動というものも、歴史の中での女のありようと切りはなしてはいえないし、抽象的にいえないものだと思う。人間としての男の精神と感情との発現が実にさまざまの姿をとってゆくように、女の心の姿も実にさまざまであって、それでいいのではないだろうか。真に憤るだけの心の力をもった女は美しいと思う。真に悲しむべきことを悲しめる女のひとは立派と思う。本当にうれしいことを腹からうれしいと表現する女のひとは、この世の宝ではないだろうか。そして、あらゆるそれらのあらわれは女らしいのだと思う。

ある種の男のひとは、女が単純率直に心情を吐露するところがよとしているが、自分の心の真の流れを見ている女は、そういう言葉に懐疑的な微笑を洩すだろうと思う。現代の女は、決してあらゆる時と処とでそんなに単純素朴に真情を吐露し得る事情におかれてはいない、そのことは女自身が知っている。ある何人かの伶俐な女が、その男のひとの受け切れる範囲での真率さで、わかる範囲の心持を吐露したとしても、それは全部でない。女の真情は現代に生きて、綺麗ごとですんではいけないのだから。

生活の環がひろがり高まるにつれて女の心も男同様綺麗ごとですんではいけないのだし、それが現実であると同時に、更にそれらの波瀾の中から人間らしい心情に到ろうとしている生活の道こそ真実であることを、自分にもはっきり知ることが、女の心の成長のために避けがたい必要ではなかろうか。

これからのいよいよ錯雑紛糾する歴史の波の間に生き、そこで成長してゆくために、女は、従来いい意味での女らしさ、悪い意味での女らしさと二様にだけいわれて来ていたものから、更に質を発展させた第三種めの、女としての人間らしさというものを生み出して、そこで自身のびてゆき、周囲をも伸してゆく心構えがいると思う。これまでいい意味での

女らしさの範疇からもあふれていた、現実へのつよい<sup>う</sup>倦むことない探求心、そのことから必然されて来る科学的な総合的な事物の見かたと判断、生活に一定の方向を求めてゆく感情の思意ある一貫性などが、強靱な生活の腱とならなければ、とても今日と明日との変転に処して人間らしい成長を保ってゆけまいと思う。世俗な勝気や負けん気の女のひとは相

当あるのだけれども、勝気とか負けん気とかいうものは、いつも相手があってそれとの張

もろ  
り合いの上でのことで、その女らしい脆さで裏づけされたつよさは、女のひとのよさよりもわるさを助長しているのがこれまでのありようであった。

女の人間らしい慈愛のひろさにしろ、それを感情から情熱に高め、持続して、生活のうちに実現してゆくには巨大な意力が求められる。実現の方法、その可能の発見のためには、沈着な現実の観察と洞察とがいるが、それはやっぱり目の先三寸の態度では不可能なのである。

例えばこの頃の私たちの生活は、木炭のことについても、さまざまの新しい経験をしつつある。昔流にいえば、まだ一家の主婦でない若い女のひとはそんなことには娘時代の

のんき  
呑気さでうっかり過したかもしれないが、今日は、主婦でない女のひとも、やはりこのことには社会の現象として注意をひかれているのが実際であろう。古い女らしさに従えば、うまくやりくりして家じゅうに寒い目をさせず、しかも巧になるたけやすい炭をどっさり見つけて来る手柄に止っていたであろう。将来の女らしさは、そういう狭い個人的な即物的解決の機敏さだけでは、決して追いつかない。子供たちに炭のないわけを公平に納得させてやれるだけの社会についての知識と、そういう寒さをも何かと凌ぎよくしてやるだけのひろい科学的な工夫のできる心、歴史の時期としてユーモアと希望と洞察とでその事態を判断し得る心、そういうものが、女らしさの日常の要素として加って来る。そして、日常の諸現象について、妙に精神化の流行することについても冷静に見てゆく女のぼつちりと澄んだ眼が求められているのではないだろうか。それらのどれもが、近づいて見れば、いわゆる女らしさから何と大きい幅で踏み出して来ていることであろう。

刻々と揉む歴史の濤頭は荒くて、ふるい女らしさの小舟はすでに難破していると思う。私たちは、近代の科学で設計され、動的で、快活で、真情に富んだ雄々しい明日の船出を準備しなければならないのだと思う。

〔一九四〇年二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十四巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 7 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第九巻」河出書房

1952（昭和 27）年 8 月発行

初出：「婦人画報」

1940（昭和 15）年 2 月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 5 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 62.私の書きたい女性

宮本百合子

こんにち、わたしたちが生きている社会は複雑で、毎日の生活もはげしく変化していきま

す。文学の作品、とくに小説には風俗描写のおもしろみというものもあって、戦後にあらわ

れている多くの小説の中の女性は、若いひとを扱ったにしろ、中年から老年の女を描くに

しろ、大部分がその風俗小説的な角度であつかわれていることは、どなたもお気づきのと

おりです。

戦争がもたらした社会生活の大破壊のために、どんなつましい内気なひと、女として

人生に予想していなかった変動をうけています。その変動に対して、どう処してゆくか

ということも現実には決して簡単ではありません。

風俗小説の範囲で現実を見るだけでも、女の社会的な動きの一方には、婦人の参議院議

員からはじまって少女歌劇の女優、婦人作家をふくむ女重役というものがあらわれている

し、兜町・堂島に、女の相場がはやって来ています。その一方では、民主的な日本の新し

くすがすがしい生活建設をめざして美しく雄々しく、恋愛し、結婚して行きたいと願う若

い女性の大群が、実際生活のなかに本当の男女同権が確立するように働く人民としての女

性の独立が可能である条件を作ろうとして奮闘しています。

風俗小説、女に映り女によって表現されるさまざまな世相をそれなり面白く描写してゆ

きます。けれども、わたし達がこんにち生きる心の底には、色さまざまなネオンがいろん

な角度から空に反射しているような女の世相を見るだけでは満足しない何かの思いが貫い

ているのではないのでしょうか。

いろんな思いをし、いろんな目にあって生きてゆく。人間の一生はただそれっきりのも

のなのだろうか。この疑いは、とくに、いまの日本の女の心にはげしく息づいています。

女をしばる封建の道徳から自分をときはなして、新鮮で豊かな、ヒューマニズムを実感し

て生きてみたい。理屈の判断から社会悪に抵抗しているだけでなく、一歩その前へ出て、

よりましな人生をたたかっているという、人生創造のよろこびと確信とを求めようとして

いる女性の精神こそ、現代のテーマだと思います。情感そのものの内容が著しく社会的に、

また理性的になって来ていて、しらずしらずのうちに、思想を感情そのものとして生きて

ゆくような女性が増えて来ています。これは、日本の社会と文学との上にひらかれはじめ

た大きい可能性の一つではないのでしょうか。

新しいイヴは、男の肋骨の間からではなく、社会と女性の歴史そのもののなかから、さ

まざまな場面に生れつつあります。

わたしはその多様な開花の可能を書きたいと思います。

〔一九四九年七月〕



---

底本：「宮本百合子全集 第十五巻」新日本出版社

1980（昭和 55）年 5 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十二巻」河出書房

1952（昭和 27）年 1 月発行

初出：「私の書きたい女性」NHKラジオ

1949（昭和 24）年 7 月 18 日放送

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 6 月 4 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 63.新しいアジアのために ——アジア婦人大会によせて——

宮本百合子

いよいよきたる十二月十日から一週間北京でアジア婦人大会がひらかれます。そして日本からもそこに出席するために代表がえられました。これは現代の人類の歴史にとって深い深い意味をもつ新事実です。

世界地図をひらいて、アジアを眺めましょう。まず、アジアの北の広い部分を占めてソヴェト同盟の、いくつかの民族自治共和国をふくむ地域があります。広大なその地域と、これもまた広い中華人民共和国との間にはさまっているために、せまいように見える蒙古人民共和国があります。三十八度線を区ぎりとして、北朝鮮の人民共和国が見えます。その東に、太平洋に弓なりにかかって、わたしたちの祖国日本があります。

けれども、今日アジアの地図の中に見る日本は、わたしたちの心を苦痛でみたくします。ソヴェト同盟の国境、朝鮮、満州をふくむ中華人民共和国、ビルマ、シヤム、マライ、印度支那、フィリピン、とアジアの地図に描かれているどの国々をみても、こんどの戦争で日本の軍隊が侵略しなかった土地はありません。そしてそれらの国の果て果てで、平和な生活の中では勤勉な市民であり、思いやりのある若者たちでもあった数十・数百万の人々が、軍の力で気を狂わせられていなかったら、決して行わなかった残虐の数々を強いられました。その軍隊が壊滅した時、軍隊は同じその残虐さで数十万の人々をジャングルや山嶽の間にすてて餓死させ、白骨としました。

アジアの姉妹たちよ。そして日本の女性たちよ。アジアの地図の大半の土地からは、わたしたちが愛した者の最期のうめきがつたわってきます。わたしたちはそのような日本という祖国に生きて、毎日の生活苦と闘いながら同時に人類的なこの苦痛の克服について考えています。

アジアの近代の歴史は、苦しい隷属とそこから解放されようとする闘いの連続でした。印度をはじめとするアジアの諸国は、そのゆたかな天然の資源と、生産の発達が遅れている半封建的社会の条件を利用して、ヨーロッパの資本主義の植民地または半植民地として、土着の民族のいたましい生活がつづきました。

第二次世界大戦ののち、アジアとアフリカの民族は、こののろわしい関係を変更するために立ちました。中国の人々が、日本その他の国の帝国主義を排除して中華人民共和国となったばかりではありません。耐えがたい隷属の生活であればこそ、世界平和と民族の自立の要求は、アジア各民族の婦人たちの精神にはげしくもえたって、マライには七千人の婦人たちによる統一戦線がつくられました。ビルマでは一九四六年に全ビルマ婦人会議が組織されました。ここには四万人の婦人たちが参加しています。印度では一九四六年に、

民族解放のゲリラ隊によってテレンガン地方の五百万人の人口をふくむ二千五百の村々が解放され、はじめて民主的な人民の生活とはどういうものであるかを学びました。印度の婦人たちは、こんにち心から夫や息子と肩をならべて、人民の幸福のために活動しはじめました。

アジア婦人会議に出席する日本の代表たちは、他の諸国の代表の誰よりも、まじめで重大な使命を負っています。なぜならば、機会ある毎にアジア民族の解放を妨げることしかしてこなかった日本の帝国主義は、こんにちでも決してその根拠と、協力する勢力を失っておらず、現在ではますます日本の民主化とポツダム宣言による平和の確保がおびやかされてきているからです。この事情は、国内的には人民の生活に重すぎる税となって重荷を加え、婦人子供の辛苦はひとしお深まってきていることを意味します。失業はふえ、生活費は高くなり、生活の安定は社会の全面でくずれかかっています。

日本の状態は、日本のわたしたちのためばかりでなく、アジアの平和、ひいて世界の平和のために、きわめて警戒されなければならない状態です。日本の中には釈放された有力な戦争協力者たちが暗躍していて、この一年間に人民に対する抑圧とアジアの解放を妨げる仕事がある時はこっそりと、ある時は公然と法律をふりかざして行われてきています。

アジアの姉妹たちよ。わたしたち日本の婦人は、また再び日本という国をアジアの敵としまいと決心していることを信じて下さい。そのために、わたしたち日本の婦人は三つの闘いを同時にたたかわなければならない立場にあります。家庭の中にまだつよく残っている封建性と闘い、人民の民主化をそらそうとする権力と闘いながら、民族を隷属させようとする帝国主義と闘っています。わたしたちにとってこの闘いはむずかしい、そして力のいる仕事です。しかしこの闘いが勇気をもってなしとげられない限り、日本の婦人は、幸福になれないばかりか、人間らしいその良心を世界につたえる機会さえもてないでしょう。

アジア婦人大会は、アジアの曙を告げます。この大会からさしでる希望の光、激励と協力の光がアジアのすべての婦人に幸福への道をてらし、何をどのようにたたかうべきかについてゆるぎない方向を示すことを信じてうたがいません。

〔一九四九年十二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十五巻」新日本出版社

1980（昭和 55）年 5 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十二巻」河出書房

1952（昭和 27）年 1 月発行

初出：アジア婦人会議日本大会へのメッセージ

1949（昭和 24）年 12 月 16 日開催

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 6 月 4 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 64.新しい婦人の職場と任務

### ——明日の婦人へ——

宮本百合子

このかわいは昼も夜もわりあいに静かなところである。北窓から眺めると櫓の大木が一群れ秋空に色づきかかっている、おりおり郊外電車の音がそっちの方から聞えてくる。鉄道線路も近いので、ポッポポッポと次第に速く速く消え去って行く汽車の響もきこえ、一日のうちに何度か貨車が通過するときには家が揺すぶれる。毎夜十一時すこし過ぎてから通るのが随分重いとみえて、いつもなかなかひどく揺れる。それから夜中の二時頃通るのも。

机に向って夜更けの電燈の下で例のとおり小さな家をきしませながら遠ざかって行く夜なかの貨車の響きをきくともなく聴いていたら、すぐそれにつづくように又地響を立てて汽車が通った。ドドドドドドと重く地をふるわすとどろきにまじって、わーッ、わーッと人々の喚声がつたわって来た。雨上りの闇夜を、車輛のとどろきとともに運ばれてゆく喚声も次第に遠のいて、ついには全く聴えなくなってしまった。胸のどこかが引きはがされるような感じが苦しくしめつけるのであった。

私たちの周囲に見る女の生活、あるいは女が社会から求められているものの内容や質も、こういう刻々の感情をはらみながら、その一年間に何と急速に推移して来たことだろう。日本の女性の真実は、家庭にあつてのよい妻、よい母としての姿にあるとして、丸髷、紋付姿がそのシンボルのようにならされていたのは、つい今年の初め頃のことであった。そこで描かれていた女の理想は、あくまで良人の背後のもの、子供のかげの守り、として家庭の敷居内での存在であった。

ところが夏前後から、街頭に千人針をする女の姿が現れはじめた。良人を思い、子を思う妻と母との熱誠が、変化した社会の事情の勢につれて、街頭にあふれ出た。この時はもう優美な日本女性のシンボルであった丸髷はエプロン姿にその象徴をゆずった。

エプロン姿は幾旬日かの中に、良人にかわって一家の経営をひきついで行かなければならなくなった主婦たちの感情を反映するようになり、この多岐な一年の終りの近づいた今日では、女に要求されている銃後の力の内容は、明瞭に一家の経営の範囲を超えた。女の力は広汎な形で時局的な生産動員に向って招かれている。そして毎日、新聞で見る今日の銃後の女としての服装もエプロン姿から、たとえそれが**もんぺい**であろうと、作業服式の**もの**であろうと、ひとしくりしい裾さばきと、短くされた**たもと**とをもって、より戦闘的な型へ進んで来ているのである。

私たち女は一年間に自分の希望と選択とによってここまで変転して来たのだろうか。この答えは複雑である。しかし社会事情の急調な動きは一つの必然として、自覚するとしな

いとかかわらず、今日の婦人全体を新しい生活事情に導き入れており、そこではより社会的な規模で新しい生活能力の発揮されることを必要としており、新たな摩擦もおのずから生じて来ているのである。

ラジオの国民歌謡は、男は国の守りとして外へ出てゆき、家を守り家業にいそしむこそ女であるものつとめであるとかくりかえし歌っている。岡本かの子さんのような芸術家は、和歌に同じような思想をうたい、女の家居の情を描いておられる。だが、現実の今日においては、家を守り子を守るためにこそ、家を外にしなければならぬ女の数はかえって殖えている。この必要を認め、女のそういう奮起、たくましさよみすればこそ、良人の代りに緋のPATCH・ゴム長姿で市場への買い出しから得意まわりまでをする魚屋のおかみさんの生活力が、今日の美談となり得ているのではあるまいか。

若い女のひとたちに向って、家庭へかえれということがすすめられていたのは遠いことでないが、昨今は職業婦人といわれる女の仕事の範囲も、質的にいつしか、しかし的確に変化しはじめており、家庭へかえれという声もそこでは響きを失っていると見受けられる。職業婦人の働く場面というと、事務員、店員その他いわゆるサービス・インダストリーが従来は主要部分を占めていた。数の上からだけ見れば、今日も明日もそうであるかもしれない。けれども、時局の要求する生産拡充への大努力によって重工業、化学、食料、織縫などには、大量に女の力が吸収されつつある。全国に十万人も熟練工が不足を告げているという事実は、今日の大問題とされているのである。処々の大工場、実務学校などで熟練工の養成、再教育をしている中には、専門学校出の若い婦人を新たに機械工業のための製図師として再教育している実例もある。臨時工として種々の官営、民営工場に雇われ、工業部門に参加するようになって来た女の数はおびただしいものがある。市内のある工場で一挙に数百人の女工を求めて来たので、市の紹介所は、小紡績工場の操短で帰休している娘たちを八王子辺から集めて、やっとその需要にこたえた状態である。

さらに他方には、東京の巣鴨にある十文字こと子女史が経営している十文字高等女学校では、十文字女史の息子が経営している金属工場の防毒マスクの口金仕上げのために、昨今は自分の女学校の四年と五年の生徒の中の希望者を、放課後二時間ずつ働かせているという事実がある。女史は往訪の新聞記者に向ってこう語っている。「別に大した労働でもなく、こまかなやさしい仕事です。私もかねて皆に仕事をするということは自分をつくり上げることだといって教えていますが、子供たちも仕事をする気分を味って、朗らかに働いています」そして、巣鴨の学校から志村のその工場へ通うバス代と別に「相当した賃銀」を出していると語っている。

十文字女史によって子供たちといわれている娘も、女学校の四五年とあれば、もう女工としては十分に一人前である。毎日の二時間で、若い娘たちはどの位の口金仕上げをするのであろうか。賃銀はいくらなのだろうか。それらについては語られていない。ただ、これらの女学生であり女工である娘たちは、その労働で貰う「相当の賃銀」を「大抵は学資の一部にあてている」のだそうである。校長先生の息子さんの経営で軍需インフレで繁栄

している工場へ働いて、貰ったいくばくかの金を再び学校で、その阿母さんに払うのだとしたら、それらの可憐な女学生女工の二時間の労働というものの実質は、どこでどのように支払われたということになるのだろう。微妙深刻な形で、娘たちの家庭の苦しい経済事情と、時局国民精神総動員の声と、経営的手腕が複合して識者の眼に映ることは避け難い。教育当局が、若い女性に堅実な実務教育を希望しているのは事実であろうが、あながち十文字女史の方法を必ずしもよしとはしないのではあるまいか。

女学生の工場への動員は大阪でも行われている。二つの女学校の五年生が、このせつもしきたりにしたがって〇〇と書かれている工場へ、一週に一度ずつ交替に手伝いに出かけている。一つは市立の女学校であり、この場合の性質は、学校の経営的な原因より、むしろはっきり、戦時的認識を若い娘心に銘させようとする意味に立っているのである。

どの新聞雑誌を見ても、銃後の婦人の力の実質が、この頃は生産拡充への直接間接の参加というところに重点をおかれており、常に欧州大戦当時の欧州婦人の活動が引きあわされている。「今から女工を養成して置くように」という言葉は、すでに去る五月杉山陸相によって提言されていたのである。

日本の婦人の特徴ということを国際的な文化紹介としてあげ、優雅な日本の姿を欧米に紹介するための写真外交の見本として、きょうも新聞に見えたのは、高島田に立矢の字の麗人が茶の湯の姿である。ところが、そういう画面で日本の女を紹介する習慣をもっている日本が、平時から世界で一位二位を争うほど、婦人労働者によって生産を守られているという事実は、特に昨今何か新たな感動で私たち女の関心をひくことである。

各国の有業者の人口に対する比率で見ると、婦人有業者の第一位を占めるのはフランスであり、次がドイツ、続いて日本の順である。男の有業者との割合では、男五九・一に対する女三一・九で、婦人の働きての数の多いことでは日本がほとんど世界第一位を占めている。アメリカの婦人の活動性ということは人々の常識にうちこまれているが人口比率で見れば、男六一・三に対して一七・七が女という割合なのである。

フランスとドイツとの婦人たちが、欧州戦争であのように甚大な家庭の破壊を蒙った後、あらゆる部門に進出して一家の生活と社会の生産とのために働かなければならなくなっていることは、説明を要しない。

日本では、さらに工場労働者数の男女別で見ると、女子労働者が男の労働者の数を凌駕している。昭和四年においてさえ男工一〇〇に対して女工の数は一一五・七を示し、大部分が繊維工業に分布されている。これは、日本が近代工業国として持っている歴史的な独特性である。故細井和喜蔵氏によって著わされた「女工哀史」はそういう特性をもった日本の若い無抵抗な労働婦人が、ある時代に経なければならなかった生活記録として、世界的な意味をもつ古典なのである。

今日の生産拡充の要求は、これまでならばオフィス・ガールになったであろう若い婦人たちを生産面での活動に迎えると同時に、もとならば、紡績工場へ年期の前借で売られて

行った村の娘たちを、機械工業に吸収して「旬日ならずして熟練工化せんとする」方向にあらわれて来ている。

ビタミンABCでなじみぶかい理研のコンツェルンは、工学博士、子爵大河内正敏氏その他を主として、長野や群馬、新潟などの寒村に、「共同作業場ともいえないくらい小さな作業場」をつくり都会の大工場と同じ機械を使って造り出す能率の二倍以上の成績を、農村の子女によってあげている。智能と資本とを縦横に駆使して、イギリスの良品高価に対する良品廉価生産・高賃銀低コストを目ざす科学主義工業という呼び名が、これらの人々によって、資本主義工業の弱点を補強したものとして提唱されつつあるのである。

大河内氏の著書は、鶏小舎を改造せる作業場の中で、ズボンをつけ、作業帽をかぶりナット製作をしている村の娘たち、あるいは村の散髪屋を改造せる作業場で、シボレー自動車用ピストンリングの加工をしている縞のはんてんに腰巻姿の少女から中年の女の姿、その他の写真で飾られている。ここでは「いままで機械など見たこともない農村の子女が数日にして立派な熟練工となる」それのみか、五六ヵ月も働くと、銑鉄を削る百分の二耗の相異の目測さえするようになる。大河内氏は、日本の女子の天才の一つとしてそれを感歎し、それは改良されている機械の機構と、「その使いかたが単調無味であるように製作されてあるほど精密に加工されるから」「飽きることを知らない農村の女子が農業精神で」その精密加工に成功し「農村の子女が最も適当しているというのである」としているのである。

フォードが一品一工場としたやりかたで生産工程の組織では全国的にフォード化し分業化しつつ、しかも、村を決してその工業を専門とする工村にはせず、飽くまで副業にとどめて、古来のままの農業精神を主とし、農村全体としての文化の水準などはあるがままの上に農魂商才で行こうとするところに特色をもっている。大河内氏は日本の農業精神を土に親しみ、郷土を愛し、奉公の念に満ちているものと内容づけておられるのである。

つい先頃までは、鶏小舎であったところが一寸手を入れられて、副業的作業場となり、村から苦情の出るような賃銀をとって、重工業に参加する村の娘の若い姿は、いかにも工業動員の光景である。村の娘たちは、新しい自分の力にも目ざめてゆくであろう。不況な農村のありあまった労力が現金にかえられるところに、親のよろこびもあるであろう。

けれども、作業場といえ、おのずから採光や換気のこととも考えられる。日本が世界第一の結核国であり、若い女の死亡率が最高であることも考えられる。

工場の昨今では、早出、残業、夜業は普通であるし、設備の不十分な下請け工場の簇出と不熟練工の圧倒的多数という条件は、工場内での災害をこれまでの倍にした。警視庁がこれに対して、十二時間を限度とする警告を発したのは遠いことではなかった。母性保護の見地から婦人労働者の入坑を禁じた鉱山労働へ、女は石炭に呼ばれ、再び逆戻りしかけている。幼年労働の無良心な利用も問題とされているのである。

婦人が性の本然として生殖の任務をもっているということと、女は家庭にあるべきものという旧来の考えかたと、婦人が今日の社会事情の現実によって課せられている勤労の必然と、この三つのものは現代では未だ非常な紛糾、混乱した関係におかれていると思う。



ことに日本は、職業婦人、労働婦人が発生してからの歴史が浅い上に、自然発生的でどちらかという労働市場へずるずると入って来ているために、男女相互に、働くものとしての大局から損をしあっている場合が決してすくなくないのである。

たとえば賃銀についてみると、日本の男の労働者はイギリスなどに比べると一四・五%から三七%、大体三分の一ほどの賃銀で生計を立てているのであるが、婦人労働者になると、さらにその三分の一が標準となっている。昭和五年に、男が二円二十二銭一厘の実収をもっていた時、女の稼ぎは一日九十三銭であった。本年は、画期的な生産拡大による労働力の需要増と、物価騰貴、熟練工引止めなどの理由から、一般に賃銀は高くなった。もっとも低下していた昭和七年頃に比べると遙かに上っているが、男と女との差は埋められていないのである。

婦人の性の本来は生殖に重点をおかれているのであるから、社会労働は、常に男の補助の範囲であるのが自然であり、従って賃銀も、いわゆる世帯主としての負担のにない手である男よりやすいのが当然であるとする論者がある。こういう立場の論者は、男も女も同一労働に対して賃銀が同一でなければならぬという主張を、そもそも女の本然によって同一の能力があり得ないとして否定する傾きにある。たとえ労働条件が男と同じになったとしても、女が子を生むためのものである以上、男と同じ水準に達する余力をもたないというのである。

賃銀さえ男と同じになれば婦人労働者の生活が幸福となり、内容において高まると観るのはもちろん皮相でもあるし、非現実的である。けれども、婦人が自身の性の本然と勤労の必要との間で板挟みにあっている今日の苦しさは、女という性によって働き仲間である男さえ大部分の者はまだ彼女たちを補助的なものとして見るのに、企業はきわめてリアリストティックにやすく従順な労働力としての点から婦人を扱っているという実際の有様である。補助的なものという先入観で見られつつ現実にはその収入で一家を支えてゆかなければならない世帯主であるところに、異常な苦しみを負わされているのである。

銃後の力としての女の労働力は、決して貴方が七分、私が三分的な和気あいあいのものではない。その労作の面で課せられる仕事の実質は、大の男をどうじゃく 瞳 若 たらしめるだけのものなのである。科学主義工業の提唱者は、おおうところなく明言している。例外なしに、農村の子女に適当な機械と設備とをあてがえば熟練の大衆化によって、数日にして「大の男の熟練工と同じ程度の熟練さを習得するのである」と。男の補助ではなく、男の代るものとして、婦人の労働力は計算されている。産業の合理化で男の労働者数は減少して行っている時になお、女の数はずりつながら増大の線をたどって来ていることは女の労力が男に代り得て、しかもやすいという事実を雄弁に語っているのではなくて、何であらう。

女の性の自然と社会事情から必然とされる勤労とを考えあわせれば、男女同一の労働条件ということでは、まだ性の本来が守られ得ない。女が男と同じ賃銀をとることができて

も、その上に母性が必要とする生理的休暇、健康相談、托児所がなければ、婦人の勤労者として自然にしたがった生活はあり得ないのである。

しばしば例に引く科学主義工業の主唱者は、高賃銀低コストを目標としているのであるが、本年の春、ある村で作業場の賃銀が村の労銀の水準に対して高すぎるといふ苦情が出たことが報告されている。村の労銀というのは恐らく従来の救済工事の日当や日傭労働賃銀（女三十五銭ぐらい）を標準にしてのことであつたらう。むしろ意外な苦情を受けた専門家たちは「労銀が多すぎる為に起る弊害について大いに考えさせられた。副業が本業になることを恐れるためである」その問題は、それらの純朴な村の娘たちが一心に精密加工をする作業場を村営とするか、個人に対して多すぎる分は村へ寄附すればよいと解決されたのであつた。

よこた  
この間の消息を詳細に眺めると、やはりそこには無量の感慨を誘うものが横わっている。作業場の設置者、技術指導者は、きわめて公平といへばいえる率直さで娘たちが立派に男の熟練なみどころか、外国の技術者の五倍もの能力をもっていることを承認している。ところが、それに対する賃銀となると村の標準、しかも村の女の労銀との比較で問題になって、結局彼女たちの労力に対する報酬としては全く未熟練な日傭娘に等しいものを受けなければならなくなつて来る。これを、一つの社会的な矛盾と見るのは誤りであるといふ人がいふ得るであろうか。この矛盾的な賃銀問題の落着を可能にしている根拠は、科学主義工業がどこまでも農村生活の現状を保守して、副業にとどめて置こうとしているところにひそんでいるのである。強請して小規模で分散的な副業に止めておこうとする理由は「集団作業の心理状態には被傭人の気持が多く、共同作業場あるいは家庭工業には農業精神が横溢している」とされているのである。

これまでも、日本の女は、実に労を惜しまず、雑多な歴史の荷を足くびに引きずりつつ働き、かせぎして来た。今日はさらに一步すすめて、この複雑な諸条件はそのままで、いっそうの刻苦精励に向つてふるい立たされているのである。生活の新しい必要は、女に新たなたくましさを与えるであろう。新たな社会的な自覚をも与え、人間としての鍛錬をも加えるだろう。しかしそれは、十文字女史のいうように、ただ、働けば人間ができる、式の簡単な手順のものであろうか。人生とは、そのように、働きかける人間の意志や努力にかまひなく、ひとりで人間ができれば上れる仕組みのものであろうか。

新たな生活条件、古い生活条件、その間の摩擦そのものは、現実的には新たなねうちを生み出す可能性としてのみ存在するものである。一層生産面に結ばれなければならなくなつた若い婦人たちが、今日の中から何を身につけて来るか、何を学んで来るかによって、その人々の経験の社会的な価値と、女の歴史とは変つて来るのである。婦人が生産面により多く参加しつつあるということが、いきなり婦人の社会的条件の向上を意味しないことは明らかである。現代に処する女としての新しい義務は、今日欲する欲しないにかかわら

ず新しく増大され、拡大されつつある女の生活経験と、すくなからぬ犠牲との中から、や  
がて婦人全体の幸福を増すものかをつかんで来ようとする根強い努力にあるのである。

〔一九三七年十二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十四巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 7 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第九巻」河出書房

1952（昭和 27）年 8 月発行

初出：「婦人公論」

1937（昭和 12）年 12 月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 5 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

# 65. 婦人と職業

倉田百三

今日の社会状態において、婦人を家庭へ閉じこめて、社会の生活戦線における職業に進出することを防ぐことは不可能である。このことはたとえ理想的社会が実現されたる暁においても、当為としての法則として、婦人の就職を妨げるいわれはない。婦人も男子と同じく、その天分にしたがって、社会生活の職分を分担すべきである。それによって生活の充実と向上とまた個性の発展とをはかるべきである。実際今日においては職業婦人は有閑婦人よりも、その生命の活々しさと、頭脳の鋭さと、女性美の魅力さえも獲得しつつあるのである。われわれの日常乗るバスの女車掌でさえも有閑婦人の持たない活々した、頭と手足の働きからこなされて出た、弾力と美しさをもっている。働かない婦人はだんだんと頭と心の動きと美しさにおいて退歩しつつあるように見える。女優や、音楽家や、画家、小説家のような芸術的天分ある婦人や、科学者、女医等の科学的才能ある婦人、また社会批評家、婦人運動実行家等の社会的特殊才能ある婦人はいうまでもなく、教員、記者、技術家、工芸家、飛行家、タイピストの知的職業方面への婦人の進出は著しいものであるが、これらは将来理想的社会においても抑止さるべき理由はないであろう。

しかしながら婦人の職業的進出がそのまま婦人の生活向上、幸福増進の指標であると考えすることはできない。今日の婦人の職業的進出は一面たしかに婦人の生活欲望の開発と拡充との線にそえるものではあるが、他面においては生活のための余儀なき催促によるものである。男子が独力で妻子を養うことができないための共稼ぎの必要によるものである。適当の収入さえあれば、夫への心をこめた奉仕と、子どもの懇ろなる養育と、家庭内の労働と団欒とを欲する婦人が生計の不足のためにやむなく子供を託児所にあずけて、夫とともに家庭を留守にして働くのである。婦人には月々の生理週間と妊娠と分娩後の静養と哺乳との、男子にはない特殊事情がある。これは自然が婦人に課したる特殊負荷であって厳粛なものでありこれがある以上、決して、職業の問題について、男子と婦人とを同一に考えるべきものではない。この意味においては、われわれは蘇露のコロンタイ女史の如く、一にも二にも託児所主義であって、男子も婦人も家庭外に出て働くのが理想的であるという考え方にはどうも賛成できない。

子どもの哺乳と養育とは母親にとって、もっと重く関心と、心遣いせらるべきものである。動物的、本能的愛護と、手足の労働による世話と、犠牲的奉仕とが母性愛と母子間の従属、融合の愛と理解と感謝とに如何に大きな影響を持つかは思い半ばにすぎることがある。人倫の根本愛の雛型である母子間の結紐を稀薄にすることが理想的社会の結合を暖かく、堅くするとはどうしても思われぬ。婦人は少なくとも三人や、四人の子どもは産んでくれねばならぬ。そして一人の子どもの哺乳や、添寝や、夜泣きや、おしっこの始末や、おしめの洗濯でさえも実に睡眠不足と過労とになりがちなものであるのに、一日外で労働

して疲労して帰って、翌日はまた託児所にあずけて外出するというようなことで、果して母らしい愛育ができるであろうか。二十五、六歳で結婚するとして、相つぐ妊娠と分娩と哺乳と愛育とを考えれば、婦人と職業との問題は決して矛盾なく解決せらるべきものではない。子どものない婦人や独身婦人の場合は例外である。特殊な天才的才能を恵まれた婦人の場合も例外である。原則としては、理想的社会においては、普通の婦人は、自然が課したる母性としての特別任務をまず果して、それと両立し、少なくとも協定し得る限りにおいて、職業戦線に進出すべきものではあるまいか。

今日の社会では実に婦人は保護されていない。婦人としては男子の圧迫と戦うために職業戦線に出なければならぬ有様である。婦人の自由の実力を握るための職業進出である。婦人は母性愛と家庭とをある程度まで犠牲としても、自分を保護し、自由を獲得しなけれ

ばならない事情がある。これは結局は社会改革と男性の <sup>ほこ</sup>矜りある自覚とにまたなければならぬ問題である。母性愛と職業との矛盾は国家の保護政策を抜きにして解決の道はない。元来子孫の維持と優生という男女協同の任務の遂行が、女子に特別な負荷を要求する以上、男子が女子を保護しなければならないのは当然のことである。しかるに今日においては国法は男子の利益においてきめられ社会は母性と、産児と、未亡人とを保護しない。妊娠すれば職を失わなくてはならぬ有様である。しかも共稼ぎしなくては子どもを養育できない。男子は独立して妻子を養い得ぬのが普通となり、といて婦人の職業進出はますます男子の職を奪い、その労働条件を低下せしめる。これは今日の社会制度を改革しない限りは初めから無理な相談である。子どもの素質は低下せざるを得ない。ここにおいて前回に述べた婦人の社会的関心というものが重要になるのである。一切の婦人は熱心に社会、国家の革新を要請し、そのために協力しなければならないのである。

しばらく社会改革を抜きにして考えるならば、職業と母性愛とをできる限り協定させるよりほかはない。結婚するまでの就職はもとよりいいであろう。それは真面目な社会的訓練と知識とを与える。しかし結婚とともに職をやめて夫の収入に依頼し得る境遇はますます減じつつある。強いてやっつけていけるにしても、それよりも就職して収入を増し、家庭の窮迫を救いたくなるであろう。そしてそのことはまた家庭の団欒と母性愛を損じる。

職業か結婚かの問題は普通の婦人の場合結婚せずして幸福であり得るはずはない。結婚生活の窮乏に堪え得られないなら、共稼ぎして、母性愛と育児とをある程度まで犠牲にしても結婚すべきである。オールドミス<sup>1</sup>の職業婦人は特別な天才や、宗教的、事業的献身の場合のほかは見るも淋しく、惨めである。窮乏せる結婚生活が恋愛の墓場であるにしても、オールドミスの孤独地獄よりはなおまさっている。ヒステリーに陥らずに、瘠我慢の朗らかさを保ち得るものが幾人あろう。

(一九三五・三・二)

---

底本：「青春をいかに生きるか」角川文庫、角川書店

1953（昭和 28）年 9 月 30 日初版発行

1967（昭和 42）年 6 月 30 日 43 版発行

1981（昭和 56）年 7 月 30 日改版 25 版発行

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2005 年 1 月 6 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 66.明日をつくる力

宮本百合子

ともかく日本にも民主憲法ができた。明治二十二年にできた旧憲法では、支配する者の権力がどんなに絶対であり、人民はどんなに絶対従順にそれに服従しなければならないかということが眼目としてつくられていた。これは欽定憲法と呼ばれている。ここでは服従すべきものとして人民全体が扱われていたから、昔から男性に服従すべきものとして考えられていた婦人の社会的地位の改善などということはまったく眼の中に入れられていなかった。今度改正された憲法は、その中に、すべての人民は法律の前に平等であるとされていて、性別身分などの特権によって特別な利益を保護されることはないように規定されている。しかしその中に天皇という特別な一項がある。華族は世襲でなくなったが、天皇の地位は世襲であり、性別如何にかかわらず法律の前には平等であるといわれていても、天皇の一家の子供は、昔ながらに長男がその地位を継承するものときめられている。女子は差別されている。そのほか経済上、政治上において天皇という身分上の特権は十分に保たれている。主権在民という憲法にこういう矛盾が含まれていることは日本の歴史の特殊性である。ちょうど人間が胎児であったとき、その成長の過程で、ごく初期の胎生細胞はだんだん消滅して、すべて新しい細胞となって健康な赤ん坊として生れてくる。けれどももし何かの自然の間違いで、胎生細胞がいくつか新しくなりきらないで、人間のからだの中にのこったまま生れたとき、成長してのちある生物的条件のもとで、その細胞が異常な細胞増殖をはじめるとしてそれは癌という致命的な病気の名をつけられている。私たちは歴史の中にも、社会の伝統の中にも、日本らしいこういう矛盾、胎生細胞をもっていることについてまじめに知り、考えなければならないと思う。

しかし婦人が人民としての生活の中では性別如何にかかわらず法律の前に平等であると考えられるようになったことは、民法も改正して、あのおそろしい、妻の「無能力者」をなくするようになったし、男の子と女の子と財産に対する平等の権利も認められるようになった。夫と妻の財産に対する権利の平等、刑法上で婦人にばかり姦通罪がきびしかった点も改正され、離婚に対する権利の平等、母親の子供に対する親権も父親と等しいものに認められるようになってきている。これは日本でつくられた憲法、民法、刑法上での大革命である。けれどもポツダム宣言を受諾した二年目の私たちの生活での実際で、こういう制度の上の平等がどこまで実現されているかということはなかなかの問題だと思う。改正憲法のお祭りは五月三日に日比谷で大仕掛に行われた。けれども、あの日台所で燻い竈の前にかがみ、インフレーションの苦しい家事をやりくって、石鹼のない洗濯物をしていた主婦のためには、新憲法のその精神がはつきり具体化されたような変化はなかった。今日は男も女も、それが地みちの生活をしている人であるならば、字づらだけでの男女平等や解放だけで民主主義というものはあり得ないということを感じて来ている。あらゆ



る日本の婦人が今日ほどの時間を台所にしぼりつけられていて、どうして封建性からの脱却があるだろう。

こういう現実には反抗して、字づらで示されている平等と民主化のぎりぎりのところまで自分たちの若い生活を拮げようとしている若い男女もあると思う。戦争中は人間らしいたのしさを奪われて育った人たちは自由になったということ、民法で親の権利が削減されたということ、男も女も平等だわ、という考えを最も手近いところで表現しようとしているところがある。煙草をのむこと、お酒をのむこと、そとでどんなつき合いをしたってそれは自由、という考えかた。明治四十年頃に未熟であった日本の婦人解放論者たちが、まず自分たちの婦人の権利を示すシンボルのように考えて行ったそういう行動上の示威からはじまって、恋愛も結婚もすべての面で自分の思うとおりに生活していったいいのだという気持もある。ところがそういう「思うがままの生活」に近づいてこまかに眺めたとき、そこで若い女の人はほんとうに、自分が自分の運命の主人になって勝手気儘に振舞っているのだろうか。ここに大きくふかい疑問がある。今日の世の中で勝手気儘に振舞うためには、それだけ金が要る。日本の労働組合は一生懸命に同じ労働に対する男女の同じ賃金を求めて闘っているけれども、実際に婦人のとる給料はまだ男よりも少ない。しかし女の子の方が身なり一つにも金がかかる。絹の靴下は一足が八百円もして、それは二ヵ月しかもたないのだから。気儘に振舞う金が正しい労働から得られない実際、そしてまためいめいの家庭はインフレーションによって、せまいながらも楽しいわが家と歌われたそのつつましい安心のよりどころを失って、食べものの分配にからんでさえも、峻しい感情がひそめられるような状態になっている。こういう周囲の下で自由であろうとする気持、伸びるだけ伸び、飛び立ちたい心もちでいる娘の気持は何を頼りに拮がってゆくのだろう。そこには、ここでいわなくてもすべての人にわかっている悲しい広い病毒に飾られた道がある。そして今日どれほどの若い女性たちが、その生活の半分は堅気でありながらかげの半分では時々その道を歩く娘として生きているだろう。あるいはまた、いま歩いている道はまともな道だけれども、実にその道はすれすれに誘惑ととなり合わせていることを感じて生きていることだろう。若い女性たちの中に、この頃、はっきりこういう危険な状態を見分ける鑑識ができてきた。一見ささいなこの実力こそ私たちが大きい苦痛と犠牲を払って進んできた一歩前進の最もたしかな収穫であると思う。若い女性たちは自分もその一人としてきょうの人生を歩いている女性の大群の道幅というものを見きわめはじめてきた。あの道へはどのような過程で入ってゆくか、またこの道はどのような方向へ進むものか、そこを見きわめようとするまじめな眼ざしが見えてきている。これは実に嬉しいことだと思う。そして私たちは決して絶望することは要らないと思う。これらの若い人たちが自分たちの歴史の発展のいちばん確かな道として踏みしめてゆこうとしているのは、真実のある、男女がお互いに正直に協力し幸福に生きてゆく可能の保障された新しい社会関係をうちたててゆく道である。ほんとうに新しい人間らしい仕組みの社会をつくってゆくことに協力し、そうしてつくられる社会の下で更に美しく男女が協力して生きられる人生を計画している

と思う。

あらゆる職場、あらゆる学校の生活で、自然な協力が両性の間にもたれるべきだと思われてきた。その理解は相当行渡って来ている。けれども私たちの生活には習慣というものもあり、その習慣は、いつも進歩したものの考えかたよりはふるい。自分たちの心や感情にある習慣の一部が古いということがわかってきたと同時に、親たち、兄たち、または夫、そういうこれまで特に女の人の生活に対して多くの発言権をもっていた人たちの考え方の中には、もっとそれより根強いふるさのこっていることもわかって来ている。ちょうど新しいといわれる憲法に古い胎生細胞がのこっているように.....。

今日まじめに新しい男女の人民的な協力、その具体的なあらわれについて考えている人たちは、はっきりとこれらのふるさも認めている。自分の中にも周囲の中にもあるそれらの古い習慣と闘かって、自分たち自身の感情をもっと社会的な、はっきりした独立人としての男と女との協力の感情に育ててゆこうとしている。

年とったひとのためには、ただ若い華やぎとうつる青春の生活の基礎に健全なこういう種類の友だち、仲間、協力者としての異性の関係が成長していることを周囲にわからせようとしている。ところで、本当に人間らしい関係に立って男女が協力し合うということの実際は、どんな風にあられるものだろう。アメリカの漫画によくあるように男が女からかけられたエプロンをかけて、女の代りに子供のオムツも洗ってやる、と誇るかどうか。

一時のこと、特別な場合として勿論そういうことも起るのは生活の自然だけれども、男女の協力ということは、決して、今日あるがままの女の仕事を男が代ってしてやること、または、男のするはずのことを女が代ってやるという単純なことではない。もしそれだけが協力なら、戦争の間は、最も大幅に協力があったことになる。兵営と前線生活では婦人のすることがすべて不幸な召集された男の手によってされていた。銃後では、家庭を破壊されたすべての哀れな女性が、軍の労働者に代って武器製造をした。これがどんな人間らしくない、不幸の図絵であったかということは今日すべての男女が知っている。いまだに疎開から家族のよびもどせない良人たちは、良人であると同時に、その自炊生活において妻である。そしてこれは全く不自然だと感じられているのである。

そうしてみると、良人の協力ということは、今あるままの労力のひどい台所仕事をそのまま男もやってやるということではなく、台所家事仕事そのものにしる、もっと時間をとらない合理的なものにしてゆくそのことに協力することであるとわかって来る。男と女とが、互にほんとに男らしく、ほんとうに女らしく、安心して自分たちの性の人間らしい開花をたのしみながら、めいめいの特色による職能の特徴も生かしてゆく状態であることがわかる。性別いかんにかかわらず法律のまえに平等である、という憲法の実現のあらわれは、男も女も、自然な男女そのものとして生きられるものとして法律の前に平等である、という意味でしかない。不自然な条件におかれる男と女とを合わせて半分にされた状態での平等では決してない。現在の、妻に疎開されている夫たちの状態が、人間らしい男女平

等の状態ではあり得ないのである。

こう理解して来ると、わたしたちの人間らしい協力において、男が男らしく活潑に生き、女が女らしい全能力を発揮して生きるためには、先ずそういう協力の可能がある社会条件をつくってゆくということが、協力の第一項にあらわれて来る。女が女らしく生きるためには、すべての職場で女性の性は保護されなければならない。女性の性が保障されない社会では、男性の性も守られず、つまり恋愛も結婚も家庭生活における父母としての経済上の安定も保たれず、従って人間性も健やかにあり得ない。刑法で姦通罪において婦人には手落だった過酷さが改正されたとしても、私たちの日々の生活のなかの現実で経済危機が、市民生活のモラルの根柢をゆすぶっているとき、刑法の改正だけで人民の墮落と悲劇とはなくなる。

職場の組合の中では、この問題が実に微妙に悲喜劇的に現われる。わかった人は実によくわかっている。だけれども、所によっては憲法がかわろうが民法がかわろうが、男は男だという「見識」を強くもっていて、やはり命令者としての感情を捨てきらない若い男子たちもある。中には折角組合が自分たち働く者の全体としての条件の一つとしてかちとった婦人の生理休暇について、婦人たちを恥かしがらせるような批評をする人さえもある。実際今日組合は、婦人のために、つまり未来の妻と母のために、女性を保護する大切な生理休暇をかちとったのに、働いている仲間である男の人があまり若い娘を恥かしめる眼でこの問題を扱うために、婦人たちはちっともその休暇を利用できずにいるということさえもある。婦人が男と同じ労働、同じ時間に対して同じ賃金をとらなければならないということは、これは婦人のためばかりではなく男のためでもある。婦人の安い労働賃金、青少年の安い労働賃金、それはいつも成年男子の賃金の安定を脅かして来た。失業の予備軍となっている。しかしそういう点で共通の幸福を守ること、その協力の意味を理解しない男の人たちは、組合が要求するから仕方がないようなものの、女のくせに生意気だという感情を捨てきっていない。組合の中で婦人部と青年部とはよく調和して活動できるけれども、大人の男子組合員とは役員の選出の点でも、議題を出す分量でも、いろいろなことで女の人がまだまだ不満をもった状態におかれているところがある。そして、そういう職場の気分は巧に傭主につかまれ、利用され、働くものの一致を裂かれ、要求を力よわいものにしてしまう。

学校でも共学をはじめた。そういう大学がいくつかある。その学生たちと話してみると、やはりそこでもまだ男女は十分共学されていない。大学などでは一種のアカデミックな社交性というようなもので綺麗ごとに共学されていて、たとえばアメリカの大学の社会科の女子学生と男子学生とが、夏期休暇中の共同研究として、浮浪者の生活調査をやるとか、女子の失業と売淫生活に堕ちてゆく過程の調査だとか、そういう現実の共同作業をすることまではっていない。会合で討論して、代表を選出し、共同研究会をもつくらいまでのところしかっていない。ほんとうにむき出しに自分たちを示すような勉強も調査もスポーツもされない窮屈さがのこっている。

昨日あたりから上野の美術館で婦人画家ばかりの展覧会が催おされている。芸術の世界で、婦人ばかりの絵画、あるいは婦人ばかりの文学というものはないものだと思う。それなのに婦人画家だけ集まった展覧会が婦人画家たちからもたれているということは、日本の画壇のどういう実際を語っているのだろうか。それは日本ではすべての組合や政党に婦人部というものがあって、それがまだ社会の事情から独特の必要をもっているのと似かよった理由があると思う。つまり今日の資本主義社会の個人的な経済競争の中で、中小工業者が苦しいとおり、婦人画家の経済上、芸術上独立的な生活というものは非常に困難になってきている。画家の生活全体が困難になって、ごく少数の大家——その人の絵をもっていれば、やがて値が出て金になるという、家屋敷を買うような意味で買われる大家を除いては、新進画家の生活はまったく苦しい、それは出版事情の最悪な今の文学にも、また音楽にもいえる。婦人画家が画家としてはたしてどれだけの力量をもっているかということとはあらためて考えられなければならないけれども、かりに、その点でマイナスがあるとして、それというのもこれまで婦人全体の生活があまり差別的で、官立の美術学校でさえも女子の学生は入れなかったというような条件からもたらされていることである。それを克服するためには、いまこそ婦人画家その他の能力が発揮されるように、男子の芸術家が協力してゆくべきである。けれどもそれが行われなから婦人画家たちだけの集りや催しがもたれて行くことになる。そして日本の社会としての弱点は大変のろいテンポでしか克服されない。

婦人の実力がまだ低いから、社会的に経済的に、また政治的に平等であることは早すぎるといえる考え方は、ごく若い婦人の中にさえもある。私はそういう意見をもっている専門学校の女生徒に会ったことがある。これは考え深いことばのようであるけれども、実際は日本の社会全体の遅れをそのまま肯定し、女の人が才能をひしがれて一生を送らなければならない社会機構そのものを肯定したことではないだろうか。憲法と民法とが条文の上で男女平等といっているその実際の条件をこの社会の中につくり出してゆくことこそ、新しい意味での男女の平等な協力の中心眼目であろうと思う。

民法の改正は明治三十二年頃福沢諭吉が婦人のために力説した議論であった。当時日本の資本主義は小規模ながら興隆期にさしかかっている、日本の中産階級が経済能力を増してきていた頃、福沢諭吉がいうとおり、今日のブルジョア民法としての民法改正が行われ封建差別がとりはらわれたのなら、たしかに今のままの条文を適用されるような親の財産も、夫の財産も、娘たち、子供たち自身の財産もあり得たであろう。けれども今日金の値打が百分の一になり、まさに千分の一になろうとしているとき、どんな空想家が五人の子に一生の安定のために分けられる財産があると思っていよう。分ける財産に頼られないならば、自分のからだについていた財産である社会的な勤労能力というものこそ保障されなければならない。憲法は、すべての人民が働くことができるといっている。それは半分飢え、絞られながら、働らかされる権利があり、失業させられてよいという意味ではないはずだ。すべての人は教育を受けることができるといわれている。これも人間である以上、二十四

時間のうち十時間を労働に縛りつけられることはあり得ないということを意味している。人間は労働、休養、教育に二十四時間をわけてつかうのだから。

学生と職場の人たちとは、生活の違いがひどいように自分たちでも思っている。けれども、今日学生の何割がほんとうに学校に行っているだろう。行けない学生は何のために学校にゆけないかを考えてみれば、職場の人のおかれている衣食住の困難、そこからおこる

#### けなげ

人間性の歪み、それと闘ってゆく人間らしい健全さでは、学生も職場の人もまったく同じ条件のうえにおかれている。そしてそこには男と女の勤労者があり、男と女の学生がある。お互同士が自分たちの事情がどんなに似ているか、全く等しいかということを理解したとき、学生は人生的な社会的な感情で勤労者の生活を自分のものとして感じることができし、勤労する人々もいわゆるインテリに反撥する心、あるいは逆に買いかぶってインテリぶるみじめさから免かれる。そういうことをお互いに真からよく知り合った男と女が、職場にも学校にも家庭の中にもだんだんできかかっているということ、そこに私たちの明日の希望がある。これらの人々は古い習慣や生活感情に対して、ある程度までそれを傷つけないような方法を考えながら、しかし決して根本的には譲歩しないで、自分たちの働く者としての立場、その立場に立った夫婦としての生活、その立場に立った親子としての生活を建設しようとしている。

男女の協力ということ、社会的な生活態度としてとりあげるようになったのは、むしろおそすぎた。そのくせ目新しくもある。その矛盾から男女というと、何となく特別な儀礼的な方法や気分が予想される。外国映画などで目から入ることの外見だけの模倣が現われる。そういうエチケット風な外国の模倣が続くのは特に日本では四十にならないまでのことである。家庭をもって生活してゆけば、遊びのような「協力ごっこ」は立ちゆかない。もし協力というものを遊びごっこのような、恋愛遊戯の一つのエチケットのように扱うならば、結婚と一緒にそれは幻滅するであろう。——最も深い意味で、最も永続的な意味で、最も責任のある意味で協力が必要とされてきている時期に……。

協力ということの幅は非常に広いと思う。深さも深い、それはとりもなおさずわたしたちが女として生きる一生の歴史そのものではないだろうか。ほんとうに協力すべきものとして、男と女が互に理解し、その理解のうえに立って愛し合い、そして生涯を生きてゆくならば、協力の場面の多さと、協力の意味の多様さとその変化の多さにびっくりしないではいられないと思う。協力はいつでも前掛けをかけているとはきまっていない。協力は時に全く前掛けのあることと、竈のあることと、借金のあることを忘れることにあらわれる。そうかと思えば、猛烈にその借金を返すことに努力し、自分たちの生活破壊から自分たちをまもるために協力が発揮されることもある。協力は笑う、協力は最も清潔に憤ることも知っている。協力は愛のひとつの作業だから、結局のところ相手が自分に協力してくれるその心にだけ立って自分の協力も発揮させられてゆくという受身な関係では、決して千変万化の人間らしい協力の花を咲かせることはできない。愛されるから愛すのではなくて、

愛すから愛すのだということを知りはじめています。自分がほんとうに新しい社会をつくるために、自分たちの女であるという喜びと誇りと充実した人生を希望するならば、そういう人間の希望を理解する男の人に協力して生きることがうれしいことであると思う。働いて生きてゆかなければならないということを知り、人民の女性としてのその心から自主的な協力が生れるし、自主的な協力の理解をもった女性のところへこそ、はじめて浮気でない、いわゆるエチケットでない協力ということをまじめに理解した男性が見出されてくるのであろう。

思えば戦争は何という生活破壊を行ったろう。今日日本の人々は七千万といわれるうちに、婦人の人口比率は三百万多くなっている。戦争によって未亡人になった婦人はいたるところにいる。この婦人たちの生活こそ、男女の新しい意味での社会的な協力ということについて深刻な問題を提出していると思う。社会が封建的であればあるほど妻の境遇も苦しいが、また未亡人の立場は切なく、生きにくい。良人がいる生活の中では、男手一つにしろ何とかなるものが、女世帯となつてますます男手があるとき、そういう協力は自然にへってしまう。それは何と情けないことだろう。未亡人の生活になげられたのは、明朗な社会的な協力というよりも、親族的な配慮であり、さもなければうけるのも苦しいというような異性の好意である場合が多い。若いしっかりした良人を失った女性たちは、こういう経験をとおしてだけでも、どんなに仕事の上での又生活の上でのさっぱりとしたよりになるほんとの男女の協力を願っているかもしれないと思う。

家庭の重荷ということばは、いつも婦人の側から激しくいわれる。けれども、今日の日本でどうして男の人でもそう感じていないといえるだろう。まったく個人的にまもられ、まったく個人の努力で営まれているわれわれの一つ一つの家庭、しかも戦争の間暴力的な権利でそれをちりぢりばらばらに壊されてしまっていた家庭、それを今日インフレーションの中で再建してゆく努力は、男も女も互にくらべてみれば、決してまさり劣りはないと思う。女の才能がこの社会と家庭生活の事情の中で伸ばされていないことは、男の天質も決して人間らしく伸ばされてはいないことを語っている。才能も殺されている。それに対して女が遺憾に思う気持ちと、男が遺憾に思っている気持ちとを互に知りあい信じあうこと、そして遺憾のない人間の生き方が、一つでも殖える可能のある社会条件を自分たちの一生のうちにつくってゆこうとする協力、人間は歴史的な存在であるから、私たちの協力も歴史の課題から抜け出すことはない。世界が連合国憲章をつくって、真から戦争とファシズムに反対し、一つの民族によって隷属させられる条件を否定している現代の歴史の中で、男と女は互の隷属から解放され、人間の仲間としての両性として生きられるように協力しようとしている。男と女を人民という名にくるめてこれまで抑圧してきた歴史を、根柢から新しく喜ばしいものに変えてゆこうとするために人民として協力してゆくのだと思う。

〔一九四七年九月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十五巻」新日本出版社

1980（昭和 55）年 5 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 4 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十二巻」河出書房

1952（昭和 27）年 1 月発行

初出：「新女苑」

1947（昭和 22）年 9 月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 6 月 4 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 67.明日の知性

宮本百合子

一

第二次ヨーロッパ大戦は、私たち現世紀の人間にさまざまな深刻な教訓をあたえた。そのもっとも根本的な点は国際間の複雑な利害矛盾の調整は、封建的で、また資本主義的な強圧であるナチズムやファシズムでは、できなかったという事実である。もっと進歩した、もっと合理的な方法でなくては——ただ殺戮、侵略、武力では、国際間の問題は解決しないということをもつて学んだ。

このたびの大戦の結果は、二十五年以前の第一次世界大戦のときよりも、いっそうまざまざと人間理性の勝利の意味、民主的社会の価値を教えたのだが、それにつれて、世界の女性のうごきも、独特の飛躍発展を示してきている。日本はこの十数年間、鎖国の状態で、世界事情は知られなかった。そのために、スペインの民主戦線に有名なパッションナリーアと呼ばれた婦人がいたことも知らなければ、大戦中フランスの大学を卒業した知識階級の婦人たちの団体が、どんなにフランスの自由と解放のためにナチス政権の下で勇敢な地下運動を国際的に展開したかということも知らなかった。耳も掩われ、眼もかくされ、日本の女性は戦争の犠牲とされた。

去年の春ごろ、内山敏氏が、ある雑誌にトーマス・マンの長女のエリカ・マンが、弟のクラウス・マンと共著した「生への逃亡」について、エリカ・マンの活動を紹介しておられた。この短い伝記は、感銘のふかいものであった。知識階級の若い聡明な女性が、そのすこやかな肉体のあらゆる精力と、精神の活力の全幅をかたむけて、兇暴なナチズムに対して人間の理性の明るさをまもり、民主精神をまもったはたらきぶりは、私たち日本の知識階級の女性に、自分たちの生の可能について考えさせる多くのものをもっているとおもふ。

トーマス・マンというドイツの民主的精神をもつ作家の名は、日本にもよく知られている。「ブッテン・ブローク」や「魔の山」「ロッテかえりぬ」などは翻訳でひろくよまれている。マンには六人の子供たちがある。長女エリカ・マン。そのつぎのクラウス・マン。この人は反ナチ作家で、ヒトラーが政権を確立させてからはオランダで、『ザンムルング』という反ナチの文学雑誌を発行していた。ロシアの作曲家チャイコフスキーを題材とした

パセティックシムフォニー  
「悲 愴 交 響 曲」という作品がある。二男は歴史家であるゴロ・マン。次女モニカはハンガリーの美術史家の妻。三男ミハエルはヴァイオリニスト。末娘のエリザベート・マンがピアニストで、イタリーの反ファシスト評論家ボルゲーゼと結婚しているそうである。



内山氏の紹介によると、エリカ・マンは一九〇五年生れで、日本流にかぞえれば四十四歳になっている。幼年時代を、たのしく愛と芸術的な空気にみちたトーマス・マンの家庭に育って、十八歳で学校を卒業すると、ベルリンへ出て、マックス・ラインハルトの弟子になった。ラインハルトといえばドイツの近代劇と演出の泰斗である。(ナチスきっての芝居の多かった男ゲーリングも、ひところ門下に加っていた。ナチスの大がかりな舞台効果は、はからずもゲーリングのこの経歴が役立ったといわれている。)

ラインハルトの下で女優となったエリカ・マンは、やがてハンブルグでおなじ俳優であるグリュントゲンスと結婚した。グリュントゲンスは才能はあったが、あとではナチスに加って、ベルリン国立劇場支配人と立身したような性格であったため、エリカの結婚生活はながくつづかず、離婚して故郷のミュンヘンにかえった。そして、国立劇場や小劇場に出演した。ショウの「セント・ジョン」でジャンヌ・ダークを演じたりして好評をえている。

エリカ・マンには、女性にめずらしい特長があり、疲れを知らない行動力、強靱な運動神経がある。ヘンリー・フォードが催したヨーロッパ早まわり競争に参加して、十日間に六千マイルを突破して一等になり、フォードより自動車を一台おくられたことがある。この早まわり競争の道づれも弟のクラウスであり、しかも早まわり記事を新聞におくり、あとから一冊にまとめて「歐洲一周」として本にした。

一九三〇年に入ってから、ヒトラーのナチスは総選挙で多数党となり、ドイツの全人民

#### くびき

が知識階級をもこめて、その野蛮な 軛 の下に苦しむ第一歩がふみ出された。どうして、第一次ヨーロッパ大戦後のドイツに、ヒトラーの運命が、そんな人気を博したのであったろうか。内山氏の紹介は、「まったく敗戦後のドイツの姿は、今日の日本を彷彿させるものがある」と当時の事情にふれている。大戦後の混乱は有名なマークの暴落をひきおこし、一方にすさまじい成りあがりを生み出しながら、中産階級は没落して、エリカ・マンさえ靴のない春から秋までをすごさねばならぬ状態におちいった。絶望し、分別を失ったドイツの民衆は、それがなんであろうと目前に希望をあたえ、気休めをあたえるものにすがりつき、いかがわしい予言者だの、小政党だのが続々頭をもたげた。

ヒトラーのナチスも、はじめはまったくその一としてあらわれた。当時のドイツは軍国主義教育でやしなわれていたから、戦争に負けさえしなかったなら、という感情が民衆の心につよくのこっていた。そこへ巧みにつけ入って、ドイツ民族の優秀なことや、将来の世界覇権の夢想や、生産の復興を描き出したヒトラー運動は、地主や軍人の古手、急に零落した保守的な中流人の心をつかんで、しだいに勢力をえ、せっかくドイツ帝政の崩壊後にできたワイマール憲法を逆転させる力となったのである。

アメリカにわたってから、エリカ・マンが語った意味ふかい警告が、内山氏の紹介に録されている。それはエリカ・マンが「私はドイツにいるあいだ(中略)政治のことは政治家にまかせておけばよいというあやまった見解でした。私ども多くのものがそう考えたた

めに、ヒトラーが権力を握ったのです」そして「事実上ドイツ文化を代表するすべてのものが亡命する」結果になったのであると述べている点である。ドイツの知識人たちは、ナチスの運動がその背後にどんな大きいドイツの軍国主義者と資本家の大群をひかえているかということに洞察せず、馬鹿にしていたために、祖国とその文化とをナチスに

じゅうりん

蹂躪されつくした。

一九二〇年代のドイツは、左翼が活躍し、ドイツ共産党も公然と存在していた時代であった。その時代に育ったエリカ・マンが民主主義の精神をもち、日に日につのるナチスの暴圧に反抗を感じたのは自然であった。エリカ・マンは、はじめ小論文や諷刺物語を書いて反ナチの闘争をはじめたが、一九三三年一月一日、ミュンヘンに「胡椒小屋」(ペッパー・ミル)という政治的キャバレーをひらいて、おなじ名の諷刺劇を上演したり、娯楽と宣伝とをかねた政治的集会を催し、演劇的才能と行動性とを鋭刺と発揮して活動しはじめた。

ところが二月二十七日の夜、ドイツ国会放火事件がおこった。真の犯人はナチスであるが、それを口実に共産党への大弾圧を加えるために、計画された陰謀であった。また反ナチ派の勢力の下にあったバイエルン州のミュンヘンでは、この報知をきいても、ナチの悪計とは知らず、エリカ・マンの胡椒小屋は謝肉祭の大陽気で、反ナチの寸劇などに興じていた。

あくる朝、すべての興奮は恐怖にかわって、全ドイツの人々が国会放火の真実の意味を知った。ナチスは、その火事を機会として、ドイツ中の共産黨員、社会主義者、民主論者、平和論者、自由主義者、ユダヤ人の大量検挙をはじめたのであった。ヒトラーの手先がミ

マンジ

ュンヘンにも入ってきて、公共建物のすべての屋根に気味わるい卍の旗がひるがえることになった。

トーマス・マン夫妻は、おりからスイスに講演旅行に出かけていてエリカとクラウスとは、もう一刻も安住すべきところになくなったドイツを去る決心をなし、スイスの両親にそちらにとどまるようにと電報して、ただちにスイスのアローザへおもむいた。こうして、ドイツの知識人の代表的なトーマス・マン一家の亡命生活が始まったのであった。

当時トーマス・マンは、「ヨゼフとその兄弟」という作品の執筆中で、原稿があわただしくみすてられたミュンヘンの家にとりのこされたままであった。トーマス・マンのために、このたいせつな原稿は、どうにかしてとり出さなければならない。父を愛するエリカは、農婦に変装した。そして、いつぞやの早まわりで賞品としてもらった小型フォードにのりこみ、ミュンヘンに潜入し、危険をおかしてひとたびはすてた家に忍びこんだ。そして原稿を盗み出し、真夜中に、もう二度とみる希望のないその家を去った。

二

エリカ・マンの「胡椒小屋」は四年間、オランダ、スイス、オーストリア、チェコ、ベルギー等を巡業し、いたるところで喝采をえた。小粒ながらも胡椒のきいたその移動演劇は、ナチスにとっては小柄な蜂のように邪魔であった。エリカは、舞台のうえにいていくたびか狙撃された。が、無事に千回以上の公演をつづけたが、一九三六年、解散させられた。チューリッヒで、「公安妨害」の口実で公演禁止されたのをはじめとして、ナチス外交官が出さきの外国でまでエリカの活動を妨害して、とうとう、それを解散させてしまったのであった。この時分に、エリカ・マンはイギリスの詩人ウイスタン・オーデンと結婚した。スペイン人民戦線軍に従軍したオーデンは進歩的な作家で、のちには中国の抗日戦にも参加し、「戦線への旅」という作品がある。

スペインの内乱とともにヨーロッパはますます戦争の危険にせまられた。エリカ・マンは、一九三六年、アメリカへゆき、スペイン救済の必要と、ナチス・ドイツが、戦争の温床であることを警告した。第二次大戦が勃発してから、エリカ・マンの反ナチ闘争と民主主義のためのたたかいはいっそう広汎におこなわれ、「生への逃亡」ではドイツの亡命知識人の物語を描いた。これらの人々がなにゆえにドイツを去らなければならなかったか、ということについて劇的に描かれた物語である。

大戦直後に刊行された「もう一つのドイツ」も弟クラウスとの共著であるが、ここには、ナチス・ドイツ以外のもう一つのドイツのあることを訴えたものであった。ドイツの国民性を解剖し、ワイマール共和国の功罪を論じ、一知識人の日記の形でナチス運動の発展のあとをたどり、ナチス以外のドイツが、ヒトラー打倒のためにどうたたかっているかを訴えた。「野蛮人の学校」では、ナチス治下の教育が、どんなにドイツの少年たちを毒しているかをあからさまにしたもので、映画化され、世界に深甚な影響をあたえた。エリカ・マンはまた子供のための冒険物語「シュトツフェルの海外旅行」をも書いているそうである。

ナチス・ドイツの絶滅した今日、エリカ・マンはふたたび故国のドイツの土をふんでいようであろう。が、行動性にとみ、民主精神に燃える彼女に、敗れはてたドイツの姿はどううつっているであろう。ことばにつくせない犠牲をはらったドイツの民主主義のために、エリカ・マンの美しいエネルギーは、まだまだ休む暇はあたえられていないのである。

ふかい犠牲をはらった民主主義への道と書かれている内山氏の紹介の文章をよむとき、私たちの魂にひびく共感がある。ほんとうに！ 私たちの日本が、民主主義の黎明のためについやした犠牲は、なんと巨大なものであったろう。かぞえつくせない青春がきずつけられ、殺戮された。知性もうちひしがれた。民主の夜あけがきたとき、すぐその理性の足で立って、嬉々と行進しはじめられなかったほど日本の知性は、うちひしがれていたのがあった。

日本にエリカ・マンはありえなかった。けれども、いまやっと、人間の基本的人権の確立がいわれるようになったとき、日本の知識階級の若い女性たちは、自分たちめいめいの運命の開花の問題として民主主義社会建設の課題を、どのように真剣にとりあげはじめていようだろうか。自分の才能の達成と、愛の達成そのもののために、民主社会の諸条件が

どんなに必須なものであるかを、どのように理解しはじめているだろうか。

「キュリー夫人伝」を書いて、日本にもしたしまれているキュリー夫人の二女エヴ・キュリーは、一九四三年に「戦士のあいだを旅して」という旅行記をニューヨークから出版した。それがさいきん「戦塵の旅」という題で、ソヴェト同盟旅行の部分だけ翻訳出版された。一九四一年十一月より五ヵ月ばかり、連合軍側の戦時特派員という資格で、アフリカ、近東、ソヴェト同盟、インド、中国を訪問し、ファシズム、ナチズムに対して民主主義をまもろうとする国々のたたかひの姿を報道した。「ポーランドに生れ、フランスに眠るわが母マリー・スマロドオスカ・キュリー」という献辞のついたこの旅行記は、日本語に翻訳されている部分だけでも、ふかい感興をうごかされ、エヴの公平な理解力と人間としての善意にうたれる。

エリカ・マンの各国巡業、エヴの戦時中の旅行。それらはどれもすべて、民主主義と、平和と、民族自立のための旅行であった。侵略に抗する世界の善意としての旅行者であった。

東京裁判のラジオをきいている私たちの心の苦痛はいかばかりであろう。私たちは、世界の女性に向って叫びたいとおもわないだろうか。私たち日本人がすべてこういう兇暴な本性をもっているとはおもわないでください！ と。日本にあふれている寡婦の涙をおもってください！ と。けれども、同時に私たちは、身の毛のよだつおもいで省みずにいられないとおもう。日本の半封建の権力は、なんと文化そのものを美しさにおいて無力な、血なまぐさいものにしてきたのだろうか、と。

日本の婦人作家が幾人か、戦時中、海をわたって、彼女たちにとってはじめての海外旅行をし、他国の人々に接触した。そのとき、それらの人々のおかれた役割はなんであったろう。侵略の銃につけられた花束であったというのだろうか。それとも、故国にとりのこされている無数の妻や母たちに、女のあたしたちも行くところ、と侵略の容易さや、いつわられた雄々しさのうらづけをするためであったろうか。客観的に歴史のうえにみたとき、これらの旅行者は決してエリカ・マンや、エヴ・キュリーのような善意の旅行者ではありえなかった。

婦人の知性は、洗われ、きよらかにされ、明日の生命をあたえられなければならないとおもう。去年の春の選挙に婦人代議士がどっさり出て、そのことは、知識階級の婦人たちをかえって失望させもした。そして、その騒々しさからは幾歩か身をはなしておいて、政治的には発展せず、政治屋ふうになった一部の婦人のうごきを眺めている気分も感じられる。

けれども、私たちは、自分の身につける肌着が清潔であるか、ないかという責任を、誰にゆだねているだろう。わたしたち自身が自分の身のしまつはしている。そうだとすれば、どうして自分の一生の価値のため、そのゆたかさと同様な希望の実現をもたらす生きかたとして民主的方法の確立のために、素直になり、まじめにならないでいられよう。私たちの心情には一つの熱望がある。それは日本の女性の真の心を、世界の女性につたえたいお

もいである。だが、それには世界に通じることばがなければならない。「民主的日本の女性から」という生きたことばが確立されなければならない。

〔一九四七年二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十三巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 11 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十一巻」河出書房

1952（昭和 27）年 5 月発行

初出：「女性改造」

1947（昭和 22）年 2 月号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 4 月 23 日作成

2005 年 11 月 14 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 68.明日の実力の為に

宮本百合子

どんな時代でも文化について政策が考えられるとき、それが建設的でなければならないということは誰も云っていると思う。政策という言葉に建設性がこもっているという風な解釈さえあると思う。けれども、実際にあたると、文化は複雑な有機体であって、建設的である過程も甚だいりくんでいる。

この間こんな話をきいた。明日の日本の文化と精神の建設について研究してそのための役についている人から、日本人にはもっとシェークスピアを理解させなければいけない。そう云っても「ハムレット」だの「オセロ」だの「リア王」だのを一つ一つ読んだりして理解することは一般民衆には出来ないのだから、一つあらゆるシェークスピアの作品の一つにぶちこんでとかして、その中から一つのストーリーをまとめて映画にでもすれば、日本の民衆はシェークスピアを理解することが出来るだろう。いくらか誤りがあるかもしれないが大略はそういう意味の意見をきいたそうだ。こういう意見も文化に対する政策というものが、その一つの構成要素として現在の幅のなかにふくんでいるものであろう。

日本の民衆にシェークスピアを理解させたいという希望が、そういう方法で思いつかれることは誰も無限の感想を唆られると思う。

このような例は過去の文化上の貴重な遺産の整理ということについて、決して笑話に終らない本質をもっていると思える。

ドイツでは、大層盛大なワグナー祭典が行われていたり、ゲーテやシラーについて政府としての評価が語られたりしているようだ。

文化に対する理解がそこにあるとされているが、そういう国では現在青年群に与える読みものとしてそういう古典を整頓しているほか、その青年たちが成人したときその世代の文化的創造力を涸渾旺盛ならしめるために、どんな独創の可能を培いつつあるのだろうか。

世界史が書きかえられている。そのことはまざまざと私たちの胸から指のさきまで脈をうって伝わっている。世界史がかきかわり、日本も世界史的規模で新たになってゆくという現実のよりどころは、文化に即して云えば窮極のところ次の世代の創造の可能性如何にかかっているのが事実である。

携帯口糧のように整理された文化の遺産は、時にとって運ぶに便利であろうけれども、骨格逞しく精神たく、半野生的東洋に光を注ぐ未来の担いてを養うにはそれだけで十分とは云い切れまいと思える。

三代目<sup>えぐ</sup>ということは、日本の川柳で極めてリアルに抉<sup>えぐ</sup>って描写されているが、今から先の三代目という時代の日本というものを文化の面でも切実深甚に考慮しなければならないのだから、世界は複雑に複雑にと推移しているのだから、単純きわまる主観人と

して三代目が出現したりしたら、愛するわれらの国はどうなるだろう。今日は常に明日につづいている。ここに深い意味がある。

〔一九四〇年十月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十四巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 7 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第九巻」河出書房

1952（昭和 27）年 8 月発行

初出：「日本学芸新聞」

1940（昭和 15）年 10 月 25 日号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 5 月 26 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。



## 69.明日の劇壇へ

岸田國士

注文により、「劇壇へ！」と呼びかけはしましたが、少くとも今日の私にとって、その相手は何処にゐるのかさっぱりわからないのであります。

劇壇とは、劇場を中心として、俳優、劇評家、作者、装置家、その他の演劇関係者を網羅した一社会を指すものであるなら、現に存在しないとは云へないのであります。その社会には、今や、脈絡なく、秩序なく、理想なく、希望なく、発言者なく、傾聴者なく、権威なく、輿論なく、たゞあるものは、商業主義の盲断と、これを繞る因襲の跋扈のみであります。

商業主義も可なり、因襲も亦可なりですが、演劇の社会にあつては、一方、これを刺戟しこれを誘導する創造的機運が、その何処かに動いてゐなくてはなりません。

わが「劇壇」の現状は、遺憾ながら、かういふ機運の成長を阻むあらゆる要素から成立つてゐます。

今日まで、新劇運動と称せられた少数者の青年的意気は、勿論、既成劇壇に対して一個の未来を対有すべき生命でありましたが、この生命は、これを育むものゝ独善主義によつて、早くも涸渇してしまひました。演劇の本質を無視した新しい演劇運動といふものが、遂に実を結ばないのは、今に始まつたことではありません。

私はこゝで、わが「明日の劇壇」のために、日本の現在にのみ適用する二三の希望を陳べておきたいと思ひます。

先づ第一に、これからの戯曲は文学としての評価に甘んじてはなりません。これは既に云ひ尽された議論であるかの如く見えますが、所謂「舞台的」といふ言葉が、もう一度吟味されてからのことです。

次に、これからの俳優は、所謂「演出者」の傀儡でなく、この点、もう一度「新劇以前」への逆戻りであつてかまひませんが、先づそれぞれ人間としての特殊な魅力を養ふべきです。

更にまた、これからの演出者は演出者である限り、俳優の「領分」に立ち入つてはなりません。それよりも、俳優に自分の「領分」を荒されないやうにすることが肝腎であります。

最後に、これからの観客は「面白くないもの」をはつきり面白くないと云つてかまはないでせう。欠伸を噛み殺して徒らに感心する必要はないのです。その代り、面白かつたら、遠慮なく盛んな拍手を送り、俳優に俳優たるの幸福を満喫させていたゞきたい。これはこれからの演劇のために、一般が与へ得る唯一無上の協力であります。

---

底本：「岸田國士全集 21」岩波書店  
1990（平成 2）年 7 月 9 日発行

底本の親本：「読売新聞」  
1932（昭和 7）年 1 月 13 日

初出：「読売新聞」  
1932（昭和 7）年 1 月 13 日

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2007 年 11 月 20 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 70.明日咲く花

宮本百合子

文学の歴史をみわたすと、本当に新しい意味で婦人が文学の活動に誘い出されて来たのは、いつも、人民の権利がいくらか多くなって、すべての人が自分の考えや感じを表現してよいのだ、という確信を得た時代であった。

明治はじめの自由民権が叫ばれて、婦人がどしどし男子と等しい教育をうけ、政治演説もし、男女平等をあたり前のことと考えた頃、日本では、木村曙「婦女の鑑」、若松賤子「忘れ形見」などの作品が現れた。若い婦人としてよりよい社会を希望するところもちとぐるりの生活とのいきさつとを描いた作品である。それ以来樋口一葉をはじめ、明治大正を通じて今日までには幾人か、相当の文学的業績をもつ婦人作家がある。が、日本の民主的な文学の流れは、昭和のはじめ世界の民主主義の前進につれて歴史的に高まり、プロレタリア文学の誕生を見た。その当時、その流れの中からこそ、これまでとちがった勤労婦人の中からの婦人作家が出て来た。佐多稲子、松田解子、平林たい子、藤島まき、壺井栄などがそうである。これらの婦人作家は、みな少女時代から辛苦の多い勤労の生活をして来て、やがて妻となり母となり、本当に女として生きてゆく希望、よろこび、その涙と忍耐とを文学作品に表現しようとして来た人々なのである。

戦争の永い間、私たちは声を奪われ、文字を奪われた生活を耐えて来た。その黙らされていた日々を、私たちの精神は、何も感じずに生きて来たというのだろうか。

時が来れば苔にさえ花は咲くものを。あの苦しさ、あの思いを、女として全生活の上によく  
ようよう  
蒙って来た日本の婦人が、今日、これから 漸々 そのことについて語り、生活のよりよい建設に参加する意志に立つ文学を生み出すことを、どうして期待せずにいられよう。私たちに言葉がある。今その言葉で、真実を語りはじめようとするのである。

〔一九四六年十一月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十三巻」新日本出版社

1979（昭和 54）年 11 月 20 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 5 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十一巻」河出書房

1952（昭和 27）年 5 月発行

初出：「文学新聞」第 1 号

1946（昭和 21）年 11 月 1 日号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003 年 4 月 23 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 71.明日

豊島与志雄

或る男が、次のようなことを私に打明けた。――

手紙というものは、どんなものでも、そう嫌なのはないけれど、ただ一つ、僕が当惑するのがある。近日ちょっとお伺いしたいのですが、御都合のよい時日を知らせて下さいませんか、云々、といったような手紙だ。殊に、返信用の葉書なんか封入してあると、全くまいる。

先方では、忙しい時に訪問しては失礼だし、工作中など邪魔してはいけないという、甚だ鄭重な意向であることは、それは分っている。然し僕にしてみれば、如何に忙しい最中でも、いきなり来て貰った方がいい。時日を指定するとなると、手紙では、少なくとも中一日くらいの余裕を置かなくてはならない。そしてその時日には、必ず待っていなければならぬ義務が生ずる。そういう義務に縛られることが、僕には苦痛なんだ。それに大抵、そうした時に限って、仕事の予定が狂って、最後のぎりぎりの忙しい場合になっていたり、急に他の用事が出来たり、また、何かしら外出したくなったりするものだ。幾日の何時頃逢いましょうと、そういう予定が立派に立って、そして先方にも無駄足をかけずに済み、こちらでも仕事の邪魔をされずに済み、万事調子よくやっつけていける人は、実に仕合せだ。

僕の予定は、一日くらいなら立てられる。朝のうち電話でも打合せておけば、その日中のことなら、立派に約束を守られる。けれども、明日になると、もういけない。明日の負担を負わせられることは、今日の僕にとっては、堪え難いことになる。「今日」というものは、現実的に存在する。然し、予想されたる「明日」というものは、僕にとっては、現実的には存在しない。それはただ架空のものだ。その架空の中に置かれた現実的な義務は、僕には苦痛の種となる……。

まあ大体右のような話だったが、それを話す時の彼は、頬に赤みがさして、内心苛立っているようだった。その様子を見ながら私は、彼が異常な場合にいることを悟った。つまり、彼にとって、「明日」が凡て架空だというのは、あらゆる「明日」のことを呑みつくすほどの重大な、ただ一つの「明日」が存在するのであって、而もそれが、甚だしく不安定なものだということである。健康の問題か、思想の問題か、恋愛の問題か、金銭の問題か、而もそれがせつまつまった事柄で、いつ彼の全生活を震撼させるか分からないようなものなのである。

実際、彼は異常なそして危険な場合にいたことが、後で分った。

ところで、そうした危険な場合、大抵は、それは間接的な表現を取る。重大な「明日」の存在が、普通の「明日」の否定を以て表現される。なぜだろう。世間体の故か。一種の体面の故か。或は、直接の表現に堪え得ないような貴重な脆いものがあるか。後になって、そのことを彼に話すと、彼は異様な微笑を浮べて答えた、実生活は

文学とは異ると。

それならば、文学ではどうだというのだろう。実際、文学では、普通の「明日」のないような人物や場合が、屢々探求される。それが文学の最も感動的な部分とさえも云える。そしてそれは、どんな風に表現されているだろうか。

\*

文学に於ても、特殊なものは、間接な表現によって強く表明されることが多い。

ゴンチャロフの「オブローモフ」の中に、面白い一節がある。オブローモフは移転を家主から迫られているが、考えただけでも、移転のごたごたに堪えることが出来ない。従僕のザハールはそれに対して、ふと、他の人達もみんな引越しをする、上手に引越しをする……と云い出す。その時、オブローモフは椅子から飛び上って怒鳴りつける。「他の人達は上手だって！ そうか、俺がお前にとって、他の人達と同じだということは、今ようやく分った。」

之は最も効果的な表現である。他の人達と同視されることを憤慨するのは、如何なる直接的な自己主張よりも、一層強い自己主張になる。自分はいかだかあだといかに説き立てても、他の人達と同視されるのを憤慨することには遠く及ばない。他の人達と同様だということをお否定するのが、最も強い自己主張になる。

恋愛などの場合は、こうした手法が屢々用いられる。一人の女を愛している時、その女を如何に深く愛するかと説くよりも、他のあらゆる女に一顧も与えないことを説く方が、より強くその愛が表現される。さまざまな美しい女性にとり巻かれても、それらに一瞥も与えないことは、つまりそれらを凡て無視することは、ただ一人の女性を重視することになる。

こういうのは、比較の問題ではない。絶対的な問題である。

ドストエフスキーの「悪霊」の中にあつたことだと記憶しているが、面白い対話がある。

A——「吾々は馬鹿だな。」

B——「どうして君は馬鹿なんだ。」

A——「僕は馬鹿じゃないさ。」

B——「僕だって、君よりは馬鹿じゃないよ。」

言葉は違ふかも知れないが、こういう風な対話だと私は覚えている。ところで、おかしなことには、AもBも、自分は馬鹿ではないと云いながら、そして実際そうかも知れないが、それでもなお、吾々は馬鹿だということは否定されずに残る。この否定されずに残るものが、最も重要であつて、この場合にはそれが最初に云われただけのことである。多くの場合、それは最初にも最後にも云われない。オブローモフの場合には、それが云われなかった。云われなかったけれども、云われる以上に主張された。

文学に於て、いつも吾々が注目し考察するのは、云われる云われないに拘らず、その最も重要な一事である。前に述べた男の場合のただ一つの「明日」である。「明日」は僕にとって凡て架空だという言葉の裏の、本当に重大な一つの「明日」である。その「明日」を、

どうして、直接に表現出来ないのでしょうか。直接に表現出来ない所以を、彼は、実生活は文学とは異なるという言葉で云ってのけた。実生活では実際、それは直接に表現し難い。何故かを説明することは今の私には興味もてない。然し文学に於ても、何故直接に表現出来にくいのでしょうか。吾々が注目し考察するのはそれであり、而も直接にそれを表現したいからこそ、実生活は文学とは異ると云い得るのである。それが直接に表現出来なければ、文学もやはり実生活同様まだるっこしいものに過ぎなくなる。

\*

凡そ文学者は、普通の場合に於ても、「明日」を待っているであろうか。確実に予想され得る現実的な「明日」を待っているであろうか。

前の「馬鹿云々」の話ではないが、一般に、吾々文学者には明日がない、ということが云い得られる。その時もし一人の文学者が、説者に尋ねるとする、どうして君には明日がないんだと。説者は恐らく答えるだろう、なあに、僕には明日はあるさ。すると、問者もこう云うだろう、僕にだって、君以上に明日がないということはないと。然しながら、両者の個人的な意見は、そのまま真実であるとしても、この場合は何等の力も持たず、ただ、吾々文学者には明日がないということだけが、生きて残る。

文学者とはそういうものなのである。というより寧ろ、文学とはそういうものなのである。そしてこの場合の「明日」の否定は、前の或る男の話と同様、明日のあらゆる事柄を呑みつくすほどの、或る重大な不安定な「明日」の存在を意味する。そうした「明日」を、文学者は注視し思考しているし、それが文学の中核となるのである。

卑俗の排除、偏見慣習の否定、日常性との闘争、不安懷疑の奥底の探求、そうした事柄はみな、右の事情から来る。

文学者は、或る何等かの壁にぶつかって、虚無のうちに身を横たえなければならないことがある。然しながらこの虚無は、全然の虚無ではない。それは、重大な明日のために、普通の明日を否定することに外ならない。もし「明日」が全然存在しないとすれば、どうなるか。自殺への途しかないであろう。それは「悪霊」のスタヴローギンの最後の場合である。

虚無の中から創造されたもの、云い換えれば、否定の底に肯定される異常な「明日」を直接に表現されたものを、私は文学に要求したい。尤も、この直接の表現とは、創作技法上の形式を指すのではない。技法上の形式はどうでもよろしい。何等かの肉体的なつながりがあればよいのである。それはただ「何等かの」で差支えない。肉体的なつながりそのものが、文学に於ては直接の表現になる。

ところで、一歩退いて考えれば、というのはつまり、余りにつきつめた物の云い方をしたので、一息ついて気を弛めてみれば、吾々は普通の場合、異常な「明日」を却って否定して、尋常な「明日」を肯定することが、屢々である。絶壁の上に立っていると、そこから墜落はしないことを知っていながら、墜落しはすまいかという疑懼のために後に引戻されることがある。これは日常性の復讐だ。この復讐は、強力であると共に誘惑的でさえあ

る。日常性の復讐に敢然と対抗し得るだけの覚悟が必要であろう。

最初に述べた或る男は、其後、私に次のようなことを云った。——あの当時僕は、所謂背水の陣を布いて生きていた。この背水の陣というものは、まかり間違えば、凡てを投げ出して自殺するというような、そんななまやさしいものではない。異常な「明日」を責任を以て肯定するという、やさしいようで実は非常に困難な覚悟の肚をすえていたのだ。



---

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社

1967（昭和 42）年 11 月 10 日第 1 刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2006 年 4 月 24 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 72.明日

新美南吉

花園みたいにまつてゐる。  
祭みたいにまつてゐる。  
明日がみんなをまつてゐる。

草の芽  
あめ牛、てんと虫。  
明日はみんなをまつてゐる。

明日はさなぎが <sup>てふ</sup>蝶になる。  
明日はつぼみが花になる。  
明日は卵がひなになる。

明日はみんなをまつてゐる。  
泉のやうにわいてゐる。

らんぷのやうに <sup>とも</sup>点つてる。

---

底本：「日本児童文学大系 第二八巻」ほるぷ出版

1978（昭和 53）年 11 月 30 日初刷発行

底本の親本：「赤い鳥」赤い鳥社

1932（昭和 7）年 10 月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1932（昭和 7）年 10 月

入力：菅野朋子

校正：noriko saito

2010 年 12 月 9 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

---

# 73.あゝころ

## ——幼ものがたり——

上村松園

父

私が生まれたのは明治八年四月二十三日ですが、そのときには、もう父はこの世にいら  
れなかった。

私は母の胎内にあって、父を見送っていたのであります。

「写真を撮ると寿命がない」

と言われていた時代であったので、父の面影を伝えるものは何ひとつとてない。しかし  
私は父にとっても似ていたようで、母はよく父のことを語るとき、

「あんたとそっくりの顔やった」

と言われたものです。それでとき折り父のことを憶うとき、私は自分の顔を鏡に映して  
みるのであります。

「父はこのような顔をしていなさったのであろうか」

そう呟くために。

祖父

祖父は、上村貞八といって、天保の乱を起こした大阪の町奉行大塩平八郎の血筋をひい  
たものであると伝えられています。

その当時はお上のせんぎがきびしかったので、そのことはひたかくしに隠して来たのだ  
そうです。

この祖父が京都高倉三条南入ルのところにもあるちきり屋という名代の呉服屋につと  
めて、永らくそこの支配人をしていましたそうです。

夏は帷子、冬はお召などを売る店として京都では一流だったそうです。

この貞八が総領息子に麩屋町六角に質店をひらかせましたが、三年目には蔵の中に品物  
がいっぱいになったと言われていました。

ところが、京都のどんでん焼きとも言い、また鉄炮焼きとも言って有名な蛤御門の変で、  
隣の家へ落ちた大砲の弾から火事を起こし、その質蔵も類焼し、一家は生命からがら伏見  
の親類へ避難したのです。

そのときは母の仲子は十六、七でしたが、そのときの恐ろしさをときどき話していただきました。

元治元年の年のことでもあります。

間もなく四条御幸町西入奈良物町に家をたてて、そこで今度は刀剣商をはじめました。参勤交代の大名の行列が通るたびに、店には侍衆がたくさん立たれて、刀や鐔を買って

はや  
行ったそうで、とてもよく流行ったそうです。

また帰国のときには子供用の刀や槍がどんどん売れたそうで、これは国表へのお土産になったのであります。

### 葉茶屋

それも間もなくのことで、御一新になり、天子様が御所から東京の宮城へお移りになられたので、京都は火の消えたようにさびれてしまい、廢刀令も出たりしたので、刀剣商をたたんでしばらくしもたやでくらしていましたが、母の仲子が養子を迎えたので、それを機会に葉茶屋をひらきました。養子の太兵衛という方はながらくお茶の商売屋に奉公していたので、その経験を生かそうとしたわけでもあります。

葉茶屋の家号を「ちきり屋」と名づけたのは、祖父がつとめていた呉服屋の家号をもらってつけたのかもしれませんが。

もっとも葉茶屋に「ちきり屋」というのはむかしからよくある名だそうですから、べつだん呉服商の「ちきり屋」にチナまなくともつけられたのではありまじょうが……

今でも寺町の一保堂あたりにいぜんの面影が残っていますが、私の家の店は表があげ店になっていて、夜になるとたたんで、朝になると下へおろし、その上に渋紙を張った茶櫃を五つ六つ並べておきます。

店の奥には棚ものといって上等のお茶を入れた茶壺がたくさんならんでいました。

私は子供のころから——さよう、五つの頃から絵草紙をみたり、絵をおもちゃ描きしたりすることが好きで、店先のお客さんの話を聞きながら、帳場の机に坐りこんで、硯箱の筆をとり出しては、母のくれた半紙に絵ばかりかきつけていました。

いつ来ても絵ばかりかいているので、お客さんはよく笑いながら、母に、「あんさんとこのつうさんは、よほど絵がすきとみえて、いつでも絵をかいてはるな」と、言っていたのを憶えている。

店へ来る画家の人で、桜花の研究者として名をとっていた桜戸玉緒という方が、極彩色の桜の絵のお手本を数枚下さって、うまくかけよ、と言ったり、南画を数枚下さって、こ

れを見てかくとええ、などとはげまして下さった。

また甲斐虎山翁が幼い私のためにわざわざ刻印を彫って下さったこともあります。その印は今でも大事に遺してあります。

### 絵草紙屋

私は絵の中でも人物画が好きで、小さいころから人物ばかり描いていました。

それで同じ町内に吉野屋勘兵衛——通称よしかんという絵草紙屋がありましたので、私は母にねだって江戸絵や押絵に使う白描を買ってもらい、江戸絵を真似てかいたり、白描に色をつけては悦んでいました。

また夜店をひやかしていますと、ときどき古道具の店に古い絵本があつたりしますので、母にねだって買ってもらうのでした。

母は私が絵を買うとさえ言えば、いくらでも、おうおうと言って買ってくれました。将来絵かきにするつもりではなかったのでしょうけれど、好きなものなら——と言った気持ちから訊いて下さったのでしょう。

たしか五つか六つの頃と思います。

お祭によばれて親類の家へ遊びに行ったときのこと、その町内に絵草紙店があつて、なかなかいい絵があるのです。

子供心にほしくてほしくてたまらなかったが、親類の人に遠慮して言い出せずもじもじしていたが、折りよくそこへ家の丁稚が通り合いましたので、私はこれ幸いと、丁稚に半紙へ波の模様のある文久銭を六つならべて描いて、

「これだけ貰って来ておくれ」

とことづけて、やっとそれを買うことが出来ました。

文久銭というのを知らないので絵にして言づけた訳ですが、あとで母は、この絵手紙を大いに笑って、つうさんは絵で手紙をかくようになったんやなア、と言われました。

ガス燈も電燈もなかった時代のことで、ランプを往来にかかげて夜店を張っている。その前に立って、芝居の役者の似顔絵や、武者絵などを漁っている自分の姿をときどき憶い出すことがあります。あの頃は何ということなしに絵と夢とを一緒にして眺めていた時代なので私には懐かしいものであります。

芝居の中村富十郎の似顔絵など、よしかんの店先に並んでいる光景は、今でも思い出せばその顔の線までハッキリと浮かび上って来るのです。

### 北斎の挿絵

母は読み本が好きで、河原町四条上ルの貸本屋からむかしの小説の本をかりては読んでいられたが、私はその本の中の絵をみるのが好きで、よく一冊の本を親子で見あったものでした。

馬琴の著書など多くて——里見八犬伝とか水滸伝だとか弓張月とかの本が来ていましたが、その中でも北斎の挿絵が好きで、同じ絵を一日中眺めていたり、それを模写したりしたもので——小学校へ入って間もないころのことですから、ずいぶんとませていた訳です。

字体も大きく、和綴じの本で、挿絵もなかなか鮮明でしたからお手本には上々でした。

北斎の絵は非常に動きのある力強い絵で、子供心にも、

「上手な絵やなあ」

とあって愛好していたものです。

貸本屋というのは大抵一週間か十日ほどで次の本と取り替えにくるものですが、その貸本屋はいたってのん気で、一度に二、三十冊持って来るのですが、一カ月経っても三カ月しても取りに来ません。

四カ月目に来たかと思うと、新しい本をもって来て、

「この本は面白いえ」

と言って置いてゆき、前の本を持って帰るのを忘れるという気楽とんぼでした。

廻りに来るのは、そこの本屋の息子ですが、浄瑠璃に大へん凝って、しまいには仕事をほり出して、そればかりうなっている仕末でした。

息子の呑気さに輪をかけたように、その貸本屋の老夫婦ものんびりとしたいい人達でした。

いつでも店先で、ぼんやりと外を眺めていましたが、とき折り私が借りた本を返しにゆくと、

「えらいすまん」

とあって、色刷りの絵をくれたりしました。店にはずいぶんたくさん本があり、私の好きな絵本もありました。

御一新前に、その老夫婦が勤皇の志士をかくまったそうですが、その志士がのちに出世して東京で偉い人になったので、

「お礼返しに息子さんを学校へ出してやろう」

と言われたので、老夫婦は息子をつれて東京へ行ってしまいました。その時たくさん本を屑屋へ払い下げて行ったそうですが、あとでそのことをきいて、

「あれをたくさん買って置けばよかった」

と残念におもいました。

母が用事で外出をすると、留守の私は淋しいので、母の鏡台から<sup>べに</sup>麝脂をとり出して、半

紙に、それら北斎の挿絵をうつしていましたが、母は帰って来られると必ず、二、三枚の絵を土産に下さいましたことも、今は遠い思い出となってしまいました。

### 小学校時代

仏光寺の開智校へ入学したのは、七つの年でした。

絵が好きなものですから、ほかの時間でも石盤に石筆で絵を描いたり、庵筆（鉛筆のことを当時はそうよびました）でノートに絵をかいたりして楽しんでいました。

五年か六年のころ、はじめて図画の時間というものが出来ましたが、そのときはとても嬉しかった。

図画の時間が出来てから学校へゆくのがたのしみになってしまいました。

そのとき教えていただいた先生が中島真義という方ですが、最近八十五歳で歿<sup>な</sup>なられたるまで、ちょいちょい私の家へ遊びに来られて、あの頃の話も出ました。

私は遊歩の時間でも皆と一緒に遊ばないで運動場の隅で石盤に絵ばかりかいていました。

友だちが寄って来て、私が常子というのでみんなが、

「ふうさん、うちのにも描いてな」

と、言ってさし出すのです。私はいい気持ちになって、花やら鳥やら人物やらを、それに描いてやったものです。

その友だちはまた日曜になると家へ集まってくるので、私はいろいろ [# 「いろいろ」は底本では「いろいろい」]の髪<sup>な</sup>の形を考えては、その女の子たちの髪を結ってあげたもので、研究しているうちに、どんな人はどのような髪を結うたらいいかが判り、それが将来絵を描く上に大へん役立ちました。

私は私流の髪もずいぶん考案しましたが、子供心に、むかしの型の髪を、なるほどよく考えた、ええ型やな—と思ったものでした。

中島先生は私の絵に見どころを感じなさったのか、いつでも、しっかり描けよ、と激励して下さって、ある時、京都市中の小学校の展覧会に私の絵を出品させて下さるほどでした。

私はそのとき煙草盆を写生して出したのですが、それが幸い入賞して御褒美に硯をいただきました。

この硯はながらく私の側にあって、今でも私の絵の一助をつとめていますが、この硯をみるたびに中島先生のご恩をしみじみと感ずるのであります。



小学校のときに、もう一人前の女の着物や帯や髪のことを判っていたので、よく近所の人が、着物や帯のことをたずねに来られたことがありました。

将来美人画に進もうという兆しがそのころからあったとみえて、女性の画ばかり描いていたのが、自然に覚えこんでしまったものでありましょう。

そのような訳で、小学校をすますと画学校へ入りましたのも、べつだん画で身を立てようという訳ではなく、

「好きなものなら画の学校でも行っていたらよかろう」

母がそう言ってやって下さったものなのです。小学校でも絵の時間は特別に念入りに勉強した私ですから、画学校へゆけば天下はれて画がかけるといっているので、私はどんなに嬉しかったことでしょう。

私は、そのときばかりは、母の前で泣かんばかりにして感謝したものでした。

私の画道へのスタートは、この画学校をもって切られたと言っていいのです。

画学校に入る話が決まったとき、子供ごころにも、何かしら前途に光明を見出した思いをいただきました。

---

底本：「青眉抄・青眉抄拾遺」講談社

1976（昭和 51）年 11 月 10 日発行

入力：鈴木厚司

校正：川山隆

2007 年 4 月 24 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

[#...] は、入力者による注を表す記号です。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。

傍点や圏点、傍線の付いた文字は、強調表示にしました。

## 74.あとながき (『幸福について』)

宮本百合子

私たち日本の女性が今日めいめいの生活にもっている理想と現実とは非常に複雑な形で互に矛盾しからみあっている。しかもその矛盾や葛藤の間から、私たちの二度とくりかえすことのない人生の一日一日が生み出され、歴史は発展しつつある。

今日すべての人々が困難に感じていることは何だろう。それは現実があまり切迫して、

早い速力で <sup>うつ</sup> 遷って行くから、一つの行動の必要が起ったとき、その意味や価値をじっくり自分になっとく出来るまで考えているゆとりがなく、ともかく眼の前の必要を満たすように動かなければならないということではないだろうか。あらゆる現象が私たちに考えることを要求している。それなのに、そのあらゆる現象そのものの流れの早さが、逆に私たちに考えるべき時間さえあたえない。

こういう現実の激しい流れと、生活の流れが、無意味なものではなくて、はっきりと歴史をすすめるものであることを、私たちは改めて感じ合おうとして、この一冊の本は読者の生活の中におかれる。

夏の幅広い河の流れの中に一つの石が立っている。河の流れはその石にぶつかって波立ちしぶきをあげ小さい虹を立てる。この光景は美しい。水というものが、どんなに変化することが出来、虹となってかかることが、一つの石のあるために証拠立てられる。この本が複雑な激しい希望と困難とのまざり合って流れている今日の生活の中であって、この石のように、読む人の一人一人の人生はどんなに価値のあるものであり、個人は、どんなに歴史の中でその歴史を変えながら人間の幸福の可能のために、戦うものであるかということが、知らされて行けば、嬉しいと思う。

この集は第一部第二部と分れている。第一部はおもに一九四〇年頃かかれたもので、『明日への精神』や『私たちの生活』などの中から選ばれた。第二部は一昨年から最近までのものがあつめられている。

この本にとり集められていない沢山の問題が、今日の女性生活の中にある。七八年前は、「異性の間の友情」とか、「恋愛論」としてしか一般の常識の上にとりあげられなかった両性の社会関係についての考察が、この本の最後に集録されている文章の中では、はっきりと明日の、より幸福の約束された社会をつくるための、男女の新しい社会的協力としての面からとり上げられている。「異性の間の友情」の中で最も中心的に語られたのは、この協力の課題であった。けれどもあの時には人々の心にそれは特殊なものとして受け取られていた。

今日新しい社会的な環境の中で、両性の協力ということを友情や、恋愛の感情の基本にあるものとして、一般がとり上げ初めたこと、そして私もその角度から率直に、話せるよ

うになって来た事。このことを考えただけでも、日本の社会が絶大な犠牲を払って歩み初めた今日の意味はどんなに深いかが分る。

一九四七年七月十八日

〔一九四七年十一月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十八巻」新日本出版社  
1981（昭和 56）年 5 月 30 日初版発行  
1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 2 版第 1 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房  
1953（昭和 28）年 1 月発行

初出：「幸福について」雄鶏社  
1947（昭和 22）年 11 月発行

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2004 年 2 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

# 75.あとながき（『作家と作品』）

宮本百合子

わたしたちが文学を愛するころもちの最も純粋な情熱は、いつも、その作品をよみ、それを書いた作家に心をひかれる人々自身の、いかに生きるか、の課題に関連している。過去の文学作品、また今日かかっている作品をよみ、作家について研究するとき、私たちは決してそれをただ昔のものとし、ただ今日偶然あるものとして見るのではない。きょうに生きている自分たちは、どのような人間社会の歴史の到達点にたつて、更にそれぞれの可能を将来に実現してゆこうとしているのか、よりよい明日はそのうしろにどんな今日をもちきのうをもっているか。それを生きる現実の姿で味い、学ぶところにこそ文学のつきない面白さ、厳粛さがある。

ここに集められている作品と作家研究は、どれもそこから、明日のためにうけとるべき教訓と価値とを発見しようとして書かれた。従つて、それぞれの作品のもっている歴史的な、また階級的な限界というものも、はっきり知ろうと努力されている。

戦争中の日本政府のとりしまりは法外に苛酷非条理であつたから、ツルゲネフやマクシム・ゴーリキイについて書かれた文章は、これまで、どっさり伏字があつた。それらの伏字はこんどすっかり埋められた。その点から云えば、これらの文章も今度はじめて本来の体裁をもってあらわれたと云える。

ゴーリキイについていくとおりの文章が集められているが、これは重複していない。マクシム・ゴーリキイという一人の真に人民中の人民が、その野蛮と穢辱にみちた境遇からロシア人民の歴史の発展とともに、どんなに成長しぬいて行つたという足跡は、わたしたちに深い感動と激励を与えずにはいない。わたしたちは、克服しなければならないおびただしい不幸と偽瞞との中に生きて、それとたたかっているのだから。そして、文学の作品とそのつくりてである作家とは、明日の可能に向つて、最も重大な責任を帯びる立場に立たされている。文学は、今日もう単なる個人の業績の問題ではなくなつた。文学が歴史の鏡であるという事実はいよいよ明白である。

一九四七年十月

〔一九四七年十二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十八巻」新日本出版社  
1981（昭和 56）年 5 月 30 日初版発行  
1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 2 版第 1 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房  
1953（昭和 28）年 1 月発行

初出：「作家と作品」山根書店  
1947（昭和 22）年 12 月発行

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2004 年 2 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 76.あとながき (『宮本百合子選集』第五卷)

宮本百合子

この集には、一九三七年、三九年、四〇年の間にかいた十篇の小説と亡くなった父母について記念のための随筆二篇が収められている。

一九三七年と云えば、中国への侵略戦争を拡大しながら日本の内部のあらゆる部面に軍事的な専制が強力にしかれはじめた時期であった。二・二六事件があったのが前年の三六年のことである。

一九三八年(昭和十三年)一月から中野重治と私と他に数人の評論家が、思想傾向の上から内務省として執筆させることを望まない、という表現で、事実上の執筆禁止をうけた。その前後から雑誌や単行本に対する取締りがひどくなって、少しでも日本の軍事行動に対して疑問を示したり、戦争によって人民生活が不安にされて行くことをとりあげた文章は禁止された。一月ごとにその程度と範囲が際限なくひろがって、客観的に公平に、国際問題や経済、政治問題を取り扱った内容さえ忌諱にふれた。日本のなかに、客観的な真実、学問上の真理、生活の現実を否定して、日本民族の優秀性と、侵略的大東亜主義を宣伝する文筆だけが許される段階に入りつつあった。ジャーナリストたちは、規準のわからない発禁つづきに閉口して、内務省の係の人に執筆を希望しない作家、評論家の名をあげさせた。その結果十人足らずの氏名があげられたということであった。

「ある回想から」という私の文章のなかで割合くわしくふれているけれども、中野と私とは内務省へ行ってそういう理由のはっきりしない執筆禁止について抗議した。それから、私は、当時、保護観察所と云って、治安維持法にふれたことのある人々を、四六時中つけまわして思想的生活的に制約することを仕事にしていた役所へ行って、検事であるその所長に会って話した。当時はまだ、作家の生活権を奪うということからの抗議に対しては内務省も保護観察所も、耳を傾けなければならない立場だった。同じ事情におかれた評論家の中には、早速内務省へ個別的に自分の思想的立場を釈明した文書を出した人があり、そういう人にはすぐ特別のはからいをしたという役人の言葉であった。

中野も私も、そういうことはしまいということに相談をきめた。そして、一九三八年まる一年と翌年の初夏まで、私はかいたものの発表が出来なかった。中野重治も同じようなことであったと思う。

「その年」という小説は、こういうひどい時期の記念の作品となった。『文芸春秋』が、一九三九年の春、もうそろそろ私も作品発表が可能らしいという見込みで、「その年」の原稿を印刷にする前に内務省の内閣に出した。やがて、内閣から戻されて来た原稿をもって『文芸春秋』の編集者が目白に住んでいたわたしのところへ来た。そして、当惑して原稿をさし出し、何しろ赤鉛筆のスジのところはいけないうて云うんですが、ということだった。原稿をあけてみて、わたしはおこるより先に呆れ、やがて笑い出した。原稿には、実によ



く赤鉛筆がはいっていて、それは各頁、各行だった。赤鉛筆のとぎれているところをひろって読めば、そのところは、ただ「そうしているうちに」とか「であるはずなのに」という風な箇所だった。はじめから赤鉛筆を手にもって、べたスジをひくことにして読みはじめたものであることが一目瞭然であった。赤スジのないところには、文章さえのこっていないのだから、小説として発表が出来るわけもない。「その年」のようにおだやかな作品でさえもそういう取扱だった。即ち小説は一九三九年の九月にかいて十一月の中央公論に発表された「杉垣」が、禁止以来はじめての作品である。それまで、ちょっとした随筆を二三篇かき、その一つであった「清風おもむろに吹き来つて」という随筆がきっかけとなって、明治から現代までの文学史と婦人作家の研究にとりかかった。「その年」の原稿は、日本の言論抑圧の標本として、赤鉛筆の姿をそのまま、いつか多くの人の目にふれる機会をもつだろう。

「朝の風」という作品は、作者が心いっぱいにもっている思いを、そのまま自然に表現の出来ないために、まるで猿ぐつわのすき間から洩れる声のようになっている。口だけ動かしているが声なきとれないような作品とも云える。見える見えない周囲の圧迫は、こんな不具な作品しかうませなかった。こういう事情で作品を歪まされたのは、わたし一人のことではなかった。

こういう事情でともかく作品の発表が出来たのは、一九三九年も秋になってからであったのに、一九四一年には又もや一月から、発表禁止をうけた。太平洋戦争に突入する準備を強行していた日本絶対主義の軍事力は、極度に言論圧迫を行って、科学でも、文学でも、子供の歌まで侵略万能に統一した。情報局の陸海軍人が出版物統制にあたって、自分たちの書いたものを出版させて印税をむさぼりながらすべての平和、自由を窒息させた。文学報国会が大会を陸海軍軍人の演説によって開会し、出席する婦人作家はもんぺい姿を求められたというようなことは日本の文学史の惨憺たる一頁であった。

わたしは四一年一月から一九四五年八月十五日まで、一切の書くものを発表禁止された。その間に四一年十二月九日から翌年七月末、巣鴨拘置所で病気が悪化し意識不明になるまでとめておかれた。少し眼も見えるようになった一九四三年の春から秋にかけて、調べのつづきということで、警察や検事局へよばれた。警察では、「三月の第四日曜」という小説の題に、何か特別の意味があるだろう、という問いさえうけた。三月には四度日曜がある。三十一日の月だから。彼等はそれさえ、疑いの種になる。その頃の特高警察の仕事のやりかたというものは、常識をはずれ、知識をはずれ、正気の人間に出来ることではなかった。

「今朝の雪」は婦人雑誌のためにかいた作品で、柔軟なものであるけれども、文学報国会は理由を告げず年鑑作品集に入れることを拒んだ。作品を収録するからと云って、私に送らせたのに。

わたしの母は一九三四年六月に、歿した。わたしがその年の一月から警察にとめておかれていたときに。わたしの父は一九三六年一月、亡くなった。わたしが市ヶ谷刑務所にいたとき。直接作品にあらわれてはいないが宮本の父は一九三八年六月に亡くなった。宮本

は巢鴨拘置所で拘禁生活の六年目、わたしは執筆を禁止されていた年に。父母と、こういう状況の下に死別した人々は、その頃の日本にわたしたちばかりではなかった。拘禁生活をさせられていた人々ばかりでなく、どっさりの人は戦地におくられて、通信の自由でなかった家郷の愛するものの生死からひきはなされて、自分たちの生命の明日を知らされなかった。

きょう読みかえしてみると、日本の戦争進行の程度につれて、わたしの文章はふくみ声になって来ている。云いたいこと、表現すべき言葉がぼかさされたり、暗示にとどまったり、省略されたりしている。「鈍・根・録」の冒頭の文章では警察と留置されていた自分の関係がぼやかされていて、きょうの読者の理解には不便である。「わが父」のはじめも、父の葬儀のため市ヶ谷刑務所から仮出獄したわたしが再び刑務所に戻って、裸にされて青い着物を着たときの事情が、わかりにくくかかっている。同じこの理由から、前巻に収められている「突堤」のはじまりの文章も分りにくい。当時は、そういうことをあからさまに書くという心持そのものが抗議をあらわすものとされていて、治安維持法の対象とされたのだった。あの頃の作者と読者とはほんとに敏感で、おたがいに片言でものを云って、それでやっとなを通わせ合って暮した。そんなに日本中が牢獄的であった。

わたしはその頃の日本のすべての人民の苦痛と精神も肉体も不具にされていた日の記念として、きょうではおかしく意味の不明瞭に書かれている文章のまま、傷ついている姿のまま、作品をのこしておく。愛する日本が、また再び作家にかたことを云わせるような非条理的な強権に決して屈することのないように。言論の自由ということは、どんなに人間の社会生活にとって基本的に主張されなければならない重大な権利であるかということについて忘れないために。

一九四八年二月十四日

〔一九四八年二月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十八巻」新日本出版社

1981（昭和 56）年 5 月 30 日初版発行

1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 2 版第 1 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房

1953（昭和 28）年 1 月発行

初出：「宮本百合子選集 第五巻」安芸書房

1948（昭和 23）年 2 月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2007 年 7 月 24 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

## 77.あとながき (『明日への精神』)

宮本百合子

今日の私たちの生活にとって、明日というものは、世界の歴史のなかで考え得る最も複雑な内容で予想されるものとなって来ている。きょうからあしたへのうつりが、ただ夜から朝へのうつりかわりだと感じているひとは、もう一人もいないだろうと思われる。明日をよく迎えたい心は、今日の生活を一層切実に愛し、そこから学べるだけのものを隈なくとって、明日へつづく自分たちの二度とはない生命を花咲かせたい願いをもたせる。

私たち女のその願いの熱い脈搏が、ここに集められたもののなかに響いていて、その自然な響きが又ほかのいくつかの胸の裡に活々とした生活への脈動をめざまさしてゆくことが出来るとしたら、ほんとうに歓ばしいと思う。

昭和十五年九月

〔一九四〇年九月〕

---

底本：「宮本百合子全集 第十八巻」新日本出版社  
1981（昭和 56）年 5 月 30 日初版発行  
1986（昭和 61）年 3 月 20 日第 2 版第 1 刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房  
1953（昭和 28）年 1 月発行

初出：「明日への精神」実業之日本社  
1940（昭和 15）年 9 月発行

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2004 年 2 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

---

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。

偉人文学集

名言思想学会会長 江川剛史